國學院大學学術情報リポジトリ

九州板碑考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Harada, Shoichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002417

九州板碑考

原田昭一

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第Ⅰ章　九州における板碑研究史・・・・・・・・・・・・・・・・13

第Ⅱ章　九州における整形板碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

第Ⅲ章　九州における整形板碑の型式的検討・・・・170

第Ⅳ章　九州における自然石板碑・・・・・・・・・・・・・・219

第Ⅴ章　九州における整形板碑造立の画期・・・・・・256

第Ⅵ章　九州における整形板碑の石材・・・・・・・・・・263

第Ⅶ章　九州における整形板碑の始源・・・・・・・・・・268

第Ⅷ章　九州における整形板碑の終焉・・・・・・・・・・274

結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・279

註･参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・284

はじめに

日本列島の西端に位置する九州は、太古の昔から大陸に最も近く、我国の歴史の中では重要な位置を占めてきている。我国の中では、遣唐使をはじめとした使節の派遣、日明貿易をはじめとした貿易など、大陸との橋渡しとなる機能をもつ性格や、その結果としての歴史的な遺跡・遺物も少なくない。また、時として、元寇など、大陸と対峙し、事を構えた歴史も存在する。大陸に接する九州ならではの個性であろう。

一方、九州はあくまでも日本列島の西端に位置し、畿内や関東からみて最も僻地であることもまぎれもない事実であり、僻地ゆえの歴史的な遺跡・遺物も多い。

このような歴史的環境が、九州という地域の特異性を醸し出している。独特な形態も大陸的なものか、あるいは僻地ゆえの産物か、さらにはその両者が融合しあい新たな形を生み出したものか、情報の整理を行う必要性を求められるのが九州の特質であろう。石造物研究における九州の立ち位置は常にこのことを意識しなければならない。

本稿で採り上げる板碑は石造物の中では、必ずしも主流を占めるものではない。九州における石材の主流となる凝灰岩や安山岩などは、立体的な彫成がしやすい石材であり、その特性から宝塔・五輪塔・宝篋印塔などをはじめとした石造物の中では、板碑が少ないのも当然であろう。しかしながら、板碑は石造物の中で、もっとも研究対象にしやすい塔種である。それは、多面体の石塔が部材を組み合わせて造立するため、その多くが当初の組合せを失ってしまっている現状があるからである。それは、県・市町村指定の文化財であっても例外ではなく、複数基からなる石塔群で構成された場合が多く、当初の組合せを復元することが困難であることも、各石塔に的を絞った研究に取り組みにくい原因となっている。これに対し、板碑は基本的に一石で作られており、石造物の中では型式論的なアプローチに対しノイズを全く気にする必要がない塔種である特徴をもつ。加えて、その多くに銘文がみられ、石塔の年代や趣旨などをはじめ、多くの情報を私たちに提供してくれる特徴ももつ。それゆえ、石造物の中では研究対象として取り組みやすい。

板碑は九州の石塔では主流ではないものの、近畿以西の西日本において、質量とも最も卓越した地域である。この九州の板碑に対し、全国的な視点でその地域性に着目したのは、服部清道である。服部は全国各地の板碑について地域性を見出し、東北型・下総型・武蔵型・畿内型・阿波型・九州型に分類し、ここで、九州の類型を指摘している(服部清道 1972)。服部はこの「型」を考古学的研究法である遺物の型式論に基づいて整理し、地域性を導き出し、類型化したものではなく、板碑が流行する地域を大きく纏めたものにすぎない。し

かしながら、各型の特徴を紹介する中で、九州型に関しては、「東北型板碑に於ける如く安山岩・花崗岩・素面岩・凝灰岩・砂岩等主として火成岩質の石材を用ひ、従つて板碑と云ふに相應しからぬ分厚いものとなり、形態的基調は頭部が三角形に尖り、額は前方にずつと突き出で、額と頭との間に殆んど界線の様に二條の横線が施されて両側に廻り、前後左右の四面をよく加工し、根部は碑身よりも四面に幾分突き出て身部と明確に分かち、碑身の上方には種子或ひは佛教を刻し、下方に造立趣旨及び年月を記す整った組立である。」というように、九州の板碑の形態的特徴は的確にとらえている。ただ、関東において、下総型・武蔵型の 2 類型を見出したとしたなら、同じ視点でみると、九州においてはさらに細かい類型化が必要となる。それは、石材の違いによるところが多く、これについてもさらなる検討が必要とされる。

本稿では、九州地域の板碑について型式論に基づいた「九州型板碑」の諸特徴について再確認してみたい。九州における板碑に対する網羅的な集成は、1983 年に刊行された『板碑の総合研究２　地域編』に掲載された各地域担当者の業績があるが（渋谷忠章・佐藤誠・河野治雄・松岡　史 1983)、各氏紹介した資料を通じた板碑の解釈に対し、必ずしも一致するものとはかぎらず、それは地域の特殊性に起因する部分が大きい。

かつて、筆者は豊前・豊後の紀年銘板碑を集成した際に、「頭部を山型に造り、額部に二条線をもち、碑身部に本尊としての梵字種子あるいは像様をあらわし、その下に造立年月日・願文・偈文などの銘文を記すという形態的・内容的両面を兼ね備えた石造物」を整形板碑として集成し（原田昭一 2002b・2003a・2003b)、内容は板碑でありながら自然石を利用した自然石板碑については、視野に入れながらも集成の対象としなかったことは、自然石板碑が少ない豊前・豊後地域の特殊性に起因したものである。

本稿において、九州の板碑を論じる前に筆者の板碑に対する定義について、板碑がもつ 2 つの要素、つまり形態と内容（趣旨）の両方の要素をもつものを板碑と捉える立場であることを明確にしておきたい。

まず、研究史を紐解くと、板碑研究の初期において、板碑に対して系統的にまとめた中島利一郎は、板碑の条件として①石材が緑泥片岩であること、②扁平な石を用いること、③頂部が三角形であること、④三角形の下に二条線や二条切込みがあること、⑤表面だけ用いて裏面は使用しないこと、⑥下部を尖らし地中に差し込むこと、⑦供養塔または逆修塔であって、単なる記念碑ではないことの 7 点に整理している（中島利一郎 1930)。ただ、

中島が編年順にならべた板碑が関東地方に信越地方を加えたものであったように、板碑の第1の条件として指摘した石材が緑泥片岩であるとしたことがすべてを物語っているように思える。

これに続き、板碑研究の基本文献とされる『板碑概説』を著した服部清道は、板碑の定義について緑泥片岩の石材を利用した扁平な板碑は武蔵型・阿波型のみであるが、自然石を利用したものなども視野に入れ、武蔵型・阿波型など扁平な板碑に限らず、同一の目的をもって、類似的な内容をもつものすべて板碑の範疇で捉えるとしている（服部清道 1972）。また、石田茂作は、武蔵型・阿波型など緑泥片岩の石材を利用した扁平な板碑を「典型板碑」とし、石質の違いをはじめ、「典型的な関東・阿波板碑を真似て作られた異質のもの」を「類型板碑」、さらに自然石で代用し、「典型板碑」と同じ内容をもつものを「自然石板碑」として分類した（石田茂作 1969）。ここで、石田が「真似て作られた」と表現したように、嘉禄3年（1227）銘をもつ熊谷市須賀広阿弥陀三尊図像板碑をはじめとして、全国的に板碑が先行する武蔵型板碑が板碑の祖型であり、「類型板碑」は武蔵型板碑の形態系譜上あり、全国的に拡散していくとする意識を感ずる。このように、研究史の中では初期においては、圧倒的に武蔵型板碑偏重の時代から、徐々にその他の地域の板碑にも目を向けられはじめたものの、やはりあくまでも武蔵型板碑が板碑研究の中心に置かれていたことは、否めない事実である。

川勝政太郎は、石田の3分類論に対し、石田の言う「類型板碑」については、板碑の地域性について、武蔵型板碑を「秩父青石」を石材としたゆえの薄さであり、近畿・東北・九州の板碑が石材ゆえの厚さであるため、問題にする必要はないとしており（川勝政太郎 1982）、ここにきて関東地方以外の板碑も同列に扱おうとする見解もみえはじめている。

ただ、現在の研究動向をみても、名称論・起源論・消滅論などをはじめ、ありとあらゆる分野の研究が石田分類の「典型板碑」を主体に展開されていることは否めない事実である。学問の府たる大学が集中する東京の膝元である関東地方をフィールドとする先学諸氏が、関東地方での板碑研究を深化させてきたことは、自然の理であり、それは同時に、九州をはじめとした他地域の研究者たちが積極的に各地の板碑の資料化に取り組むことを前提とし、そのうえで積極的に板碑に対する議論に参加してこなかったからであり、九州をフィールドとする筆者をはじめとした研究者の反省すべき点であろう。

しかし、坂詰秀一は板碑研究の課題として「板碑は、かなり地域色の濃い遺物である。それは使用している原石の産出地の問題が介在していると見られるが、その背景にかかる

塔婆を出現せしめた必然性が考えられ、空間概念と信仰形態が密接に関連している現象を看過することはできない。すなわち、一つの類型の出現・展開・衰微を地域ごとに明確にする基礎的な作業が要求される」（坂詰秀一 1982）とし、「中世に供養塔あるいは逆修塔として造立された石塔婆の一類型で一観面を原則とする」と板碑を理解したように、関東における緑泥片岩製板碑にこだわらず、全国一律に板碑を捉えようとする研究姿勢を示している（坂詰秀一 1982）。

これらは、形態論からみた議論であり、その形態には板碑以前の前史がある。それはそのまま板碑の起源論につながり、数多くの先学による諸説が提示されている。千々和實は起源論について、①長足五輪塔より変化したとする服部清道の説（服部清道 1972）②笠塔婆より変化したとする三輪善之助（三輪善之助 1928）・稲村坦元（稲村坦元 1959）の説、③修験者の作る碑伝より転化したとする跡部直治（跡部直治 1933）・石田茂作（石田茂作 1969）の説、④平城京跡の人型を祖型とする五来重（五来重 1964）の説、⑤宝珠の変化したものが板碑の定型化を促したとする藤原良志の説（藤原良志 1970）などに整理し、千々和實みずから、千本塔婆・笹塔婆から二条線を伴う板碑に発展したとする説を披瀝した（千々和實 1987）。

また、千々和実は、服部清五郎が九州型板碑の設定の中心的な場となった豊後の板碑調査を手掛け、豊後における板碑の発生について、正応 4 年（1291）の紀年銘をもつ大分県国東市護聖寺板碑が、唯一、額部から上部の山型までを一石で作り、別材として碑身上に載せている特異性に着目し、関東の板碑がこの頃に国東半島に伝播し、それまで国東半島に存在していた仁治 2 年（1241）以降の紀年銘をもつ豊後高田市富貴寺の笠塔婆群をはじめとした笠塔婆の様式に大きな影響を与え、笠塔婆から板碑への転化の様子がうかがえるものとしている（千々和實 1987）。九州の板碑を起源論の中でとらえたきわめて数の少ない例と言ってよいもので、板碑において九州が関東より後出であることに起因しており、関東から直接かどうかは別にしても、あくまでも板碑の起源を関東に置き、それから地方に伝播していったとするのが一般的な認識であり、九州の板碑もその範疇でとらえられている。

また、川勝政太郎は岡山県倉敷市安養寺経塚出土土製角塔婆に注目する。角塔婆は第 1 経塚から出土しているが、この経塚から出土した土製版に応徳 3 年（1086）の紀年銘があり、角塔婆もこの頃の作と考えられている。この角塔婆は頭部が山型であり、2 段の切込

みがあることから、板碑との類似性を見出し、板碑の源流は角塔婆であるとする説を提唱している（川勝政太郎 1967・1982）。

このように、先学諸氏が祖型を求めたものに、長足五輪塔・笠塔婆・碑伝・人型・宝珠・角塔婆など板碑に先行する形態的に類似する遺物が挙げられる。しかし、近年、これらの説を一気に覆す画期的な発見があった。石川県珠洲市野々江本江寺遺跡から出土した木製板碑の発見である。先学諸氏が板碑の起源を探る上での類似資料と同時期か、あるいはそれらの時期をさかのぼる 11 世紀半ばに帰属する放射性炭素同位体年代測定の結果が得られているが、石で作られた板碑とまったく同様のものが木で作られており、一気に解決した感がある。この木製板碑は幅 30 ㎝、残存高約 2ｍを測り、初期の板碑の大きさにほぼ匹敵する大きさをもち（伊藤雅文 2012）、材質が石と木との違いであるほかは、きわめて似ている。

なお、この遺跡では、同時期の木製笠塔婆も出土しており、他の類例をみてみると、11 世紀～12 世紀中頃の年代が与えられている六角木幢が長野県千曲市社宮司遺跡から出土しており（国土交通省関東地方整備局・長野県埋蔵文化財センター2006）、かつて筆者が、古式の石塔の存在しない地域には木塔が存在していた可能性を指摘したきっかけとなった（原田昭一 2009a）。このことは、山口博之もいち早く注目し、全国的に石製塔婆と関連する他部材の塔婆の集成を行い、木製の塔婆群についてもその対象とし、石製板碑に先行する木製板碑の存在を確認している（山口博之 2014）。

このように、先学諸氏が祖型を求めた長足五輪塔・笠塔婆・碑伝・人型・宝珠・角塔婆など石製の板碑出現する前に形態的に類似する遺物が存在するものの、それらの類似資料と同時期か、あるいはそれらをさかのぼる時期にもうすでに木製の板碑が出現しているのである。そのため、石製板碑の起源は木製板碑に求められようが、九州はこの変遷を考察するうえで、参考になる資料が多い。

例えば、九州を代表する石材である凝灰岩を利用した大分県臼杵市臼杵石仏や大分市元町石仏では、背面まで細かな彫成が施されており、その特徴は平安期の木彫仏の細かな様式を受け継ぎ、石仏の彫成に使用した工具も木彫と同じものを使用したと考えられている（渡辺文雄 1996）ように、凝灰岩の軟質さゆえ、木製品との関連性を重視しなければならない地域であることを痛感する。この現象は示唆的であり、九州において板碑の形態をもつ木製品の確認はできないものの、木製板碑が石製板碑に先行し、存在していた可能性を

考えたい。それは、九州とは似た石材環境をもつ東北地方においても同様であるものと想定する。

とは言え、石塔において注意しなければいけないのは、やはり他部材の塔婆の影響である。本稿中で触れるが、層塔・宝塔・宝篋印塔など鎌倉期に遡る九州の石造物が石を材料としたものに限らず、一部には、木製・金属製などの工芸品をモデルにしたものを嚆矢とし、それが石塔化して型式変化を遂げていく現象もみられる。それは、必ずしも塔形そのものの嚆矢となるものではなく､それらが文永･弘安期に多くみられる傾向があるように、ある特定工人が石塔のモデルとして、ありとあらゆる材質のものを視野に入れていることにほかならない。本稿で採り上げるが、九州の板碑にも多様な石材が利用されているが、肥前の緑泥片岩製板碑が、他の地域とは異なる独特な形態をもつように、九州における板碑のはじまりの中で、そのモデルは必ずしも一律でなく、異質なものも存在するが、凝灰岩・安山岩の板碑は一様に共通の要素をもち、地域性を加味しながらも、同じ祖型を求めても差し支えないと考える。それは、九州において石製板碑に先行する板碑形木製品が確認できないものの、全国的な動向をみても、かつて九州にも必ず存在していたものと想定したい。それゆえ、必ずしも九州の板碑が、武蔵型板碑を祖型としたとは限らないと考える。

この視点で、研究史を振り返ると、最も注目されるのは、跡部直治（跡部直治 1933）・石田茂作（石田茂作 1969）が提唱した修験者の作る碑伝より転化したとする説である。現存する碑伝の最も古いものが、滋賀県葛川明王院に残る元久元年（1204）銘をもつものであり、嘉禄 3 年（1227）銘をもつ熊谷市須賀広阿弥陀三尊図像板碑を嚆矢とする武蔵型板碑に先行する。そもそも碑伝は修験道において、修験者が修法供養を後世に伝えるために造立するもので、石製の板碑の型式とほぼ同じであるとともに供養塔婆であり、碑伝の上部に仏像や仏像名を、また、その下に年月日を記しており、この点も板碑に似ている。そのため、碑伝はその当時、存在していた木製板碑の一用途にすぎないものと思える。

木製の板碑はこの碑伝も含めて、近年、微増する発掘調査出土品をみても、11 世紀に出現する木製板碑が、石製板碑の先行形態であることが考えられ、起源論を展開するとしたら、11 世紀に出現する木製板碑の起源を探る必要があろう。

板碑の起源について、磯野治司は中国唐時代の幡にその起源を求め、幡のモチーフが 10 世紀の半ばを下限とすることから、これまでに日本に請来したとする説を提唱した（磯野

治司 2012)。武蔵型板碑の初期の類例に幡の鋲止めの鋲頭の表現と考えられる珠文帯が確認できるものの分析から導かれた説であるが、九州には、さらに興味深い類例がみられる。

藤沢典彦は鹿児島県湧水町稲葉崎石塔群中に存在するひときわ大きい「黄金塔」と名付けられた板碑の調査を手掛け、当該資料にみられる珠文帯を幡の鋲止めの鋲頭の表現と捉え、板碑の源流を考えるときに、「黄金塔」の珠文帯を考慮し、「幡も源流の一つとして考える必要があるだろう」としている（藤澤典彦 2010)。この「黄金塔」の存在はきわめて重要であり、九州ならではの意義をもつものである。「黄金塔」には、紀年銘が残り、暦応 2 年（1339）のものであることがわかるが、この時期にはすでに九州において、板碑が完全に根付き、隆盛期ともいえる時期のものである。そのなかでこの板碑は九州全域をみても傑出した存在であるだけでなく、前にも後にも全くみることがない意匠を採り入れている特徴をもつ。冒頭で述べたが、九州は大陸に接する地理的な条件のため、大陸的な要素をもつ文物が突如として現れる要素をもつ。「黄金塔」が、前にも後にも全く存在しない傑出した存在であるなら、当然、大陸との影響の中で生まれたことをひとつの可能性として考えておく必要があるし、磯野が展開した起源論においても、充分に示唆的な資料であると思える。磯野が起源論について、さらに遡る文物を視野に入れたことは重要であり、実物資料をもとにその起源を論じられないのはもどかしい感がするが、充分に傾聴すべき説であり、解決の糸口は大陸にあると思える。

と言うのも、前述したように山口が集成した遺跡出土の板碑に類する木製品は、古くても 11 世紀、その多くが 12 世紀であることは、古代から中世にかけての遺跡の消長に左右されたものである。全国的に 9 世紀後半から 10 世紀にかけての遺跡の発掘調査例は激減する。それとともに遺跡から出土する遺物も極限にまで少なく、同時期の美術資料や歴史史料も少ない。今後、この状況はさほど変わらないものと推測できるが、9 世紀前半以前に板碑の祖型となるものが存在すれば問題はないが、そうでないなら大陸の文物に解決の糸口を求めなければならない。

起源論について、いささか冗長となった感があるが、起源論は石製板碑を定義するうえできわめて重要である。話を元に戻すが、木製板碑の段階から、板碑の形態は定型化しており、頭部を山型に造り、額部に二条線をもち、しばしば額部や基部の両者かあるいは額部のみを突出させる特徴をもつことが明らかとなった。そして石製板碑は忠実にこの形態を受け継いでいるのである。木製にしろ石製にしろ、この特徴を表現するに、材質による制約は必ず受け、その制約を克服すべき形態的特徴があらわれる。石製板碑において、武

蔵型や阿波型の板碑が緑泥片岩という薄く剥ぎ取る石質の特徴から板碑を薄く仕上げることも、これを一つの地域性として捉えたい。

つまり、石田茂作が武蔵型・阿波型など緑泥片岩の石材を利用した扁平な板碑を「典型板碑」と定義したように、過去の学史の中でたえず武蔵型板碑が中心に置かれてきたが、川勝が近畿・東北・九州の板碑が石田の言う「類型板碑」であることに対し、石材ゆえの厚さであり、問題はないとし、加えて、坂詰が板碑の定義について武蔵型板碑を全く意識していないように、武蔵や阿波の板碑を石材に起因する一地方色ととらえ、全国各地の板碑を全く横並びに捉える立場をとる。それは、九州の中でも、さらに細かい地域性が存在することにつながり、それはやはり石材の違いによるものが大きい。

以上、整形された板碑の特徴をみてきた。それとともに板碑のもつもう一つの要素である内容（趣旨）についてみてみたい。板碑は碑身部に本尊としての梵字種子あるいは像様をあらわし、その下に造立年月日・願文・偈文などの銘文を記すという内容をもつ石造物である。本尊については、時として名号や題目をはじめとしたその他の対象物を表すことがある。石造物にこのような内容が観察できるようになるのは、平安後期にはじまる自然石板碑からである。

本稿中で触れるが、九州においては整形板碑の発生は鎌倉中期であるものの、自然石板碑は平安後期にはじまり、数は少ないものの、整形板碑出現期の鎌倉中期までにおいても連綿と製作され続けている。石製板碑と木製板碑との関連は前述したが、九州においても石製板碑の形態をもつ木製板碑も自然石板碑と同様に平安後期に出現している可能性があり、そうであるなら、平安後期から、木製の整形板碑と石製の自然石板碑から板碑が構成されていたことになる。整形板碑に関しては、石製板碑成立後も木製板碑が消えてしまったわけではないであろうが、次第に石製が主流となり、さらには完全に石製板碑に移行してしまったものであろう。その証拠に、石製の整形板碑に移行して以降、その趨勢は自然石板碑の趨勢と一致し、銘文にみられる趣旨も同じであり、また、九州においては、整形板碑と自然石板碑の分布が補完関係にあることから、整形板碑と同列のものとして自然石板碑を認識すべきであろう。

ここで整形板碑と自然石板碑について触れてきた。ここで数多くの先学が指摘していることであるが、板碑のもつ大きな要素として一観面であることにこだわりたい。層塔・五

輪塔・宝塔・宝篋印塔など、ほとんどといってよいほどの石塔が、四観面をはじめとした多観面であることに対し、板碑は一観面である。川原石を利用した自然石板碑は丸い場合もあるが、これについても、本尊や造立年月日・願文・偈文などの銘文を記す場合に、石面の 1 か所にみられる場合は板碑とする。

その場合に注意を要するのは、多角面体の自然石を利用したものである。安山岩であろうと凝灰岩であろうと、高温で溶結したものは、柱状節理をもち、不規則ながら多角面体を呈する特徴があり、九州においては、延久 2 年（1070）銘をもつ福岡県直方市植木観音堂自然石塔婆や長寛元年（1163）銘をもつ大分県宇佐市稲積山自然石塔婆などにその存在が確認できる。これらはまさに柱状節理をもつ安山岩の自然石であるが、特に、大分県宇佐市稲積山自然石塔婆については、千々和實は経幢の可能性を指摘しており（千々和實 1987)、筆者もその説に賛同したい。稲積山自然石塔婆については、大分の金石文を集成した日名子太郎も多くを語らないが、3 基中、1 基を「六面幢」、2 基を「四面幢」としている（日名子太郎 1940）のも、千々和實と同様な考えに基づくものと思える。千々和實は同時期に位置づけられる永保元年（1081）銘をもつ熊本県御船町玉虫八面石幢とともに、経塚に関する性格をもち、経典の永久埋蔵を祈念するものであることを指摘し、それとともに、中国において唐代に盛んに作られ、日本の平安期に相当する紀年銘をもつ経幢の存在も指摘している（千々和實 1987)。

経幢については、日野一郎が歴史史料にみられる「幢」を整理し、『法隆寺縁起資材帳』をはじめ、奈良時代の史料に散見でき。なかでも、『性霊集』巻九の「奉造東寺塔材木曳運勧進表」には幢を木材で製作していることがうかがえる記載があることを指摘している（日野一郎 1983)。

一方、千々和實は経幢について、頭部に 2 条の切込みをもつ松香石の六角形石造物である奈良市頭塔出土の六角幢形石造物を経幢の一種と捉え、石製品においても奈良時代にその存在の可能性を指摘している（千々和實 1987)。

9 世紀後半から 10 世紀にかけての石造物空白期が存在することは、前述したが、それ以前に遡る石塔の祖型が層塔をはじめきわめて乏しいことを考えれば、経幢が奈良期に確認できることは興味深い。

この経幢の流れをくむ自然石塔婆が平安後期に存在し、これを自然石板碑と区別する必要がある。自然石板碑だけてなく、整形板碑においても法華経供養のものは確認できるが、

柱状節理であろうと多角面体を意識した自然石塔婆は自然石板碑と区別する立場をとりたい。

以上、整理すると、一観面の石に本尊としての梵字種子あるいは図像をあらわし、その下に造立年月日・願文・偈文などの銘文を記し、本尊は、時として名号・題目をはじめとしたその他の対象物を表すことがあり、その形態については、頭部を山型に造り、額部に二条線をもち、しばしば額部や基部の両者か、あるいは額部のみを突出させる特徴をもつ整形板碑と、自然石を利用した自然石板碑の 2 形態が存在するものを板碑の定義としたい。しかし、時代の変遷とともに、内容・形態とも変化を遂げ、本尊をもたないものや、形態についても、本来、整形板碑の特徴であった頭部を山型に造り、額部に二条線をもち、額部や基部を突出させる形態の退化形態だけでなく、様々な形態が付加され、混沌としてくる状態が生ずる。

九州の板碑は、平安時代後期に出現し、銘文にみてとれる内容や形態において時代に伴う変化を遂げ、最終的に近世の寺壇制成立期とされる寛文期（1661～1673）において、終焉を迎える。その背景には、政治・経済史からみた社会の変化やその影響を受けた信仰の変化が存在するが、それがそのまま板碑の諸要素に反映されている。

筆者は、これまで大分県である豊前・豊後の整形板碑について、考古学的な視点から資料化と分析に取り組んできたが、それを九州全域に広げ、管見に触れる限り、板碑の出現から終焉まで紀年銘をもつ整形板碑の実測図を作成するもとに、銘文の読み取りや詳細な観察を行ったうえ、各属性に対し型式的な検討を加え、各時期の特徴をみたうえで流行と画期について考察したい。服部清道が「九州型」とした板碑の詳細について整理し、特に考古学的な視点から、整形板碑について諸属性の型式変化を整理するとともに、そのような型式変化と本尊や銘文の願意をみた板碑の内容の変化について、対応関係があるかどうかについても論及するものである。さらには、板碑のもう一つの形態である自然石板碑についても、自然石板碑がひじょうに卓越する地域も多く、整形板碑だけでなく自然石板碑も含めて整理し、分布数・造立数等にふれ、自然石板碑と整形板碑との補完関係を考察し、九州における整形板碑を中心にした板碑総体の実態について論究するものである。

第Ⅰ章　九州における板碑研究史

石塔に関して、九州には質量とも全国を代表する資料が存在する。なかでも、国東塔に代表される大分県国東半島地域や、臼杵石仏に代表される大分県臼杵・大野川流域、城泉寺層塔群をはじめとした熊本県球磨川上流地域、「黄金塔」と呼ばれる南九州最大の石塔をもつ宮崎県えびの市・湧水町など川内川上流域など、局地的に卓越した石造文化財地域がみられるが、これらの地域以外にも他地域と比較して決して劣ることのない石造物の数々が認められる。その背景には、中世、各地域に独特な仏教世界が展開していたことがある。

板碑に関して、最も資料数が多いとされる豊後に例をとれば、総数 2 千基をこえる板碑が存在すると指摘されているが(渋谷忠章 1983)、この総数は全国的にみて埼玉・東京・宮城・群馬につぐ数値であり、その隆盛振りがうかがえよう。板碑については、かねてから、石材を主因とした型式差が地域性として認識されており、服部清道は、武蔵型・下総型・東北型・畿内型・阿波型・九州型に分類し(服部清道 1972)、各類型に共通する目的により造立された石造物を総じて板碑の範疇で捉えた。

しかし、服部分類の武蔵型・下総型・阿波型にみられる緑泥片岩を原材とした「青石板碑」を板碑研究の中心に位置付ける研究が学会の主流を占め、石田茂作は「青石板碑」を「典型板碑」とし、その他の板碑を「典型板碑」の影響下にある「類型板碑」として把握した(石田茂作 1969)。この両者は整形板碑であり、石田は自然石をそのまま板碑として利用した「自然石板碑」をこれに加えて、三分類案を提唱している。今回、検討対象とした九州の板碑は、服部分類の「九州型」に属するものであるが、その様相は多様である。

九州における板碑研究の嚆矢として、最も目を見張るのは鹿児島県における業績である。近世、薩摩藩では文政年間（1818～1830）に藩内の地誌調査が実施され、各地から藩庁に提出された「各郷とりしらべ帳」・「名勝誌」・「旧跡糺帳」などには、しばしば「古石塔」として板碑が紹介されており、のちに天保 14 年（1843)、薩摩藩が編纂した薩摩・大隅、及び日向の一部を含む領内の地誌・名所を記した『三国名勝図絵』の中にこれらが掲載されていることが河野治雄により紹介されている（河野治雄 1983)。

このような一連の地誌類の中でも「栗野村旧跡糺帳」にみられる板碑の関する記載は特に重要である。これには現在に残されている鹿児島県根占町岩林寺跡の板碑群が図示されているだけでなく、図中に梵字種子・銘文などをはじめ、部位の寸法も記されており、近年の略測調査に通じる内容をもつ。これらの地誌の中にみられる板碑には、現在、失われ

ているものや場所を変えているものも存在し、鹿児島県における板碑研究の基礎資料の一つになっている。

また、松永守道により、鹿児島県三島村の長浜家文書の中には、文政 10 年（1827）、長浜求馬により古石塔の図が残されていることが指摘されている（松永守道 1972）。

このように、現在の資料紹介に通じる内容の調査記録が近世段階ですでに少なからず散見できることから、薩摩藩の先取性を評価すべきであろう。

また、最も数多くの板碑が存在し、九州における板碑研究の先進地とされる豊後においても、江戸末～明治期に後藤碩田が『碩田叢史』に「豊後国中古石碑之覚」として豊後南部の金石文を、また、肥後でも天明４年（1784)に 寺本直廉が『古今肥後見聞雑記』において板碑の銘文を紹介している。

これに続く学史としては、やや時代を経て、河野清実による大正期から昭和初期にかけての大分県国東半島における精力的な調査報告があげられよう(河野清実 1913・1914・1932)。河野の業績は前述した服部清道の九州型類型の型式設定に大きく寄与し、その典拠となった報告として評価でき、瀬之口伝九郎が大隅地方においても国東地方と同系統のものが存在することを指摘したように(瀬之口伝九郎 1917)、九州地方においても先駆的な業績と位置付けられる。

同時期には、池上年が「福岡附近に於ける板碑と五輪塔との関係」と題し、板碑を論じる中で、その起源を五輪塔に求める論考を発表している（池上年 1917)。大正期に至り、板碑に対する論考が集中することから、この時期が九州における板碑研究の近代的夜明けと言って差し支えないであろう。

瀬之口伝九郎は日向においても「日向ノ金石文」と題して、宮崎県における板碑研究の嚆矢ともいえる業績を発表している（瀬之口伝九郎 1942)。瀬之口はこの論考の中で服部清道の『板碑概説』を強く意識し、服部が提唱した「九州型」に照らし合わせて日向の板碑の特徴の再確認を行っている。その中で、瀬之口は「本門宗関係ノモノハ中央ニ髭題目其ノ左右ニ法華経ノ偈頌ヲ書イタモノガ多クアリマス」と題目板碑の存在に特に触れている。題目板碑は日向をもっとも特徴づけるものであり、九州においては、日向の個性を発揮するものである。日向は日蓮宗世界と言っていいほど、題目板碑だけでなく、その他の石塔群にも題目等が刻まれている。

これは久保常晴に受け継がれ、「宮崎県の題目板碑」と題し、瀬之口の業績に加えた銘文調査を行い、その成果を検討し、分布域が日向市をはじめ宮崎市や日南市、およびそれら

の河川下流域に存在することから、中世の海上輸送と板碑分布の関連性に着目し、また、その分布が南関東に次ぎ濃密なものであり、分布の中心が宮崎県日向市定善寺にあることを指摘している（久保常晴 1977)。題目板碑に関しては、久保が指摘する定善寺の板碑群について、緒方博文が基礎調査を行い、本稿においても重要なテーマとした型式論について踏み込んだ検討を行っている（緒方博文 1999)。

さて、昭和期に入り、市町村史や行政が手掛ける調査報告書、あるいは研究誌などにおいて、板碑に対し調査や研究が数多く取り組まれるようになった。

最も資料数が多い大分県においては､明確な各論に踏み込んだ論考はほとんど見られず、市町村史をはじめとして、石造物全般の紹介の中で板碑も取り扱われる報告がほとんどである。中でも、金石文を網羅して集積した日名子太郎の業績(日名子太郎 1928～1936)、卓越した石造文化財地域である国東半島一帯の石造物を集成した酒井富蔵の業績(酒井富蔵 1972)、大分県下の石造物に対し精力的な悉皆調査を行った望月友善の業績(望月友善 1975)､石造文化財保存の視点から基礎調査を行った大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館の活動(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1996)などが注目されるが、このような成果が現れるのも、豊前・豊後における石造物の質の高さを表していることにほかならない。

各論に踏み込んだ論考は少ないものの、興味深い業績もみられる。千々和實は豊後における板碑の発生について、正応 4 年（1291）の紀年銘をもつ大分県国東市護聖寺板碑が、唯一、額部から上部の山型までを一石で作り、別材として碑身上に載せている特異性に着目し、関東の板碑がこの頃に国東半島に伝播し、それまで国東半島に存在していた仁治 2 年（1241）以降の紀年銘をもつ豊後高田市富貴寺の笠塔婆群をはじめとした笠塔婆の様式に大きな影響を与え、笠塔婆から板碑への転化の様子がうかがえるものとしている（千々和實 1987)。九州の板碑に対して、板碑の発生論に踏み込んだ数少ない論考として注目に値する。

熊本県は九州でも最も多くの紀年銘板碑が確認できる地域である。その数は、自然石板碑の多さが卓越しており、昭和 42 年（1967)、田辺哲夫が熊本県植木町西安寺五輪塔群とともに戦国期から 18 世紀中葉までの自然石板碑についての調査報告を行っている(田辺哲夫 1967)。これに続き、昭和 43 年（1968)、多田隈豊秋も熊本県北部の自然石板碑について、銘文の紹介を行っている（多田隈豊秋 1968)。昭和 44 年（1969）には熊本市において『熊本市文化財調査報告』の刊行が手掛けられ、昭和 55 年（1980）まで、地域を分割して

紀年銘がみられる自然石塔婆の銘文および写真が掲載されている（熊本市教育委員会 1969～1980）。このように熊本県では昭和 40 年代以降、板碑に対する調査が取り組まれるようになったが、あくまでも銘文の紹介を中心としたものにすぎなかった。以後、前川清一をはじめとした地元研究者の地道な資料調査の成果が市町村史に掲載されているが（前川清一 1988～2009）、これらも基礎資料の紹介を中心にしたものであり、踏み込んだ論の展開を試みるものではなかった。しかし、中には、板碑の型式分類を行い、型式と石材との関係を考察したものもみられる（前川清一 1991・2002）。

宮崎県では先に触れた題目板碑に関する業績のほかに興味深い調査例がみられる。宮崎市山内石塔群では考古学的手法に則った実測図の作成をもとにした調査が行われ、型式分類をもとに変遷観が提示されている（宮崎県教育委員会 1984）。また、宮崎市迫内遺跡では折損した基部が 7 基並んだ状態で確認された調査成果がえられている。石塔は原位置から移されているものがしばしば存在するが、ここでは当初、七本塔婆の可能性が指摘され、板碑のまとまりの意義について示唆的な成果が得られている（宮崎県埋蔵文化財センター 2002）。

また、建武元年（1334）銘をもつ大分県豊後高田市其ノ田板碑の発掘調査では、中央に存在する方形集石遺構に接する火葬墓が存在する場に戦国期までの中世石塔群とともに、板碑が存在し、現在まで残されている六郷山の峰入りにおいても、岩飛びの儀式が行われる重要な空間であることなどが確認された（大分県教育委員会 2000）。板碑そのものだけでなく、それを取り巻く数多くの情報を導き出す考古学的手法に基づく発掘調査ならではの成果であろう。

また、九州における板碑の網羅的な集成は、多田隈豊秋の『九州の石塔』を忘れられずにはいかない（多田隈豊秋 1975・1978）。多田隈はその著書の中でそれぞれの塔種ごとに各県代表的な資料をとりあげ、各資料に対し詳細に観察し、それぞれの資料に対する解釈を紹介している。また、板碑の分類に言及し、「碑伝」と「板碑」とを明確に区別していることは興味深い。多田隈は石田茂作の『日本仏塔』にみられる分類を踏襲し、碑伝が本来、山伏の入峰修行の密法を後世に伝えるためのものであるとするが、初期の板碑からそのことが銘文から読み取れる資料はほとんどみられないと思われる。ただ、多田隈が指摘するように、碑伝は、本来、木製であったことについては、近年、平安期の木製板碑が発見されつつあり、調査研究の動向に注意を払う必要があるものと思える。

多田隈の業績に加え、1983 年に刊行された『板碑の総合研究２　地域編』に掲載された各地域担当者の業績がある（渋谷忠章・佐藤　誠・河野治雄・松岡　史 1983)。各氏が紹介した資料を通じた板碑の解釈に対し、必ずしも一致するものとはかぎらないことがわかるが、それは地域の特殊性に起因する部分が大きい。なかでも、福岡県・佐賀県・長崎県を担当した松岡史や、熊本県を担当した佐藤誠は自然石板碑を集成の対象としており、特に、松岡史は、佐賀県に流行する笠塔婆や一石笠塔婆と考える資料についても、「有蓋類型板碑」や「一石有蓋類型板碑」として、板碑の範疇としてとらえている。かつて、筆者は豊後の紀年銘板碑を集成した際に、整形板碑を集成し（原田昭一 2002b・2003a・2003b)、内容は板碑でありながら自然石を利用した自然石板碑については、視野に入れながらも集成の対象としなかったことも、自然石板碑が少ない豊前・豊後地域の特殊性に起因するものである。

このほかにも九州各地の集成をみると、福岡市教育委員会における福岡市域の悉皆調査（福岡市教育委員会 1992）や、佐賀県内における松岡史による集成（松岡史 1984)、それぞれ大分県下の板碑を集成考察した渋谷忠章(渋谷忠章 1999)、鹿児島県教育委員会が初めて取り組んだ板碑の分布調査をはじめとした個々の資料調査（鹿児島県教育委員会 1958・1964・1966・1971)、鹿児島県薩南地方の板碑集成を試みた重永宰（重永宰 1979）などの業績が見られるが、考古学的に各論に踏み込んだ研究は、豊前地域の山岳修験にみられる板碑に着目した時枝務の論考(時枝務 1983)や、他の石造物との関連で捉えながらも、板碑の型式論的考察に取り組んだ岩男順の論考(岩男順 1982)が見られるのみで、学問レベルの議論がきわめて乏しい。

集成に関しても、板碑に対する定義を明確にしていないためか、集成作業を試みる各地の市町村史には、便宜的に西暦 1600 年を下限として意識したものや、慶長期を下限として意識したもの、また、近世の墓碑の中でも板碑型墓碑まで集成の対象としたものなどさまざまである。板碑の下限については筆者が過去に論じたことがあり（原田昭一 2002a・2009b)、始まりとともに論究すべき重要な論点であろう。

近年、筆者は豊前・豊後における整形板碑について、考古学的な視点から紀年銘資料の集成を行い、型式的検討を加えて変遷観を示し、様々な視点から考察を加えた（原田昭一 2004)。加えて、九州の個性ともいえる角塔婆（四面板碑）にみられるような板碑と関連深い多角面体の板碑形について考察を加えた（原田昭一 2009a)。また、板碑に供養安置した仏菩薩を表現する梵字種子が群尊を表すものの一つではないかと考え、板碑が後世に移転

されているものが数多く存在することから、梵字種子の配置を変えることのない磨崖梵字を集成し考察した（原田昭一 2015b）。

以上、九州における板碑の研究史を整理した。近世後半に板碑の存在が歴史史料に現れるものの、近代的な板碑に対する学問的な取り組みは大正期を待たざるを得なかった。しかし、その研究の取り組みも金石文としての銘文の紹介が主体を占め、主に昭和 40 年代にはじまる悉皆調査においても各論について議論に至るものはほとんどみられないのが実情である。関東地方において各論において活発に議論が行われていることに対し、九州では各地域に限定した集成作業に偏りすぎている感がある。加えて、関東地方の研究成果に依拠しすぎているきらいがあり、九州の個性に基づいた板碑研究の独自な展開が行われていない印象を受ける。

第Ⅱ章　九州における整形板碑

筑前・筑後・肥前

筑前・筑後・肥前の板碑は、元永 2 年（1119）銘をもつ宗像市玄海町鎮国寺自然石板碑を嚆矢とする。以後、この地域においては自然石板碑が流行する。九州北西域を覆う広域な範囲でありながら、当地にはきわめて整形板碑が乏しく、鎌倉～南北朝期の紀年銘板碑は数えるほどしかなく、その様相も多様である。室町期以降には、紀年銘がみられない資料を含めると、激増することがうかがえるが、紀年銘資料に限れば、やはり数が少ない。

これまで、福岡市教育委員会における福岡市域における悉皆調査（福岡市教育委員会 1992）や、佐賀県内における松岡史による集成（松岡史 1984）など、数多くの板碑が網羅された業績もみられるが、市町村史をはじめとした郷土資料においては、中世石造物が、それぞれの地域において、さして注目すべき対象とされていないせいか、全体的に取組みが乏しい印象を受ける。

以下では、管見にふれ、また、実測調査が可能であった資料について紹介する（註 1）。

1.建正寺板碑(表 1-1　図 2-1　図 3-1)

佐谷観音堂の建正寺跡境内に一段高い方形石積みが設けられ、その上に置かれている。高さ 130 ㎝、横幅 120 ㎝、上端の厚さ 15 ㎝、下端の厚さ 30 ㎝を測る正方形の板状を呈し、整形は粗いが、調整は背面も含めて丁寧である。正面には陰刻線により 3 段の区画が設けられ、最上段の区画には円相内にキリーク・バク・バンの三尊の梵字種字が薬研彫りされている。中段には中央に妙法蓮華経とその両側に偈、両端には聖徳太子・伝教大師・弘法大師・聖空上人の名前がそれぞれ刻まれている。また、最下段には建塔の経緯が刻まれており、板碑としては形態・刻銘の内容とも特異な様相をもつ。基部は前方に突出させ、基部正面には蓮華反花状の陰刻がみられる。この板碑の両側には花崗岩製の板碑が建てられており、これらについても鎌倉後葉～南北朝初頭におさまるものと考えられる。

2.米一丸地蔵堂 15 号板碑(表 1-2　図 2-2　図 3-2)

福岡市東区箱崎地区、県道 550 線沿いの箱崎 6 丁目交差点にある米一丸地蔵堂の裏に、板碑・自然石板碑をはじめとした石塔部材が並べられているが、これらは周辺の松原から集められたと伝えられている。小型の板碑であり、正面幅は上下において同じであるが、側面幅は上にいくにしたがいやや細く仕上げられている。調整は背面を除き各面、丁寧に仕上げられている。背面には細かい先の尖った工具痕がよく残っている。碑身から山型まで平らに仕上げられ、離れて刻まれる二条切込みは細く浅い。額部・基部の突出も低く、

額部に関しては、向かって右側のほうが突出は弱い。額部下には線刻の月輪内に梵字種子が薬研彫りされているが、小さく弱い。また、刻銘が梵字種子下にみられるが、細く弱い。

3.善導寺板碑(表 1-3　図 2-3　図 3-3)

善導寺境内端に立てられている板碑である。一般的に「蒙古碇石」と呼ばれる木材を挟んで碇として使用されたもので、元の軍船や宋の商船に使用されていた碇石を石材として転用した板碑である。基礎は扁平な砂岩製の方形台石の枘穴に嵌められ、コンクリートで固定されている。正面・側面幅とも同じであり、両端がやや細くなり、中央の幅は 40cm の長さで最も広く仕上げられている。中央には深さ 1.2cm、幅 5cm の溝が両側面に彫り込まれている。この溝が上下の中央に位置するため、この碇石の全長は、260cm であることがわかる。中央上部に、舟形を彫りくぼめ蓮華座上に立ち、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ地蔵立像を半肉彫りしており、その下部に刻銘がみられる。諸先学により延文３年(1358)の紀年銘があるとされるが、現在、元号部分は判読できない。

4.般若院 3 号板碑(表 1-4　図 2-4　図 3-4)

般若院境内に石造物が集積されている区画があり、その中に置かれている。小型の板碑であり、正面幅は上下において同じであるが、側面幅は上にいくにしたがい、やや細く仕上げられている。調整は背面を除き各面、丁寧に仕上げられているが、磨滅が著しい。背面には細かい先の尖った工具痕がよく残っている。離れて刻まれる二条切込みは細く浅い。基部は折損しており、不明であるが、額部は突出も低い。額部下には梵字種子が薬研彫りされているが、小さく弱い。刻銘は現在では磨滅しており、ほとんど判読できないが、福岡市教育委員会の調査によって確認されている（福岡市教育委員会 1992）。

5.水瓶山板碑(表 1-5　図 2-5　図 3-5)

大宰府を見下ろす水瓶山山頂に単独で立てられている板碑であり、現在は社殿中に納められ、基部はコンクリートで固められている。正面を碑面から山型まで平らに仕上げ、上端に陰刻による方形輪郭内に法華曼荼羅の種子を刻み、また、方形輪郭下中央に刻銘がみえるが、現在では判読しにくい。背面は粗い加工痕を残し、やや膨らませている。

6.社日神板碑(表 1-6　図 2-6　図 3-6)

弥太郎天満宮境内に存在する社日神の祠内に安置されている。基礎はコンクリートで固められており、山型頂部が磨滅しているものの、ほぼ完存である。各面とも丁寧に整形され、また、丁寧に磨かれている。山型下の二条切込みは断面三角形でしっかりしており、正面だけでなく側面･背面にまで廻している。山型正面上端には三角形の彫り沈めがあり、

その中に「サ」の梵字種子を細線陰刻する。碑身には中央に方形の彫沈めを設け、中に蓮華座にのる観音坐像を半肉彫りしている。この彫沈めの両側と下部には刻銘がみられる。

7.石塔院嘉吉 3 年銘板碑(表 1-7　図 2-7　図 4-7)

石塔院境内の石碑が整理され並べられている一角にある。小型の板碑であり、正面幅は上下において同じであるが、側面幅は上にいくにしたがい、わずかに細く仕上げられている。調整は背面を含め、各面、丁寧に仕上げられている。背面は丸く膨らませ、正面は碑身から二条切込みまで平らに仕上げられている。二条切込みは、上段正面を切り込まず、正面は山型と同じ面に仕上げているが、側面には二条切込みを廻している。二条切込み下には梵字種子が小さく薬研彫りされ､刻銘が梵字種子両側及び下にみられるが､細く弱く、ほとんど判読できない。

8.石塔院宝徳 2 年銘板碑(表 1-8　図 2-8　図 4-8)

石塔院に存在していたものが、現在、佐賀県立博物館に保管されている。小型の板碑であり、正面・側面幅とも上下において同じである。調整は背面を含め、各面、丁寧に仕上げられており、本来、土中にある基部は碑身より若干大きく、粗割りした加工面を残すままである。背面は丸く膨らませるほか、向かって右側側面もやや膨らませ、正面は碑身から二条切込みまで平らに仕上げている。二条切込みは、上段正面を切り込まず、正面は山型と同じ面に仕上げているが、側面には二条切込みを回している。二条切込み下にはやや雑に梵字種子が刻まれており、梵字種子下に刻銘がみられる。

9.石塔院文亀元年銘板碑(表 1-9　図 2-9　図 4-9)

石塔院境内の石碑が整理され並べられている一角にある。小型の板碑であり、正面・側面幅とも上下において同じである。調整は背面・側面がやや粗く、整形も雑である。切込みは正面に 1 条あるのみで、山型は横方向に稜線をもつ側面観三角形を呈する。正面切込み下には梵字種子が刻まれ、刻銘が梵字種子下にみられるが、細く弱く、ほとんど判読できない。

10.湯野田大師堂北板碑(表 1-10　図 2-10　図 4-10)

大師堂の最奥部に並べられている石造物群中に同規模・同型式の板碑が 2 基並べられている。同時期に立てられたものと想定できるが、北側の板碑にのみ紀年銘が確認できる。山型上部の調整が丁寧であるほかは、整形・調整ともきわめて粗い。山型頂部は中央で前後に稜線をもたせている。山型部直下の二条切込みは正面にはみられず、両側面ともきわめて浅く刻まれている。正面には額の突出は確認できず、上半部に細線陰刻の月輪内に梵

字種字が薬研彫りされているが、彫りは粗い。また、梵字種字下には刻銘がみられるが、これについても彫りが粗い。刻銘部分の下は正面を丸く膨らませているが、整形は雑であり、粗い鑿痕を多く残す。背面には上半部に自然面を残し、下半部についても粗い鑿痕を多く残す。

11.湯野田大師堂南板碑(表 1-11　図 2-11　図 4-11)

大師堂の最奥部に並べられている石造物群中に同規模・同型式の板碑が 2 基並べられている。北側の板碑にのみ紀年銘が確認でき、南側の板碑も同時期に立てられたものと想定できる。山型上部の調整が丁寧であるほかは、整形・調整ともきわめて粗い。山型頂部は中央で前後に稜線をもたせている。山型部直下の二条切込みは正面にはみられず、両側面ともきわめて浅く刻まれている。正面には額の突出は確認できず、上半部に細線陰刻の月輪内に梵字種字が薬研彫りされているが、彫りは粗い。梵字種字下には刻銘がみられるが、これについても彫りが粗い。刻銘部分の下は正面を丸く膨らませているが、整形は雑であり、粗い鑿痕を多く残す。背面には上半部に自然面を残し、下半部についても粗い鑿痕を多く残す。

12.三城城跡板碑(表 1-12　図 2-12　図 4-12)

大村氏の居城である三城城跡主郭東側の曲輪に他の石塔部材とともに集められている板碑の残欠である。上部および下部とも欠失し碑身中央部のみ残されているが、やや膨らませた背面を含め、各面とも丁寧に整形・調整されている。細線陰刻の月輪内に梵字種字が大きく薬研彫りされ、梵字種字下には刻銘がみられるが、下端の一部は欠失して確認できない。

表１　筑前・筑後・肥前における紀年銘をもつ整形板碑一覧

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
1	建正寺板碑	福岡県須恵町佐谷観音谷	正中２年	1325	花崗岩	九州歴史資料館 1986
2	米一丸地蔵堂 15 号板碑	福岡県福岡市東区箱崎６丁目６	永享５年	1433	砂岩	福岡市教育委員会 1992
3	善導寺板碑	福岡県福岡市博多区中呉服町 6-4	延文３年	1358	花崗岩	福岡市教育委員会 1992
4	般若院３号板碑	福岡県福岡市南区大池１丁目３	慶長２年	1597	砂岩	福岡市教育委員会 1992
5	水瓶山板碑	福岡県太宰府市水瓶山	正平８年	1353	花崗岩	多田隈豊秋 1975
6	社日神板碑	福岡県久留米市三潴町草場	文明７年	1475	安山岩	三潴町史編さん委員会 1985
7	石塔院嘉吉３年銘板碑	佐賀県吉野ケ里町吉野ケ里石塔院	嘉吉３年	1443	安山岩	松岡史 1984
8	石塔院宝徳２年銘板碑	佐賀県吉野ケ里町吉野ケ里石塔院	宝徳２年	1450	安山岩	松岡史 1984
9	石塔院文亀元年銘板碑	佐賀県吉野ケ里町吉野ケ里石塔院	文亀元年	1501	安山岩	松岡史 1984
10	湯野田大子堂北板碑	佐賀県嬉野市嬉野町下宿湯野田	弘安９年	1286	緑色片岩	大島恒彦 2005
11	湯野田大子堂南板碑	佐賀県嬉野市嬉野町下宿湯野田	（弘安９年）	（1286）	緑色片岩	大島恒彦 2005
12	三城城跡板碑	長崎県大村市三城町	永享５年	1433	緑色片岩	大村市史編纂室 2014

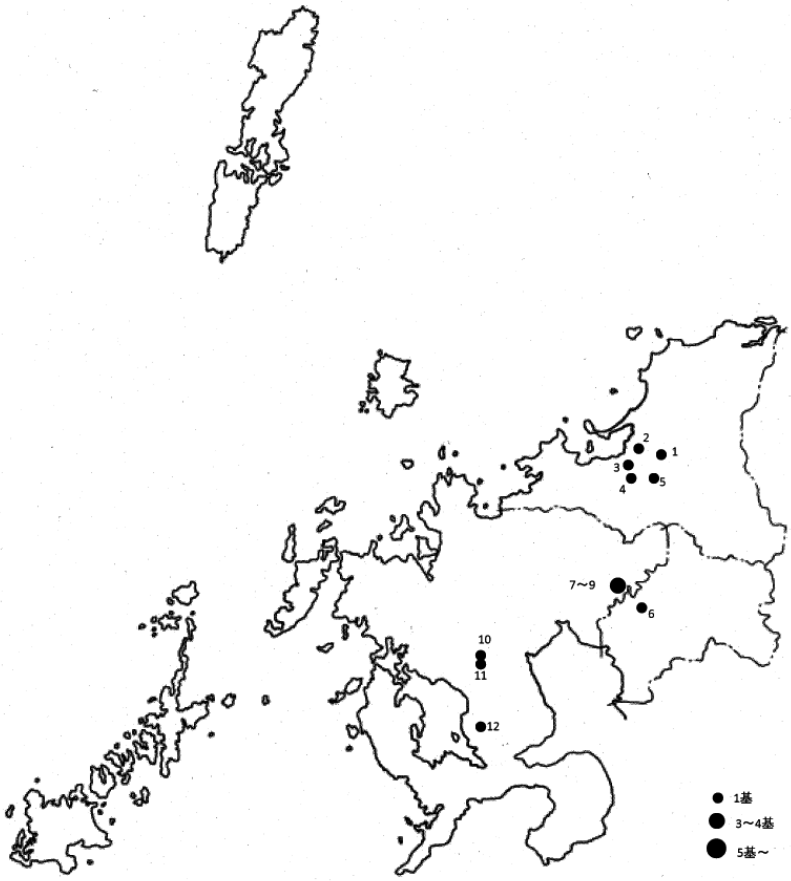


図１　筑前・筑後・肥前における整形板碑の分布

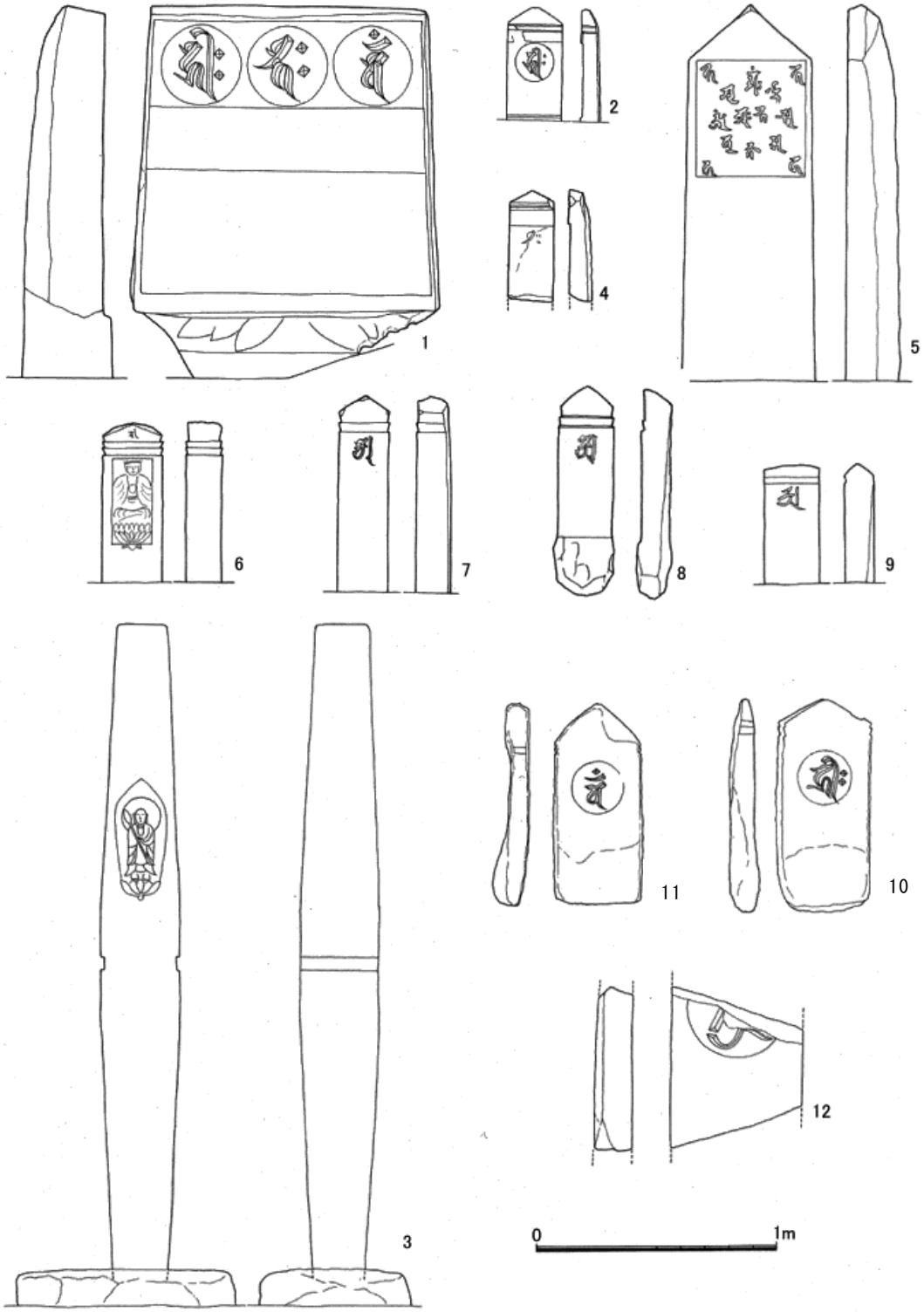


図 2　筑前・筑後・肥前における整形板碑

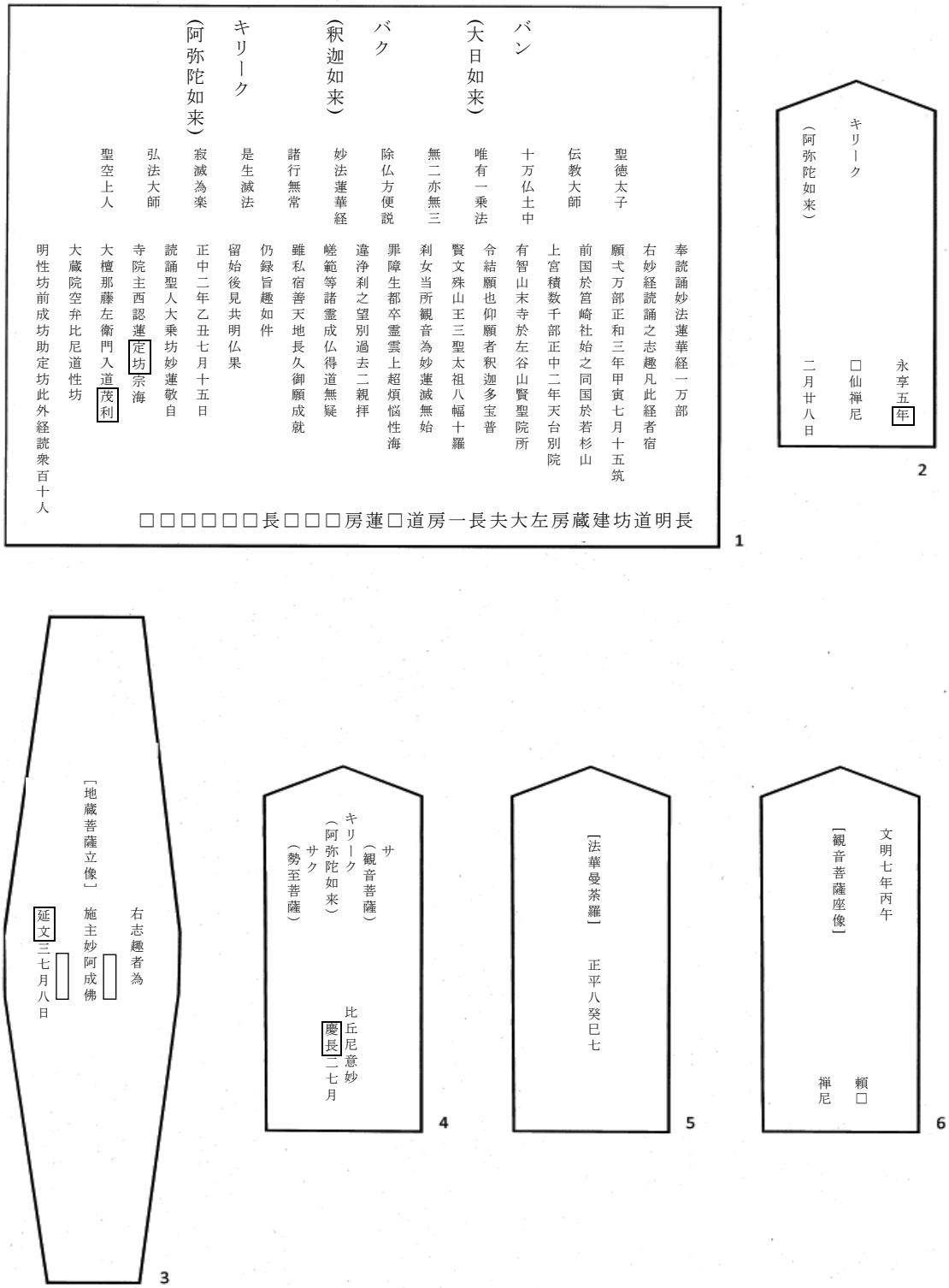


図３　筑前・筑後・肥前における整形板碑銘文①

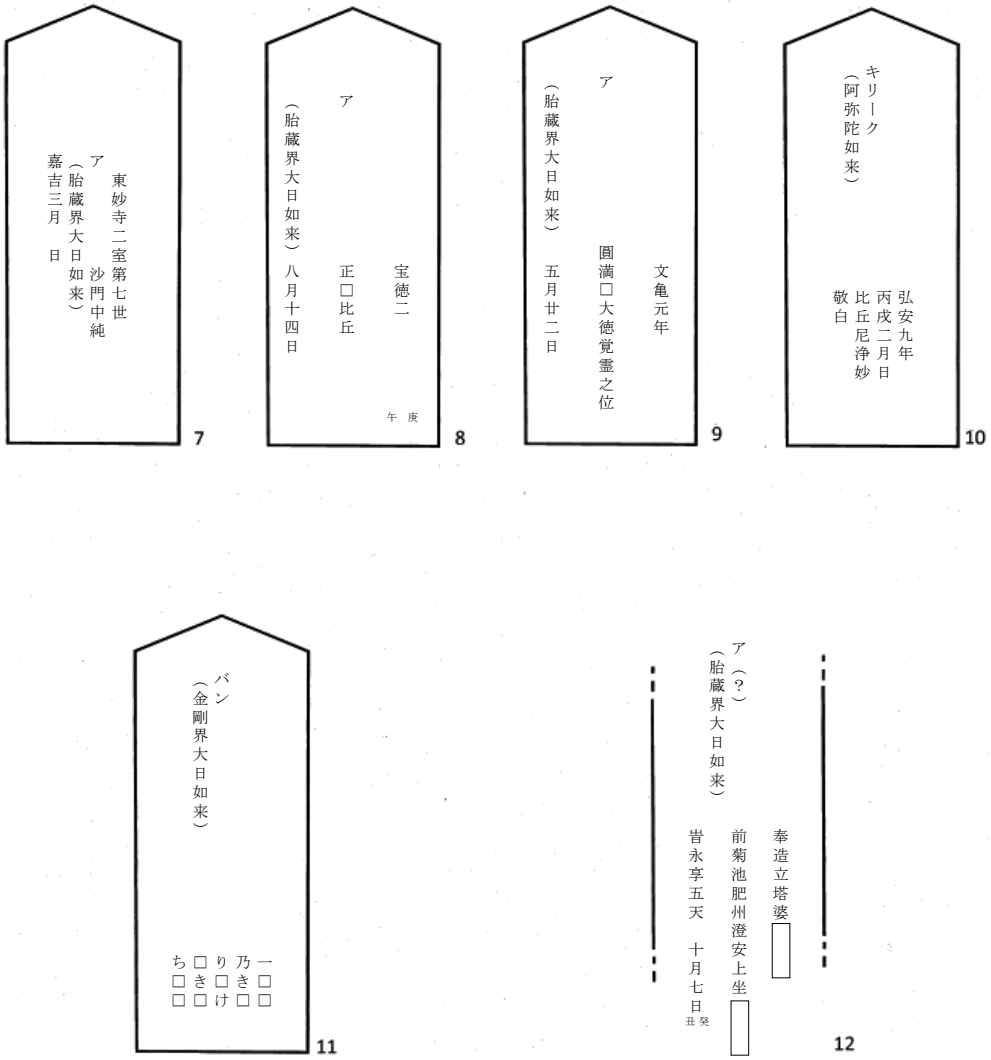


図 4　筑前・筑後・肥前における整形板碑銘文②

豊前

豊前地域は、古代、政治・経済・宗教と、あらゆる分野において大きな影響力を及ぼした宇佐神宮の膝元であり、中世には、色濃い仏教世界が展開した。豊前地域の紀年銘資料の分布をみると、局地的に福岡県豊前市の求菩提山域に確認できるほかは、大分県でも宇佐市に集中し、その周縁部に限られてしまう。もちろん、これは紀年銘資料に限定した様相であり、この地域以外に整形板碑が存在しないわけではないが、その密度は、紀年銘資料の分布域に比例して存在する(註 2)。

ここで紹介する豊前地域の紀年銘資料は、安山岩及び凝灰岩の両者がみられ、これに加えて福岡県豊前市には石英玢岩など特異な石材もみられる。豊前地域でも特に集中する宇佐市地域には、安山岩及び凝灰岩の両者が存在し、石造文化財の宝庫とされる大分県国東半島一帯の縁辺部としての様相をもつ。安山岩を石材とする整形板碑は、国東半島地域のものと型式をはじめ様々な要素において非常に近似している。

また、凝灰岩製の整形板碑に関しては、宇佐市安心院町や大分県宇佐市と杵築市山香町の市町境に位置する御許山山頂に所在するため、これらはいずれも、豊後北部での凝灰岩産出地である豊後高田市・杵築市山香町地域に隣接する地域に位置し、これについても国東半島縁辺部の様相をもつ。つまり豊前南部は、国東半島地域に華開いた石造文化圏の縁辺部に位置付けられることが指摘できよう。

これとは対照的に、福岡県側では鎌倉・南北朝期に遡る紀年銘板碑はみられない。戦国期にもなると、福岡県豊前市の求菩提山域では、戦国期に修行窟とされる岩屋内において小型の整形板碑群の流行がみられるが(註 3)、これらの板碑は下面をいずれも平坦に加工しており、当初から岩屋内の岩上に置かれる目的で製作されたことがうかがえ、鎌倉・南北朝期の板碑群とは様相を全く異にする。これに加えて、石英玢岩という特異な石材の使用や、型式的特徴においてもひとつの文化圏の存在が想定できよう。後述するが、安山岩製割石を利用した自然石板碑が、求菩提山をはじめ、英彦山(岩本教之ほか 1996)・御許山(渡辺信幸 1987、入学正敏 1988・1994)などの豊前一帯に広がる山岳修験の場において、戦国期以降、爆発的に流行している。16 世紀は修験者が地域社会に定着し、民衆の信仰生活に深く関与しはじめた時期であり(時枝務 1983)、これらの整形板碑・自然石板碑の流行が豊前地域の板碑の一つの特徴といえよう。

以下では、個々の資料についてその概要に触れてみたい。

1.求菩提山阿弥陀窟板碑(表 2-1　図 6-1　図 9-1)

求菩提山阿弥陀窟中央には小堂が存在し、小堂横には中世末～近世初の宝篋印塔・五輪塔が群在するが、阿弥陀窟中の岩上に置かれている板碑である。正面は丁寧に調整されているが、両側面・山型部・底面はやや粗く、また、背面は粗く仕上げられている。底面が若干脹らみをもつものの、平たく仕上げられていることから、製作当初から岩屋に安置し、土中に埋設する目的でなかったことが考えられる。板碑中央には方形彫沈めを設け、梵字種子は碑面上端に箱彫り状に彫られ、碑面全体には銘文が小さく陰刻されている。山型頂

部は前面から背面に至る稜線をもち、山型と額部の境は見られず、碑面よりは、0.5cm彫り凹めている。一方、基部の突出は約2cmみられる。

2.求菩提山縁ケ岩屋板碑(表2-2　図6-2　図9-2)

求菩提山縁ヶ岩屋内には石造地蔵や戦国期末～近世初の五輪塔などがみられるが、岩屋の岩上に置かれている板碑である。正面・山型部は丁寧に調整されており、また、両側面・背面・底面も鑿痕が残るものの比較的丁寧に仕上げられている。底面が丁寧に仕上げられていることから、製作当初から岩屋に安置し、土中に埋設する目的でなかったことが考えられる。梵字種子は碑面上端に小さく陰刻され、額部・基部とも前方に突出させており、額部には２条の陰刻線が彫られている。

3.求菩提山朝日窟板碑(表2-3　図6-3　図9-3)

求菩提山朝日窟中の岩上に置かれている板碑である。正面は丁寧に調整されており、また、両側面・山型部・背面・底面も鑿痕が残るものの比較的丁寧に仕上げられている。底面が丁寧に仕上げられていることから、製作当初から岩屋に安置し、土中に埋設する目的でなかったことが考えられる。梵字種子は碑面上端に小さく陰刻され、碑面全体に銘文も小さく陰刻されている。側面をやや膨らませた山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつ。山型と額部の境はみられず、額部の部分に１条の細い横線を刻んでいる。また、基部の突出部にも同様に１条の細い横線を刻んでいる。板碑中央に方形彫沈めを設け、碑面としている。碑面両側の枠は、額部・基部よりやや浅く、ここにも両側に１条の細い縦線を刻んでいる。

4.旧楞厳寺板碑(表2-4　図6-4　図9-4)

かつては楞厳寺参道に立てられていたと伝えられる板碑である。現在は、周囲に中世の五輪塔残欠が集積されているのみで当時の面影はみられない。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗雑で丸く仕上げられている。碑面上部に見られる梵字種子は薬研彫りされ、銘文も碑身下部中央にみられる。山型頂部は欠損しているが、三角尖頭状に尖り、後方に頭頂部が位置するものと考えられる。山型部直下に断面三角形の二条切込みが確認できる。額部は大きく突出させているが、下部が埋設されているためか、基部の突出は確認できない。

5.善光寺板碑(表2-5　図6-5　図9-5)

善光寺本堂横に戦国期の五輪塔・宝篋印塔などとともに立てられている板碑である。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗く仕上げられている。

碑面上部にみられる梵字種子は大きく薬研彫りされ、その下部に銘文もみられる。山型は三角尖頭状の頂部を後方にもち、秀麗な流線形に仕上げられている。山型部直下の二条切込みは非常にしっかりした断面三角形を呈する。前面両端に面取りを施す額部は大きく突出させており、また、基部の突出も著しい。

6.妙楽寺 1 号板碑(表 2-6　図 6-6　図 9-6)

妙薬寺本堂横に五輪塔をはじめとした数多くの中世石造物群とともにみられる。ほぼ同型式の 2 号板碑と並んで覆屋内に立てられている。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗く仕上げられている。碑面上部にみられる梵字種子は大きく薬研彫りされ、その下部に銘文もみられる。山型は三角尖頭状の頂部を後方にもち、秀麗な流線形に仕上げられている。山型部直下の二条切込みは非常にしっかりした断面三角形を呈する。前面両端に面取りを施す額部は大きく突出させており、また、基部の突出も著しい。碑面と基部の境界は丸く仕上げられており、基部下には台石がみられる。

7.妙楽寺 2 号板碑(表 2-7　図 6-7　図 9-7)

妙楽寺本堂横に五輪塔をはじめとした数多くの中世の石造物群とともにみられる。ほぼ同型式の 1 号板碑と並んで覆屋内に立てられている。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗く仕上げられている。碑面上部にみられる梵字種子は大きく薬研彫りされ、その下部に銘文もみられる。山型は頂部が欠損しているものの、三角尖頭状の頂部を後方にもち、秀麗な流線形に仕上げられている。山型部直下の二条切込みは非常にしっかりした断面三角形を呈する。前面両端に面取りを施す額部は大きく突出させており、また、基部の突出も著しい。基部下には台石が見られ、ほとんど 1 号板碑と同型式であるが、碑面と基部の境界に稜をもつことが異なるのみである。この板碑には紀年銘はみられないが、銘文の内容が 1 号板碑と連続しており、同時に 2 基が立てられ、それぞれ異なる梵字種子を彫りながら、銘文は 2 基連続して刻まれたことがわかる。

8.庄部観音堂 1 号板碑(表 2-8　図 7-8　図 9-8)

庄部観音堂横に中世の五輪塔群とともに立てられている板碑である。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗く仕上げられている。中央部が浅くくぼむ碑面上半には梵字種子が大きく薬研彫りされ、その下部に銘文もみられる。山型は三角尖頭状の頂部を後方にもち、反りをもつ秀麗な流線形に仕上げられている。山型部直下の二条切込みは比較的弱いものの断面三角形を呈する。前面両端に面取りを施す額部は大きく突出させており、また、基部の突出もみられる。

9.庄部観音堂 2 号板碑(表 2-9　図 7-9　図 9-9)

庄部観音堂横に中世の五輪塔群とともに立てられている板碑である。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗く仕上げられている。碑面上半には梵字種子が大きく薬研彫りされ、その下部に銘文もみられる。山型は三角尖頭状の頂部を後方にもち、反りをもつ秀麗な流線形に仕上げられている。山型部直下の二条切込みは比較的弱いものの断面三角形を呈する。前面を丸く膨らませる額部は大きく突出させており、また、基部の突出もみられる。なお、銘文は碑身正面には見られず、向かって右面に存在していたとされるが、現在は確認困難である。ここでは入江英親の判読に従いたい(入江英親 1985)。

10.大塚集落墓地 1 号板碑(表 2-10　図 7-10　図 9-10)

大塚集落の近世墓地中に数基の中世末の板碑および五輪塔残欠がみられるが、その中の 1 基である。調整は各面とも丁寧に仕上げられている。碑身は厚さが厚く、方柱状を呈する。山型は中央に頂部をもつ四角錐状を呈しているが、後方両端を面取りしている。額部および基部の突出は十分にみられるが、碑面上方中央に方形彫沈めを設け、彫沈め内には稚拙ながら宝珠をもつ地蔵の浮彫りがみられる。銘文はこの方形彫沈めの両端に小さく刻まれている。

11.大塚集落墓地 2 号板碑(表 2-11　図 7-11　図 9-11)

大塚集落の近世墓地中に数基の中世末の板碑および五輪塔残欠がみられるが、その中の 1 基である。調整は各面とも丁寧な仕上げである。山型は頂部が中央に位置する四角錐状であるが、頂部において横方向に約 7cm の稜をもつ。碑面には梵字種子はみられず、その下部に銘文が小さくみられる。額部および基部の突出は大きい。

12.観音寺板碑(表 2-12　図 7-12　図 9-12)

観音寺本堂横に中世末～近世初の板碑・五輪塔が集められており、その中にみられる。調整は正面・側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面のみ粗く仕上げている。丁寧な調整面も風化によるためか、表面は粗くなっている。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもち、前面は額部と同じく平らに仕上げている。山型と額部の境界域に細い細線陰刻の二条線を若干離して刻んでいる。碑面には方形彫沈めを設け、彫沈め内には稚拙ながら蓮華座上に合掌した地蔵立像の浮彫りがみられる。銘文はこの方形彫沈めの両端に小さく刻まれているが、銘文内には墨を入れている。

13.任聖寺板碑(表 2-13　図 7-13　図 9-13)

任聖寺境内に近世初期～前葉の板碑・板碑型墓碑が 6 基集められており、その中の 1 基である。調整は各面とも平滑に仕上げられている。山型は中央に頂部をもつ四角錐状を呈している。碑面には方形彫り沈めを設け、彫沈め内には稚拙ながら合掌した地蔵の浮き彫りがみられ、地蔵上部には鋸歯文が、また、地蔵下部には連続斜文が左右対称にみられる。銘文はこの方形彫り沈めの両端に刻まれている。両側面には正面額部突出にあたる位置に、細線陰刻の二条線を若干離して刻んでいる。

14.真上家墓地板碑(表 2-14　図 7-14　図 9-14)

真上家の近世墓地中に存在する。調整は正面・山型・側面・背面とも非常に丁寧に仕上げられている。山型は中央に頂部をもつ四角錐状を呈し、前面に円形を彫り沈めている。山型下部の額部のみ帯状に前方に突出させている。碑面には方形の彫沈めを造り、上部に梵字種子を比較的大きく刻み、その下に銘文を刻んでいる。碑身下には 2 段を 1 石でつくる台石がみられる。

15.高野家墓地板碑(表 2-15　図 7-15　図 10-15)

高野家の近世墓地中に存在する。調整は正面・山型・側面・背面とも非常に丁寧に仕上げられている。山型は中央よりやや前方に頂部をもつ四角錐状を呈し、山型下部の額部のみ帯状に前方に突出させている。額部前面に円形を彫り沈めている。碑面には方形の彫沈めを造り、上部には陰刻の円形月輪内に梵字種子を刻み、その下に銘文を刻んでいる。碑身下には 2 段を 1 石でつくる台石がみられるが、上段の台石上方は台形を呈している。

16.成円寺板碑(表 2-16　図 8-16　図 10-16)

成円寺境内の一角に南北朝期のものと考えられる板碑に隣接して立てられているが、周辺部には戦国期の五輪塔部材が多数みられる。調整は各面とも平滑に仕上げられているが、成形は雑である。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもち、前面は額部と同じく平らに仕上げている。山型部直下の切込みも、正面は 1 条のみで断面四角の箱彫り状に刻んでおり、この切込みは両側面にもみられる。２条目の切込みは正面にはみられず、正面の額部突出がみられる位置の両側面において断面四角の箱彫り状切込みがみられる。梵字種子は碑面中央上端に小さく刻まれており、その下部に銘文も小さくみられる。また、基部の突出もみられる。

17.大楽寺到津家墓地板碑(表 2-17　図 8-17　図 10-17)

大楽寺裏山の宇佐神宮大宮司家である到津家墓地入口にみられる。調整は各面とも丁寧

に仕上げられている。山型は中央に頂部をもつ四角錐状を呈している。碑面には方形彫沈めを設け、この中に銘文を小さく刻んでいる。碑身下部は、現在、コンクリートで固められており、その詳細はうかがえない。

18.大元神社板碑(表 2-18　図 8-18　図 10-18)

御許山山頂の大元神社より少し下った位置に巨石がみられ、その岩影に立てかけられている。周辺には中世末～近世の自然石板碑や石仏をはじめとした石造物が数基みられる。正面を丁寧に調整し、平らに整形した上端面および側面はやや丁寧に調整しているものの、背面の調整は少し粗い。額部には細線陰刻の月輪内の下部に同じく細線陰刻の蓮華文がみられ、その上にきわめて弱い薬研彫りの梵字種子を彫る。碑面は方形彫沈めがみられ、方形彫沈め内上部に金剛界五仏の梵字種子をきわめて弱い薬研彫りで細線陰刻の月輪内に彫っている。その下方には非常に細い割付線がみられ、それに区画された銘文がみられるが、細く弱い。なお、下端部については風化が著しく、銘文の判読すら困難な状況である。

19.地蔵院跡 1 号板碑(表 2-19　図 8-19　図 10-19)

水田中に中世の五輪塔・宝篋印塔・宝塔残欠が集積されており、これらの石造物とともに板碑が数基みられる。板碑は周辺地域では珍しく、いずれも凝灰岩を石材としているものである。碑身上半分が欠損しているものの、下半部の形態から板碑と判断した両面板碑である。調整は正面・両側面・背面とも丁寧に仕上げられており、正面・背面にはそれぞれ梵字種子を大きく薬研彫りし、それぞれその下部に銘文を刻んでいる。

20.佐田社 1 号板碑(表 2-20　図 8-20　図 10-20)

佐田神社境内の一角に板碑が 4 基みられるが、その内の一基である。頭部の磨滅が著しく、また中央部で折損している。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗く仕上げられている。碑面は上半部がわずかに前屈みになり、碑面上半には墨を入れた梵字種子が大きく薬研彫りされ、その下部に銘文もみられる。山型は磨滅が著しいものの、頂部を後方にもつ三角尖頭状を呈するものと考えられる。山型部直下の二条切込みも、磨滅が著しいが、断面三角形を呈するものとみられる。額部は大きく突出させており、また、基部の突出もみられる。

21.大年社 1 号板碑(表 2-21　図 8-21　図 10-21)

大年社境内に 4 基の板碑がみられるが、その内の 1 基である。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗く仕上げられている。碑身上部をわずかに膨らませ、そこに梵字種子を大きく薬研彫りし、墨を入れ、また、その下部に銘文がみら

れる。山型は三角尖頭状の頂部を後方にもち、秀麗な流線形に仕上げられている。山型部直下の二条切込みは非常にしっかりした断面三角形を呈する。前面をわずかに膨らませる額部は大きく突出させており、また、基部の突出も著しい。

22.大年社 2 号板碑(表 2-22　図 8-22　図 10-22)

大年社境内に 4 基の板碑がみられるが、その内の 1 基である。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗く仕上げられている。碑面をわずかに膨らませ、上端に梵字種子を大きく薬研彫りし、墨を入れ、また、その下部に銘文もみられる。山型は三角尖頭状の頂部を後方にもち、秀麗な流線形に仕上げられている。山型部直下の二条切込みは非常にしっかりした断面三角形を呈する。額部は大きく突出させているものの、基部の突出はみられない。埋設部に基部の突出がみられるのかもしれない。

23.高橋家墓地板碑(表 2-23　図 8-23　図 10-23)

水田中に 1 m をこえる川原石群を集積した中に近世墓地を形成しており、その中に存在する。調整は正面・山型部とも比較的丁寧に仕上げられ、側面・背面は粗雑である。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつが、風化が著しく欠損が多い。若干、突出させた額部には、卍を陰刻しており、また碑身下部も突出させている。碑身には方形の彫沈めを設け、彫沈め内に小さい陰刻の銘文を刻んでいる。枘穴をもつ台石は 2 段を 1 石で造り、碑身を差し込んで固定させている。

24.阿弥陀堂板碑(表 2-24　図 8-24　図 10-24)

阿弥陀堂横に中世の板碑・五輪塔群が集積されており、その内の一基である。上半部が欠失しているが、上半部はこの集積された石造物群中から発見されるかもしれない。調整は正面・両側面とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い。碑面下部には銘文が陰刻され、基部の突出もみられる。碑身下には枘穴をもつ台石がみられ、碑身を差し込んで固定させている。

表２　豊前における紀年銘をもつ整形板碑一覧

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
1	求菩提山阿弥陀窟板碑	福岡県豊前市岩屋村全山	天文 23 年	1554	石英玢岩	重松敏美 1969
2	求菩提山縁ヶ岩屋板碑	福岡県豊前市岩屋村全山	永禄 8 年	1565	安山岩	築上郡誌編纂委員会 1966
3	求菩提山朝日窟板碑	福岡県豊前市岩屋村全山	慶長 19 年	1614	安山岩	松岡史 1983
4	旧楞厳寺板碑	大分県中津市耶馬渓町三母尾尾園	康永元年	1342	安山岩	耶馬渓町文化財調査委員会 1989
5	善光寺板碑	大分県宇佐市下時枝	建武 4 年	1337	安山岩	望月友善 1975
6	妙楽寺 1 号板碑	大分県宇佐市木の内	貞和 2 年	1346	安山岩	望月友善 1975
7	妙楽寺 2 号板碑	大分県宇佐市木の内	貞和 2 年	1346	安山岩	望月友善 1975
8	庄部観音堂 1 号板碑	大分県宇佐市麻生庄部	応安 6 年	1373	安山岩	入江英親 1985
9	庄部観音堂 2 号板碑	大分県宇佐市麻生庄部	永徳 3 年	1383	安山岩	入江英親 1985
10	大塚集落墓地 1 号板碑	大分県宇佐市大塚	永禄 10 年	1567	安山岩	入学正敏 1988
11	大塚集落墓地 2 号板碑	大分県宇佐市大塚	天正 7 年	1579	安山岩	入学正敏 1988
12	観音寺板碑	大分県宇佐市上拝田	天正 3 年	1575	安山岩	入学正敏 1988
13	任聖寺板碑	大分県宇佐市法鏡寺	慶長 6 年	1601	安山岩	入学正敏 1988
14	真上家墓地板碑	大分県宇佐市南宇佐	慶長 13 年	1608	安山岩	入学正敏 1988
15	高野家墓地板碑	大分県宇佐市南宇佐	元和 2 年	1616	安山岩	入学正敏 1988
16	成円寺板碑	大分県宇佐市上高居屋敷	元和 4 年	1618	安山岩	入学正敏 1988
17	大楽寺到津家墓地板碑	大分県宇佐市南宇佐	元和 7 年	1621	安山岩	入学正敏 1988
18	大元神社板碑	大分県宇佐市御許山	明応 4 年	1495	凝灰岩	渡辺信幸 1987
19	地蔵院跡 1 号板碑	大分県宇佐市安心院町荘田井中	嘉暦 2 年	1327	凝灰岩	安心院町誌編集委員会 1970
20	佐田社 1 号板碑	大分県宇佐市安心院町佐田宮の台	正慶元年	1332	安山岩	安心院町誌編集委員会 1970
21	大年社 1 号板碑	大分県宇佐市安心院町山蔵	建武元年	1334	凝灰岩	安心院町誌編集委員会 1970
22	大年社 2 号板碑	大分県宇佐市安心院町山蔵	暦応 4 年	1341	凝灰岩	安心院町誌編集委員会 1970
23	高橋家墓地板碑	大分県宇佐市安心院町六郎丸	寛永元年	1624	安山岩	
24	阿弥陀堂板碑	大分県宇佐市院内町小野川内	応永 35 年	1428	安山岩	院内町誌刊行会 1983

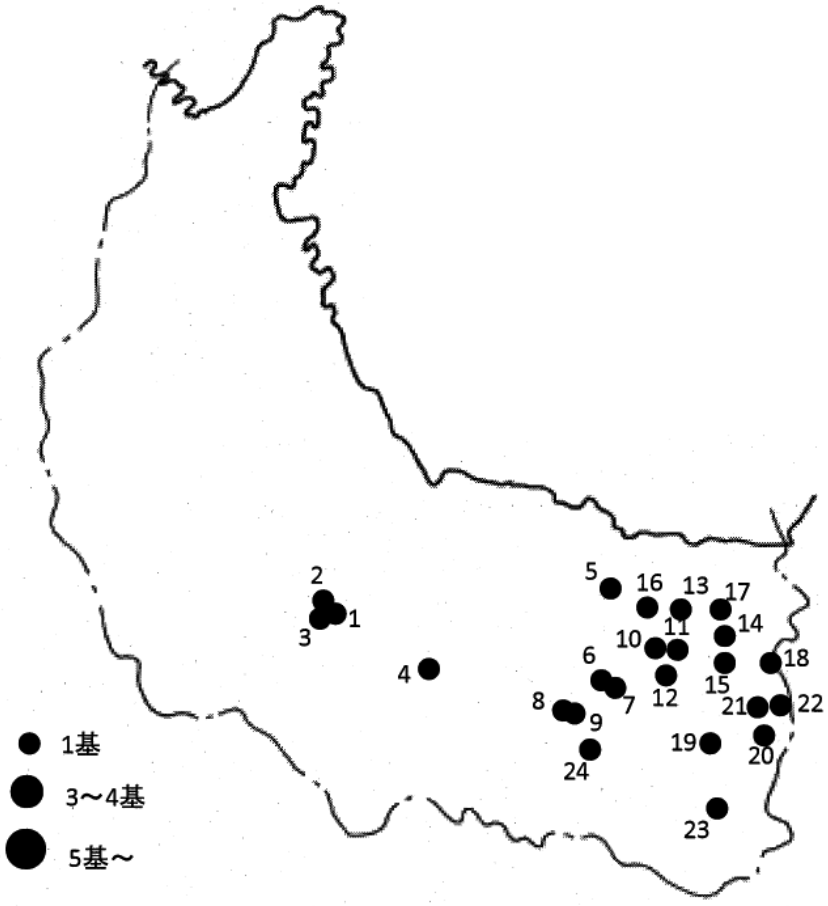


図 5　豊前における整形板碑の分布

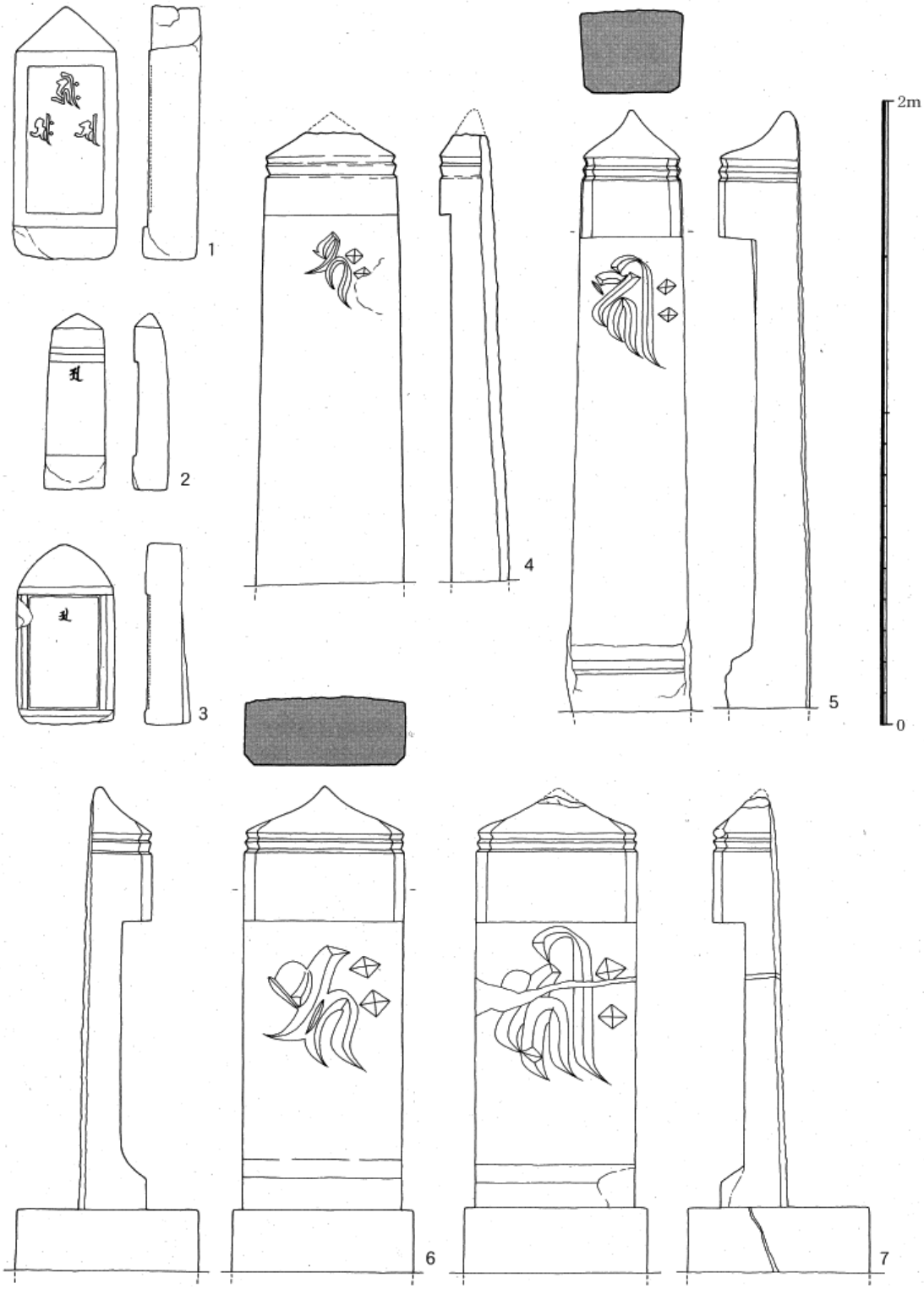


図 6　豊前における整形板碑①

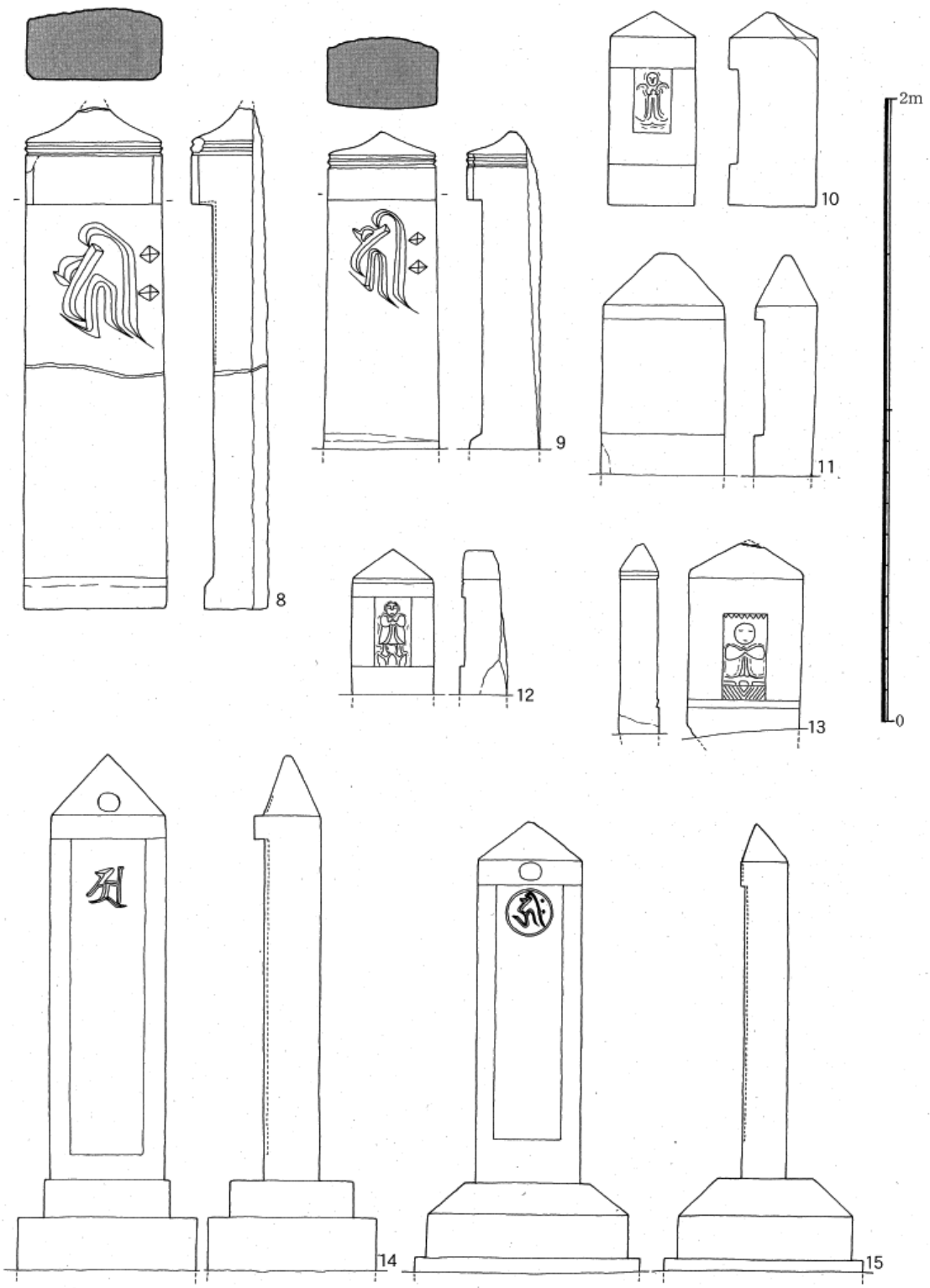


図 7　豊前における整形板碑②

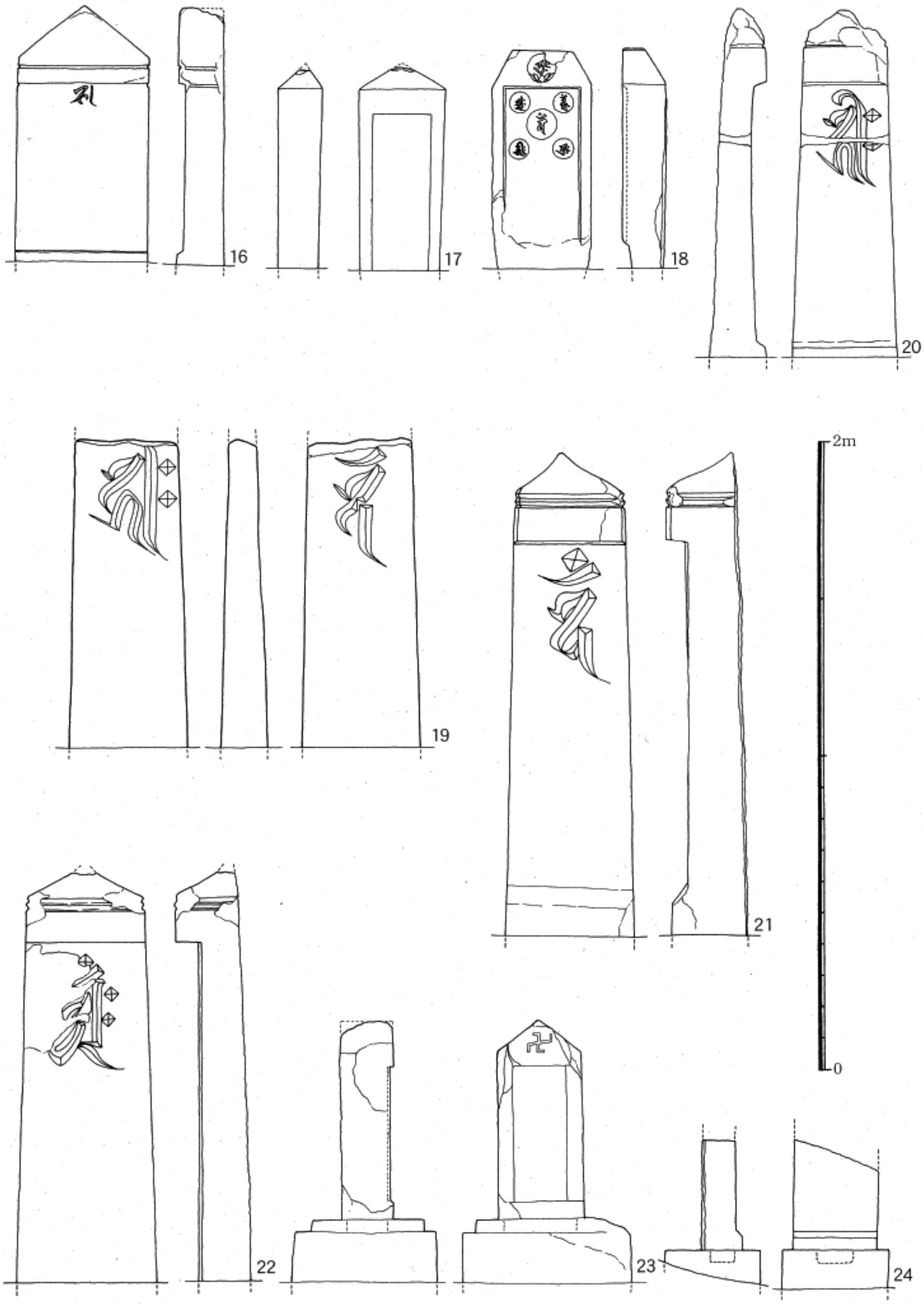


図 8　豊前における整形板碑③

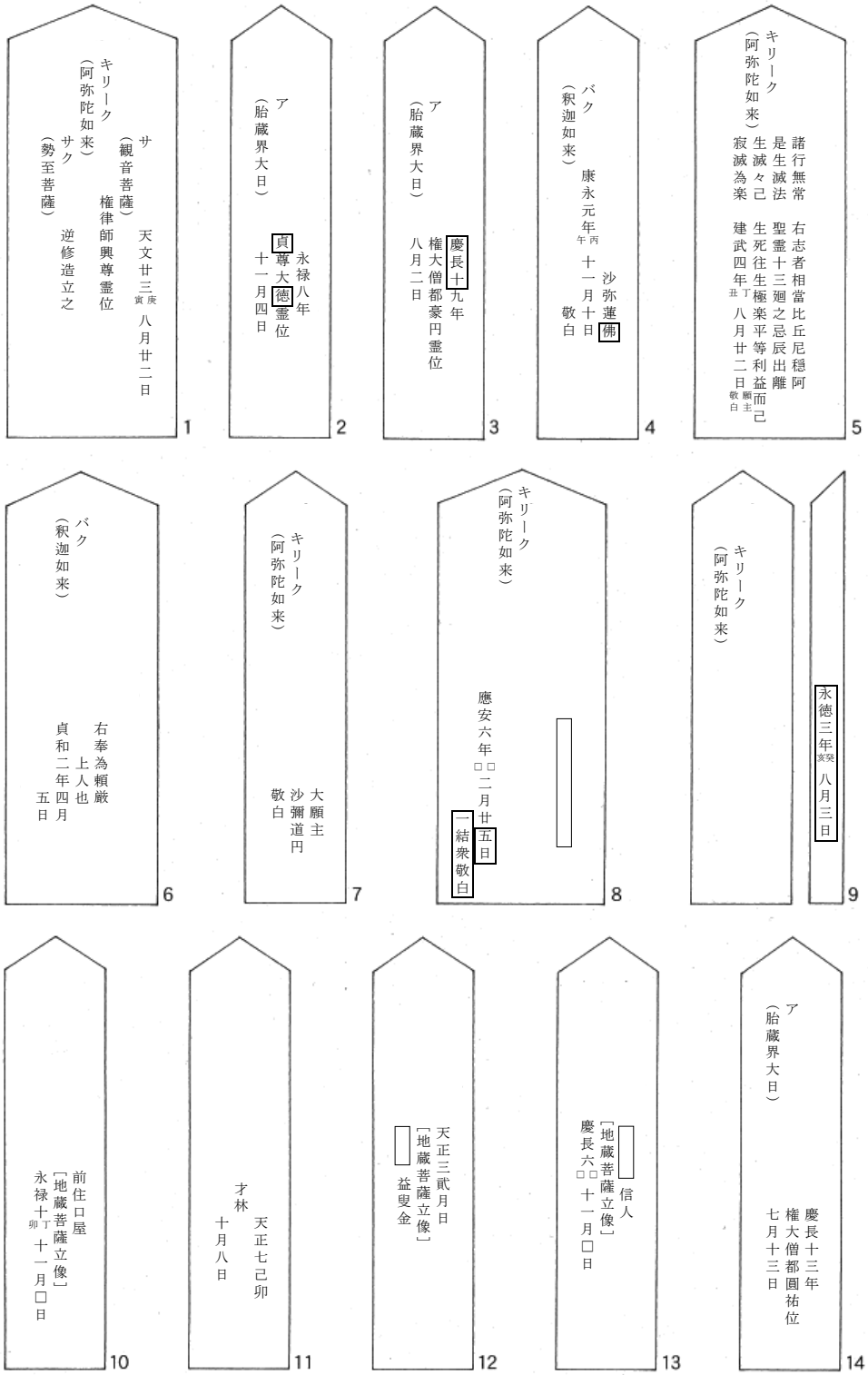


図 9　豊前における整形板碑銘文①

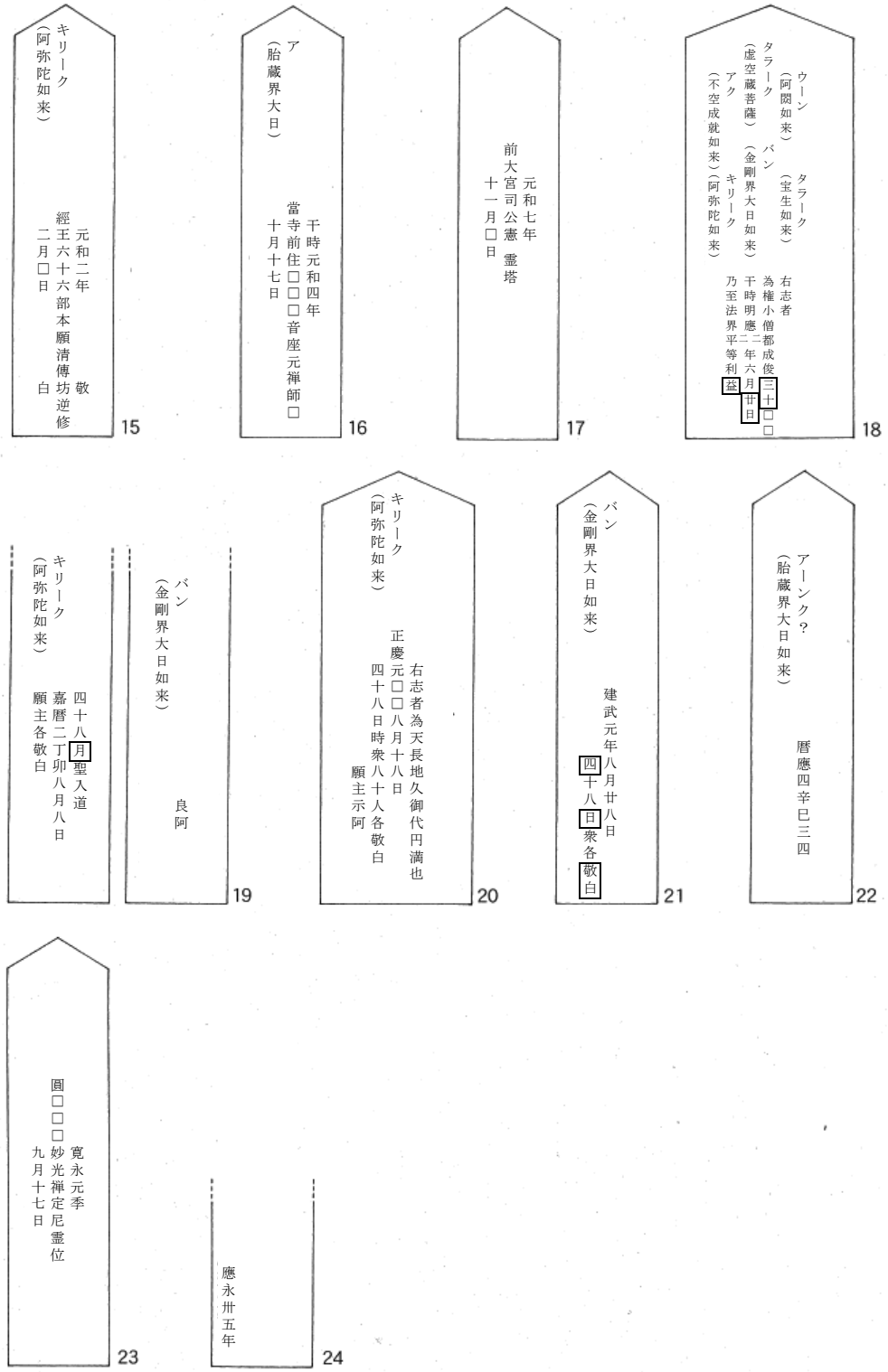


図 10　豊前における整形板碑銘文②

豊後

豊後の紀年銘資料の分布をみると、日田・玖珠地域に若干の類例がみられるものの、そのほとんどは国東半島周辺や豊後南部の大野川流域に集中する。もちろん、これは紀年銘資料に限定したものであり、この地域以外に整形板碑が存在しないわけではないが、その密度は、紀年銘資料の分布密度に比例して存在する。

豊後における紀年銘の残る板碑は、ほとんど安山岩と凝灰岩に限定できるが(原田昭一 2002a・2002b・2003b)、大きく分けて国東半島に安山岩が、また、豊後南部と、豊後北部でも豊後高田市・杵築市山香町周辺に凝灰岩を石材とする地域が存在する。各石材による石造物が分布する地域には、地質学的にその岩層が存在しており、生産地は石材産出地にきわめて近く、また、供給地もさほど離れた地域でないことが考えられる(渡辺文雄 1985)。

まず、豊後北部の紀年銘資料には、安山岩及び凝灰岩の両者がみられ、これに加えて日田市には永平寺跡 1 号板碑のように安山岩とされるものの、明らかに他地域とは異質の石材もみられる。豊後北部でも、特に集中する国東半島地域には、この両者が存在し、安山岩を石材とする整形板碑は、国東半島一帯で確認できるが、凝灰岩製の整形板碑に関しては、康永 4 年(1345)銘をもつ杵築市山香町普門坊跡板碑以後、杵築市山香町に集中し、一部、豊後高田市・杵築市大田・別府市でも確認できる。しかし、前述したように宇佐市で確認できることにより、豊後北部での凝灰岩産出地である豊後高田市・杵築市山香町地域に隣接する地域でも、その分布域にあることがわかる。

また、凝灰岩製板碑は日田市永平寺跡 2 号板碑や九重町宝八幡宮板碑にみられるように、日田玖珠地域でも石材として利用されているが、これらの地域の板碑は豊後高田市・杵築市山香町地域や大野川流域地域とも様相を異にする。その場合、第 3 の分布圏を模索すべきであろうが、豊後高田市・杵築市山香町地域や大野川流域地域にみられる凝灰岩製板碑の絶対量に比較すれば明らかに少ないため、この両者の地域より、その重要性は劣るものかにも思える。しかし、日田市永平寺跡 2 号板碑は正和 2 年(1313)銘をもち、これは豊後における凝灰岩を石材とする板碑の中では比較的古い紀年銘となるため、その重要性は無視できない。しかも、日田・玖珠地域における石造物は凝灰岩を最も多い石材としている。

一方、豊後南部地域の紀年銘資料はすべてが凝灰岩製であり、紀年銘資料以外でも凝灰岩製以外の製品を探すのが困難なほど石材が限定できる。前述したように、臼杵市野津町中山板碑が元徳2年(1330)銘をもち、最も古く、以後、豊後大野市朝地町岳川板碑(1332年銘)・大分市中村板碑(1333年銘)・臼杵市野津町寺小路板碑(1333年銘)などのように、1330

年代前半に集中して凝灰岩を石材とした紀年銘板碑が出現し、板碑が豊後南部に広範に流行しはじめる。

その分布には、空白地は認められないが、大野川流域の凝灰岩地帯に多く確認できる。この傾向は、五輪塔・宝塔・宝篋印塔・板碑・石幢・層塔などの石造物群をはじめ、特に、磨崖仏の流行する地域と一致する。板碑のほとんどが、現在、過疎化の波に呑み込まれそうな山間部の小集落地に確認でき、中世、町屋を形成していた府内・臼杵などの都市部では他の中世石造物とあわせて皆無に近いほど確認できないため、都市部においては石造物がつくられなかったのではないかと推測されてきた。しかし、大分市中世大友府内町跡の発掘調査が、近年、急速にすすみ、鎌倉期末～戦国期の板碑をはじめとした石造物は破壊され、単なる土木建築資材あるいは廃棄物として中世末に集中的に廃棄されている状況が確認されてきた。石造物廃棄の要因について、今後、綿密な検討が加えられるものであろうが、豊後の都市遺跡においては、本来、石造物が林立する風景こそ当時の一般的な姿であったことが再認識させられつつある。幸い、農山村部の板碑については現在に至るまで、原位置を離れることなく、きわめて良好な歴史的景観の中で守り続けられているものもみられる。

板碑は、出現期から臼杵市野津町風瀬徳瀬板碑(1392年銘)に至るまで南北朝期を通して、少ないながら連綿と製作され続けている。大分市中村板碑・大分市少林寺板碑群のように複数基が相互に関連しながら、ほぼ同時に立てられているものもみられるが、その多くは板碑として単独でみられる。しかし、原位置を保つ資料の場合、それに先行する石造物に寄り添うようにみられたり、後世の石造物群が周囲に取り巻く遺跡も多い。また、板碑を含む石造物群が特定の仏菩薩を安置する寺院・小堂周辺に位置する場合や、そのような施設が残されていないものの、伝承から何らかの仏教施設が存在していたと想定できる空間にみられる類例が非常に多く確認できる。

南北朝期に続く資料として、佐伯市弥生町床木板碑(1475年銘)が出現するまで、80年以上の板碑空白期が存在する。もちろんこれは紀年銘板碑に限定するものであり、紀年銘のみられない板碑の中に、この空白期に製作された資料が存在したとも限らない。しかし、存在しているとしても、極めて少数であるものと考えられる。また、個々の板碑の造立形態も異なり、近世墓地のはじまりともいえる群集造立の形態をとるものも見られ、豊後大野市三重町大辻山板碑群・豊後大野市三重町回春庵板碑群・豊後大野市三重町下津留板碑群のように板碑群が墓地景観を形成し、また、これらの板碑群が半径2km以内に存在するよ

うに、ある特定の工人集団が存在し、また、その工人集団に付託した造立主体が積極的に石造物造顕に取り組んだ様子が窺え、他地域との間には大きな地域格差が認められる。

以下では、個々の資料についてその概要に触れてみたい。

1.永平寺跡1号板碑(表3-1　図12-1　図33-1)

永平寺跡とされる小堂周辺に中世後半の五輪塔群とともに板碑が2基並べて立てられており、そのうちの1基である。石材は、硬質の安山岩質で豊前・豊後において非常にめずらしいものである。調整は正面・側面が丁寧に仕上げられているものの、背面は粗い。梵字種子は薬研彫りされ、また、銘文も比較的大きく陰刻されているが、剥落が著しく、紀年銘部分に関しては現在では確認できない。そのため、日名子太郎の判読に従いたい(日名子太郎1940)。山型頂部は後方に位置し、前面両側に稜をもたせ、三角錐状に頂部に延びる。二条切込みは断面三角形だが彫りが小さく弱い。額部は前方に突出させるが、突出度は弱い。基部に関しては、前方および右側面に大きく突出させており、整形時の彫り残しの自然面をあらわすものと解釈できる。額部前面・碑身前面に関してはわずかに膨らませている。

2.永平寺跡2号板碑(表3-2　図12-2　図33-2)

永平寺跡とされる小堂周辺に中世後半の五輪塔群とともに板碑が2基並べて立てられており、そのうちの1基である。調整は、長年の風雨にさらされたせいか、器面の剥落が著しく、中央の折損箇所下部の碑面のみ丁寧に調整されているのがわかるのみで、そのほかは明らかでない。梵字種子は雄大に薬研彫りされ、また、銘文も比較的大きく陰刻されている。特に、両側面にも銘文がみられ、正面の銘文に関しては、大きく彫りも深い。山型は三角尖頭状に尖り、頂部は後方に位置し、前面両側は稜をもたず丸く仕上げている。二条切込みは断面三角形で彫りが深い。額部は前方に突出させ、基部も前方に突出させているが、額部に関しては突出が弱い。額部前面・碑身前面・基部前面ともわずかに膨らませている。

3.宝八幡宮板碑(表3-3　図12-3　図33-3)

宝八幡宮参道から少し入った一画に、中世の宝塔・国東塔・五輪塔・自然石板碑などが10～15基集積されており、そのうちの1基である。調整は正面・側面が丁寧に仕上げられているものの、背面は粗い。山型頂部は後方に位置し、前面両側は稜をもたせ、三角錐状に頂部に延びる。額部は前方に突出させ、前面両側を面取りしている。額部の二条切込みは断面三角形だが彫りが小さく弱い。額部前面には梵字種子が薬研彫りされているが、彫

りは弱い。碑面上端に五地蔵をあらわす梵字種子を彫るが、これについても彫りは小さく弱い。また、その下部には五輪四方門の梵字種子を墨書している。このほかに、左側面にも墨書による紀年銘がみられる。基部に関しては埋設されており、突出部をもつものか明らかでない。

4.神家板碑(表 3-4　図 12-4　図 33-4)

神氏邸の庭に移設されたものであり、旧在地は豊後高田市梅の木とも一畑影平とも伝えられている。調整は山型から碑身正面にかけて丁寧に仕上げられているが、側面はやや粗く、背面に至っては粗いままの仕上げである。また、整形も全体的に雑で均質な造りではない。梵字種子は薬研彫りを意識しているものの、彫りが雑であり、バランスも良くない。また、銘文も比較的大きく陰刻されているが、これについても雑な彫りである。山型は三角尖頭状に尖り、頂部は中央よりやや後方に位置する。二条切込みは断面三角形で彫りが深い。額部は大きく前方に突出させているが、基部に関しては自然石の台石にコンクリートで固定している。

5.神和園板碑(表 3-5　図 12-5　図 33-5)

温泉旅館である神和園玄関前の庭園内に立てられているが、別府市朝日馬場から移されたものと伝えられている。調整は正面・山型・側面・背面とも丁寧に仕上げられている。山型は中央付近に頂部をもつ四角錐状を呈するが、少し稜をもつ。山型下部の額部のみ帯状に前方に突出させており、その中央に彫りの粗い 1 条の切込みを彫っている。額部側面はこの額部の上下端の位置と正面切込みの連続位置にそれぞれ切込みを彫り、側面では合計 3 条の切込みが確認できる。整形は全体的に各面を膨らませた印象を受け、正面・背面も膨らませている。碑面の梵字種子は薬研彫りではなく、彫りも粗い。梵字種子下の銘文もきわめて大きく雑に彫られている。また、左側面にも陰刻の銘文が見られるが、これについては比較的丁寧な彫りである。

6.吉祥寺板碑(表 3-6　図 12-6　図 33-6)

吉祥寺跡とされる集会所付近の吉祥寺墓地内に存在する。紀年銘が後刻と考えられる戦国期の無縫塔・宝篋印塔のほかに、扁平な割石を積み上げた集石の上に五輪塔約 10 基、板碑 1 基、近世墓碑数基とともに立てられている。調整は正面・側面が丁寧に仕上げられているものの、背面は粗い。山型頂部は風化が著しく欠失しているが、前面から背面に至る稜線をもち、前面は額部と同じ平面形で仕上げている。額部には円形の陽刻がみられ、この円形内に卍を陰刻している。銘文は比較的大きく陰刻されている。基部はわずかに前方

に突出させる痕跡を残している。碑身は方形に整形された台石に枘穴を穿ち、差し込まれている。

7.本篠板碑(表 3-7　図 13-7　図 33-7)

水田中の一画に南北朝期の板碑や石仏を納めた石殿 2 基とともに立てられている。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い。碑面上部に見られる梵字種子は雄大に薬研彫りされ、その下部に銘文もみられるが、大きく陰刻されている。山型は低く宝珠状のカーブをもち、秀麗な流線形に仕上げられ、頂部は丸い。山型部直下の二条切込みは非常にしっかりした断面三角形を呈する。前面両端に面取りを施す額部は大きく丸く前方に突出させている。碑身は前面をわずかに膨らませ、特に上端部では前屈み状に整形されている。また、基部の突出は地中下にあるものか、確認できない。

8.普門坊跡板碑(表 3-8　図 13-8　図 33-8)

普門坊跡と伝えられる丘陵斜面の平坦地に単独で立てられている。周辺には中世の五輪塔残欠が数点散乱している。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い。山型頂部が後方に位置する三角尖頭状を呈する。額部二条切込みも断面三角形でしっかりしている。２条の陰刻円圏に囲まれた中に梵字種子が大きく薬研彫りされ、梵字種子下には銘文が比較的大きく丁寧に陰刻されている。薬研彫りされた梵字種子内、円圏内および銘文内には墨を入れている。基部は前方に突出しているが、整形は粗い。

9.地蔵堂板碑(表 3-9　図 13-9)

地蔵堂の境内地に戦国期～近世初頭の宝塔とともに並んで立てられている。調整は正面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、側面はやや粗く、背面も粗く仕上げられている。整形もいびつである。山型頂部は後方に位置する三角尖頭状を呈する。額部二条切込みも断面三角形でしっかりしている。碑面は剥離が著しく、現在では梵字種子・銘文とも全く確認できない。薬研彫りされた梵字種子が存在していたならば、その痕跡が確認できるであろうが、全く確認できないため、梵字種子は墨書であったかもしれない。銘文は、『山香町誌』によれば、「永和四年八月　時正右迎先考」とある(山香町誌刊行会 1982)。基部は前方に突出しているが、整形は粗く、また磨滅も著しい。

10.妙善坊 1 号板碑(表 3-10　図 13-10　図 33-10)

妙善坊跡と伝えられる雑木林裏に五輪塔・宝塔・板碑などからなる戦国期の墓地が営まれており、その墓地中に紀年銘の残る板碑が 2 基みられるが、そのうちの 1 基である。調

整は正面が丁寧に仕上げられているものの、右面はやや粗く、左面・背面も粗く仕上げられている。山型は頂部が中央に位置する四角錐状を呈している。額部はごくわずかに前方に突出させ、額部二条切込みは断面三角形だがバランスは悪い。碑面の銘文は、比較的小さい陰刻で、梵字種子などは碑面に確認できない。碑身は方形に整形された台石に枘穴を穿ち、差し込まれている。

11.妙善坊 2 号板碑(表 3-11　図 13-11　図 33-11)

妙善坊跡と伝えられる雑木林裏に五輪塔・宝塔・板碑などからなる戦国期の墓地が営まれており、その墓地中に紀年銘の残る板碑が 2 基みられるが、そのうちの 1 基である。調整は正面・上面・側面前半分が丁寧に仕上げられているものの、側面後半部・背面・基部前面は粗く仕上げられている。山型頂部は裁頭角錐状を呈し、頂部平坦面は後ろ下がりの形態をもつ。額部は前方に突出させ、額部二条切込みは見られない。碑面の銘文は、比較的小さい陰刻で、上端に小さい梵字種子が陰刻されている。基部も前方に大きく突出させ、他の板碑が土中に埋設するか、あるいは台石上に枘穴で固定するかのどちらかであるのに対し、本資料は据え置くために平坦に加工している特徴をもつ。

12.東光寺墓地板碑(表 3-12　図 13-12　図 33-12)

東光寺歴代住職墓地中にみられるが、他の墓石はいずれも近世のものである。調整は正面・側面・上面が丁寧に仕上げられているものの、背面はやや粗く仕上げられている。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもち、後方に向かい高く仕上げている。山型前面は額部と同じ平面形で仕上げており、その中央に縦線の陰刻が見られる。額部はわずかに突出させている。碑面上端には梵字種子が陰刻されているが、彫りが細く弱い。梵字種子下には半円形の浅い彫凹めが見られ、この彫凹め内に割付線と思われる線刻を引き、銘文を刻んでいる。この半円形の彫凹め下にも銘文が刻まれているが、細く弱い。

13.牧峯神社旧在板碑(表 3-13　図 14-13　図 33-13)

かつては牧峯神社にあったとされるものであり(望月友善 1975)、現在は、牧峯神社に隣接する願成就寺本堂裏に移されている。調整は正面・側面が丁寧に仕上げられているものの、背面は粗く仕上げられている。碑面中央において折損し、その上部の半分が欠失しているが、山型は頂部が後方に位置する三角尖頭状を呈するものと考えられる。額部は前方に突出させ、二条切込みは断面三角形でしっかりしている。梵字種子は大きく薬研彫りされ、二条切込み内および梵字種子内には墨を入れている。碑身は上方に向かい、わずかに前屈みとなる。

14.願成就寺板碑(表 3-14　図 14-14　図 33-14)

願成就寺本堂裏に立てられているものであり、牧峯神社旧在板碑の近くに位置する。現在は紀年銘が確認できないが、日名子太郎の指摘する紀年銘板碑が当資料以外には考えられないことから、ここにおいて紹介する(日名子太郎 1940)。調整は正面が丁寧に仕上げられているものの、背面・側面は粗い。山型は頂部が後方に位置する三角尖頭状を呈するものと考えられる。額部は前方に突出させ、二条切込みは断面三角形でしっかりしている。梵字種子は薬研彫りされ、二条切込み内および梵字種子内には墨を入れている。梵字種子下には 4 行にわたり墨書銘が確認できるが、現在ではほとんど判読できない。

15.庵の迫板碑(表 3-15　図 14-15　図 34-15)

丘陵斜面の雑木林に鎌倉～南北朝期の板碑 3 基が並んで立てられているが、そのうちの 1 基である。調整は山型から額部前面、碑面は丁寧に仕上げられているが、背面・側面は粗いままの仕上げである。また、整形はいびつで、バランスも悪い。碑身は前屈みに整形されている。正面に陰刻による縦線を引く二連板碑であり、各碑面に山型を造るが、背面には陰刻による縦線がみられない。各碑面の梵字種子および銘文は墨書である。両側の額部前面にア(胎蔵界大日)の梵字種子を小さく、碑面には右側にマン(文殊菩薩)、左側にキリーク(阿弥陀如来)を大きくそれぞれ墨書している。両側の銘文は墨書であり、現在はその存在は確認できるものの、ほとんどが判読できない。二条切込みは断面三角形でしっかりしている。各面とも山型頂部は三角尖頭状に尖り、頂部は中央部よりやや後方にあるものと考えられる。額部・基部ともおおきく前方に突出させている。

16.其の田 1 号板碑(表 3-16　図 14-16　図 34-16)

富貴寺よりやや下った狭隘な谷部を利用した水田内に 2 号板碑とともに立てられていたが、近年、蕗川の河川改修により近接地に移されている。移設に伴う発掘調査により、周辺地から中世の集石遺構や墓が発見されている。調整は山型から碑身正面・側面は丁寧に仕上げられているが、わずかに膨らませている背面は粗いままの仕上げである。梵字種子は比較的大きく薬研彫りされており、銘文は左下に陰刻されている。山型は照屋根状の曲線をもち、頂部は三角尖頭状に尖り、後方に位置する。二条切込みは断面三角形だが、やや彫りが弱い。基部に関しては土中に位置するが、移設の際の発掘調査により、台石の枘により填め込まれていることが確認された。

17.其の田 2 号板碑(表 3-17　図 14-17　図 34-17)

富貴寺よりやや下った狭隘な谷部を利用した水田内に1号板碑とともに立てられていたが、近年、蕗川の河川改修により近接地に移されている。移設に伴う発掘調査により、周辺地から中世の集石遺構や墓が発見されている。調整は山型から碑身正面・側面は丁寧に仕上げられているが、わずかに膨らませている背面は粗いままの仕上げである。碑身はうすく、前方に緩やかにカーブさせている。梵字種子は比較的大きく薬研彫りされており、銘文は中央及び左下に陰刻されている。山型は照屋根状の曲線をもち、頂部は三角尖頭状に尖り、後方に位置する。二条切込みは断面三角形だが、やや彫りが弱い。基部に関しては土中に位置するが、移設の際の発掘調査により、前方の突出や台石の存在は確認できなかった。

18.平野園1号板碑(表3-18　図14-18　図34-18)

丘陵斜面の雑木林に南北朝～戦国期の板碑・五輪塔群が点在しているが、そのうちの1基である。宇佐風土記の丘歴史民俗資料館の調査において、当該資料のほかに2基の板碑に紀年銘を確認しているが(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1986)、現地調査の結果、図化できるのは当資料のみであった。調整は山型から額部前面・碑面は丁寧に仕上げられているが、背面・側面は粗い仕上げのままである。梵字種子は大きくに薬研彫りされており、銘文は中央及び左下に陰刻されている。山型は照屋根状の曲線をもち、三角尖頭状の頂部は、後方に位置する。大きく前方に突出する額部前面は丸く膨らませており、二条切込みは断面三角形だが、やや彫りが弱い。基部は前方に突出させている。

19.富貴寺板碑(表3-19　図14-19　図34-19)

富貴寺参道石段横に石殿・石幢・板碑など中世の石造物が集積され、整然と並べて立てられており、原位置を保つものとは思われない。調整・整形は各面とも丁寧に仕上げられている。山型から額部にかけて磨滅が著しく、頂部の形態や額部二条切込みの様相も明らかでない。梵字種子は比較的大きく薬研彫りされ、中に墨を入れている。また、銘文も比較的大きく陰刻されている。基部に関してはわずかに前方に突出させているものの、調整は粗い。

20.梅遊寺1号板碑(表3-20　図15-20　図34-20)

梅遊寺境内の一画に南北朝期～近代の板碑群・庚申塔・石仏などとともに整然と並べて立てられており、原位置を保つものとは思われない。調整は山型から碑身正面は丁寧に仕上げられているが、側面はやや粗く、背面に至っては粗い仕上げのままである。また、整形も全体的に雑で均質な造りではない。梵字種子は雄大に薬研彫りされ、中に墨を入れて

いる。また、銘文も比較的大きく陰刻されている。山型頂部は欠損しているものの、三角尖頭状に尖り、頂部は後方に位置する。二条切込みは断面三角形で彫りが深い。額部は大きく前方に突出させているが、基部の突出に関しては地表下に位置するものか、明らかでない。背面はわずかに膨らませているほか、額部前面・碑身前面もわずかに膨らませており、額部両側端は面取りが施されている。

21.梅遊寺 2 号板碑(表 3-21　図 15-21　図 34-21)

梅遊寺境内の一画に南北朝期～近代の板碑群・庚申塔・石仏などとともに整然と並べて立てられており、原位置を保つものとは思われない。隣接して同様な板碑がみられるが、これについては、梵字種子は墨書により記されている。調整については山型から碑身正面は丁寧に仕上げられているが､側面はやや粗く､背面に至っては粗いままの仕上げである。十三仏をあらわす梵字種子は薬研彫りされ、中に墨を入れているが、梵字種子の多さから碑面横幅が著しく広くなっている。銘文も比較的小さく梵字種子下両端に陰刻されているが、その内側に墨書による銘文が確認できるものの、判読できない。山型頂部は後方にくだる稜をわずかにもつが、ほぼ、頂部が後方に位置する三角尖頭状に尖っている。二条切込みは断面三角形であるが、彫りが弱く細い。額部は前方に突出させているが、基部に関してはわずかに前方に突出させているだけである。この碑身は台石に載せられているが、枘の存在等は確認できない。

22.大曲板碑(表 3-22　図 15-22　図 34-22)

廃絶した屋敷地の斜面部に単独で置かれていたが、現在はその所在が不明である。調整は正面・上面・側面が丁寧に仕上げられている。山型頂部は稜線をもち、頂部平坦面は後ろ下がりの形態をもつ。額部は前方に突出させ、額部二条切込みは細い陰刻線であり、山型部から額部の前面にかけて割付と思われる細線陰刻がみられる｡碑面の銘文は陰刻され、額部に梵字種子が陰刻されている。基部もわずかに前方に突出させ、底面は据え置くために平坦に加工している。

23.寺ノ上 1 号板碑(表 3-23　図 15-23　図 34-23)

妙覚寺裏山の平野を見下ろす丘陵頂部に戦国期に属する板碑形式の墓碑が 10 数基存在するが、その中の 1 基である。整形は歪で均整がとれていない。調整は背面も含め、すべての面が丁寧に仕上げられている。山型頂部は三角尖頭状に尖り頂部は後方に位置する。額部の二条切込みは、断面三角であるが、彫りは弱い。基部に関しては大きく前方に突出させている。碑面は若干くぼませており、背面を膨らませているほか、額部前面もわずか

に膨らませている。梵字種子・銘文は墨書であるが、現在はその存在がわずかに確認できるのみで、判読できない。平成 4 年に行われた大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館の調査では、梵字種子・紀年銘が判読されており、本稿ではそれに従いたい(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993)。

24.寺ノ上 2 号板碑(表 3-24　図 15-24　図 34-24)

妙覚寺裏山の平野を見下ろす丘陵頂部に戦国期に属する板碑形式の墓碑が 10 数基存在するが、その中の 1 基である。整形は歪で、均整がとれていない。調整は山型・額部・碑面のほか、側面前部が丁寧に仕上げられている。これに対し、側面後部・背面は粗い仕上げである。山型頂部は稜をわずかにもつが、稜は中央よりやや後方に位置し、三角尖頭状に尖っている。額部の二条切込みは、若干離れた断面三角であり、彫りは弱い。基部に関しては前方に突出させている。碑面は方形彫凹めをもち、その中、上方中央に丸く彫られた梵字種子が見られ、その下方に銘文が陰刻されている。背面を膨らませているほか、山型・額部・基部前面もわずかに膨らませている。

25.寺ノ上 3 号板碑(表 3-25　図 15-25　図 34-25)

妙覚寺裏山の平野を見下ろす丘陵頂部に戦国期に属する板碑形式の墓碑が 10 数基存在するが、その中の 1 基である。調整は山型・額部・碑面が丁寧に仕上げられているものの、側面・背面は少し粗い仕上げである。山型頂部は頂部が中央よりやや後方に位置し、三角尖頭状に尖っている。額部はハの字状に整形されており、二条切込みは見られない。基部に関しては大きく前方に突出させている。碑面は並立する 2 箇所の方形彫凹めをもち、各面に梵字種子・銘文が陰刻されているものの薬研彫りではない。背面を膨らませているほか、山型・額部・碑面下部・基部の各前面もわずかに膨らませている。

26.寺ノ上 4 号板碑(表 3-26　図 15-26　図 34-26)

妙覚寺裏山の平野を見下ろす丘陵頂部に戦国期に属する板碑形式の墓碑が 10 数基存在するが、その中の 1 基である。整形はきわめて歪で、均整がとれていない。調整は背面・基部が粗い仕上げであるが、その他は丁寧に仕上げられている。山型頂部は中央よりやや後方に位置する三角尖頭状を呈するが、正面観はやや丸い。額部前面側縁は面取りされており、正面には蕨手状の陰刻が左右対称に 2 条みられる。額部には上端に横 1 条の細い切込みがみられるのみで、これは側面には至らない。基部に関しては前方に突出させているほか、側面にもわずかに突出させている。碑面は方形彫凹めをもち、その中に墨を入れた梵字種子・銘文が小さく陰刻されている。また、碑面方形彫凹め外左側にも墨書がみられ

るが、その存在がわずかに確認できるのみで判読できない。 背面はわずかに膨らませているほか、額部前面もわずかに膨らませている。

27.持地庵板碑(表 3-27　図 16-27　図 34-27)

持地庵と呼ばれる小堂裏の丘陵斜面に狭い墓地を造成し、その中に戦国期の宝塔・無縫塔・五輪塔・板碑を立てている。整形はきわめて歪で、均整がとれていない。調整については山型から碑身正面および側面は丁寧に仕上げられているが、背面は粗いままの仕上げである。山型頂部は後方に位置し、三角尖頭状に尖る。額部の二条切込みは離れて彫られ、断面が丸く、彫りも弱い。この二条切込みは、側面には至らず、前面において二条切込み間にあたる部分を、側面においては帯状に突出させている。基部に関しては帯状に前方に突出させているが、整形は雑である。碑面は 2 段の方形彫凹めからなり、中に細く小さい陰刻の銘文が確認できるが、梵字種子は見られない。背面はわずかに膨らませているほか、額部前面・基部前面ともわずかに膨らませている。

28.安養寺板碑(表 4-28　図 16-28　図 35-28)

安養寺境内の小堂前に石幢とともに立てられている。調整は正面・山型上面・側面が丁寧に仕上げられているが、背面は一部調整されているものの自然石の自然面を保つ部分が多い。山型頂部は自然面に近く、丸く仕上げられている。碑面には正面平坦の五輪塔形を陽刻し、各部にキャ・カ・ラ・バ・アの梵字種子を小さく刻んでいる。また、水輪部には梵字種子を挟み両側に細線陰刻の銘文を刻んでいる。

29.大応寺板碑(表 4-29　図 16-29　図 35-29)

大応寺参道横に単独で立てられている。調整は正面・裏面・側面・山型部とも丁寧に仕上げられている。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつ。碑面には正面平坦の五輪塔形を陽刻し、水輪部に細線陰刻の銘文を刻んでいる。地輪下の基部は前方に突出させている。

30.オト様 1 号板碑(表 4-30　図 16-30　図 35-30)

長安寺参道横に数基の中世末～近世前半の墓碑が集められている場所がみられるが、その中の 1 基である。調整は各面とも丁寧に仕上げられている。山型は頂部に稜をもつが、後方では背面に向かい切り落とす形態をもつ。額部の突出はわずかにみられる。碑面上方中央に梵字種子が比較的大きく彫られているが、その断面は三角形および半円形の箇所がみられ、一律でない。また、銘文も比較的大きく彫られている。

31.オト様2号板碑(表4-31　図16-31　図35-31)

長安寺参道横に数基の中世末～近世前半の墓碑が集められている場所がみられるが、その中の1基である。調整は正面・側面とも丁寧に仕上げられているが、背面のみやや粗い。山型は頂部に稜をもつが、後方では背面に向かい切り落とす形態をもつ。額部の突出はわずかにみられる。碑面上方中央に梵字種子が弱い薬研彫りで彫られている。また、銘文も比較的大きく彫られている。

32.オト様3号板碑(表4-32　図16-32　図35-32)

長安寺参道横に数基の中世末～近世前半の墓碑が集められている場所がみられるが、その中の1基である。調整は正面・側面とも丁寧に仕上げられているが、背面のみやや粗い。碑身上半部は欠失しており、その実態は明らかでない。碑身中央を方形に彫り凹め、彫凹め下に蓮華座を陽刻している。また蓮華座下部付近で枘を造っているが、台石は失われている。銘文は方形彫凹め内に小さく陰刻されている。

33.財前家墓地板碑(表4-33　図16-33　図35-33)

宝塔・板碑をはじめとした南北朝～戦国期の石造物群からなる財前家墓地前の石垣に立てられている。碑身中央において折損し、上部の部材は失われているが、下部に紀年銘が確認できるため、ここに紹介する。調整は正面・側面が丁寧に仕上げられているものの、背面は丸く粗い仕上げである。碑身下部中央には銘文が比較的大きく陰刻され、碑面はかなり丸く仕上げている。前方へ突出させている基部はきれいに整形されており、基部の下部には、台石に填め込むための枘が丁寧に整形されているが、台石も失われている。

34.尾迫板碑(表4-34　図17-34　図35-34)

丘陵斜面の一画に平坦地が造成され、中世の板碑・五輪塔群からなる墓地が営まれているが、この最奥部に立てられている板碑である。山型から正面・側面及び背面上部は丁寧に仕上げられているが、背面下部は粗い仕上げのままである。梵字種子は雄大に薬研彫りされ、中に墨を入れている。また、梵字種子下中央の銘文は陰刻され、中に墨を入れている。この両側にも2行ずつの銘文が墨書されているが、現在では判読できない。山型頂部は低いが、三角尖頭状に尖り、頂部は後方に位置する。二条切込みは断面三角形でしっかりしている。前面を丸く膨らませる額部は大きく前方に突出させており、額部両側端は面取りが施されているが、この面取りの稜線は山型まで達している。基部の突出に関しては土中に位置するものか、明らかでない。

35.小俣道板碑(表 4-35　図 17-35　図 35-35)

丘陵裾部に走る車道横に中世の板碑・五輪塔群が集中してみられるが、その中の１基である。山型から碑身正面は丁寧に仕上げられているが、側面はやや粗く、背面に至っては粗いままの仕上げである。また、整形も全体的に雑で均質な造りではない。梵字種子は大きく薬研彫りされているものの、歪であり、中に墨を入れている。中央の銘文は陰刻されており、その横にも墨書銘が確認できるが、ほとんど消滅している。山型は頂部のみ三角尖頭状に尖り、特異な様相をもつ。二条切込みは断面三角形で彫りが深い。額部は大きく前方に突出させており、両側端は丸く面取りが施されている。基部に関しても前方に突出させている。

36.諸田越板碑(表 4-36　図 17-36　図 35-36)

財前家墓地よりやや下った道の分岐点に板碑・石祠・一石五輪塔・五輪塔などとともに並んで立てられている。調整は正面・側面が丁寧に仕上げられているものの、背面は丸く粗い仕上げである。山型は低く、照屋根状に頂部に延び、頂部は後方に位置する三角尖頭状を呈する。額部二条切込みは断面三角形だが、やや彫りが弱い。大きく前方に突出する額部の前面両側には、面取りが見られる。梵字種子は大きく薬研彫りされ、梵字種子下には銘文が比較的大きく陰刻されている。碑面は丸く仕上げ、また、上方でやや前屈みになる。基部はわずかに前方へ突出させている箇所が残り、台石に枘穴を穿ち、碑身を差し込んでいる。

37.辻堂ケ鼻板碑(表 4-37　図 17-37　図 35-37)

谷状地形にある集落に突出した丘陵の先端に小堂を建て、その中に納められている。正面・側面とも調整は丁寧であるが、背面については板碑がようやく納まる小堂の大きさゆえ、その厚さ調整は明らかでない。山型は前方から後方に至る稜をもつ。この山型・額部とも前面を丸く仕上げ、額部中央には月輪を彫り沈め梵字を陽刻している。碑身は舟形に彫り凹め、その中に蓮華座にのり、胸の前で宝珠を両手でもつ地蔵を陽刻している。銘文はこの舟形彫り凹めの外側にあたる左右の碑面に大きく陰刻している。

38.十王堂板碑(表 4-38　図 17-38　図 35-38)

調整は正面が丁寧に仕上げられているものの、側面後方を面取りし粗く仕上げ、また、背面に関しては粗いままである。山型頂部は後方に下りながら延びる稜をわずかにもつが、ほぼ、頂部が中央よりやや後方に位置する三角尖頭状を呈する。額部は前方に突出させ、前面両側を面取りしているが、この面取りは二条切込みから山型部下部まで延びる。額部

二条切込みは断面三角形であるが、彫りがやや小さい。碑面はきわめて長く、ほっそりとした印象をもつ。梵字種子は上端に大きく薬研彫りされ、梵字種子とは大きく離れ、碑面下端に銘文が比較的大きく陰刻されている。基部は前方に突出させ、自然石の台石上に置かれているが、枘穴を穿ち、差し込んでいるものである。

39.川原 1 号板碑(表 4-39　図 19-39　図 35-39)

高台上の畑地内に雑木・竹藪が繁る一画があり、鎌倉～戦国期の板碑・五輪塔からなる石造物群がみられるが、その中の 1 基である。調整は山型から碑身正面・側面は丁寧に仕上げられているが、背面は粗いままの仕上げである。梵字種子はきわめて雄大に彫られているが、薬研彫りではなく断面を丸く仕上げている。中でも、上端の空点は、菱形状の彫り凹めを組み合わせ、装飾的に仕上げている。銘文も比較的大きく陰刻されており、梵字種子とともに中に墨を入れている。山型は低いが、三角尖頭状に尖り、頂部は中央よりやや後方に位置する。二条切込みは断面三角形でしっかりしており、中に墨を入れている。額部は前方に突出させており、額部前面および碑面は丸く仕上げている。碑身の銘文の下半は埋もれているため、基部がどのようになっているのかは明らかでない。

40.川原 2 号板碑(表 4-40　図 18-40　図 35-40)

高台上の畑地内に雑木・竹藪が繁る一画があり、鎌倉～戦国期の板碑・五輪塔からなる石造物群が見られるが、その中の 1 基である。調整は山型から碑身正面・側面は丁寧に仕上げられているが、背面は粗いままの仕上げである。梵字種子は雄大に彫られているが、薬研彫りではなく断面を丸く仕上げており、装飾性を意識したせいか、空点を丸く、また、ウ点を波状に仕上げている。梵字種子内には墨を入れている。銘文も比較的大きく陰刻されている。山型は低いが、三角尖頭状に尖り、頂部は中央よりやや後方に位置し、わずかに稜線が後方に延びる。二条切込みは断面三角形でしっかりしている。額部は前方に突出させている。碑身の銘文の下端は埋もれているため、基部がどのようになっているのかは明らかでない。碑身は正面観がわずかに中央で膨らんだ形態をもつ。

41.鳴 1 号板碑(表 4-41　図 19-41　図 35-41)

平野を望む丘の先端に小さな平坦地が設けられ、中世の板碑・五輪塔をはじめ近世に及ぶ石造物群がみられるが、その中の 1 基である。山型から碑身正面側面は極めて丁寧に仕上げられており、背面にわずかに粗い面を残すのみである。梵字種子は陰刻部を 2 本にした籠字彫りであり、また、梵字種子下には蓮華座を彫り、特異な様相をもつ。銘文は陰刻であるが、現在ではほとんど判読できないため、ここでは望月友善の判読に従っておきた

い(望月友善 1975)。山型は緩やかにカーブしながら頂部に延び、三角尖頭状に尖るが、特に、下部においてカーブがきつい。頂部は中央に位置するが、わずかに稜線をもち、後方に延びる。二条切込みは断面三角形でしっかりしている。額部は前方に突出させており、前面両側端を面取りしているが、この面取りは二条切込みから山型部下部にまで及ぶ。額部・碑面部とも前方にわずかに膨らませている。碑身は比較的厚く、重厚な印象を受ける。基部突出はみられず、方形に成形された台石に枘穴を穿ち、填め込まれている。

42.鳴 2 号板碑(表 4-42　図 18-42　図 36-42)

平野を望む小丘の先端に小さな平坦地が設けられ、中世の板碑・五輪塔をはじめ近世に及ぶ石造物群が見られるが、その中の 1 基である。調整は山型から碑身正面・側面は丁寧に仕上げられているが、背面は粗いままの仕上げで、鑿痕が残る。特に、山型部背面が丁寧に調整されていることは特異であり、また、側面部に割り付け陰刻線が残り、これより背部を削ろうとしたものであろうが、未完成のまま立てられている。梵字種子は極めて大きく薬研彫りされ、中に墨を入れている。銘文も陰刻され、中に墨を入れている。山型は緩やかにカーブしながら頂部に延び、三角尖頭状に尖る。頂部は中央に位置するが、わずかに稜線をもち、後方に延びる。二条切込みは断面三角形でしっかりしている。額部は前方に大きく突出させており、前面両側端を面取りしているが、この面取りは二条切込みから山型部にまで及ぶ。碑身は丸く膨らませ、上端部では前屈みに仕上げられており、基部突出はきわめて小さい。方形台石上に碑身がみられるが、枘穴に差し込まれているものであろう。完存資料として、豊前・豊後における最大の板碑であり、秀麗である。

43.鳴 3 号板碑(表 4-43　図 18-43　図 35-43)

平野を望む丘の先端に小さな平坦地を設け、中世の板碑・五輪塔をはじめ近世に及ぶ石造物群がみられるが、その中の 1 基である。調整は山型から碑身正面・側面は丁寧に仕上げられているが、背面は粗いままの仕上げである。梵字種子は大きく薬研彫りされ、中に墨を入れている。銘文も陰刻されている。山型は低いが、緩やかにカーブしながら頂部に延び、三角尖頭状に尖る。頂部は中央に位置するが、わずかに稜線をもち、後方に延びる。二条切込みは断面三角形でしっかりしている。額部は前方に突出させており、前面両側端を面取りしているが、この面取りは二条切込みから山型部下部にまで及ぶ。碑身が比較的厚く、重厚な印象を受ける。基部も丁寧に成形された突出部をもつ。

44.堀部板碑(表 4-44　図 19-44　図 36-44)

個人の住宅の庭に置かれており、他所から移されたものと考えられる。調整は山型から

碑身正面・側面は丁寧に仕上げられているが、背面は粗いままの仕上げである。梵字種子は雄大な薬研彫りであり、中に墨を入れている。また、銘文は陰刻されている。山型はわずかにカーブしながら頂部に延び、三角尖頭状に尖るが、特に、側面観では頂部付近のカーブが強い。頂部は中央よりやや前方に位置しているが、頂部に近づくにつれ、背面を激しく前屈みに仕上げているため、頂部は背面と接している。二条切込みは断面三角形でしっかりしている。額部は前方に突出させており、額部前面および碑面・基部前面は丸く仕上げている。また、額部前面・両側端を面取りしているが、この面取りは二条切込みから山型部下部にまで及んでいる。碑面上端はわずかに前屈みの形態をもち、背面の形態とあわせて、全体に前屈みの印象を受ける。基部も丁寧に成形された突出部をもつ。

45.左荘板碑(表 4-45　図 19-45　図 36-45)

山中の緩斜面にある林道横に単独で立てられている表裏面に碑面をもつ両面板碑である。両面板碑であるため、すべての面を丁寧に仕上げている。碑面上部が折損しており、また、額部から山型部にかけて風化が著しく、山型部や二条切込み部について残りがよいとはいえない。しかし、山型頂部は三角尖頭状を呈し、二条切込みはやや弱いが断面三角形を呈することが想定できる。両面の梵字種子は大きく薬研彫りされ、中に墨を入れている。一面の梵字種子下には銘文が比較的大きく陰刻されている。

46.野長谷板碑(表 4-46　図 20-46　図 36-46)

現在は車道から少し入った斜面上の小さい平坦地に板碑1基と10基に満たない五輪塔群とともに立てられているが、当資料に関しては、農道建設に伴い移転させられたものと伝えられている。調整は山型から碑身正面・側面は丁寧に仕上げられており、背面に少し粗い面を残すのみである。梵字種子は大きな薬研彫りであり、中に墨を入れる。銘文は陰刻されているが、劣化が著しい。山型は低いが、大きくカーブしながら頂部に延び丸く尖頭状に尖り、頂部は後方に位置する。二条切込みは小さいが断面三角形でしっかりしている。額部は前方に突出させて、両端を面取りしている。額部・碑面部とも前方にわずかに膨らませている。碑身上部は前方にカーブさせ前屈みの印象を受ける。基部突出はしっかりと作り出され、自然石の台石に枘穴を穿ち填め込まれている。

47.竹ノ上板碑(表 4-47　図 19-47　図 36-47)

山中緩斜面を走る車道横の一段上の自然石上に単独で立てられており、周辺にはその他の石造物は見られない。調整は山型から碑身正面・側面は丁寧に仕上げられており、背面に粗い面を残すのみである。梵字種子は大きな薬研彫りであり、中に墨を入れる。銘文は

墨書であり、現在では碑面中央部の紀年銘部分が判読できるのみで、両端の銘文は確認できるものの、ほとんど消えかかっている。山型は緩やかにカーブしながら頂部に延び、三角尖頭状に尖り、頂部は後方に位置する。二条切込みは断面三角形でしっかりしており、切込み内にも墨を入れている。額部は前方に突出させており、額部・碑面部とも前方にわずかに膨らませている。碑身上部は前方にカーブさせ前屈みの印象を受ける。基部突出はしっかりと作り出され、自然石の台石に枘穴を穿ち填め込まれている。

48.岡板碑(表 4-48　図 20-48　図 36-48)

山中の山道に隣接し、谷部を見下ろす急斜面に立てられている。調整は正面が丁寧に仕上げられているものの、側面はやや丁寧に、背面は粗く仕上げられている。山型は低いが、緩やかにカーブしながら頂部に延び、三角尖頭状に尖り、頂部は中央に位置する。額部は前方に突出させ、前面両側を面取りしているが、この面取りは二条切込みから山型部下部まで延びる。額部二条切込みは断面三角形であるが、碑身の大きさに比較すれば彫りがやや小さい。額部・碑面部とも前方にわずかに膨らませている。梵字種子は上端に大きく薬研彫りされ、梵字種子下に銘文が比較的大きく陰刻され、それぞれの中には墨を入れている。基部は丁寧に成形し、前方に突出させている。

49.丸小野寺 1 号板碑(表 4-49　図 20-49　図 36-49)

丸小野寺講堂横に 2 号板碑とともに並んで立てられている。調整は正面が丁寧に仕上げられているものの、背面・側面は粗く仕上げられている。山型頂部は後方に下りながら延びる稜をわずかにもつが、頂部が中央よりやや後方に位置する三角尖頭状を呈する。額部は前方に突出させ、前面両側を面取りしているが、この面取りは二条切込みから山型部下部まで延びる。額部二条切込みは断面三角形であったものと思われるが、風化が著しい。碑身の銘文は、碑身中央の折損や、風化に起因し、現在ではほとんど確認できない。ここでは望月友善の判読に従っておく(望月友善 1975)。碑身は上方に向かい、前屈みとなる。基部は前方に突出させ、整形されている台石上に置かれているが、枘穴を穿ち、差し込んでいるものであろう。

50.丸小野寺 2 号板碑(表 4-50　図 21-50　図 36-50)

丸小野寺講堂横に 1 号板碑とともに並んで立てられている。調整は正面が丁寧に仕上げられているものの、背面は粗く仕上げられている。山型は風化が著しいが、頂部が後方に位置する三角尖頭状を呈するものと考えられる。額部は前方に突出させ、前面両側を面取りしている。額部二条切込みは断面三角形でしっかりしている。碑身の銘文は、碑身中央

の折損や、風化に起因し、現在ではほとんど確認できない。ここでは望月友善の判読に従いたい(望月友善 1975)。碑身は上方に向かい、前屈みとなる。基部は前方に突出させ、土中に埋められているが、台石上に置かれているものか明らかでない。風化箇所が多いが、細部の特徴として、1 号板碑と類似する部位が非常に多い。

51.護聖寺 1 号板碑(表 4-51　図 21-51　図 36-51)

護聖寺境内の竹林内に 2 号板碑とともに並んで立てられている。調整は正面が丁寧に仕上げられているものの、側面はやや丁寧に、背面は粗く仕上げられている。山型頂部は欠損しているものの、頂部が中央よりやや後方に位置する三角尖頭状に尖っているものと想定できる。額部二条切込みも断面三角形で非常にしっかりしている。額部前面側縁は面取りされており、山型部・額部は、その下部の碑身と別石で造られ、枘により組み合わせられている。梵字は大きく薬研彫りされ、梵字下には銘文が比較的大きく陰刻されている。薬研彫りされた梵字種子内及び額部二条切込み内には墨を入れている。紀年銘部分は現在ではほとんど判読できないが、天沼俊一の判読にしたがいたい。基部は前面に段を付け、方形に整形されている台石に枘穴を穿ち、差し込んでいる。

52.護聖寺 2 号板碑(表 4-52　図 21-52　図 36-52)

護聖寺境内の竹林内に 1 号板碑とともに並んで立てられている。山型頂部は後方に延びる稜をわずかにもつが、ほぼ、頂部が中央よりやや後方に位置する三角尖頭状を呈する。額部二条切込みも断面三角形でしっかりしており、額部は側面観がやや前屈みの印象を受ける。梵字は大きく薬研彫りされ、梵字下には銘文が比較的大きく陰刻されている。薬研彫りされた梵字種子内及び額部二条切込み内、及び銘文内には墨を入れている。基部は前面に段を付け、整形されている台石に枘穴を穿ち、差し込んでいる。

53.柳井田板碑(表 4-53　図 21-53　図 36-53)

細い谷の入り組んだ地形に延びる細い尾根稜線上に同時代のものと思われる他の板碑 1 基とともに並んで立てられている。山型頂部は頂部が中央よりやや後方に位置する三角尖頭状に尖っている。山型から額部前面にかけての磨滅が著しく、正面二条切込みもほとんど消えているが、額部前面側線は面取りされているように観察できる。側面の二条切込みは断面三角形で非常にしっかりしている。碑身上方において折損しており、墨書からなる梵字種子がみられたとされるが(望月友善 1975)、現在では全く確認できない。銘文が比較的大きく陰刻されており、銘文内には墨を入れている。基部については、コンクリートで固められているため、明らかでない。

54.岩尾板碑(表 4-54　図 22-54　図 36-54)

朝来地区から富清地区に至る山道横の一段高い斜面上に単独で立てられている。碑身は横幅が広く、末広がりの正面観をもつ。調整は山型から碑身正面は丁寧に仕上げられているが、側面はやや粗く、背面に至っては粗いままの仕上げである。阿弥陀三尊をあらわす梵字種子は碑面いっぱいになるように雄大に薬研彫りされ、銘文も梵字種子下に比較的大きく陰刻されているが、それぞれの中に墨を入れている。山型頂部は、三角尖頭状に尖り、頂部は中央付近に位置し、若干、稜線をもち、後方に延びる。二条切込みは断面三角形でしっかりしている。額部は大きく前方に突出させており、前面両側端を面取りしているが、この面取りは二条切込みから山型下部に至る。碑身上半はほとんどまっすぐ上に延びるが、山型及び額部を前屈みに成形している。基部の突出は見られず、碑身は台石に枘穴を穿ち、差し込んで固定しているが、台石の造りは粗い。

55.八坂社板碑(表 5-55　図 22-55　図 36-55)

八坂神社境内横の参道に単独で立てられており、原位置を保つものとは思われない。調整は山型から碑身正面は丁寧に仕上げられているが、側面はやや粗く、背面に至っては粗いままの仕上げである。梵字種子は大きく薬研彫りされ、銘文も比較的大きく陰刻されているが、それぞれの中に墨を入れている。山型は緩やかにカーブしながら頂部に延び、三角尖頭状に尖る。頂部は中央よりやや後方に位置するが、若干、稜線をもち、後方に延びる。二条切込みは断面三角形で彫りが深く、中に墨を入れている。額部は前方に突出させており、前面両側端を面取りしている。碑身上半はわずかに前屈みであり、基部の突出はわずかに見られる。碑身は台石に枘穴を穿ち、差し込んで固定している。

56.岩屋堂板碑(表 5-56　図 22-56　図 37-56)

岩屋堂と呼ばれる堂舎の入口に立てられているが、周辺に近世の墓碑や無縫塔が見られる。山型から碑身正面は丁寧に仕上げられているが、側面はやや粗く、平滑に仕上げてはいる。背面も調整はやや粗い。山型頂部は欠損しているものの、ほぼ頂部が中央よりやや後方に位置する三角尖頭状を呈するものと思われる。額部は前方に突出させ、二条切込みは断面三角形である。梵字種子は大きく薬研彫りされ、銘文も比較的大きく陰刻されているが、それぞれの中に墨を入れている。一部の銘文は、陰刻でなく墨書のみであるが、現在ではほとんど判読できないほど消えている。碑身基部はコンクリートにより固められており、その様相はうかがえない。碑身は平面的であり、山型・額部は正面観を丸く仕上げている。

57.塔野板碑(表 5-57　図 22-57　図 37-57)

八坂社裏の丘陵頂部付近の斜面部に同時期の板碑とともに近接して立てられている。調整は正面・側面・背面とも丁寧に仕上げられており、背面はやや膨らませている。山型頂部は中央よりやや後方に位置する三角尖頭状を呈する。額部は前方に突出させ、前面両側を面取りしているが、この面取りは二条切込みから山型部下部まで延びる。額部二条切込みは断面三角形であったものと思われる。碑面の梵字種子は大きく薬研彫りされており、銘文は梵字種子下に小さく陰刻されている。基部も突出しているが、風化が著しい。

58.歳神社板碑(表 5-58　図 23-58　図 37-58)

護聖寺横の雑木林内に単独で立てられている。整形はきわめて端整で、均整がとれており、調整もすべての面が丁寧に仕上げられている。山型は前方から後方に至る稜をもつ。碑面には 3 段に分かれた方形彫凹めがみられ、上部 2 段の区画には 3 体ずつ地蔵立像を陽刻し、六地蔵をあらわしている。最下段の区画には 3 行にわたり、墨書銘がみられる。また方形彫凹め外側の左右端にも墨書銘がみられるが、現在では判読できない。この左側墨書銘が「弘治 2 年」銘とされるものの、判読できないが、当資料の諸要素が当該期と位置付けられるため、この年代観に従いたい(望月友善 1975)。額部突出は大きく、二条切込みもしっかりしている。基部に関しては前方に 2 段に突出させており、わずかに前面を膨らませている。

59.寺園板碑(表 5-59　図 23-59　図 37-59)

寺院跡と伝えられる寺園の小堂横に近世墓地が営まれているが、その墓地中に戦国期の五輪塔とともに当資料と同類型の板碑 2 基が立てられており、この内の 1 基である。調整は山型・額部・碑面・側面・背面とも丁寧な調整であり、背面はわずかに膨らませている。山型頂部は中央よりやや後方に位置する三角尖頭状に尖っており、やや後方に降る稜線を持っている。額部はハの字状に整形されており、二条切込みは見られない。基部に関しては大きく前方に突出させている。碑面は方形彫凹めをもち、上端に円形と円形内に新月形を彫り凹めている。その下に梵字種子を刻み、さらにその下に銘文を刻んでいるが、梵字・銘文内には墨を入れている。

60.中村板碑(表5-60　図24-60　図38-60)

住宅の庭先に同型式の板碑とともに並んで立てられている。周辺には南北朝～戦国期の五輪塔が数基確認できる。調整は背面も含めて各面丁寧に仕上げられている。梵字種子・銘文とも墨書であるが、梵字種子は雄大に、また、銘文も大きく記されている。山型頂部

は欠損しているものの、三角尖頭状に尖り、頂部は後方に位置する。二条切込みは断面三角形で彫りが深いものの、全体的に雑で均質な造りではない。額部・基部とも前方に突出させている。

61.少林寺1号板碑(表5-61　図24-61　図38-61)

少林寺本堂裏の岩窟内に同型式の板碑5基が左右壁に立てられているが、その内の一基である。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面加工は粗い。梵字種子は大きく薬研彫りされ、銘文も比較的大きく刻まれているが、碑身基部付近において折損しているため、銘文下半部の判読が困難になっている。山型頂部は風化しており、二条切込みは断面三角形である。額部・基部とも前方に突出させている。

62.少林寺2号板碑(表5-62　図24-62　図38-62)

少林寺本堂裏の岩窟内に同型式の板碑5基が左右壁に立てられているが、その内の一基である。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面加工は粗い。梵字種子は大きく薬研彫りされ、また、銘文も比較的大きく刻まれているが、碑身下部において折損しているため銘文下半部の判読が困難になっている。山型頂部は三角尖頭状に尖り、頂部は中央部よりやや後方に延びる稜線をもつ。二条切込みは断面三角形であり、上方の方が彫りが浅い。額部・基部とも前方に突出させている。

63.少林寺3号板碑(表5-63　図24-63　図38-63)

少林寺本堂裏の岩窟内に同型式の板碑5基が左右壁に立てられているが、その内の一基である。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は雑である。梵字種子は大きく薬研彫りされ、中に墨が確認できる。また、銘文も比較的大きく刻まれているが、碑身中央及び下部において2箇所折損しているため銘文の判読が困難になっている。山型頂部はその形態が窺いにくいほど風化しているが、一部に残る部分から三角尖頭状に尖るものと考えられる。二条切込みは断面三角形であり、中に墨が確認できる。額部・基部とも前方に突出させている。

64.少林寺 4 号板碑(表 5-64　図 24-64　図 38-64)

少林寺本堂裏の岩窟内に同型式の板碑 5 基が左右壁に立てられているが、その内の一基である。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗雑である。梵字種子は大きく薬研彫りされ、中に墨が確認できる。また、銘文も比較的大きく刻まれているが、碑身下部において折損しているため銘文下半部の判読が困難になっている。山型頂部は風化が著しいが、三角尖頭状に尖り、頂部は後方に位置するものと考えられる。

二条切込みは断面三角形であり、中に墨が確認できる。額部・基部とも前方に突出させている。

65.少林寺5号板碑(表5-65　図24-65　図38-65)

少林寺本堂裏の岩窟内に同型式の板碑5基が左右壁に立てられている内の一基であるが、他の板碑に比較して、これのみ若干小さい。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は雑である。梵字種子は薬研彫りされ、中に墨が確認できる。また、銘文は碑身下部において折損しているため、破損部付近の銘文の判読が困難になっている。山型頂部は破損しているが三角尖頭状に尖るものと考えられる。二条切込みは断面三角形である。額部・基部とも前方に突出させている。

66.本村建長寺跡板碑(表5-66　図25-66　図38-66)

建長寺跡と伝えられる一画に五輪塔・宝篋印塔・板碑が集積されており、その中に基部及び碑身部の残欠が立てられている。なお、石塔群中に背部が埋まった状態で存在する額部の部材が確認でき、双方の破損部の大きさが一致するため同一個体と判断した。調整は正面・両側面とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗雑である。梵字種子は大きく薬研彫りされ、中に墨を入れている。銘文は紀年銘以外は判読ができない。碑身基部付近において折損しているため銘文下端の判読が困難になっている。山型部は埋没しておりその形態は不明であるが、二条切込みは断面三角形で非常にしっかりしている。碑身上部破損面の両面には双方に長方形の枘穴が穿たれているため、破損後に補修され、組み立てられていたものと考えられる。額部・基部とも前方に突出させている。

67.畑田板碑(表5-67　図25-67　図38-67)

天満社参道の石鳥居付近に単独で存在する。上部が欠失しているものの、碑身部以下の形態的特徴から板碑以外に考えられず、ここに採り上げた。調整は正面・両側面とも丁寧に仕上げられているが、背面は雑である。梵字種子は大きく薬研彫りされ、中に墨を入れている。銘文は小さく細いため判読できない箇所も多い。基部も前方に突出させており、板碑下には台石を置いている。

68.尾平慈光庵板碑(表5-68　図25-68　図38-68)

慈光庵の小堂前に五輪塔残欠群と共に存在する。上部が欠失しているものの、碑身部以下の形態的特徴から板碑以外に考えられず、ここに採り上げた。銘文は比較的大きく刻まれている。基部は前方に突出させているが、風化が著しくわずかに残るのみである。

69.五郎丸板碑(表 5-69　図 25-69　図 38-69)

近世墓地に隣接して単独で建てられている。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗雑である。梵字種子は小さく金剛界五仏を刻んでいる。銘文は小さく、下部の結衆銘に至っては非常に小さく刻まれている。山型頂部は稜線をもち、二条切込みは小さい断面三角形を呈し、上下やや離れて存在する。額部・基部とも前方に突出させている。

70.藤原墓地板碑(表 5-70　図 25-70　図 38-70)

近世墓地内に単独で立てられており、当板碑以外には中世に遡る石造物は確認できない。調整は背面を含め、各面とも丁寧に仕上げられている。細線陰刻の月輪内に細線陰刻の梵字種子がみられるが、きわめて雑な彫りである。銘文は当該期のものにしては比較的大きい。山型頂部は前方に尖頭部をもつ。二条切込みは小さい断面三角形を呈し、やや離れて存在する。額部のみ前方に突出させているが、額の突出は 1 cm ときわめて薄い。

71.アタゴ祠 1 号板碑(表 5-71　図 26-71　図 38-71)

アタゴ祠の前に 2 号板碑と並んで立てられている。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い。額部を広くとり、細線陰刻の月輪内に小さい梵字種子を彫っている。銘文は小さい線刻であり、銘文下に線刻で鋸歯状文とその下に丸い「ハ」の字状文を彫っている。山型頂部は前方に尖頭部があり、わずかに稜線をもつ。二条切込みも細線陰刻であり、離れて存在する。額部と碑面との段差はほとんどなく、額部下部を 3mm 程度削っているのみである。基部の突出はみられず、台石に枘穴を穿ち、碑身を填め込んでいる。なお、二条線をはじめすべての細線陰刻内には白色顔料を入れている。

72.アタゴ祠 2 号板碑(表 5-72　図 26-72　図 38-72)

アタゴ祠の前に 1 号板碑と並んで立てられている。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は雑である。山型頂部は前方に尖頭部をもち、頂部をわずかに前方に突き出しており、頂部に稜線がみられる。額部は広くとり、細線陰刻の月輪内に小さい梵字種子を彫っている。銘文は小さい線刻であり、銘文下に線刻で鋸歯状文とその下に丸いハの字状文を彫っている。二条切込みも細線陰刻であり、離れて存在する。額部と碑面との段差はほとんどなく、額部下部を 3mm 程度削っているのみである。基部の突出はみられず、台石に枘穴を穿ち、碑身を填め込んでいる。なお、二条線をはじめすべての細線陰刻内には白色顔料を入れている。

73.中山板碑(表 5-73　図 26-73　図 38-73)

起伏の激しい丘陵斜面部に単独で立てられているが、付近に五輪塔残欠や地下式壙が存在するため、当時は何らかの仏教施設が存在していたものと想定できる。調整は正面・両側面とも丁寧に仕上げられているが、背面は雑である。梵字種子は雄大に薬研彫りされ、墨を入れている。二条切込みは断面三角形で非常にしっかりしている。銘文は比較的大きく、基部前面にも刻む特異な様相をもつ。山型頂部は三角尖頭状に尖り、頂部は中央部よりやや後方にあるが、背面を額部から上方にかけて薄くしているため、やや前かがみの印象を受ける。山型部・額部・碑身部・基部とも前方を丸く仕上げている。額部・基部とも前方に突出させている。

74.寺小路板碑(表 5-74　図 26-74　図 39-74)

寺小路鎮守にあったものを現地に移したと伝えられている。調整は正面・山型部は丁寧に仕上げられているが、基部正面及び側面はやや粗く、背面に至っては雑である。正面に陰刻による縦線を引く三連板碑であり、各碑面に山型を造るが、背面には陰刻による縦線がみられない。各碑面の梵字種子は大きく薬研彫りされ、中に墨を入れている。二条切込みは断面三角形で 3 連とも繋げた線で刻んでいる。銘文は比較的大きく、中央の碑面のみ陰刻による銘文がみられるが、両側の碑文の銘文は墨書であり、現在は判読できない。各面とも山型頂部は三角尖頭状に尖り､頂部は中央部よりやや後方にあるものと考えられる。額部・基部とも前方に突出させている。

75.風瀬徳瀬板碑(表 5-75　図 27-75　図 39-75)

現在は、道路脇に単独で立てられている。調整は正面・両側面とも丁寧に仕上げられているが、背面は雑である。梵字種子は額部および碑身に大きくに薬研彫りされ、碑身の梵字種子下には蓮華文様が彫られている。二条切込みは断面三角形でしっかりしているものの、若干離れている。銘文は比較的大きい。山型頂部は三角尖頭状に尖り、頂部は前方にあり、額部と山型部前面は平坦に仕上げられている。山型部頂部は稜線をもち、背面を山型頂部にむかい薄くしているため稜線は中央部まで延びている。基部の突出はみられず、台石に枘穴を穿ち、その枘穴に碑身を差し込んでいる。

76.名塚薬師堂板碑(表 5-76　図 27-76　図 38-76)

名塚薬師堂裏の五輪塔・石幢などからなる中世の石造物群中に立てられている。調整は正面・両側面ともきわめて丁寧に仕上げられているが、背面はやや劣る。梵字種子は額部に小さく薬研彫りされており、碑身下部には長方形彫凹めを２つ並べ、向かって右側には

蓮台に乗り、右手に錫杖を、左手に宝珠をそれぞれもつ地蔵立像を浮き彫りしている。また、向かって左側には、蓮台上に合掌する僧形を浮き彫りにしており、この両者の上に銘文を小さく刻んでいる。二条切込みは三角形状に彫り、切込みというよりは三角段状に仕上げている。基部は高くつくり、この前面にも銘文を刻んでいる。山型頂部は三角形を呈し、前面から背面に至る稜線をもつ。基部は台石に枘穴を穿ち、その枘穴に碑身を差し込んでいる。

77.天手段原 1 号板碑(表 5-77　図 26-77　図 39-77)

丘陵頂部を利用した近世墓地に隣接して同時期の板碑が 2 基並んで立てられていたものと考えられるが、盗掘によるものか、2 基とも倒されており、その内の 1 基である。調整は正面・両側面・山型部ともやや粗く仕上げられ、背面はさらに粗い。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつ。額部と碑身は浅い陰刻線で区画されているのみで、山型と額部の境も 1 条の細線陰刻がみられるのみである。額部には細線陰刻の月輪がみられ、碑身上端に小さい梵字種子が刻まれている。銘文は同時期のものと比べれば比較的大きい。両側面および背面は丸く膨らませている。基部は未調整で土中に差し込んで立てられていたものと考えられる。これらの形態は正面及び山型の加工のみに手を入れ、石材本来の形態を踏襲したためによるものであろう。

78.大辻山 1 号板碑(表 5-78　図 27-78　図 39-78)

大辻山頂上部に塚を築き、板碑をはじめ角塔婆・笠塔婆などの石塔群を立てているが、その内の 1 基である。調整は正面・山型部および側面前部とも丁寧に仕上げられ、背面は雑である。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつ。額部はみられず、山型下部に二条の細線陰刻が離れて刻まれている。二条線下には細線陰刻の月輪がみられ、月輪内に梵字種子が刻まれている。銘文は細く小さい陰刻であるが、丁寧に彫られている。

79.大辻山2号板碑(表5-79　図27-79　図39-79)

大辻山頂上部に塚を築き、板碑をはじめ角塔婆・笠塔婆などの石塔群を立てているが、その内の1基である。調整は正面・山型・側面とも丁寧に仕上げられ、三角状に突出させた背面は粗い。背面を三角状に突出させているため、碑身断面は五角形状を呈している。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつ。額部はみられず、山型下部に２条の細線陰刻が離れて刻まれている。二条線下には細線陰刻の月輪がみられ、月輪内に梵字種子が刻まれている。碑身には位牌形を線刻し、位牌内部は彫り凹めている。銘文は細く小さい陰刻で、位牌内および両側に丁寧に刻まれている。

80.大辻山3号板碑(表5-80　図20-80　図31-80)

大辻山頂上部に塚を築き、板碑をはじめ角塔婆・笠塔婆などの石塔群を立てているが、その内の1基である。調整は正面・裏面・側面とも丁寧に仕上げられているが、山型部のみ若干粗い。正面幅に比較して側面幅が広く、方柱状に近い。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもち、中央部を若干膨らませている。碑面上端には細線陰刻の月輪がみられ、月輪内に梵字種子が刻まれている。月輪下には細く小さい陰刻で銘文が彫られている。

81.大辻山4号板碑(表5-81　図27-81　図39-81)

大辻山頂上部に塚を築き、板碑をはじめ角塔婆・笠塔婆などの石塔群を立てているが、その内の1基である。正面を広く、側面のコーナーを面取りした断面五角形の石碑状を呈する。型式的には著しく逸脱する様相をもつが、碑身部に本尊としての梵字種子をあらわし、その下に造立年月日をはじめとした銘文を記すという内容をもつため板碑として捉える。調整は正面・裏面・側面とも丁寧に仕上げられているが、裁頭状の上面は調整が粗い。碑面上部に細線陰刻の月輪が大きくみられ、月輪内に梵字種子が刻まれている。月輪下を方形に大きく彫り凹め、中に小さい陰刻で銘文を刻んでいる。

82.百枝板碑(表 6-82　図 23-82　図 37-82)

近世墓地に隣接する径約 6m、高さ約 1m の塚上に同様な板碑 5 基と並んで立てられている。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い整形面を残している。山型頂部は前方に尖頭部があり、わずかに稜線をもつ。二条切込みは細線陰刻で離れて存在し、その下に細線陰刻の月輪をもつ。銘文は小さい線刻である。額部と碑面との段差はなく、平坦であるが、その境に細線陰刻がみられる。

83.回春庵1号板碑(表6-83　図28-83　図39-83)

五輪塔・宝篋印塔・板碑等、数十基の戦国期末～近世初頭に属する石造物から構成された回春庵墓地の中に確認できる。調整は正面・山型部および側面前部とも丁寧に仕上げられ、若干膨らみをもつ背面は粗雑である。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつ。額部はみられず、山型下部に２条の細線陰刻が離れて刻まれている。二条線下には細線陰刻の月輪がみられ、月輪内に梵字種子が刻まれている。碑身には位牌形を線刻し、位牌内部は彫り凹めている。銘文は細く小さい陰刻で、位牌内および両側に端正に刻んでいる。

84.回春庵2号板碑(表6-84　図28-84　図39-84)

五輪塔・宝篋印塔・板碑等、数十基の戦国期末～近世初頭に属する石造物から構成され

た回春庵墓地の中に確認できる。調整は正面・山型部および側面前半とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗雑である。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつが、背面に至り低くなる。額部はみられず、山型下部に２条の細線陰刻が離れて刻まれている。二条線下には細線陰刻の月輪がみられ、月輪内に梵字種子が刻まれている。月輪下にも梵字種子が小さく刻まれており、さらにその下に小さい陰刻の銘文を刻んでいる。3号板碑と比較して若干厚く、総高が低い以外はほとんど同じである。

85.回春庵 3 号板碑(表 6-85　図 28-85　図 39-85)

五輪塔・宝篋印塔・板碑等、数十基の戦国期末～近世初頭に属する石造物から構成された回春庵墓地の中に確認できる。調整は正面・山型部および側面前部とも丁寧に仕上げられ、背面は粗雑である。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつが、背面に至り低くなる。額部はみられず、山型下部に 2 条の細線陰刻が離れて刻まれている。二条線下には細線陰刻の月輪がみられ、月輪内に梵字種子が刻まれている。月輪下にも梵字種子が小さく刻まれており、さらにその下に小さい陰刻の銘文を刻んでいる。2 号板碑と比較して若干薄く、総高が高い以外はほとんど同じである。

86.下津留 1 号板碑(表 6-86　図 28-86　図 39-86)

宝塔・板碑等、数十基の戦国期～近世初頭に属する石造物から構成された墓地の中に確認できる。調整は正面のみ丁寧に仕上げられ、山型部・側面・背面は粗雑である。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつが、整形は雑である。額部はみられず、山型下部に 1 条の細線が刻まれている。碑面には小さい陰刻の銘文がみられる。

87.下津留 2 号板碑(表 6-87　図 28-87　図 39-87)

宝塔・板碑等、数十基の戦国期～近世初頭に属する石造物から構成された墓地の中に確認できる。調整は正面・山型部および側面前半とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗雑である。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつが、背面に至り低くなる。額部はみられず、山型下部に２条の細線が離れて刻まれている。二条線下には細線陰刻の月輪がみられ、月輪内に阿弥陀三尊の梵字種子が小さく刻まれている。月輪下部に五角形の彫凹めをつくり､彫凹め内に小さい陰刻の銘文を刻んでいる｡彫凹め両側にも銘文がみられるが、向かって左側部分の銘文は判読できない。

88.下津留 3 号板碑(表 6-88　図 28-88　図 39-88)

宝塔・板碑等、数十基の戦国期～近世初頭に属する石造物から構成された墓地の中に確認できる。背部が埋もれており、また、向かって右側部分が著しく風化している。調整は

正面・山型部および側面前半とも丁寧に仕上げられている。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつが、背面に至り高くなる。額部はみられず、山型下部に２条の細線が離れて刻まれている。二条線下には細線陰刻の月輪が２つ並んでみられ、それぞれの下部に五角形の彫凹めを彫り、それぞれの彫凹め内に小さい陰刻の銘文を刻んでいる。

89.下津留４号板碑(表 6-89　図 28-89　図 39-89)

宝塔・板碑等、数十基の戦国期～近世初頭に属する石造物から構成された墓地の中に確認できる。調整は正面・山型部および側面前半とも丁寧に仕上げられ、背部は埋もれているため明らかでない。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつ。額部はみられず、山型下部に２条の細線が離れて刻まれている。二条線下には細線陰刻の月輪がみられる。月輪下部に五角形の彫凹めを造り、彫凹め内に小さい陰刻の銘文がみられる。

90.下津留５号板碑(表 6-90　図 28-90　図 40-90)

宝塔・板碑等、数十基の戦国期～近世初頭に属する石造物から構成された墓地の中に確認できる。調整は正面・山型部および側面前半とも丁寧に仕上げられ、背面は粗いままである。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつ。額部はみられず、山型下部に２条の細線が離れて刻まれている。二条線下には細線陰刻による月輪がみられ、月輪内に梵字種子が墨書されていたものと思われるが、現在では判読できない。月輪下部には五角形の彫り凹めを造り、彫り凹め内に小さい陰刻の銘文を刻んでいる。

91.下津留６号板碑(表 6-91　図 28-91　図 39-91)

宝塔・板碑等、数十基の戦国期～近世初頭に属する石造物から構成された墓地の中に確認できる。調整は正面・山型部および側面前半とも丁寧に仕上げられ、背面は粗雑である。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつが、背面に至り高くなる。額部はみられず、山型下部に２条の細線が離れて刻まれている。二条線下には細線陰刻の月輪が２つ並んでみられ、それぞれの月輪内に梵字種子が刻まれている。それぞれの月輪下に小さい陰刻の銘文がみられる。

92.下津留７号板碑(表 6-92　図 28-92　図 40-92)

宝塔・板碑等、数十基の戦国期～近世初頭に属する石造物から構成された墓地の中に確認できる。調整は正面・山型部および側面前部とも丁寧に仕上げられ、背面は粗雑である。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつが、背面に至り高くなる。額部はみられず、山型下部に２条の細線が離れて刻まれている。二条線下には月輪が２つ並んで彫凹められており、それぞれの月輪内に梵字種子が墨書されていたものと思われるが、現在では判読で

きない。それぞれの月輪下部に五角形の彫凹めを造り、彫凹め内に小さい陰刻の銘文を刻んでいる。

93.蓮城寺1号板碑(表6-93　図28-93　図40-93)

蓮城寺本堂裏の丘陵下部に同時期のものと考えられる他の板碑とともに立てられている。調整は裏面を含め各面とも非常に丁寧に仕上げられている。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもち、背面に至り低くなる。額部はみられず、山型下部に二条線が離れて刻まれている。二条線下には細線陰刻の月輪がみられ、月輪内に梵字種子が刻まれ、梵字種子下に蓮華文を陰刻している。碑身には大型の位牌形を線刻し、位牌内部は彫り凹めている。銘文は細く小さい陰刻で、月輪の両側と位牌内および両側に端正に刻んでいる。なお、前面および背面ともわずかに膨らませている。

94.塚ノ元1号板碑(表6-94　図29-94　図40-94)

谷部の水田中に古道が走り、その古道に面して径10mに満たない塚を設け、その塚上に2号板碑とともに立てられている。調整は正面・側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い。山型頂部は裁頭状の三角形を呈し、頂部は前面に位置し、背面に向かい低くなる。額部はわずかに突出し、山型下部に二条線が離れて刻まれている。二条線下の額部には彫り凹めた月輪がみられ、月輪内に梵字種子が刻まれている。碑身には縦横方向の細線の割付線が引かれており、銘文はこの割付線に規制され刻まれている。なお、銘文が地中に埋もれている部分にも続くため､碑身はさらに下に延びるものと考えられよう。

95.塚ノ元2号板碑(表6-95　図29-95　図40-95)

谷部の水田中に古道が走り、その古道に面して径10mに満たない塚を設け、その塚上に1号板碑とともに立てられている。調整は正面・側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い。形態は尖頭状を呈さず、方柱状に整形されている。額部の突出はみられず、上部に二条線が離れて刻まれ、二条線下には彫り凹めた月輪がみられる。月輪内に梵字種子が彫られ、月輪下には銘文が刻まれている。なお、台石に枘穴を穿ち、その枘穴に碑身を差し込んでいる。

96.下原板碑(表6-96　図29-96　図40-96)

大野町中原地区において、畑地開発に伴う工事により、南北朝～戦国期の板碑・五輪塔群が掘り出され、当資料のみ大野町中央公民館前庭に移され管理されているものである。調整は正面・側面は丁寧に仕上げられているものの、背面は粗い。碑面には梵字種子が薬研彫りで上下に彫られ、中に墨を入れている。山型頂部は欠損しているものの、三角尖頭

状に尖るものと考えられる。二条切込みは断面三角形で彫りが深いものの、全体的に雑で均質な造りではない。銘文の彫りは粗く、磨滅しているものも多い。額部・基部とも前方に突出させている。

97.門板碑(表 6-97　図 29-97　図 40-97)

集落背後の丘陵斜面の竹藪中に戦国期の五輪塔が集められ、その中に立てられている。整形は極めて雑である。調整は正面・山型部および側面とも比較的丁寧に仕上げられているが、背面は粗い。山型頂部は中央に位置し、山型下部に２条の細線が離れて刻まれている。額部はわずかに突出し、額部に大きく細線の月輪を彫り、月輪内に梵字種子が陰刻されている。銘文は小さく刻まれている。

98.代三五板碑(表 6-98　図 29-98　図 40-98)

五輪塔・庚申塔・板碑・石幢・石仏等、数十基の中・近世に属する石造物中にみられる。調整は正面・山型部および側面前半とも丁寧に仕上げられ、背面は粗いままである。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつ。額部はみられず、山型下部に２条の細線が離れて刻まれている。二条線下には細線の月輪が２つ並んで彫られており、それぞれの月輪内に梵字種子が陰刻されている。銘文は、梵字種子下に小さく刻まれている。

99.岳川板碑(表 6-99　図 29-99　図 40-99)

地蔵堂旧在地の伝承をもつ丘陵頂部に巨大な層塔をはじめ五輪塔・板碑・宝篋印塔等、数十基の中世に属する石造物群が存在するが、その中にみられる。調整は正面・山型部および側面前部とも丁寧に仕上げられ、背面はやや粗い。山型頂部は中央に位置し、頂部から背面に至る稜線をもつものの、背面に至り低くなる。山型下部にみられる二条切込みは断面三角形で彫りが深い。碑面上部には大きく墨書による梵字種子が書かれており、梵字種子下に墨書による銘文がみられる。額部・基部の前方への突出は非常に大きい。

100.瀬口板碑(表 6-100　図 29-100　図 40-100)

丘陵斜面の竹藪中に大型宝塔の笠部とともに置かれている。碑身下半部が折損し失われている。調整は背面も含め、すべての面が丁寧に仕上げられている。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつものの、背面に至り若干丸く高くなる。山型下部には１条の細線陰刻がみられる。額の突出は 1.5cm 程度で、碑面上部には大きく梵字種子が刻まれており、梵字種子左側に銘文が小さく刻まれている。碑身の横幅は 83cm を測り、豊後においても最大級に位置付けられる。

101.館ノ原墓地板碑(表 6-101　図 29-101　図 40-101)

館ノ原墓地と呼ばれる近世墓地の最上部に単独で存在する。調整は背面がやや粗いが、他のすべての面は丁寧に仕上げられている。山型頂部は風化が著しいが、前面から背面に至る稜線をもつものと考えられる。碑身上部には細線陰刻の月輪がみられ月輪内に梵字種子が刻まれている。額の突出はみられないが、基部の突出は確認できる。月輪下に細線の割付線が引かれ、割付線に規制された銘文が小さく刻まれている。碑身下部には台石がみられる。

102.平井板碑(表 6-102　図 30-102　図 40-102)

観音堂境内に宝篋印塔・宝塔・石碑など中世～近世に属する石造物群がみられるが、その中に折損した状態で横にされ置かれている。調整は背面がやや粗いが、他のすべての面は丁寧に仕上げられている。山型頂部は欠損しているが、前面から背面に至る稜線をもつものと考えられる。碑身上部には彫り凹められた月輪がみられ、月輪内に梵字種子が刻まれている。碑身は 3 点に折損しており、月輪下半部と銘文上部が刻まれている碑身残片が失われている。また、碑身基部も折損しており失われている。額の突出はみられず、また山型下部に二条線もみられない。銘文は小さく刻まれている。

103.三反畑板碑(表 6-103　図 30-103　図 40-103)

永福寺跡と伝えられる水田中に単独で立てられており、周辺には戦国期の五輪塔・宝塔が数基みられる。総高３ｍを超え、豊前・豊後においては最大級の板碑である。調整は正面・山型部および側面とも丁寧に仕上げられ、背面は粗い。山型頂部は欠損しているものの背面に近い位置にあり、尖頭状を呈するものと思える。山型下部にみられる二条切込みは断面三角形でひじょうに彫りが深い。額部には梵字種子が薬研彫りされ、また、碑身にも特に大きな薬研彫りによる主尊の梵字種子と、この梵字種子の下部には脇侍と考えられる梵字種子が小さく刻まれており、この下に銘文がみられる(註 4)。額部の突出は 1.5cm と、大きさにしては浅く、基部の突出に関しては碑身下部が埋没しており明らかでない。

104.西ケ原板碑(表 6-104　図 30-104　図 40-104)

丘陵尾根に 10ｍに満たない塚が造営されており、この塚上に宝篋印塔(大永 7 年銘)・五輪塔とともに立てられている。調整は正面・山型部および側面とも丁寧に仕上げられ、背面は粗い。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつ。山型下部にみられる二条切込みは浅い断面三角形で、やや離れて彫られている。額部には細線陰刻の月輪内に梵字種子が小さく彫られており、額部の突出は 5mm と浅い。碑身には銘文が小さく刻まれているが、碑

身下半は埋没しており、総高は地上にのぞいている高さの倍近いものと思われる。

105.小野崎板碑(表 6-105　図 30-105　図 41-105)

大野川の淵を見下ろす崖斜面に淵に面して立てられている。調整は正面・山型部および側面とも丁寧に仕上げられ、背面は粗い。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつ。山型下部には二条切込みはなく、額部は突出する。碑身上端には中央に白色顔料により円形が描かれ、その中に墨書による卍が描かれている。その右側に同じ白色顔料にて日輪が、また、左側には月輪が描かれ、日輪・月輪の下部には同じ白色顔料にて蓮華様文様が描かれている。碑身には縦横の細線による割付線が見られ、その割付線内に刻書及び墨書による銘文が小さく書かれているが、墨書に関しては判読ができない。

106.旧村役場板碑(表 7-106　図 30-106　図 41-106)

旧緒方村役場庁舎横に同時期の板碑とともに立てられているが、その状況をみて他所から移転されたものと考えられるものの、旧在地は明らかでない。全体的な整形はやや雑であり、背面の調整は粗いが、正面・側面・山型の調整は若干丁寧である。山型はやや膨らませ、頂部は前面から背面に至る稜線をもつ。山型下部には二条切込みはなく、額部の突出は見られる。碑身上半には細線陰刻の月輪内に彫りの弱い梵字種子を刻んでおり、月輪下には小さく銘文が刻まれている。

107.加藤家墓地板碑(表 7-107　図 30-107　図 41-107)

近世墓地内に近世墓とともに立てられている。整形は整っており、各面とも調整は丁寧である。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもち、背面を丸く薄く削っているため、側面観は前かがみの印象をもつ。山型下部に二条切込みが見られるが、離れて刻まれている。額部の突出は見られ、額部中央に梵字種子が小さく刻まれている。また、碑身には細線陰刻の銘文が小さく刻まれている。基部も前方に突出していたものとみられるが、磨滅が著しく、また、コンクリートで固められているため、台石が存在していたものかは明らかでない。

108.上青江板碑(表 7-108　図 31-108　図 41-108)

集落内の道路脇に単独で立てられている。すべての面の調整が粗く、また、整形も雑で山型部は左右対称でなく正面は若干膨らんでいる。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもち、背面に至り高くなる。額の突出はみられず、また山型下部に二条線もみられない。碑身上端部に卍を大きく陰刻し、卍下に比較的大きな銘文が刻まれているが、磨滅が著し

く判読できない。中央の銘文を挟み両側に小さく銘文を刻んでいるが、紀年銘以外は判読できない。基部は、前面だけでなく両側面にも突出させるという特異な形態をもつ。

109.床木板碑(表 7-109　図 31-109　図 41-109)

近世初頭の大型宝塔や石幢とともに立てられている。整形は整っており、各面とも調整は丁寧である。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもち、山型背面を丸く薄く削っているため、側面観は前かがみの印象をうける。山型下部に断面三角形の二条切込みが見られるが、離れて刻まれている。山型正面と額部は平坦だが、額部の突出は見られる。碑面上端に梵字種子が刻まれており、碑身左下には銘文が小さく刻まれている。

110.地蔵ノ本板碑(表 7-110　図 31-110　図 41-110)

集落の端の石幢をはじめとした石造物群中にある。整形は整っており、各面とも調整は丁寧である。山型頂部には割れ目が確認できるが、人工的な加工によるものか、自然の風化によるものかは判断がつかない。山型背面を上部に向かい薄く仕上げているため、側面観は前かがみの印象をうける。額部に梵字種子らしき陰刻が見られるがはっきりせず、また、この梵字種子下に 2 箇所の円形彫凹め状の痕跡が見られるものの、これについても風化が著しくはっきりしない。碑面には方形の彫凹めがみられ、この中に銘文が非常に小さく刻まれている。碑身は台石上にのる。

111.大川庵板碑(表 7-111　図 31-111　図 41-111)

大川庵と呼ばれる小堂に隣接する近世墓地横に当資料をはじめ同様の板碑が 6 基確認できる。整形はやや雑である。背面の調整はやや粗いが、他は比較的丁寧である。山型部は前方に傾斜させ、わずかに彫り凹め、頂部に小さく梵字種子を刻んでいる。その下部両端に円形彫凹めを 2 箇所設けている。また、碑面をわずかに彫り凹め、蓮華座に立つ地蔵立像を浮き彫りする。地蔵は右手に数珠をもち、左手に錫杖をもつ。地蔵立像両側には短冊状陽刻部を設け、ここに銘文を小さく陰刻している。蓮華座に立つ地蔵立像及び短冊状陽刻部には白色顔料が塗られている。なお、碑身は台石上に乗せられている。

112.延命庵板碑(表 7-112　図 31-112　図 41-112)

延命庵と呼ばれる小堂に隣接して地蔵石像・無縫塔・石碑などとともにみられる。整形は丁寧で、調整も各面とも丁寧に仕上げている。山型部は前方に傾斜させ、正面をわずかに彫り凹め、頂部に小さく梵字種子を刻んでいる。その下部両端に巴文がみられる円形彫凹めを 2 箇所設けている。また、碑身をさらに深く彫り凹め、蓮華座に立つ地蔵立像を浅く浮き彫りしている。地蔵は左肩部の位置において両手で錫杖をもち、光背上には雲文状

の浮彫りを施している。地蔵立像両側および下部に銘文を小さく陰刻している。碑身側面後隅には面取りが施されている。なお、碑身は4段からなる台石に乗せられており、最上部の2段の台石は一石からなる。

113.稲荷神社1号板碑(表7-113　図32-113　図41-113)

稲荷神社本殿裏に戦国期の宝塔・板碑・五輪塔残欠などとともに1・2号板碑が並べて立てられており、形態的にも2号板碑と非常に近似している。調整は背面のみ粗く、その他の面は丁寧に仕上げている。山型部はやや前方に傾斜させ、額部は帯状に前方に突出させている。碑身上端には大きく卍を彫り、その下部に銘文を小さく刻んでいる。基部は突出させているが磨滅が著しい。

114.稲荷神社2号板碑(表7-114　図32-114　図41-114)

稲荷神社本殿裏に戦国期の宝塔・板碑・五輪塔残欠などとともに1・2号板碑が並べて立てられており、形態的にも1号板碑と非常に近似している。調整は背面のみ粗く、その他の面は丁寧に仕上げている。山型部はやや前方に傾斜させ、額部は帯状に前方に突出させているが、前面はやや丸く膨らませている。碑身上端には大きく卍を彫り、その下部に銘文を小さく刻んでいる。基部は突出させているが磨滅が著しい。

115.上爪板碑(表7-115　図32-115　図41-115)

細い谷に突き出た細い尾根先端に位置する。周辺には近世以降の石造物が若干みられる。調整は正面・山型部および側面前部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い。山型から碑身部まで、それぞれの前面は平坦に仕上げられている。山型頂部は前面から背面に至る稜線をもつ。額部はみられず、山型下部に2条の陰刻が離れて刻まれている。二条線下には細線陰刻の月輪がみられ、月輪内に梵字種子が刻まれている。碑身左下に小さい陰刻の銘文を刻んでいる。

116.筒井板碑(表7-116　図32-116　図41-116)

人家裏の丘陵斜面に一基のみ寝かせて置かれている。2箇所の大きな折損が確認でき、また、基部も失っている。正面・側面とも丁寧な調整が施されていたものと考えられるが、銘文が全く確認できないほど器面の剥落が著しい。山型頂部は欠損しているが、中央付近にあるものと思われ、額部二条切込みは断面三角形でしっかりしている。なお、銘文は『直入町誌』(直入町誌刊行会 1984) による。

117.鬼田板碑(表7-117　図32-117　図41-117)

神社の裏手に石祠や五輪塔・板碑などが集められており、その中に位置する。調整は正

面・両側面とも丁寧に仕上げられているが、背面はやや粗い。山型・額部・碑身ともほぼ平坦に仕上げられており、額部二条切込みおよび額部と碑身の境界の位置にわずかな断面三角形の段差をつけている。額部には円形彫凹めの月輪を彫り、この中に梵字種子を刻んでいる。碑身左側に小さい銘文を刻んでいる。

118.折立板碑(表 7-118　図 32-118　図 41-118)

近世墓地内に位置する。調整は背面を含め、各面とも丁寧に仕上げられている。山型・額部・碑身ともほぼ平坦に仕上げられており、山型部と額部の境界の位置に断面三角形の段差をつけている。正面額部には円形彫凹めの月輪を彫り、この中に両手に蓮をもつ観音座像を浮き彫りしている。また、両側面及び背面にも細線陰刻の月輪を彫り、それぞれに梵字種子を刻んでいる。向かって左側にキリーク(阿弥陀)・右側にバイ(薬師)、裏面にバク(釈迦)をあらわし、正面の観音とあわせて、顕教四仏をあらわしたものと考えられる。銘文は小さく細く刻んでいる。

表３　豊後における紀年銘をもつ整形板碑一覧①

番号	名称	所在地	元号	西暦	石材	参考文献
1	永平寺跡１号板碑	大分県日田市高瀬本町	応長元年	1311	安山岩？	望月友善 1975
2	永平寺跡２号板碑	大分県日田市高瀬本町	正和２年	1313	凝灰岩	望月友善 1975
3	宝八幡宮板碑	大分県九重町松本	宝徳３年	1451	凝灰岩	
4	神家板碑	大分県別府市朝見	応永５年	1398	安山岩	
5	神和園板碑	大分県別府市鉄輪	永正 11 年	1514	安山岩	
6	吉祥寺板碑	大分県別府市乙原	寛永 14 年	1637	凝灰岩	
7	本篠板碑	大分県杵築市山香町本篠	建武元年	1334	安山岩	望月友善 1975
8	普門坊跡板碑	大分県杵築市山香町内河野山口	康永４年	1345	凝灰岩	山香町誌刊行会 1982
9	地蔵堂板碑	大分県杵築市山香町内河野堂ノ尾	永和４年	1378	凝灰岩	山香町誌刊行会 1982
10	妙善坊１号板碑	大分県杵築市山香町妙善坊	文明 10 年	1478	凝灰岩	
11	妙善坊２号板碑	大分県杵築市山香町妙善坊	元亀３年	1572	凝灰岩	
12	東光寺板碑	大分県杵築市山香町内河野	永正 13 年	1516	凝灰岩	山香町誌刊行会 1982
13	牧峯神社旧在板碑	大分県日出町赤松	貞和２年	1346	安山岩	望月友善 1975
14	願成就寺板碑	大分県日出町赤松	貞治５年	1366	安山岩	望月友善 1975
15	庵の迫板碑	大分県豊後高田市梅ノ木	正中２年	1325	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993
16	其ノ田１号板碑	大分県豊後高田市蕗其ノ田	建武元年	1334	安山岩	大分県教育委員会 2000
17	其ノ田２号板碑	大分県豊後高田市蕗其ノ田	建武元年	1334	安山岩	大分県教育委員会 2000
18	平野園１号板碑	大分県豊後高田市蕗陽平	建武２年	1335	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1986
19	富貴寺板碑	大分県豊後高田市蕗	延文６年	1361	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1986
20	梅遊寺１号板碑	大分県豊後高田市一畑影平	建武３年	1336	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993
21	梅遊寺２号板碑	大分県豊後高田市一畑影平	応永 21 年	1414	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993
22	大曲板碑	大分県豊後高田市大曲	文明９年	1477	凝灰岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1986
23	寺ノ上１号板碑	大分県豊後高田市築地寺ノ上	天文 14 年	1545	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993
24	寺ノ上２号板碑	大分県豊後高田市築地寺ノ上	天文 19 年	1550	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993
25	寺ノ上３号板碑	大分県豊後高田市築地寺ノ上	天文 21 年	1552	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993
26	寺ノ上４号板碑	大分県豊後高田市築地寺ノ上	天正４年	1576	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993
27	持地庵板碑	大分県豊後高田市大力田城	天正６年	1578	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993

表４　豊後における紀年銘をもつ整形板碑一覧②

番号	名称	所在地	元号	西暦	石材	参考文献
28	安養寺板碑	大分県豊後高田市中村	永禄 10 年	1567	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993
29	大応寺板碑	大分県豊後高田市真中大門	天正 15 年	1587	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993
30	オト様 1 号板碑	大分県豊後高田市加礼川屋山	慶長 15 年	1610	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993
31	オト様 2 号板碑	大分県豊後高田市加礼川屋山	慶長 15 年	1610	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993
32	オト様 3 号板碑	大分県豊後高田市加礼川屋山	慶長 15 年	1610	安山岩	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993
33	財前家墓地板碑	大分県杵築市大田小野	元享元年	1321	安山岩	望月友善 1975
34	尾迫板碑	大分県杵築市大田小野	康永 3 年	1344	安山岩	大田村教育委員会 1994
35	小俣道板碑	大分県杵築市大田小野	貞和 3 年	1347	安山岩	望月友善 1975
36	諸田越板碑	大分県杵築市大田小野	貞治 5 年	1366	安山岩	望月友善 1975
37	辻堂ケ鼻板碑	大分県豊後高田市臼野赤松	天文 18 年	1549	安山岩	
38	十王堂板碑	大分県国東市国見町野田山下	文和 4 年	1355	安山岩	望月友善 1975
39	川原 1 号板碑	大分県国東市国東町川原上ノ台	文保 3 年	1319	安山岩	望月友善 1975
40	川原 2 号板碑	大分県国東市国東町川原上ノ台	元応 2 年	1320	安山岩	望月友善 1975
41	鳴 1 号板碑	大分県国東市国東町東堅来鳴	元応 3 年	1321	安山岩	望月友善 1975
42	鳴 2 号板碑	大分県国東市国東町東堅来鳴	元享 2 年	1322	安山岩	望月友善 1975
43	鳴 3 号板碑	大分県国東市国東町東堅来鳴	文和 3 年	1354	安山岩	望月友善 1975
44	堀部板碑	大分県国東市国東町見地	正中 2 年	1325	安山岩	望月友善 1975
45	左荘板碑	大分県国東市国東町赤松左荘	正中 3 年	1326	安山岩	望月友善 1975
46	野長谷板碑	大分県国東市国東町深江野長谷	嘉暦 2 年	1327	安山岩	望月友善 1975
47	竹ノ上板碑	大分県国東市国東町成仏下成仏	元弘 3 年	1333	安山岩	望月友善 1975
48	岡板碑	大分県国東市国東町見地岡	建武元年	1334	安山岩	望月友善 1975
49	丸小野寺 1 号板碑	大分県国東市武蔵町丸小野	康永元年	1342	安山岩	望月友善 1975
50	丸小野寺 2 号板碑	大分県国東市武蔵町丸小野	康永 7 年	1348	安山岩	望月友善 1975
51	護聖寺 1 号板碑	大分県国東市安岐町朝来	正応 4 年	1291	安山岩	望月友善 1975
52	護聖寺 2 号板碑	大分県国東市安岐町朝来	嘉暦 4 年	1329	安山岩	望月友善 1975
53	柳井田板碑	大分県国東市安岐町小俣柳井田	元享元年	1321	安山岩	望月友善 1975
54	岩尾板碑	大分県国東市安岐町朝来	元享 4 年	1324	安山岩	望月友善 1975

表５　豊後における紀年銘をもつ整形板碑一覧③

番号	名称	所在地	元号	西暦	石材	参考文献
55	八坂社板碑	大分県国東市安岐町弁分	元弘 3 年	1333	安山岩	望月友善 1975
56	岩屋堂板碑	大分県国東市安岐町掛樋	延文 5 年	1360	安山岩	望月友善 1975
57	塔野板碑	大分県国東市安岐町弁分塔野	永和 2 年	1376	安山岩	望月友善 1975
58	歳神社板碑	大分県国東市安岐町朝来	弘治 2 年	1556	安山岩	望月友善 1975
59	寺園板碑	大分県国東市安岐町小俣寺園	天正 13 年	1585	安山岩	望月友善 1975
60	中村板碑	大分県大分市宮苑	元弘 3 年	1333	凝灰岩	望月友善 1975
61	少林寺 1 号板碑	大分県大分市木ノ上少林寺	貞和 6 年	1350	凝灰岩	望月友善 1975
62	少林寺 2 号板碑	大分県大分市木ノ上少林寺	貞和 6 年	1350	凝灰岩	望月友善 1975
63	少林寺 3 号板碑	大分県大分市木ノ上少林寺	貞和 6 年	1350	凝灰岩	望月友善 1975
64	少林寺 4 号板碑	大分県大分市木ノ上少林寺	貞和 6 年	1350	凝灰岩	望月友善 1975
65	少林寺 5 号板碑	大分県大分市木ノ上少林寺	貞和 6 年	1350	凝灰岩	望月友善 1975
66	本村建長寺跡板碑	大分県由布市庄内町長野本村	正平 11 年	1356	凝灰岩	
67	畑田板碑	大分県由布市庄内町畑田	応安 6 年	1373	凝灰岩	庄内町誌編集委員会 1990
68	尾平慈光庵板碑	大分県豊後大野市千歳町大平尾平	康安元年	1361	凝灰岩	千歳村誌刊行会 1975
69	五郎丸板碑	大分県豊後大野市千歳町石田	明応 2 年	1493	凝灰岩	千歳村誌刊行会 1975
70	藤原墓地板碑	大分県豊後大野市千歳町柴山	永正 9 年	1512	凝灰岩	千歳村誌刊行会 1975
71	アタゴ祠 1 号板碑	大分県豊後大野市千歳町高添	天文 8 年	1539	凝灰岩	千歳村誌刊行会 1975
72	アタゴ祠 2 号板碑	大分県豊後大野市千歳町高添	天文 8 年	1539	凝灰岩	千歳村誌刊行会 1975
73	中山板碑	大分県臼杵市野津町宮原中山	元徳 2 年	1330	凝灰岩	野津町 1965
74	寺小路板碑	大分県臼杵市野津町宮原寺小路	元弘 3 年	1333	凝灰岩	野津町 1965
75	風瀬徳瀬板碑	大分県臼杵市野津町西畑風瀬徳瀬	明徳 3 年	1392	凝灰岩	野津町 1965
76	名塚薬師堂板碑	大分県臼杵市野津町八里合名塚	永正 2 年	1505	凝灰岩	望月友善 1975
77	天手段原 1 号板碑	大分県臼杵市野津町秋山天手段原	大永 5 年	1525	凝灰岩	野津町 1965
78	大辻山 1 号板碑	大分県豊後大野市三重町大辻山	文禄 5 年	1596	凝灰岩	三重町 1987
79	大辻山 2 号板碑	大分県豊後大野市三重町大辻山	慶長 4 年	1599	凝灰岩	三重町 1987
80	大辻山 3 号板碑	大分県豊後大野市三重町大辻山	慶長 4 年	1599	凝灰岩	三重町 1987
81	大辻山 4 号板碑	大分県豊後大野市三重町大辻山	慶長 4 年	1599	凝灰岩	三重町 1987

表６　豊後における紀年銘をもつ整形板碑一覧④

番号	名称	所在地	元号	西暦	石材	参考文献
82	百枝板碑	大分県豊後大野市三重町百枝	天文 10 年	1541	凝灰岩	
83	回春庵 1 号板碑	大分県豊後大野市三重町森迫	慶長 14 年	1609	凝灰岩	三重町 1966
84	回春庵 2 号板碑	大分県豊後大野市三重町森迫	寛永 14 年	1637	凝灰岩	
85	回春庵 3 号板碑	大分県豊後大野市三重町森迫	寛永 16 年	1639	凝灰岩	
86	下津留 1 号板碑	大分県豊後大野市三重町上田原	慶長 17 年	1612	凝灰岩	三重町 1981
87	下津留 2 号板碑	大分県豊後大野市三重町上田原	寛永 10 年	1633	凝灰岩	三重町 1981
88	下津留 3 号板碑	大分県豊後大野市三重町上田原	寛永 9 年 寛永 13 年	1632 1636	凝灰岩	三重町 1981
89	下津留 4 号板碑	大分県豊後大野市三重町上田原	寛永 13 年	1636	凝灰岩	三重町 1981
90	下津留 5 号板碑	大分県豊後大野市三重町上田原	寛永 17 年	1640	凝灰岩	三重町 1981
91	下津留 6 号板碑	大分県豊後大野市三重町上田原	寛永 6 年 正保 3 年	1629 1646	凝灰岩	三重町 1981
92	下津留 7 号板碑	大分県豊後大野市三重町上田原	寛永 15 年 慶安 3 年	1638 1650	凝灰岩	三重町 1981
93	蓮城寺 1 号板碑	大分県豊後大野市三重町内山	慶長 4 年	1599	凝灰岩	三重町 1966
94	塚ノ元 1 号板碑	大分県豊後大野市大野町古殿	天文 7 年	1538	凝灰岩	大分県大野町史刊行会 1980
95	塚ノ元 2 号板碑	大分県豊後大野市大野町古殿	天文 19 年	1550	凝灰岩	大分県大野町史刊行会 1980
96	下原板碑	大分県豊後大野市大野町田中	建徳 3 年	1372	凝灰岩	
97	門板碑	大分県豊後大野市大野町津留門	天文 3 年	1534	凝灰岩	
98	代三五板碑	大分県豊後大野市大野町代三五	慶長 6 年	1601	凝灰岩	
99	岳川板碑	大分県豊後大野市朝地町綿田岳川	正慶元年	1332	凝灰岩	朝地町史刊行会 1967
100	瀬口板碑	大分県豊後大野市朝地町池田瀬口	延徳 2 年	1490	凝灰岩	朝地町史刊行会 1967
101	館ノ原墓地板碑	大分県豊後大野市朝地町池田館	永禄 7 年	1564	凝灰岩	
102	平井板碑	大分県豊後大野市朝地町下野平井	天正 6 年	1578	凝灰岩	朝地町史刊行会 1967
103	三反畑板碑	大分県豊後大野市緒方町上自在	天授 3 年	1377	凝灰岩	緒方町教育委員会 1998
104	西ケ原板碑	大分県豊後大野市緒方町馬背畑	大永 6 年	1526	凝灰岩	緒方町教育委員会 1998
105	小野崎板碑	大分県豊後大野市緒方町越生	元亀 2 年	1571	凝灰岩	緒方町教育委員会 1998

表７　豊後における紀年銘をもつ整形板碑一覧⑤

番号	名称	所在地	元号	西暦	石材	参考文献
106	旧村役場板碑	大分県豊後大野市緒方町馬場柏木	天正 8 年	1580	凝灰岩	
107	加藤家墓地板碑	大分県豊後大野市緒方町馬場柏木	天正 3 年	1575	凝灰岩	
108	上青江板碑	大分県津久見市上青江	元和 10 年	1624	凝灰岩	津久見市教育委員会 1993
109	床木板碑	大分県佐伯市弥生床木	文明 7 年	1475	凝灰岩	弥生町教育委員会 1982
110	地蔵ノ本板碑	大分県佐伯市堅田西野地蔵ノ本	天正 4 年	1576	凝灰岩	佐伯市教育委員会 1989
111	大川庵板碑	大分県佐伯市府坂大川庵	文禄 4 年	1595	凝灰岩	望月友善 1975
112	延命庵板碑	大分県佐伯市石打延命庵	天正 2 年	1574	凝灰岩	佐伯市史編纂委員会 1974
113	稲荷神社 1 号板碑	大分県佐伯市直川下直見道越	天正 12 年	1584	凝灰岩	直川村教育委員会 1982
114	稲荷神社 2 号板碑	大分県佐伯市直川下直見道越	天正 12 年	1584	凝灰岩	直川村教育委員会 1982
115	上爪板碑	大分県佐伯市宇目塩見園上爪	元和 5 年	1619	凝灰岩	
116	筒井板碑	大分県竹田市直入町長湯筒井	天授 2 年	1376	凝灰岩	直入町誌刊行会 1984
117	鬼田板碑	大分県竹田市明治植木鬼田	天文 10 年	1541	凝灰岩	竹田市史刊行会 1983
118	折立板碑	大分県竹田市明治平田折立	永禄 3 年	1560	凝灰岩	竹田市史刊行会 1983

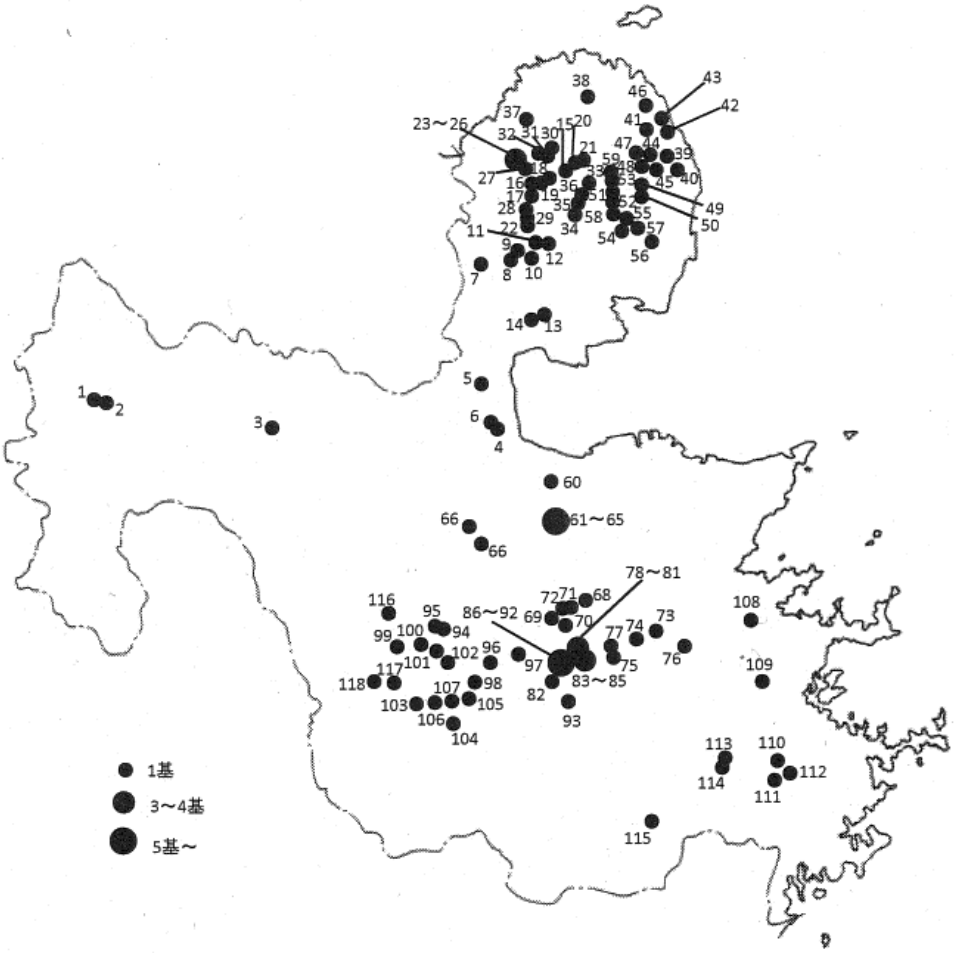


図 11　豊後における整形板碑の分布

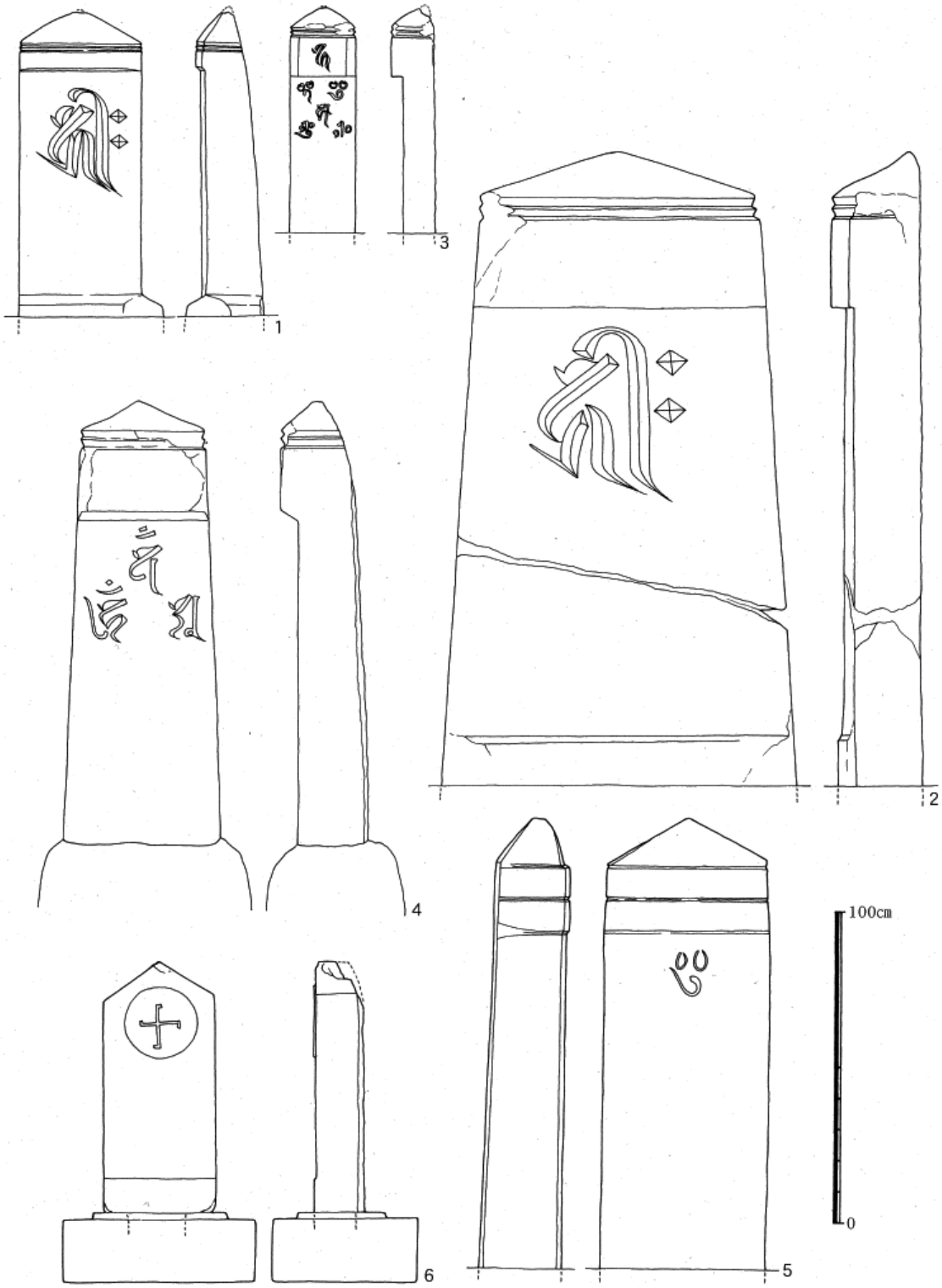


図 12　豊後における整形板碑①

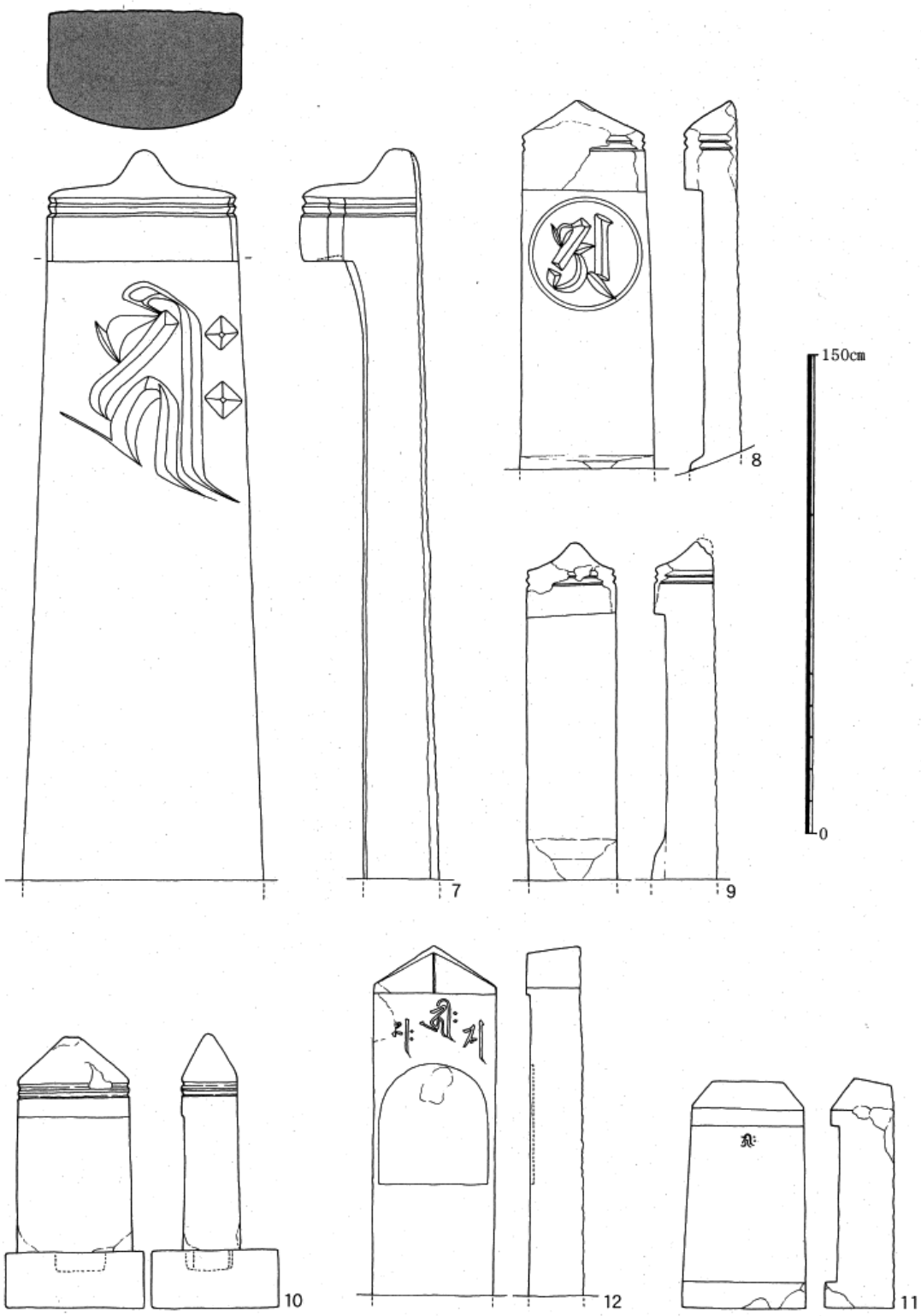


図 13　豊後における整形板碑②

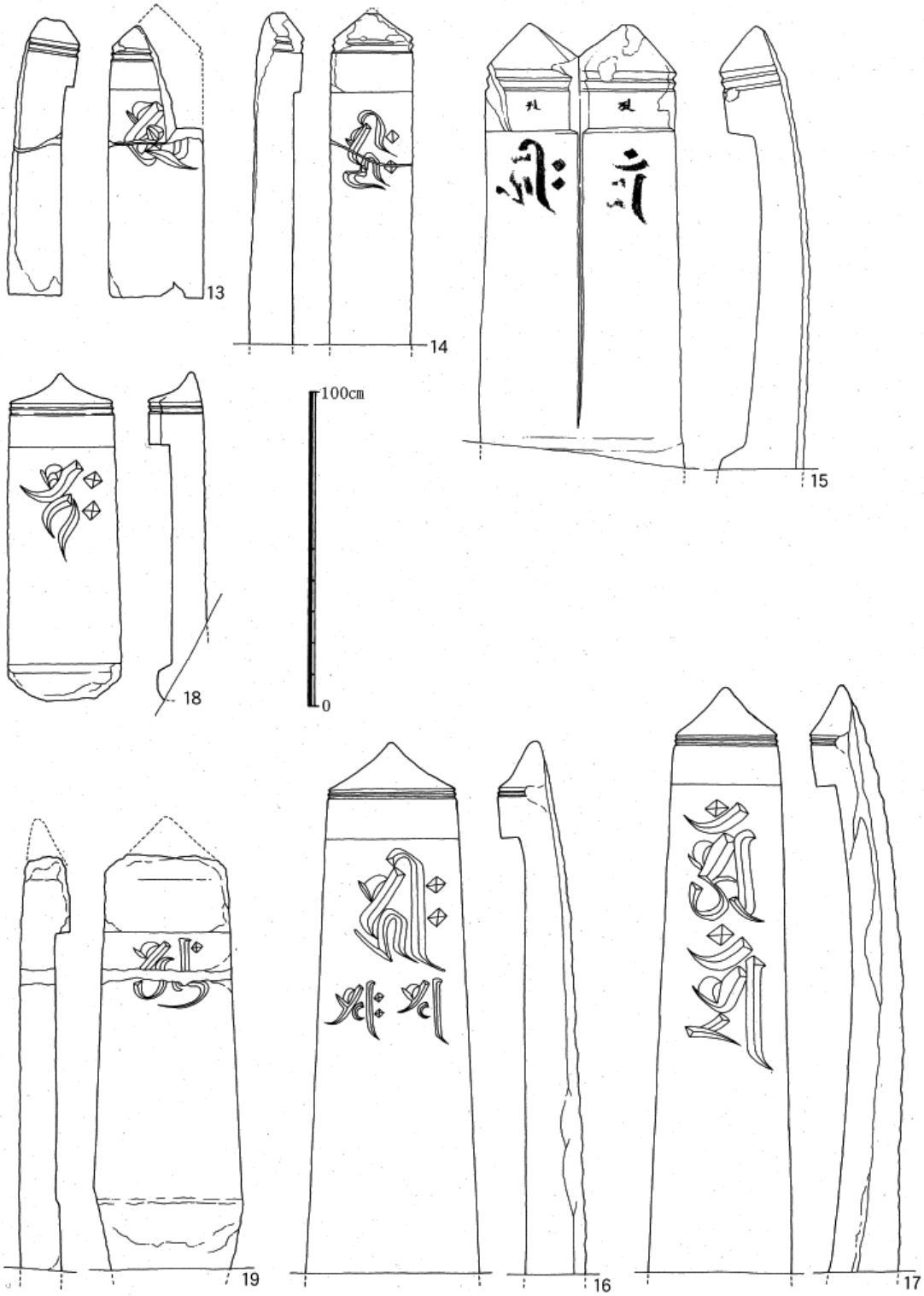


図 14　豊後における整形板碑③

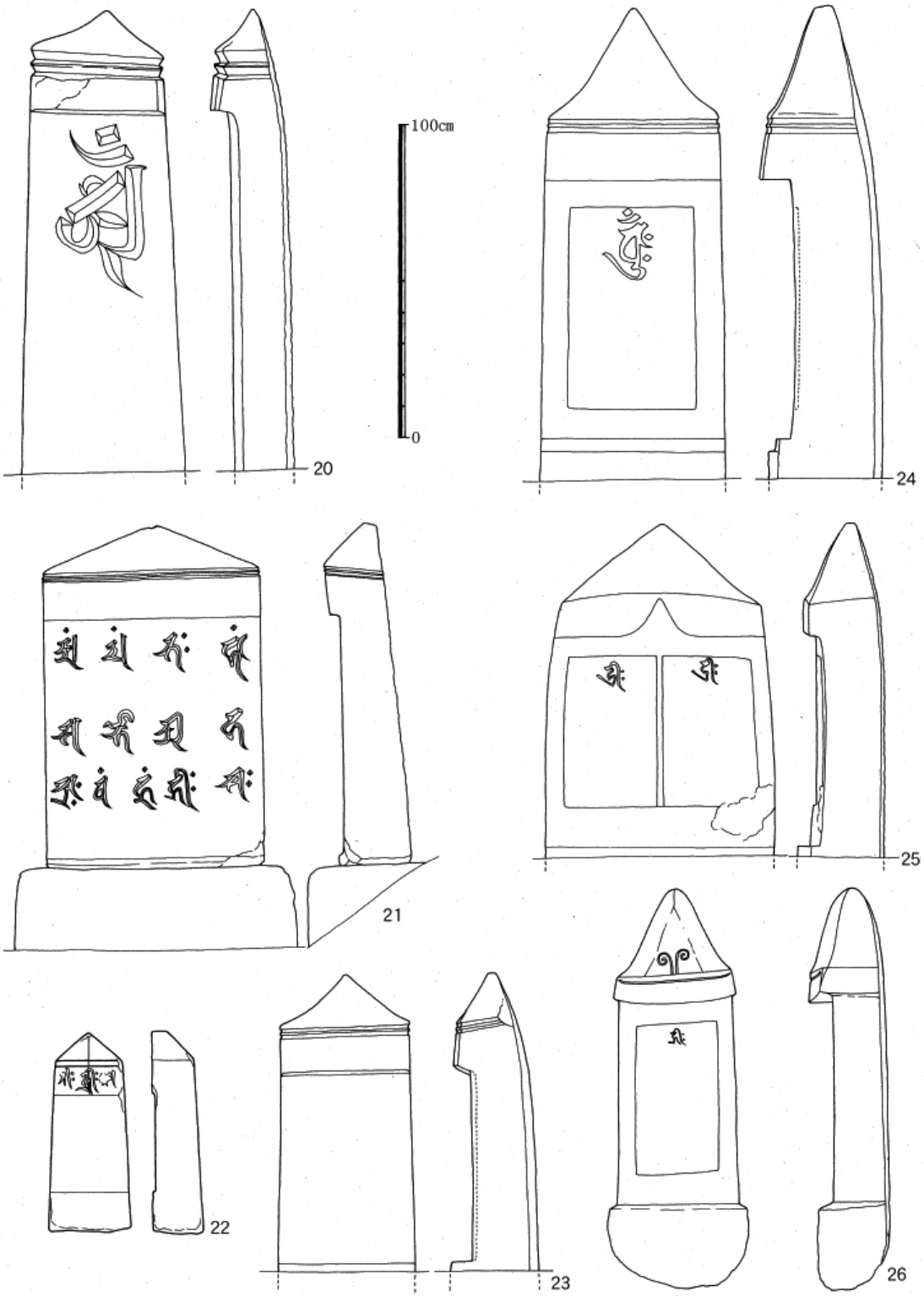


図 15　豊後における整形板碑④

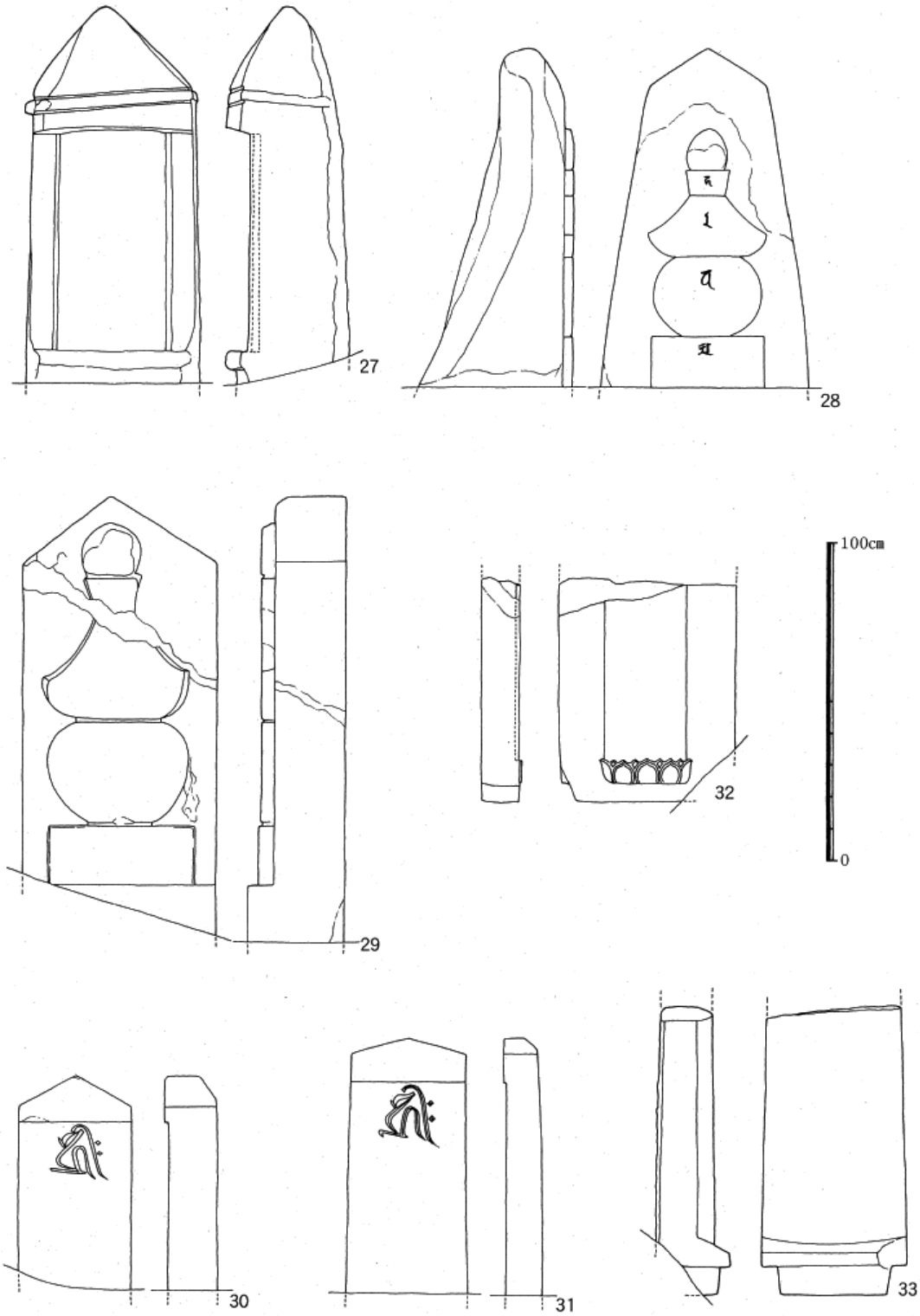


図 16　豊後における整形板碑⑤

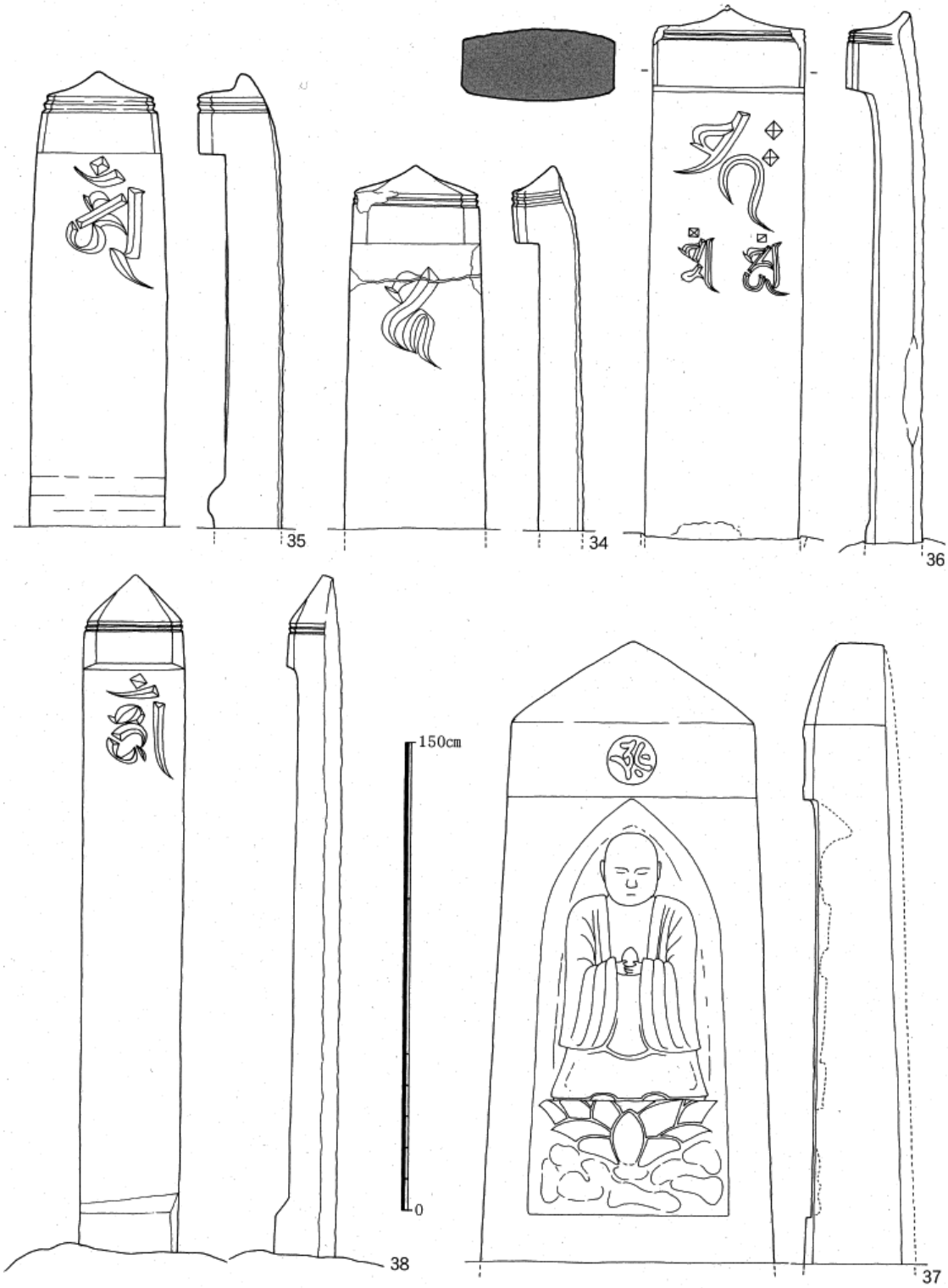


図 17　豊後における整形板碑⑥

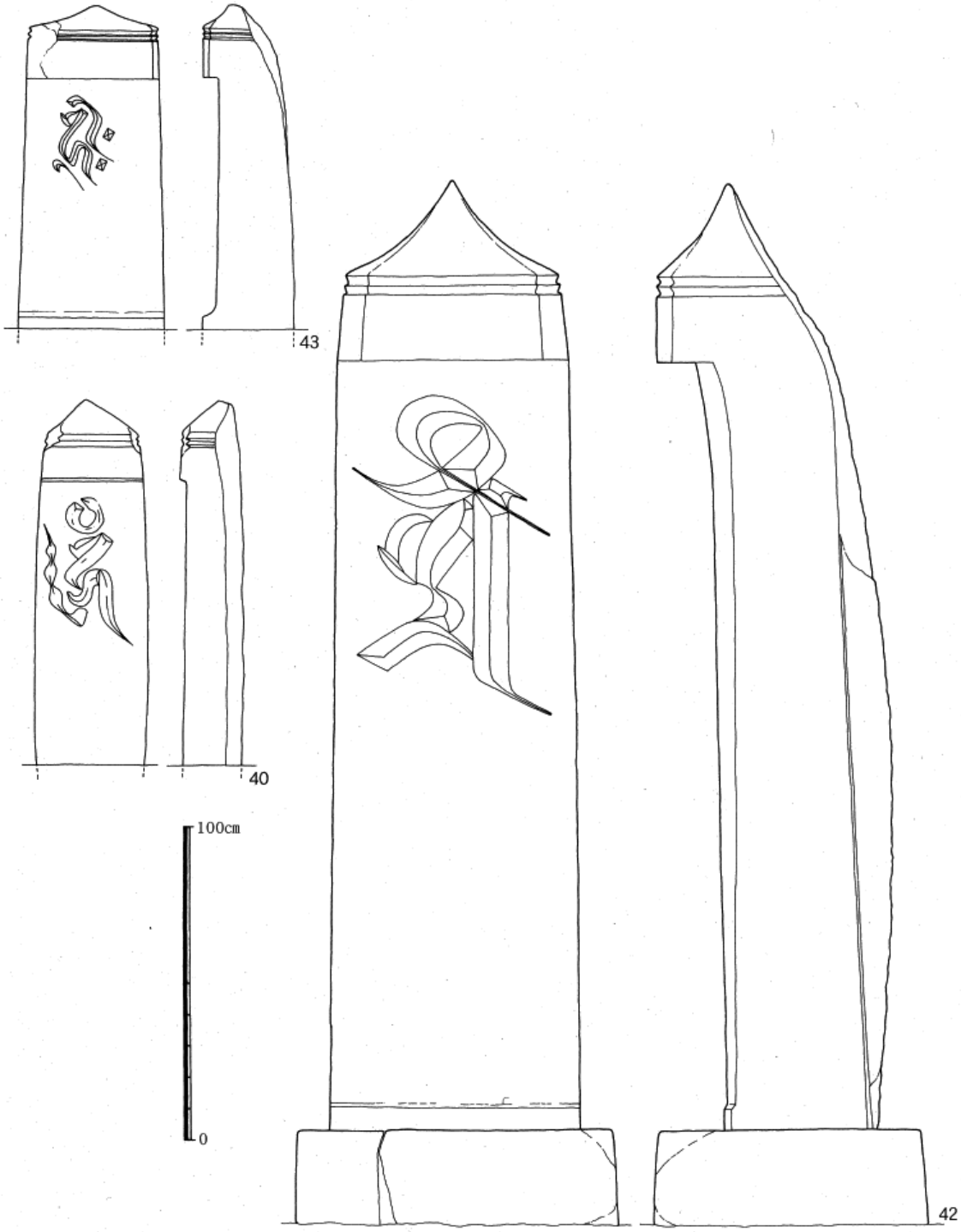


図 18　豊後における整形板碑⑦

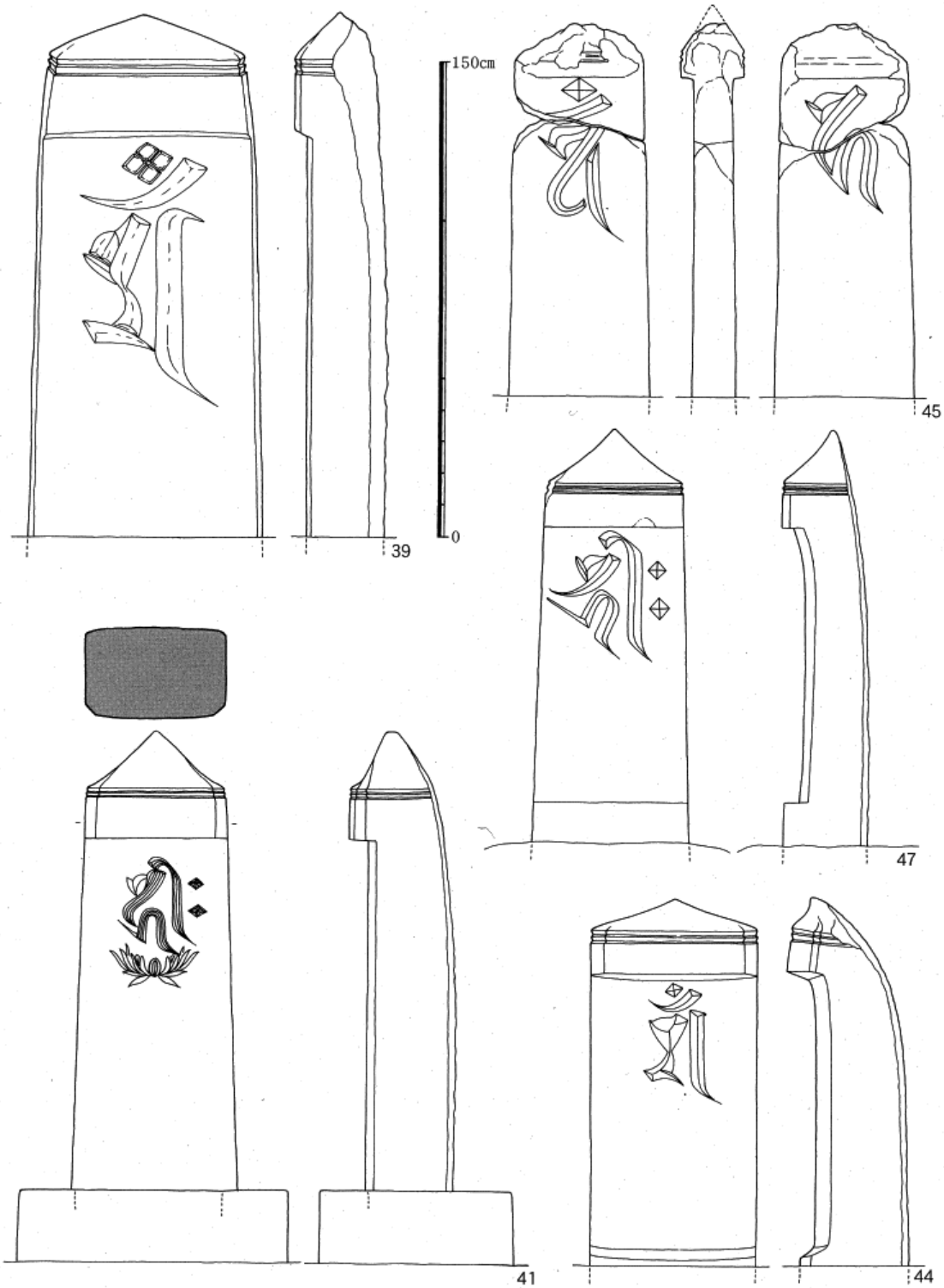


図 19　豊後における整形板碑⑧

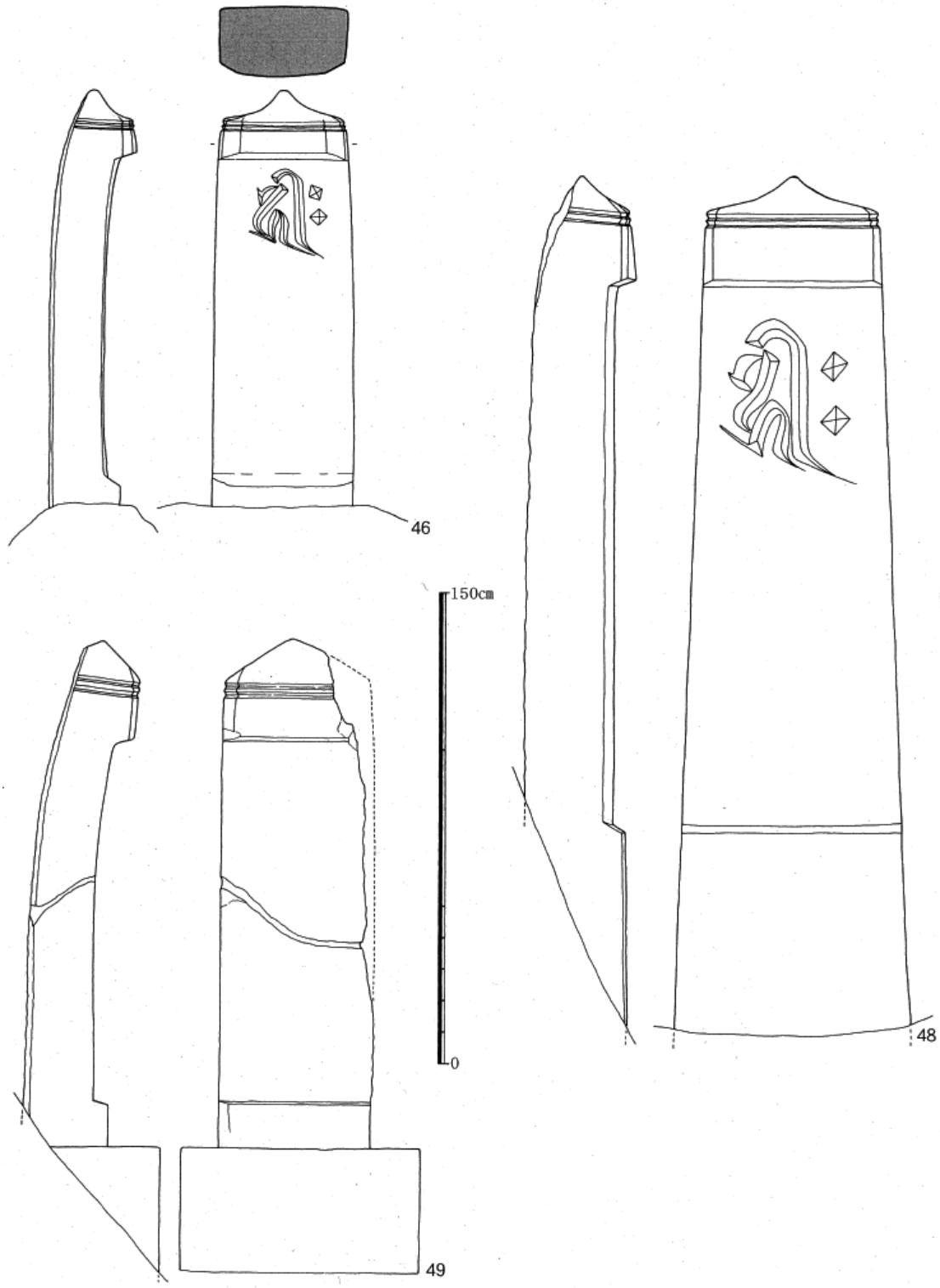


図 20　豊後における整形板碑⑨

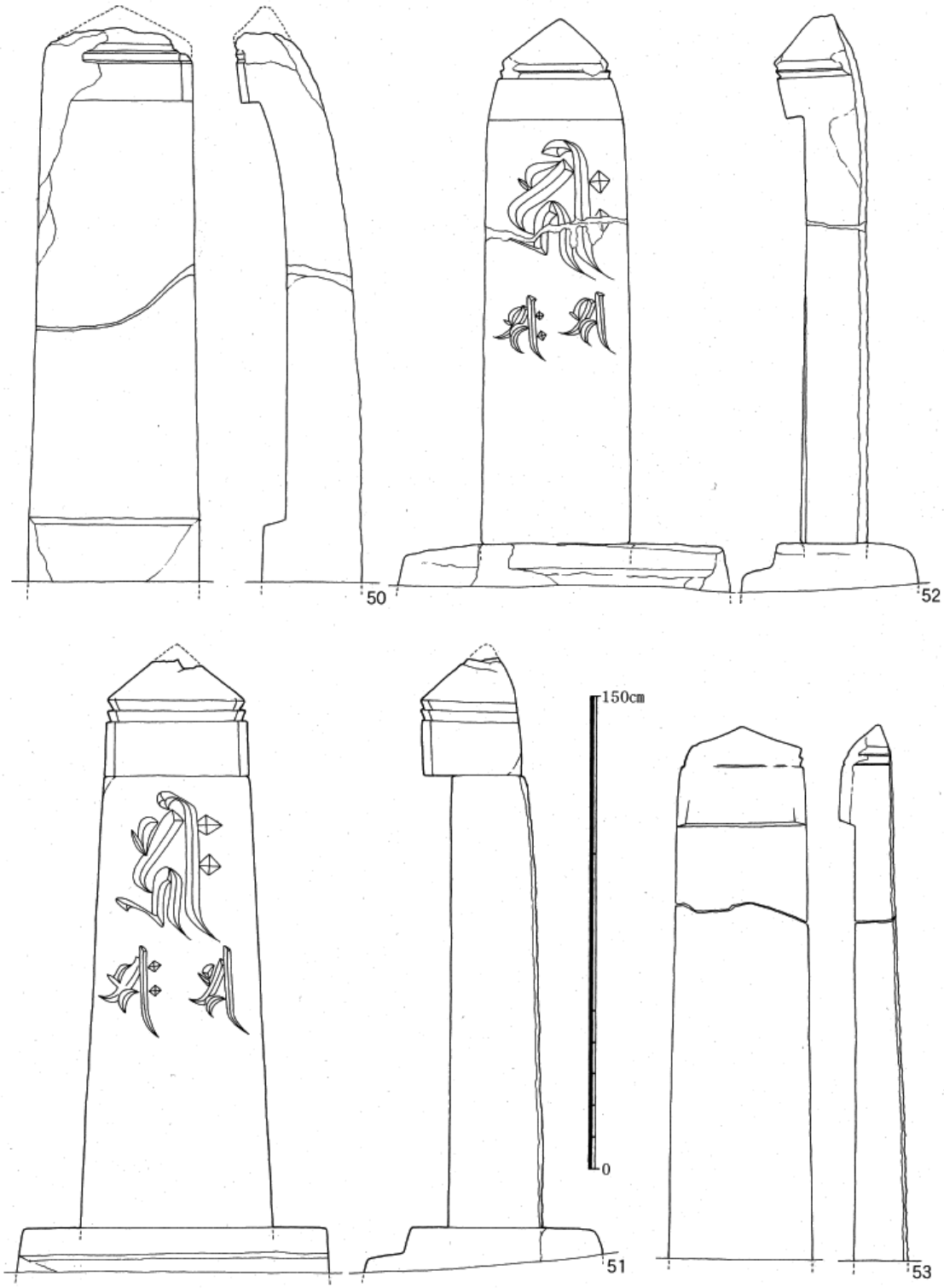


図 21　豊後における整形板碑⑩

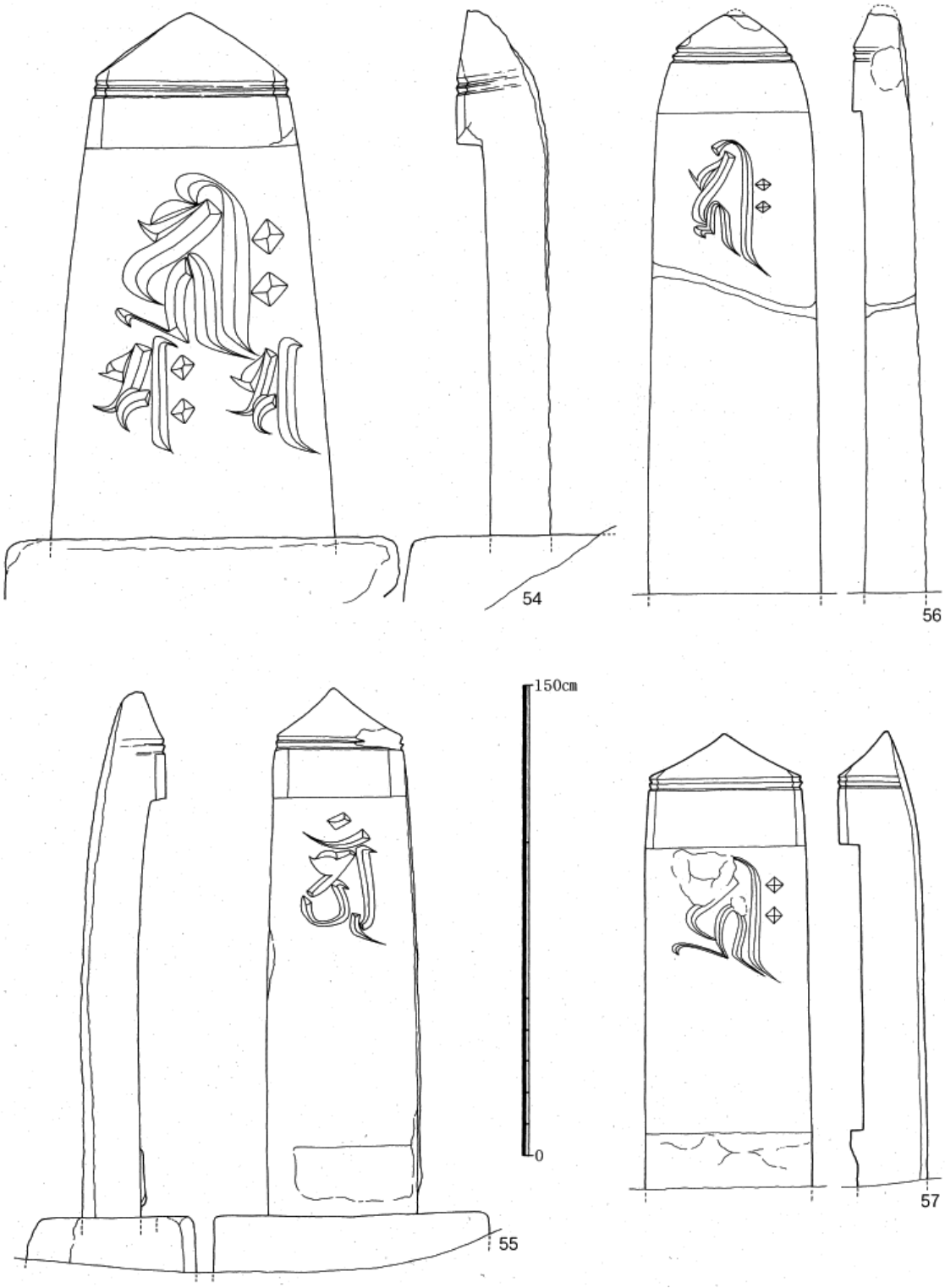


図 22　豊後における整形板碑⑪

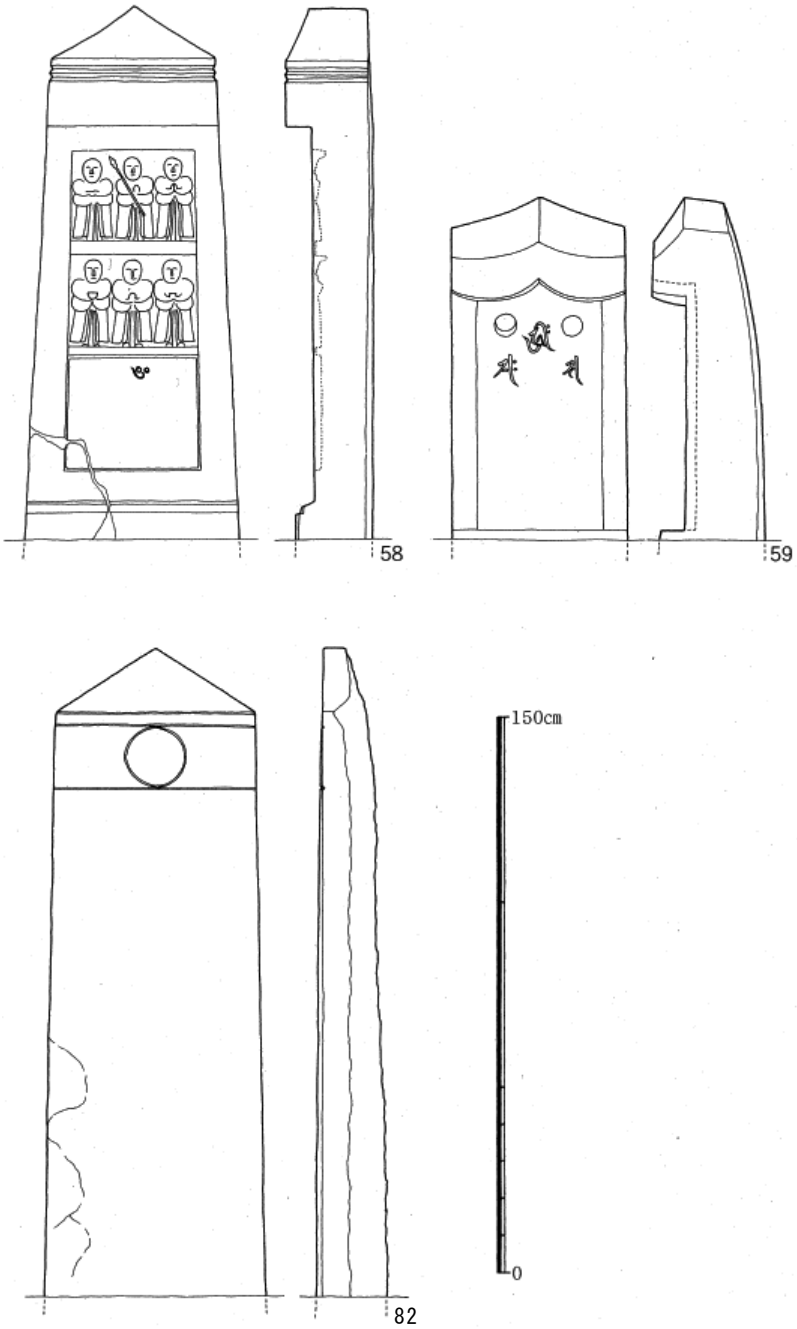


図 23　豊後における整形板碑⑫

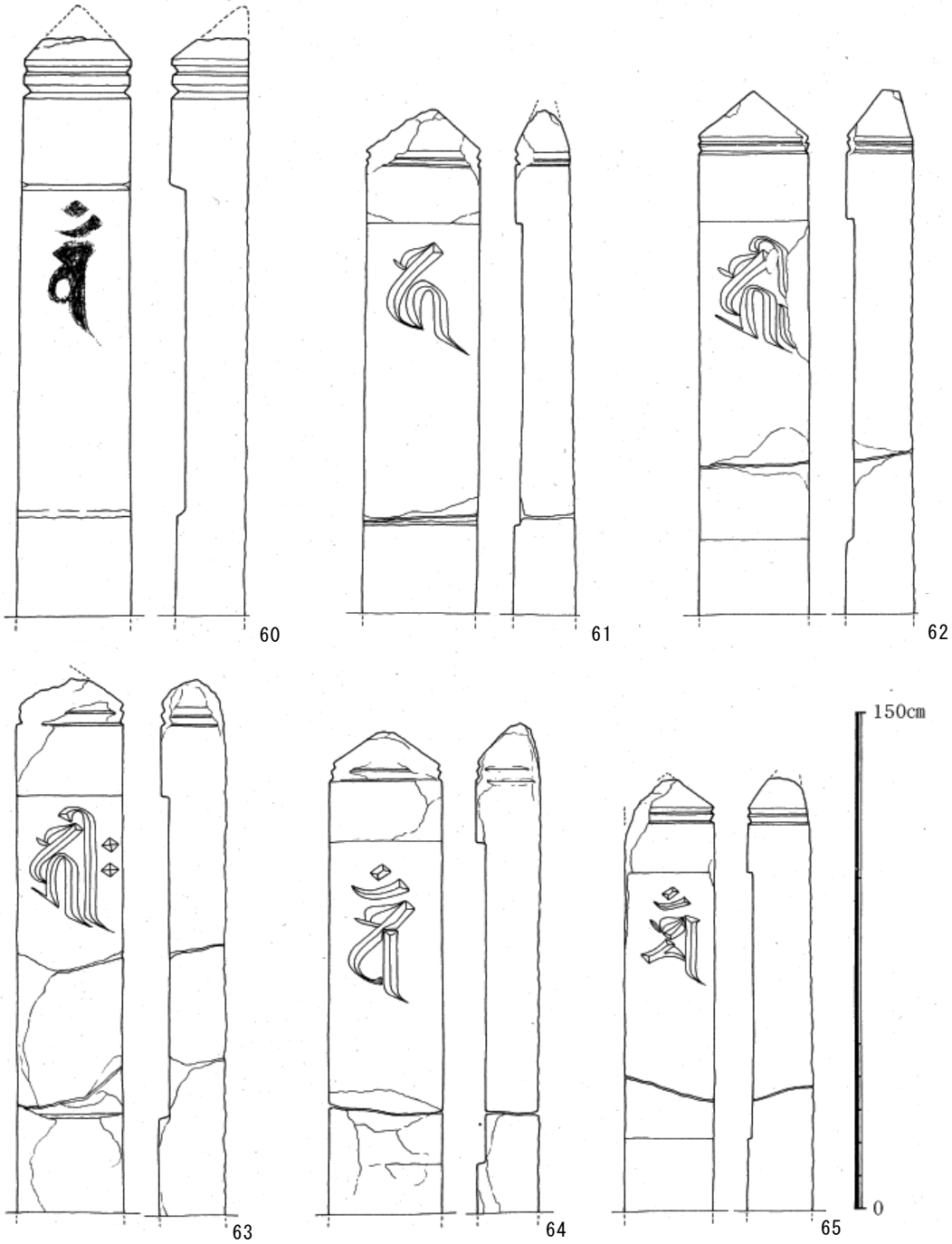


図 24　豊後における整形板碑⑬

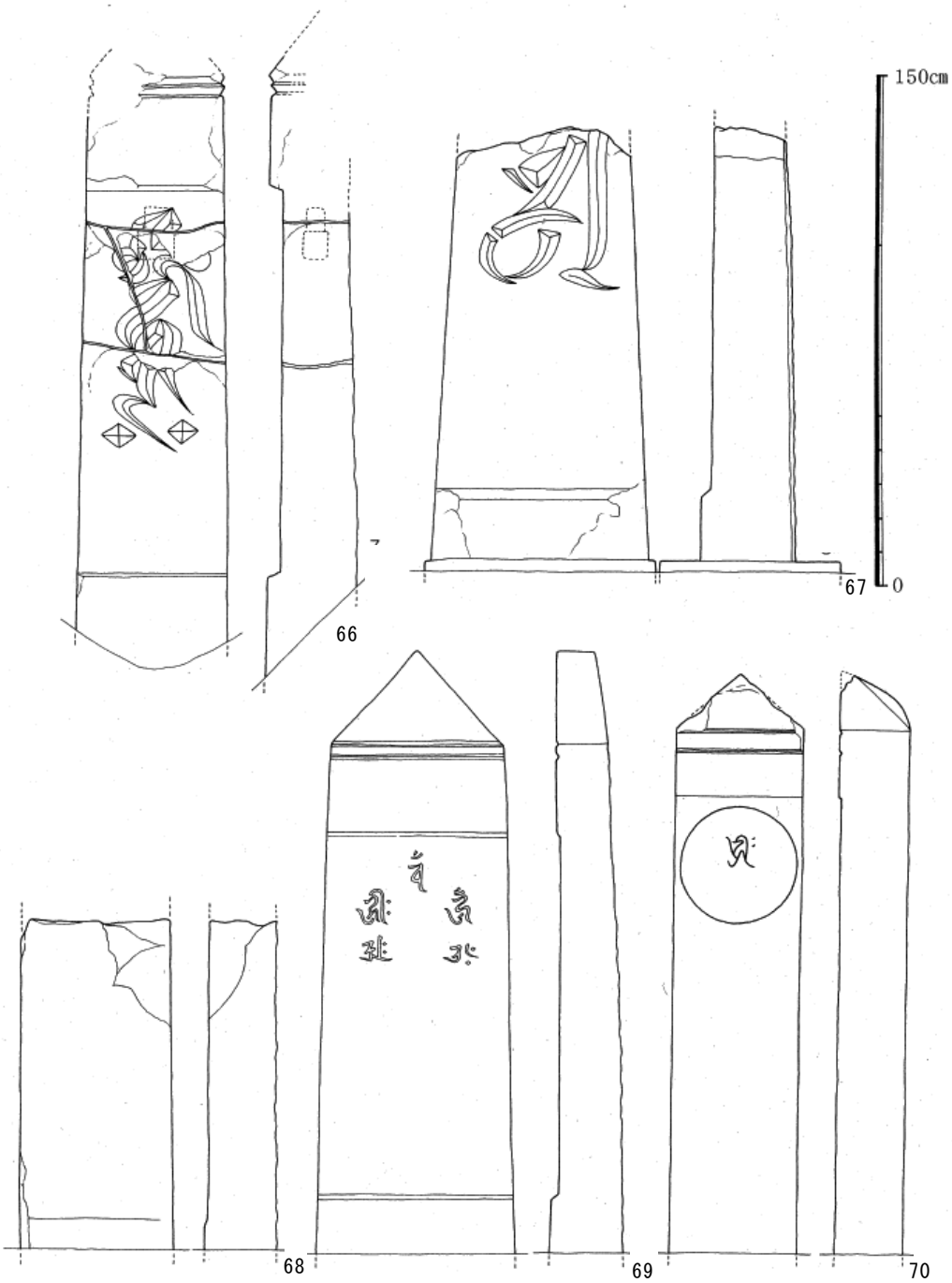


図 25　豊後における整形板碑⑭

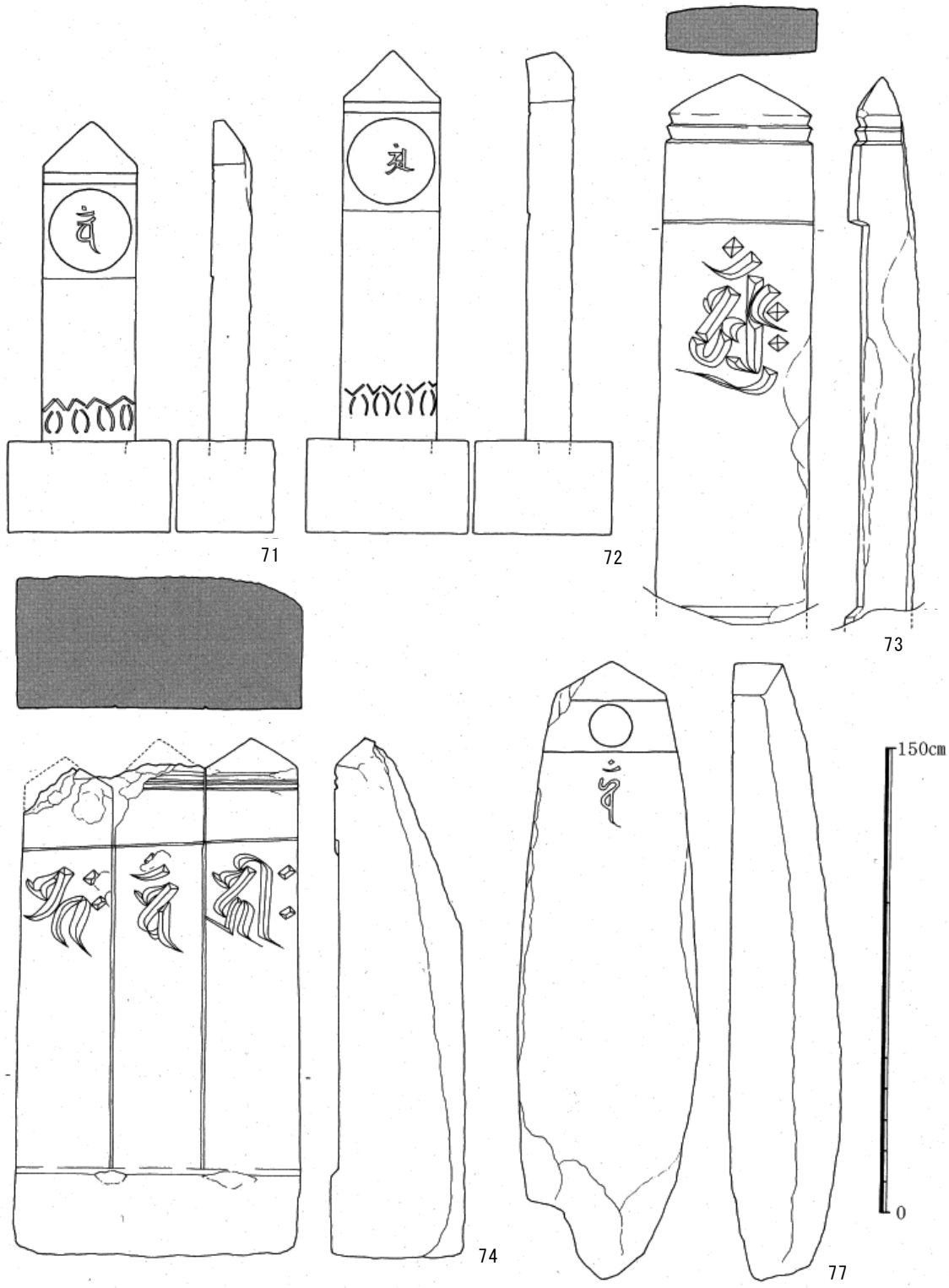


図 26　豊後における整形板碑⑮

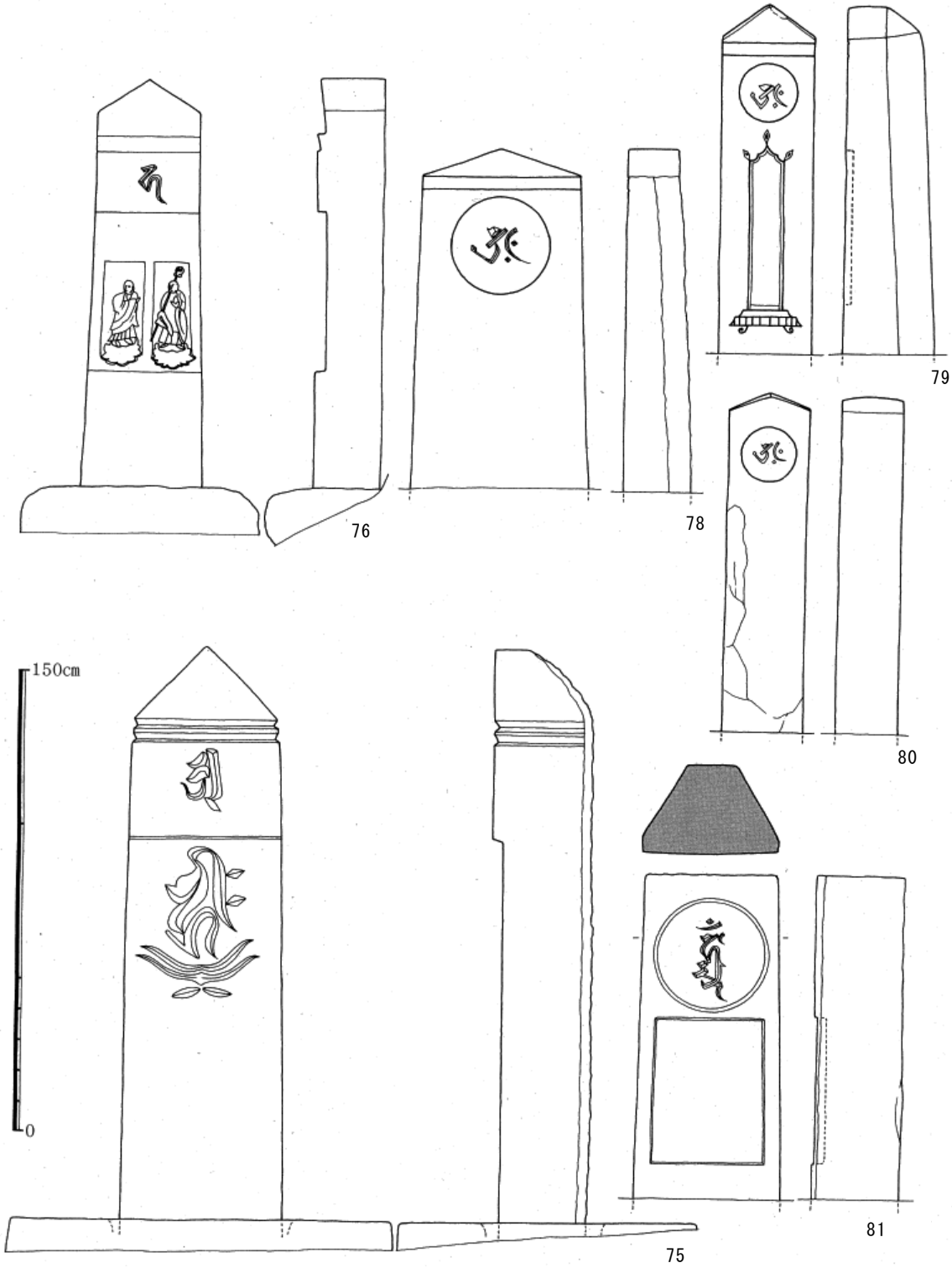


図 27　豊後における整形板碑⑯

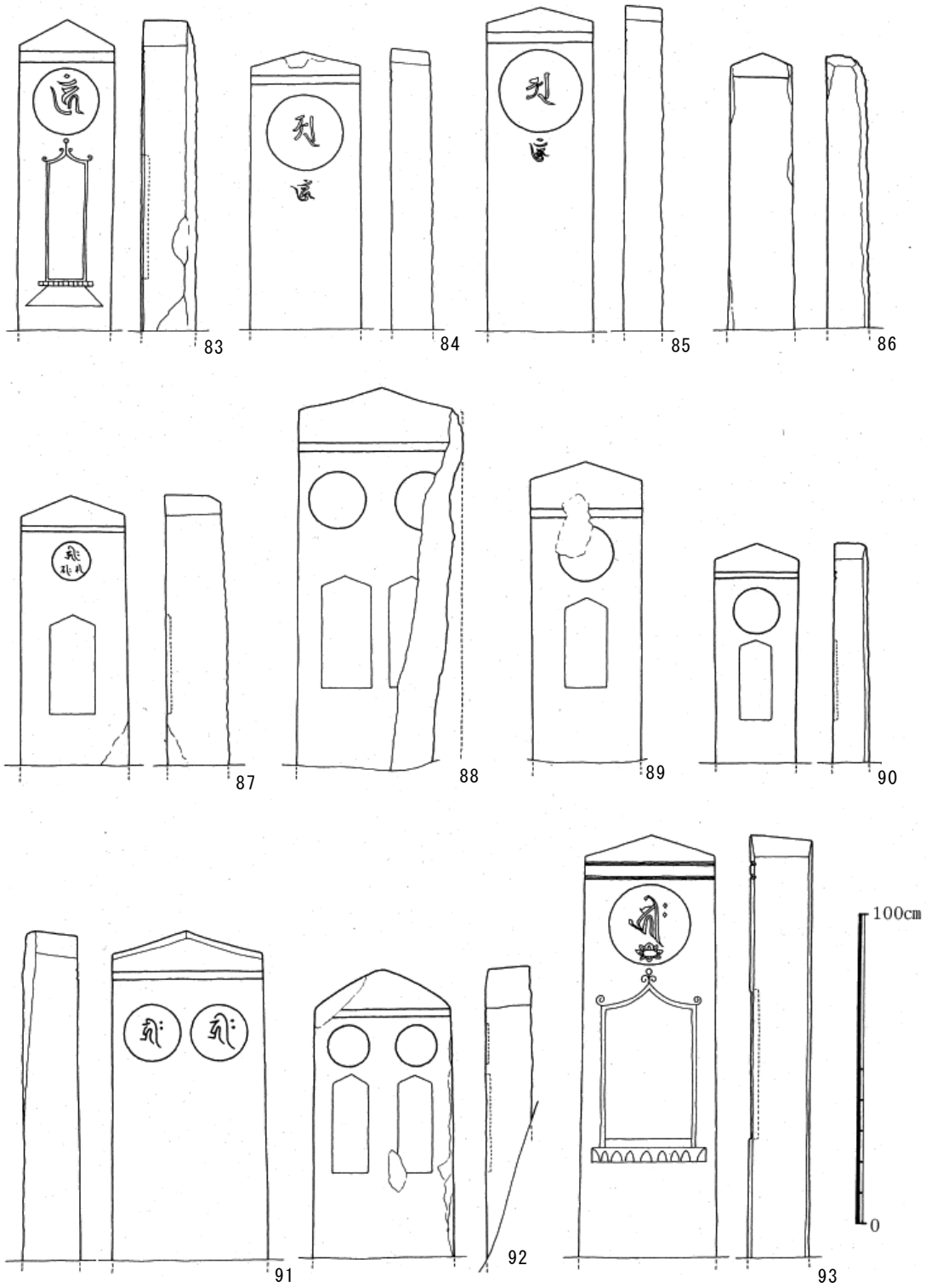


図 28　豊後における整形板碑⑰

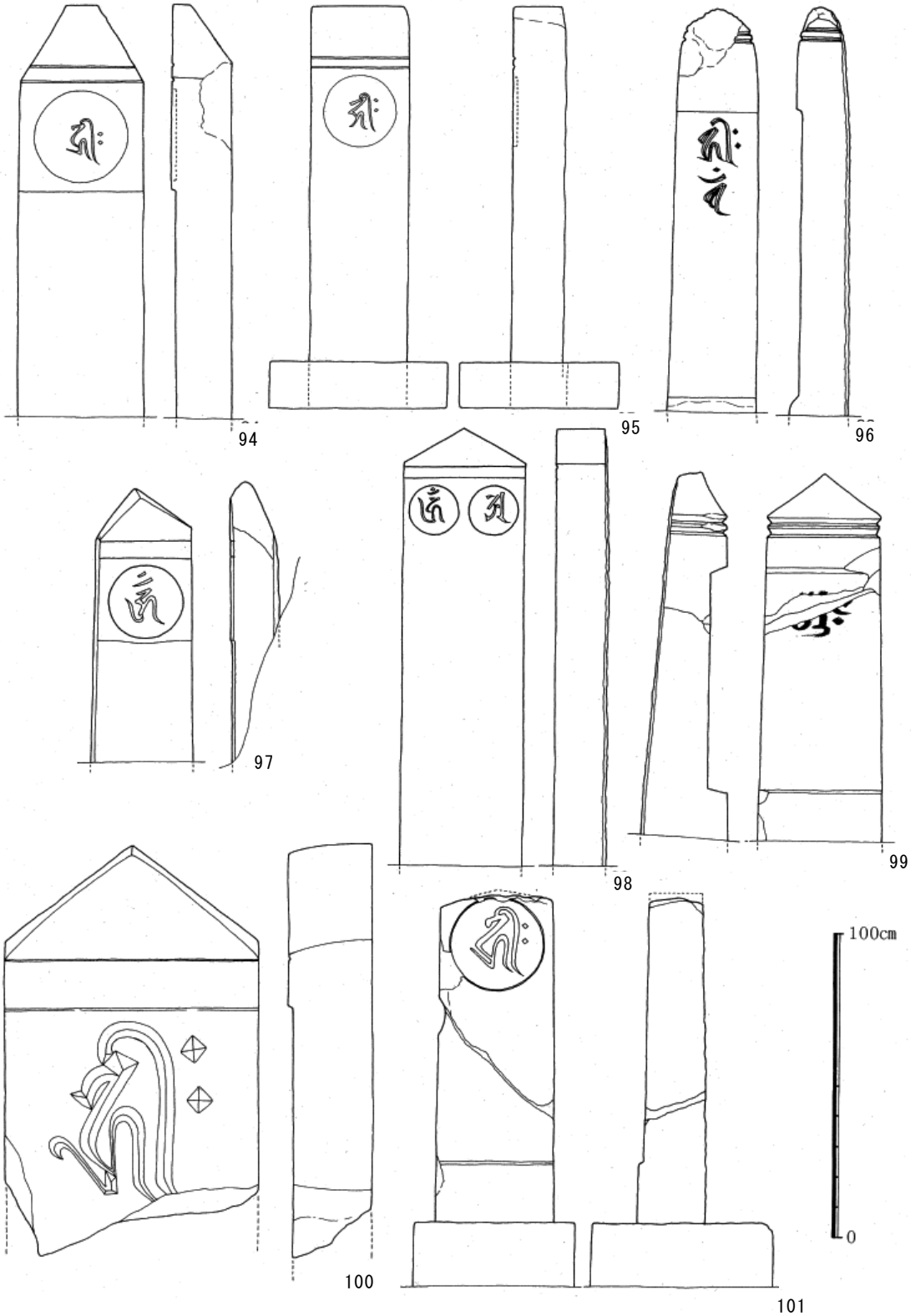


図 29　豊後における整形板碑⑱

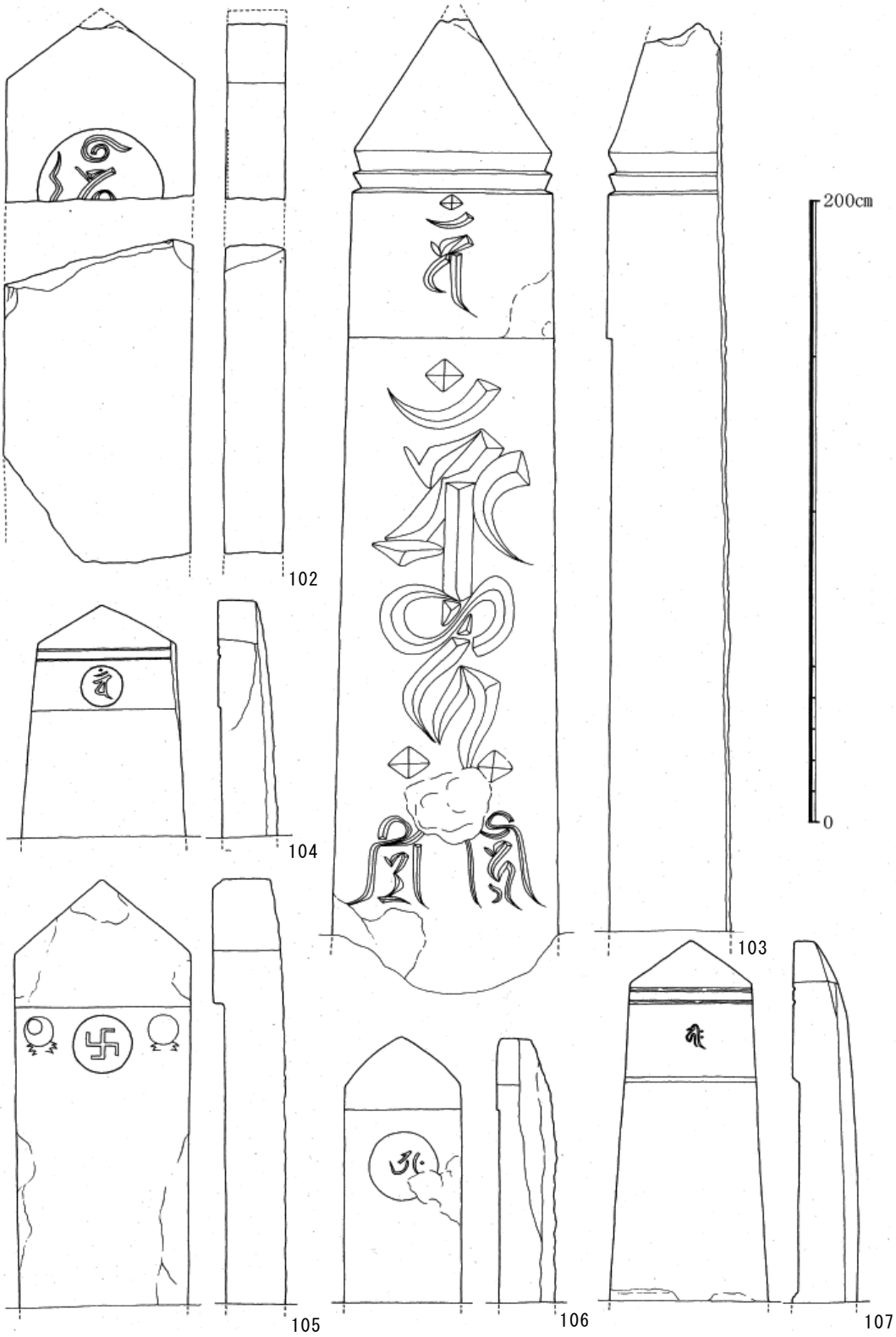


図 30　豊後における整形板碑⑲

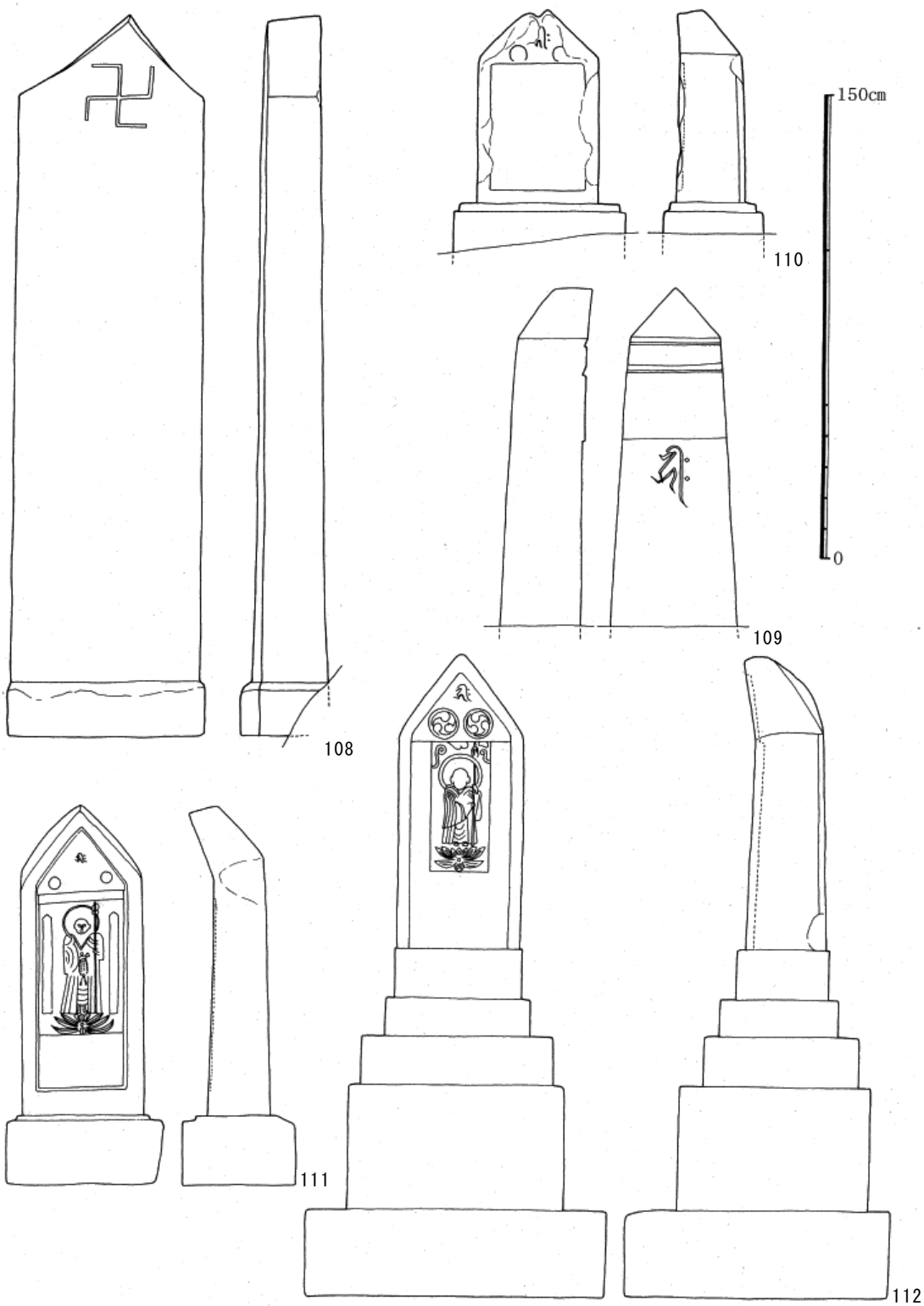


図 31　豊後における整形板碑⑳

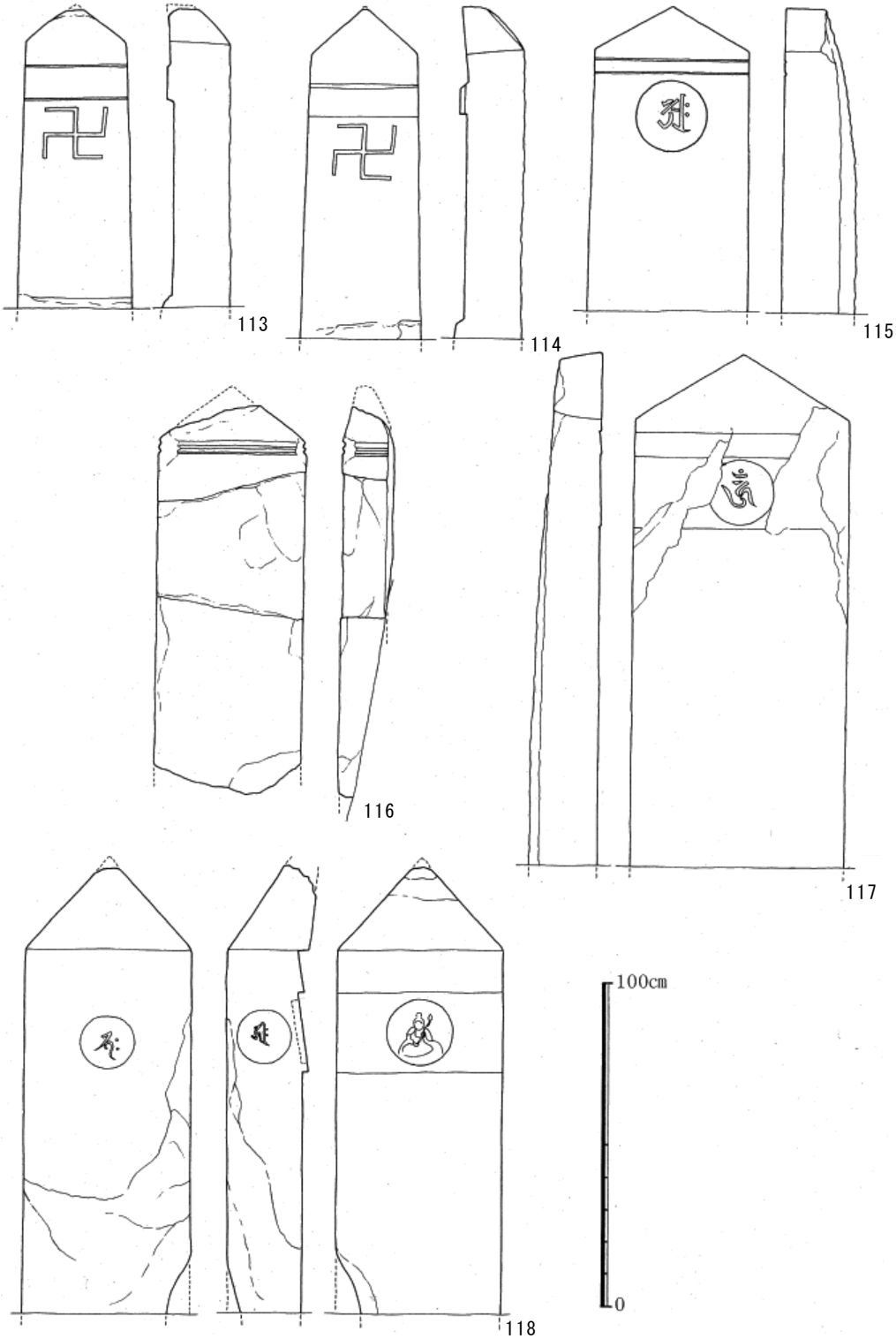


図 32　豊後における整形板碑㉑

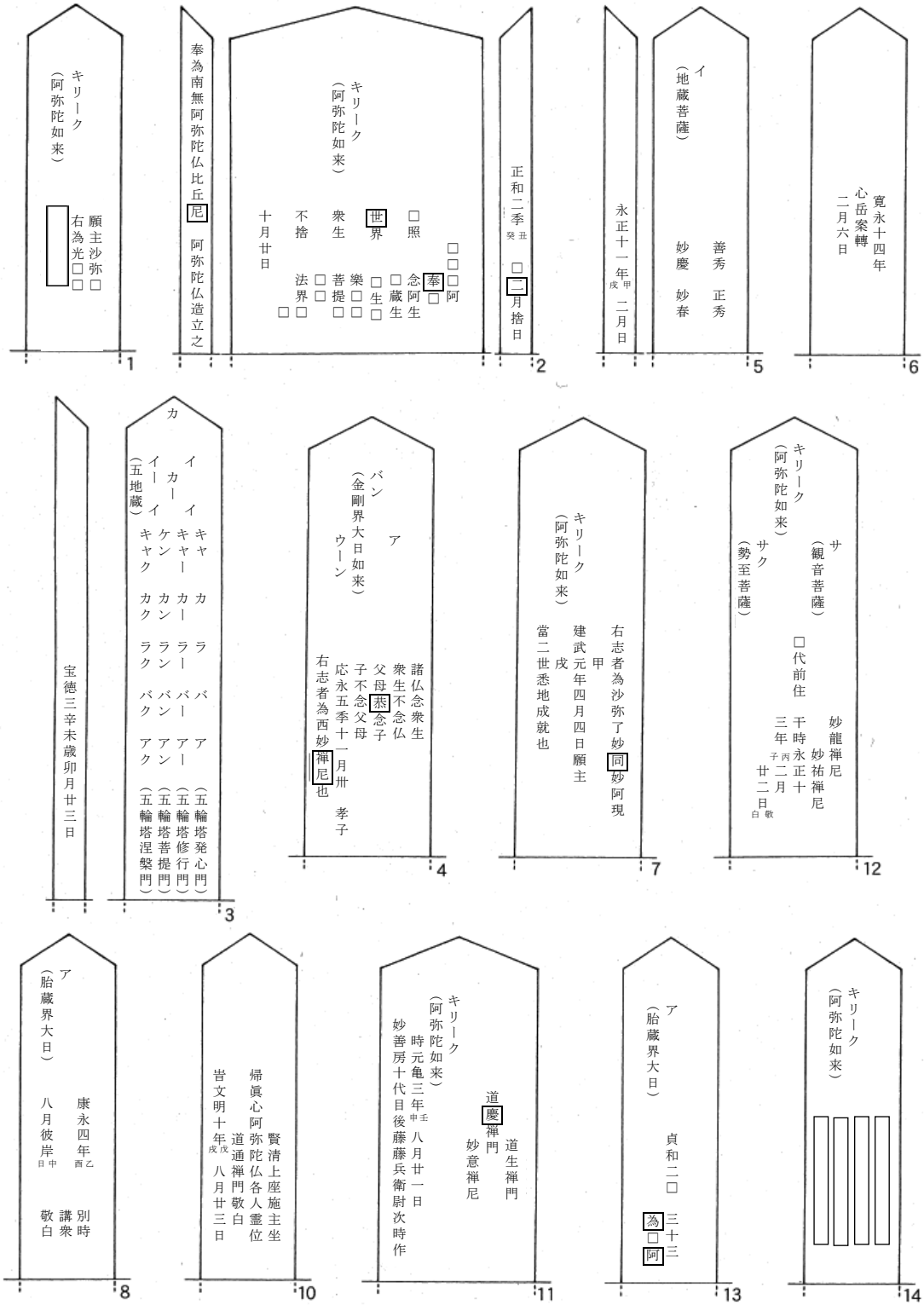


図 33　豊後における整形板碑銘文①

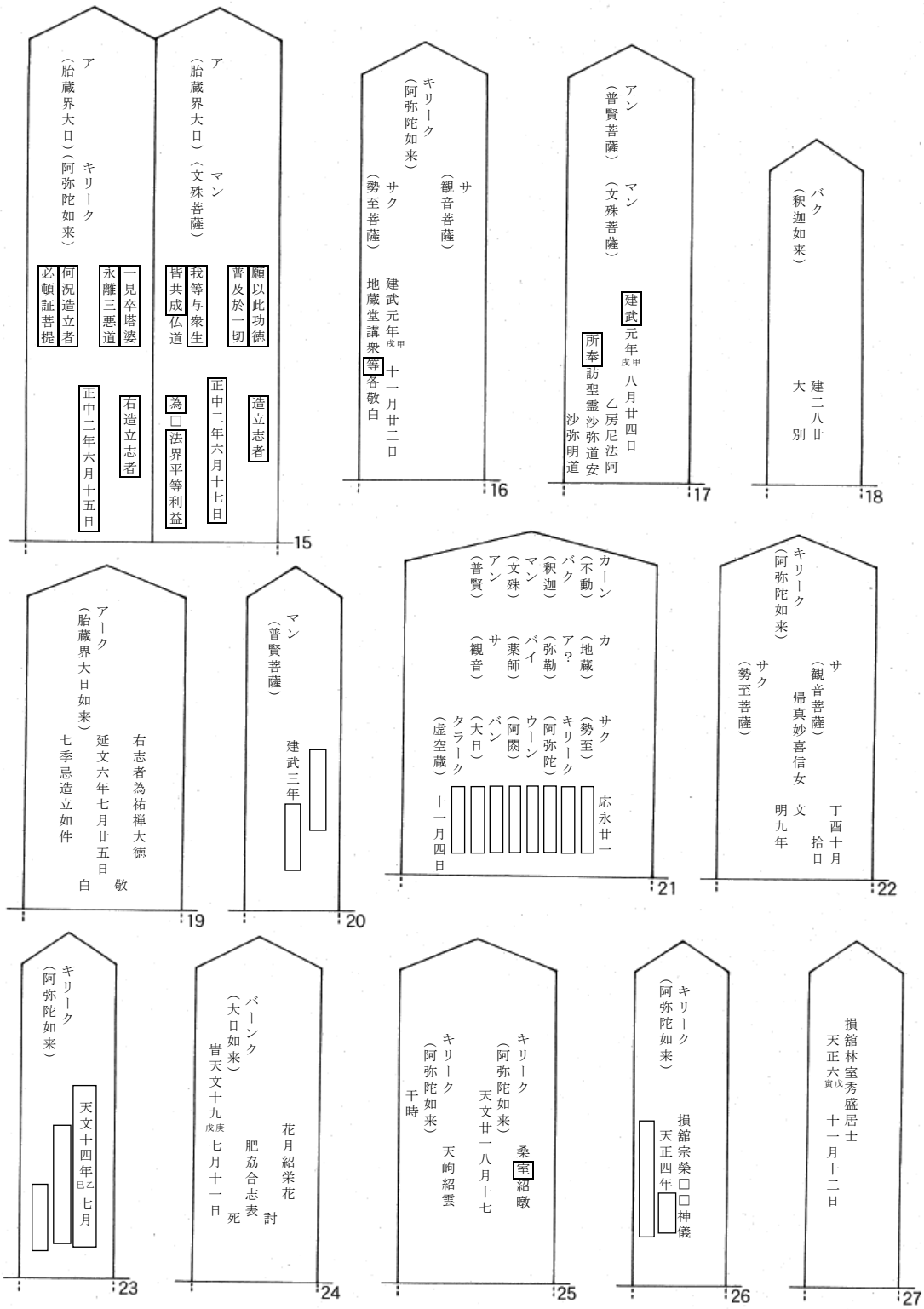


図 34　豊後における整形板碑銘文②

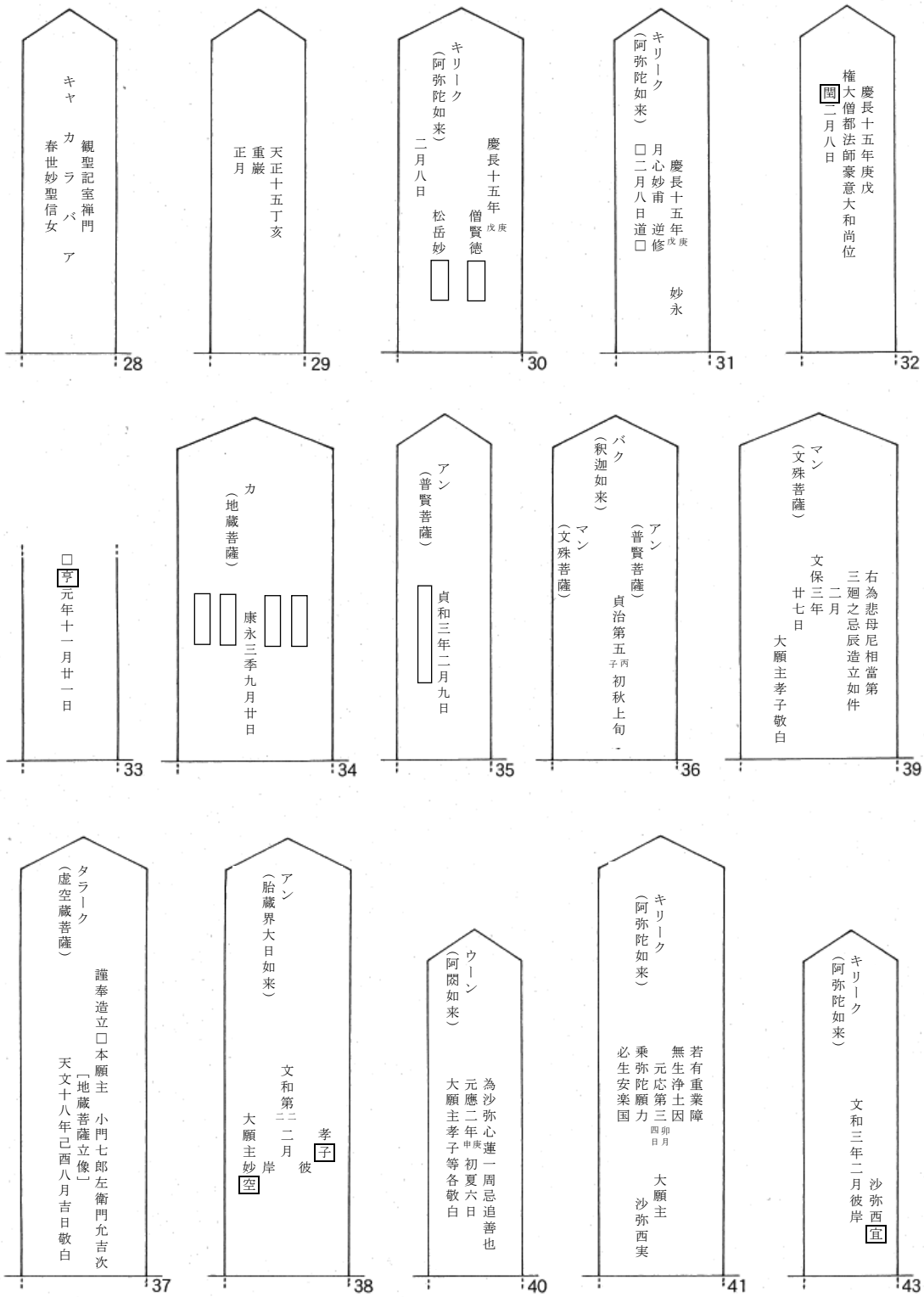


図 35　豊後における整形板碑銘文③

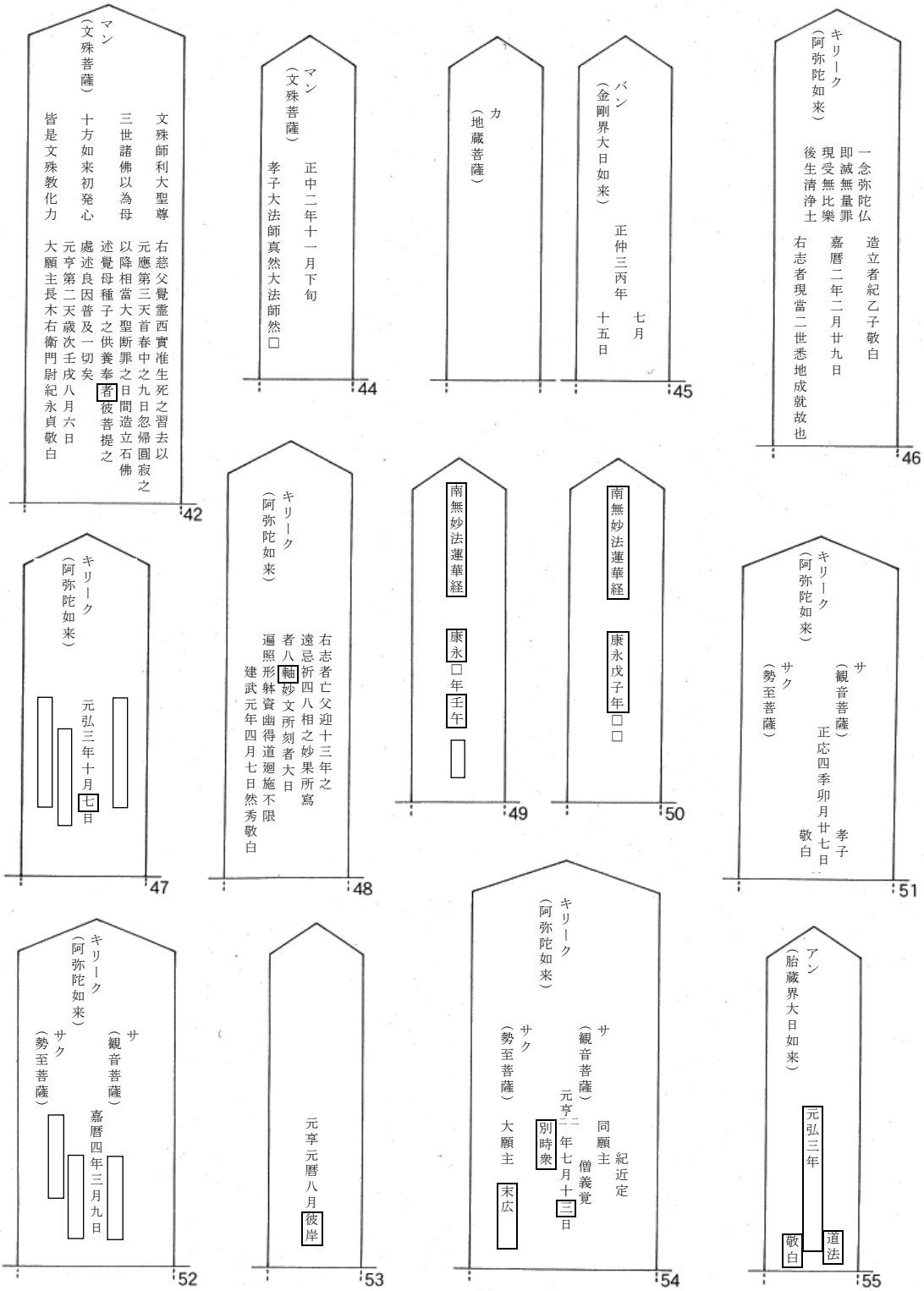


図 36　豊後における整形板碑銘文④

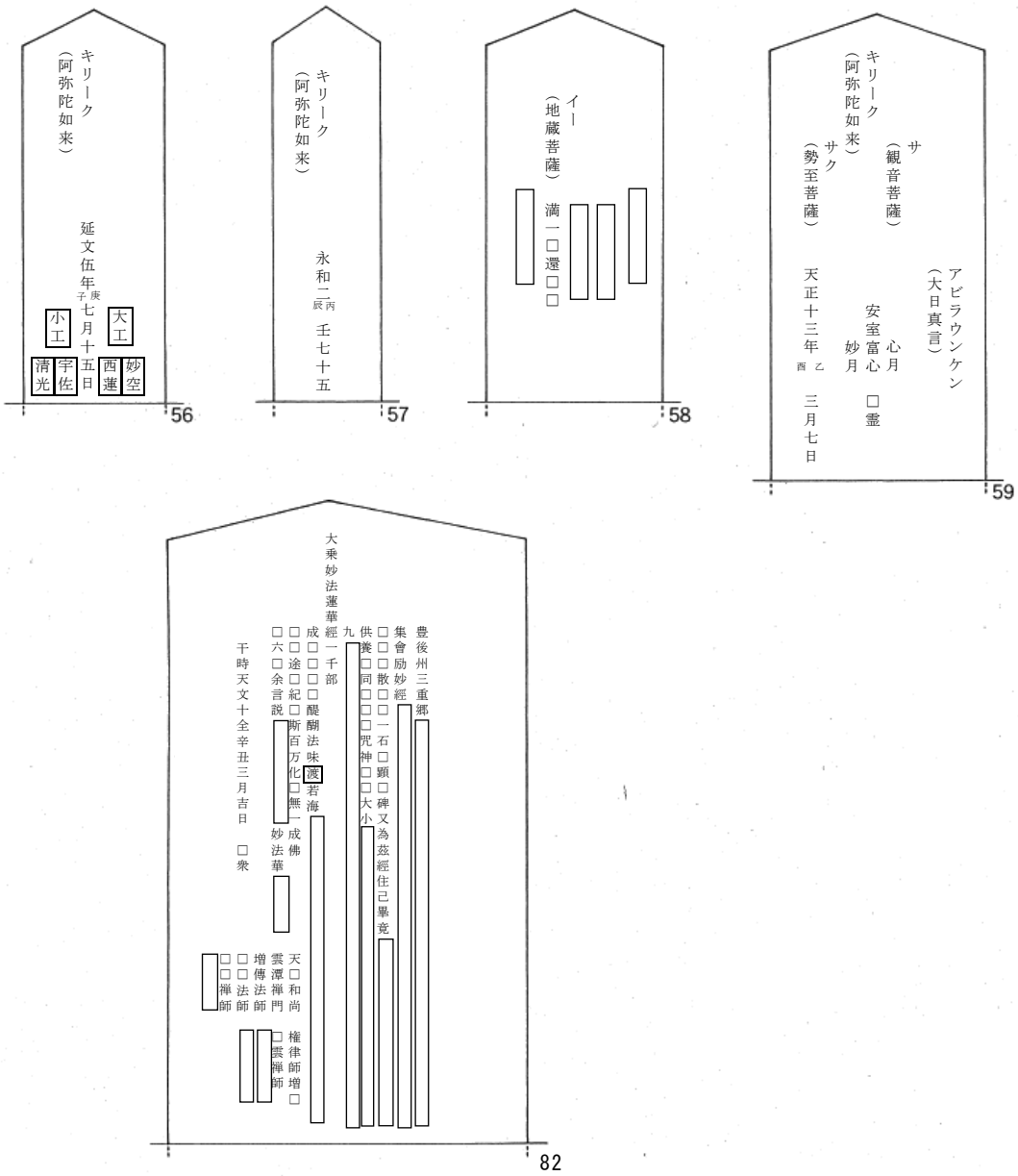


図 37　豊後における整形板碑銘文⑤

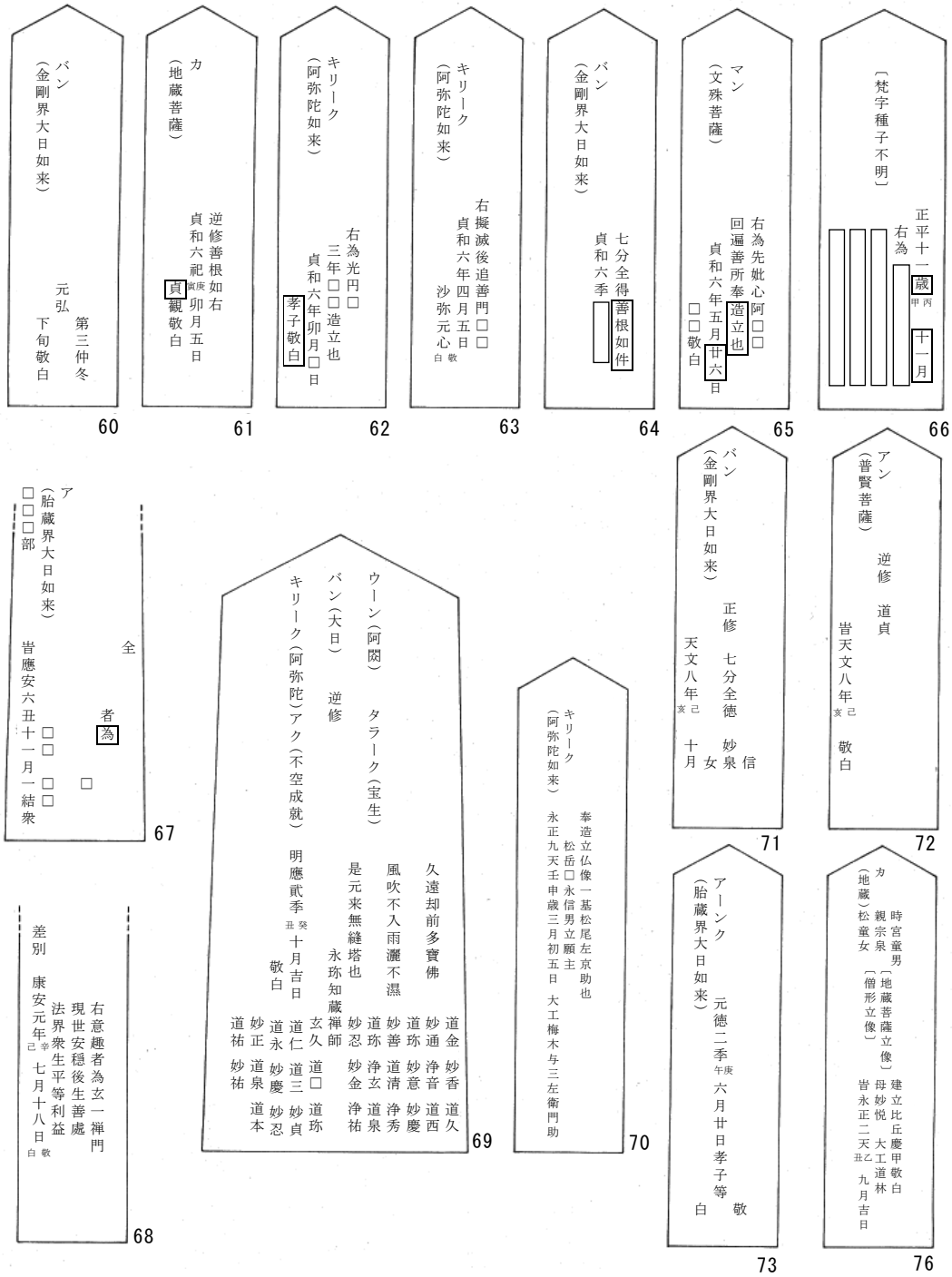


図 38　豊後における整形板碑銘文⑥

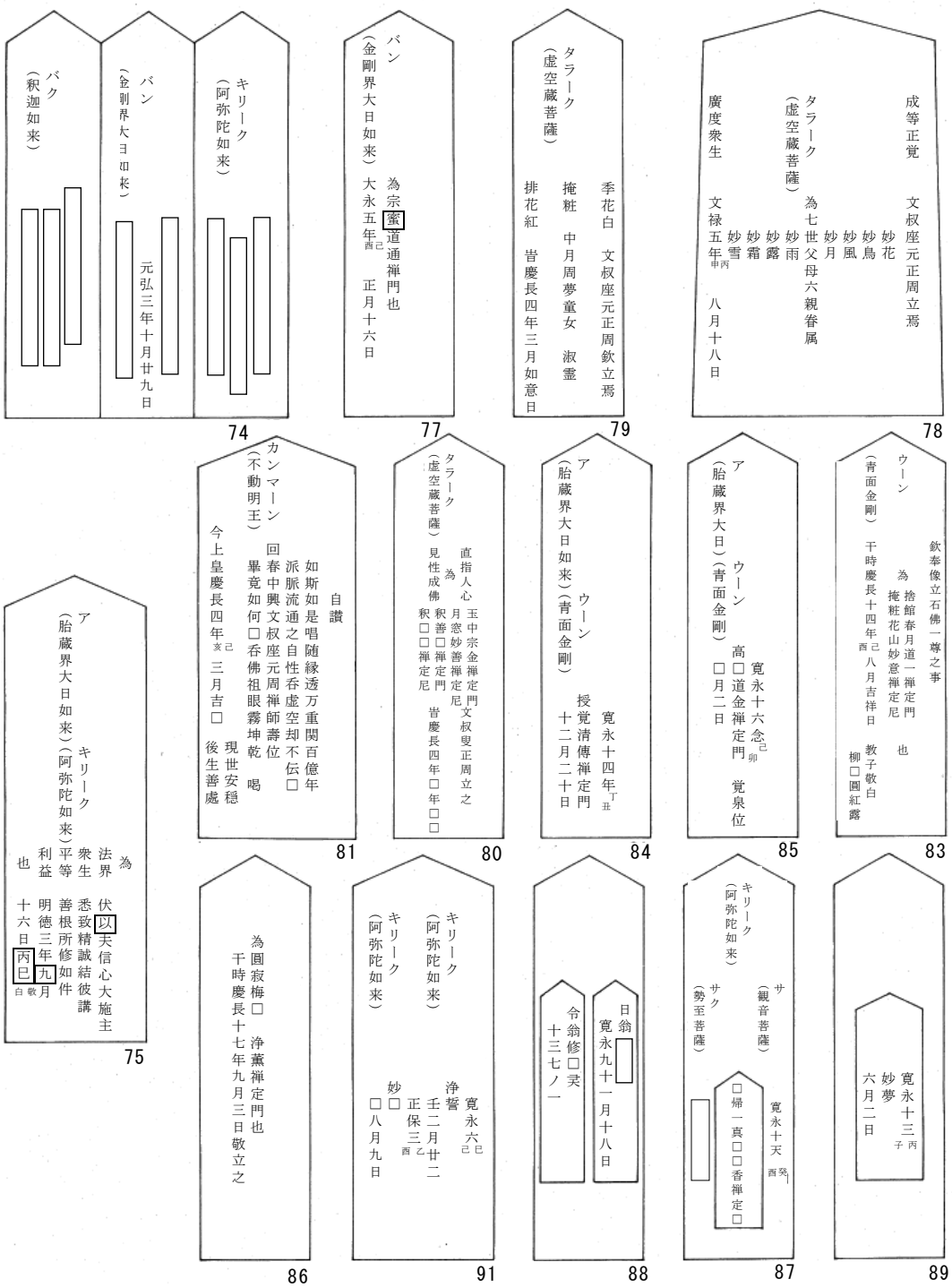


図 39　豊後における整形板碑銘文⑦

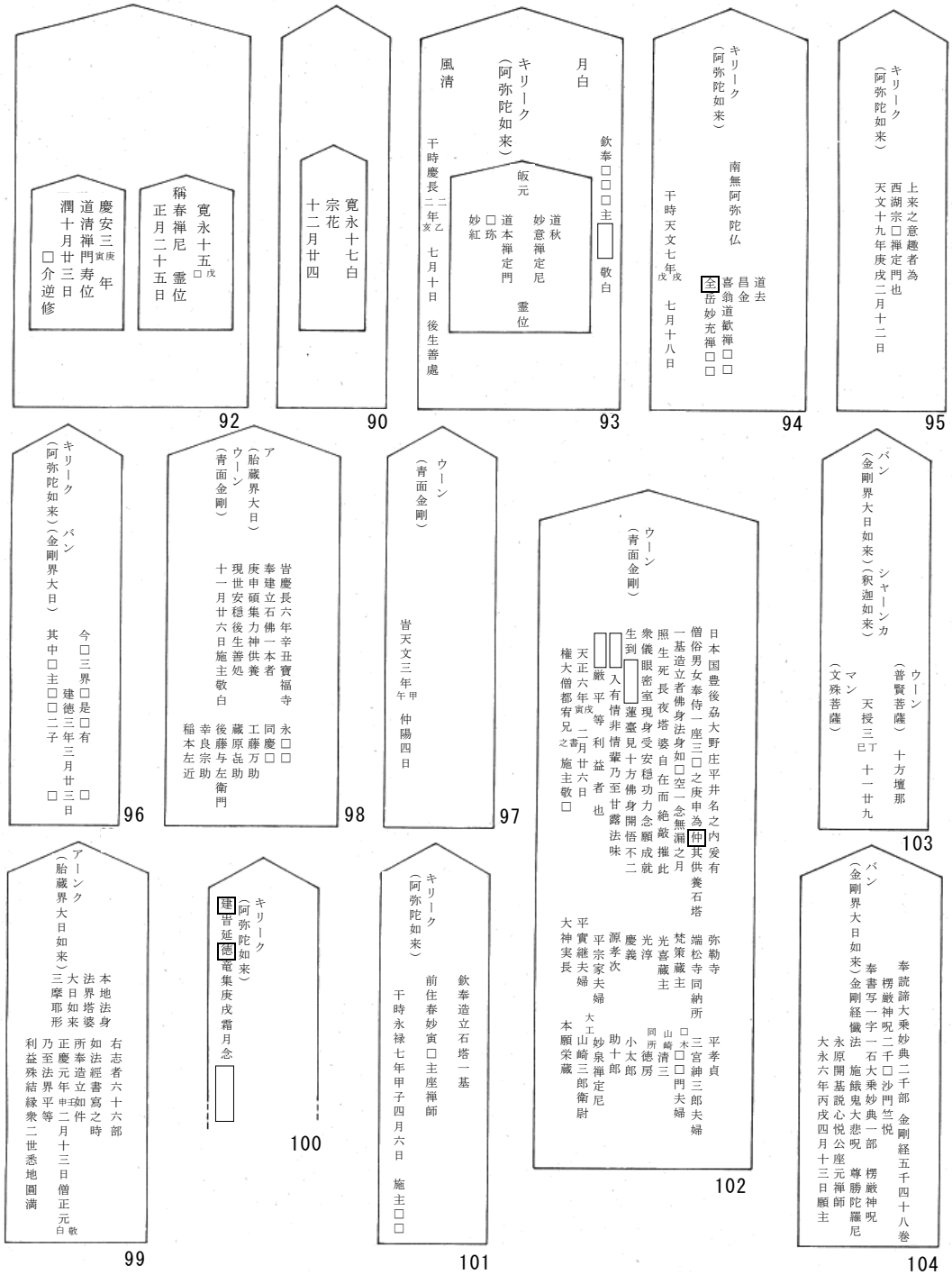


図 40　豊後における整形板碑銘文⑧

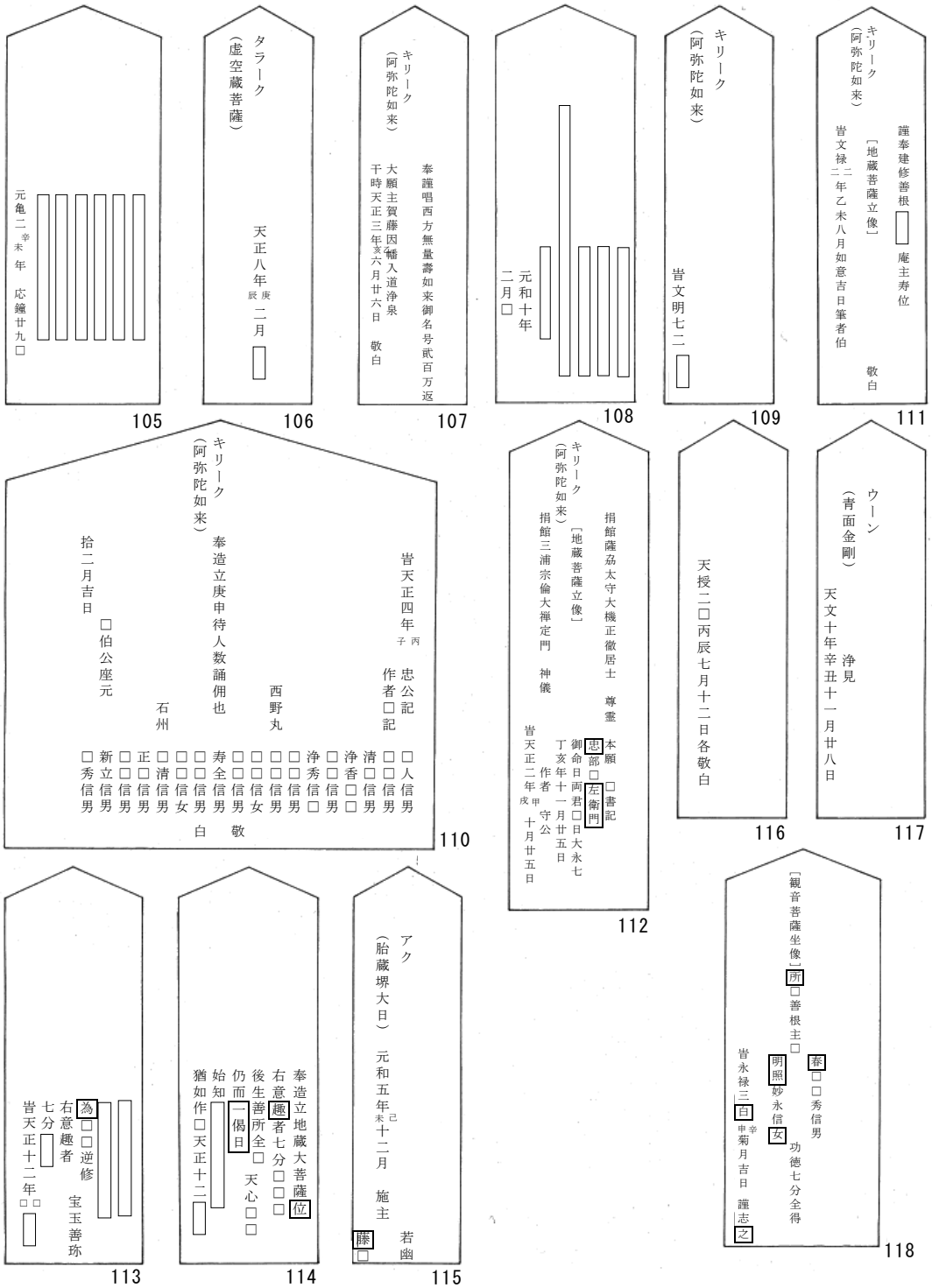


図 41　豊後における整形板碑銘文⑨

肥後

肥後は九州でも最も多くの板碑が確認できる地域である。その多さは、前川清一をはじめとした地元研究者の地道な資料調査の成果によるものだが、自然石板碑の多さが特徴である。中には、笠をもつ自然石塔婆が存在し、これらを地元では板碑として認識しているが、本来は笠をもっていても、現在は失われているものも存在する。自然石板碑の中には、平安期に遡る天養元年(1144)をもつ南小国町千光寺自然石板碑など古式の資料をはじめ、鎌倉期に遡るものも少数例確認できる。

これに対し、整形板碑も存在し、少数ながら古式のものも珍しくはない。正嘉 2 年(1258)銘をもつ宇城市塔本家板碑が板碑の可能性をもつ九州最古例であり、それに続く、弘安 5 年（1282）銘のあさぎり町元永峰観音堂跡板碑も九州で 2 番目に古い。豊後・日向・薩摩・大隅など、13 世紀後半に始まる凝灰岩製板碑地帯と同じ様相をもつものの、最古の紀年銘資料は肥後に存在する。

肥後の特徴としては、整形板碑・自然石板碑の折衷形ともいえる特異な様相をもつ板碑が八代市周辺に流行することがあげられる。八代市周辺では砂岩をはじめ凝灰岩や安山岩など、地元に産出する扁平な自然石の平坦面を利用して梵字種子や銘文を刻み、板碑としている類例が多く確認できるが、正平 15 年（1360）銘をもつ八代市畑中鎮守堂板碑は山形や側線、二条切込み、額部を陰刻線で表現しているものや、建徳 3 年（1372）銘をもつ氷川町天神社板碑は、形態が板碑形に近い自然石を選び、二条切込みや額部を陰刻線で表現しているものなどが確認でき、自然石板碑の中にも板碑形式を線刻で表現しようとするものも確認できる。しかし、これらは南北朝期の板碑にしては極めて小型であり、また、明らかに整形板碑の製作系譜を受け継ぐものではなく、自然石板碑の製作系譜を受け継ぐ工人が知識として板碑形を表面だけに表現しようとしたものと考えられる。

以下では、整形板碑について個々の資料の概要に触れてみたい。

1.賀庭寺跡板碑(表 8-1　図 43-1　図 44-1)

賀底寺跡の境内に中世石造物が、本堂裏に並べられているが、その中の一つである。調整は各面とも丁寧であるが、平らに仕上げた背面は鑿痕の凹凸を残す上から丁寧に磨かれている。正面観は上方幅・下方幅とも同じで、碑身の縦幅が 42.5 ㎝と、鎌倉期の板碑にしては、小ぶりであるが、つくりがよい。碑身には阿弥陀三尊の梵字種子が薬研彫りされ、その下に蓮華座が陰刻されている。蓮華座には赤色顔料が塗られており、正面から側面に廻す二条切込みは断面三角形で彫りが深く、額部・基部とも前方に突出させている。

2.専立寺跡板碑(表 8-2　図 43-2　図 44-2)

本来は方保田八幡宮に所在していたものを専立寺に移し、さらに、山鹿市立博物館敷地内に移されたと伝えられている。整形・調整ともきわめて雑であり、側面の一部は粗い整形で自然面を残す部分が多い。また、背面は全く未加工で自然面を残す。正面のみ粗い整形と調整が施されているが、正面観は歪である。二条切込みは幅広く、つくりも良くない。額部や基部の突出もみられず、碑身全体に大きく梵字種字が薬研彫りされ、梵字種字下に刻銘がみられる。梵字種字はキリーク・カンマーンを上下に刻むものであるが、その形は特異である。

3.柳井寺跡板碑(表 8-3　図 43-3　図 44-3)

本来は柳井寺跡に所在していたものを山鹿市立博物館敷地内に移されたと伝えられている。上方にいくほど細く仕上げる形態をもち、正面のみ丁寧に整形・調整されている。上面・側面、背面は粗い鑿痕を残すのみで、船底状に丸く仕上げている。正面は山型前面を平らにし、わずかに突出させる。碑身上端に幅広の円相を浅く箱彫りした中にキリークの梵字種字を薬研彫りしている。キリークの梵字種字は涅槃点が一つのみからなる稀少な例である。この下には細線陰刻の割付線が刻まれ、刻銘が小さく配置されている。

4.赤子宮裏山 1 号板碑(表 8-4　図 43-4　図 44-4)

赤子宮が存在する丘陵頂部付近に大型五輪塔をはじめとした石塔類が並べられているが、その中に 2 号板碑とともにみられる。向かって左側の板碑を 1 号板碑としたが、各面とも丁寧に整形・調整されている。碑身正面で折損しているが、失われた部分がないため欠損部がない実測図にした。山型は中央で前後に稜線をもつ形態であり、切込みについては、側面が 1 条、正面が 2 条の特異な様相をもつ。額部・基部の突出はみられず、碑面上部の細線陰刻の円相内に「休去」と刻字し、その下に銘文を刻んでいる。

5.赤子宮裏山 2 号板碑(表 8-5　図 43-5　図 44-5)

赤子宮が存在する丘陵頂部付近に大型五輪塔をはじめとした石塔類が並べられているが、その中に 2 号板碑と並立している。向かって右側の板碑を 2 号板碑としたが、各面とも丁寧に整形・調整されている。山型下部の切込み部から上部を失っているが、1 号板碑と同規模・同型式であり、双碑として立てられたものと考えられる。額部・基部の突出はみられず、碑面上部の細線陰刻の円相内に「喝去」と刻字し、その下に銘文を刻んでいる。

6.池亀八幡宮板碑(表 8-6　図 43-6　図 44-6)

池亀八幡宮境内入口の覆屋の中に他の自然石板碑とともに納められている。総高 60 ㎝

の小型の板碑であり、各面とも丁寧に整形・調整されている。横に稜をもつ山型直下の額部はわずかに突出させ、碑身に地蔵座像を半肉彫りしている。蓮華座にのる地蔵は、各部、剥離がみられる。基部は前面を丸く突出させている。刻銘は地蔵背後の碑面に小さく確認できる。

7.塔本家板碑(表 8-7　図 43-7　図 44-7)

民家の庭先の一角に石塔が集められており、その中にある。上面が平らに仕上げられ、別材を嵌め込む枘穴が穿たれている。また、下部は扁平な板石を基部とし、碑身の大きさに合わせた孔に嵌め込まれている。この上下の様相はいかにも不自然であり、上部が欠損し、それを補うために平らに整形して別材を嵌め込む枘穴が後世に穿たれ、また、基礎の台石も折損した碑身を立てるために設えられたもののように思える。碑身だけみれば、消去法で考えても板碑以外には考えられない。碑面には蓮華座上に薬研彫りされた梵字種子が刻まれており、その下に縦横の陰刻線がみられ、刻銘が配置されている。

8.元永峰観音堂跡板碑(表 8-8　図 43-8　図 44-8)

仁王地区買多田の元永峰観音堂跡地と伝えられている場所に立てられている。上半部を欠失し、調整は各面とも丁寧であるが、やや膨らませた背面は粗い調整のままである。基部は前方に突出させ、方形の基礎石の枘穴に嵌め込んでいる。

表８　肥後における紀年銘をもつ整形板碑一覧

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
1	賀庭寺跡板碑	熊本県荒尾市下樺	元応２年	1320	凝灰岩	前川清一 1998
2	専立寺板碑	熊本県山鹿市鍋田	元享元年	1321	凝灰岩	多田隈豊秋 1975
3	柳井寺跡板碑	熊本県山鹿市鍋田	天正４年	1576	凝灰岩	
4	内田赤子宮１号板碑	熊本県和水町内田　赤子宮裏山	天文８年	1539	凝灰岩	
5	内田赤子宮２号板碑	熊本県和水町内田　赤子宮裏山	天文８年	1539	凝灰岩	
6	池亀八幡宮板碑	熊本市池亀町　池亀八幡宮	天文 13 年	1544	凝灰岩	佐藤誠 1989
7	塔本家板碑	熊本県宇城市小川町南部田	正嘉２年	1258	凝灰岩	
8	元永峰観音堂跡板碑	熊本県あさぎり町深田北	弘安５年	1282	凝灰岩	

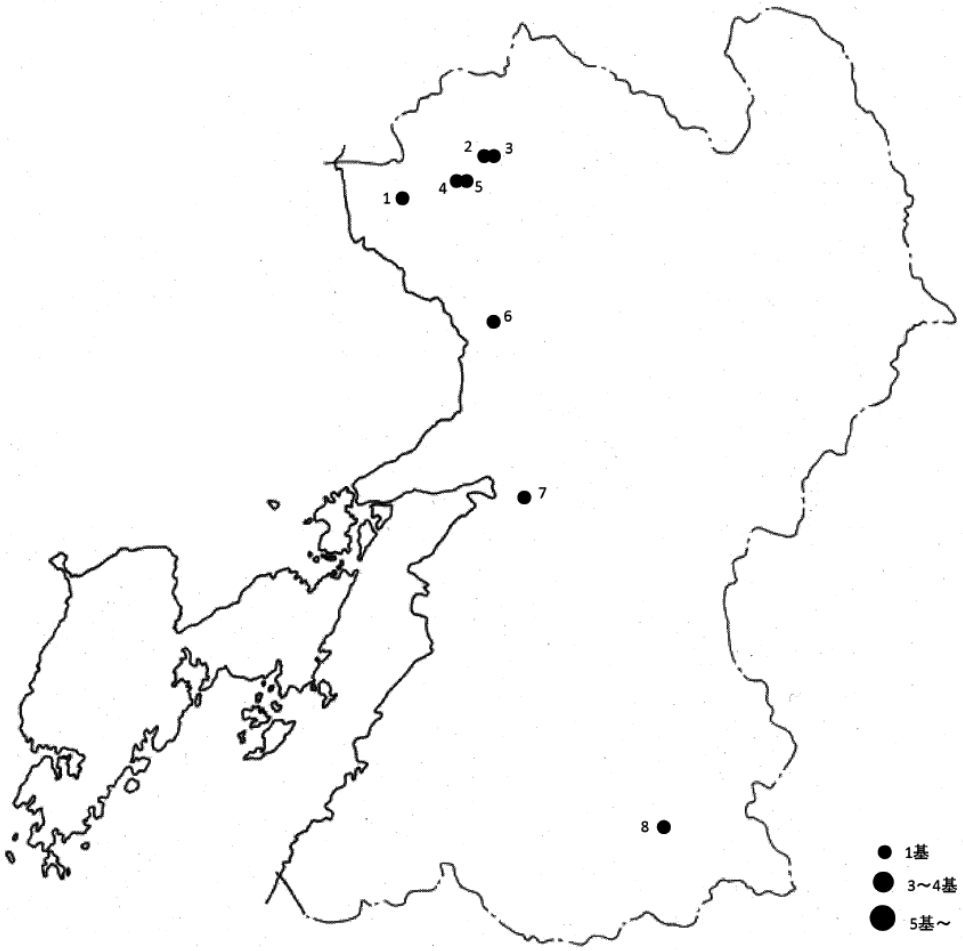


図 42　肥後における整形板碑の分布

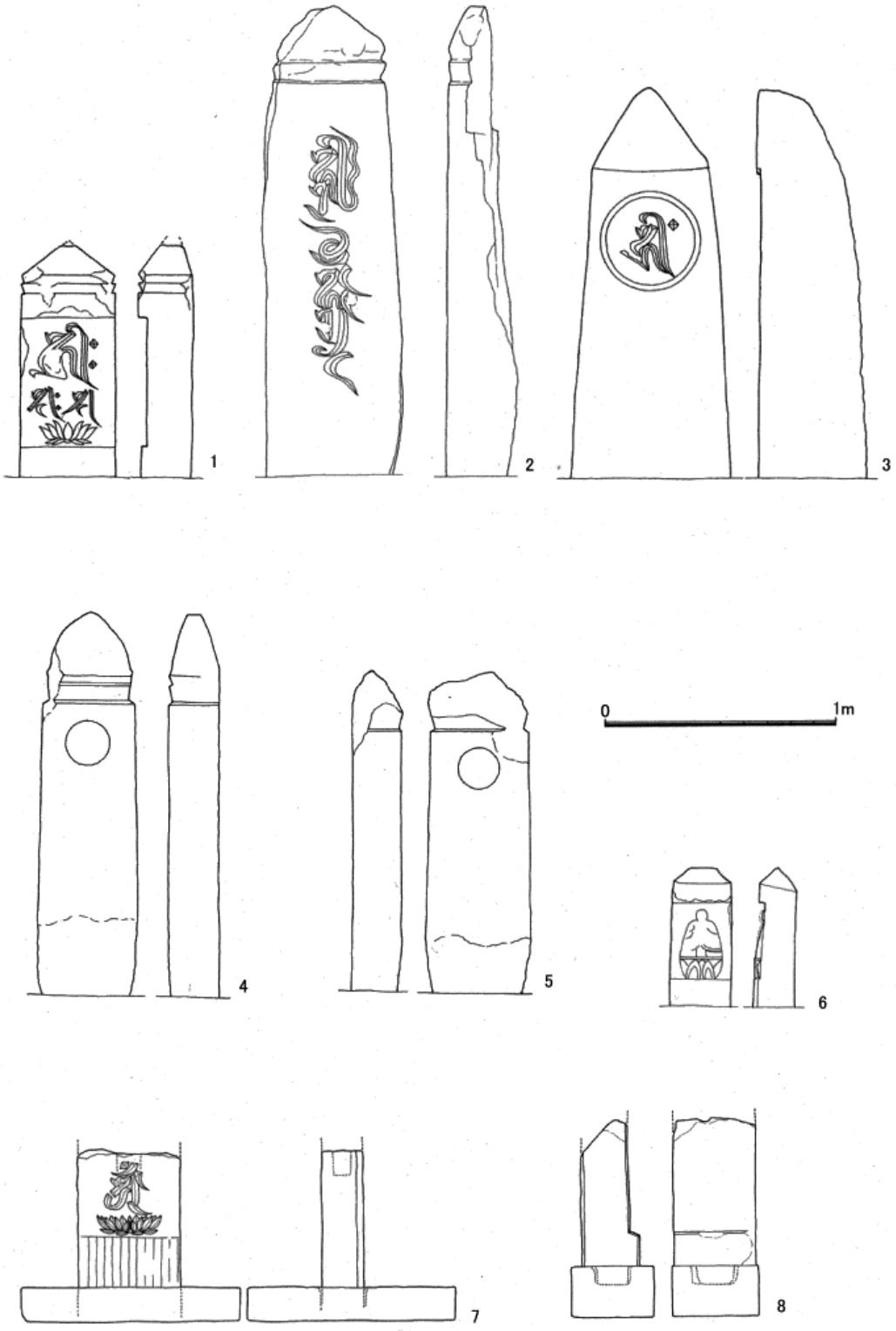


図 43　肥後における整形板碑

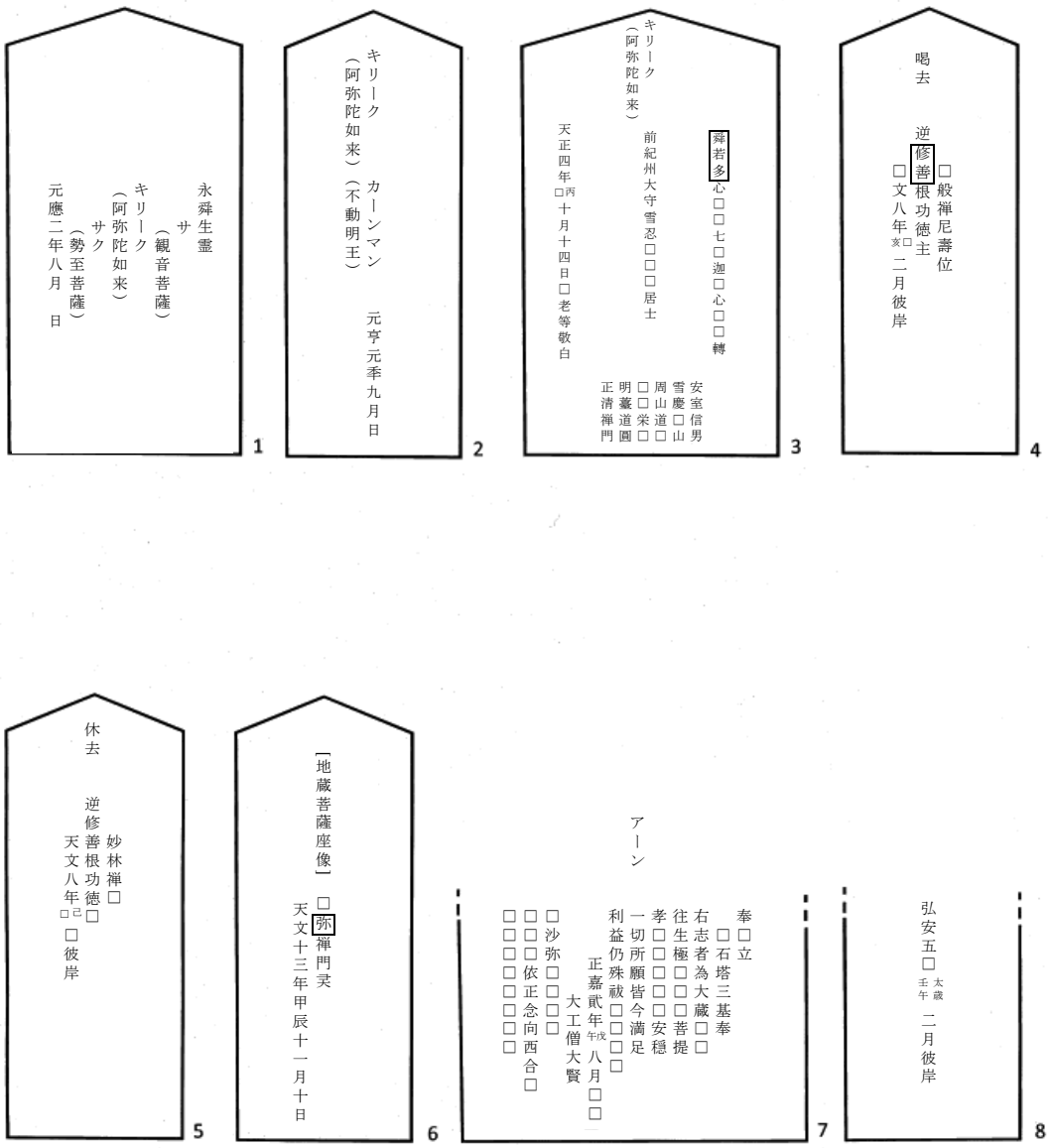


図 44　肥後における整形板碑銘文

日向

日向の紀年銘資料の分布をみると、時代により大きく異なる。鎌倉期に限れば、日向国最古の紀年銘資料をもつ正応6年（1293）銘の日南市折生田板碑や、それに次ぐ永仁3年（1295）銘の日南市大迫寺板碑など、出現期の板碑は日南市に集中する。以降、宮崎市に流れる大淀川流域以南と、鹿児島県に流下する川内川上流域に位置するえびの市に限られ、宮崎県南部に分布域をもち、宮崎県中北部にはみられない。これらはいずれも凝灰岩を石材とし、細部の特徴は山型を三角形に上部に突出させ、山型下に二条切込み、二条切込み下には突出した額部をもち、碑身には梵字種子をあらわし、それとともに銘文等を刻むという豊後・薩摩・大隅の板碑に共通する。鎌倉期の板碑は、同時期の板碑が分布する薩摩・大隅国に近接する地域から始まることがわかる。

南北朝期には紀年銘資料が激減するが、紀年銘がみられない資料の型式的特徴をみると、南北朝期前半には、鎌倉期の分布域において、比較的類例が存在するものと思える。しかし、南北朝期の紀年銘をもつ資料が正平25年（1370）銘の日南市大迫寺板碑のみであるように、その数は少なく、その分布域も旧来の分布域の中に納まることがわかる。

以後、板碑の空白期が存在し、再び出現するのは、戦国期を待たざるをえない。しかし、戦国期に再流行するとはいえ、15世紀代にはきわめて少なく、紀年銘資料に限れば、文明5年（1473）銘をもつ門川町小松板碑のみである。しかし、16世紀代になると、類例が激増し、しかも、平野部であれば、日向国各地において流行していることが確認できる。中でも、日向市周辺においては、題目板碑が大流行し、この背景には日蓮宗隆盛の膝元であった地理的環境と無関係ではないことが考えられる。

なお、石材として宮崎市や西都市周辺において、一部、砂岩や安山岩が使用されている類例が確認できるが、全域において、ほぼ凝灰岩が主流を占めるのは日向の特徴であると考えられる。

以下では、個々の資料についてその概要に触れてみたい。

1.光福寺跡大師堂板碑（表9-1　図46-1　図51-1）

光福寺跡とされる大師堂境内に散在する石塔群中の一つである。頭部が破損し失われ、その形態は明らかでないが、各面とも丁寧に磨かれている。各面には五輪塔四方門の梵字種子が小さく薬研彫りされ、その下に金剛界四仏の梵字種子が小さく薬研彫りされている。東方を正面としたのか、キャ・カ・ラ・バ・ア、ウーンの梵字種子の下部に刻銘がみえる。

2.小園福寿庵跡天正5年銘板碑(表 9-2　図 46-2　図 51-2)

丘陵尾根上の竹藪中に五輪塔・板碑をはじめとした石塔群が埋まっているが、その中の一つである。『日向の金石文』に大永年銘板碑の存在が記されており、後に、佐藤誠の調査でも確認されているが、現在は確認できない。おそらく枯葉や土中に埋もれているものであろうが、これらのほかにも数多くの板碑が存在するものと思える。

調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い鑿痕を残し、わずかに膨らませている。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。額部に円形が細線陰刻されている。碑面中央には墨書の痕跡が確認できるが判読できない。碑面下部には刻銘がみられる。山型部直下の二条切込みは断面三角形を呈するがきわめて彫りが浅い。額部および基部の突出は低く、基部は整形後の調整を行っていない。

3.小松板碑(表 9-3　図 46-3　図 51-3)

五輪塔・板碑等からなる小松石塔群の中に立てられている板碑のひとつである。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い鑿痕の上からわずかに磨かれているのみである。側面にも一部細かい鑿痕が残る。山型部・額部の前面は平坦にし、山型頂部は稜線をもたせている。背面を山型頂部に向かい薄くしているため、稜線は中央部までで終わる。碑面中央には髭題目が陰刻され、その下部に刻銘がみられる。山型部直下の二条切込みは非常にしっかりとした断面三角形を呈する。額部および基部は厚く突出し、基部については3段あり、最下段の基部は調整が雑である。基部上2段の前面に刻銘がみられる。

4.本善寺大永7年銘板碑(表 9-4　図 46-4　図 51-4)

本善寺境内の歴代住職墓地の最奥部に立てられている板碑群のひとつである。この板碑を含め、本善寺境内墓地の存在する中世の石塔群は、日向市新生町2丁目や江良町4丁目に所在のものを移されたと伝えられている。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い鑿痕の上からわずかに磨かれているのみである。山型は三角尖頭状の頂部を中央よりやや前にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。額部に円形がきわめて浅く彫り沈められている。碑面中央には髭題目が陰刻され、その両側およびその下部に刻銘がみられる。なお、碑面下半に刻書銘のほかに墨書銘がみられるが、判読できない。山型部直下の二条切込みはやや弱い断面三角形を呈する。額部および基部の突出は低い。

5.本善寺享禄4年銘板碑(表9-5　図46-5　図51-5)

本善寺境内の歴代住職墓地横の一角に集められている中世石塔群の中に立てられているものである。この板碑を含め、本善寺境内墓地の存在する中世の石塔群は、日向市新生町2丁目や江良町4丁目に所在のものを移されたと伝えられている。調整は背面を含めて正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられている。山型は三角尖頭状の頂部を中央よりやや前にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。碑面中央には髭題目が陰刻され、その両側および下部に刻銘がみられる。山型部直下の二条切込みは断面三角形を呈する。額部の突出は低く、基部はコンクリートで埋められているため観察不能である。

6.本善寺天正13年銘板碑(表9-6　図46-6　図51-6)

本善寺境内の歴代住職墓地の最奥部に立てられている板碑群のひとつである。この板碑を含め、本善寺境内墓地の存在する中世の石塔群は、日向市新生町2丁目や江良町4丁目に所在のものを移されたと伝えられている。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い鑿痕の上からわずかに磨かれているのみである。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。碑面中央には髭題目が陰刻され、その両側下部に刻銘がみられる。山型部直下の二条切込みはしっかりとした断面三角形を呈する。額部および基部の突出は低い。

7.本善寺寛永10年銘板碑(表9-7　図46-7　図51-7)

本善寺境内の歴代住職墓地の最奥部に立てられている板碑群のひとつである。この板碑を含め、本善寺境内墓地の存在する中世の石塔群は、日向市新生町2丁目や江良町4丁目に所在のものを移されたと伝えられている。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い鑿痕を残したままである。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。額部に円形が彫り沈められているが、その中央を丸く膨らませている。碑面中央には髭題目が陰刻され、その両側下部に刻銘がみられる。山型部直下の二条切込みは非常にしっかりとした断面三角形を呈する。額部および基部は突出し、基部正面にも刻銘がみられる。横幅に比較し、奥行きがあるため重厚感がある印象をもつ。

8.定善寺永正12年銘1号板碑(表9-8　図46-8　図51-8)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各10基ずつ計20基、南壇に背中合わせに各10基ずつ計20基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は北壇の南向き東から1基目にあ

たる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は整形時の凹凸が残る上から磨いている。わずかに前後に稜線をもつ山型は三角尖頭状の頂部から各隅に向かい直線的に稜を設けている。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出もしっかりしている。碑面中央には題目が陰刻され、その両側およびその下部に刻銘がみられる。

9.定善寺永正 12 年銘 2 号板碑(表 9-9　図 46-9　図 51-9)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基、南壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は北壇の南向き東から 2 基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は整形時の凹凸が残る上から磨き、わずかに膨らませている。わずかに前後に稜線をもつ山型は三角尖頭状の頂部から各隅に向かい直線的に稜を設けている。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出もしっかりしている。碑面中央には題目が陰刻され、その両側およびその下部に刻銘がみられる。

10.定善寺永正 14 年銘板碑(表 9-10　図 46-10　図 51-10)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基、南壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は南壇の北向き東から 2 基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は整形時の凹凸が残る上から磨き、わずかに膨らませている。わずかに前後に稜線をもつ山型は三角尖頭状の頂部から各隅に向かい直線的に稜を設けている。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出もしっかりしている。碑面中央には題目が陰刻され、その両側およびその下部に刻銘がみられる。

11.定善寺大永 6 年銘板碑(表 9-11　図 46-11　図 51-11)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基、南壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は北壇の南向き東から 3 基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は整形時の凹凸がわずかに残る程度に上から磨いている。側面と背面の境目には、面取りが行われ稜を消している。わずかに前後に稜線をもつ山型は三角尖頭状の頂部から各隅に向かい直線的に

稜を設けている。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出もしっかりしており、額部には 2 ㎜の深さの円形が彫り沈められている。碑面中央には題目が陰刻され、その両側およびその下部に刻銘がみられる。

12.定善寺享禄 3 年銘板碑(表 9-12　図 46-12　図 52-12)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基、南壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は北壇の南向き東から 4 基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は磨きがやや劣る。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、頂部から各隅に向かい直線的に稜を設けている。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出もしっかりしている。碑面中央には題目が陰刻され、その両側およびその下部に刻銘がみられる。

13.定善寺天文 7 年銘板碑(表 9-13　図 46-13　図 52-13)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基、南壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は南壇の北向き東から 5 基目にあたる。調整は背面も含め、正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられている。前後に短い稜線をもつ山型は三角尖頭状の頂部から各隅に向かい直線的に稜を設けている。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出もしっかりしている。碑面中央には題目が陰刻され、その両側およびその下部に刻銘がみられる。

14.定善寺天文 10 年銘板碑(表 9-14　図 46-14　図 52-14)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基、南壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は北壇の南向き東から 6 基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は磨きがやや劣る。前後に稜線をもつ山型は三角尖頭状の頂部から各隅に向かい直線的に稜を設けている。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出もしっかりしている。碑面中央には題目が陰刻され、その両側およびその下部に刻銘がみられるとともに、墨書銘も確認できるが、現在では判読できない。

15.定善寺天文 11 年銘板碑(表 9-15　図 46-15　図 52-15)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基、南壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は南壇の北向き東から 6 基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面の磨きは粗く、やや膨らませている。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出もしっかりしている。碑面中央には髭題目が大きく陰刻され、その両側およびその下部に刻銘がみられる。

16.定善寺永禄 11 年銘板碑(表 9-16　図 46-16　図 52-16)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基、南壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は北壇の南向き東から 7 基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は磨きがやや劣る。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出もしっかりしている。碑面中央には髭題目が大きく陰刻され、その両側およびその下部に刻銘がみられる。また、基部の突出もみられる。

17.定善寺永禄 12 年銘板碑(表 9-17　図 46-17　図 52-17)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基、南壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は南壇の北向き東から 7 基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い磨きが施されている。山型は三角尖頭状の頂部を中央よりやや後方にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出は低い。碑面中央には髭題目が陰刻され、その両側およびその下部に刻銘がみられる。

18.定善寺元亀 3 年銘 1 号板碑(表 9-18　図 46-18　図 52-18)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基、南壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は北壇の南向き東から 9 基目にあ

たる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い鑿痕を残したままである。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出もしっかりしており、額部正面に円形を8㎜の深さで彫り沈めている。碑面中央には題目が陰刻され、その両側およびその下部に刻銘がみられる。

19.定善寺元亀3年銘2号板碑(表9-19　図47-19　図52-19)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各10基ずつ計20基、南壇に背中合わせに各10基ずつ計20基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は南壇の北向き東から9基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い磨きが施されている。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出はやや低い。碑面中央には題目が陰刻され、その両側およびその下部に刻銘がみられる。

20.定善寺元亀3年銘3号板碑(表9-20　図47-20　図52-20)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各10基ずつ計20基、南壇に背中合わせに各10基ずつ計20基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は北壇の南向き東から8基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い鑿痕を残したままである。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出はやや低い。碑面中央には題目が陰刻され、その両側及び下部に刻銘がみられる。

21.定善寺元亀3年銘4号板碑(表9-21　図47-21　図52-21)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各10基ずつ計20基、南壇に背中合わせに各10基ずつ計20基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は南壇の北向き東から8基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い鑿痕を残したままである。背の低い山型は三角尖頭状の頂部を中央よりやや後方にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出はやや低い。碑面中央には題目が陰刻され、その両側に刻銘がみられる。

22.定善寺天正5年銘板碑(表9-22　図47-22　図52-22)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各10基ずつ計20基、南壇に背中合わせに各10基ずつ計20基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は五輪塔の並びに配されている。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられ、背面は粗い加工痕を残すままである。山型は三角尖頭状の頂部を中央よりやや後方にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出もしっかりしており、額部正面には円形を2㎜程度彫り沈めている。碑面中央には定善寺9世の名が陰刻され、その両側に刻銘がみられる。碑身下はやや広めの加工痕を残す部分がみられる。

23.定善寺慶長7年銘板碑(表9-23　図47-23　図52-23)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各10基ずつ計20基、南壇に背中合わせに各10基ずつ計20基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は南壇の北向き東から10基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い加工痕を残したままである。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出もしっかりしている。碑面中央には題目が陰刻され、その両側に刻銘がみられる。

24.定善寺慶長8年銘板碑(表9-24　図47-24　図53-24)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各10基ずつ計20基、南壇に背中合わせに各10基ずつ計20基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は南壇の北向き東から10基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い鑿痕を残したままである。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。山型下部から額部にかけての表面が剥落しているが、額部の突出もしっかりしており、額部正面に円形を彫り沈めていることが確認できる。碑面中央には題目が陰刻され、その両側及び下部に刻銘がみられ、基部は突出している。

25.定善寺元和10年銘板碑(表9-25　図47-25　図53-25)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各10基ずつ計20基、

南壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は北壇の北向き東から 1 基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも雑であり、バランスも悪い。背面は磨かれているものの、加工痕の凹凸を消しきれていない。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出もしっかりしており、額部正面に中央を丸く膨らませる日輪を彫り沈めている。碑面中央には題目が陰刻され、その両側に刻銘がみられる。

26.定善寺寛永 6 年銘 1 号板碑(表 10-26　図 47-26　図 53-26)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基、南壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は南壇の南向き東から 2 基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも雑であり、バランスも悪い。背面は粗い加工痕を残したままである。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出は低い。碑面中央には題目が陰刻され、その両側に刻銘がみられる。基部の突出もみられるが雑であり、バランスも悪い。

27.定善寺寛永 6 年銘 2 号板碑(表 10-27　図 47-27　図 53-27)

本堂北側の小堂前に、正面の五輪塔に向かい北壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基、南壇に背中合わせに各 10 基ずつ計 20 基の板碑がそれぞれ並べられているが、近年、定善寺墓地から移設され並べられたと伝えられている。本例は北壇の北向き東から 2 基目にあたる。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い加工痕を残す箇所と磨いている箇所がみられる。山型は三角尖頭状の頂部を中央よりやや後方にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。山型部直下の二条切込みはしっかりしており、断面三角形を呈する。額部の突出は低い。碑面には下方両側に刻銘がみられる。

28.成願寺板碑(表 10-28　図 47-28　図 53-28)

成願寺境内に他所から移されたとされる宝篋印塔をはじめとした石塔群がみられるが、その中に存在する。横幅の広い板碑であり、調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い鑿痕を残す。山型頂部は破損しているが、三角尖頭状のものが後方にのびると考えられる。額部には 3 点、横並びに月輪が彫り沈められているが、中央を丸く膨らませている。碑面中央には五輪塔東方門の梵字種子が彫られ、その両側にも

刻銘がみられる。山型部直下の二条切込みは断面三角形を呈するが小さいせいか彫りが浅い。額部の突出は低く、基部は碑面下部が埋められているため、その様相をうかがい知ることができない。

29.入田墓地1号板碑(表10-29　図47-29　図53-29)

丘陵尾根上に営まれている入田地区共有墓地の端に3基の板碑が並べて立てられているが、中央の小さなものをはさみ向かって右を1号板碑、左を2号板碑としたが、双方同型式であり、同じ造立年月日が刻まれているため、双碑として建塔されたことがうかがえる。2号板碑と比較してやや大きい。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い鑿痕を残し、やや膨らませている。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。額部に月輪が2重に彫られているが、外側は浅く、内側は深く彫り沈められている。碑面には両端に刻銘がみられる。山型部直下の二条切込みはやや浅い断面三角形を呈する。額部および基部の突出は低い。

30.入田墓地2号板碑(表10-30　図47-30　図53-30)

丘陵尾根上に営まれている入田地区共有墓地の端に3基の板碑が並べて立てられているが、中央の小さなものをはさみ向かって右を1号板碑、左を2号板碑としたが、双方同型式であり、同じ造立年月日が刻まれているため、双碑として建塔されたことがうかがえる。1号板碑と比較してやや小さい。調整は正面・両側面・山型部とも丁寧に仕上げられているが、背面は粗い鑿痕を残し、やや膨らませている。山型は三角尖頭状の頂部を中央にもち、各隅に向かい直線的に稜をもつ。額部に月輪が2重に彫られているが、外側は浅く、内側は深く彫り沈められている。碑面には刻銘がみられるが、1号板碑に比較して彫りがやや雑である。中央の戒名の上には墨書がみられるが、判読できない。山型部直下の二条切込みはやや浅い断面三角形を呈する。額部および基部の突出は低い。

31.宗光寺板碑(表10-31　図47-31　図53-31)

境内入口の一角に単独で立てられている。調整は背面も含めて各面、ひじょうに丁寧に仕上げられている。山型頂部は三角尖頭状に尖り、頂部は正面・側面とも中央に位置する。二条切込みはみられない。正面上端にはきわめて浅い月輪内に文字が刻まれ、月輪下に刻銘がみられる。方柱形に整形された基礎をもつが、碑身と基礎の連結部がコンクリートで固められており、詳細は明らかでない。

32. 城ヶ崎嘉暦3年銘板碑(表10-32　図47-32　図53-32)

城ヶ崎俳人墓地の一角に中世の石造物が集められており、その中にみられる。中央で折

損しているが、各破片を実測し、図上で復元した。調整は粗い加工痕を残す背面以外は各面丁寧に仕上げられている。また、基礎部は地下に埋設されることを意識されたせいか粗い加工痕を残すままである。正面観は上方にいくにしたがいわずかに細く仕上げている。山型は照屋根状に反り、頂部は中央よりやや後に位置する。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深く、額部・基部とも前方に突出させている。碑身上端には梵字種子がきわめて大きく薬研彫りされており、梵字下には刻銘がみられる。

33. 城ヶ崎寛永8年銘板碑(表10-33　図47-33　図53-33)

城ヶ崎俳人墓地の一角に中世の石造物も集められており、その中にみられる。正面幅・側面幅とも、上下において差がなく、調整はやや膨らませる背面も含めて各面、ひじょうに丁寧に仕上げられている。山型はわずかに膨らませ、山型頂部は中央において16cm、横方向に稜をもち、奥行きは中央に頂部をもつ。正面及び側面にまわす二条切り込みは断面三角形でしっかりしている。額部には卍が平彫りされている。額部は突出し、碑身正面及び両側面の隅はわずかに彫り沈め、輪郭を設けている。碑身正面中央には大きく舟形光背を彫り沈めた中に蓮華座にのる観音座像を陽刻している。この観音座像の左右に銘文を小さく刻んでいる。

34.明星寺板碑(表 10-34　図 48-34　図 53-34)

明星寺境内の一角に石塔や墓碑が集められている箇所があり、その中にみられる。各面とも非常に丁寧に磨かれており、正面下端に２か所の舟形光背の龕を造り蓮華座にのる仏像を陽刻している。向かって右は阿弥陀如来、左は印相が明確ではないが、釈迦如来であろうか。その上部及び向かって右側面には刻銘がみられる。山型部の正面観はやや膨らませ、山型頂部は中央で前後に稜線をもたせている。山型部直下の二条切込みは浅い断面三角形を呈する。

35. 清武城跡大永4年銘1号板碑(表10-35　図48-35　図53-35)

伊東氏供養塔群の中央に立てられている伊東祐堯･祐国供養塔とされている板碑である。正面幅・側面幅とも、上下において差がなく、調整は背面も含めて各面、ひじょうに丁寧に仕上げられている。碑身から山型まで平らに仕上げられ、正面観が三角の山型は正面から背面にむかい切り落とされている。二条切り込みは小さく、また、上下に間隔をもつ。碑身には輪郭を設け、月輪や蓮華座を表現するため、それ以外の部分を彫り凹めている。月輪内に梵字を刻むほか、輪郭内の上下部分に装飾の意匠を表現しており、蓮華座の下には小さく刻銘がみられる。

36. 清武城跡大永4年銘２号板碑(表10-36　図48-36　図54-36)

伊東氏供養塔群の一角の向かって左側に並べられている板碑群中のひとつである。多田隈豊秋が調査した際は切損していたが（多田隈豊秋　1978）、現在はコンクリートで繋げられている。正面幅は上下において同じであるが、側面幅は上方に行くにしたがい薄く仕上げられている。正面は碑身から山型まで平らに仕上げられ、二条切込みは線刻に近く、間があけられており、下側の切込みのみ側面に廻している。碑身は輪郭をもち彫り沈められ、上端に蓮華座をもつ月輪内に阿弥陀三尊の梵字種子が刻まれている。また、下端には大きく蓮華座が線刻によりあらわされている。この上下の間に細線陰刻の界線を設け、その間に中央に大日法身真言の梵字種子、また、その両側に銘文が刻まれている。後方両側面は大きく面取りされており、平面形の断面が六角形を呈する。基礎は前方に突出させ、上面2か所に円形の穿孔がみられる。

37. 清武城跡永禄5年銘板碑(表10-37　図48-37　図54-37)

伊東氏供養塔群の向かって右側に立てられている宮田安芸守墓とされている板碑である。正面幅は上下においてほとんど差がなく、平らに仕上げられていない背面は上方にいくにしたがいうすく仕上げられている。調整は正面・両側面とも、ひじょうに丁寧に仕上げられている。正面は碑身から山型まで平らに仕上げられ、山型は中央で稜をもつ。二条切り込みは線刻に近く、間があけられている。碑身上端には月輪や蓮華座が線刻で表現され、月輪内には梵字種子が薬研彫りされているが、細くて弱い。蓮華座の下には小さく刻銘がみられる。

38. 清武城跡文禄５年銘板碑(表10-38　図48-38　図54-38)

伊東氏供養塔群の向かって左側に立てられている宮田藤五郎墓とされている板碑である。正面幅・側面幅は上下において同じであり、調整は各面、ひじょうに丁寧に仕上げられている。正面は碑身から山型まで平らに仕上げられ、山型は中央で稜をもつ。二条切込みは断面三角形で彫りもよい。碑身上端には月輪や蓮華座が線刻で表現され、月輪内には梵字種子が薬研彫りされている。蓮華座の下には小さく刻銘がみられるが、下半は風化がいちじるしく判読できない。

39. 清武城跡慶長7年銘板碑(表10-39　図48-39　図54-39)

清武城の一角に独立した小さい丘陵があり、その上に単独で立てられている。正面幅・側面幅は上下において同じであるが、正面幅よりは背面幅のほうが狭い。調整は各面、丁

寧に仕上げられている。横幅が広くひじょうに大ぶりな板碑である。山型頂部は後方において6cm、前後に稜をもつ。側面まで廻す二条切り込みは断面三角形で彫りもよく、縦幅が広い。碑身上端には「卍」が大きく彫られ、その下に銘文が大きく刻まれている。

40. 彦山寺跡1号板碑(表10-40　図48-40　図54-40)

彦山寺跡石塔群の最奥部に2基並立の板碑がみられるが、そのうちの1基である。調整は細かい鑿痕を含め、粗い加工痕を残す背面以外は各面丁寧に仕上げられているが、側面と背面の間に粗い面取りが施されている特徴をもつ。山型から二条切込みまで磨滅が著しいが、山型頂部は中央よりやや後ろに位置し、正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深い。額部から碑身にかけて、正面をやや膨らませており、額部と碑身上端に梵字種子を薬研彫りしている。碑身上端の梵字種子は雄大で、中に墨を入れている。梵字下には墨を入れた刻銘がみられるが、細かく丁寧に彫られている。

41. 彦山寺跡2号板碑(表10-41　図48-41　図54-41)

彦山寺跡石塔群の最奥部に2基並立の板碑がみられるが、そのうちの1基である。1号板碑に比較して、大きさがかなり小さく細身の特徴をもつ。調整は粗い加工痕を残し、また、側面に細かい鑿痕を残し、その側面と背面の間には粗い面取りが施されている特徴をもつ。正面に関しては丁寧な調整が施されている。山型から二条切込みまで磨滅が著しいが、山型頂部は中央に位置し、正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深い。額部と碑身上端に梵字種子を入れているが、額部の梵字種子はきわめて小さい反面、碑身上端の梵字種子は雄大で、中に墨を入れている。梵字下には墨を入れた刻銘がみられるが、細かく丁寧に彫られている。

42. 彦山寺跡3号板碑(表10-42　図49-42　図54-42)

彦山寺跡石塔群最奥部の2基並立の板碑に向かい右側の自然石塔婆群の後ろに並べられている。調整はすべての面を丁寧に仕上げているが、整形のバランスが悪い。正面幅・側面幅とも上下において同じであるが、背面をわずかに膨らませている。正面は碑身から山型まで平らに仕上げられ、二条切込み・額部はみられず、碑身正面に輪郭をとり、中を彫り沈めている。輪郭内の上端には梵字種子が薬研彫りされており、その下に銘文が刻まれている。この碑身は方柱石の基礎上に置かれている。

43. 合窪橋板碑(表10-43　図49-43　図54-43)

河畔の空き地の隅に単独で立てられている板碑であるが、他所から移されたと伝えられている。調整は背面も含めて各面、ひじょうに丁寧に仕上げられている。額部をわずかに

突出させ、額部から山型まで平らに仕上げられている。正面観が三角の山型は正面から背面にむかい切り落とされている。切込みは正面２条であり、正面2条のうち上の切込みを側面に廻している。正面2条の切込みは断面三角形だが少し間をあけている。額部には2㎜程度の深さの月輪を彫り沈めている。碑身上端には梵字種子を刻むほか、その下には小さく刻銘がみられる。

44. 野々見谷板碑(表10-44　図49-44　図54-44)

伊東尹祐の供養塔と伝えられている板碑である。正面幅・側面幅とも、上下において差がなく、調整はやや背面も含めて各面、ひじょうに丁寧に仕上げられている。碑身から山型まで平らに仕上げられ、正面観が三角の山型は、正面から背面にむかい、2段に切り落とされている。二条切込みは断面三角形で浅いが、側面まで廻している。額部正面には線刻による月輪内に「喝」と大きく陰刻されている。額部と碑身との境には、片切彫りの線刻を設けている。正面および背面には刻銘が大きくみられる。

45. 折田代公民館板碑(表10-45　図49-45　図54-45)

公民館前にコンクリート製覆屋を設け、その中に安置されている板碑である。きわめて小型であり、各面とも丁寧に調整されているが、背面のみ粗い部分をもつ。側面はやや丸く膨らませている。上部を丸く仕上げた正面上端に月輪を線刻し、中に梵字種子を線刻している。月輪下には二条線を刻んでおり、その下に刻銘がみえる。

46. 折生田板碑(表10-46　図49-46　図55-46)

寺院跡伝承地の低い丘陵頂部の平坦地に営まれた木製覆屋に置かれている板碑である。三つに折損し、本来埋められていたであろう基礎部分も含めて、すべての部位の様相がわかる好例である。正面幅・側面幅とも下方にいくにしたがい、ひじょうにわずかに厚く仕上げられている。調整は背面も含めて、各面、丁寧に仕上げられている。背面は平ら、正面はわずかに丸く仕上げられている。碑身上方には梵字種子が大きく薬研彫りされている。梵字種子下には大きい楷書体の刻銘もみられ、梵字種子・刻銘には墨が入れられている。三角尖頭状に尖る山型頂部は、中央付近に位置する。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深く、額部を大きく前方に突出させている。埋められていた基礎部分は、正面・側面とも粗い加工痕を残し、わずかに膨らませている。

47.大迫寺跡永仁3年銘板碑(表10-47　図49-47　図55-47)

大迫寺跡と伝えられる最奥部の丘陵斜面に平坦地を造成し、鎌倉期以降の石造物群を並べている。この板碑は石造物群の最下段端にみられる。碑面は中央部をひじょうにわずか

に膨らませ、両側面を含めて丁寧に仕上げている。背面は多少粗い成形のままであり、わずかに膨らませている。丸く仕上げた山型頂部は、中央よりやや後ろに位置する。碑身には上端に、２重の方形の枠を線刻し、枠内の中央にやや大きな円相、それを計８個の２重円相が円形でとり囲み、梵字種子で胎蔵界中台八葉院を表している。梵字は、細かく薬研彫りし、中に墨を入れている。円相は墨書で表わし８個の二重円相間には三鈷を墨書しているが、ほとんどが消えつつある。方形枠内四隅にも墨画がみられるが、その意匠は判別できない。この胎蔵界中台八葉院下には刻銘がみられる。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形だが、彫りがやや弱い印象を受ける。額部を前方に突出させているが、基部については埋められており、基部の突出が存在するかどうかは確認できない。

48.大迫寺跡正平25年銘板碑(表10-48　図49-48　図55-48)

大迫寺跡と伝えられる最奥部の丘陵斜面に平坦地を造成し、鎌倉期以降の石造物群を並べている。この板碑は石造物群の最上段中央付近にみられる。碑身にみられる陰刻された蓮台の上部においてほぼ水平に折損しているが、そのまま上にのせて復元しているが、最上部は、梵字種子上端を含めて山型・額部とも欠失している。調整はやや膨らませた背面が粗い加工痕を残しているほかは各面丁寧に仕上げられている。正面観は上方にいくにしたがい、細く仕上げている。碑面上部に蓮肉をみせる蓮華座が輪郭を残して陰刻され、その上に梵字種子を大きく薬研彫りし、蓮台および種子には墨が入れられている。なお、蓮台と種子にはそれを囲む大円相の下部と、欠失した上部にも上側の細線陰刻の一部が残されている。円相下には刻銘がみられ、墨が入れられているほかに墨書だけの銘も存在する。基部の突出は大きく、方柱状の基礎石にのせられている。

49.大迫寺跡天正5年銘1号板碑(表10-49　図49-49　図55-49)

大迫寺跡と伝えられる最奥部の丘陵斜面に平坦地を造成し、鎌倉期以降の石造物群を並べている。この板碑は石造物群の中段中央付近にみられる。正面幅・側面幅とも、上下において差がなく、調整は正面及び両側面、ひじょうに丁寧に仕上げられている。背面のみ粗い成形痕を残すが、磨かれている。碑身から山型まで平らに仕上げられ、山型は正面から背面まで頂部に背面に下っていく稜線をもっている。山型直下には二条切込みが正面及び両側面にみられるが、断面三角形の二条切込みはやや浅く、上下の切込み間に少し間隔がある。碑身上端に梵字種子を薬研彫りし、その下に銘文を刻んでいる。

50.大迫寺跡天正5年銘2号板碑(表10-50　図49-50　図55-50)

大迫寺跡と伝えられる最奥部の丘陵斜面に平坦地を造成し、鎌倉期以降の石造物群を並

べている。この板碑は石造物群の中段中央付近にみられる。正面幅・側面幅とも、上下において差がなく、調整は正面及び両側面、ひじょうに丁寧に仕上げられているが、背面のみ粗い加工痕を残す。碑身から山型まで平らに仕上げられ、山型は正面から背面まで頂部に稜線をもっている。山型直下には二条切込みが正面及び両側面にみられるが、断面三角形の二条切込みは深く、上下の切込み間に少し間隔がある。碑身上端に梵字種子を大きく薬研彫りし、その下に銘文を刻んでいる。

51.大迫寺跡慶長11年銘板碑(表10-51　図50-51　図55-51)

大迫寺跡と伝えられる最奥部の丘陵斜面に平坦地を造成し、鎌倉期以降の石造物群を並べている。この板碑は石造物群の中段中央付近にみられる。正面幅・側面幅とも、上下において差がなく、調整は背面も含めて各面、ひじょうに丁寧に仕上げられている。碑身から山型まで平らに仕上げられ、碑身上端の月輪周囲を方形に彫り沈めて、月輪を陽刻しているように仕上げている。月輪内には梵字種子を薬研彫りし、月輪下に銘文を刻んでいる。山型頂部は三角尖頭状に尖り、前方に7cm、稜線をもたせ、背面に向けて切り落とす形態をもつ。碑身下には基礎石があり、基礎石は丁寧に仕上げられ、上面に繰形座がみられる。

52.大迫寺跡元和2年銘板碑(表10-52　図50-52　図55-52)

大迫寺跡と伝えられる最奥部の丘陵斜面に平坦地を造成し、鎌倉期以降の石造物群を並べている。本例は正面幅・側面幅とも、上下において差がなく、調整は背面も含めて各面、ひじょうに丁寧に仕上げられている。碑身から山型まで平らに仕上げられ、碑身上端の月輪周囲を方形に彫り沈めて、月輪を陽刻しているように仕上げている。月輪内には梵字種子を薬研彫りし、月輪下に銘文を刻んでいる。山型頂部は三角尖頭状に尖り、前方に7cm、稜線をもたせ、背面に向けて切り落とす形態をもつ。碑身下には基礎石があり、基礎石は丁寧に仕上げられ、上面をわずかに膨らませ、碑身の周囲に薄い方形座がみられる。

53.大迫寺跡寛永6年銘板碑(表11-53　図50-53　図55-53)

大迫寺跡と伝えられる最奥部の丘陵斜面に平坦地を造成し、鎌倉期以降の石造物群を並べている。この板碑は石造物群の最下段の一番奥に単独で立てられている。正面幅は上下において差がないが、厚さは山型にいくにしたがい薄く成形されている。正面及び山型上面は丁寧に仕上げられているが、両側面や背面は粗い成形痕を残す。碑身から山型まで平らに仕上げられ、山型は正面から背面まで頂部に稜線をもっている。山型直下には断面三角形の二条切込みが正面にのみみられる。碑身上端には非常に浅い彫り凹めによる月輪を設け、その中に梵字種子を刻んでいる。また、月輪下には刻銘もみられる。

54.大迫寺跡寛永8年銘板碑(表11-54　図50-54　図55-54)

大迫寺跡と伝えられる最奥部の丘陵斜面に平坦地を造成し、鎌倉以降の石造物群を並べている。この板碑は石造物群の上段、向かって左端付近にみられる。正面幅・側面幅とも、上下において差がなく、調整は背面も含めて各面、ひじょうに丁寧に仕上げられている。碑身から山型まで平らに仕上げられ、碑身上端の月輪周囲を方形に彫り沈めて、月輪を陽刻しているようにみせている。月輪内には梵字種子を薬研彫りし、月輪下に銘文を刻んでいる。山型頂部は三角尖頭状に尖り、前方に11.5cm、稜線をもたせ、背面に向けて切り落とす形態をもつ。碑身下の基礎石は丁寧に仕上げられ、上面に一段高い方形座がみられ、その前に小さな円孔が2箇所に穿たれている。

55.殿所板碑(表11-55　図50-55　図55-55)

文明16年（1484）銘をもつ中ノ尾供養塔が所在する丘陵尾根の背後に単独で存在する板碑である。側面幅が広く、正面幅・側面幅とも、上下において差がない。調整は正面及び両側面、ひじょうに丁寧に仕上げられているが、背面は磨かれているものの、やや仕上げが劣る。山型はわずかに膨らませ、頂部は中央に位置している。山型直下にはひじょうに浅い断面三角形の二条切込みが正面及び両側面に巡らされている。碑身正面の両側側縁をわずかに彫り沈めて輪郭を設け、この中に銘文を刻んでいる。

56.歓楽寺跡正和4年銘板碑(表11-56　図50-56　図55-56)

歓楽寺跡と伝えられる丘陵裾部の緩斜面に細かい平坦地を連続して造成し、鎌倉期以降の石造物群を並べている。この板碑は最も入口に近い位置に立てられている。調整はやや膨らませた背面も含めて各面丁寧に仕上げられている。正面観は上方にいくにしたがいわずかに細く仕上げている。碑身には梵字種子が存在していたであろうが、削られており、判読できない。梵字種子下には銘文もみられる。山型頂部は三角尖頭状に尖り、中央に位置する。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深く額部・基部とも前方に突出させている。鎌倉後期のものとしては、小ぶりであるが、つくりがよい。

57.歓楽寺跡正慶2年銘板碑(表11-57　図50-57　図55-57)

歓楽寺跡と伝えられる丘陵裾部の緩斜面に細かい平坦地を連続して造成し、鎌倉期以降の石造物群を並べている。この板碑は石造物群の中央付近にみられる。折損し、3点の破片になっているが、各破片を実測し、図上で復元した。調整はやや膨らませた背面も含めて各面丁寧に仕上げられている。正面観は上方にいくにしたがいわずかに細く仕上げている。碑身には上端に梵字種子が大きく薬研彫りされており。梵字種子下には銘文がみられる。

山型は照屋根状に反り、頂部は中央よりわずかに後ろに位置する。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深く、額部・基部とも前方に突出させている。

表９　日向における紀年銘をもつ整形板碑一覧①

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
1	光福寺跡大師堂板碑	宮崎県延岡市南方吉野	永正 15 年	1518	凝灰岩	宮崎県 1942
2	小園福寿庵跡天正 5 年銘板碑	宮崎県門川町小園	天正 5 年	1577	凝灰岩	
3	小松板碑	宮崎県門川町川内	文明 5 年	1473	凝灰岩	宮崎県 1942
4	本善寺大永 7 年銘板碑	宮崎県日向市富島町日知屋	大永 7 年	1527	凝灰岩	
5	本善寺享禄 4 年銘板碑	宮崎県日向市富島町日知屋	享禄 4 年	1531	凝灰岩	
6	本善寺天正 13 年銘板碑	宮崎県日向市富島町日知屋	天正 13 年	1585	凝灰岩	
7	本善寺寛永 10 年銘板碑	宮崎県日向市富島町日知屋	寛永 10 年	1633	凝灰岩	
8	定善寺永正 12 年銘 1 号板碑	宮崎県日向市財光寺	永正 12 年	1515	凝灰岩	緒方博文 1999
9	定善寺永正 12 年銘 2 号板碑	宮崎県日向市財光寺	永正 12 年	1515	凝灰岩	緒方博文 1999
10	定善寺永正 14 年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	永正 14 年	1517	凝灰岩	緒方博文 1999
11	定善寺大永 6 年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	大永 6 年	1526	凝灰岩	緒方博文 1999
12	定善寺享禄 3 年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	享禄 3 年	1530	凝灰岩	緒方博文 1999
13	定善寺天文 7 年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	天文 7 年	1538	凝灰岩	緒方博文 1999
14	定善寺天文 10 年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	天文 10 年	1541	凝灰岩	緒方博文 1999
15	定善寺天文 11 年銘 1 号板碑	宮崎県日向市財光寺	天文 11 年	1542	凝灰岩	緒方博文 1999
16	定善寺永禄 11 年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	永禄 11 年	1568	凝灰岩	緒方博文 1999
17	定善寺永禄 12 年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	永禄 12 年	1569	凝灰岩	緒方博文 1999
18	定善寺元亀 3 年銘 1 号板碑	宮崎県日向市財光寺	元亀 3 年	1572	凝灰岩	緒方博文 1999
19	定善寺元亀 3 年銘 2 号板碑	宮崎県日向市財光寺	元亀 3 年	1572	凝灰岩	緒方博文 1999
20	定善寺元亀 3 年銘 3 号板碑	宮崎県日向市財光寺	元亀 3 年	1572	凝灰岩	緒方博文 1999
21	定善寺元亀 3 年銘 4 号板碑	宮崎県日向市財光寺	元亀 3 年	1572	凝灰岩	緒方博文 1999
22	定善寺天正 5 年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	天正 5 年	1577	凝灰岩	緒方博文 1999
23	定善寺慶長 7 年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	慶長 7 年	1602	凝灰岩	緒方博文 1999
24	定善寺慶長 8 年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	慶長 8 年	1603	凝灰岩	緒方博文 1999
25	定善寺元和 10 年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	元和 10 年	1624	凝灰岩	緒方博文 1999

表 10　日向における紀年銘をもつ整形板碑一覧②

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
26	定善寺寛永 6 年銘 1 号板碑	宮崎県日向市財光寺	寛永 6 年	1629	凝灰岩	緒方博文 1999
27	定善寺寛永 6 年銘 2 号板碑	宮崎県日向市財光寺	寛永 6 年	1629	凝灰岩	緒方博文 1999
28	山陰成願寺板碑	宮崎県東郷町山陰鶴の内	慶長 8 年	1603	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
29	入田墓地 1 号板碑	宮崎県美郷町南郷鬼神野	慶長 2 年	1597	凝灰岩	
30	入田墓地 2 号板碑	宮崎県美郷町南郷鬼神野	慶長 2 年	1597	凝灰岩	
31	宗光寺板碑	宮崎県西都市右松	弘治 3 年	1557	安山岩	多田隈豊秋 1978
32	城ケ崎嘉暦 3 年銘板碑	宮崎県宮崎市赤江城ケ崎	嘉暦 3 年	1328	凝灰岩	甲斐常興、伊豆道明 1978
33	城ケ崎寛永 8 年銘板碑	宮崎県宮崎市赤江城ケ崎	寛永 8 年	1631	凝灰岩	甲斐常興、伊豆道明 1978
34	明星寺板碑	宮崎県宮崎市中原町	慶長 11 年	1606	安山岩	多田隈豊秋 1978
35	清武城跡大永 4 年銘 1 号板碑	宮崎県清武町加納	大永 4 年	1524	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
36	清武城跡大永 4 年銘 2 号板碑	宮崎県清武町加納	大永 4 年	1524	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
37	清武城跡永禄 5 年銘板碑	宮崎県清武町加納	永禄 5 年	1562	安山岩	多田隈豊秋 1978
38	清武城跡文禄 5 年銘板碑	宮崎県清武町加納	文禄 5 年	1596	安山岩	多田隈豊秋 1978
39	清武城跡慶長 7 年銘板碑	宮崎県清武町加納	慶長 7 年	1602	凝灰岩	
40	彦山寺跡 1 号板碑	宮崎県えびの市東川北	正中 2 年	1325	凝灰岩	甲斐常興、伊豆道明 1978
41	彦山寺跡 2 号板碑	宮崎県えびの市東川北	正中 2 年	1325	凝灰岩	甲斐常興、伊豆道明 1978
42	彦山寺跡 3 号板碑	宮崎県えびの市東川北	天文 17 年	1548	安山岩	甲斐常興、伊豆道明 1978
43	合窪橋板碑	宮崎県西諸県郡高原町広原	天正 19 年	1591	凝灰岩	池田宗男 1993 c
44	野々美谷板碑	宮崎県都城市野々美谷町	大永 4 年	1524	凝灰岩	池田宗男 1993 b
45	折田代公民館板碑	宮崎県都城市吉之元町	天文 22 年	1553	凝灰岩	池田宗男 1993 a
46	折生田板碑	宮崎県日南市北郷町大藤甲	正応 6 年	1293	凝灰岩	甲斐 常興 1979、時元省二 1994
47	大迫寺跡永仁 3 年銘板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	永仁 3 年	1295	凝灰岩	甲斐常興、伊豆道明 1978
48	大迫寺跡正平 25 年銘板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	正平 25 年	1370	凝灰岩	甲斐常興、伊豆道明 1978
49	大迫寺跡天正 5 年銘 1 号板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	天正 5 年	1577	凝灰岩	
50	大迫寺跡天正 5 年銘 2 号板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	天正 5 年	1577	凝灰岩	
51	大迫寺跡慶長 11 年銘板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	慶長 11 年	1606	凝灰岩	
52	大迫寺跡元和 2 年銘板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	元和 2 年	1616	凝灰岩	

表 11　日向における紀年銘をもつ整形板碑一覧③

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
53	大迫寺跡寛永 6 年銘板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	寛永 6 年	1629	凝灰岩	
54	大迫寺跡寛永 8 年銘板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	寛永 8 年	1631	凝灰岩	
55	殿所板碑	宮崎県日南市殿所 1405	弘治 2 年	1556	凝灰岩	
56	歓楽寺跡正和 4 年銘板碑	宮崎県日南市西弁分上隈谷	正和 4 年	1315	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
57	歓楽寺跡正慶 2 年銘板碑	宮崎県日南市西弁分上隈谷	正慶 2 年	1333	凝灰岩	多田隈豊秋 1978

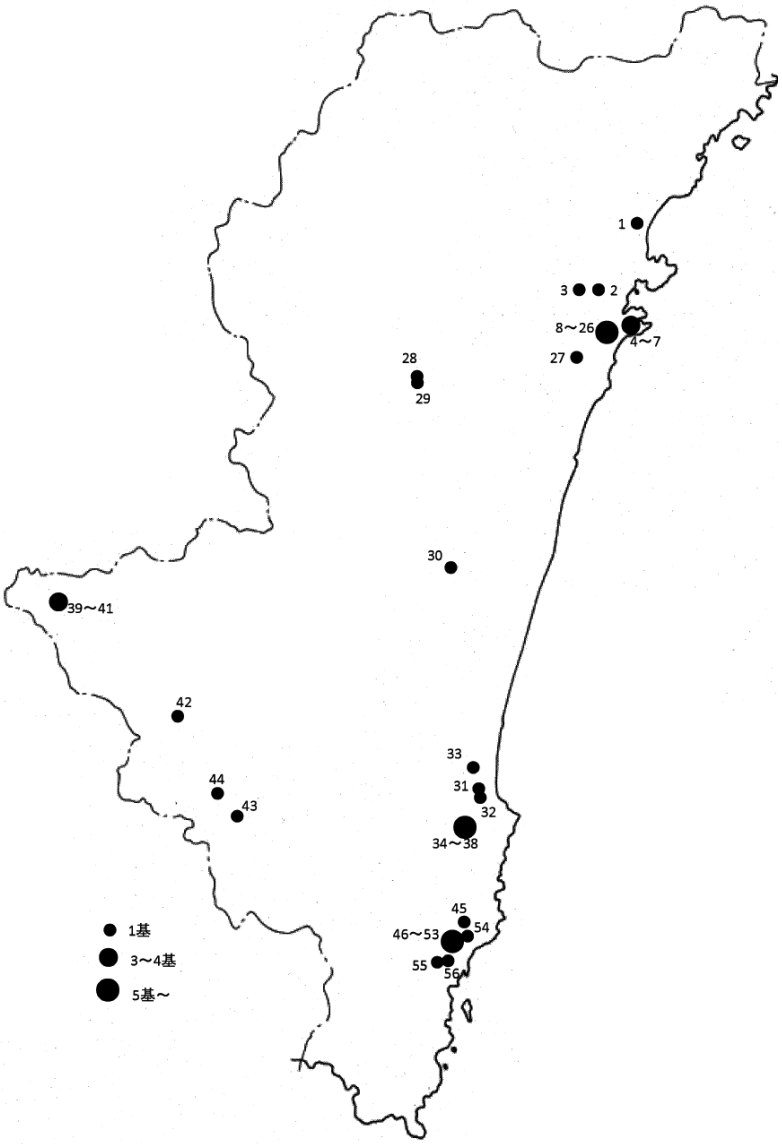


図45　日向における整形板碑の分布

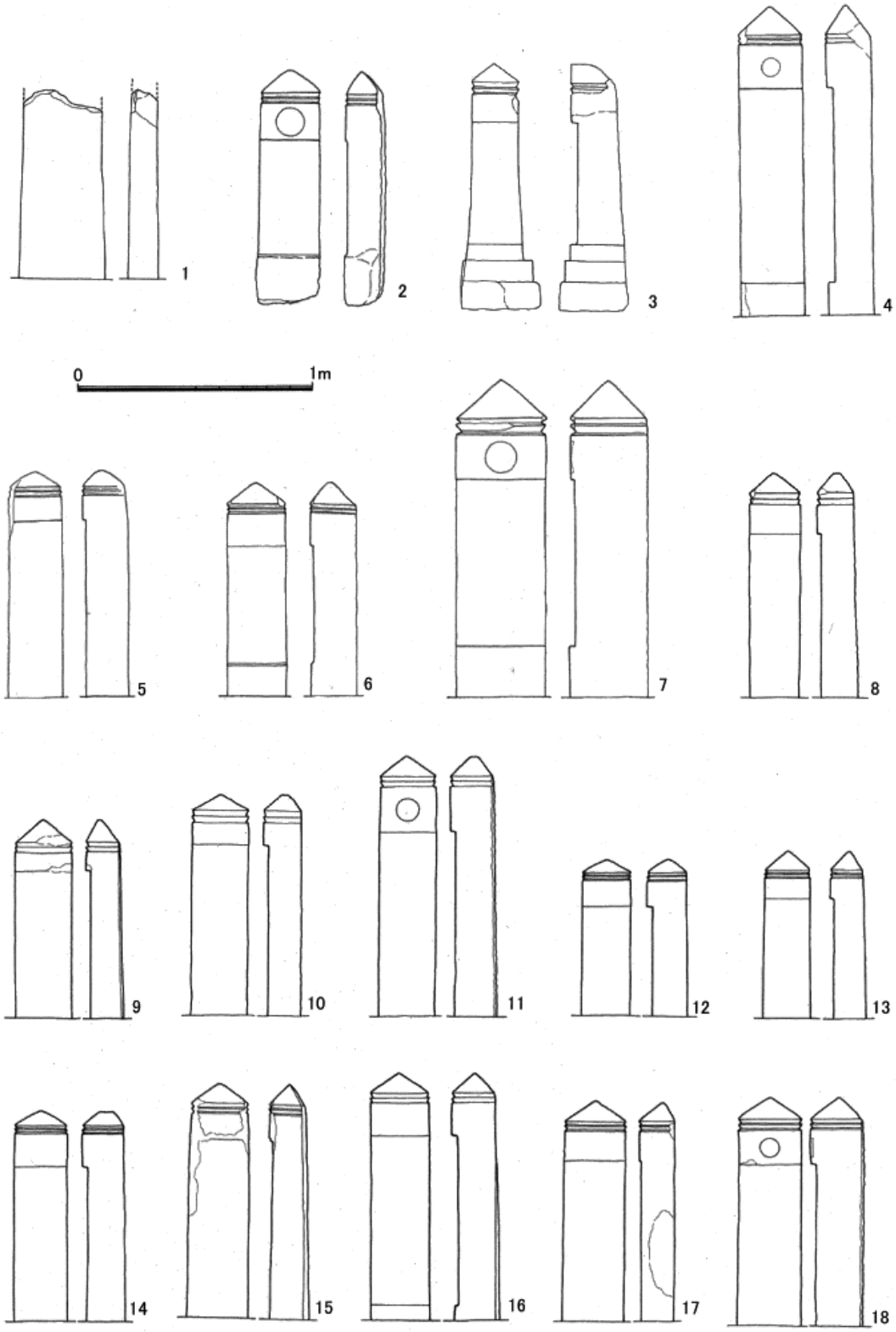


図46　日向における整形板碑①

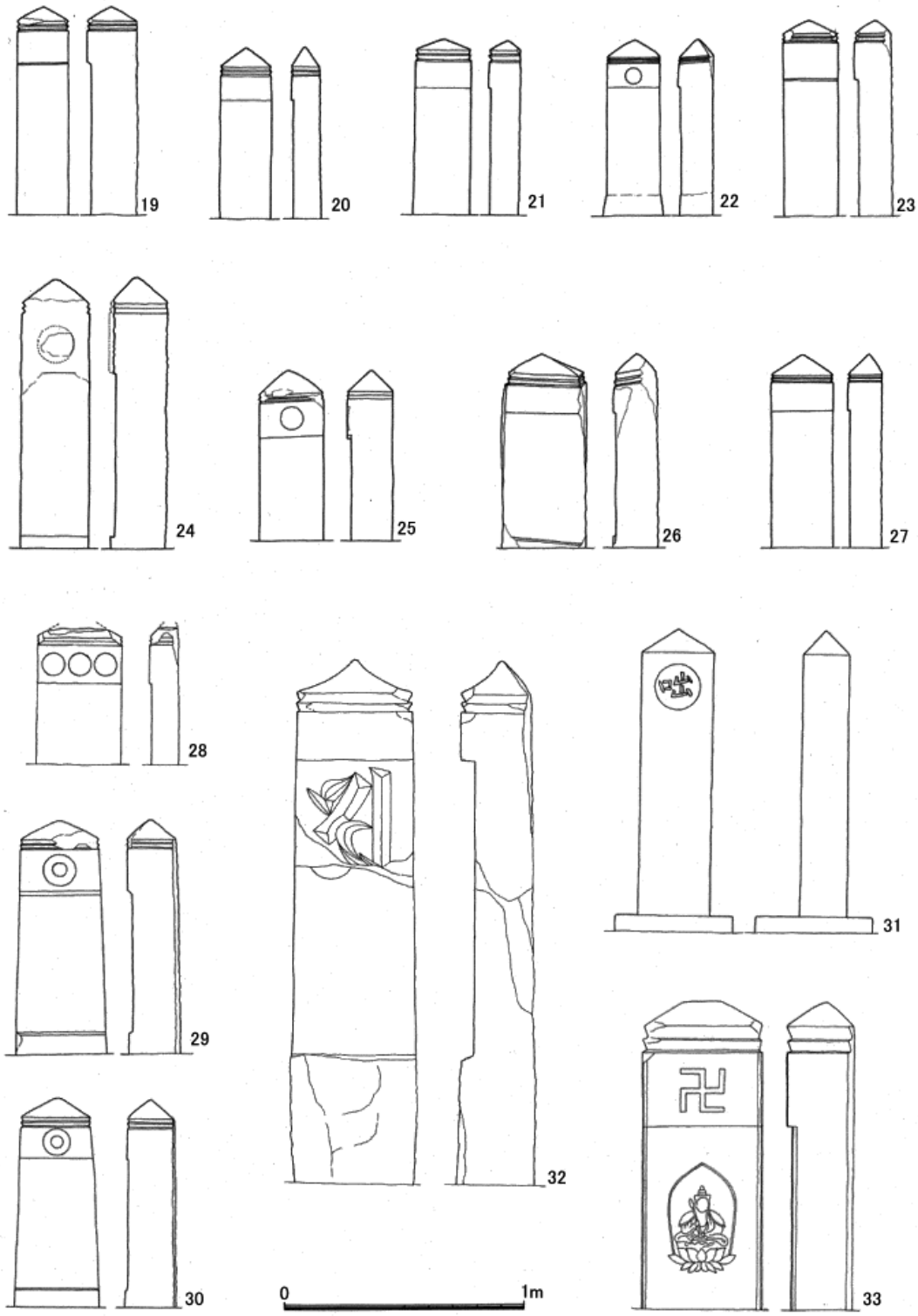


図47　日向における整形板碑②

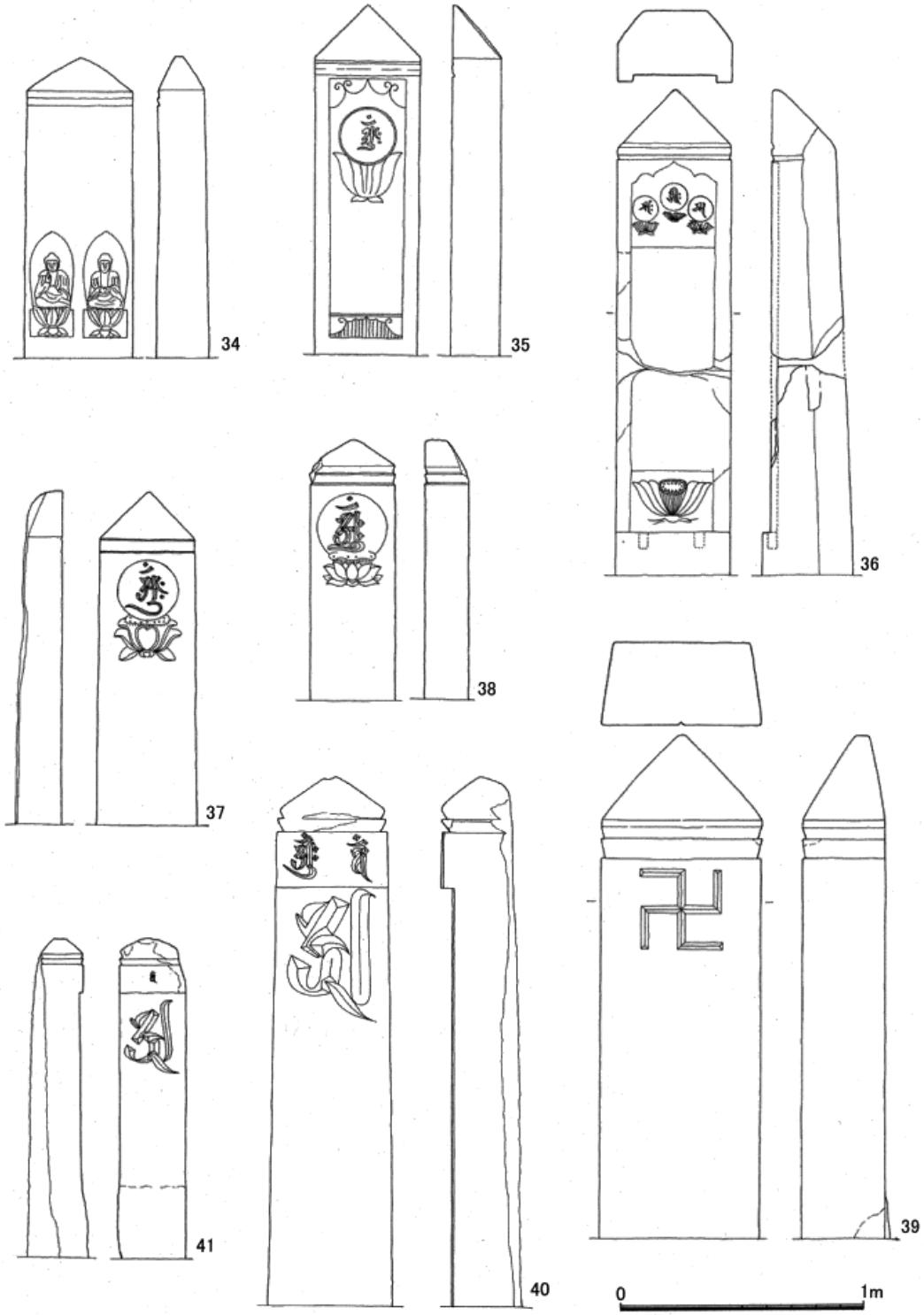


図48　日向における整形板碑③

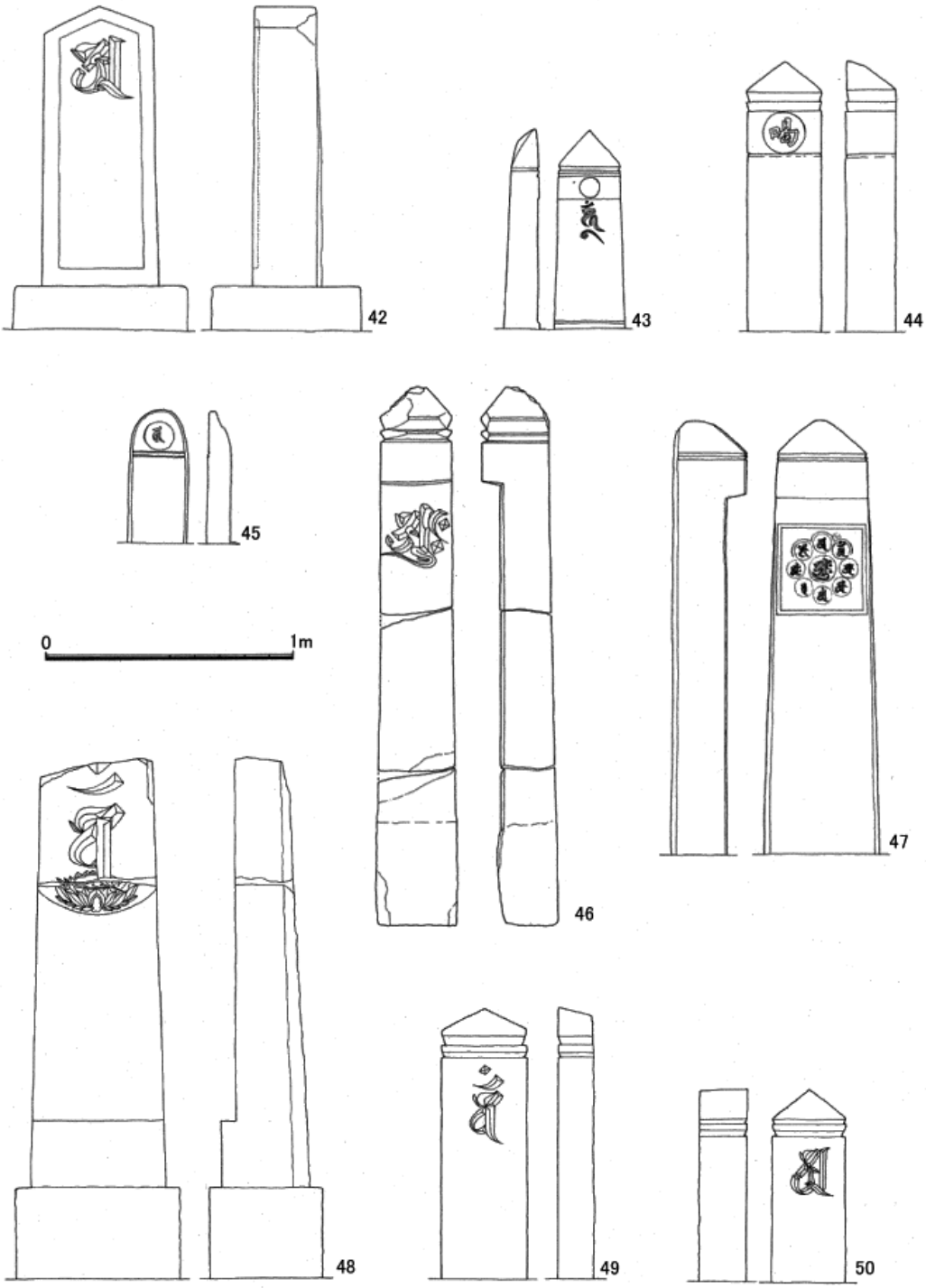


図49　日向における整形板碑④

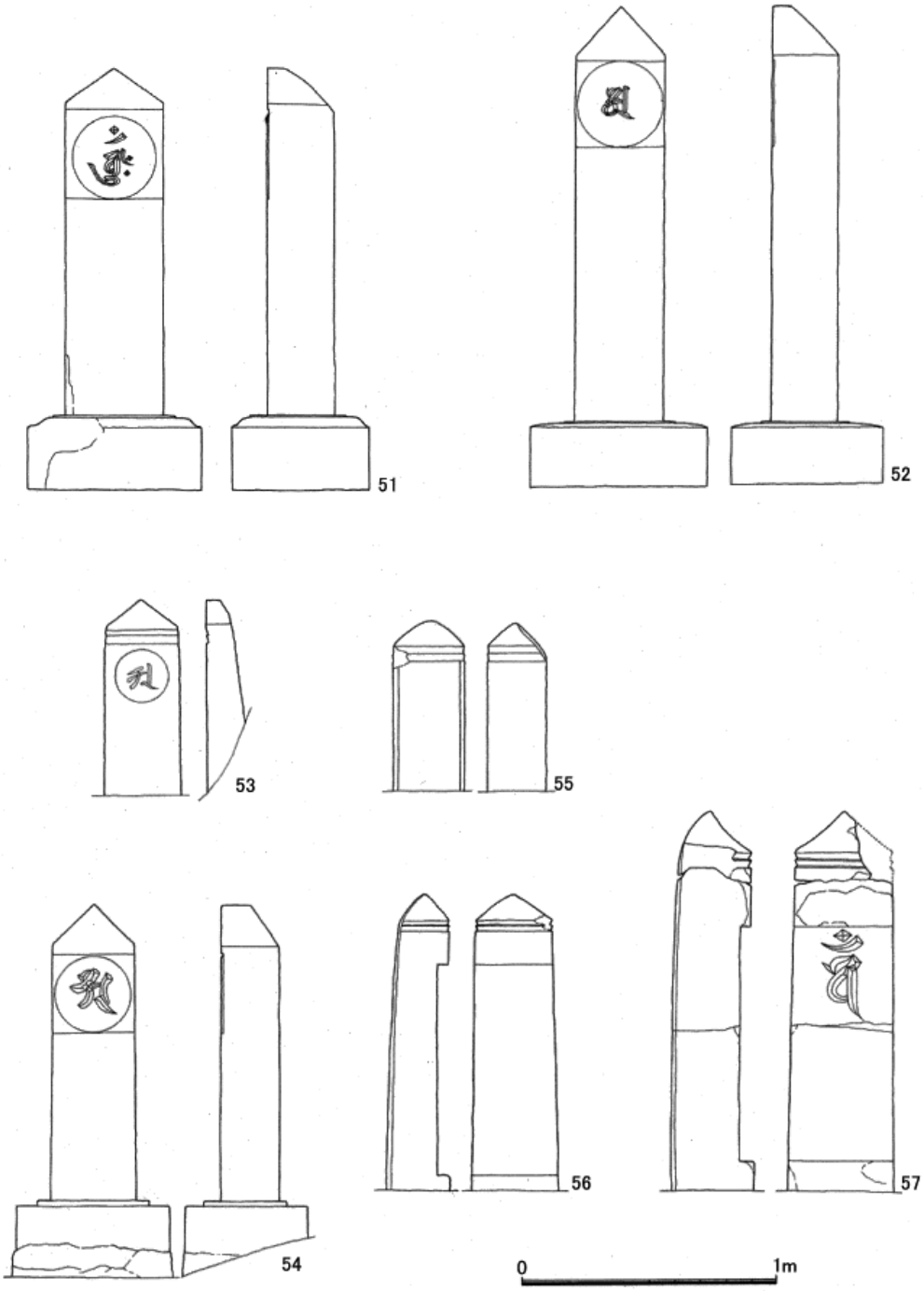


図50　日向における整形板碑実測図⑤

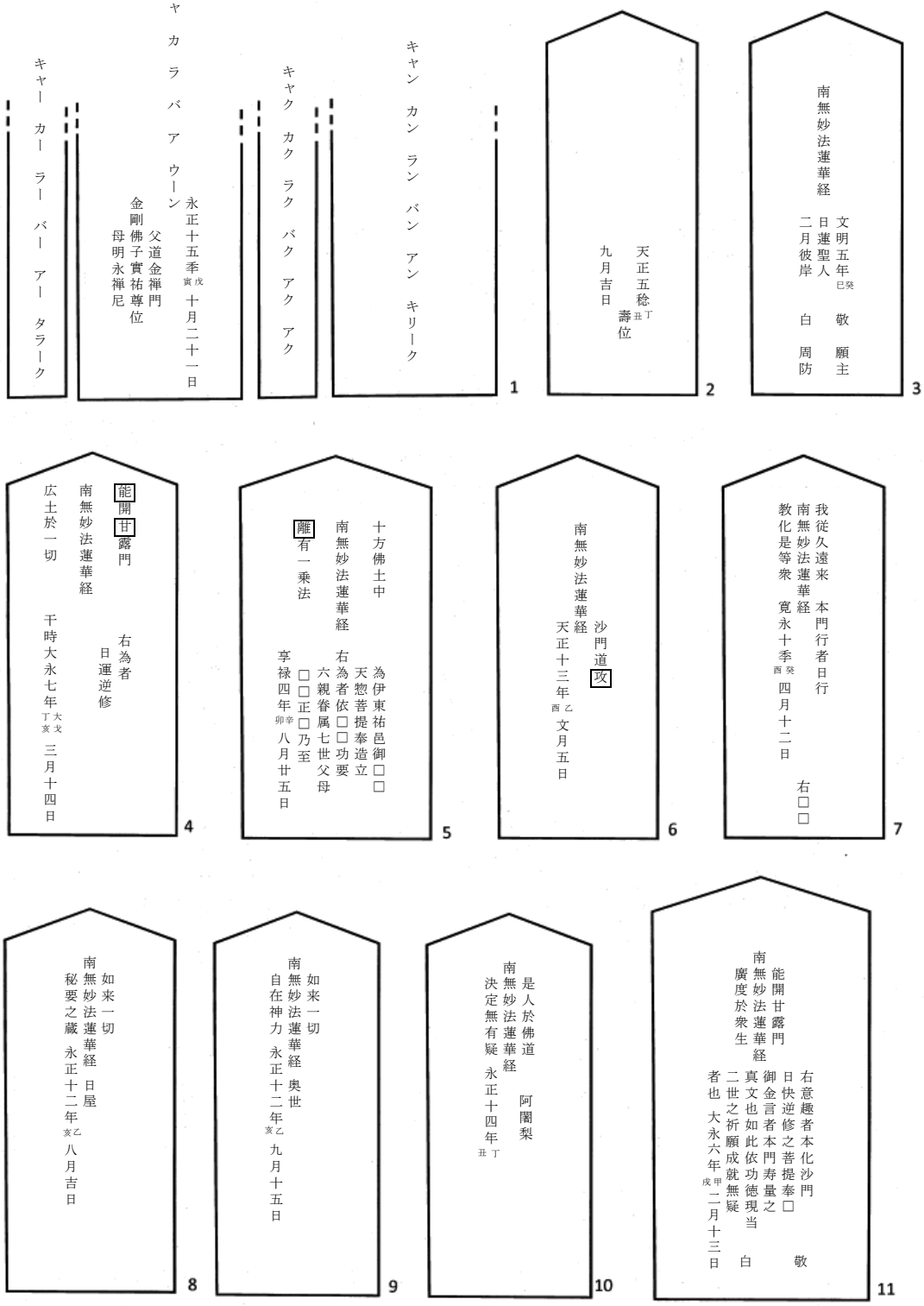


図51　日向における整形板碑銘文①

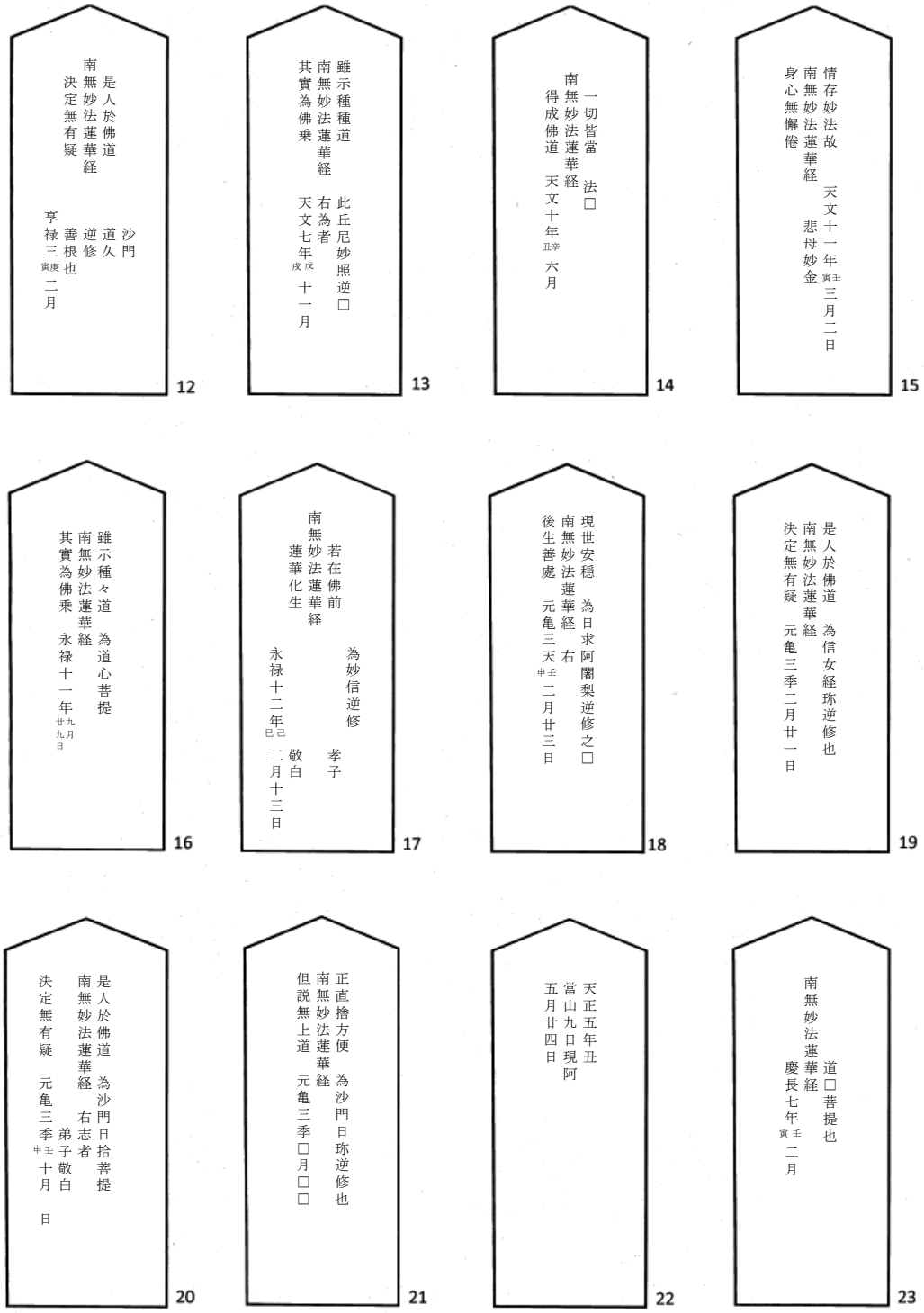


図52　日向における整形板碑銘文②

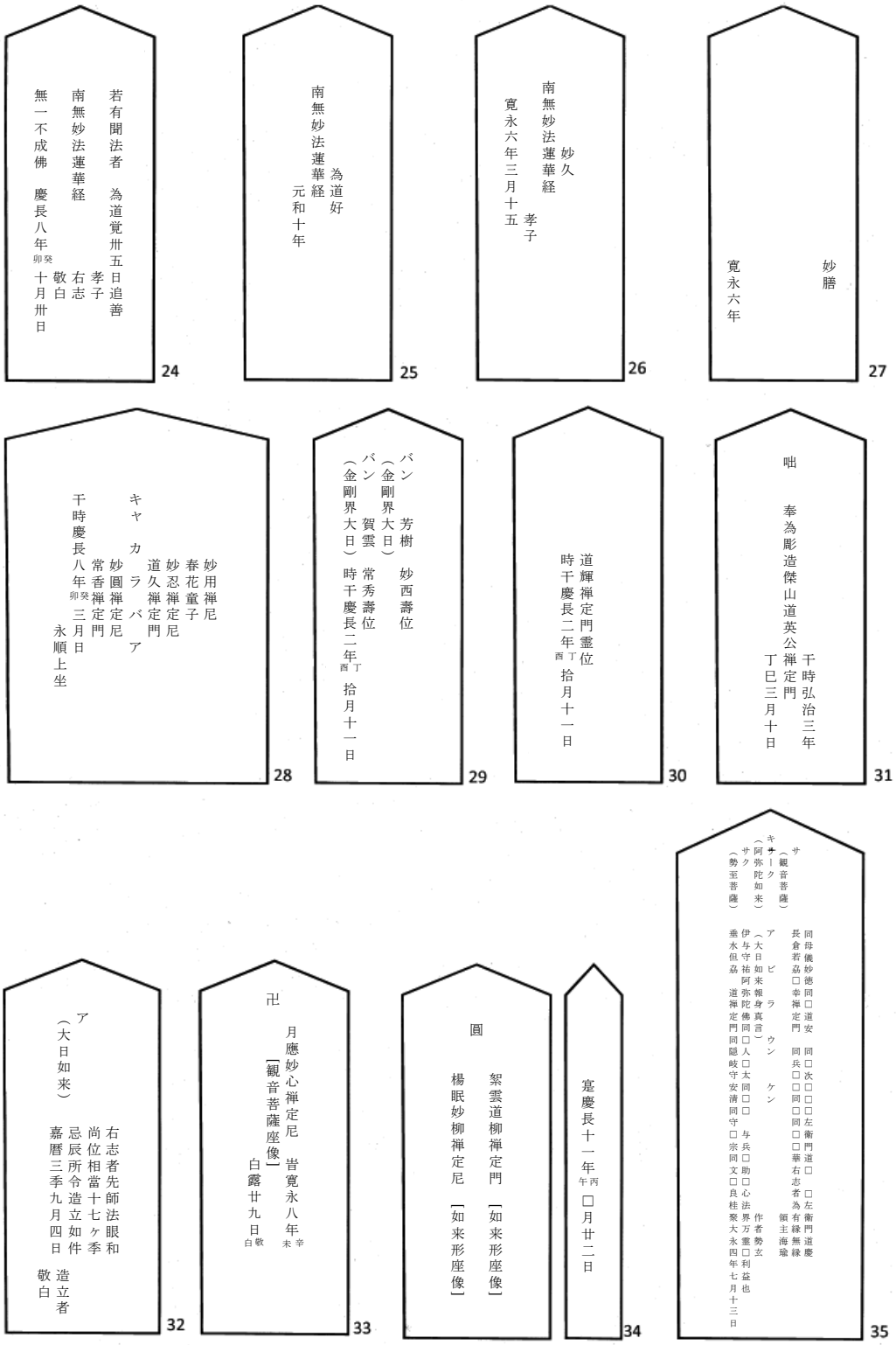


図53　日向における整形板碑銘文③

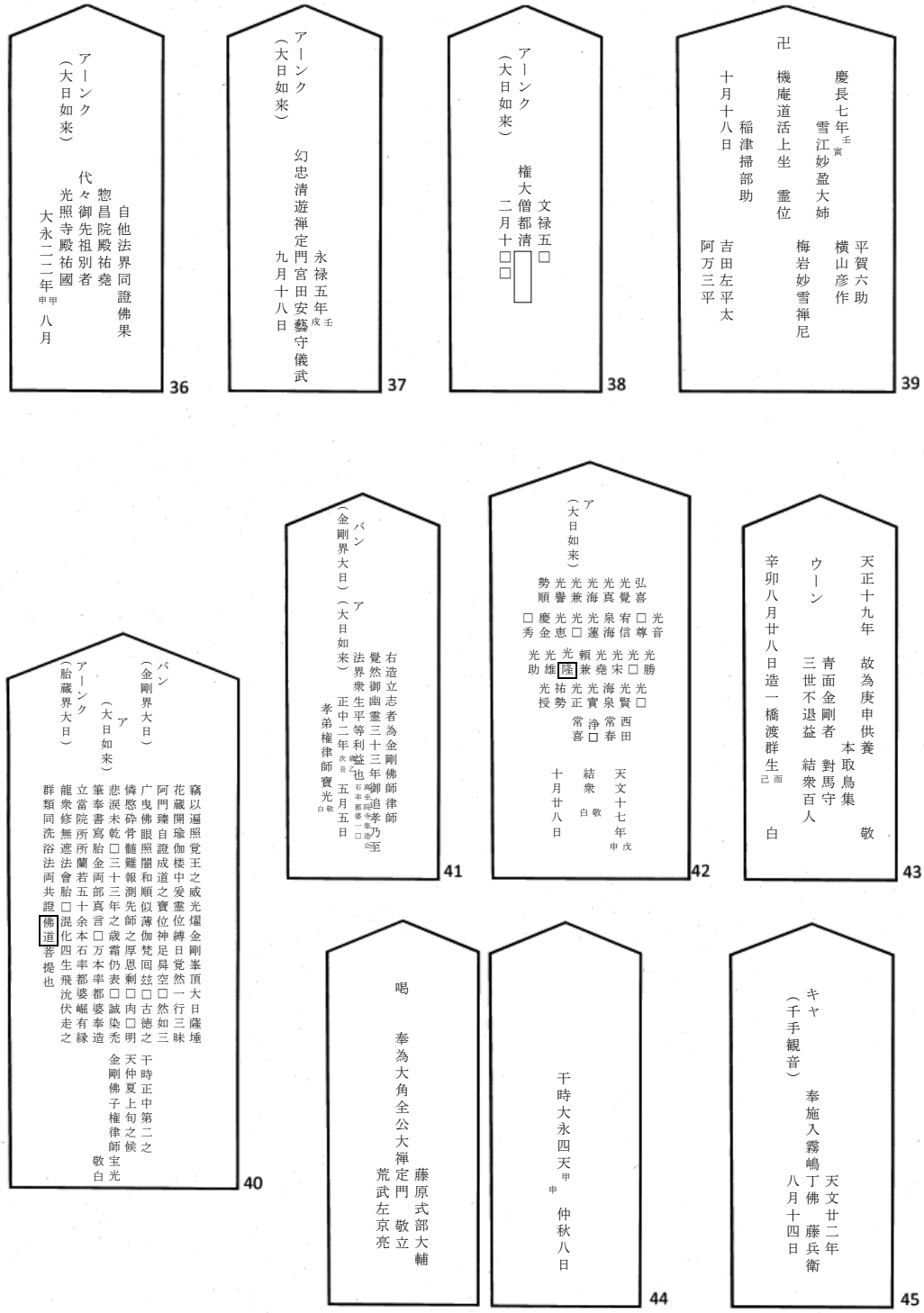


図54　日向における整形板碑銘文④

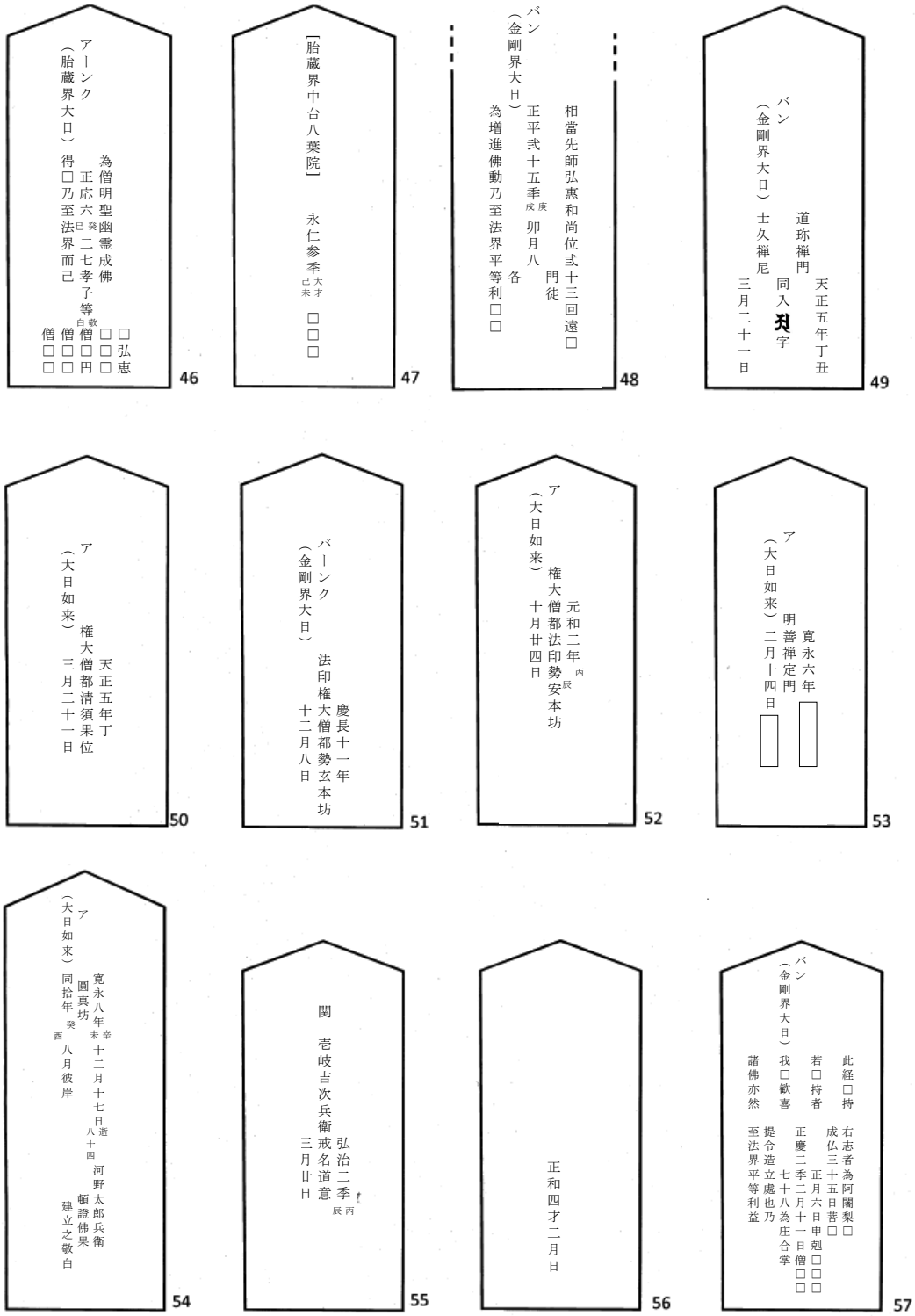


図55　日向における整形板碑銘文⑤

薩摩

薩摩は、豊後・日向・大隅とともに九州を代表する整形板碑地帯といえる。その特徴として、比較的角塔婆の類例が目に付くが、鹿児島県薩摩川内市南瀬観音板碑をはじめとして、川内川流域に集中して存在する。その分布は大隅に属する鹿児島県湧水町稲葉崎や栗野町田尾原、前項で紹介した宮崎県えびの市の資料とあわせて川内川流域に濃密な分布をみることができ、これは九州全域をみてもきわめて多い。

薩摩の整形板碑のほとんどが、凝灰岩製であり、豊後・肥後・日向・大隅の石材と共通する。しかし、薩摩にはきわめて特異な凝灰岩がみられる。指宿市山川地区に産出する淡黄色をした軟質の溶結凝灰岩、一般的に産出地名を冠し、「山川石」と呼ばれるものである。この山川石を石材とした紀年銘板碑が、指宿市山川鰻板碑にみられる。山川石製板碑は石材産出地である地元の薩摩半島東南部だけではなく、鹿児島湾を挟み大隅に属する鹿屋市波之上神社に5基の板碑が集中して存在する。この地は水運で指宿市山川と結びつく地域であり、紀年銘板碑に限らず、南北朝期の山川石製石塔の分布域は鹿児島湾沿岸地に分布し、板碑の分布はその一端を示すものである。

これに加えて、島嶼部では硫黄島に在地の凝灰岩を石材とした板碑や紀年銘をもたない角塔婆がみられる。

以下では、薩摩の紀年銘が残る整形板碑を紹介する。

1.南瀬観音永仁7年1号板碑(表12-1　図57-1　図58-1)

南瀬観音石塔群の一段高い中央に位置する宝塔を取り囲み、板碑群が配されているが、完存の角塔婆の横に2号板碑とともに並べられている上半部が折損した板碑である。調整は各面、丁寧に仕上げられているが、正面のみわずかに膨らませている。正面には観音・勢至菩薩の梵字種子を薬研彫りしているため、その上に主尊である阿弥陀如来の梵字種子があったものと推測できる。この観音・勢至菩薩の梵字種子下や銘文が刻まれる箇所等に割り付け線が刻まれているが、上下2段の割付区画のうち、下段にのみ刻銘がみられる。

2.南瀬観音永仁7年2号板碑(表12-2　図57-2　図58-2)

南瀬観音石塔群の一段高い中央に位置する宝塔を取り囲み、板碑群が配されているが、完存の角塔婆の横に1号板碑とともに並べられている上半部が折損した板碑である。調整は各面、丁寧に仕上げられている。正面には銘文が刻まれる箇所等に割付線が刻まれているが、上下2段の割付区画のうち、上・下段の左端部分のみ刻銘がみられる。

3.戸田観音 1 号板碑(表 12-3　図 57-3　図 58-3)

戸田観音の参道に面した丘陵斜面に同規模同型式の板碑が 2 基建てられている。現在では、この両者とも墨書が存在し、判読が全くできない状態になってはいるが、過去に佐藤誠が判読した梵字種子･銘文を参考にして紀年銘が確認されたとする本例のみ紹介する(佐藤誠 1989)。調整は平坦な背面に粗い加工痕を残すほか、基部突出部および側面に細かい鑿痕がみられるほか、丁寧に整形・調整を施している。基部から山型まで前面をわずかに膨らませ、山型頂部は三角尖頭状に尖り、中央に位置する。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深く、額部・基部とも前方に突出させている。

4.草道板碑(表 12-4　図 57-4　図 58-4)

谷状平野を見下ろす山頂の経塚に立てられている板碑であり、周辺には自然の大岩や礫がみられる。各面とも丁寧に仕上げられており、山型から額部に相当する位置に照起りの屋根形を陽刻する。屋根形頂部には軒丸瓦状の陽刻がみられ、前面に線刻により籠字彫りされた梵字種子がみられる。碑身には細かな丁寧な刻銘がみられる。碑身下端には蓮華請花の浮彫りがみられ、基礎石の上面にも碑身の前面にあたる位置に蓮華の浮彫りがみられる。この両者で蓮華請花・反花を表現しているものと思える。

5.高橋家 1 号板碑(表 12-5　図 57-5　図 58-5)

高橋家敷地内の一角に 2 号板碑・自然石板碑とともに立てられている。すべての面が丁寧に調整されており、枘により方柱形の基礎にはめられている。板碑には輪郭を囲み、彫り凹められている。碑身にはかなり細かい陰刻により丁寧な銘文が刻まれている。山型頂部は前面から中央付近まで稜線をもち、山型と額部の境には正面及び側面に二条切込みがみられるが、彫りに鋭さがない。

6.高橋家 2 号板碑(表 12-6　図 57-6　図 58-6)

高橋家敷地内の一角に 1 号板碑・自然石板碑とともに立てられている。すべての面が丁寧に磨かれているが整形のバランスがきわめて良くない。なお、枘により方柱形の基礎にはめられている。板碑は前屈みに整形され、山型や碑身の側面に膨らみをもち、また、基礎前面も丸く膨らみをもつため、角の取れた自然の礫を石材として利用したために起因するものかもしれない。山型頂部は側面と同様に丸く仕上げられ、山型下に二条切込みがみられるが、彫りに鋭さがなく、バランスも悪い。碑面には上端に円相が墨書されているほか、数多くの交名をはじめとした銘文が墨書されているが、現在では、上端部付近をのぞき、判読できない。

7.寿昌寺墓地板碑(表 12-7　図 57-7　図 58-7)

寿昌寺墓地中に中央が折れて、前後に置かれている板碑である。欠損部がみられないため、実測図上で復元した。背面を含め、すべての面が丁寧に調整されており、背面中央には稜をもつふくらみがある。山型頂部は前面から中央付近まで稜線をもち、背面に向かい切り落とされている。山型から額部は平坦に仕上げられ、碑面からわずかに突出させ、前面に円相を深く彫り沈め、中に法衣を着た坐像を陽刻している。碑身には輪郭を囲み、彫り凹められているが、この中にかなり細かい陰刻により丁寧な銘文が刻まれている。

8.一之宮神社板碑(表 12-8　図 57-8　図 58-8)

神社境内に単独で立てられている小型の板碑である。正面碑身上半から山型部にかけて表面が磨滅しているが、故意によるものかもしれない。碑身から山型まで平らに仕上げられているものと想定でき、正面観が三角の山型は頂部に稜線をもち、中央付近から背面にむかい切り落とされている。二条切込みは断面三角形でしっかりしている。碑身下部には刻銘がみられ、最下段に陰刻線による蓮華座の上部がみえる。さらに、この下にも続くのであろうが、埋められて確認できない。

9.鰻板碑(表 12-9　図 57-9　図 58-9)

鰻地蔵堂の境内に単独で立てられ、下部に礫が積まれている。やや膨らませる背面に細かな鑿痕を残すほかは、すべての面を丁寧に仕上げている。小型でつくりの良い点は、地元に産出する山川石（凝灰岩）を石材としている板碑に共通する。山型頂部は三角尖頭状に尖り、中央に位置する。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深く、碑身上端には梵字種子が薬研彫りされ、額部・基部とも前方に突出させている。

10.硫黄島天授 2 年銘板碑（表 12-10　図 57-10　図 58-10）

かつてはこの板碑のある周辺に多くの石造物が残されていたと伝えられているが、現在はこの板碑のみが残されている。この板碑に関しても、場所が移されたと伝えられている。調整は正面及び両側面とも、丁寧に仕上げられている。額部と碑身との境にわずかに三角形の切込みを入れて突出させている。額部から山型まで平らに仕上げられ、正面観が三角形の山型は正面から背面にむかい稜をもつ。断面三角形の切り込みは正面２条であり、側面には廻されていない。碑身上端にはバンとウーンの梵字種子を薬研彫りするほか、その下には刻銘がみられる。

11.硫黄島慶長 15 年銘板碑（表 12-11　図 57-11　図 58-11）

単独で立てられている板碑である。調整は背面も含めて、丁寧に仕上げられている。額

部と碑身との境には境界の表示はなく、碑身から山型まで平らに仕上げられ、正面をやや膨らませた三角形の山型は正面から背面にむかい切り落とされている。板碑の四面の隅にはいずれも面取りが施されている。やや離れた断面三角形の切込みは正面から側面に延びる。正面の碑身上端には細線陰刻の月輪内に梵字種子を小さく陰刻するが稚拙である。その下には刻銘がみられるほか、向かって右側面にも刻銘がみられる。

表 12　薩摩における紀年銘をもつ整形板碑一覧

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
1	南瀬観音永仁 7 年銘 1 号板碑	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬	永仁 7 年	1299	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
2	南瀬観音永仁 7 年銘 2 号板碑	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬	永仁 7 年	1299	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
3	戸田観音 1 号板碑	鹿児島県薩摩川内市中村町戸田	貞和 5 年	1349	凝灰岩	
4	草道板碑	鹿児島県薩摩川内市水引町草道	大永 2 年	1522	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
5	高橋家 1 号板碑	鹿児島県薩摩川内市入来町浦之名	大永 5 年	1525	凝灰岩	入来町誌編纂委員会 1978
6	高橋家 2 号板碑	鹿児島県薩摩川内市入来町浦之名	天文 13 年	1544	凝灰岩	入来町誌編纂委員会 1978
7	寿昌寺墓地板碑	鹿児島県薩摩川内市入来町副田	享禄 4 年	1531	凝灰岩	入来町誌編纂委員会 1978
8	一之宮神社板碑	鹿児島県鹿児島市郡元町	大永 5 年	1525	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
9	鰻板碑	鹿児島県指宿市山川成川	元徳 4 年	1332	山川石	多田隈豊秋 1978
10	硫黄島天授 2 年銘板碑	鹿児島県三島村硫黄島	天授 2 年	1376	凝灰岩	
11	硫黄島慶長 15 年銘板碑	鹿児島県三島村硫黄島	慶長 15 年	1610	凝灰岩	

図 56　薩摩における整形板碑の分布

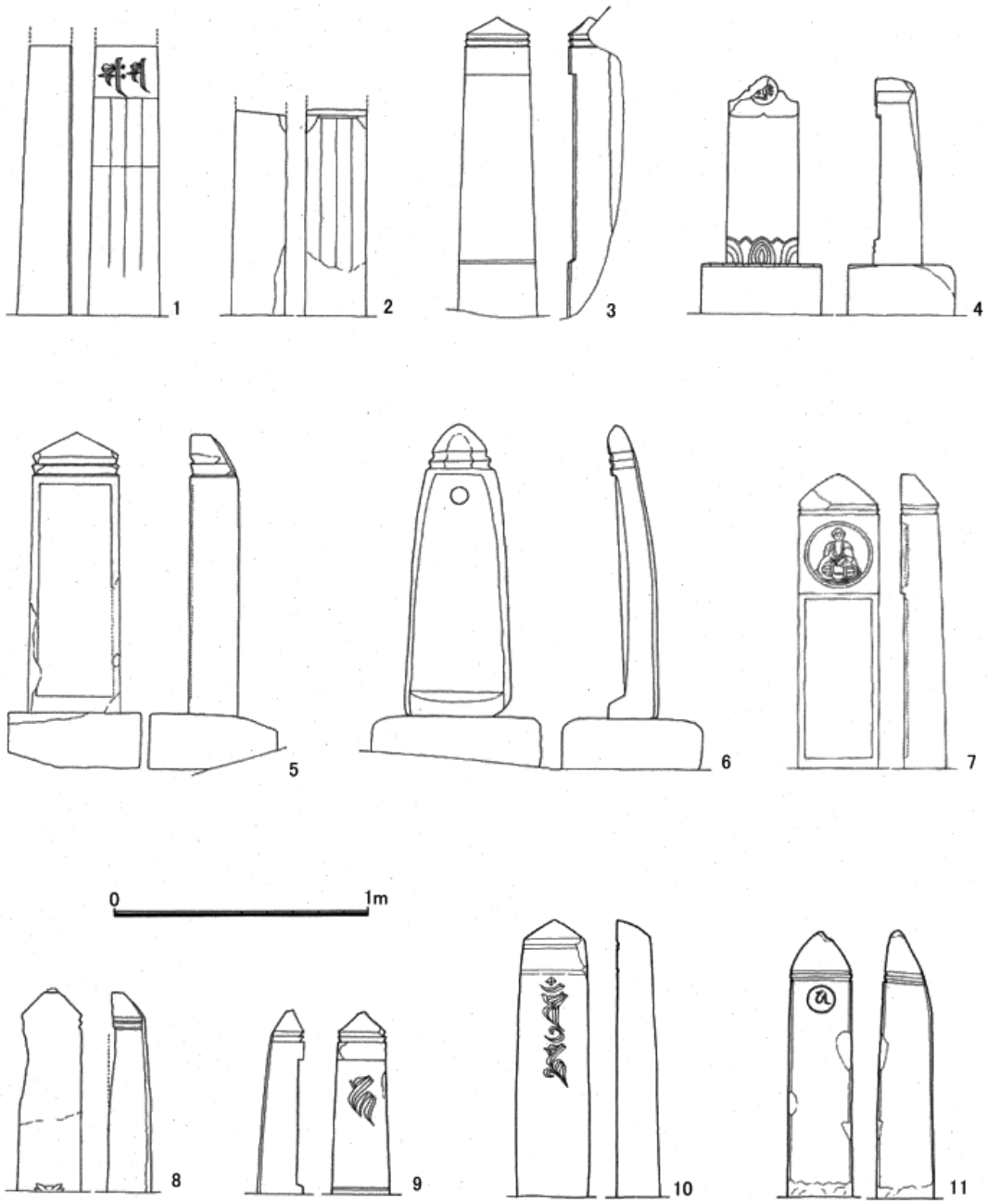


図 57　薩摩における整形板碑

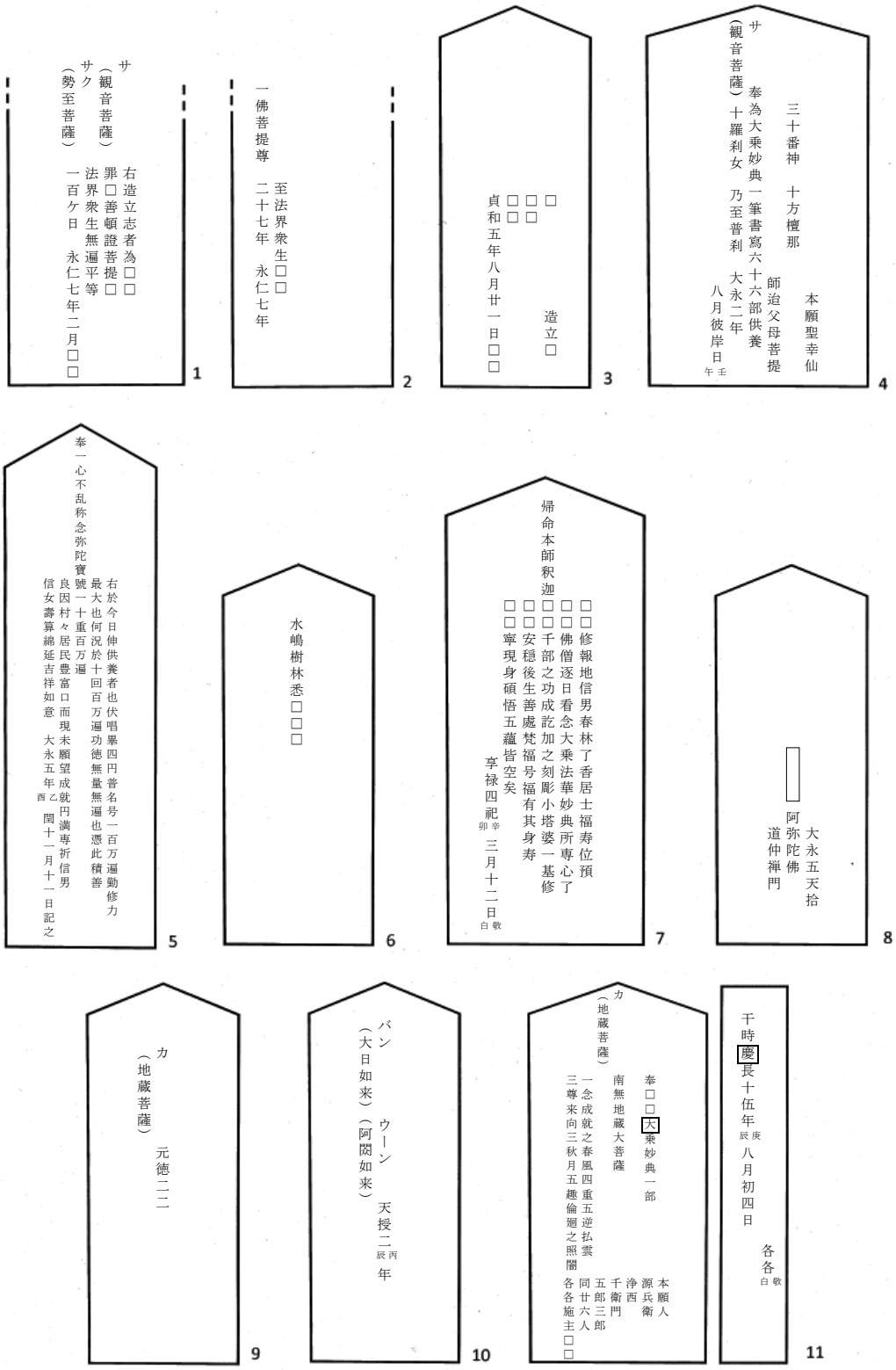


図 58　薩摩における整形板碑銘文

大隅

大隅は、豊後・日向・薩摩とともに九州を代表する整形板碑地帯といえる。正応 6 年(1293)の南大隅町岩林寺跡 1 号板碑が最古の紀年銘資料に位置付けられ、これに次ぐ資料が、同じ場所に所在する永仁 2 年（1294）の岩林寺跡 2 号板碑である。その分布は湧水町稲葉崎・田尾原などの川内川流域に最も資料数が多く、前項の宮崎県えびの市の資料とあわせて川内川流域に濃密な分布をみることができ、これは九州全域をみてもきわめて多い。また、鹿屋市高須町、南大隅町根占など大隅半島にも狭い範囲に集中箇所が確認できる傾向がある。

このような整形板碑のほとんどが、凝灰岩製であり、豊後・日向・薩摩の石材と共通する。しかし、薩摩の項でもふれたが、指宿市山川地区に産出する山川石を石材とした紀年銘板碑が、鹿屋市波之上神社に集中して存在する。鹿屋市波之上神社は鹿児島湾岸に位置し、水運で指宿市山川と結びつく地域である。紀年銘板碑に限らず、南北朝期の山川石製石塔の分布域は鹿児島湾沿岸地に分布し、板碑の分布はその一端を示すものである。これらの山川石製板碑については、紀年銘板碑最大のものが鹿屋市波之上神社 5 号板碑の総高 125cm であり、きわめて小型のつくりである特徴をもつ。

その形態のほとんどは、山型を三角形に上部に突出させ、山型下に二条切込み、二条切込み下には突出した額部をもち、碑身下には基部の突出や基礎石が存在するものもみられる。中には、文和 4 年（1355）銘をもつ湧水町稲葉崎二連板碑のように一石で 2 基の板碑を彫出する二連板碑などの板碑もみられる。

特筆すべきは、湧水町稲葉崎に所在する「黄金塔」と呼ばれる総高 3m を超える 2 基の大型塔である。この両塔は、頂部が丸く成形され、上端部に陰刻線による珠文帯の方形区画内に月輪を刻み月輪内に大きく梵字種子を薬研彫りしている。その下には梵字種子をさらに雄大に薬研彫りし、その下にさらに陰刻線による珠文帯を配し、上段の銘文と下段の銘文を画する陰刻線による珠文帯がみられるというように、九州全域をみても、全く類例が確認できない特徴をもつ。

以下では、大隅における紀年銘をもつ整形板碑を紹介する。

1.稲葉崎暦応 2 年銘 1 号板碑(表 13-1　図 60-1　図 64-1)

山中の緩傾斜に平坦地を連続させて立てられる石塔群中、中央に位置する「黄金塔」と呼ばれる同規模同型式の 2 基の板碑のうち、向かって右側の板碑である。背面に粗い加工痕を残し、側面の調整はやや丁寧、正面はきわめて丁寧に調整されている。碑身正面幅は

上部・下部ともほぼ同じであるが、側面幅は上部に行くにしたがい、やや細く仕上げ、上端部においてやや前屈みに成形されている。頂部は丸く成形され、上端部に陰刻線による珠文帯の方形区画内に月輪を刻み、月輪内に大きく梵字種子を薬研彫りしている。その下には梵字種子をさらに雄大に薬研彫りし、その下にさらに陰刻線による珠文帯を配し、この下にも上段の銘文と下段の銘文を画する陰刻線による珠文帯がみられる。基部はコンクリートにより固められているため明らかでない。

2.稲葉崎暦応 2 年銘 2 号板碑(表 13-2　図 60-2　図 64-2)

山中の緩傾斜に平坦地を連続させて立てられる石塔群中、中央に位置する「黄金塔」と呼ばれる同規模同型式の 2 基の板碑のうち、向かって左側の板碑である。背面に粗い加工痕を残し、側面の調整はやや丁寧、正面はきわめて丁寧に調整されている。碑身正面幅・側面幅とも上部に行くほどわずかに細く仕上げ、上端部においてやや前屈みに成形されている。頂部は三角に成形され、上端部に陰刻線による珠文帯の方形区画内に月輪を刻み、月輪内に大きく梵字種子を薬研彫りしている。その下には梵字種子をさらに雄大に薬研彫りし、その下にさらに陰刻線による珠文帯を配し、この下にも上段の銘文と下段の銘文を画する陰刻線による珠文帯がみられる。珠文帯の位置は 1 号板碑と同じであるが、珠文数・配置がわずかに異なる。基部はコンクリートにより固められているため明らかでない。

3.稲葉崎暦応 2 年銘 3 号板碑(表 13-3　図 61-3　図 64-3)

山中の緩傾斜に平坦地を連続させて立てられる石塔群中の一つである。調整は平坦な背面に粗い加工痕を残し、また、側面に一部粗い加工痕を残すほかは丁寧に仕上げられている。山型は破損しているが、残存部の形状から頂部は尖頭状を呈し、中央に位置することが想定できる。やや前屈みに成形する額部から山型までは、前面をわずかに膨らませている。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形だが、同時期の板碑に比較すれば、彫りがやや浅い。碑身上半には梵字種子を雄大に薬研彫りし、中に墨を入れている。梵字種子下には細線陰刻の割付線を引き、その割付線の中に銘文を刻んでいる。

4.稲葉崎暦応 3 年銘板碑(表 13-4　図 61-4　図 64-4)

山中の緩傾斜に平坦地を連続させて立てられる石塔群中の一つである。碑身から山型部は前屈みに成形している。調整は丸く膨らませた背面と向かって右側の側面に粗い加工痕を残す。このほかの面には碑身に細かい鑿痕を残すほかはすべて丁寧に仕上げられている。山型は正面観をわずかに膨らませ、頂部に背面に向かい下がっていく稜をもつ。二条切込みは断面三角形でしっかりしている。額部は大きく前方に突出させており、前面にアクと

バンの梵字種子を薬研彫りしている。碑身上半には中に墨を入れた阿弥陀三尊の梵字種子を雄大に薬研彫りし、梵字種子下には銘文を刻んでいる。

5.稲葉崎二連板碑(表 13-5　図 61-5　図 64-5)

山中の緩傾斜に平坦地を連続させて立てられる石塔群中の一つである。中央に陰刻線を引き 2 基の板碑の界線としている。横幅は同じだが、向かって左側をやや大きく成形している。調整は 2 基の中央をやや膨らませた背面に粗い加工痕を残すほか、すべての面を丁寧に仕上げている。また正面も 2 基の中央の界線付近を最も高くし、丸く膨らませている。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形でしっかりしている。それぞれの碑身上半には梵字種子を薬研彫りし、梵字種子下には刻銘がみられる。

6.田尾原正平 14 年 1 号板碑(表 13-6　図 61-6　図 64-6)

山中の平坦地に存在する石塔群中、最奥に立てられる 2 基の板碑のうち、向かって右側のものである。2 号板碑とともに細身の形態的特徴をもち、2 基並立のものである。調整は丸く膨らませた背面に粗い加工痕を残す。また、側面は細かい鑿痕を残すほかは、すべて丁寧に仕上げられている。そのほかはすべての面を丁寧に仕上げている。山型は正面観が三角形であり、やや後ろに位置する頂部から後方に下がる稜線をもつ。二条切込みは断面三角形でしっかりしており、額部は前方に突出させている。碑身上端には中に墨を入れた梵字種子を薬研彫りし、梵字種子から離れた下部には銘文を刻んでいる。なお、左下端には墨書銘が確認できるが、現在では判読できない。

7.田尾原正平 14 年 2 号板碑(表 13-7　図 61-7　図 64-7)

山中の平坦地に存在する石塔群中、最奥に立てられる 2 基の板碑のうち、向かって左側のものである。1 号板碑とともに細身の形態的特徴をもち、2 基並立のものである。調整は下半を丸く膨らませた背面に粗い加工痕を残す。また、側面は細かい鑿痕を残すほかはすべて丁寧に仕上げられている。そのほかはすべての面を丁寧に仕上げている。山型は三角尖頭状を呈し、頂部は中央に位置する。二条切込みは断面三角形でしっかりしており、額部は前方に突出させている。碑身上端には中に墨を入れた梵字種子を薬研彫りし、梵字種子から離れた下部には銘文を刻んでいる。

8.肆部合 1 号板碑(表 13-8　図 61-8　図 64-8)

昭和 20 年頃まで大きなタブの木が存在する一角を「キモイドン」と呼び、信仰の対象にしていたが、このタブの木周辺に存在していた板碑を破壊して埋められていたものを、後世、掘り出し、修理して並べたと伝えられている。

板碑 3 基のうち、完形に復元された同規模同型式のもの 2 基のうちの 1 基である。碑身梵字種子下部で折損しており、折損部をコンクリートで補修している。調整は平坦な背面に粗い加工痕を残し、側面後ろ半分については鑿の粗い加工痕が残されたままである。このほかの面は各面丁寧に仕上げられている。正面観は細く高さが高い特徴をもつ。碑身上方には梵字種子が大きく薬研彫りされ、梵字種子下中央およびその下部には刻銘もみられる。山型頂部は三角尖頭状に尖り、中央に位置する。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深く、額部・基部とも前方に突出させている。基部は現在では、コンクリートにより固められている。

9.肆部合 2 号板碑(表 13-9　図 61-9　図 64-9)

昭和 20 年頃まで大きなタブの木が存在する一角を「キモイドン」と呼び、信仰の対象にしていたが、このタブの木周辺に存在していた板碑を破壊して埋められていたものを、後世、掘り出し、修理して並べたと伝えられている。

板碑 3 基のうち、完形に復元された同規模同型式のもの 2 基のうちの 1 基である。碑身梵字種子中央部および下部、さらには碑身下部で折損しており、折損部をコンクリートで補修している。調整は平坦な背面に粗い加工痕を残し、側面後ろ半分については鑿の粗い加工痕が残されたままである。このほかの面は各面丁寧に仕上げられている。正面観は細く高さが高い特徴をもつ。碑身上方には梵字種子が大きく薬研彫りされ、梵字種子下中央およびその下部には刻銘もみられる。山型頂部は三角尖頭状に尖り、中央に位置する。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深く額部は前方に突出させている。碑身下部において折損しているため、基部が突出していたかどうかについては不明だが、折損部上部と下部の厚さが異なるため、基部は前方に突出していた可能性が高い。

10.波之上神社嘉暦 3 年銘板碑(表 13-10　図 62-10　図 65-10)

板碑は海岸に面した小高い山に設けられた波之上神社社殿横に置かれている石造物群中の一つである。板碑群の中では最も古い紀年銘を有し、他の板碑に比較してひときわ大きい。調整は平坦な背面に粗い加工痕を残しているが、このほかの面は各面丁寧に仕上げられている。碑身には上方に大きく薬研彫りした梵字種子がみられ、その下に刻銘がみられる。基部は前方に突出させ、加工の粗い方形基礎石上に嵌められている。

11.波之上神社元弘 2 年銘板碑(表 13-11　図 62-11　図 65-11)

板碑は海岸に面した小高い山に設けられた波之上神社社殿横に置かれている石造物群中の一つである。鎌倉期のものにしては小振りである。碑身上半部が欠損し、梵字種子下端

がわずかに確認できるのみである。調整は平坦な背面に粗い加工痕を残しているが、このほかの面は各面丁寧に仕上げられている。碑身には梵字種子下に刻銘がみられる。基部は前方に突出させ、加工の粗い方形基礎石上に嵌められている。

12.波之上神社正慶2年銘1号板碑(表13-12　図62-12　図65-12)

板碑は海岸に面した小高い山に設けられた波之上神社社殿横に置かれている石造物群中の一つである。鎌倉期のものにしては小振りである。碑身上半部が欠損し、薬研彫りされた梵字種子下半が確認できる。梵字種子は「アーンク」であろう。調整は平坦な背面に粗い加工痕を残しているが、このほかの面は各面丁寧に仕上げられている。碑身には梵字種子下に刻銘がみられる。基部は前方に突出させ、加工の粗い方形基礎石上に嵌められている。

13.波之上神社正慶2年銘2号板碑(表13-13　図62-13　図65-13)

板碑は海岸に面した小高い山に設けられた波之上神社社殿横に置かれている石造物群中の一つである。鎌倉期のものにしては小振りである。調整は平坦な背面に粗い加工痕を残しているが、このほかの面は各面丁寧に仕上げられている。正面観は上方にいくにしたがいわずかに細く仕上げている。碑身には梵字種子下に刻銘がみられる。山型頂部は三角尖頭状に尖り、中央に位置する。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深く、額部・基部とも前方に突出させている。基部は前方に突出させ、加工の粗い方形基礎石上に嵌められている。

14.波之上神社元弘3年銘板碑(表13-14　図62-14　図65-14)

板碑は海岸に面した小高い山に設けられた波之上神社社殿横に置かれている石造物群中の一つである。鎌倉期のものにしては小振りである。調整は平坦な背面に粗い加工痕を残しているが、このほかの面は各面丁寧に仕上げられている。碑身には上方に大きく薬研彫りした梵字種子がみられ、その下に草書体の刻銘がみられる。基部は前方に突出させ、加工の粗い方形基礎石上に嵌められている。

15.岩林寺跡正応6年銘板碑(表13-15　図62-15　図65-15)

岩林寺跡と伝えられる丘陵裾部の斜面に平坦地を造成し、鎌倉期以降の石造物群を並べている。この板碑は最も入口に近い位置に立てられている。調整は平坦な背面に粗い加工痕を残し、側面と背面の隅については、上方に向けて鑿の加工痕が残る面取りが施されている。このほかの面は各面丁寧に仕上げられている。正面観は上方にいくにしたがい細く仕上げている。碑身上方には梵字種子が大きく薬研彫りされている。梵字種子下中央には

刻銘もみられる。山型頂部は三角尖頭状に尖り、中央に位置する。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深く、額部・基部とも前方に突出させている。碑身は大きな方形基礎石に嵌められているが、基礎上面は摩滅が著しい。

16.岩林寺跡永仁 2 年銘板碑(表 13-16　図 63-16　図 65-16)

岩林寺跡と伝えられる丘陵裾部の斜面に平坦地を造成し、鎌倉以降の石造物群を並べている。この板碑は 1 号板碑よりやや上方の石塔郡中の中央に立てられている。調整は平坦な背面に粗い加工痕を残しているが、このほかの面は各面丁寧に仕上げられている。山型は照屋根状に反り、頂部は中央に位置する。正面観は上方にいくにしたがい、やや細く仕上げている。碑身上方には梵字種子が大きく薬研彫りされていたのであろうが、梵字種子部分から額部にかけて大きくえぐられている。梵字種子については下部が一部残り、「ア」であることが推測できる。梵字種子下中央には刻銘もみられる。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深く、額部・基部とも前方に突出させている。

17.宮原板碑(表 13-17　図 63-17　図 65-17)

板碑は神山小学校西側の竹藪中に立てられており、周辺に石塔部材が散見される。調整は平坦な背面に粗い加工痕を残しているが、このほかの面は各面丁寧に仕上げられている。山型はわずかに照屋根状に反り、頂部は中央に位置する。正面観は上方にいくにしたがいやや細く仕上げている。碑身上方には「バク」と「アン」の梵字種子が大きく薬研彫りされており、碑身下に刻銘がみられる。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深く、額部は前方に突出させている。基部についてはコンクリートで固められており、多田隈豊秋による調査時（多田隈豊秋 1078）よりも深く埋められているものと思える。欠損もほとんどないきわめて残りのよい板碑である。

18.横馬場板碑(表 13-18　図 63-18　図 65-18)

板碑は集落の公民館敷地内に単独で立てられているが、周辺から掘り出されたものと伝えられている。調整はやや丸く膨らませる背面に粗い加工痕を残しているが、このほかの面は各面丁寧に仕上げられている。山型は頂部が中央に位置する。正面観は上方にいくにしたがいやや細く仕上げている。碑身上方には「バン」の梵字種子が大きく薬研彫りされており、碑身下に刻銘がみられる。正面から側面にまわす二条切込みは断面三角形で彫りが深く、額部は前方に突出させている。欠損もほとんどないきわめて残りのよい板碑である。

表 13　大隅における紀年銘をもつ整形板碑一覧

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
1	稲葉崎暦応 2 年銘 1 号板碑	鹿児島県湧水町稲葉崎　オゴンツ	暦応 2 年	1339	凝灰岩	五味克夫 1966、藤澤典彦 2010
2	稲葉崎暦応 2 年銘 2 号板碑	鹿児島県湧水町稲葉崎　オゴンツ	暦応 2 年	1339	凝灰岩	五味克夫 1966、藤澤典彦 2010
3	稲葉崎暦応 2 年銘 3 号板碑	鹿児島県湧水町稲葉崎　オゴンツ	暦応 2 年	1339	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
4	稲葉崎暦応 3 年銘板碑	鹿児島県湧水町稲葉崎　オゴンツ	暦応 3 年	1340	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
5	稲葉崎二連板碑	鹿児島県湧水町稲葉崎　オゴンツ	文和 4 年	1355	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
6	田尾原正平 14 年銘 1 号板碑	鹿児島県湧水町田尾原鶴田山	正平 14 年	1359	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
7	田尾原正平 14 年銘 2 号板碑	鹿児島県湧水町田尾原鶴田山	正平 14 年	1359	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
8	肆部合 1 号板碑	鹿児島県志布志市有明町野井倉	暦応 4 年	1341	凝灰岩	
9	肆部合 2 号板碑	鹿児島県志布志市有明町野井倉	暦応 4 年	1341	凝灰岩	
10	波之上神社嘉暦 3 年銘板碑	鹿児島県鹿屋市高須町	嘉暦 3 年	1328	山川石	多田隈豊秋 1978
11	波之上神社元弘 2 年銘板碑	鹿児島県鹿屋市高須町	元弘 2 年	1332	山川石	多田隈豊秋 1978
12	波之上神社正慶 2 年銘 1 号板碑	鹿児島県鹿屋市高須町	正慶 2 年	1333	山川石	多田隈豊秋 1978
13	波之上神社正慶 2 年銘 2 号板碑	鹿児島県鹿屋市高須町	正慶 2 年	1333	山川石	多田隈豊秋 1978
14	波之上神社元弘 3 年銘板碑	鹿児島県鹿屋市高須町	元弘 3 年	1333	山川石	多田隈豊秋 1978
15	岩林寺跡正応 6 年銘板碑	鹿児島県南大隅町根占川南宇都	正応 6 年	1293	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
16	岩林寺跡永仁 2 年銘板碑	鹿児島県南大隅町根占川南宇都	永仁 2 年	1294	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
17	宮原板碑	鹿児島県南大隅町根占川北宮原	正安 3 年	1301	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
18	横馬場板碑	鹿児島県南大隅町根占川北	建武 2 年	1335	凝灰岩	多田隈豊秋 1978

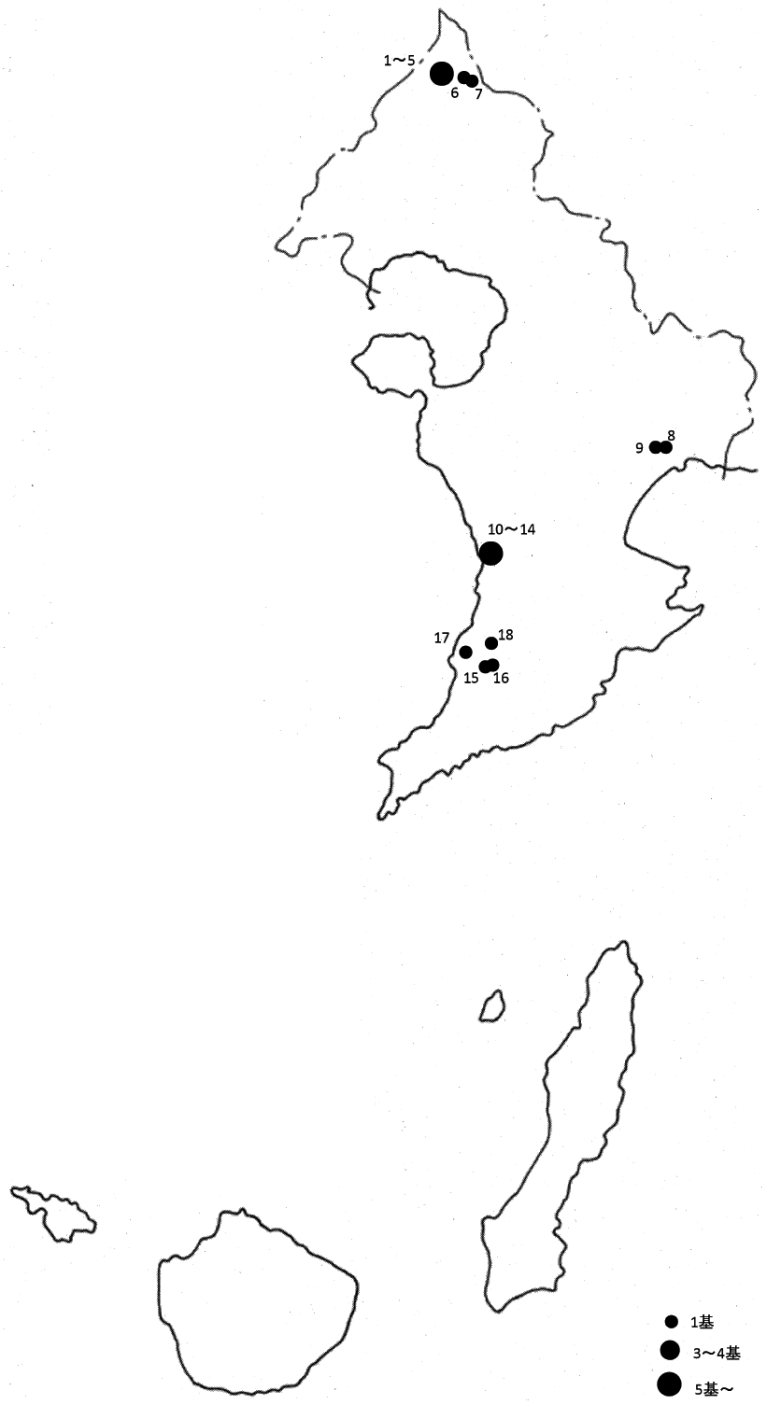


図 59　大隅における整形板碑の分布

図 60　大隅における整形板碑①

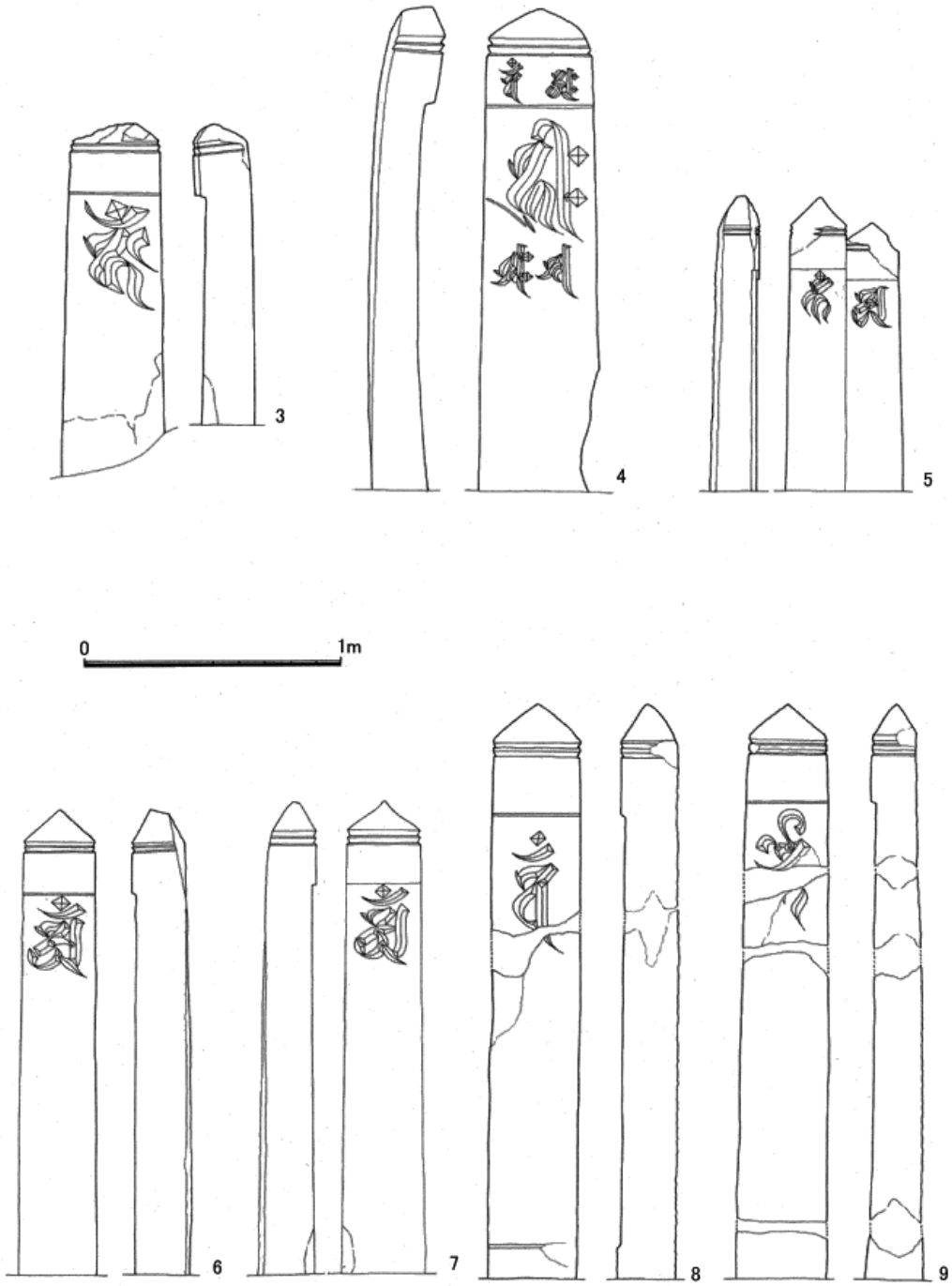


図 61　大隅における整形板碑②

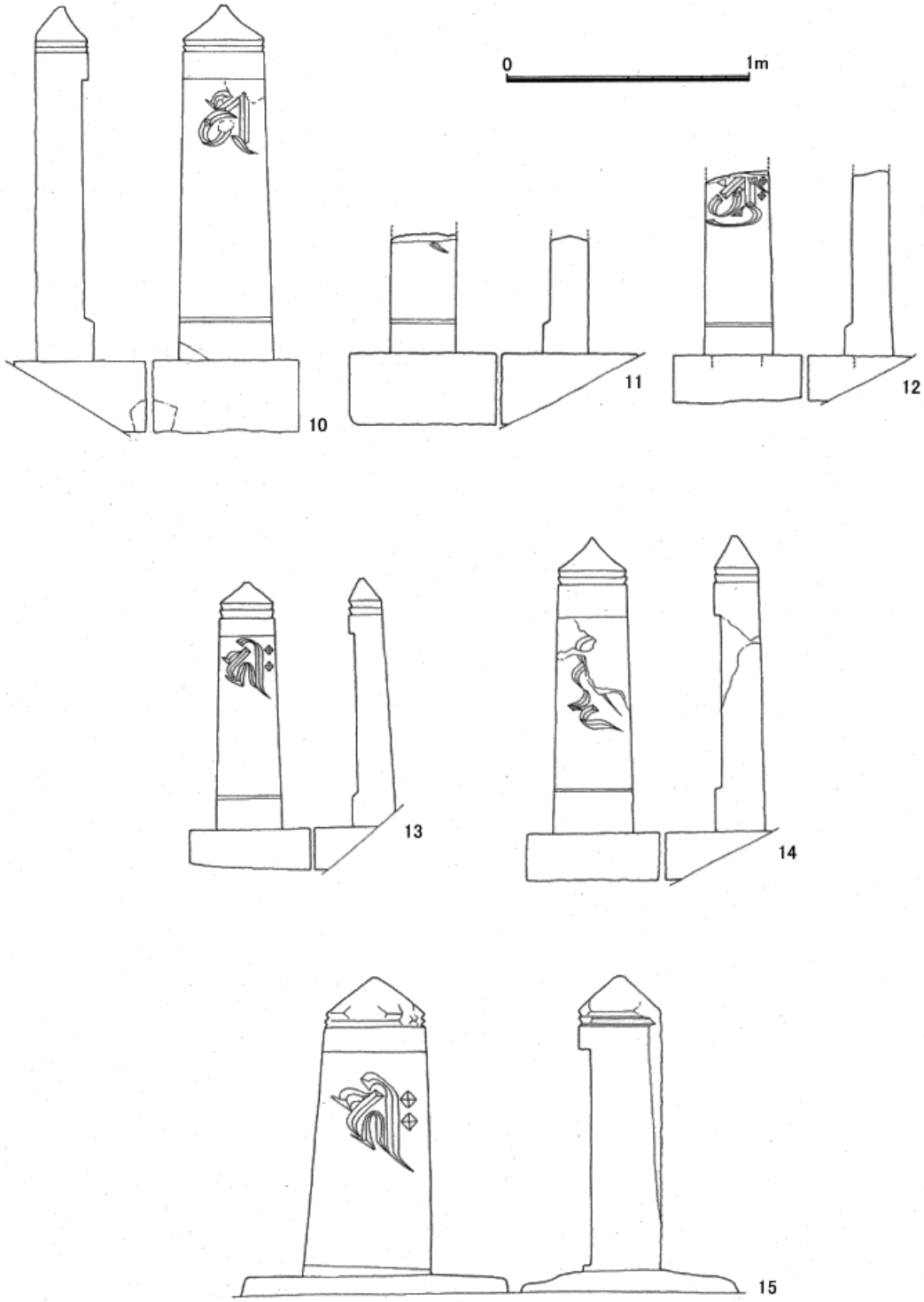


図 62　大隅における整形板碑③

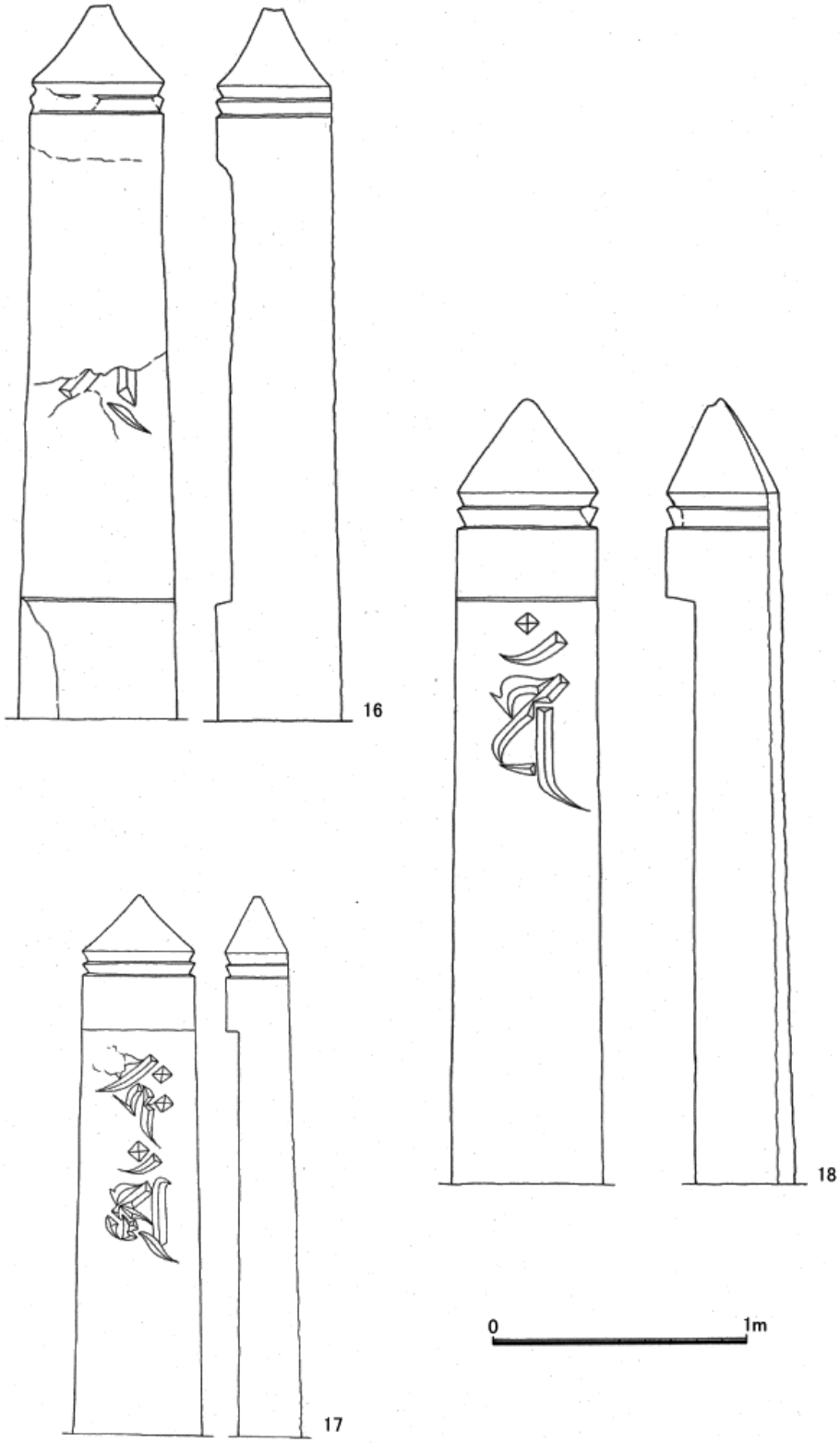


図 63　大隅における整形板碑④

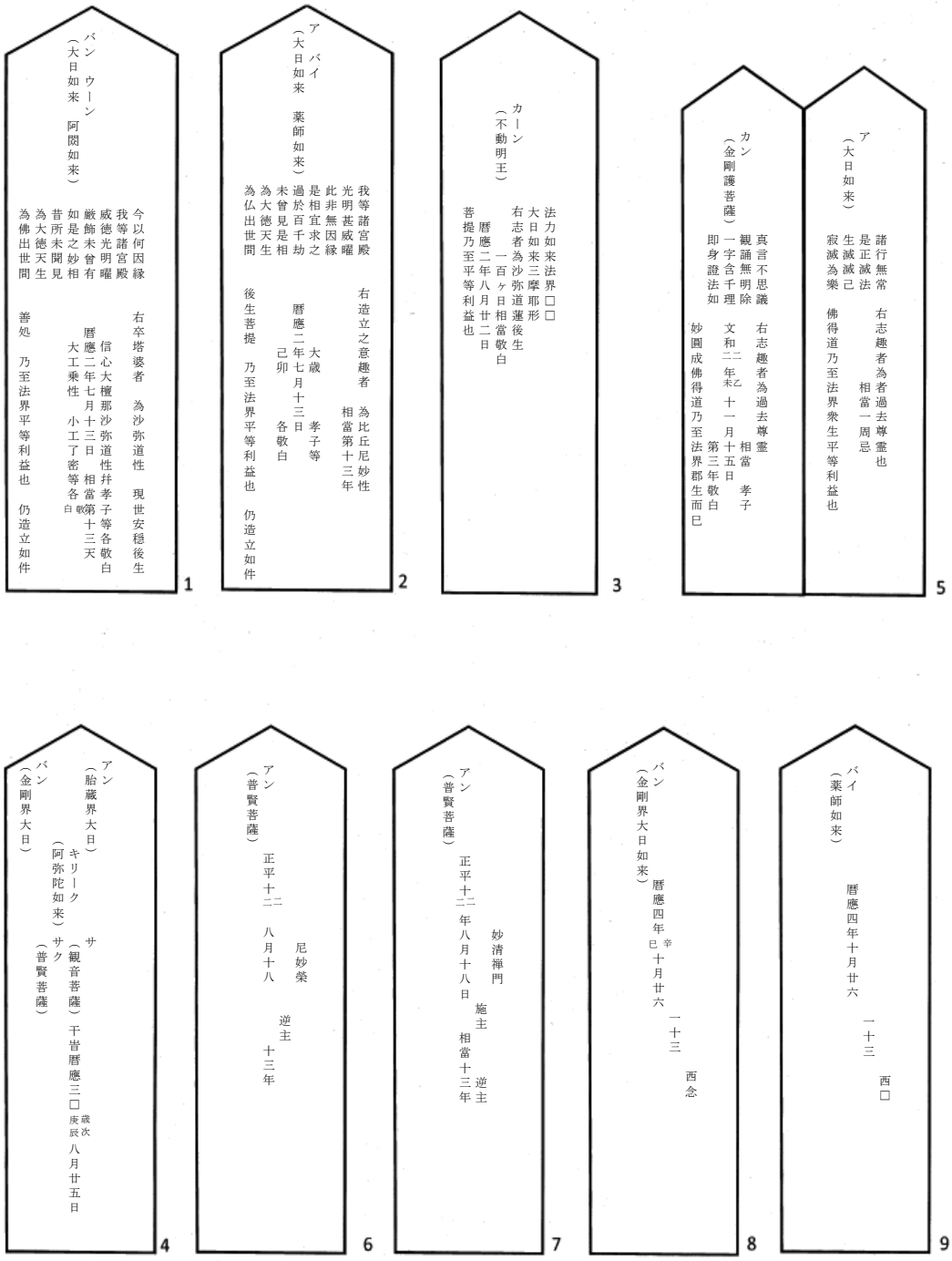


図 64　大隅における整形板碑銘文①

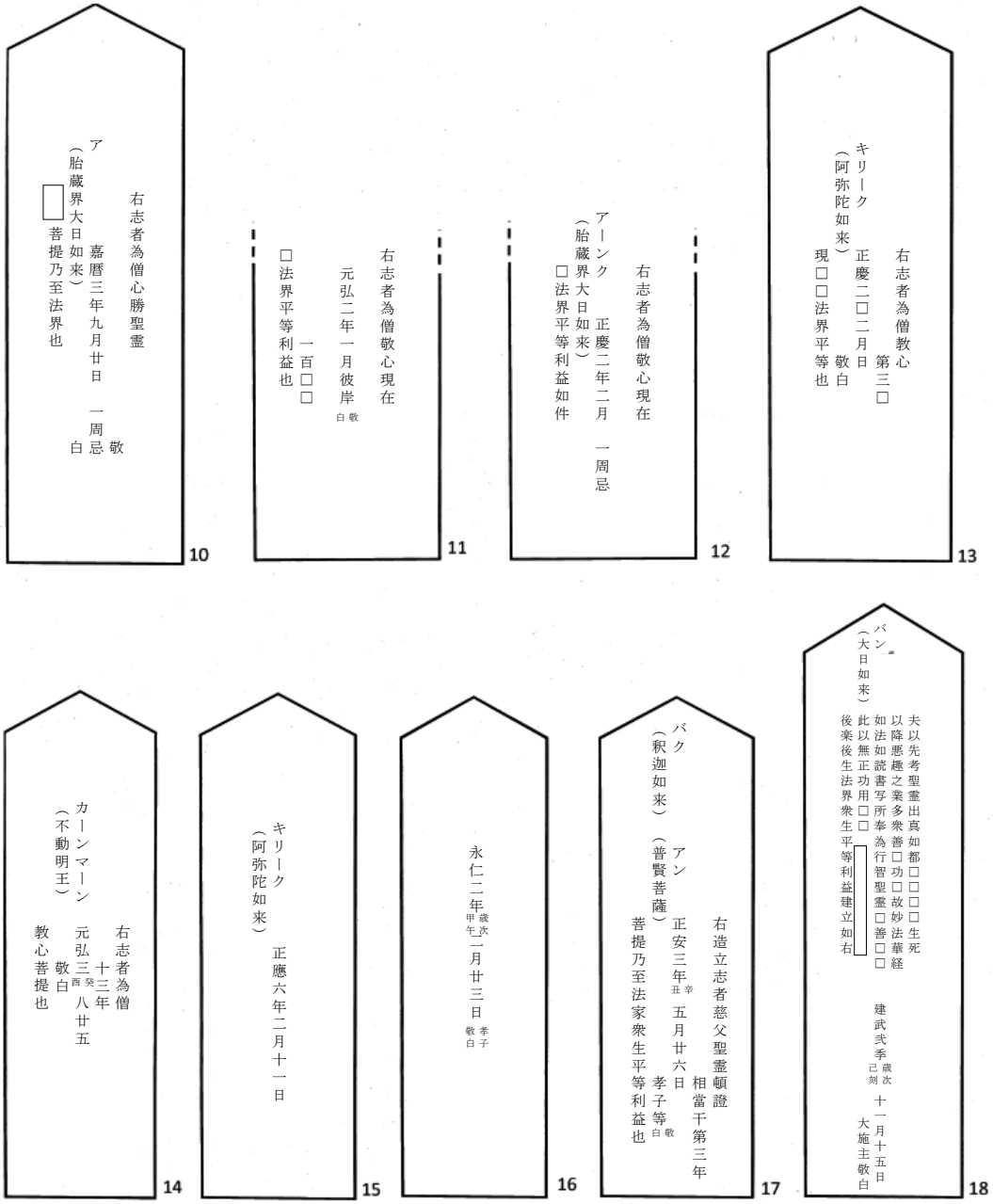


図 65　大隅における整形板碑銘文②

第Ⅲ章　九州における整形板碑の型式的検討

板碑について、各部位ごとに山型部・額部・碑身部・基部・台石・背部と分け、また、主要な部位については第66図のように名称を記した。

ここでは、各部位ごとに属性の型式について検討し、九州各地の板碑の特徴について、①筑前・筑後・肥前・肥後、②豊前・豊後、③日向・薩摩・大隅の近接する地域ごとに分けて概観したい。

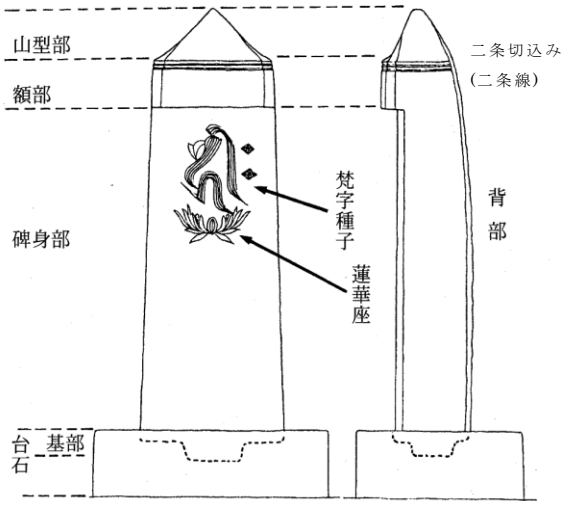


図 66　板碑各部位の名称

a)山型部

山型部は板碑では最上部に位置し、その下部に額部がみられる。長年の風雪、あるいは人為的な破損行為により、その多くの頂部が欠損しているものの、頂部までの形態は復元推定しやすい特徴をもつ。山型部に関しては、正面形態及び側面形態の形態分類を行い、その特徴の類型化を試みたい。

山型部正面形態(Ⅰ)

山型部正面形態に関しては以下の5類型に分類した。

a)直線上に頂部に延びる三角形を呈する。

b)起屋根状に膨らんで頂部に延びる三角形を呈する。

c)照屋根状に反りながら頂部に延びる三角形を呈する。

d)直線上に頂部に延びる三角形の頭部を切断し、截頭状に終わる。

e)方形を呈する。

f)丸く仕上げる。

g)屋根形を呈する。

筑前・筑後・肥前・肥後

当該地区の紀年銘板碑資料は類例が少なく、大きな傾向は掴みにくいが、山型の正面形態が直線状に頂部に延びる三角形を呈するa類型が全期間を通じて多い。しかし、出現期から1350年代までと、空白期を挟んだ1430年代以降は大きな違いが確認できる。

前者は圧倒的にａ類型が主体を占め、それ以外のものとしては、山型の正面形態が方形を呈するｅ類型が１例確認できるのみである。これは、福岡県須恵町建正寺板碑（図 2-1）であり、この資料については、正面幅がきわめて横広であることをはじめ、様々な属性が特異であるため、当該期の基本形態は、ほぼ、ａ類型に限定されることがわかる。

これに対して、1430 年代以降には様相が変化する。最も多い形態は、ａ類型の４例だが、これに次いで、山型の正面形態が起屋根状に膨らんで頂部に延びる三角形を呈するｂ類型が３例、山型の正面形態が方形を呈するｅ類型と、山型の正面形態が屋根形を呈するｇ類型がそれぞれ１例確認でき、形態が多様化する。しかし、ｂ類型は大きくみれば、ａ類型に近い様相であるが、ａ類型の多様化ともみられるため、やはり基本形態は、山型三角形である。

豊前・豊後

豊前・豊後では、正面観が三角形とそれ以外に分けられ、三角形についてはａ・ｂ・ｃの３類型に分類できよう。ｃ類型に関しては、1320～1390 年代にかけて豊後北部の国東半島一帯の安山岩を石材とした板碑において、大分県杵築市本篠板碑（図 13-7）のように山

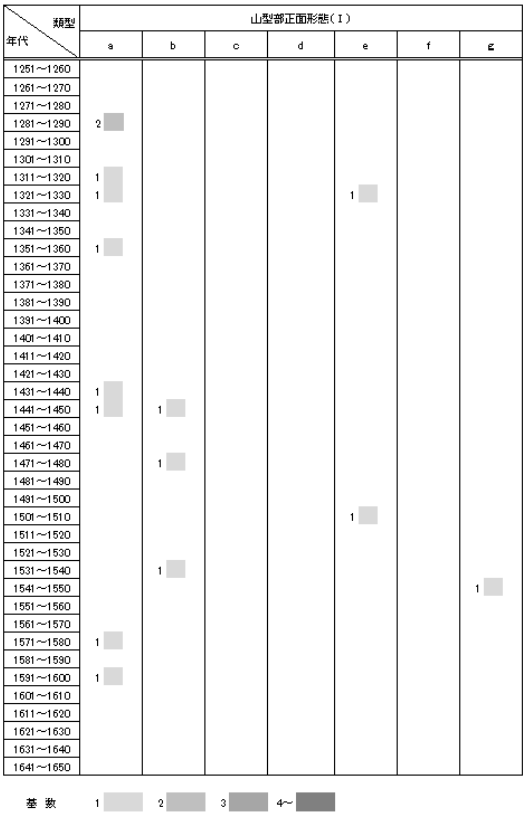


図 67　筑前・筑後・肥前・肥後における山型部正面形態分類および経年個体数

型下方部をやや膨らませながら、頂部に近付くにつれ照屋根状に変化し尖頭状になる特徴的な形態が一部流行する。この特徴は視覚的に流線美を山型に取り入れた板碑調整の完成形態とも認識でき、当時、国東半島一帯の板碑文化の質の高さを物語る板碑の一属性として評価できよう。

また、截頭三角形および方形を呈する板碑については、截頭三角形が大分県宇佐市大塚集落墓地 2 号板碑（図 7-11）・大分県宇佐市大元神社板碑（図 8-18）・大分県豊後大野市塚ノ元 1 号板碑（図 29-94）など、また、方形が大分県豊後大野市大辻山 4 号板碑（図 27-81）・大分県豊後大野市塚ノ元 2 号板碑（図 29-95）ときわめて類例が少なく、板碑の頭部形態としては亜流あるいは退化形態を示すもので、これら含めて 1495 年銘をもつ大元神社板碑以降しかみられない特徴をもつ。

山型部正面形態に関しては出現期から a 類型と b ・ c 類型が主体に流行し、これに対して、15 世紀前葉～中葉以降は、a～ c 類型が主体となりながら d・e 類型が少数出現する。

近世、板碑型墓碑に受け継がれる山型正面形態も a～ c 類型が主体であり、これは中世

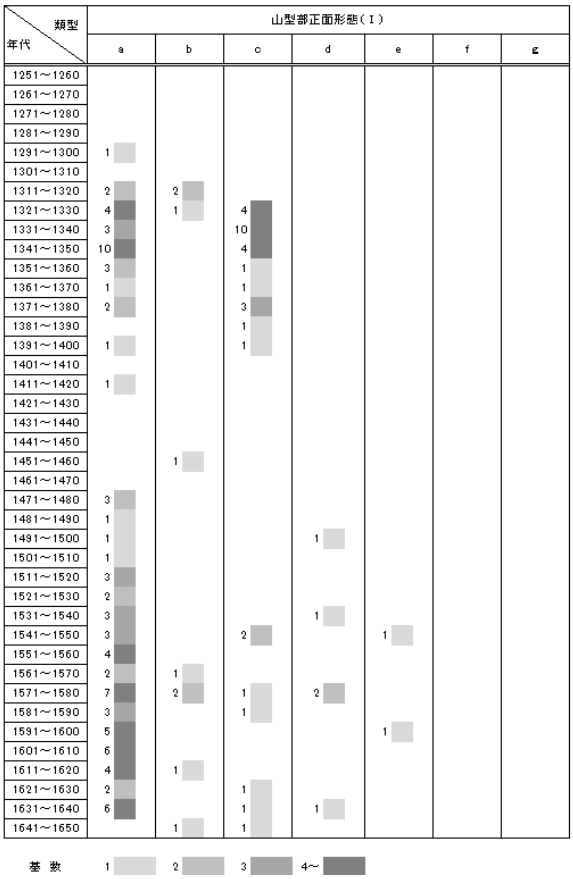


図 68　豊前・豊後における山型部正面形態分類および経年個体数

以来の伝統であることが理解できようが、戦国期には山型部正面形態について、多様化あるいは混乱化を呈する状況がうかがえよう。

日向・薩摩・大隅

日向・薩摩・大隅では、山型正面観が三角形とそれ以外に分けられ、三角形についてはa・b・cの3類型が多くみられることが確認できる。ただ、この地域ではa類型が基本形態であり、b・c類型についても、反りや膨らみも弱く、ほぼ正面観が三角形に近いものといえよう。

この地域では、16世紀から17世紀前半にかけて、山型正面観が三角形の形態が数多く存在する特徴をもつ。これは宮崎県日向市の定善寺や本善寺など、日蓮宗寺院に残されている題目板碑が規格的に製作され､それらにこの類例が多くみられることに起因している。このほかの類型はきわめて少なく、d類型に寛永8年(1631)銘をもつ宮崎県宮崎市城ケ崎寛永8年銘板碑（図47-33)､F類型に天文22年(1553)銘をもつ宮崎県都城市折田代公民館板碑（図49-45）がそれぞれみられるのみであり、これらは形態そのものが特異な様相をもつ。

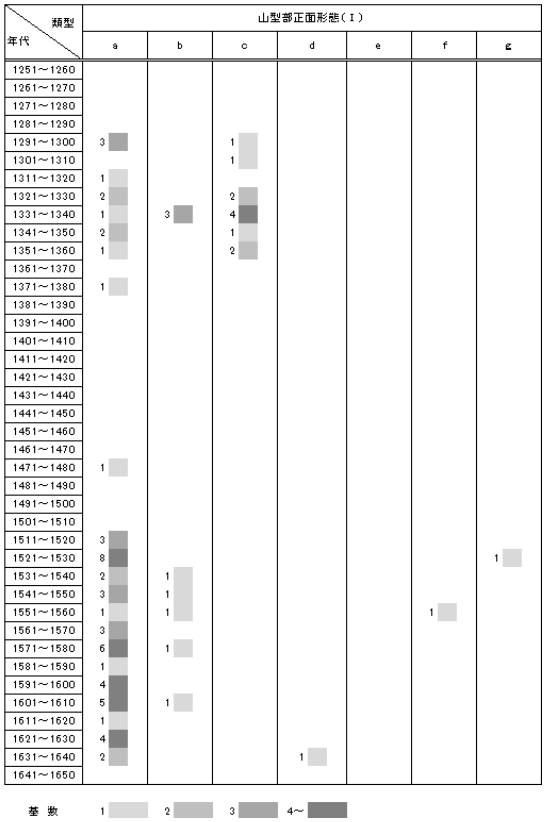


図69　日向・薩摩・大隅における山型部正面形態分類および経年個体数

山型部正面形態に関しては出現期からａ類型とｃ類型が主体に流行し、これに対して、16 世紀前葉以降は、ａ類型が主体となりながらｄ・ｅ類型が少数出現する。近世、板碑型墓碑に受け継がれる山型正面形態もａ・ｂ類型が主体であり、少数例としてｂ類型がみられる。

山型部側面形態（Ⅱ）

山型部側面形態に関しては､以下のとおりａ～ｍ類型まで13類型と多様な設定ができる。

a)直線上に頂部に延びる三角形を呈し、頂部は中央から後方に位置する。これには、わずかな截頭状を呈するものも含む。

b)起屋根状に膨らんで頂部に延びる三角形を呈し、頂部は中央から後方に位置する。これには、わずかな截頭状を呈するものも含む。

c)照屋根状に反りながら頂部に延びる三角形を呈し、頂部は中央から後方に位置する。これには、わずかな截頭状を呈するものも含む。

d) 照屋根状に大きく反りながら瘤状の頂部に延び、頂部は中央から後方に位置する。

e)前面から背面に至る頂部稜線をもち方形を呈す。

f)直線上に頂部に延びる三角形を呈し、頂部は中央に位置する。

g)頂部稜線をもつ截頭三角形を呈し、頂部は中央から前方に位置する。

h)頂部稜線をもつ截頭三角形を呈し、頂部は中央から後方に位置する。

i)直線上に頂部に延び、わずかながら頂部稜線をもつ截頭三角形を呈し、頂部は中央に位置する。

j)山型部前面を前屈みにし、頂部稜線をもつ截頭三角形を呈し、頂部は中央から前方に位置する。

k)方形を呈する。

l)直線上に頂部に延びる三角形を呈し、頂部は前端に位置する。

m)山型形態は未調整のままである。

筑前・筑後・肥前・肥後

山型部側面形態は多様であり、傾向は掴めない。佐賀県嬉野市湯野田大子堂における同形態の２例（図 2-10・11）が、前面から背面に至る頂部稜線をもち方形を呈すｅ類型におさまるのをはじめ､ｅ類型が最も多く確認できるものの､卓越して流行するわけではない。このほか直線上に頂部に延びる三角形を呈し、頂部は中央から後方に位置するａ類型、起屋根状に膨らんで頂部に延びる三角形を呈し、頂部は中央から後方に位置するｂ類型、直

線上に頂部に延びる三角形を呈し、頂部は中央に位置するｆ類型、頂部稜線をもつ截頭三角形を呈し、頂部は中央から前方に位置するｇ類型などがみられるが、これらはいずれも少数例であり、明確な形態の傾向をもたないのが当地の特徴である。

年代＼類型	山型部側面形態(Ⅱ)												
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m
1251～1260													
1261～1270													
1271～1280													
1281～1290					2								
1291～1300													
1301～1310													
1311～1320	1												
1321～1330	1				1								
1331～1340													
1341～1350													
1351～1360							1						
1361～1370													
1371～1380													
1381～1390													
1391～1400													
1401～1410													
1411～1420													
1421～1430													
1431～1440							1						
1441～1450					2								
1451～1460													
1461～1470													
1471～1480					1								
1481～1490													
1491～1500													
1501～1510						1							
1511～1520													
1521～1530													
1531～1540		1											
1541～1550						1							
1551～1560													
1561～1570													
1571～1580							1						
1581～1590													
1591～1600					1								
1601～1610													
1611～1620													
1621～1630													
1631～1640													
1641～1650													

基数　1　2　3　4～

図 70　筑前・筑後・肥前・肥後における山型部側面形態分類および経年個体数

豊前・豊後

山型部側面形態は鎌倉期末から南北朝期にかけてａ・ｃの２類型にほぼ限定できるが、ｄ類型がわずかに存在する。このｄ類型に関しては、国東半島一帯の安山岩を石材とする板碑群の中で、正面観と同様に山型下方部をやや膨らませながら、照屋根状に頂部に延び、視覚的に流線美を山型に取り入れた板碑の一形態と捉えることができ、大分県杵築市本篠板碑（図 13-7）・小俣道板碑（図 17-35）のみ確認できるように大分県杵築市大田や杵築市山香町など狭いエリアに確認できる形態であり、特定の工人系譜のもとで製作された資料であるといえよう。いずれにせよ、豊前・豊後のあらゆる石材においてａ・ｃ類型に限定できることは大きな特徴である。

これに対して、15 世紀前葉～中葉以降の板碑激減期以降の側面形態の様相は一変する。それは、ａ・ｃ・ｄ類型の消滅化とともに、新たにｅ類型を中心にさまざまな形態が出現す

るという現象である。a・c・d 類型の消滅化と言っても、1540～1570 年代の板碑からなる大分県豊後高田市寺ノ上板碑群（図 15-23～26）のみ b・c 類型が残り、これについても、ある特定の工人系譜の手によるものと理解でき、その製作は、この後、途絶えてしまう。e 類型は近世に豊前・豊後の板碑型墓碑として受け継がれる形態であり、近世段階での墓碑形態選択の要素として、最も一般的であった形態の踏襲であることがわかる。f 類型については、豊前地域とそれに接する豊後北部地域の一部にのみ確認できており、特に、8 例中 6 例が宇佐地域に集中し、地域色をもつ形態であることがわかる。一方、h 類型に関しては類例は少ないものの、国東半島南部に流行する形態であり、j 類型についても、佐伯市域の特定のエリアのみに流行する形態であるように、それぞれ特有の形態の板碑が、特定の工人系譜のもとに製作されたことがうかがえる。このほかにも、それぞれ特異な形態が少数ながら存在し、中世後半の板碑形態は多様化を呈するが、この流れの中にも、山型頂部が後方から中央ないし前方に、また、頂部稜線をもつ形態に変化する型式変化がうかがえる。

以上、山型部は正面形態および側面形態について類型化を試みたが、ここでこの両者の関連についてみてみよう。

表 15～18 に示したように、正面形態および側面形態において、新たな類型が出現する 15 世紀後葉を境に、それ以前には、正面形態および側面形態が同様な特徴をもつことが確認できる。Ⅰ・Ⅱ類型とも直線状に頂部に延びる正面形態は、側面形態も同様に後方の頂部にむけて直線状に延びるものが多く、また、照屋根状に頂部に延びる正面形態は、側面形態も同様に後方の頂部にむかい、反って延びるものが多い。それぞれ 80%以上の類例が正面･側面とも同形態をもち､正面形態と側面形態は基本的に関連性があることがわかる。

ここで、板碑出現期から若干例、存在するⅠ-b 類型についてみてみよう。当類型の板碑は、15 世紀後葉以前にはわずか 4 例を数えるものであるが、当該期で最も新しい 1451 年銘をもつ大分県九重町宝八幡宮板碑（図 12-3）を除き、いずれの側面形態も正面形態と同様に膨らませて仕上げられている類例は見られない。そこで当該期のⅠ-b 類型は微調整の欠如により完成した形態であり、工人が最終的に目指したものとは限らないことが推測でき、このことからも、当該期の板碑は、Ⅰ-a 類型に対応するⅡ-a 類型とⅠ-c 類型に対応するⅡ-c 類型にほぼ限定できることがわかる。また、Ⅱ-d 類型については、Ⅰ類型の項で触れたように、1320～1380 年代にかけて豊後北部の国東半島一帯の安山岩を石材とした板碑において、山型下方部をやや膨らませながら、頂部に近付くにつれ照屋根状に変化し尖

頭状になる特徴的な形態が一部流行するが、これらの資料の側面形態が当類型におさまる特徴をもち、視覚的に流線美を山型に取り入れた板碑調整の成熟形態と認識できる。

山型の形態については、1400～1470 年の板碑極少期以降に大きな変化がみられるが、山型部においては正面形態・側面形態とも新たな要素が出現する。当該期にも正面形態の主流を占めるⅠ-a 類型でも、側面形態に以前の対応関係は見られず、Ⅱ-a 類型は消滅する。また、Ⅰ-c 類型に対応する側面形態についても、以前のような対応関係が見られず、唯一、大分県豊後高田市寺ノ上 1 号板碑(図 15-23)・2 号板碑(図 15-24)において、Ⅰ-c 類型とⅡ-c 類型との対応関係が確認できる以外は、Ⅰ-c 類型自体が極少化傾向をたどり、また、様々な側面形態と対応するに至っている。このような、旧来の板碑形態の変化とともに、新たな形態が正面・側面に出現しても、対応関係が明確に認識できない。その中でも、最も資料数の多いⅡ-e 類型の側面形態は、前述したように、近世に豊前・豊後の板碑型墓碑として受け継がれる形態であり、最も一般的であった形態を踏襲したことがわかる。これは、正面形態のⅠ-a 類型も同様である。

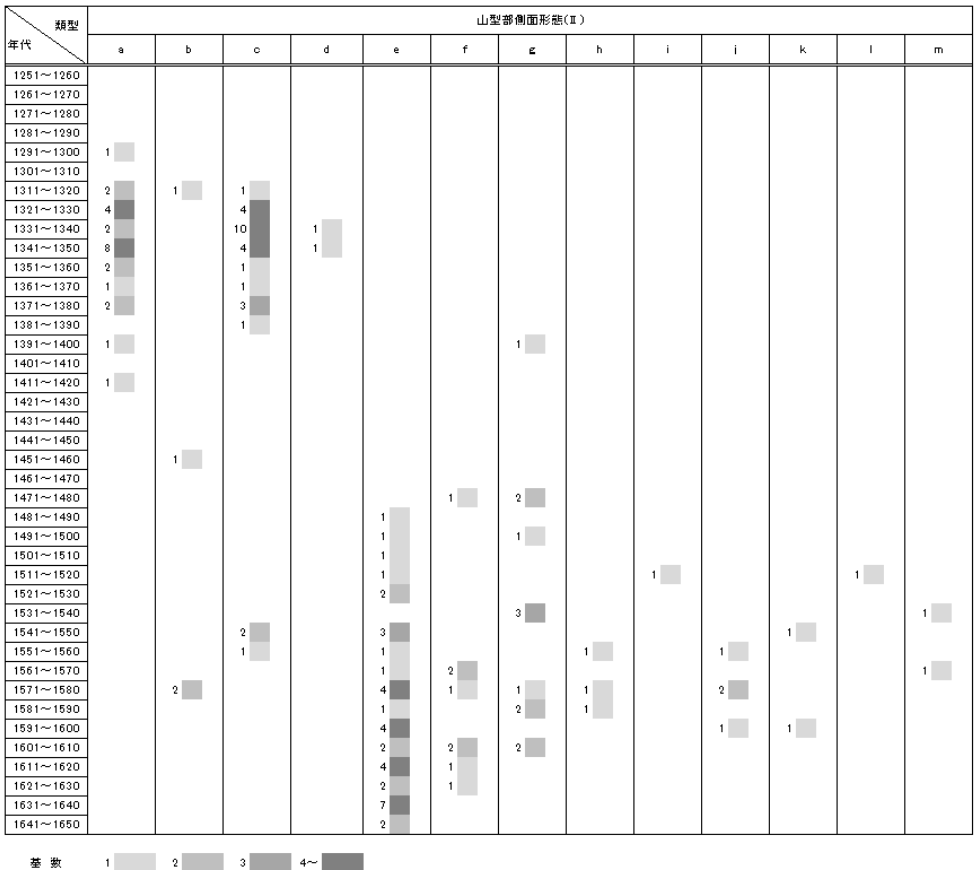


図 71　豊前・豊後における山型部側面形態分類および経年個体数

日向・薩摩・大隅

山型部側面形態は鎌倉期末から南北朝期中葉にかけてa･cの2類型にほぼ限定できるが、1類型がわずかに存在する。この1類型に関しては、鹿児島県湧水町稲葉崎暦応2年銘1・2号板碑（図60-1・2）であるが、この両者は当類型だけではなく、様々な属性が異質であり、突発的に出現し、日本全域を対象にしても本例のみに限られるため、ほぼ、a・cの2類型に限定できることがわかる。

これに対して、15世紀前葉～中葉以降の板碑激減期以降の側面形態の様相は一変する。それは、a類型は継続して主流であり続けるが、c類型が消滅するとともに、新たにb・e・g類型などのさまざまな形態が出現するという現象が確認できる。ただ、これについて地域全体の傾向とするには注意を要する。と言うのも、この地域では、宮崎県日向市の定善寺や本善寺など、日蓮宗寺院に残されている題目板碑が規格的に製作され、この資料数が全体的な傾向に大きく反映してしまうからである。この両寺院の板碑に限っても紀年銘資料24例が数えられ、この一群がすべてa類型におさまるため、その数の多さから主流であるかのような印象を受ける。しかしこの一群を除けば、a類型もきわめて少数であり、この時期の傾向としては多様化し、特定の類型が主流を占めるものではないと思える。b類型とした宮崎県小園福寿庵跡天正5年銘板碑（図46-2）は、非常にわずかに膨らみをもつが､これについても宮崎県北部の題目板碑の規格品であり､様相はa類型にきわめて近い。

前面から背面に至る頂部稜線をもち方形を呈するe類型は、宮崎県えびの市彦山寺跡3号板碑（図49-42)、宮崎県都城市折田代公民館板碑（図49-45）や宮崎県日南市大迫寺跡板碑群（図49-49・50）など、宮崎県中南部において、15世紀中葉に出現し、17世紀中葉まで戦国期を通じて流行し続ける。また、頂部稜線をもつ截頭三角形を呈し、頂部は中央から前方に位置するg類型は、宮崎県門川町小松板碑（図46-3)、宮崎県宮崎市清武城跡板碑群（図48-37・38）や宮崎県日南市大迫寺跡板碑群（図50-51・52)、鹿児島県薩摩川内市高橋家1号板碑（図57-5)・寿昌寺墓地板碑（図57-7）や鹿児島市一之宮神社板碑（図57-8）など、地域の偏りなく、15世紀中葉に出現し、17世紀中葉まで戦国期を通じて流行し続ける。

以上、山型部の正面形態および側面形態について類型の意義について考えてみたが、ここでこの両者の関連について見てみよう。

山型正面形態および側面形態において、新たな類型が出現する15世紀後葉を境に、それ以前には、正面形態および側面形態が同様な特徴を持つことが本地域においても確認でき

る。Ⅰ・Ⅱ類型とも直線状に頂部に延びる正面形態は、側面形態も同様に後方の頂部に直線状に延びるものが多く、また、照屋根状に頂部に延びる正面形態は、側面形態も同様に後方の頂部にむかい、反って延びるものが多い。

また、1380～1450 年の板碑極少期以降に大きな変化がみられるが、山型部においては正面形態・側面形態とも新たな要素が出現する。当該期にも正面形態の主流を占めるⅠ-a 類型でも、側面形態に以前の対応関係は見られず、宮崎県日向市の定善寺や本善寺など日蓮宗寺院に残されている題目板碑を除いては、Ⅱ-a 類型はほぼ消滅するといってよい。旧来の板碑形態の変化とともに、新たな形態が正面・側面に出現しても、対応関係が明確に認識できなく、その中でも、最も資料数の多いⅡ-ｅ・ｇ類型の側面形態は、近世に板碑型墓碑として受け継がれる形態であり、最も一般的であった形態を踏襲したことがわかる。

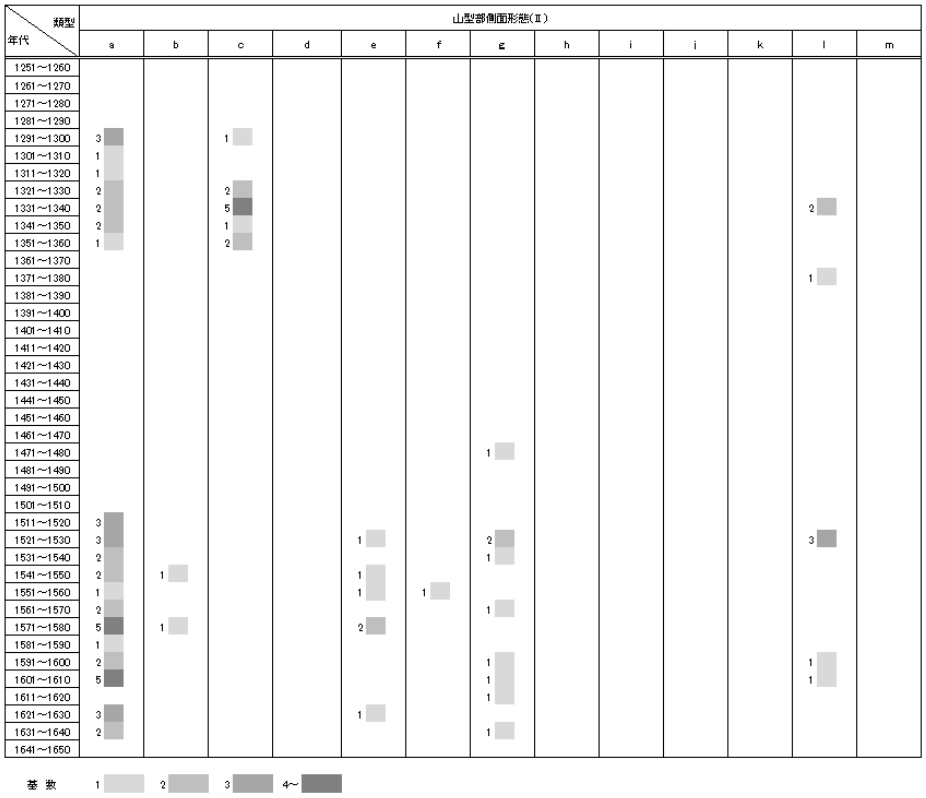


図 72　日向・薩摩・大隅における山型部側面形態分類および経年個体数

b)額部

額部は山型部の下部に位置し、碑身部との間に挟まれた部位である。山型部と額部の境界域には、切込みが見られ、ここでは、この切込みをはじめとした諸属性について類型化を行い検討する。

額部切込み正面形態(Ⅲ)

額部切込み正面形態に関しては、以下の 4 類型に分類できる。

a)上下 2 条の切込みが 2cm 以内に接している。

b)上下 2 条の切込みが 2cm 以上離れている。

c)切込みが 1 条のみである。

d)切込みが見られない。

筑前・筑後・肥前・肥後

当地においては、額部切込み正面形態の上下 2 条の切込みが 2cm 以内に接している a 類型が出現期以降、多く見られる。これとともに切込みが見られない d 類型も出現期以降、同様に多く見られ、a・d 類型が時代を通じて流行することがわかる。このほかには、切込みが 1 条のみである c 類型が 1430 年代から 1500 年代に若干流行するが、これについては単発的に終わっている。

年代＼類型	額部切込み正面形態(Ⅲ) a	b	c	d
1251～1260				
1261～1270				
1271～1280				
1281～1290				
1291～1300				2
1301～1310				
1311～1320	1			
1321～1330	1			1
1331～1340				
1341～1350				
1351～1360				1
1361～1370				
1371～1380				
1381～1390				
1391～1400				
1401～1410				
1411～1420				
1421～1430				
1431～1440	1			
1441～1450			2	
1451～1460				
1461～1470				
1471～1480	1			
1481～1490				
1491～1500				
1501～1510			1	
1511～1520				
1521～1530				
1531～1540	1			
1541～1550				1
1551～1560				
1561～1570				
1571～1580				1
1581～1590				
1591～1600	1			
1601～1610				
1611～1620				
1621～1630				
1631～1640				
1641～1650				

基数　1　2　3　4～

図 73　筑前・筑後・肥前・肥後における額部切込み正面形態分類および経年個体数

豊前・豊後

額部切込み正面形態の推移について板碑出現期から 1450 年代までは、すべての資料において二条切込みが上下に接して刻まれている。これに対して、15 世紀後半代には、上下 2 条の切込みが 2cm 以上離れている b 類型や切込みが 1 条のみである c 類型、切込みが見られない d 類型などが出現する。15 世紀後半以降にも、上下 2 条の切込みが 2cm 以内に接している類例は少数ながら確認できるが、前述したように、1540～1570 年代の板碑からなる大分県豊後高田市寺ノ上板碑群（図 15-23・24）のみ a 類型が残り、これについても、ある特定の工人系譜の手によるものと理解でき、その製作は、この後、途絶えてしまう。b～d 類型の流行の中でも、特に b・d 類型が数的優位を占める。板碑出現以降、14 世紀中葉まで a 類型に限定できたことは、a 類型が本来の板碑形態であったことを示すものであり、中世後半の形態の多様化は、退化傾向を示すものと認識できよう。

日向・薩摩・大隅

額部切り込み正面形態の推移について板碑出現期から 1370 年代までは、わずかな例外を除きほとんどすべての資料において二条切込みが上下に接して刻まれる a 類型に限られる。例外とは、d 類型に属する鹿児島県湧水町稲葉崎暦応 2 年銘 1・2 号板碑（図 60-1・2）であり、この両者は当類型だけではなく、様々な属性が異質であり、正面上端部に陰刻線による珠文帯の方形区画内に月輪を刻み月輪内に大きく梵字種子を薬研彫りしている。

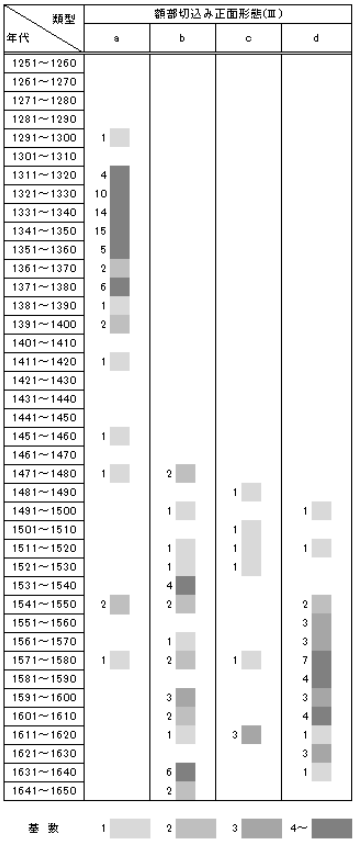


図 74　豊前・豊後における額部切込み正面形態分類および経年個体数

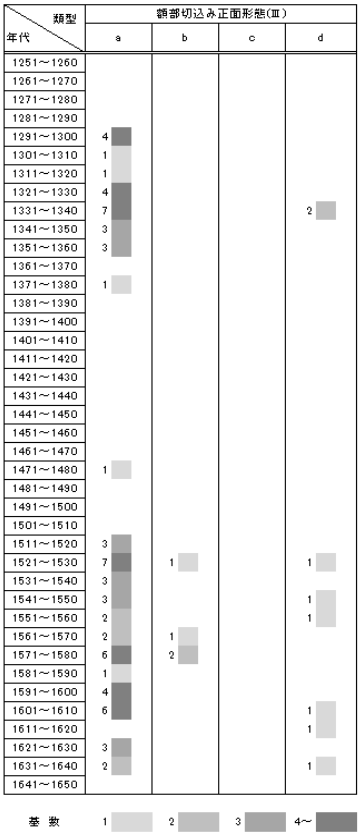


図 75　日向・薩摩・大隅における額部切込み正面形態分類および経年個体数

これに対して、1470 年代以降には、a 類型が主流でありながら、上下 2 条の切込みが 2cm 以上離れている b 類型と切込みが見られない d 類型が出現する。ただ、この属性に関しても、地域全体の傾向とするには注意を要する。と言うのも、この地域では、宮崎県日向市の定善寺や本善寺など、日蓮宗寺院に残されている題目板碑が規格的に製作され、それらに資料数が全体的な傾向に大きく反映しているからである。この両寺院の板碑に限っても紀年銘資料 24 例が数えられ、この一群がすべて a 類型におさまるため、その数の多さから

主流であるかのような印象を受けるが、この一群を除けば、a 類型も少数であり、この時期の傾向としては多様化し、特定の類型が主流を占めるものではないことがわかる。

板碑出現以降、14 世紀後葉まで a 類型に限定できたことは、a 類型が本来の板碑形態であったことを示すものであり、中世後半の形態の多様化は、退化傾向を示すものと認識できよう。

額部切込み側面形態(IV)

額部切込み側面位置については、以下の 8 類型が設定できる。

a)前面切込みが 2 条であり、その二条切込みが側面に延びる。

b)前面切込みが 2 条あるが、その二条切込みが側面に延びない。

c)前面切込みが 1 条あるが、その一条切込みが側面に延びない。

d)前面切込みは 1 条見られるが、側面には二条切込みがみられる。

e)前面切込みは見られないが、側面には二条切込みがみられる。

f)前面と同様に側面にも切込みが見られない。

g)前面の切込みが 2 条あるが、側面には 1 条のみ延びる。

h)前面の切込みが 1 条みられ、側面にも延びる。

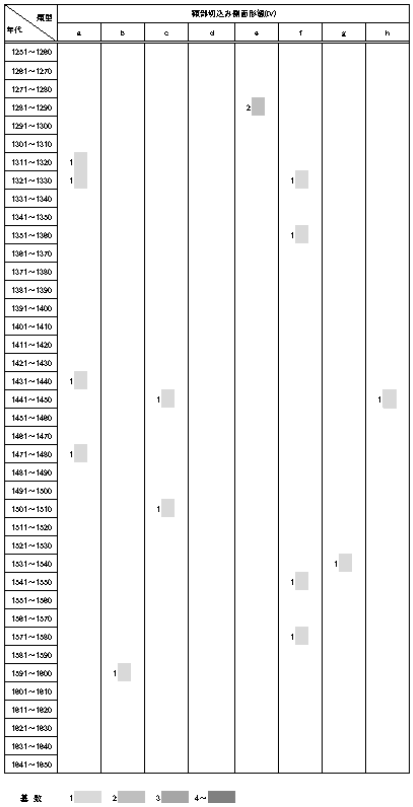
筑前・筑後・肥前・肥後

当地においては、出現期から 1350 年代まで、前面切込みが 2 条であり、その二条切込みが側面に延びる a 類型と、前面切込みは見られないが、側面には二条切込みがみられる e 類型、また、前面と同様に側面にも切込みが見られない f 類型が確認できる。これらはいずれも少数であり、多様な様相をもつことがわかる。

また、板碑空白期を経て、1430 年代からは a ・ f 類型のほかに、前面切込みが 2 条あるが、その二条切込みが側面に延びない b 類型、前面切込みが 1 条あるが、その一条切込みが側面に延びない c 類型、前面の切込みが二条あるが、側面には一条のみ延びる g 類型、前面の切込みが一条みられ、側面にも延びる h 類型など、出現期から 1350 年代までに比較すれば、より多様化する。しかし、この時期にしても、やはりそれぞれの類例数は少ない。

豊前・豊後

側面形態推移は板碑出現期から 1450 年代までは、すべての資料において前面にみられる二条切込みが側面に延びる。唯一、元弘 3 年(1333)銘をもつ大分県臼杵市野津町寺小路板碑（図 26-74）のみ、側面に二条切込みが延びないが、この板碑は三連板碑であり、今回取り扱った紀年銘資料中でも、1 例のみ確認できるものであり、異例と捉えるべきであろ

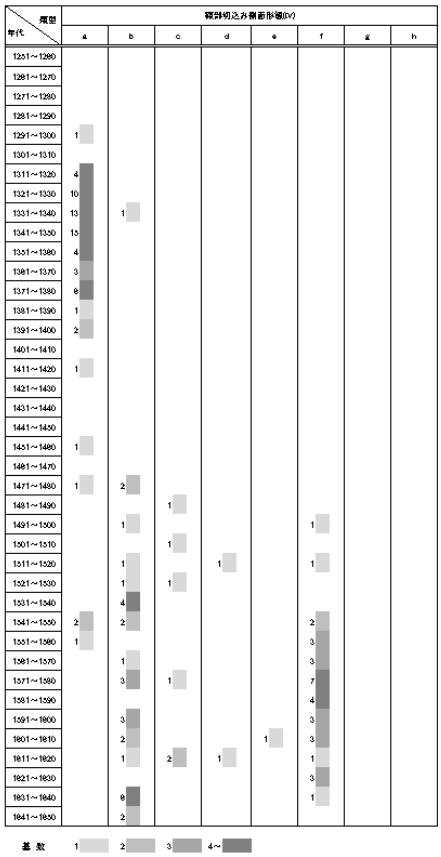


第 76 図　筑前・筑後・肥前・肥後における額部切込み側面形態分類および経年個体数

う。それゆえ、板碑出現期から 15 世紀中葉まで a 類型に限定できることは、これが本来の板碑形態の特徴であると認識できる。これに対して、15 世紀後半以降には、前面切込みが２条あるが、その二条切込みが側面に延びない b 類型や、正面と同様に側面にも切込みが見られない f 類型が主流を占めてくる。このほかにも少数だが、正面切込みが 1 条あるが、その一条切込みが側面に延びない c 類型、正面切込みは一条見られるが、側面には二条の切込みがみられる d 類型、正面切込みは見られないが、側面には 2 条切込みがみられる e 類型などの板碑が確認でき、この多様化は本来の形態を失う退化傾向をあらわすものであろう。なお、15 世紀後半以降にも、a 類型が少数ながら確認できるが、1540 年代の大分県豊後高田市寺ノ上板碑群等（図 15-23・24）にのみ a 類型が残り、これについても、ある特定の工人系譜の手によるものと理解でき、その製作はこの後、途絶えてしまう。

日向・薩摩・大隅

側面形態推移は板碑出現期から 1370 年代までは、わずかな例外を除き、ほとんどすべての資料において、前面切込みが 2 条であり、その二条切込みが側面に延びる a 類型に限られる。わずかな例外のうち注目すべきは、 f 類型に属する鹿児島県湧水町稲葉崎暦応 2 年



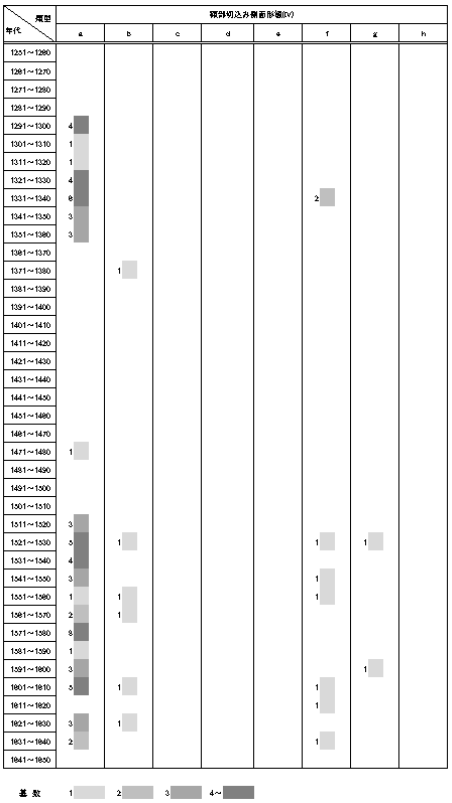
第 77 図　豊前・豊後における額部切込み側面形態分類および経年個体数

銘 1・2 号板碑（図 60-1・2）であり、この両者は当類型だけではなく、様々な属性が異質であり、前面と同様に側面にも切込みが見られない。

これに対して、1470 年代以降においても、a 類型が主流であり続ける。この地域では、宮崎県日向市の定善寺や本善寺など、日蓮宗寺院に残されている題目板碑が規格的に製作され、それらの資料数が全体的な傾向に大きく反映している。この両寺院の板碑に限っても紀年銘資料 24 例が数えられ、この一群がすべて a 類型におさまるため、その数の多さから主流であるかのような印象を受けるが、この一群を除けば、a 類型も少数であることがわかる。a 類型に加えて、前面切込みが 2 条あるが、その二条切込みが側面に延びない b 類型や、正面と同様に側面にも切込みが見られない f 類型、前面の切込みが 2 条あるが、側面には 1 条のみ延びる g 類型など、多様な様相をもつようになる。この多様化は本来の形態が失われた退化傾向をあらわすものであろう。

額部切込み断面形態(V)

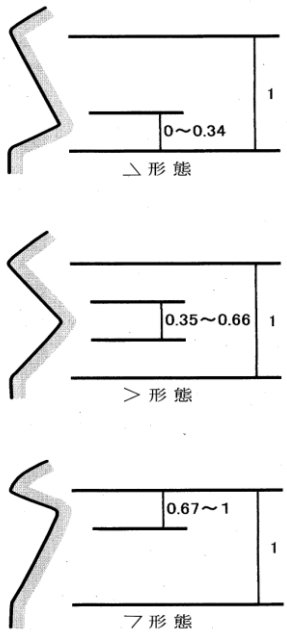
二条切込みは、その断面形態に大きな特徴がみられる。板碑は長年、風雪に晒されてい



第 78 図　日向・薩摩・大隅における額部切込み側面形態分類および経年個体数

るため、二条切込みは、風化により本来の調整面を残していない部分が多い。しかし、わずかに調整面が残る箇所を観察すると、ほとんどすべての資料について、正面と側面の二条切込み形態が同じであり、その断面形態は⊿・▽・＞・コ・コの 5 種類が確認できる。そこで、正面・側面を問わず、最も本来の彫成面を残す箇所において断面図を集成し、類型化を試みた。

断面形態が三角形の場合、⊿・▽・＞の 3 種類が確認でき、図 79 のように切込み縦幅長を 1 とし、切込み最深点の位置が切込み最下点から 1:0～0.34 の場合を「⊿形態」、1:0.35～0.66 の場合を「＞形態」、1:0.67～1 の場合を「▽形態」とそれぞれ分類するものとする。額部切り込み断面形態に関しては、以下の 9 類型に分類できる。



第 79 図　額部切込み断面形態分類図

a）二条切込み断面の上下とも三角形を呈し、最深部が下方に位置する(⧵形態)。

b）二条切込み断面の上下とも三角形を呈し、片方の最深部が下方に位置し(⧵形態)、もう片方の最深部が中央に位置する(>形態)。

c）二条切込み断面の上下とも三角形を呈し、最深部が中央に位置する(>形態)。

d）二条切込み断面の上下とも三角形を呈し、最深部が上方に位置する(⧸形態)。

e）二条切込み断面が半円形を呈する(コ形態)。

f)一条のみの切込み断面が半円形を呈する(コ形態)。

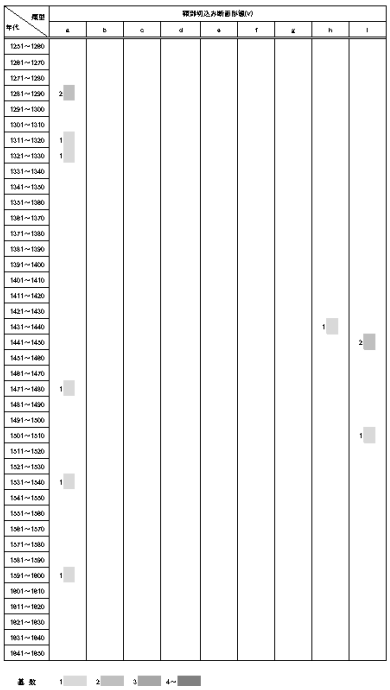
g)切込み断面が方形を呈する(コ形態)。

h)切込み断面の縦幅が 1cm 未満であり、陰刻細線状を呈する。

i)三角形段状を呈し、切込みでない。

筑前・筑後・肥前・肥後

額部切込み断面形態に関しては､板碑出現期から 1320 年代までは二条切込み断面の上下とも三角形を呈し、最深部が下方に位置する a 類型に限られる。これに対して、板碑空白期を経て､1430 年代以降には､a 類型に加えて､二条切込み断面の上下とも三角形を呈し、最深部が中央に位置する c 類型、切込み断面の縦幅が 1cm 未満であり、陰刻細線状を呈する h 類型、三角形段状を呈し、切込みでない i 類型などが小数例出現する。



第 80 図　筑前・筑後・肥前・肥後における額部切込み断面形態分類および経年個体数

豊前・豊後

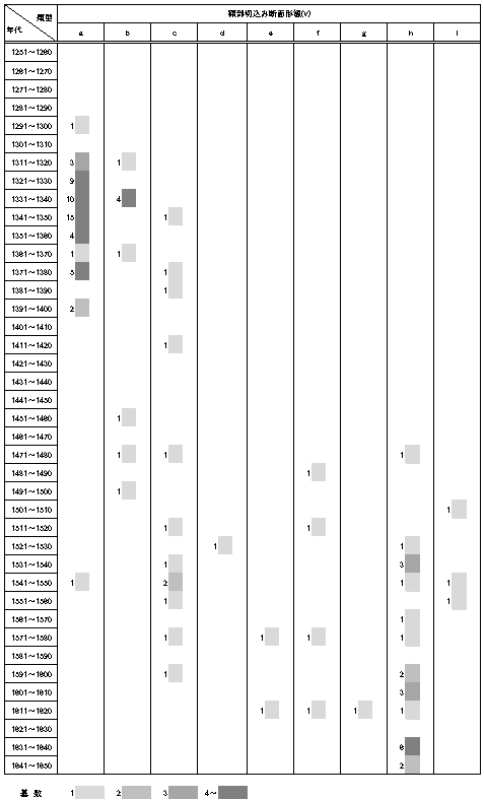
豊前・豊後では、二条切込みの場合、1410 年代以前と、1450 年代以降では様相が異なる。1410 年代以前をみれば、鎌倉期の大分県国東市護聖寺 1 号板碑（図 21-51）・大分市中村板碑（図 24-60）・大分県臼杵市野津町中山板碑（図 26-73）・大分県豊後大野市岳川板碑（図 29-99）など、縦幅・深度とも、その数値はきわめて大きく、切込み最深点が、切込み最下点から 0.03～0.22 の数値を示し、典型的な⌵形態を示すことがわかる。以後、切込み最深点が、切込み最下点からの数値が 0.34～0.66 に近づき、縦幅・深度ともその数値は極端に小さくなる。言うなれば、陰刻細線状態であり、その型式変化に明らかに退化傾向が読み取れる。

a 類型は最古例である護聖寺 1 号板碑以来、鎌倉～南北朝期に爆発的に流行し、以後、ほとんど消滅してしまう。また、b 類型は少数ながら 14～15 世紀に、c 類型は少数例だが板碑存続期を通じて確認できる。このことから、a 類型が額部切込み断面形態の本来の形態であり、>形態の出現はその退化形態の傾向と認識でき、それはすでに a 類型盛行期に出現し始めている。しかし、a 類型がほぼ消滅する 15 世紀には半世紀の空白期をおいて、d～i 類型までそれぞれ少数ながら、さまざまな様相が確認できることがわかる。これは、さらなる退化形態の現れであり、本来の断面形態である三角形を忘れ、コ・コ形態や、突発的に⧸類型が出現したり、切込みが 1 条であるものや、あるいは切込みでなく、三角形段状を呈するものなど様々な形態が現れることがわかる。この退化形態の中でも、h 類型の陰刻細線化は切込みの存在意義が失われ、形骸化した最終末の形態と認識できる。

中世板碑の系譜上にある近世の板碑型墓碑は額部切込みを失なっている。額部切込みが消滅する形態は、すでに明応 4 年(1495)銘をもつ大分県宇佐市大元神社板碑（図 8-18）以来、中世後半の板碑に散見でき、この時点ですでに切り込みの存在意義は失われはじめ、この形態が近世の板碑型墓碑へ受け継がれることになったのである。

以上の紹介をふまえ、額部切込みにおける属性間の関連性をみてみよう。各類型の検討において見てきたように、額部切込み正面形態・側面形態・断面形態とも 1470 年代に大きな変化が確認できる。

1470 年代以前は、前述した三連板碑である大分県臼杵市寺小路板碑を除き、Ⅲ-a、IV-a、V-a・b・c 類型の対応関係に終始し、上下接した額部二条切込みが、正面から側面に延び、その断面形態は、最深部が下方に位置する三角形を呈するという形態が基本形態であったことがわかる。



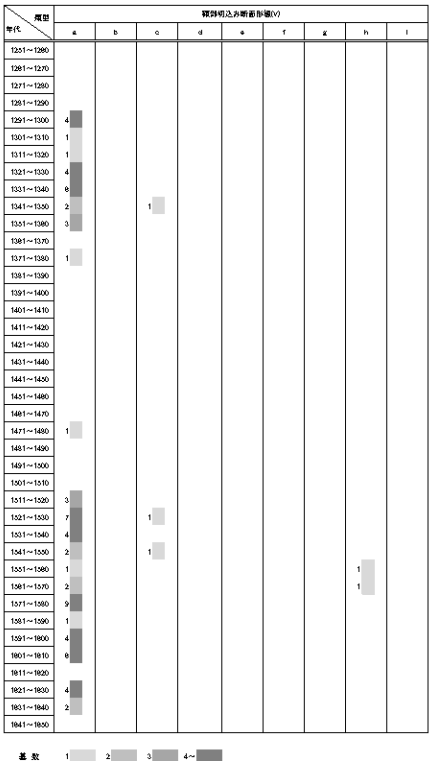
第 81 図　豊前・豊後における額部切込み断面形態分類および経年個体数

1470 年代以後には、Ⅲ-a、IV-a、V-a・b・c 類型は若干例、確認できるものの、上下接した額部二条切込みが、正面から側面に延び、その断面形態は最深部が下方に位置する三角形を呈するという形態が基本形態という類型間の対応関係は失われている。それとともに、各属性における新出の形態は、多様な様相を呈しながらも、上下離れて陰刻細線状に刻まれた二条切込みが正面にのみ確認できる形態と、切込み自体、全く失われてしまった形態とが主流を占め、中でも、後者が、近世、板碑型墓碑の主流に受け継がれていく。

日向・薩摩・大隅

日向・薩摩・大隅では、1290 年代の出現以降、1370 年代まで、ほぼ、二条切込み断面の上下とも三角形を呈し、最深部が下方に位置する a 類型に限られる。

1380 年代から 1460 年代の板碑空白期を挟み、1470 年代からの板碑群も同様に a 類型が主流であり続ける。しかし、前述してきたように、この地域では、宮崎県日向市の定善寺や本善寺など、日蓮宗寺院に残されている題目板碑が規格的に製作され、24 例を数える。この一群がすべて a 類型におさまるため、全体的な傾向に大きく反映しているが、これらを除いても、a 類型が主流であることには変わりない。



第 82 図　日向・薩摩・大隅における額部切込み断面形態分類および経年個体数

この時期には、二条切込み断面の上下とも三角形を呈し、最深部が中央に位置するｃ類型が鹿児島県薩摩川内市高橋家 2 号板碑（図 57-6）や鹿児島県鹿児島市一之宮神社板碑（図 57-8）など薩摩地方において小数例確認できる。また、切込み断面の縦幅が 1cm 未満であり、陰刻細線状を呈するｈ類型が宮崎市清武城跡永禄 5 年銘板碑（図 48-37）・宮崎県都城市折田代公民館板碑（図 49-45）など日向地方において小数例確認できる。

以上の紹介をふまえ、額部切込みにおける属性間の関連性をみてみよう。各類型の検討において見てきたように、額部切込み正面形態・側面形態・断面形態とも 1380 年代から 1460 年代の板碑空白期を挟み大きな変化が確認できる。

出現期から 1370 年代までは、Ⅲ-a、Ⅳ-a、Ⅴ-a 類型の対応関係がみられ、上下接した額部二条切込みが、正面から側面に延び、その断面形態は、最深部が下方に位置する三角形を呈するという形態にほぼ限られることがわかる。

1470 年代からは 24 例を数える宮崎県日向市定善寺・本善寺の題目板碑例がこの形態を踏襲するほか、切込みが正面にも側面にもみられない宮崎県西都市宗光寺板碑（図 47-31

)・えびの市彦山寺跡 3 号板碑（図 49-42）・日南市大迫寺跡慶長 11 年銘板碑（図 50-51）・大迫寺跡元和 2 年銘板碑（図 50-52）・鹿児島県薩摩川内市草道板碑（図 57-4）のほかは小数例であり、また、多様化している。このように切り込みが失われた形態が中世後半に現れ、近世、板碑型墓碑に受け継がれていく。

額部正面形態(Ⅵ)

額部正面形態に関しては、a～e 類型の 5 類型に設定できる。

a)額部正面を平らに仕上げる。

b)額部正面を平らに仕上げ、両端を面取りする。

c)額部正面を丸く膨らませて仕上げる。

d)額部正面を丸く膨らませ、両端を面取りする。

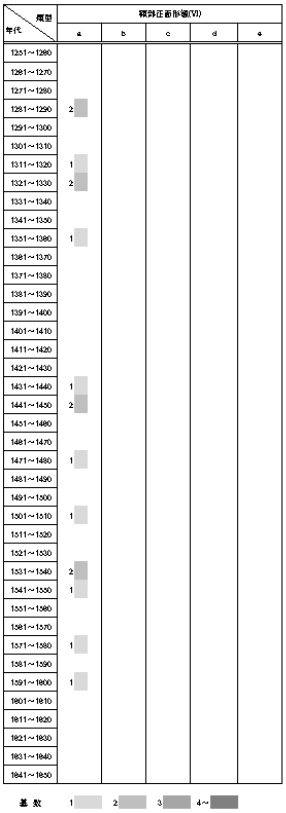
e)額部正面下端がハの字状に整形される。

筑前・筑後・肥前・肥後

板碑出現期から 1350 年代までと、板碑空白期を経て、1430 年代以降、いずれも額部正面を平らに仕上げる a 類型のみが確認できる。この地域の場合、資料数が少ないため他類型が存在しないかのように見受けられる。しかし、九州の他地域と同様に圧倒的に a 類型が多いことに変わりはない。

豊前・豊後

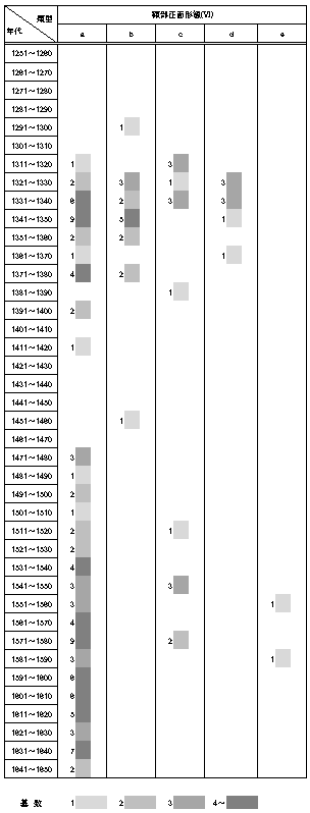
各時期を通じて、最も多く確認できる額部正面形態は a 類型であり、この形態が豊前・豊後における中世を通じた基本形態であると認識できよう。このほかには、主として南北朝期に b～d 類型の流行をみる。これらの形態には額部を丸く膨らませる要素と、前面両端を面取りする要素があり、この要素は国東半島から宇佐地方にかけて安山岩を石材とした板碑に取り入れられていることが大きな特徴といえよう。しかし、この系譜も c 類型に若干例が残るのを除き、15 世紀の板碑空白期以後には消滅し、特に、前面両端の面取りに関してはまったく見られなくなる。それ



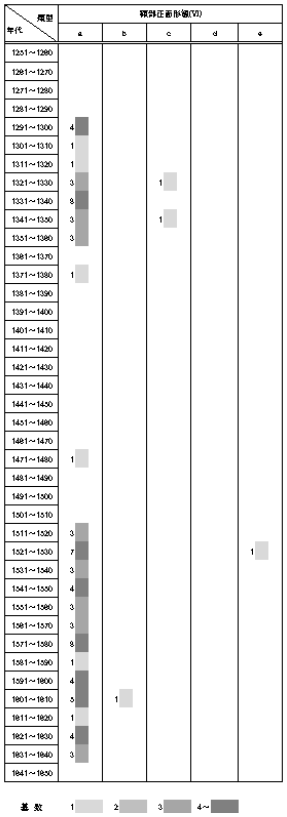
第 83 図　筑前･筑後･肥前･肥後における額部正面形態分類および経年個体数

ゆえ、国東半島から宇佐地方にかけて安山岩を石材とする板碑製作工人がもつ板碑の意匠が南北朝期のみ受け継がれていったことが理解できよう。

戦国期には、紀年銘資料では 2 例のみだが、e 類型のように、これまでには、まったく見られない特殊な形態が出現する。板碑形態の退化傾向の中で、出現したものであるが、この形態は広く国東半島一帯において確認でき、これについても、ある板碑製作工人の技術系譜が受け継がれることにより、流行したものと考えるべきであろう。



第 84 図　豊前・豊後における額部正面形態分類および経年個体数



第 85 図　日向・薩摩・大隅における額部正面形態分類および経年個体数

日向・薩摩・大隅

日向・薩摩・大隅では、1290 年代の出現以降、1370 年代まで、ほぼ、額部正面を平らに仕上げる a 類型に限定できる。このほかには、宮崎県えびの市彦山寺跡 1 号板碑（図 48-40）と鹿児島県湧水町稲葉崎暦応 2 年銘 3 号板碑（図 61-3）とが額部正面を丸く膨らませて仕上げる c 類型に収まるものの、その膨らみはわずかである。

1380 年代から 1460 年代の板碑空白期を挟み、1470 年代からの板碑群も同様に、ほぼ、a 類型に限定できる。このほかには硫黄島慶長 15 年銘板碑（図 57-11）が額部正面を平ら

に仕上げ、両端を面取りするｂ類型、鹿児島県薩摩川内市草道板碑（図 57-4）のみ額部正面下端がハの字状に整形されるｅ類型におさまるが、中世を通じて特異な様相に含まれる。そのため、額部正面を平らに仕上げるａ類型の形態が日向・薩摩・大隅における中世を通じた基本形態であると認識できよう。

額部突出(Ⅶ)

額部突出に関しては、a～f 類型の 6 類型を設定した。

a)額部を碑身より突出させ、その突出度が高い(註 5)。

b)額部を碑身より突出させるが、突出度が低い。

c)額部と碑身の境界域に陰刻細線がみられるのみで、突出しない。

d)額部を山型部・碑身より帯状に前方に突出させる。

e)額部と碑身の境界域に断面三角状陰刻がみられる。

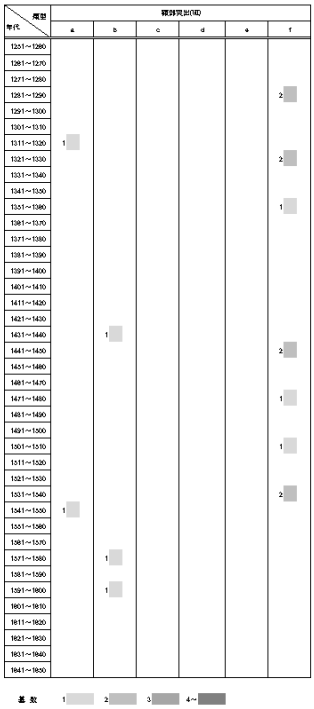
f)額部と碑身の境界域の表徴が見られない。

筑前・筑後・肥前・肥後

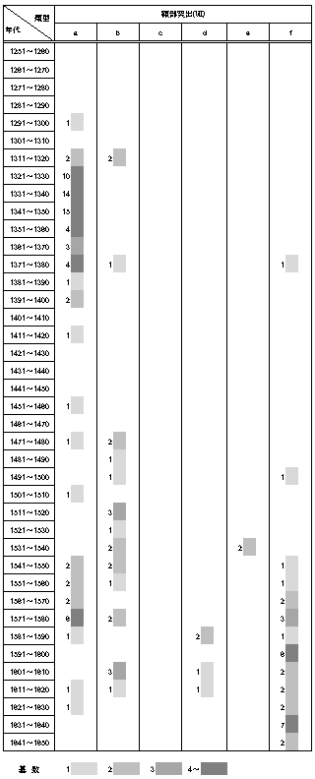
額部突出に関しては、額部を碑身より突出させるが、突出度が低いｂ類型と額部と碑身の境界域の表徴が見られないｆ類型が 15 例中 11 例と傑出して多く、額部を碑身より突出させ、その突出度が高いａ類型が 2 例、額部を碑身より突出させるが、突出度が低いｂ類型が 3 例と、少数ながらそれぞれ確認できる。額部を碑面より突出させるが突出度が低いｂ類型は、額部を碑面より突出させることではａ類型よりやや後出の傾向があるが、全期間を通じ、碑面の境界域の表徴が見られないものが優位な傾向にあることがわかる。

豊前・豊後

ａ類型は各時期を通じて、多く確認できるが、75 例中、1320～1380 年の資料が 53 例と、ほぼ鎌倉末～南北朝期に集中して確認できる。これに対して、ｂ類型は 1470 年代から流行する傾向があり、額部突出に関しては、突出の消滅化の傾向が確認できよう。また、大分県臼杵市野津町天手段原１号板碑(図 26-77)と大分県豊後大野市三重町百枝板碑(図 23-82)の 2 例のみ確認できるｃ類型は、ｅ類型の大分県豊後大野市千歳村アタゴ祠 1･2 号板碑(図 26-71・72)のように額部と碑面の境界域に断面三角状陰刻がみられる類例と様相を同じくし、旧大野郡域に限定でき、しかも 1525～1541 年の短期間に集中していることからも、同一の板碑製作集団の技術下にあるものと理解すべきであろう。ｃ･ｅ類型は額部消滅化の中



第 86 図　筑前・筑後・肥前・肥後における額部突出形態分類および経年個体数



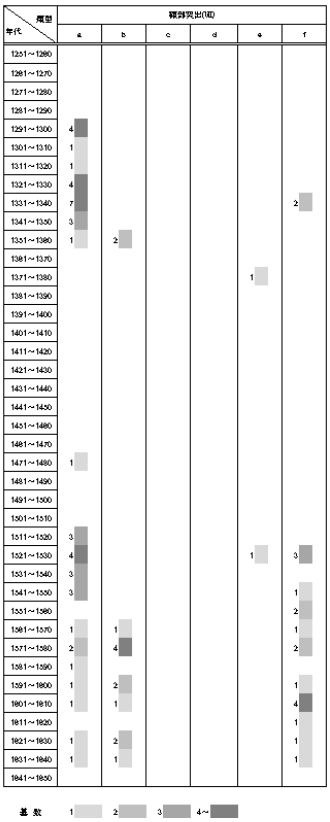
第 87 図　豊前・豊後における額部突出形態分類および経年個体数

で額部と碑面が同一面でありながらも境界域を意識する区画線を表したものであり、型式的にはａ類型→ｂ類型→ｃ･ｅ類型への変化の過程が考えられよう。この変化過程において、額部と碑面との境界域の表徴が見られないｆ類型のほとんどが 1540 年代以降に流行し、最終的にはこの型式が近世の板碑型墓碑へと受け継がれていく。このほかにも、額部を山型部・碑身より帯状に前方に突出させるｄ類型が中世末に出現するが、額部突出退化傾向の中で出現した変異形態であると認識できよう。

日向・薩摩・大隅

1290 年代の出現以降、1340 年代まで、額部を碑面より突出させ、その突出度が高いａ類型が主流を占める。その期間では、唯一、鹿児島県湧水町稲葉崎暦応 2 年銘 1・2 号板碑（図 60-1・2）のみ、額部と碑面の境界域の表徴がみられないｆ類型の板碑が存在する。

以後、1350 年代から 1370 年代まで、鹿児島県湧水町稲葉崎二連板碑（図 61-5）や田尾原正平 14 年銘 2 号板碑（図 61-7）など、額部を碑面より突出させるが突出度が低いｂ類型が出現する。ｂ類型の類例が少ないが、鎌倉後期から南北朝期では、額部の突出が低くなる傾向が読み取れよう。



第 88 図　日向・薩摩・大隅における額部突出形態分類および経年個体数

板碑空白期を経て、1440 年代以後には、額部を碑面より突出させ、その突出度が高い a 類型、額部を碑面より突出させるが突出度が低い b 類型、および額部と碑面の境界域の表徴が見られない f 類型にほぼ限られてしまう。この時期の類例として、24 例を数える宮崎県日向市定善寺・本善寺の題目板碑例は a 類型と b 類型に限られるが、この一群の中でも額部の突出度が高い a 類型が先行する傾向がみられる。

額部装飾(Ⅷ)

額部装飾に関しては、a～h 類型の 8 類型を設定した。

a)装飾が見られない。

b)梵字種子を陰刻・墨書する。

c)月輪を細線陰刻し、中に梵字種子を陰刻する。

d)月輪を細線陰刻する。

e)円形彫凹めがみられる。

f)卍を刻む。

g)円形彫凹め内に仏像・梵字種子を刻む。

h)彫凹め内に仏像・梵字種子・巴形・梵字等を刻む。

i)円形陽刻内に梵字種子を刻む。

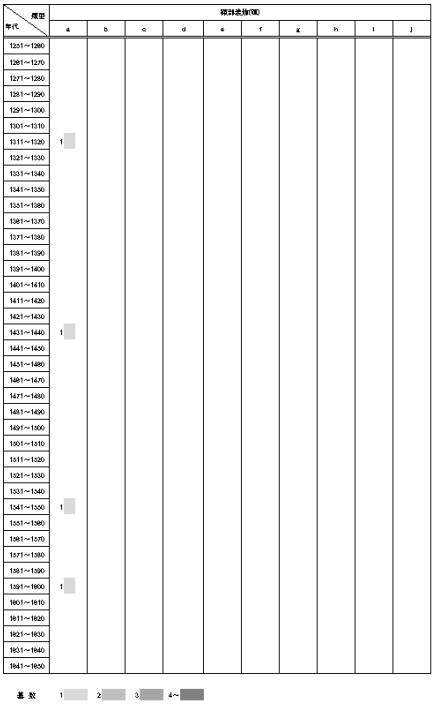
j)陰刻線や珠文による方形輪郭内に月輪と梵字種子を刻む。

筑前・筑後・肥前・肥後

板碑出現期から全期間を通じ、額部に装飾が見られない a 類型のみが確認できる。この地域の場合、資料数が少ないため他類型が存在しないかのように見受けられる。しかし、九州において他地域が a 類型のほかに様々な類型がみられるのに比較すれば、a 類型に限定されることは特異である。

豊前・豊後

a 類型は各時期を通じて、多く確認できるが、当該類型 86 例中、1290～1400 年の資料が 57 例と、ほぼ鎌倉末～南北朝期に集中して額部装飾が施されない例が最も一般的であったことがわかる。また、b 類型も少数ながら、各期を通じて存在することがわかる。これに対して、c～h 類型は戦国期以降にのみ確認でき、本来、板碑額部は無装飾あるいは梵字種子のみ確認できるものであったが、この位置にさまざまな意匠の装飾が施され始めることがわかる。また、h 類型のように彫凹め内に仏像・梵字種子・巴形・梵字等を刻む類例は、佐伯市南部の小エリアにおいて、1571～1600 年の短期間のみ確認できるため、これについ



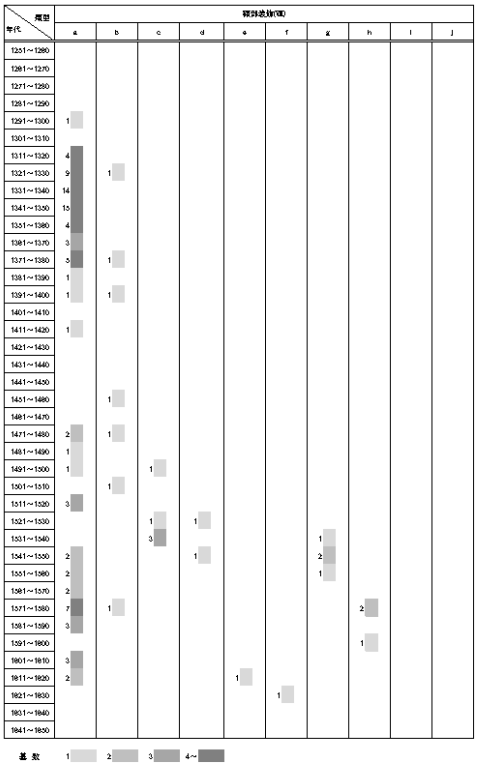
第 89 図　筑前・筑後・肥前・肥後における額部装飾分類および経年個体数

ては、ある特定の工人集団により製作された板碑であることがわかる。

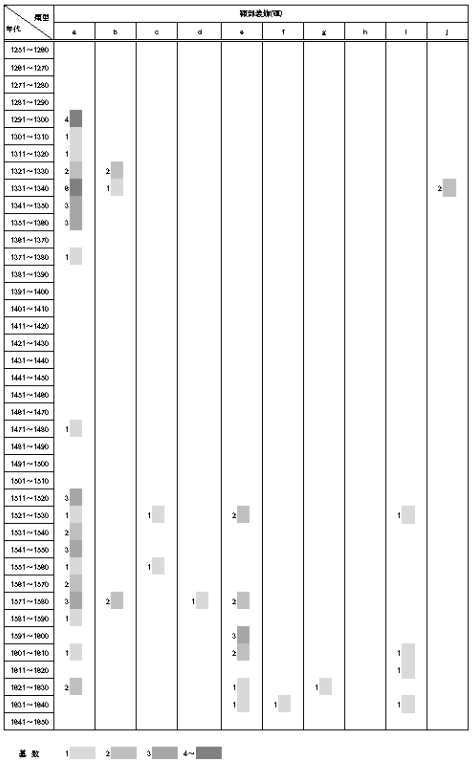
日向・薩摩・大隅

1290 年代の出現以降、1350 年代まで、額部に装飾が見られない a 類型が主流を占める。その期間では、1320 年代から 1340 年まで、宮崎県えびの市彦山寺跡 1･2 号板碑（図 48-40･41）や鹿児島県湧水町稲葉崎暦応 3 年銘板碑（図 61-4）など梵字種子を陰刻・墨書する b 類型が存在する。このほかには、唯一、鹿児島県湧水町稲葉崎暦応 2 年銘 1・2 号板碑（図 60-1・2）のみ、陰刻線や珠文による方形輪郭内に月輪と梵字種子を刻む j 類型の板碑が存在する。

板碑空白期を経て、1470 年代以後には、額部に装飾が見られない a 類型のほかに円形彫凹めがみられる e 類型が主流を占めるかのようにもみえる。しかし 24 例を数える宮崎県日向市定善寺･本善寺の題目板碑例がこの 2 類型に限られ、これらを除けば、きわめて様々な装飾が施されている。



第 90 図　豊前・豊後における額部装飾分類および経年個体数



第 91 図　日向・薩摩・大隅における額部装飾分類および経年個体数

c)碑身部

碑身部は額部の下部に位置し、板碑の中で最も重要な部位と認識されており、本尊としての梵字種子あるいは像様および、その下に造立年月日・願文・偈文などの銘文があらわされている。ここでは、特に、碑身上部の梵字種子およびその他の装飾について類型化を行い検討する。

ここで大きな問題となるのは、この類型が碑身部に限り、類型化を行ったことである。前述したが、額部と碑身部との境界域の表徴がない場合、板碑正面の上部に確認できる梵字種子が額部に属するのか､あるいは碑身部に属するのか明確に区別しにくい｡それゆえ、梵字種子の多くが、この類型に収められない結果となる。しかし、前述したⅦ-f 類型のほとんどには梵字種子が認められ、その梵字種子は碑身部および額部に分けられる梵字種子と様相を同じくし、ここで額部と碑身部との境界域の表徴がない板碑の梵字種子を碑身上部梵字種子の類型化に収めないとしても、梵字種子の態様をあらわす分析結果に影響がさほどないものと考える。

碑身上部梵字種子(IX)

碑身上部梵字種子に関しては、以下の a～ k 類型の 11 類型に設定できる。

a)梵字種子を大きく彫る。

b)梵字種子を大きく墨書する。

c)梵字種子を小さく刻む。

d)月輪を細線陰刻し、中に梵字種子を刻む。

e)梵字種子でなく、月輪の中に卍がみられる。

f)梵字種子でなく、上方に卍を刻む。

g)題目がみられる。

h)円形彫凹め内に梵字種子を大きく刻む。

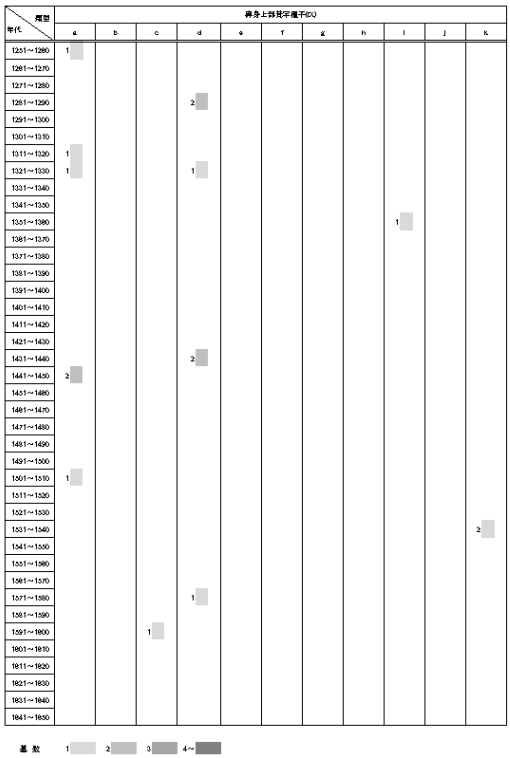
i)中台八葉院・曼荼羅などを刻む。

j)円形陽刻内に梵字種子を大きく刻む。

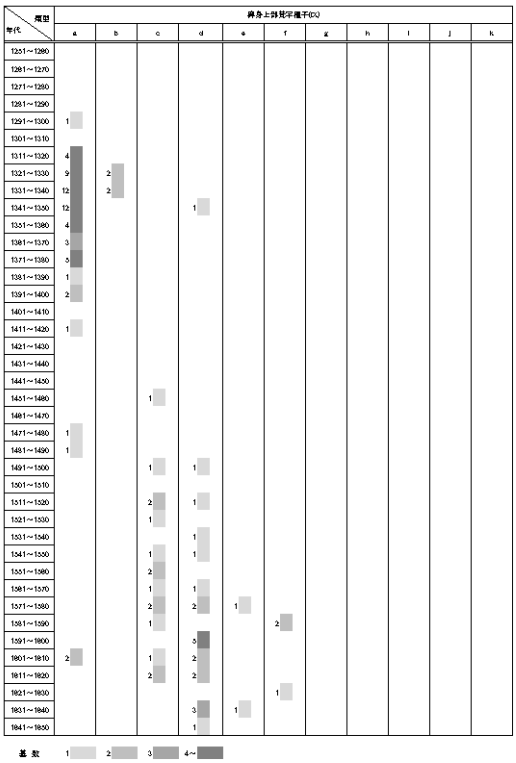
k)月輪内に文字を刻む。

筑前・筑後・肥前・肥後

碑身上部梵字種子に関しては、梵字種子を大きく彫る a 類型と、月輪を細線陰刻し、中に梵字種子を刻む d 類型が多くみられる。 a 類型が 15 例中 6 例、 d 類型が 15 例中 6 例数えられ、拮抗する。このほかには福岡県福岡市般若院 3 号板碑（図 2-4）が梵字種子を小



第 92 図　筑前・筑後・肥前・肥後における碑身上部梵字種子分類および経年個体数



第 93 図　豊前・豊後における碑身上部梵字種子分類および経年個体数

さく刻むｃ類型、福岡県太宰府市水瓶山板碑（図 2-5）が中台八葉院・曼荼羅などを刻むｉ類型、熊本県和水町内田赤子宮 1･2 板碑（図 43-4・5）が月輪内に文字を刻むｋ類型におさまるが、それぞれ 1～2 例のみを数える。

豊前・豊後

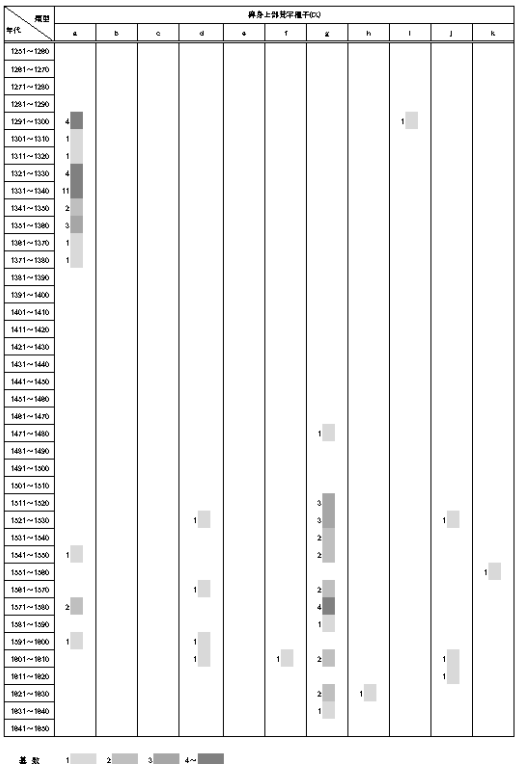
本類型においては、大きく分けてａ・ｂ類型とｃ～ｆ類型に大別できる。本来、板碑には大分県国東市護聖寺 1 号板碑（図 21-51）に始まる板碑出現以来、碑身上部に大きく梵字種子を刻むか、あるいは墨書するのが大きな特徴であった。もともと板碑の機能が碑身にあらわす主尊を供養するものであるため当然ではあるが、鎌倉～南北朝期の板碑は梵字種子を非常に大きく薬研彫りしている。梵字種子にみられる型式変化は退化傾向にあらわれ、ａ類型は、大分県国東市川原 1・2 号板碑（図 19-39、18-40）のように断面Ｕ字形のものをはじめ、一部に特殊な形態もみられるが、そのほとんどは薬研彫り形態をもつ。大分県佐伯市床木板碑(図 31-109)、大分県豊後大野市朝地町瀬口板碑(図 29-100)、大分県豊後高田市オト様 1・2 号板碑(図 16-30・31)など、戦国期にも一部突発的に出現するが、ほとんどの資料は 14 世紀代に収まり、薬研彫り形態は 14 世紀代に限っても、脆弱化の傾向を辿る。ｃ類型の梵字種子を小さく刻む資料もａ類型の退化傾向の流れの中にあるものであり、本類型においてはほとんど薬研彫りが意識されない彫りや線刻に限られ、梵字種子もａ類型に比較すれば極端に小さい特徴をもつ。本類型が 15 世紀後葉以降にのみ確認できることは、それを裏付けできることであろうし、もともと板碑の機能が碑身にあらわす主尊を供養するものであるため、鎌倉～南北朝期の板碑が大きく刻まれていることと比較すれば、本類型の板碑は明らかに主尊種子を供養する意識自体が退化したものと考えられよう。

ｄ～ｆ類型もｃ類型と同様に大分県杵築市普門坊跡板碑(図 13-8)の例外を除き、すべてが戦国期に収まる。これは月輪と「卍」の流行が戦国期に見られることをあらわし、もちろん月輪内に見られる梵字種子もｃ類型と同様に小さく刻むものである。

日向・薩摩・大隅

1290 年代の出現以降、1370 年代まで、碑身上部に梵字種子を大きく彫るａ類型が主流を占める。その期間では、唯一、宮崎県日南市大迫寺跡永仁 3 年銘板碑（図 49-47）の碑身には上端に、胎蔵界中台八葉院を表している。

以後、板碑空白期を経て、1470 年代以後には、題目がみられるｇ類型におさまる板碑がきわめて多く確認できる。これこそこの時期に、24 例を数える宮崎県日向市宮崎県定善寺・本善寺の板碑がｇ類型の題目板碑であることが大きな要因となっている。そのため、



第 94 図　日向・薩摩・大隅における碑身上部梵字種子分類および経年個体数

梵字種子を大きく彫る a 類型や、月輪を細線陰刻し、中に梵字種子を刻む d 類型、円形陽刻内に梵字種子を大きく刻む j 類型などをはじめとして、多様化する。

碑身部装飾(X)

碑身部装飾に関しては、以下の a～h 類型の 8 類型に設定できる。

a)碑身に彫凹めがみられる。

b)方形彫凹めがみられ、両側側縁に線刻を入れる。

c)地蔵立像を陽刻・線刻する。

d)下方に五角形彫凹めがみられる。

e)下方に位牌形を陰刻する。

f)下端に幾何学模様の陰刻や蓮華文がみられる。

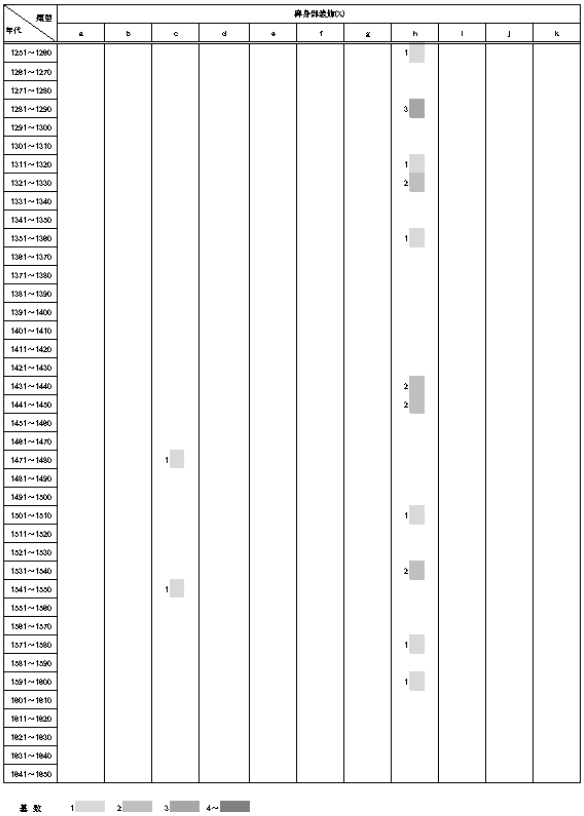
g)五輪塔形を陽刻する。

h)碑身に装飾が認められない。

i)両側を彫り沈めて輪郭を表現する。

j)彫凹めがみられ、中に地蔵以外の尊像を線刻・陽刻する。

k)陰刻線や珠文による区画がみられる。



第 95 図　筑前・筑後・肥前・肥後における碑身部装飾分類および経年個体数

筑前・筑後・肥前・肥後

碑身部の装飾については、出現期から期間を通じて碑身に装飾が認められないｈ類型が流行する。このほかには、地蔵立像を陽刻・線刻するｃ類型が福岡県久留米市社日神板碑（図 2-6）と熊本県熊本市池亀八幡宮板碑（図 43-6）の 2 例確認できるのみである。この両者はいずれも小型であり、戦国期に流行する。他地域の資料にも多く確認できるが、無紀年銘資料を含めて戦国期には地蔵を碑面に表す板碑が本地域において流行することがわかる。

豊前・豊後

碑身に梵字種子および銘文以外には装飾が認められないｈ類型以外の資料は、いずれも 15 世紀末以降に限られ、板碑資料全体では新しい様相であることがわかる。ｈ類型は板碑出現から消滅まで継続して認められるが､その頻度は 13～15 世紀において本類型に限られることがわかり、以後、様々な類型が出現する。

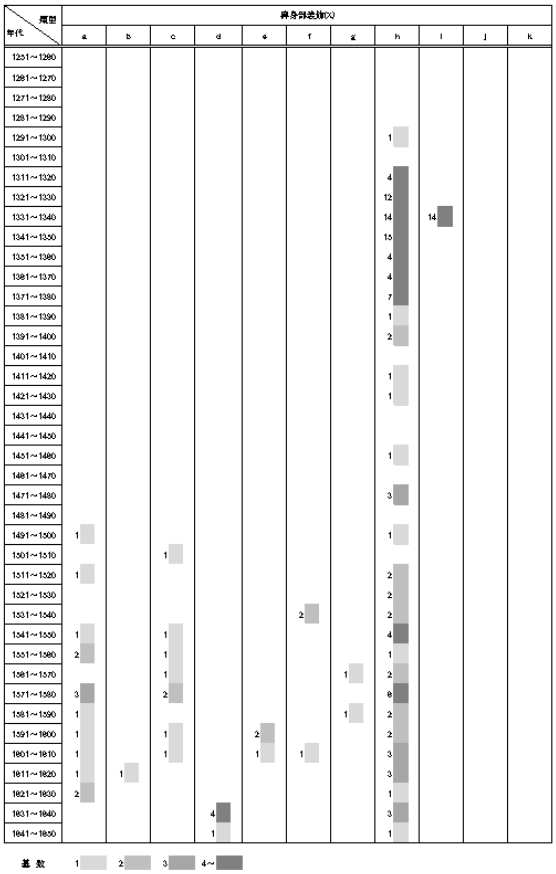
ａ～ｄ類型のように彫凹めが見られるが、碑身部内を区画した彫凹めは、その内の陰刻・墨書した銘文をはじめとした造作を保護するものであり、これは近世墓の最古型式の板碑

型墓碑にも受け継がれている。また、e 類型の位牌形も、位牌形の内部を彫り凹め、ここに陰刻・墨書した銘文を刻む点では a～d 類型と通じる。e 類型に関しては、紀年銘資料に限れば大分県豊後大野市三重町の小エリアに限定できるが、紀年銘のみられない資料は、広く大分県大野郡から大分県南海部郡一帯の凝灰岩を石材とした板碑に確認でき、16 世紀末～17 世紀中葉に、ある特定工人の系譜により受け継がれた意匠であると考えられる。位牌形の中はいずれも五角形をはじめとした彫凹めが見られ、この彫凹め内にはいずれも戒名が刻まれている。大分県豊後大野市下津留板碑群（図 28-87～90・92）の資料には多く五角形彫凹めが認められ、これらにも戒名が刻まれている。これらは、いずれも故人の供養を祈念した墓碑として造立されたものである。

また、f 類型として設定した下端に幾何学模様の陰刻や蓮華文がみられる資料は類例数がきわめて少ないが、存在する。これについても、近世墓の最古型式の板碑型墓碑にも受け継がれている要素であり(原田昭一 1999a・2002a)、f 類型の板碑の銘文として戒名が見られることからも裏付けられよう。さらに、ある特定の意匠を刻んだものとして、c 類型の地蔵と g 類型の五輪塔が確認できるが、これらについては非常に重要な意義をもつ。この両者に関して、いずれも近世墓の一型式として受け継がれるものであり、地蔵を墓碑に彫る慣習は当地だけではなく、全国的に確認でき、豊前・豊後においても、「地蔵型」・「地蔵浮彫型」・「屋根付地蔵浮彫型」・「天蓋付地蔵浮彫型」(山田拓伸 1986)などをはじめ、地蔵尊像を彫り出した墓碑は近世を通して、墓碑の一型式として製作され続ける。

一方、五輪塔を刻んだ g 類型の板碑の系譜上にある近世墓碑は、近畿地域をはじめとした他地域では近世前半期に一定の流行をみる型式であるが、豊前・豊後においてほとんど確認できない。g 類型の板碑は大分県豊後高田市安養寺板碑(図 16-28)と大応寺板碑(図 16-29)のみであり、当地においても中世段階からあまり受容されなかった地域性を示している類例として指摘できよう。

このように碑身部の梵字種子、および、その他の装飾を検討した場合、15 世紀の板碑極少期以前には大きく碑身上部に梵字種子を薬研彫りするか、あるいは墨書しているのみで、その下部には銘文が記されている。これは板碑が本来、願意にかかわらず主尊種子を供養する目的からなり、そのために主尊となる梵字種子を雄大にあらわしたためと考えられる。これに対し、板碑極少期以後には、主尊種子の小型化とともに薬研彫りの退化がみてとられ、主尊種子を供養する目的の忘失傾向と、戒名および没年月日など、その銘文から墓碑としての機能をもつ板碑が激増する実態がみてとれる。X－c 類型のように冥界信仰のも



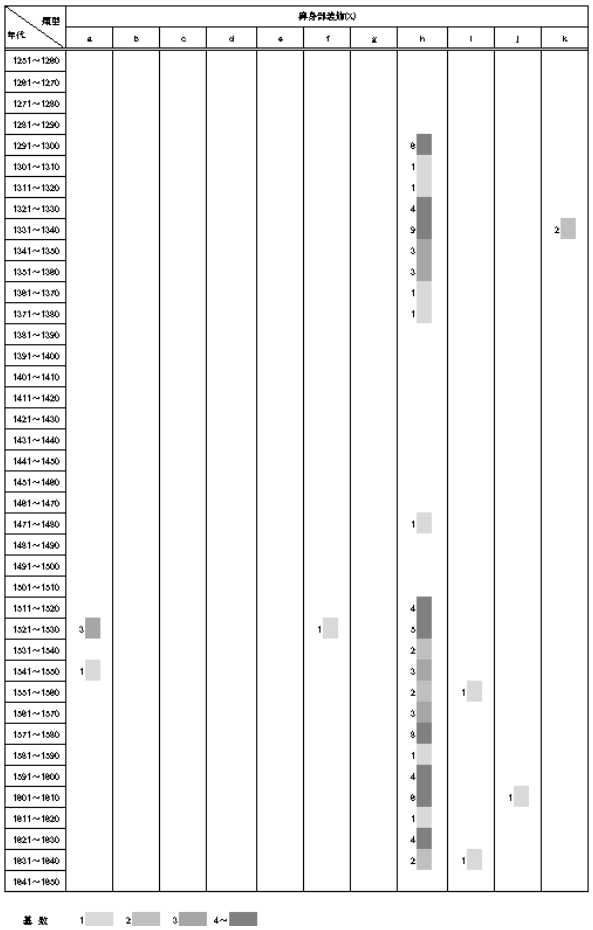
第 96 図　豊前・豊後における碑身部装飾分類および経年個体数

とに造作された資料や、塔婆形をあらわした可能性を持つX－g 類型、位牌形をあらわしたX－e 類型をはじめ、近世墓に受け継がれる碑身部の様々な要素は、その造立主旨の変化を如実に表しているものであろう。

日向・薩摩・大隅

板碑の出現以降、1370 年代まで、碑身に装飾が認められないｈ類型が主流を占める。唯一、その期間において、鹿児島県湧水町稲葉崎暦応 2 年銘 1・2 号板碑（図 60-1・2）は、前述してきたように多くの類型で特異な様相を示しているように、梵字種子を雄大に薬研彫りし、その下にさらに陰刻線による珠文帯を配し、上段の銘文と下段の銘文を画する陰刻線による珠文帯がみられ、この属性においても特異である。

以後、板碑空白期を経て、1470 年代以後にも、碑身に装飾が認められないｈ類型が主流を占めることに変わりない。このほかには、碑身に彫凹めがみられるａ類型や、両側を彫り沈めて輪郭を表現するｉ類型、下端に幾何学模様の陰刻や蓮華文がみられるｆ類型、彫凹めがみられ、中に地蔵以外の尊像を線刻・陽刻するｊ類型などが小数例確認できる。



第 97 図　日向・薩摩・大隅における碑身部装飾分類および経年個体数

d)基部

板碑の碑身部下の部位にあたる。本稿では、現在、現地に遺存する紀年銘資料を対象としており、その下部には台石をもつ資料ともたない資料がみられるが、以下では、基部形態について検討する(註 6)。

基部形態(XI)

板碑の場合、基部形態に関しては、地下に埋められている部分があるため、必ずしも基部の突出がみられないと断言できるわけではないが、a～e 類型の 5 類型に設定できる。

a)前方に 1 段の突出をもつ。

b)前方および側面片方に突出させる。

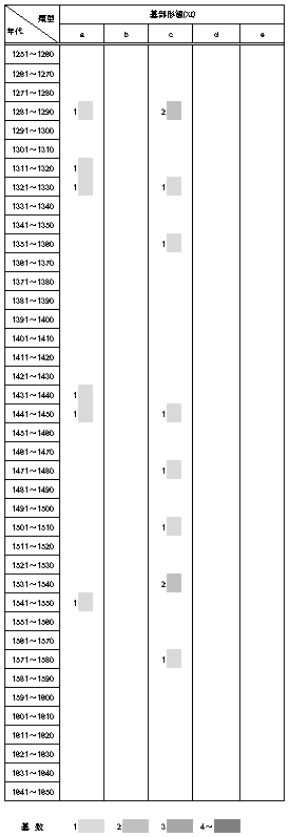
c)基部を前方に突出させない。

d)前方に 2 段の突出をもつ。

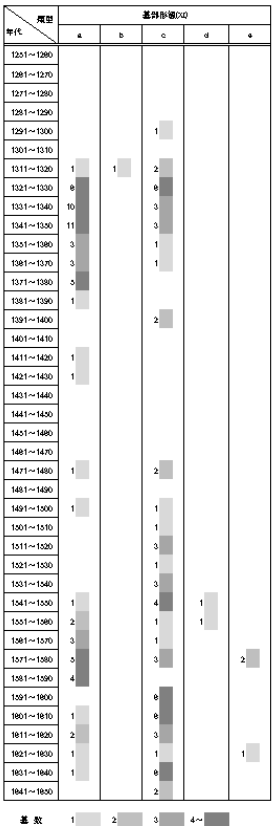
e)前方および側面両方に突出させる。

筑前・筑後・肥前・肥後

基部形態については、前方に 1 段の突出をもつ a 類型と基部を前方に突出させないｃ類型に限られる。1280 年代から 1350 年代までの前半期および空白期を経て、1430 年代以降においてもこの両者が確認できるが、1430 年代以降においては、ｃ類型 6 例に比較して a 類型 3 例と比率的には減少する傾向がみられる。



第 98 図　筑前・筑後・肥前・肥後における基部形態分類および経年個体数



第 99 図　豊前・豊後における基部形態分類および経年個体数

豊前・豊後

a～e 類型の 5 類型のなかでも、そのほとんどは前方に 1 段の突出をもつ a 類型と基部を前方に突出させないｃ類型におさまる。板碑出現期から前方に 1 段の突出をもつ a 類型は、すべての地域において最も典型的な基部形態として確認できるが、豊前・豊後南部において 14 世紀初頭に出現する。ｃ類型は、a 類型と同様に初期からみられるが、豊後北部においてのみ、14 世紀末以降出現する。

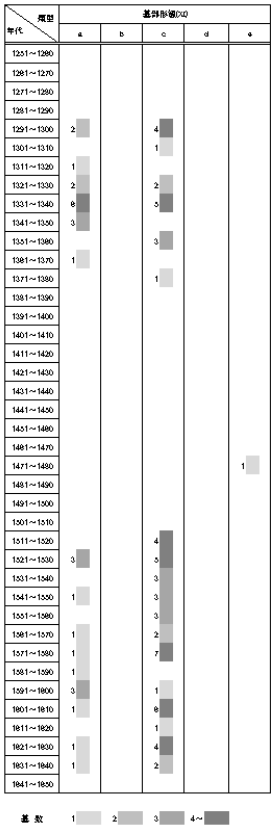
b・d・e 類型に関しては、きわめて類例数が少なく、b 類型唯一の資料である大分県日田

市永平寺跡 1 号板碑(図 12-1)は、自然石の石材を彫り出す際に側部のみ彫り残し整形を加えたものと考えられ、初期の板碑にしては異質な様相をもつ。また、d・e 類型に関しては少数ながらいずれも 16 世紀中葉以降にのみ認められ、本来、板碑の基部形態が前方に 1 段の突出をもつか、突出させない形態であったものが、失われていく過程の中で出現したものと捉えるべきであろう。

日向・薩摩・大隅

板碑の出現以降、1370 年代まで、前方に 1 段の突出をもつ a 類型と基部を前方に突出させない c 類型に限られる。しかしこの時期には、地域をこえて両類型が混在して流行するわけではない。特に、鹿児島県指宿市鰻板碑（図 57-9）・鹿屋市波之上神社板碑群（図 54-10～14）などの山川石製板碑は紀年銘資料がすべて a 類型におさまる。また、鹿児島県湧水町稲葉崎板碑群（図 60-1･2、図 61-3･4･5）や比較的近接する宮崎県えびの市彦山寺板碑群（図 48-40･41）はすべて c 類型におさまる。

以後、板碑空白期を経て、1470 年代以後にも、この a 類型と c 類型が主流を占める。唯一、宮崎県小松板碑（図 46-3）のみ、前方および側面両方に突出させる e 類型の板碑がみられる。



第 100 図　日向・薩摩・大隅における基部形態分類および経年個体数

e)台石

板碑の最下部の部位にあたる。本稿では、現在、現地に遺存する紀年銘資料を対象としており、台石をもつ資料ともたない資料がみられるが、以下では、台石をもたない資料もあわせて台石形態について検討する。

台石(XⅡ)

台石に関しては、a～h 類型の 8 類型に設定できる。

a)台石をもたない。

b)方形台石に枘穴を穿ち、碑身を差し込む。

c)自然石の台石に枘穴を穿ち、碑身を差し込む。

d)前面のみを 2 段に整形した方形台石上に碑身がみられる。

e)台石を持たず、碑身底面を平らに整形している。

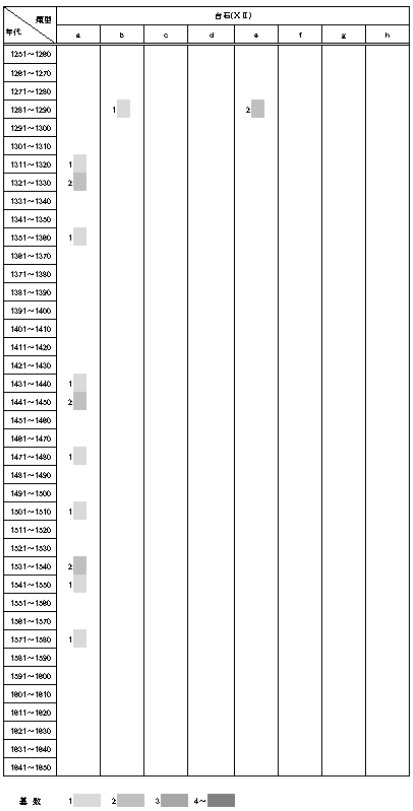
f)上部を台形に整形した方形台石上に碑身がみられる。

g)上部を 2 段に整形した方形台石上に碑身がみられる。

h)複数の方形台石を重ね合わせる。

筑前・筑後・肥前・肥後

台石に関しては、1310 年代以降、台石をもたない a 類型に限定できる。このほかは、これ以前に方形台石に枘穴を穿ち、碑身を差し込む b 類型が、熊本県あさぎり町元永峰観音堂跡板碑（図 43-8）の 1 例、台石をもたず碑身底面を平らに整形している e 類型が、佐賀県嬉野市湯野田太子堂北・南板碑（図 2-10・11）の 2 例それぞれみられるのみである。元永峰観音堂跡板碑は熊本県あさぎり町に存在し、この地域の様々な石造物は宮崎県えびの市および鹿児島県北部に近い地理的環境にあり、それらの地域の形態的特徴をもつ。出現期の板碑については異質な形態的特徴が確認できるが、板碑定着期以降に a 類型に限られ



第 101 図　筑前・筑後・肥前・肥後における台石分類および経年個体数

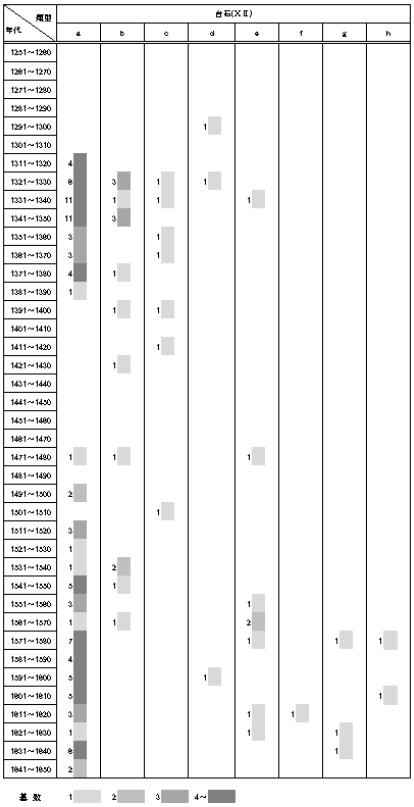
ることは、この地域の特徴であろう。

豊前・豊後

現在、地表確認できる基部・台石形態を検討した場合、枘がみられる大分県杵築市財前家墓地板碑（図 16-33)・大分県豊後高田市其ノ田 1 号板碑（図 14-16)・大分県豊後高田市オト様 3 号板碑（図 16-32）などのように台石に枘穴を穿ち、填め込む形態をもつものや、大分県豊後高田市其ノ田 2 号板碑（図 14-17)・大分県豊後高田市富貴寺板碑（図 14-19)・大分県臼杵市天手段原 1 号板碑（図 26-77）などのように、そのまま手を加えないもの、大分県豊後高田市平野園 1 号板碑(図 14-18)・大分県豊後高田市寺ノ上 4 号板碑(図 15-26)などのように手を加えず、造立時の安定を図ったためか、比較的大きく未調整部を残しているものなどがみられ、屹立を前提としたものがある。

これに対し、福岡県豊前市求菩提山阿弥陀窟板碑（図 6-1)・求菩提山縁ヶ岩屋板碑（図 6-2)・求菩提山朝日窟板碑（図 6-3)・大分県豊後高田市大曲板碑（図 15-22)・大分県宇佐市大塚集落墓地 1 号板碑（図 7-10)・大分県山香町妙善坊 2 号板碑（図 13-11）など基部を地中に埋設しないことを目的とするため、碑身下面を平らに成形したものもみられる。特に、福岡県豊前市求菩提山阿弥陀窟板碑・求菩提山縁ヶ岩屋板碑・求菩提山朝日窟板碑に関しては、修験窟である岩屋に安置することを目的としたため、立てることを前提にした形態ではない。一方、大分県豊後高田市大曲板碑・大分県宇佐市大塚集落墓地 1 号板碑・大分県山香町妙善坊 2 号板碑は墓碑として恒久的に立てることを目的としたせいか、奥行きが大きく接地面を広くした工夫がされているうえ、総高を低くしている。

基部・台石の形態に関しては、出現期から台石に枘を穿ち、填め込む形態の b・c 類型と基部に特定の加工を施さず地中に埋めて立てる形態の a 類型との 2 形態が中世を通じて主流を占める。しかし前述したように基部を地中に埋設しないことを目的とするため、底面を平坦に加工した e 類型の中でも、文明 9 年(1477)銘をもつ大曲板碑以降に小型の資料が出現する。これらは運搬に簡便な大きさであり、特に、求菩提山中の類例のように、岩屋に納置するには適した大きさをもつ。これらはいずれも個人の供養を目的としたものであり、中世後半に特徴的な造立主旨をもつとともに戦国期に現れた新たな属性の一形態として捉えられよう。また、上部を台形に整形した方形台石上に碑身がみられる f 類型の大分県宇佐市高野家墓地板碑(図 7-15)や上部を 2 段に整形した方形台石上に碑身がみられる g 類型の大分県佐伯市地蔵ノ本板碑(図 31-110)・大分県宇佐市真上家墓地板碑(図 7-14)・大分県宇佐市高橋家墓地板碑(図 8-23)・大分県別府市吉祥寺板碑(図 12-6)、複数の方形台



第 102 図　豊前・豊後における台石分類および経年個体数

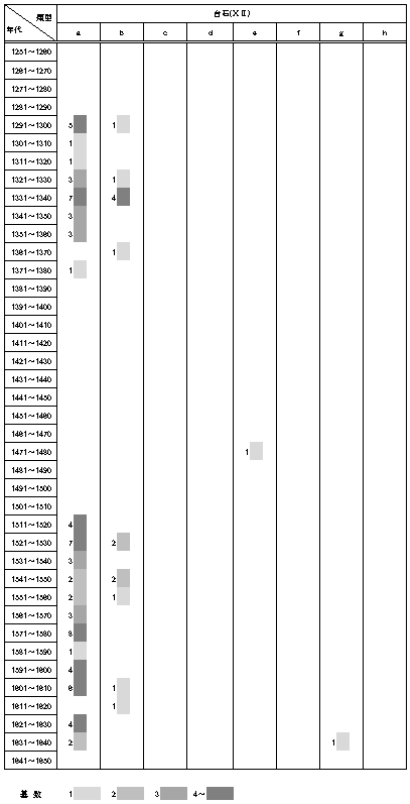
石を重ね合わせる h 類型の大分県佐伯市延命庵板碑(図 31-112)など、16 世紀後半～17 世紀前半に、従来の板碑台石形態に新たな要素として加わる一形態として、板碑の変化過程が読み取れよう。

日向・薩摩・大隅

板碑の出現以降、1370 年代まで、台石をもたない a 類型が主流を占める。同時期には、これに次ぎ、方形台石に枘穴を穿ち、碑身を差し込む b 類型が流行する。しかし、山川石製の鹿児島県鹿屋市波之上神社板碑群（図 62-10～14）がすべて b 類型におさまるため、これらの資料を除くと b 類型はきわめて少数となる。山川石製であるものがすべて台石をもつことから、同じ山川石製である鹿児島県指宿市鰻板碑（図 57-9）も当初は台石を有していたかもしれない。そのことを加味しても、同時期は a 類型が主流であり、b 類型が小数例存在することに変わりはないものと考えられる。

以後、板碑空白期を経て、1470 年代以後にも、台石をもたない a 類型が主流を占め、それに次ぎ、方形台石に枘穴を穿ち、碑身を差し込む b 類型が流行する。唯一、宮崎県門川町小松板碑（図 46-3）が台石を持たず、碑身底面を平らに整形している e 類型がみられ

る。これは比較的小型であり、基部を前方および側面両方に突出させる形態をもつことも、底面を広くするための工夫であると考えられる。



第 103 図　日向・薩摩・大隅における台石分類および経年個体数

f)背面部

板碑は他の石造物と異なり、本来は一観面の平面形塔婆である。そのため、板碑正面の調整は丁寧であることは言うまでもなく、側面に関しても、銘文や装飾はないものの、調整は正面に準じている特徴がみられる。これに対して、板碑において、唯一、死角となる部位である背面部がどのような実態であるのか、以下のように類型化を試みる。

背面形態(XⅢ)

背面部に関しては、a～f 類型の 7 類型に設定できる。

a)背面をわずかに膨らませ、粗い加工痕を残す。

b)背面は膨らませずに、粗い加工痕を残す。

c)自然石の自然面を残す。

d)背面をわずかに膨らませ、丁寧な加工痕を残す。

e)背面は膨らませずに、丁寧な加工痕を残す。

f)背面を角錐状に成形し、丁寧な加工痕を残す。

g)背面両側を面取りして、丁寧な調整痕を残す。

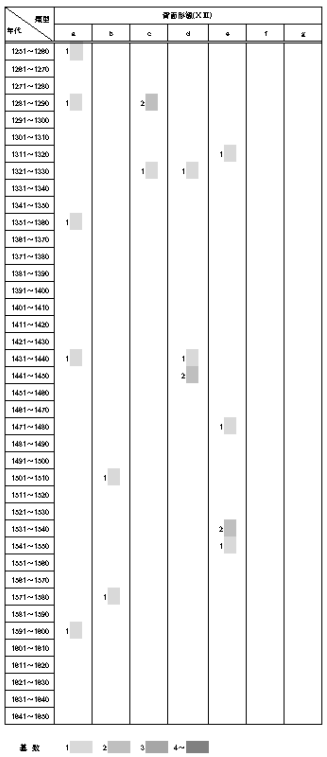
筑前・筑後・肥前・肥後

背面形態およびその調整については、多様である。背面をわずかに膨らませ、粗い加工痕を残すａ類型、自然石の自然面を残すｃ類型、背面をわずかに膨らませ、丁寧な加工痕を残すｄ類型、背面は膨らませずに、丁寧な加工痕を残すｅ類型が、それぞれ類例が少ないながら、出現期から中世をとおして確認できる。背面は膨らませずに、粗い加工痕を残すｂ類型は少数ながら 1500 年代以降に 2 例確認できる。このように板碑の背面形態に関しては、当地においては多様な様相をもつことがわかる。

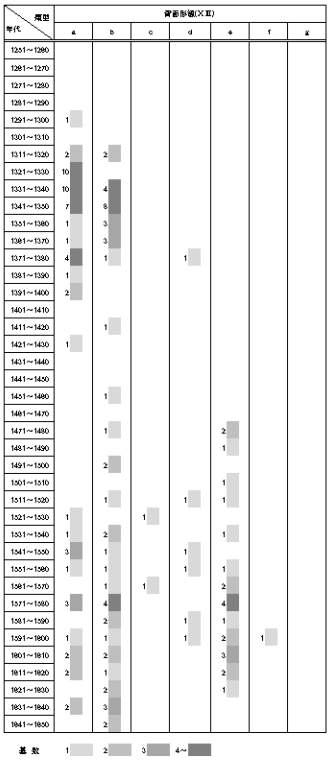
豊前・豊後

板碑出現期から粗い加工痕を残すままのａ・ｂ類型は中世を通じて確認できるが、15 世紀中葉までは、ほぼ、この類型に限定されてしまう。一観面の平面形塔婆において、唯一、死角となる面であるため、当然の結果といえよう。

その加工方法については、多様であり、本稿では論じえないが、当該地域には加工方法



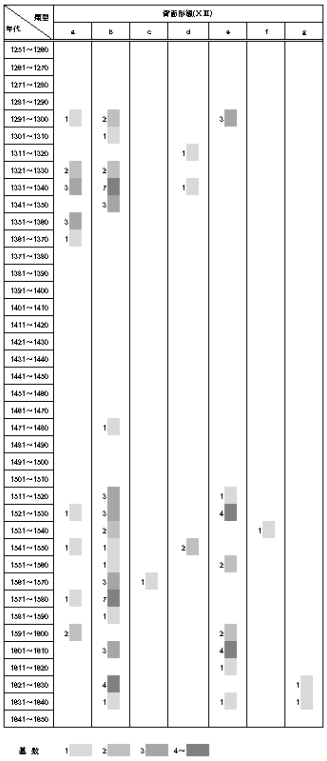
第 104 図　筑前・筑後・肥前・肥後における背面形態分類および経年個体数



第 105 図　豊前・豊後における背面形態分類および経年個体数

を物語る良好な資料が存在する。a 類型におさまる大分県国東市鳴 2 号板碑(図 18-42)の片側面には、背面との境界をなす位置に陰刻線が彫られている。この陰刻線に沿い、鑿により削り落としていった箇所もみられるが、削り落としていない箇所を残し、未完成品のまま立てられており、これから板碑背面部の一彫成方法がうかがえる。板碑を方柱状の石材から彫成し、このように側面に刻んだ割付線に沿い、背面を削っていった場合、粗い加工面を残しても、平坦に仕上げる意識がない限り、わずかに膨らんだ状態で終わってしまう。

a 類型におさまる大分県国東市護聖寺 1 号板碑(図 21-51)の出現以来、a・b 類型を比較した場合、南北朝期においては b 類型より a 類型の資料が多く、以後は逆転してしまい、同時併存でありながらも、型式的には a 類型から b 類型へ、平坦化への方向がうかがわれる。そして a 類型から d 類型へ、また、b 類型から e 類型へという鑿痕を残さないより丁寧な彫成への変化をそれぞれが辿っていく。板碑出現期から 15 世紀中葉までは、ほとんど見られない d・e 類型も、15 世紀中葉以降には、e 類型が数的優位にありながら、a・b 類型とともに造作されており、また、d・e 類型とともに少数例だが、c・f 類型の出現など、戦国期に至り、背面形態において新たな要素がここにおいても観察できる。近世墓碑へ目を転じると、近世を通じて、墓碑の多観面化と、それに伴う背面部彫成の丁寧化への変化があるものの、板碑型墓碑でも中世末の様々な背面形態を受け継いでおり、その祖形はすでに戦国期に生まれていることがわかる。



第 106 図　日向・薩摩・大隅における背面形態分類および経年個体数

日向・薩摩・大隅

板碑の出現以降、1370 年代まで、背面をわずかに膨らませ、粗い加工痕を残す a 類型と、背面は膨らませず、粗い加工痕を残す b 類型が流行する。この両者は、わずかな差ながら、鹿児島県鹿屋市波之上神社板碑群（図 62-10 ～14）や指宿市鰻板碑（図 57-9）が、すべて b 類型であることなど、背面を膨らませるか、平らにするかは製作者によるこだわりを感

じる。このほか、背面をわずかに膨らませ、丁寧な彫成痕を残すｄ類型、背面は膨らませずに、丁寧な彫成痕を残すｅ類型が小数例存在する。この両者はａ・ｂ類型に類するが、板碑背面を基本的に粗い加工のまま完成させるのが基本ながら、少数、調整を加えていることがわかる。

以後、板碑空白期を経て、1470 年代以後には、背面は膨らませず、粗い加工痕を残すｂ類型と背面は膨らませずに、丁寧な加工痕を残すｅ類型が最も流行する。しかし、宮崎県日向市の定善寺や本善寺など、日蓮宗寺院に残されている題目板碑 24 例がすべてｂ類型におさまるため、これを除けば、ｂ類型も少数となる。そのため、ｅ類型が主流となるものの、鎌倉後期から南北朝期に流行したａ・ｂ類型がこれに次ぎ、流行し、このほかにもｃ・ｄ・ｆ・ｇ類型など多様化しながら、小数例存在することがわかる。

表14　筑前・筑後・肥前における板碑各部位の類型一覧

番号	名称	所在地	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	XIII
1	建正寺板碑	福岡県糟屋郡須恵町佐谷観音谷	e	e	d	f	-	a	a	-	d	h	a	a	d
2	米一丸地蔵堂15号板碑	福岡県福岡市東区箱崎6丁目6	a	g	a	a	h	a	a	a	d	h	a	a	a
3	善導寺板碑	福岡県福岡市博多区中呉服町6-4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4	般若院3号板碑	福岡県福岡市南区大池1丁目3	a	e	a	b	a	a	a	a	c	h	-	-	a
5	水瓶山板碑	福岡県太宰府市水瓶山	a	g	d	f	-	a	a	-	i	h	c	a	a
6	社日神板碑	福岡県久留米市三潴町草場	b	e	a	a	a	a	f	-	-	c	c	a	c
7	石塔院嘉吉3年銘板碑	佐賀県吉野ケ里町吉野ケ里石塔院	a	e	c	h	i	a	f	-	a	h	c	a	d
8	石塔院宝徳2年銘板碑	佐賀県吉野ケ里町吉野ケ里石塔院	b	e	c	c	i	a	f	-	a	h	a	a	d
9	石塔院文亀元年銘板碑	佐賀県吉野ケ里町吉野ケ里石塔院	e	b	c	c	i	a	f	-	a	h	c	a	b
10	湯野田大子堂北板碑	佐賀県嬉野市嬉野町下宿湯野田	a	e	d	e	a	a	f	a	d	h	c	e	c
11	湯野田大子堂南板碑	佐賀県嬉野市嬉野町下宿湯野田	a	e	d	e	a	a	f	a	d	h	c	e	c
12	三城城跡板碑	長崎県大村市三城町	-	-	-	-	-	-	-	-	d	h	-	-	d

表15　豊前における板碑各部位の類型一覧

番号	名称	所在地	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	XIII
1	求菩提山阿弥陀窟板碑	福岡県豊前市岩屋村全山	a	e	d	f	-	a	f	-	c	a	a	e	b
2	求菩提山縁ヶ岩屋板碑	福岡県豊前市岩屋村全山	b	f	b	b	h	a	a	a	c	-	a	e	e
3	求菩提山朝日窟板碑	福岡県豊前市岩屋村全山	b	e	c	c	f	a	b	a	c	b	a	e	b
4	旧楞厳寺板碑	大分県耶馬渓町三母尾尾園	a	a	a	a	a	a	a	a	a	-	c	a	a
5	善光寺板碑	大分県宇佐市下時枝	c	c	a	a	a	b	a	a	a	-	a	a	a
6	妙楽寺1号板碑	大分県宇佐市木の内	c	c	a	a	a	b	a	a	a	-	a	b	a
7	妙楽寺2号板碑	大分県宇佐市木の内	c	c	a	a	a	b	a	a	a	-	a	b	a
8	庄部観音堂1号板碑	大分県宇佐市麻生庄部	c	c	a	a	c	b	a	a	a	-	a	a	a
9	庄部観音堂2号板碑	大分県宇佐市麻生庄部	c	c	a	a	c	c	a	a	a	-	a	a	a
10	大塚集落墓地1号板碑	大分県宇佐市大塚	a	f	d	f	-	a	a	a	-	c	a	e	e
11	大塚集落墓地2号板碑	大分県宇佐市大塚	d	f	d	f	-	a	a	a	-	-	a	a	e
12	観音寺板碑	大分県宇佐市上拝田	a	e	a	b	h	a	b	a	-	c	a	a	b
13	任聖寺板碑	大分県宇佐市法鏡寺	a	f	d	e	h	a	b	-	-	c	a	a	e
14	真上家墓地板碑	大分県宇佐市南宇佐	a	f	d	f	-	a	d	a	c	a	c	a	e
15	高野家墓地板碑	大分県宇佐市南宇佐	a	f	d	f	-	a	d	e	d	a	c	f	e
16	成円寺板碑	大分県宇佐市上高居屋敷	a	e	c	d	g	a	a	a	c	-	a	a	e
17	大楽寺到津家墓地板碑	大分県宇佐市南宇佐	a	f	d	f	-	a	f	-	-	a	c	a	e
18	大元神社板碑	大分県宇佐市御許山	d	g	d	f	-	a	f	c	d	a	c	a	b
19	地蔵院阯1号板碑	大分県安心院町荘田井中	-	-	-	-	-	-	-	-	a	-	c	a	-
20	佐田社1号板碑	大分県安心院町佐田宮の台	-	-	a	a	a	a	a	a	a	-	a	a	a
21	大年社1号板碑	大分県安心院町山蔵	c	c	a	a	b	c	a	a	a	-	a	a	a
22	大年社2号板碑	大分県安心院町山蔵	a	c	a	a	a	a	a	a	a	-	c	a	b
23	高橋家墓地板碑	大分県安心院町六郎丸	a	e	d	f	-	a	a	f	-	a	a	g	b
24	阿弥陀堂板碑	大分県院内町小野川内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	a	b	a

表16 豊後における板碑各部位の類型一覧①

番号	名称	所在地	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	XIII
1	永平寺跡1号板碑	大分県日田市高瀬本町	b	c	a	a	b	c	b	a	a	-	b	a	b
2	永平寺跡2号板碑	大分県日田市高瀬本町	a	c	a	a	a	c	b	a	a	-	a	a	b
3	宝八幡宮板碑	大分県九重町松本	b	b	a	a	b	b	a	b	c	-	-	-	b
4	神家板碑	大分県別府市朝見	c	a	a	a	a	a	a	a	a	-	c	c	a
5	神和園板碑	大分県別府市鉄輪	a	i	c	d	f	a	b	a	c	-	c	a	d
6	吉祥寺板碑	大分県別府市乙原	a	e	d	f	-	a	f	-	e	-	a	g	a
7	本篠板碑	大分県山香町本篠	c	d	a	a	a	d	a	a	a	-	c	a	a
8	普門坊跡板碑	大分県山香町内河野山口	a	a	a	a	a	a	a	a	d	-	a	a	b
9	地蔵堂板碑	大分県山香町内河野堂ノ尾	c	c	a	a	a	a	a	a	-	-	a	a	b
10	妙善坊1号板碑	大分県山香町妙善坊	a	f	a	a	b	a	b	a	-	-	c	b	b
11	妙善坊2号板碑	大分県山香町妙善坊	d	h	d	f	-	a	a	a	c	-	a	e	b
12	東光寺板碑	大分県山香町内河野	a	e	d	f	-	a	b	a	c	a	c	a	b
13	牧峯神社旧在板碑	大分県日出町赤松	a	a	a	a	a	a	a	a	a	-	-	-	b
14	願成就寺板碑	大分県日出町赤松	a	a	a	a	b	a	a	a	a	-	c	a	a
15	庵の迫板碑	大分県豊後高田市梅ノ木	a	a	a	a	a	a	a	b	b	-	a	a	a
16	其ノ田1号板碑	大分県豊後高田市蕗其ノ田	c	c	a	a	b	a	a	a	a	-	c	a	a
17	其ノ田2号板碑	大分県豊後高田市蕗其ノ田	c	c	a	a	b	a	a	a	a	-	a	a	b
18	平野園1号板碑	大分県豊後高田市蕗陽平	c	c	a	a	a	c	a	a	a	-	a	a	b
19	富貴寺板碑	大分県豊後高田市蕗	-	-	-	a	-	-	a	a	a	-	a	a	b
20	梅遊寺1号板碑	大分県豊後高田市一畑影平	c	c	a	a	a	d	a	a	a	-	-	a	a
21	梅遊寺2号板碑	大分県豊後高田市一畑影平	a	a	a	a	c	a	a	a	a	-	a	c	b
22	大曲板碑	大分県豊後高田市大曲	a	g	b	b	h	a	a	b	-	-	a	a	d
23	寺ノ上1号板碑	大分県豊後高田市築地寺ノ上	c	c	a	a	c	c	a	a	-	-	a	a	d
24	寺ノ上2号板碑	大分県豊後高田市築地寺ノ上	c	c	a	a	c	a	a	a	c	a	d	a	a
25	寺ノ上3号板碑	大分県豊後高田市築地寺ノ上	a	c	d	f	-	e	a	a	c	a	a	a	a
26	寺ノ上4号板碑	大分県豊後高田市築地寺ノ上	c	b	c	c	f	c	a	a	c	a	e	a	a
27	持地庵板碑	大分県豊後高田市大力田城	b	b	b	b	e	c	a	a	-	a	a	a	a
28	安養寺板碑	大分県豊後高田市中村	a	m	d	f	-	a	f	-	-	g	c	a	c
29	大応寺板碑	大分県豊後高田市真中大門	a	e	d	f	-	a	f	-	-	g	a	a	c
30	オト様1号板碑	大分県豊後高田市加礼川屋山	a	g	d	f	-	a	b	a	a	-	c	a	e
31	オト様2号板碑	大分県豊後高田市加礼川屋山	a	g	d	f	-	a	b	a	a	-	c	a	b
32	オト様3号板碑	大分県豊後高田市加礼川屋山	-	-	-	-	-	-	-	-	-	f	c	-	e
33	財前家墓地板碑	大分県大田村小野	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	a	-	a
34	尾迫板碑	大分県大田村小野	c	c	a	a	a	d	a	a	a	-	c	a	a
35	小又道板碑	大分県大田村小野	c	d	a	a	a	b	a	a	a	-	a	a	a
36	諸田越板碑	大分県大田村小野	c	c	a	a	a	d	a	a	a	-	a	c	a
37	辻堂ケ鼻板碑	大分県真玉町臼野赤松	a	b	d	f	-	c	b	g	-	c	c	a	d
38	十王堂板碑	大分県国見町野田山下	a	a	a	a	a	b	a	a	a	-	a	c	a
39	川原1号板碑	大分県国東町川原上ノ台	b	a	a	a	a	c	a	a	a	-	c	a	a
40	川原2号板碑	大分県国東町川原上ノ台	a	a	a	a	a	a	a	a	a	-	c	a	a
41	鳴1号板碑	大分県国東町東堅来鳴	c	c	a	a	a	b	a	a	a	-	c	b	a
42	鳴2号板碑	大分県国東町東堅来鳴	c	c	a	a	a	d	a	a	a	-	a	b	a
43	鳴3号板碑	大分県国東町東堅来鳴	c	c	a	a	a	b	a	a	a	-	a	a	a
44	堀部板碑	大分県国東町見地	c	c	a	a	a	d	a	a	a	-	a	a	a
45	左荘板碑	大分県国東町赤松左荘	-	a	a	a	-	-	a	a	a	-	c	a	-
46	野長谷板碑	大分県国東町深江野長谷	c	c	a	a	a	d	a	a	a	-	a	c	a
47	竹ノ上板碑	大分県国東町成仏下成仏	c	c	a	a	a	d	a	a	a	-	a	c	a
48	岡板碑	大分県国東町見地岡	c	c	a	a	a	d	a	a	a	-	a	a	a
49	丸小野寺1号板碑	大分県武蔵町丸小野	a	a	a	a	c	b	a	a	-	-	a	b	a
50	丸小野寺2号板碑	大分県武蔵町丸小野	-	-	a	a	a	b	a	a	-	-	a	a	b
51	護聖寺1号板碑	大分県安岐町朝来	a	a	a	a	a	b	a	a	a	-	c	d	a
52	護聖寺2号板碑	大分県安岐町朝来	a	a	a	a	a	a	a	a	a	-	c	d	a
53	柳井田板碑	大分県安岐町小俣柳井田	a	-	a	a	a	b	a	a	b	-	c	a	a
54	岩尾板碑	大分県安岐町朝来	a	a	a	a	a	b	a	a	a	-	c	b	a
55	八坂社板碑	大分県安岐町弁分	c	c	a	a	a	b	a	a	a	-	a	b	a
56	岩屋堂板碑	大分県安岐町掛樋	a	a	a	a	a	a	a	a	a	-	c	a	b
57	塔野板碑	大分県安岐町弁分塔野	c	c	a	a	a	b	a	a	a	-	a	a	d
58	歳神社板碑	大分県安岐町朝来	a	h	a	a	c	a	a	a	-	c	d	a	d
59	寺園板碑	大分県安岐町小俣寺園	c	h	d	f	-	e	a	a	c	a	a	a	d
60	中村板碑	大分県大分市宮苑	a	a	a	a	b	a	a	a	b	-	a	a	b
61	少林寺1号板碑	大分県大分市木ノ上少林寺	a	a	a	a	a	a	a	a	a	-	a	a	b
62	少林寺2号板碑	大分県大分市木ノ上少林寺	a	a	a	a	a	a	a	a	a	-	a	a	b
63	少林寺3号板碑	大分県大分市木ノ上少林寺	a	a	a	a	a	a	a	a	a	-	a	a	b
64	少林寺4号板碑	大分県大分市木ノ上少林寺	a	-	a	a	a	a	a	a	a	-	a	a	b

表17　豊後における板碑各部位の類型一覧②

番号	名称	所在地	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	XIII
65	少林寺5号板碑	大分県大分市木ノ上少林寺	a	a	a	a	a	a	a	a	a	-	a	a	b
66	本村建長寺跡板碑	大分県庄内町長野本村建長寺跡	-	a	a	a	a	a	a	a	a	-	a	a	b
67	畑田板碑	大分県庄内町畑田	-	-	-	-	-	-	-	-	a	-	a	b	a
68	尾平慈光庵板碑	大分県千歳村大平尾平	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	a	a	b
69	五郎丸板碑	大分県千歳村石田五郎丸	a	e	b	b	b	a	b	a	c	-	a	a	b
70	藤原墓地板碑	大分県千歳村柴山藤原墓地	a	l	b	b	c	a	b	a	d	-	c	a	e
71	アタゴ祠1号板碑	大分県千歳村高添アタゴ	a	g	b	b	h	a	e	c	-	f	c	b	b
72	アタゴ祠2号板碑	大分県千歳村高添アタゴ	a	g	b	b	h	a	e	c	-	f	c	b	b
73	中山板碑	大分県野津町宮原中山	b	a	a	a	a	c	a	a	a	-	a	a	a
74	寺小路板碑	大分県野津町宮原寺小路	a	a	a	b	a	a	a	a	a	-	a	e	a
75	風瀬徳瀬板碑	大分県野津町西畑風瀬徳瀬	a	g	a	a	a	a	a	b	a	-	c	b	a
76	名塚薬師堂板碑	大分県野津町八里合名塚薬師堂	a	e	d	f	i	a	a	b	-	c	c	c	e
77	天手段原1号板碑	大分県野津町秋山天手段原	a	e	c	c	h	a	c	d	c	-	c	a	c
78	大辻山1号板碑	大分県三重町大辻山	a	e	b	b	h	a	f	c	d	-	c	a	a
79	大辻山2号板碑	大分県三重町大辻山	a	e	b	b	h	a	f	c	d	e	c	a	f
80	大辻山3号板碑	大分県三重町大辻山	e	e	d	f	-	a	f	c	d	-	c	a	e
81	大辻山4号板碑	大分県三重町大辻山	a	k	d	f	-	a	f	c	d	a	c	a	e
82	百枝板碑	大分県三重町百枝	a	e	b	b	h	a	c	d	-	-	c	a	a
83	回春庵1号板碑	大分県三重町森迫回春庵	a	e	b	b	h	a	f	c	d	e	c	a	a
84	回春庵2号板碑	大分県三重町森迫回春庵	a	e	b	b	h	a	f	c	d	-	c	a	b
85	回春庵3号板碑	大分県三重町森迫回春庵	a	e	b	b	h	a	f	c	d	-	c	a	b
86	下津留1号板碑	大分県三重町上田原下津留	a	e	c	c	h	a	f	a	-	-	c	a	a
87	下津留2号板碑	大分県三重町上田原下津留	a	e	b	b	h	a	f	c	d	d	c	a	b
88	下津留3号板碑	大分県三重町上田原下津留	c	e	b	b	h	a	f	d	-	d	c	a	-
89	下津留4号板碑	大分県三重町上田原下津留	a	e	b	b	h	a	f	d	-	d	c	a	-
90	下津留5号板碑	大分県三重町上田原下津留	a	e	b	b	h	a	f	d	-	d	c	a	a
91	下津留6号板碑	大分県三重町上田原下津留	c	e	b	b	h	a	f	c	d	-	c	a	b
92	下津留7号板碑	大分県三重町上田原下津留	b	e	b	b	h	a	f	e	-	d	c	a	b
93	蓮城寺1号板碑	大分県三重町内山蓮城寺	a	e	b	b	c	a	f	c	d	e	c	a	d
94	塚ノ元1号板碑	大分県大野町古殿塚ノ元	d	g	b	b	c	a	b	g	d	-	-	-	e
95	塚ノ元2号板碑	大分県大野町古殿塚ノ元	e	k	b	b	a	a	f	g	d	-	c	b	b
96	下原板碑	大分県大野町田中大野町中央公民館	-	-	a	a	a	a	a	a	a	-	a	a	a
97	門板碑	大分県大野町津留門	a	m	b	b	h	a	b	c	-	-	c	a	a
98	代三五板碑	大分県大野町代三五	a	e	b	b	h	a	f	c	d	-	c	a	a
99	岳川板碑	大分県朝地町綿田岳川	a	c	a	a	a	a	a	a	b	-	a	a	a
100	瀬口板碑	大分県朝地町池田瀬口	a	e	c	c	f	a	b	a	a	-	-	-	e
101	館ノ原墓地板碑	大分県朝地町池田館館ノ原墓地	a	e	d	f	-	a	f	c	d	-	a	b	b
102	平井板碑	大分県朝地町下野平井	a	e	d	f	-	a	f	g	d	-	-	-	b
103	三反畑板碑	大分県緒方町上自在三反畑	a	a	a	a	a	a	b	b	a	-	-	-	a
104	西ケ原板碑	大分県緒方町馬背畑西ヶ原	a	e	b	b	d	a	b	c	-	-	-	-	a
105	小野崎板碑	大分県緒方町越生小野崎	a	e	d	f	-	a	a	a	e	-	c	a	b
106	旧村役場板碑	大分県緒方町馬場柏木旧村役場	b	e	d	f	-	a	b	a	d	-	c	a	a
107	加藤家墓地板碑	大分県緒方町馬場柏木	a	g	b	b	c	a	a	b	-	-	a	a	d
108	上青江板碑	大分県津久見市上青江	c	e	d	f	-	a	f	f	f	-	e	e	b
109	床木板碑	大分県弥生町床木	a	g	b	b	c	a	b	a	a	-	c	a	e
110	地蔵ノ本板碑	大分県佐伯市堅田西野地蔵ノ本	a	j	d	f	-	a	f	h	-	a	c	g	e
111	大川庵板碑	大分県佐伯市府坂大川庵	a	j	d	f	-	a	f	h	-	c	c	d	b
112	延命庵板碑	大分県佐伯市石打延命庵	a	j	d	f	-	a	f	h	-	c	e	h	e
113	稲荷神社1号板碑	大分県直川村下直見道越稲荷神社	a	g	d	f	-	a	d	a	f	-	a	a	b
114	稲荷神社2号板碑	大分県直川村下直見道越稲荷神社	a	g	d	f	-	a	d	a	f	-	a	a	b
115	上爪板碑	大分県宇目町塩見園上爪	a	e	b	b	e	a	f	c	d	-	c	a	a
116	筒井板碑	大分県直入町長湯筒井	a	a	a	a	a	a	f	a	-	-	-	-	-
117	鬼田板碑	大分県竹田市明治植木鬼田	a	e	d	f	i	a	b	g	-	-	c	a	a
118	折立板碑	大分県竹田市明治平田折立	a	j	d	f	i	a	b	g	-	-	c	a	e

表18　肥後における板碑各部位の類型一覧

番号	名称	所在地	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	XIII
1	賀庭寺跡板碑	熊本県荒尾市下樋	a	a	a	a	a	a	a	a	a	h	a	a	e
2	専立寺板碑	熊本県山鹿市鍋田（現山鹿市博物館内）	a	a	a	a	a	a	f	-	a	h	c	a	c
3	柳井寺跡板碑	熊本県山鹿市鍋田（現山鹿市博物館内）	a	g	d	f	-	a	b	-	d	h	c	a	b
4	内田赤子宮1号板碑	熊本県和水町内田　赤子宮裏山	b	b	a	g	a	a	f	-	k	h	c	a	e
5	内田赤子宮2号板碑	熊本県和水町内田　赤子宮裏山	-	-	-	-	-	a	f	-	k	h	c	a	e
6	池亀八幡宮板碑	熊本市池亀町　池亀八幡宮	g	f	d	f	-	a	a	a	-	c	a	a	e
7	塔本家板碑	熊本県宇城市小川町南部田	-	-	-	-	-	-	-	-	a	h	-	-	a
8	元永峰観音堂跡板碑	熊本県あさぎり町深田北仁王買多田	-	-	-	-	-	-	-	-	-	h	a	b	a

表19 日向における板碑各部位の類型一覧

番号	名称	所在地	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	ⅩⅢ
1	光福寺跡大師堂板碑	宮崎県延岡市南方吉野	-	-	-	-	-	-	-	-	-	h	c	a	e
2	小園福寿庵跡天正5年銘板碑	宮崎県東臼杵郡門川町小園	b	b	a	a	a	a	b	d	-	h	a	a	a
3	小松板碑	宮崎県東臼杵郡門川町川内	a	g	a	a	a	a	a	a	g	h	e	e	b
4	本善寺大永7年銘板碑	宮崎県日向市富島町日知屋	a	a	a	a	a	a	a	e	g	h	a	a	b
5	本善寺享禄4年銘板碑	宮崎県日向市富島町日知屋	a	a	a	a	a	a	a	a	g	h	c	a	b
6	本善寺天正13年銘板碑	宮崎県日向市富島町日知屋	a	a	a	a	a	a	a	a	g	h	a	a	b
7	本善寺寛永10年銘板碑	宮崎県日向市富島町日知屋	a	a	a	a	a	a	a	e	g	h	a	a	b
8	定善寺永正12年銘1号板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	a	a	g	h	c	a	b
9	定善寺永正12年銘2号板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	a	a	g	h	c	a	b
10	定善寺永正14年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	a	a	g	h	c	a	b
11	定善寺大永6年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	a	e	g	h	c	a	b
12	定善寺享禄3年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	a	a	g	h	c	a	b
13	定善寺天文7年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	a	a	g	h	c	a	b
14	定善寺天文10年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	a	a	g	h	c	a	b
15	定善寺天文11年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	a	a	g	h	c	a	b
16	定善寺永禄11年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	a	a	g	h	a	a	b
17	定善寺永禄12年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	b	a	g	h	c	a	b
18	定善寺元亀3年銘1号板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	a	e	g	h	c	a	b
19	定善寺元亀3年銘2号板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	a	a	g	h	c	a	b
20	定善寺元亀3年銘3号板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	b	a	g	h	c	a	b
21	定善寺元亀3年銘4号板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	b	a	g	h	c	a	b
22	定善寺天正5年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	b	e	-	h	c	a	b
23	定善寺慶長7年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	a	a	g	h	c	a	b
24	定善寺慶長8年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	-	-	e	g	h	a	a	b
25	定善寺元和10年銘板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	a	e	g	h	c	a	b
26	定善寺寛永6年銘1号板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	b	a	g	h	a	a	b
27	定善寺寛永6年銘2号板碑	宮崎県日向市財光寺	a	a	a	a	a	a	b	a	-	h	c	a	b
28	山陰成願寺板碑	宮崎県東臼杵郡東郷町山陰鶴の内	a	a	a	a	a	a	b	e	-	h	c	a	b
29	入田墓地1号板碑	宮崎県美郷町南郷鬼神野	a	a	a	a	a	a	a	e	-	h	a	a	a
30	入田墓地2号板碑	宮崎県美郷町南郷鬼神野	a	a	a	a	a	a	b	e	-	h	a	a	a
31	宗光寺板碑	西都市右松	a	a	d	f	-	a	f	-	-	h	c	b	e
32	城ケ崎嘉暦3年銘板碑	宮崎県宮崎市赤江城ケ崎	c	c	a	a	a	a	a	a	a	h	a	a	b
33	城ケ崎寛永8年銘板碑	宮崎県宮崎市赤江城ケ崎	d	a	a	a	a	a	b	f	-	i	c	a	g
34	明星寺板碑	宮崎県宮崎市中原町明星寺墓地	a	a	a	b	a	a	f	-	-	j	c	a	e
35	清武城跡大永4年銘1号板碑	宮崎県清武町加納	a	l	a	b	a	a	f	-	j	a	c	a	e
36	清武城跡大永4年銘2号板碑	宮崎県清武町加納	a	l	b	g	a	a	f	-	d	a	a	a	g
37	清武城跡永禄5年銘板碑	宮崎県清武町加納	a	g	b	a	h	a	f	-	d	h	c	a	c
38	清武城跡文禄5年銘板碑	宮崎県清武町加納	a	g	a	b	a	a	f	-	d	h	c	a	e
39	清武城跡慶長7年銘板碑	宮崎県清武町加納	a	a	a	a	a	a	f	-	f	h	c	a	e
40	彦山寺跡1号板碑	宮崎県えびの市東川北	a	a	a	a	a	c	a	b	a	h	c	a	a
41	彦山寺跡2号板碑	宮崎県えびの市東川北	a	a	a	a	a	a	a	b	a	h	c	a	a
42	彦山寺跡3号板碑	宮崎県えびの市加久藤町東川内	a	e	d	f	-	a	f	-	a	a	c	b	d
43	合窪橋板碑	宮崎県西諸県郡高原町広原	a	l	a	g	a	a	b	e	a	h	a	a	e
44	野々美谷板碑	宮崎県都城市野々美谷町	a	l	a	a	a	a	e	-	-	h	c	a	e
45	折田代公民館板碑	宮崎県都城市吉之元町	f	e	a	b	h	a	f	-	-	h	c	a	b
46	折生田板碑	宮崎県日南市北郷町大藤甲	a	a	a	a	a	a	a	a	a	h	c	a	e
47	大迫寺跡永仁3年銘板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	a	a	a	a	a	a	a	a	i	h	c	a	a
48	大迫寺跡正平25年銘板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	-	-	-	-	-	-	-	-	a	h	a	b	a
49	大迫寺跡天正5年銘1号板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	a	e	b	a	a	a	f	b	a	h	c	a	b
50	大迫寺跡天正5年銘2号板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	a	e	b	a	a	a	f	b	a	h	c	a	b
51	大迫寺跡慶長11年銘板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	a	g	d	f	-	a	f	-	j	h	c	b	e
52	大迫寺跡元和2年銘板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	a	g	d	f	-	a	f	-	j	h	c	b	e
53	大迫寺跡寛永6年銘板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	a	e	a	b	a	a	f	g	h	h	c	a	b
54	大迫寺跡寛永8年銘板碑	宮崎県日南市吉野方迫の内	a	g	d	f	-	a	f	-	j	h	c	b	e
55	殿所板碑	宮崎県日南市殿所1405	b	a	a	a	a	a	f	a	-	i	c	a	e
56	歓楽寺跡正和4年銘板碑	宮崎県日南市西弁分上隈谷	a	a	a	a	a	a	a	a	a	h	a	a	d
57	歓楽寺跡正慶2年銘板碑	宮崎県日南市西弁分上隈谷	c	c	a	a	a	a	a	a	a	h	a	a	d

表20　薩摩における板碑各部位の類型一覧

番号	名称	所在地	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	XIII
1	南瀬観音永仁7年銘1号板碑	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬	－	－	－	－	－	－	－	－	a	h	c	a	e
2	南瀬観音永仁7年銘2号板碑	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬	－	－	－	－	－	－	－	－	－	h	c	a	e
3	戸田観音1号板碑	鹿児島県薩摩川内市中村町戸田	c	c	a	a	c	a	a	a	－	h	a	a	b
4	草道板碑	鹿児島県薩摩川内市水引町草道	a	e	d	f	－	e	a	i	－	f	a	b	e
5	高橋家1号板碑	鹿児島県薩摩川内市入来町浦之名	a	g	a	a	a	a	f	－	－	a	c	b	e
6	高橋家2号板碑	鹿児島県薩摩川内市入来町浦之名	b	b	a	a	c	a	a	a	c	h	a	b	d
7	寿昌寺墓地板碑	鹿児島県薩摩川内市入来町副田	b	g	a	a	a	a	a	g	－	a	c	a	f
8	一之宮神社板碑	鹿児島県鹿児島市郡元町	a	g	a	－	c	－	－	－	－	h	c	a	a
9	鰻板碑	鹿児島県指宿市山川成川	c	c	a	a	a	a	a	a	a	h	a	a	a
10	硫黄島天授板碑	鹿児島県三島村硫黄島	a	l	b	b	a	a	e	a	a	h	c	a	a
11	硫黄島慶長板碑	鹿児島県三島村硫黄島	b	l	a	a	a	b	f	a	d	h	c	a	e

表21　大隅における板碑各部位の類型一覧

番号	名称	所在地	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	XIII
1	稲葉崎暦応2年銘1号板碑	湧水町稲葉崎　オゴンツ	c	l	d	f	－	a	f	j	a	k	c	a	b
2	稲葉崎暦応2年銘2号板碑	湧水町稲葉崎　オゴンツ	c	l	d	f	－	a	f	j	a	k	c	a	b
3	稲葉崎暦応2年銘3号板碑	湧水町稲葉崎　オゴンツ	a	a	a	a	a	c	a	a	a	h	c	a	a
4	稲葉崎暦応3年銘板碑	湧水町稲葉崎　オゴンツ	c	c	a	a	a	a	a	b	a	h	c	a	b
5	稲葉崎二連板碑	湧水町稲葉崎　オゴンツ	c	c	a	a	a	a	b	a	a	h	c	a	a
6	田尾原正平14年銘1号板碑	湧水町田尾原鶴田山	a	a	a	a	a	a	a	a	a	h	c	a	a
7	田尾原正平14年銘2号板碑	湧水町田尾原鶴田山	c	c	a	a	a	a	b	a	a	h	c	a	a
8	肆部合1号板碑	志布志市有明町野井倉	a	a	a	a	a	a	a	a	a	h	a	a	b
9	肆部合2号板碑	志布志市有明町野井倉	a	a	a	a	a	a	a	a	a	h	a	a	b
10	波之上神社嘉暦3年銘板碑	鹿屋市高須町	c	c	a	a	a	a	a	a	a	h	a	b	b
11	波之上神社元弘2年銘板碑	鹿屋市高須町	－	－	－	－	－	－	－	－	a	h	a	b	b
12	波之上神社正慶2年銘1号板碑	鹿屋市高須町	－	－	－	－	－	－	－	－	a	h	a	b	b
13	波之上神社正慶2年銘2号板碑	鹿屋市高須町	c	c	a	a	a	a	a	a	a	h	a	b	b
14	波之上神社元弘3年銘板碑	鹿屋市高須町	c	c	a	a	a	a	a	a	a	h	a	b	b
15	岩林寺跡正応6年銘板碑	南大隅町根占川南宇都	a	a	a	a	a	a	a	a	a	h	a	b	b
16	岩林寺跡永仁2年銘板碑	南大隅町根占川南宇都	c	c	a	a	a	a	a	a	a	h	a	a	b
17	宮原板碑	南大隅町根占川北宮原	c	a	a	a	a	a	a	a	a	h	c	a	b
18	横馬場板碑	南大隅町根占川北　横馬場公民館	a	a	a	a	a	a	a	a	a	h	c	a	a

第Ⅳ章　九州における自然石板碑

九州における板碑は整形されたものだけでなく、自然石を利用したものもみられる。一概に自然石板碑と言っても、角の取れた転石を利用しているものもあれば、節理面をもつ角礫を利用したもの、粗割りをした敲打面を利用したものもある。加えて、敲打によりわずかに加工を加えたものもあり、その様相は様々である。共通するのは、形を整えていないことである。このような自然石に、仏菩薩を梵字種子や陽刻・線刻等で表し、また、銘文を刻んでいるのは、整形板碑と共通する。梵字種子や陽刻・線刻等で表した仏菩薩や、刻銘の内容も整形板碑と何ら変わるものでなく、違いは整形されているかいないかにすぎない。

以下では、各地の自然石板碑について概観してみたい。

九州における自然石板碑の石材は多様である。玄武岩・凝灰岩・砂岩・花崗岩・花崗閃緑岩・安山岩などをはじめとして様々な石材が確認されている。これらは、いずれも近隣地に産出する石材であり、凝灰岩・安山岩等、九州における良質な石塔部材となる石材が産出しない地域においては、それぞれの地域における石材を採取し、整形がなされない自然石板碑を生み出す特徴がある。それは、筑前・筑後・肥前・肥後など九州北西部地域に多くみられ、これらの地域は基本的に九州中南部の凝灰岩・安山岩を石材とする板碑とは型式的に異なる特徴がある。

筑前の板碑は表 22～24、図 107・108 に、筑後の板碑は表 25～26、図 107 に、肥前の板碑は表 27～29、図 109 にそれぞれ示した。元永 2 年（1119）銘をもつ福岡県宗像市鎮国寺自然石板碑にはじまり、以後、天治 2 年（1125）銘をもつ福岡県福津市宝林寺跡自然石板碑や養和 2 年（1182）銘をもつ福岡県飯塚市筒野板碑、建久元年（1190）銘をもつ長崎県諫早市西郷自然石板碑など、平安期～鎌倉初期に遡る類例がみられる。これらはいずれも自然石を利用したものであり、他地域に比較すれば、玄武岩・花崗岩・砂岩・凝灰岩・安山岩など、その石材も多様であるが、いずれも地元で採取できる石材を利用している。鎌倉期に入り、自然石板碑の流行は衰えず、筑前においては建長 7 年（1255）銘をもつ福岡県古賀市熊野神社自然石板碑をはじめ、その数は増し、南北朝期に受け継がれてゆき、自然石板碑がこの地域の板碑型式の主流を占める。肥前においても貞和 2 年（1346）銘をもつ佐賀県鳥栖市野副板碑をはじめ、佐賀県基山町大興善寺自然石板碑（1355 年銘）、佐賀県大町町福母自然石板碑（1373 年銘）など南北朝期の紀年銘をもつ板碑は、そのほとんどが自然石の自然面を利用した板碑である。戦国期に至ると、整形板碑と同様に墓碑化した

自然石板碑が爆発的に増え、紀年銘がみられる自然石板碑の資料数は九州においては、肥後とともに格段に多く、自然石板碑が最も隆盛をきわめた地域といえよう。

肥後においては、自然石板碑が爆発的に流行する。表 30～43、図 110・111 に示したように、九州では最も多くの資料数が確認できる。この数は前川清一をはじめとした地元研究者の精力的な調査と資料化によるものであることは言うまでもないが、それを差し引いても、肥後には数多くの自然石板碑が存在する。

出現に関しては、肥後においても、平安期に遡る天養元年（1144）をもつ熊本県南小国町千光寺自然石板碑を嚆矢とし、鎌倉期に遡るものも少数例確認できる。肥後の特徴としては、自然石板碑でありながら整形板碑の様相をもつ板碑が八代市周辺に流行することがあげられる。八代市周辺では砂岩をはじめ凝灰岩や安山岩など、地元に産出する扁平な自然石の平坦面を利用して梵字種子や銘文を刻み、板碑としている類例が多く確認できるが、正平 15 年（1360）銘をもつ熊本県八代市畑中鎮守堂板碑のように山形や側線・二条切込み・額部を陰刻線で表現しているものや、建徳 3 年（1372）銘をもつ熊本県氷川町天神社板碑のように、形態が板碑形に近い自然石を選び、二条切込み・額部を陰刻線で表現しているものなどが確認でき、自然石板碑の中にも板碑形式を線刻で表現しようとするものも確認

写真 1　熊本県八代市畑中鎮守堂板碑

写真 2　熊本県氷川町天神社板碑

できる。しかし、これらは南北朝期の板碑にしてはきわめて小型であり、また、明らかに整形板碑の製作系譜を受け継ぐものではなく、自然石板碑の製作系譜を受け継ぐ工人が知識として板碑形を碑面だけに表現しようとしたものと考えられる。

このほかにも、肥後の特徴として、戦国期の自然石板碑に少なからず、整形された笠をもつ板碑が存在する。笠をもつとしたなら、本来は笠塔婆に分類すべきであるかもしれない。しかし、前川清一がこれらを板碑として分類しているように（青木勝士・北川賢次郎・前川清一・矢野裕介 1996 ほか）、碑身そのものは笠をもつものともたないものとに全く違いがなく、現在、笠をもたない自然石板碑についても、かつては笠をもっていたが、笠が失われた類例も存在するものと思える。

また、肥後における自然石板碑の石材について、凝灰岩や砂岩などもみられるものの、その多くが安山岩である特徴は注目すべき事実である。九州における整形板碑はその多くが凝灰岩・安山岩を石材としているものの、肥後においては、整形板碑が製作できる石材を有しながら、無紀年銘板碑を含めて整形板碑の資料数がきわめて乏しいことは、他地域とは異なる。これは、整形板碑が幅広く根付いてはいないことに起因するものと考えられ、九州においては必ずしも石塔文化に劣る地域ではない肥後の特異性がここにあるものと考えられる。その一例として、天文 16 年（1547）銘をもつ熊本市増福寺跡自然石板碑では、安山岩の自然石を利用した碑身に凝灰岩製の笠が載せられているが（熊本市 1993）、自然石の安山岩に石材の異なる整形された凝灰岩製の石塔部材が載せられていることは興味深く、肥後においては、石塔部材を整形する石材として凝灰岩が選択されていることがわかる。このことは、他地域でも確認でき、整形板碑が多く確認できる薩摩・大隅・日向に近接する球磨川上流域の球磨地域においても整形板碑が存在し、九州の整形板碑においては 2 番目に古い紀年銘の弘安 5 年（1282）銘をもつ熊本県あさぎり町元長峰観音堂跡板碑が凝灰岩を石材としていることをはじめとして、この地域の整形板碑は凝灰岩を石材としているが、この地域に確認できる紀年銘を有する自然石板碑はすべて砂岩製である。

肥後においては、笠をもつ自然石板碑を含めて、自然石板碑が戦国期に爆発的に流行する。肥後においても墓碑や交名をもつ民間信仰碑が流行する戦国期に自然石板碑の資料数が激増し、これは前述した筑前・筑後・肥前などと様相を同じくする。

豊前においては、表 44、図 112 に示したように、圧倒的に南部に分布が偏ることがわかる。これは、大分県宇佐地域を中心に精力的に資料化に取り組んだ入学正敏の業績（入学正敏 1988・1994）のたまものであることは否めないが、それを差し引いても、豊前南部に

は数多く存在する印象を受ける。これらは、そのほとんどが安山岩を利用しており、ここにおいても地元に産出する自然の石に手を加えず石材としていることがわかる。

当地における特徴として、最も数多く確認できる大分県宇佐市御許山が修験の地であることが注目される。御許山は宇佐神宮の奥の院が存在する聖地であり、奥の院が存在する山頂付近や山麓部に様々な仏教施設がみられる。これらの場所には自然石板碑が多く存在するが、戦国期以降に墓碑として造立されているものが多い。豊前において修験の地とされる場所は御許山だけではなく、福岡県域でも英彦山や求菩提山などをはじめ、豊前南部を中心とした山稜部に多く確認できる。これらの地域では、近世に入り、寛文期以降、一般的に墓碑が造立される時期になると、自然の角礫を利用して墓碑とすることが流行するが、その地域は豊前の範囲を超え、豊後北部の国東半島地域も含まれる。寛文期以前に遡る墓碑については他地域の墓碑と同様に格段に少ないが、修験の地において寛文期以降に自然の角礫を利用した墓碑の流行に先行して自然石板碑が存在することは興味深い事実である。

豊後は整形板碑が九州の中では卓越して濃密な分布を示している地域である。整形板碑が 60 例を超える反面、表 45、図 113 に示したように、自然石板碑はきわめて少ない特徴をもつ。

その石材をみると、安山岩や凝灰岩など、地元に産出される石材が多いことは他地域と何ら変わりはないが、中でも特筆されるのは、大分県佐賀関町地蔵寺墓地自然石板碑にみられる緑泥片岩を利用した自然石板碑の存在である。当地においては、地元に最も多く産出する石材が緑泥片岩であるが、中世の石塔の石材として利用されることはほとんどなく、爆発的に墓碑が造立される近世においても、石材として利用されることは少ない。豊後に限らず、九州の緑泥片岩は硬質の石英を多く含み、自然石を石塔の石材として利用するにしても、刻字の作業に難があるものと考えられる。このことは、肥前でも同様であり、長崎県域にも緑泥片岩が産出されるが、肥前においては緑泥片岩を石材として利用した自然石板碑はあまり確認できないことに通じる。

また、大分県杵築市山香町に所在する自然石板碑がいずれも安山岩であることは興味深い。当地には、良質な凝灰岩が産出し、中世石塔のほとんどが、この凝灰岩を石材として利用しているが、自然石板碑のみ安山岩の自然石を利用していることは、前述した肥後における類例に共通して興味深い。

その造立時期に関しては、ほとんどが戦国期以降のものであるが、唯一、紀年銘資料と

して康永 2 年(1343)銘をもつ大分県臼杵市野津町芝尾自然石板碑のように、南北朝期に遡る類例もみられる。この資料は凝灰岩製であり、豊後南部おいては凝灰岩を石材とした板碑は、ほぼ、整形板碑に限定して流行しているが、この資料においては自然石の粗割りの加工面を多く残しながら正面のみ平滑に仕上げていることは、他の自然石板碑とは異なる。

日向は、豊後に次ぎ、九州を代表する整形板碑地域といえる。安山岩・凝灰岩・砂岩等、各地元に産出する石材を利用しているが、表 46、図 114 に示したように、整形板碑が乏しい地域に分布する傾向がうかがえる。そのほとんどが戦国期以降に属し、他地域と同様にこの時期に流行する墓碑的機能や民間信仰碑として造立されているが、唯一、永仁元年（1293）銘をもつ宮崎県小林市岩瀬橋自然石板碑のように南北朝期以前に遡る資料もみられる。この板碑は、整形板碑地域にしては自然石を利用するという形態的な特異性だけではなく、銘文にみられる造立主旨も興味深い。岩瀬橋に近接して単独で立てられている立地環境をはじめ、バンの梵字種子を刻むものの、その銘文に「橋勧進　除蜜災　永仁元年十二□□□」とみえ、架橋を契機として立てられ、しかも「除蜜災」とは蒙古襲来を意識したものかもしれない。永仁元年（1293）は、2 度の元寇直後であり、その時代相を反映した資料として興味深い。このような願意は、鎌倉～南北朝期のものとしては、九州においてはみられず、その造立主旨の特異性は、自然石板碑という当地にとって特異な様相もつことと無関係ではなく、造立主・工人等、在地の板碑製作とは異なる背景があるものと思える。

写真 3　小林市岩瀬橋自然石板碑

薩摩・大隅も整形板碑が隆盛する地域である。各地にその地域特有の凝灰岩が産出し、九州の中では最も整形板碑が隆盛しやすい環境が整っていた地域といえよう。それが自然石板碑が隆盛しない大きな原因であると考えられ、表 47・図 115 に示したように、両地域合わせて 5 例ときわめて少ない。他地域ではそのほとんどが戦国期以降であることに比較し、当地では戦国期以降のものとして、寛永 14 年（1637）銘の鹿児島県薩摩川内市春日小路自然石板碑のみというように、ここに大きな差があると考えられる。

一方、南北朝期以前に遡る資料は4例確認でき、そのうち3例が鹿児島県湧水町稲葉崎石塔群中に存在することは興味深い。この石塔群には様々な塔種がみられ、板碑に関しても通常の整形板碑をはじめ、連碑や角塔婆などがみられ、それとともに自然石板碑も存在する。紀年銘にみられる造立期はいずれも南北朝期前葉におさまり、同時期に製作された様々な塔種の一つとして自然石板碑も選択され、また、工人差も感じ取れない印象を受ける。その意味では他の整形板碑に劣るものでもなく、自然石板碑を選択した特別な理由もないものと思える。

以上、九州各地の自然石板碑について触れてきた。石材からみれば各地域特有の地元の石を使っていることがわかるが、凝灰岩と安山岩が混在する地域では、あくまでも整形された石塔の原材を凝灰岩に求め、自然石板碑には安山岩を用いる傾向があることがわかる。中世における九州の石塔は主な石材として安山岩・凝灰岩両方を用いているが、このような例をみると、石材としては凝灰岩がより良質であるといった認識が、当時の石大工の念頭にあったことがうかがえる。

自然石板碑の資料数をみると、筑前・筑後が95例、肥前が69例、肥後が354例、豊前が25例、豊後が9例、日向が21例、薩摩・大隅が5例といったように、筑前・筑後・肥前・肥後に圧倒的に多いことがわかる。これらの地域には、整形板碑が少なく、自然石板碑と整形板碑が補完しあう関係であったことがうかがえ、整形板碑が隆盛する地域に自然石板碑が少なく、反対に自然石板碑が隆盛する地域には整形板碑が少ないことがわかる。ごく一部の例外はみられるが、自然石板碑と整形板碑の両者が混在し、板碑の選択にグレード差があり、整形板碑が優位に立つといった現象がみられないのも、単にそれぞれの地域の工人の技術系譜によるものであったことがうかがえる。

自然石板碑の造立に関しては、九州における他の塔形に比較してもきわめて古い段階から発生し、元永2年(1119)銘をもつ福岡県宗像市玄海町鎮国寺自然石板碑、天治2年(1125)銘をもつ福岡県福津市宝林寺跡自然石板碑、天養元年（1144）銘をもつ熊本県南小国町千光寺自然石板碑、仁安3年(1168)銘をもつ佐賀県武雄市勇猛寺自然石板碑、養和2年(1182)銘をもつ福岡県飯塚市筒野自然石板碑、建久元年（1190）銘をもつ長崎県諫早市西郷自然石板碑などのように、筑前・肥前・肥後などの自然石板碑隆盛地においては平安後期から出現していることがわかる。後述するが、整形板碑が九州各地に出現するのが、鎌倉期でも中葉以降の正嘉・弘安・正応期であることに比較すれば、自然石板碑は格段に古い。これが整形板碑と大きく異なる特色である。整形板碑が出現して以降、南北朝期までは自然

石板碑隆盛地には継続して製作され続けているが、その資料数に最も差があらわれるのは戦国期以降である。自然石板碑も戦国期には墓碑的機能をもつものや民間信仰のもと造立されたものがほとんどを占めるが、自然石板碑も整形板碑と同様な趨勢をたどっている。

表 22　筑前における紀年銘をもつ自然石板碑一覧①

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
1	鎮国寺自然石板碑	福岡県宗像市玄海町吉田	元永 2 年	1119	砂岩	
2	鎮国寺霊鷲崛自然石板碑	福岡県宗像市玄海町吉田	弘長 3 年	1263	砂岩	多田隈豊秋 1975
3	百塔自然石板碑	福岡県福津市勝浦字新原	文永 11 年	1274	玄武岩	多田隈豊秋 1975
4	本木自然石板碑	福岡県福津市本木	正平 22 年	1367	凝灰岩	
5	本木赤御堂永徳 3 年銘自然石板碑	福岡県福津市本木	永徳 3 年	1383	玄武岩	福間町史編集委員会 1998
6	本木赤御堂天文 3 年銘自然石板碑	福岡県福津市本木	天文 3 年	1534	玄武岩	福間町史編集委員会 1998
7	宝林寺跡自然石板碑	福岡県福津市本木万才原	天治 2 年	1125	花崗岩	
8	熊野神社自然石板碑	福岡県古賀市筵内	建長 7 年	1255	安山岩	
9	清瀧寺薬師堂自然石板碑	福岡県古賀市清瀧	応永 25 年	1418	花崗岩	
10	清瀧寺大日堂自然石板碑	福岡県古賀市清瀧	明徳 2 年	1391	花崗岩	
11	須賀神社自然石板碑	福岡県直方市上境宮浦	建武 3 年	1336	砂岩	多田隈豊秋 1975
12	筒野養和 2 年銘自然石板碑	福岡県飯塚市筒野権現谷	養和 2 年	1182	砂岩	多田隈豊秋 1975
13	明星寺自然石板碑	福岡県飯塚市明星寺	元享 2 年	1322	不明	多田隈豊秋 1975
14	木祖宮自然石板碑	福岡県飯塚市阿恵	正平 25 年	1370	不明	筑穂町誌編集委員会 2003
15	一貴山夷巍寺自然石板碑	福岡県糸島市一貴山	康永 2 年	1343	花崗閃緑岩	山内亮平ほか 2008
16	荘厳寺大永 4 年銘自然石板碑	福岡市東区志賀島 833	大永 4 年	1524	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
17	濡衣塚自然石板碑	福岡市博多区千代	康永 3 年	1344	玄武岩	多田隈豊秋 1975
18	宗栄寺貞和 7 年銘自然石板碑	福岡市東区名島 1 丁目	貞和 7 年	1351	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
19	宗栄寺明徳元年銘自然石板碑	福岡市東区名島 1 丁目	明徳元年	1390	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
20	調円寺自然石板碑	福岡市東区名子 2 丁目	寛永 20 年	1643	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
21	松崎六田地蔵自然石板碑	福岡市東区松島 1 丁目	正平 21 年	1366	玄武岩	福岡市教育委員会 1992

表 23　筑前における紀年銘をもつ自然石板碑一覧②

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
22	勝楽寺永和 4 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 1 丁目	永和 4 年	1378	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
23	勝楽寺応永 6 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 1 丁目	応永 6 年	1399	花崗岩	福岡市教育委員会 1992
24	筥崎宮建徳 2 年銘自然石板碑	福岡市東区筥崎 1 丁目	建徳 2 年	1371	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
25	田村家正平 14 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 1 丁目	正平 14 年	1359	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
26	辰巳コーポ嘉暦 4 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 1 丁目	嘉暦 4 年	1329	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
27	高麗大地蔵建徳元年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 2 丁目 9	建徳元年	1370	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
28	天満宮永和 3 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 2 丁目	永和 3 年	1377	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
29	田地蔵尊康暦 2 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 2 丁目 34	康暦 2 年	1380	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
30	米山弁財天社至徳 2 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 3 丁目 8	至徳 2 年	1385	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
31	米山弁財天社応永 9 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 3 丁目 8	応永 9 年	1402	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
32	内野家慶長 8 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 3 丁目 8-5	慶長 8 年	1603	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
33	内野家永享 5 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 3 丁目 8-5	永享 5 年	1433	花崗岩	福岡市教育委員会 1992
34	内野家元和 2 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 3 丁目 8-5	元和 2 年	1616	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
35	光安家嘉暦 4 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 3 丁目 8-7	嘉暦 4 年	1329	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
36	米一丸地蔵堂正平 19 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 6	正平 19 年	1364	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
37	米一丸地蔵堂嘉暦元年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 6	嘉暦元年	1326	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
38	米一丸地蔵堂嘉暦 4 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 6	嘉暦 4 年	1329	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
39	米一丸地蔵堂観応 3 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 6	観応 3 年	1352	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
40	米一丸地蔵堂建徳 2 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 6	建徳 2 年	1371	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
41	米一丸地蔵堂永徳元年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 6	永徳元年	1381	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
42	米一丸地蔵堂応永 6 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 6	応永 6 年	1399	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
43	米一丸地蔵堂嘉元元年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 6	嘉元元年	1303	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
44	勝軍地蔵堂貞和 2 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 7	貞和 2 年	1346	花崗岩	福岡市教育委員会 1992
45	勝軍地蔵堂正平 21 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 7	正平 21 年	1366	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
46	勝軍地蔵堂応安 5 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 7	応安 5 年	1372	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
47	勝軍地蔵堂応永 32 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 7	応永 32 年	1425	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
48	勝軍地蔵堂永和 5 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 7	永和 5 年	1379	玄武岩	福岡市教育委員会 1992

表 24　筑前における紀年銘をもつ自然石板碑一覧③

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
49	勝軍地蔵堂康応 2 年銘自然石板碑	福岡市東区箱崎 6 丁目 7	康応 2 年	1390	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
50	三角稲荷神社康暦元年銘自然石板碑	福岡市東区馬出 1 丁目 20-1	康暦元年	1379	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
51	三角稲荷神社嘉暦 4 年銘自然石板碑	福岡市東区馬出 1 丁目 20-1	嘉暦 4 年	1329	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
52	三角稲荷神社永徳 3 年銘自然石板碑	福岡市東区馬出 1 丁目 20-1	永徳 3 年	1383	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
53	三角稲荷神社正平 25 年銘自然石板碑	福岡市東区馬出 1 丁目 20-1	正平 25 年	1370	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
54	三角稲荷神社延文 4 年銘自然石板碑	福岡市東区馬出 1 丁目 20-1	延文 4 年	1359	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
55	三角稲荷神社正平 24 年銘自然石板碑	福岡市東区馬出 1 丁目	正平 24 年	1369	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
56	田原家自然石板碑	福岡市東区馬出 5 丁目	応安元年	1368	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
57	妙徳寺自然石板碑	福岡市東区馬出 5 丁目	至徳 3 年	1386	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
58	恵光院応永 8 年銘自然石板碑	福岡市東区馬出 5 丁目	応永 8 年	1401	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
59	恵光院明徳 5 年銘自然石板碑	福岡市東区馬出 5 丁目	明徳 5 年	1394	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
60	恵光院永徳 3 年銘自然石板碑	福岡市東区馬出 5 丁目	永徳 3 年	1383	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
61	大乗寺跡康永 4 年銘自然石板碑	福岡市博多区冷泉町 7-8	康永 4 年	1345	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
62	香月家自然石板碑	福岡市博多区美野島 2 丁目	正安 4 年	1302	凝灰岩	福岡市教育委員会 1992
63	美野島 2 丁目自然石板碑	福岡市博多区美野島 2 丁目	享禄 5 年	1532	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
64	西専寺自然石板碑	福岡市博多区諸岡 1 丁目	永正 3 年	1506	結晶片岩	福岡市教育委員会 1992
65	麦野日吉神社自然石板碑	福岡市博多区麦野 6 丁目	嘉暦 3 年	1328	花崗岩	多田隈豊秋 1975
66	筑紫女学園自然石板碑	福岡市中央区警固 2 丁目	明応 2 年	1493	玄武岩	福岡市教育委員会 1992
67	飯盛文殊堂貞和 5 年銘自然石板碑	福岡市西区飯盛　文殊前	貞和 5 年	1349	花崗岩	福岡市教育委員会 1992
68	原遺跡 18 次発掘調査出土自然石板碑	福岡県太宰府市三条 1 丁目	正平 23 年	1368	花崗岩	重藤輝行 2008
69	五条 2 丁目自然石板碑	福岡県太宰府市五条 2 丁目	文明 18 年	1486	花崗岩	
70	武蔵寺自然石板碑	福岡県筑紫野市武蔵	貞和 3 年	1347	花崗岩	多田隈豊秋 1975

表 25　筑後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
71	国分寺自然石板碑	福岡県久留米市宮ノ陣町	正平 22 年	1367	不明	多田隈豊秋 1975
72	磐井自然石板碑	福岡県久留米市御井町磐井	応永 11 年	1404	玄武岩	多田隈豊秋 1975
73	白口自然石板碑	福岡県久留米市荒木町白口	応永 11 年	1404	玄武岩	多田隈豊秋 1975

表 26　筑後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
74	長門石八幡宮自然石板碑	福岡県久留米市長門石	寛永 11 年	1634	玄武岩	
75	東延寿寺自然石板碑	福岡県うきは市吉井町福益	嘉元 2 年	1304	水成岩	
76	安富自然石板碑	福岡県うきは市吉井町福益	嘉元 4 年	1306	花崗岩	
77	来迎寺自然石板碑	福岡県みやま市瀬高町上庄	天文 18 年	1549	安山岩	多田隈豊秋 1975
78	下庄二尊寺自然石板碑	福岡県みやま市瀬高町下庄	天文 10 年	1541	安山岩	多田隈豊秋 1975
79	下小川妙光寺自然石板碑	福岡県みやま市下小川	応仁 2 年	1468	安山岩	
80	芳司自然石板碑	福岡県みやま市芳司	大永 5 年	1525	安山岩	多田隈豊秋 1975
81	梅ヶ谷自然石板碑	福岡県みやま市梅ヶ谷	天文 2 年	1533	安山岩	多田隈豊秋 1975
82	叡興寺自然石板碑	福岡県みやま市古僧都山	天文 20 年	1551	凝灰岩	多田隈豊秋 1975
83	覚成寺自然石板碑	福岡県八女市立花町山崎	天文 12 年	1543	安山岩	立花町史編さん委員会 1996
84	開運寺庚申塔自然石板碑	福岡県八女市立花町北山	慶安 5 年	1652	安山岩	立花町史編さん委員会 1996
85	興国塔自然石板碑	福岡県八女市星野村大円寺	興国 3 年	1342	安山岩	星野村史編さん委員会 1997
86	待島自然石板碑	福岡県大木町待島	天文 2 年	1533	安山岩	大木町誌編さん委員会 1993
87	下林自然石板碑	福岡県大川市下林	永正 5 年	1508	安山岩	多田隈豊秋 1975
88	徳益自然石板碑	福岡県柳川市大和町徳益	天正 16 年	1588	安山岩	多田隈豊秋 1975
89	橘藤学園自然石板碑	福岡県柳川市本城町	大永 6 年	1526	安山岩	多田隈豊秋 1975
90	豊原自然石板碑	福岡県柳川市大和町豊原	天正 6 年	1578	安山岩	大和町史編纂実務委員会 2001
91	長命寺自然石板碑	福岡県柳川市出来町	天文 6 年	1537	安山岩	
92	成就寺自然石板碑	福岡県柳川市三橋町百町	大永 8 年	1528	安山岩	多田隈豊秋 1975
93	劫月院自然石板碑	福岡県大牟田市三池町	天正 15 年	1587	安山岩	多田隈豊秋 1975
94	定林寺寛永 19 年銘自然石板碑	福岡県大牟田市今山	寛永 19 年	1642	凝灰岩	多田隈豊秋 1975
95	定林寺正保 4 年銘自然石板碑	福岡県大牟田市今山	正保 4 年	1647	凝灰岩	多田隈豊秋 1975

図 107　筑前・筑後（福岡市を除く）における自然石板碑の分布

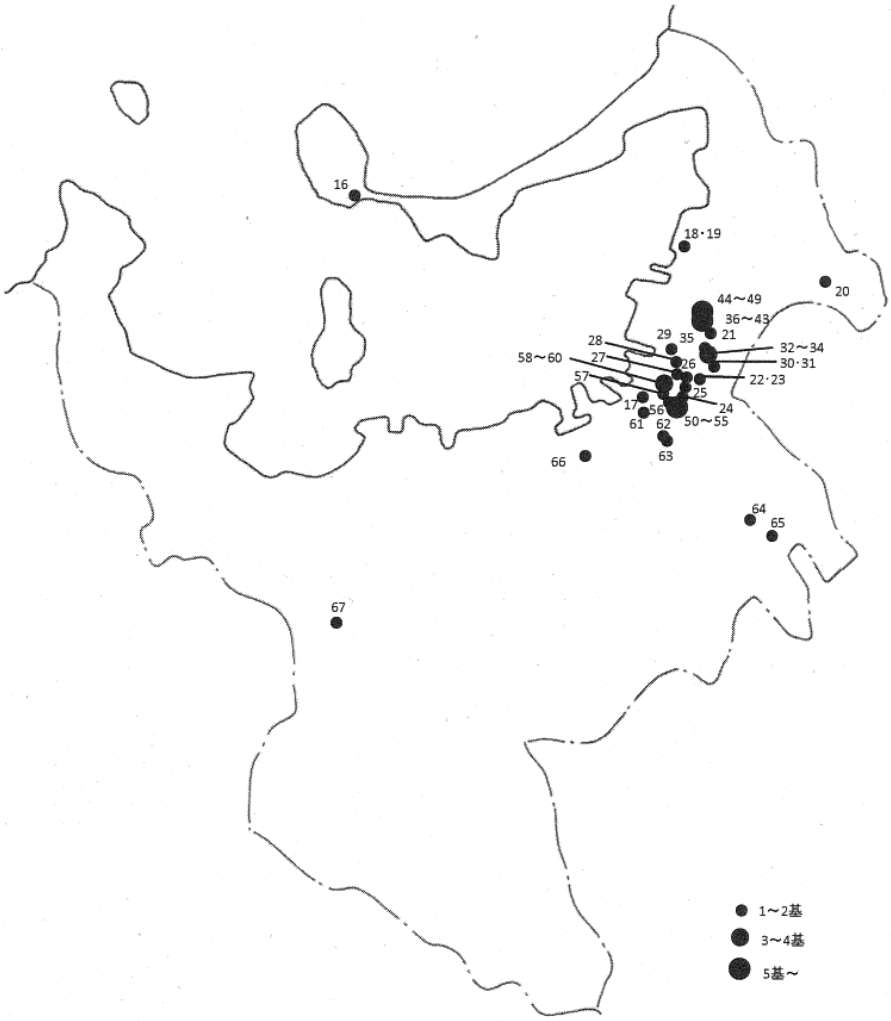


図 108　福岡市における自然石板碑の分布

表 27　肥前における紀年銘をもつ自然石板碑一覧①

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
1	加倉自然石板碑	佐賀県唐津市鎮西町加倉 寺屋敷	寛永 13 年	1636	玄武岩	松岡史 1984
2	菖蒲正保 4 年銘自然石板碑	佐賀県唐津市鎮西町菖蒲 大日堂	正保 4 年	1647	安山岩	松岡史 1984
3	菖蒲慶安 3 年銘自然石板碑	佐賀県唐津市鎮西町菖蒲 大日堂	慶安 3 年	1650	安山岩	松岡史 1984
4	五反田自然石板碑	佐賀県唐津市浜玉町五反田大門	観応 3 年	1352	花崗岩	松岡史 1984
5	中山地蔵自然石板碑	佐賀県唐津市二タ子 中山地蔵堂	文禄 2 年	1593	花崗岩	松岡史 1984
6	法蓮寺自然石板碑	佐賀県唐津市西十人町 法蓮寺	慶長 7 年	1602	安山岩	松岡史 1984
7	大島東町自然石板碑	佐賀県唐津市大島東町	寛永 21 年	1644	玄武岩	松岡史 1984
8	西大島自然石板碑	佐賀県唐津市大島西大島	慶安 2 年	1649	玄武岩	松岡史 1984
9	室園神社自然石板碑	佐賀県唐津市厳木町厳木 室園神社	天正 18 年	1590	砂岩	松岡史 1984
10	天山神社天正 17 年銘自然石板碑	佐賀県唐津市厳木町広瀬 天山神社	天正 17 年	1589	砂岩	松岡史 1984
11	天山神社天正 19 年銘自然石板碑	佐賀県唐津市厳木町広瀬 天山神社	天正 19 年	1591	砂岩	松岡史 1984
12	鶴田神社自然石板碑	佐賀県唐津市厳木町波瀬 鶴田神社	元和元年	1615	砂岩	松岡史 1984
13	波多三河守自然石板碑	佐賀県唐津市肥前町入野 小山	慶長 2 年	1597	砂岩	松岡史 1984
14	中野原自然石板碑	佐賀県伊万里市松浦町中野原上分	元亀 4 年	1573	砂岩	松岡史 1984
15	堂の坂自然石板碑	佐賀県伊万里市木須西堂の坂	天正 7 年	1579	砂岩	松岡史 1984
16	長谷慶長 14 年銘自然石板碑	佐賀県伊万里市立花町長谷 妙顕寺跡	慶長 14 年	1609	砂岩	松岡史 1984
17	長谷寛永 12 年銘自然石板碑	佐賀県伊万里市立花町長谷 妙顕寺跡	寛永 12 年	1635	砂岩	松岡史 1984
18	地北慶長 14 年銘自然石板碑	佐賀県伊万里市大坪町地北 祇園社	慶長 14 年	1609	砂岩	松岡史 1984
19	地北慶長 15 年銘自然石板碑	佐賀県伊万里市大坪町地北 祇園社	慶長 15 年	1610	砂岩	松岡史 1984
20	地北慶長 16 年銘自然石板碑	佐賀県伊万里市大坪町地北 祇園社	慶長 16 年	1611	砂岩	松岡史 1984
21	地北慶長 17 年銘 1 号自然石板碑	佐賀県伊万里市大坪町地北 祇園社	慶長 17 年	1612	砂岩	松岡史 1984
22	地北慶長 17 年銘 2 号自然石板碑	佐賀県伊万里市大坪町地北 祇園社	慶長 17 年	1612	砂岩	松岡史 1984
23	地北慶長 18 年銘 1 号自然石板碑	佐賀県伊万里市大坪町地北 祇園社	慶長 18 年	1613	砂岩	松岡史 1984
24	地北慶長 18 年銘 2 号自然石板碑	佐賀県伊万里市大坪町地北 祇園社	慶長 18 年	1613	砂岩	松岡史 1984
25	地北慶長 19 年銘自然石板碑	佐賀県伊万里市大坪町地北 祇園社	慶長 19 年	1614	砂岩	松岡史 1984
26	伊勢前自然石板碑	佐賀県三養基郡基山町小倉 伊勢前	応永 5 年	1398	安山岩	松岡史 1984
27	大興善寺自然石板碑	佐賀県三養基郡基山町園部	正平 10 年	1355	花崗岩	志佐惲彦 1975

表 28　肥前における紀年銘をもつ自然石板碑一覧②

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
28	干栗自然石板碑	佐賀県みやき町白壁 干栗大師堂	明徳 2 年	1391	玄武岩	
29	中津隈自然石板碑	佐賀県みやき町中津隈	応永 31 年	1424	安山岩	
30	野副貞和 2 年銘 1 号自然石板碑	佐賀県鳥栖市立石町野副	貞和 2 年	1346	花崗岩	
31	野副貞和 2 年銘 2 号自然石板碑	佐賀県鳥栖市立石町野副	貞和 2 年	1346	花崗岩	
32	石塔院自然石板碑	佐賀県吉野ケ里町吉野ケ里 石塔院	慶長 7 年	1602	花崗岩	松岡史 1984
33	法勝寺自然石板碑	佐賀市嘉瀬町嘉瀬津 法勝寺	永正 2 年	1505	安山岩	松岡史 1984
34	円通寺自然石板碑	佐賀県小城市小城町三間寺 円通寺	寛永 2 年	1625	緑泥片岩	松岡史 1984
35	妙見宮自然石板碑	佐賀県小城市小城町北浦	寛永 16 年	1639	砂岩	松岡史 1984
36	友田八幡自然石板碑	佐賀県小城市牛津町天満町 友田八幡社	寛永 7 年	1630	溶岩	松岡史 1984
37	専能寺寛永 9 年銘 1 号自然石板碑	佐賀県多久市多久町東の原 専能寺	寛永 9 年	1632	安山岩	松岡史 1984
38	専能寺寛永 9 年銘 2 号自然石板碑	佐賀県多久市多久町東の原 専能寺	寛永 9 年	1632	安山岩	松岡史 1984
39	勇猛寺自然石板碑	佐賀県武雄市北方町大渡	仁安 3 年	1168	安山岩	山口良吾 1952
40	富吉寛永 12 年銘自然石板碑	佐賀県武雄市北方町大渡 富吉神社	寛永 12 年	1635	安山岩	松岡史 1984
41	富吉寛永 16 年銘自然石板碑	佐賀県武雄市北方町大渡 富吉神社	寛永 16 年	1639	安山岩	松岡史 1984
42	富吉寛永 17 年銘自然石板碑	佐賀県武雄市北方町大渡 富吉神社	寛永 17 年	1640	安山岩	松岡史 1984
43	富吉寛永 21 年銘自然石板碑	佐賀県武雄市北方町大渡 富吉神社	寛永 21 年	1644	安山岩	松岡史 1984
44	朝日川上自然石板碑	佐賀県武雄市朝日町川上	文明 17 年	1485	砂岩	松岡史 1984
45	淀姫神社自然石板碑	佐賀県武雄市朝日町川上 淀姫神社	慶長 14 年	1609	砂岩	松岡史 1984
46	川平自然石板碑	佐賀県武雄市川平	慶安 3 年	1650	花崗岩	松岡史 1984
47	橘自然石板碑	佐賀県武雄市橘町大日北楢崎	応永 21 年	1414	玄武岩	松岡史 1984
48	福母自然石板碑	佐賀県大町町福母中島	応安 6 年	1373	安山岩	志佐惲彦 1975
49	長徳寺自然石板碑	佐賀県大町町大町 長徳寺	慶長 5 年	1600	安山岩	松岡史 1984
50	上総自然石板碑	佐賀県江北町上総	慶長 5 年	1600	安山岩	松岡史 1984
51	禅定寺自然石板碑	佐賀県江北町小田 禅定寺	寛永元年	1624	安山岩	松岡史 1984
52	安福寺天正 10 年銘自然石板碑	佐賀県白石町嘉瀬川 安福寺	天正 10 年	1582	安山岩	松岡史 1984
53	安福寺慶長 18 年銘自然石板碑	佐賀県白石町嘉瀬川 安福寺	慶長 18 年	1613	安山岩	松岡史 1984
54	法泉寺自然石板碑	佐賀県白石町馬洗 法泉寺	寛永 18 年	1641	安山岩	松岡史 1984

表 29　肥前における紀年銘をもつ自然石板碑一覧③

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
55	室島自然石板碑	佐賀県白石町深浦 室島	正保 2 年	1645	安山岩	松岡史 1984
56	若殿分自然石板碑	佐賀県鹿島市若殿分 大師堂	天正 12 年	1584	安山岩	松岡史 1984
57	山浦自然石板碑	佐賀県鹿島市山浦野口 アミダサマ	天正 13 年	1585	安山岩	松岡史 1984
58	山浦甲自然石板碑	佐賀県鹿島市山浦甲	元和元年	1615	安山岩	松岡史 1984
59	真福寺元和 8 年銘自然石板碑	佐賀県鹿島市高津原吹上 真福寺	元和 8 年	1622	安山岩	松岡史 1984
60	真福寺寛永 2 年銘自然石板碑	佐賀県鹿島市高津原吹上 真福寺	寛永 2 年	1625	安山岩	松岡史 1984
61	真福寺寛永 3 年銘自然石板碑	佐賀県鹿島市高津原吹上 真福寺	寛永 3 年	1626	安山岩	松岡史 1984
62	真福寺寛永 4 年銘自然石板碑	佐賀県鹿島市高津原吹上 真福寺	寛永 4 年	1627	安山岩	松岡史 1984
63	大殿分墓地自然石板碑	佐賀県鹿島市大殿分	寛永 5 年	1628	安山岩	松岡史 1984
64	筒口自然石板碑	佐賀県鹿島市筒口	寛永 7 年	1630	安山岩	松岡史 1984
65	下野辺田自然石板碑	佐賀県嬉野市塩田町下野辺田	応永 29 年	1422	砂岩	松岡史 1984
66	道越自然石板碑	佐賀県太良町道越	寛永 16 年	1639	安山岩	松岡史 1984
67	竹崎観音寺自然石板碑	佐賀県太良町竹崎　観音寺	寛永 21 年	1644	安山岩	松岡史 1984
68	西郷自然石板碑	長崎県諫早市西郷町 148	建久元年	1190	砂岩	諫早市役所 1958
69	慶巌寺自然石板碑	長崎県諫早市城見町 15-19	貞和 7 年	1351	砂岩	諫早市役所 1958

図 109　肥前における自然石板碑の分布

表 30　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧①

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
1	原万田東光寺跡自然石板碑	熊本県荒尾市原万田浦田	文明 3 年	1471	凝灰岩	平木菁 2003
2	上屋敷自然石板碑	熊本県荒尾市荒尾上屋敷	延徳 3 年	1491	凝灰岩	平木菁 2003
3	上人原自然石板碑	熊本県荒尾市上井手上人原	元亀元年	1570	凝灰岩	平木菁 2003
4	七社宮前自然石板碑	熊本県長洲町向野	天文 15 年	1546	安山岩	越智春一 1982
5	御腰石自然石板碑	熊本県長洲町腹赤	享禄 2 年	1529	安山岩	越智春一 1982
6	地蔵堂自然石板碑	熊本県長洲町赤崎	天文 15 年	1546	安山岩	越智春一 1982
7	米田熊野座神社自然石板碑	熊本県南関町坂ノ下米田	弘治元年	1555	凝灰岩	
8	津留観音堂自然石板碑	熊本県南関町関下津留	大永 5 年	1525	凝灰岩	多田隈豊秋 1968
9	打越自然石板碑	熊本県南関町久重打越	康永 2 年	1343	凝灰岩	多田隈豊秋 1975
10	鳴石自然石板碑	熊本県南関町上長田坂本	正応 5 年	1292	凝灰岩	多田隈豊秋 1975
11	井出自然石板碑	熊本県南関町上坂下井出	天文 17 年	1548	凝灰岩	
12	池田自然石板碑	熊本県南関町西豊永池田	文明 5 年	1473	凝灰岩	前川清一 1997
13	町屋敷自然石板碑	熊本県南関町関町町屋敷	天文 17 年	1548	凝灰岩	前川清一 1997
14	荻谷自然石板碑	熊本県南関町関東荻谷	天文 17 年	1548	凝灰岩	前川清一 1997
15	内園自然石板碑	熊本県和水町高野内園	大永 7 年	1527	凝灰岩	前川清一 2006
16	石井自然石板碑	熊本県和水町内田石井	天文 3 年	1534	凝灰岩	前川清一 2006
17	東屋敷 1 号自然石板碑	熊本県和水町米渡尾東屋敷	弘治 2 年	1556	安山岩	前川清一 2006
18	東屋敷 2 号自然石板碑	熊本県和水町米渡尾東屋敷	弘治 2 年	1556	安山岩	前川清一 2006
19	清潭寺墓地自然石板碑	熊本県山鹿市菊鹿町上永野	天文 17 年	1548	凝灰岩	前川清一 1996a
20	熊入観音堂自然石板碑	熊本県山鹿市熊入	明応 4 年	1495	凝灰岩	長井魅一郎 1985
21	中村自然石板碑	熊本県山鹿市中村	大永 4 年	1524	凝灰岩	長井魅一郎 1985
22	雲閑寺天文 19 年銘自然石板碑	熊本県山鹿市中村	天文 19 年	1550	凝灰岩	長井魅一郎 1985
23	雲閑寺元亀元年銘自然石板碑	熊本県山鹿市中村	元亀元年	1570	凝灰岩	長井魅一郎 1985
24	雲閑寺天正 3 年銘自然石板碑	熊本県山鹿市中村	天正 3 年	1575	凝灰岩	長井魅一郎 1985
25	蒲生観音堂自然石板碑	熊本県山鹿市蒲生	享禄 4 年	1531	凝灰岩	長井魅一郎 1985
26	日置如来堂自然石板碑	熊本県山鹿市方保田日置	天文 17 年	1548	凝灰岩	長井魅一郎 1985
27	津留永禄 2 年銘自然石板碑	熊本県山鹿市津留下宮	永禄 2 年	1559	凝灰岩	長井魅一郎 1985

表 31　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧②

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
28	津留永禄 13 年銘自然石板碑	熊本県山鹿市津留下宮	永禄 13 年	1570	凝灰岩	長井魅一郎 1985
29	六郎丸自然石板碑	熊本県山鹿市小群六郎丸	永禄 4 年	1561	凝灰岩	長井魅一郎 1985
30	今寺観音堂自然石板碑	熊本県山鹿市今寺	永禄 5 年	1562	凝灰岩	長井魅一郎 1985
31	柔遠観音堂自然石板碑	熊本県山鹿市広町	元亀 3 年	1572	凝灰岩	長井魅一郎 1985
32	光専寺自然石板碑	熊本県山鹿市下町	元亀 3 年	1572	凝灰岩	長井魅一郎 1985
33	大宮神社自然石板碑	熊本県山鹿市山鹿	天正 4 年	1576	凝灰岩	長井魅一郎 1985
34	金剛乗寺天正 20 年銘自然石板碑	熊本県山鹿市小坂	天正 20 年	1592	凝灰岩	長井魅一郎 1985
35	金剛乗寺慶長 2 年銘自然石板碑	熊本県山鹿市小坂	慶長 2 年	1597	凝灰岩	長井魅一郎 1985
36	金剛乗寺慶長 16 年銘自然石板碑	熊本県山鹿市小坂	慶長 16 年	1611	凝灰岩	長井魅一郎 1985
37	金剛乗寺元和 7 年銘自然石板碑	熊本県山鹿市小坂	元和 7 年	1621	凝灰岩	長井魅一郎 1985
38	祥安寺自然石板碑	熊本県菊池市重味生味	天正 9 年	1581	安山岩	中尾康幸 1982
39	ミツル山自然石板碑	熊本県菊池市出田	永正 15 年	1518	安山岩	中尾康幸 1982
40	天福寺跡自然石板碑	熊本県菊池市旭志伊萩	天正 2 年	1574	安山岩	旭志村史編纂委員会 1993
41	姫井自然石板碑	熊本県菊池市旭志姫井	天正 7 年	1579	安山岩	旭志村史編纂委員会 1993
42	古閑墓自然石板碑	熊本県菊池市旭志弁利	弘治 4 年	1558	安山岩	旭志村史編纂委員会 1993
43	日吉神社自然石板碑	熊本県菊池市泗水町住吉	大永 5 年	1525	安山岩	吉田正一 2001
44	宣頓寺跡 1 号自然石板碑	熊本県菊池市泗水町住吉	元亀 3 年	1572	安山岩	吉田正一 2001
45	宣頓寺跡 2 号自然石板碑	熊本県菊池市泗水町住吉	慶長 14 年	1609	安山岩	吉田正一 2001
46	北小路自然石板碑	熊本県菊池市泗水町住吉	天正 6 年	1578	安山岩	吉田正一 2001
47	光明寺跡 1 号自然石板碑	熊本県菊池市泗水町住吉	享禄 5 年	1532	安山岩	吉田正一 2001
48	光明寺跡 2 号自然石板碑	熊本県菊池市泗水町住吉	弘治 3 年	1557	安山岩	吉田正一 2001
49	流鏑馬堂自然石板碑	熊本県菊池市泗水町住吉	文明 4 年	1472	安山岩	吉田正一 2001
50	天応寺自然石板碑	熊本県菊池市泗水町住吉	天文 11 年	1542	安山岩	吉田正一 2001
51	虚空蔵菩薩堂自然石板碑	熊本県菊池市泗水町住吉	天文 16 年	1547	安山岩	吉田正一 2001
52	天徳寺跡 1 号自然石板碑	熊本県菊池市泗水町田島	文禄 3 年	1594	安山岩	吉田正一 2001
53	天徳寺跡 2 号自然石板碑	熊本県菊池市泗水町田島	文禄 3 年	1594	安山岩	吉田正一 2001
54	陣塚自然石板碑	熊本県菊池市泗水町田島	大永 6 年	1526	安山岩	吉田正一 2001

表 32　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧③

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
55	東原自然石板碑	熊本県菊池市泗水町永東原	享禄 4 年	1531	安山岩	吉田正一 2001
56	福本自然石板碑	熊本県菊池市泗水町福本	大永 6 年	1526	安山岩	吉田正一 2001
57	千光寺自然石板碑	熊本県南小国町赤馬場	天養元年	1144	－	多田隈豊秋 1975
58	下田自然石板碑	熊本県南阿蘇村河陽下田	天文 3 年	1534	安山岩	前川清一 2004
59	経塚 1 号自然石板碑	熊本県南阿蘇村長野	文禄 3 年	1594	安山岩	前川清一 2004
60	経塚 2 号自然石板碑	熊本県南阿蘇村長野	文禄 3 年	1594	安山岩	前川清一 2004
61	経塚 3 号自然石板碑	熊本県南阿蘇村長野	文禄 3 年	1594	安山岩	前川清一 2004
62	真木向村摩利支天堂 1 号自然石板碑	熊本県大津町真木向村	大永 7 年	1527	安山岩	前川清一 1988
63	真木向村摩利支天堂 2 号自然石板碑	熊本県大津町真木向村	天正 3 年	1575	安山岩	前川清一 1988
64	御願所自然石板碑	熊本県大津町矢護川御願所	天正 3 年	1575	安山岩	前川清一 1988
65	御願所中野 1 号自然石板碑	熊本県大津町矢護川御願所	大永 6 年	1526	安山岩	前川清一 1988
66	御願所中野 2 号自然石板碑	熊本県大津町矢護川御願所	天正 14 年	1586	安山岩	前川清一 1988
67	御願所西鶴 1 号自然石板碑	熊本県大津町矢護川御願所	文禄 2 年	1593	安山岩	前川清一 1988
68	御願所西鶴 2 号自然石板碑	熊本県大津町矢護川御願所	慶長 6 年	1601	安山岩	前川清一 1988
69	無動寺跡自然石板碑	熊本県大津町矢護川	大永 2 年	1522	安山岩	前川清一 1988
70	丸内自然石板碑	熊本県合志市野々島丸内	大永 3 年	1523	安山岩	前川清一 1994
71	福生丸自然石板碑	熊本県合志市野々島福生丸	大永 3 年	1523	安山岩	前川清一 1994
72	八通丸自然石板碑	熊本県合志市野々島八通丸	大永 8 年	1528	安山岩	前川清一 1994
73	花園享禄 3 年銘自然石板碑	熊本県合志市野々島花園	享禄 3 年	1530	安山岩	前川清一 1994
74	花園天文 13 年銘自然石板碑	熊本県合志市野々島花園	天文 13 年	1544	安山岩	前川清一 1994
75	芝原自然石板碑	熊本県合志市野々島芝原	天文 12 年	1543	安山岩	前川清一 1994
76	前畑自然石板碑	熊本県合志市野々島前畑	天正 7 年	1579	安山岩	前川清一 1994
77	外園天文 18 年銘自然石板碑	熊本県合志市野々島外園	天文 18 年	1549	安山岩	前川清一 1994
78	外園永禄 9 年銘自然石板碑	熊本県合志市野々島外園	永禄 9 年	1566	安山岩	前川清一 1994
79	枉松自然石板碑	熊本県合志市須屋枉松	大永 8 年	1528	安山岩	前川清一 1994
80	積雪自然石板碑	熊本県合志市上生積雪	天文 9 年	1540	安山岩	前川清一 1994
81	ガランサン自然石板碑	熊本県玉東町稲佐馬場	康永 2 年	1343	凝灰岩	前川清一 1996b

表 33　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧④

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
82	西安寺寺山山中天文 17 年銘自然石板碑	熊本県玉東町西安寺寺山	天文 17 年	1548	－	前川清一 1996b
83	西安寺寺山山中天正 18 年銘自然石板碑	熊本県玉東町西安寺寺山	天正 18 年	1590	－	前川清一 1996b
84	西安寺跡享禄 4 年銘自然石板碑	熊本県玉東町西安寺	享禄 4 年	1531	－	前川清一 1996b
85	西安寺跡享禄 5 年銘自然石板碑	熊本県玉東町西安寺	享禄 5 年	1532	－	前川清一 1996b
86	西安寺跡天文 3 年銘 1 号自然石板碑	熊本県玉東町西安寺	天文 3 年	1534	－	前川清一 1996b
87	西安寺跡天文 3 年銘 2 号自然石板碑	熊本県玉東町西安寺	天文 3 年	1534	安山岩	前川清一 1996b
88	西安寺跡天文 5 年銘自然石板碑	熊本県玉東町西安寺	天文 5 年	1536	凝灰岩	前川清一 1996b
89	西安寺跡天文 18 年銘自然石板碑	熊本県玉東町西安寺	天文 18 年	1549	安山岩	
90	西安寺跡永禄 4 年銘自然石板碑	熊本県玉東町西安寺	永禄 4 年	1561	凝灰岩	前川清一 1996b
91	西安寺跡文禄元年銘自然石板碑	熊本県玉東町西安寺	文禄元年	1592	安山岩	
92	大城寺自然石板碑	熊本県玉東町上木葉	文明 17 年	1485	－	前川清一 1996b
93	稲佐寺山自然石板碑	熊本県玉東町稲佐寺山	享禄 4 年	1561	－	前川清一 1996b
94	二俣本村永禄 7 年銘自然石板碑	熊本県玉東町二俣本村	永禄 7 年	1564	－	前川清一 1996b
95	二俣本村天正 3 年銘自然石板碑	熊本県玉東町二俣本村	天正 3 年	1575	－	前川清一 1996b
96	繁根木稲荷社自然石板碑	熊本県玉名市繁根木	永禄 11 年	1568	安山岩	
97	野田地蔵堂自然石板碑	熊本県玉名市岱明町古閑野田	天文 16 年	1547	－	川原巧 2005
98	古閑自然石板碑	熊本県玉名市岱明町山下古閑	天文 24 年	1555	－	川原巧 2005
99	竹崎天文 17 年銘自然石板碑	熊本県玉名市天水町竹崎	天文 17 年	1548	安山岩	
100	竹崎元亀 3 年銘自然石板碑	熊本県玉名市天水町竹崎	元亀 3 年	1572	安山岩	
101	富ノ尾自然石板碑	熊本県玉名市富ノ尾	天文 16 年	1547	安山岩	
102	高瀬願行寺文禄元年銘自然石板碑	熊本県玉名市高瀬 335	文禄元年	1592	安山岩	
103	高瀬願行寺天正 2 年銘自然石板碑	熊本県玉名市高瀬 335	天正 2 年	1574	安山岩	
104	宝成就寺跡弘治 2 年銘自然石板碑	熊本県玉名市高瀬	弘治 2 年	1556	安山岩	玉名市文化財保護委員会 1971
105	宝成就寺跡永禄 12 年銘自然石板碑	熊本県玉名市高瀬	永禄 12 年	1569	安山岩	玉名市文化財保護委員会 1971
106	河内町野出旧在自然石板碑	熊本県玉名市伊倉　来光寺	天正 13 年	1585	－	前川清一 1991
107	栗木平自然石板碑	熊本市北区植木町豊岡栗木平	天正 13 年	1585	安山岩	佐藤誠 1989
108	豊岡本村自然石板碑	熊本市北区植木町豊岡本村	大永 7 年	1527	－	原口長之・古財誠也 1981

表 34　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧⑤

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
109	天神社自然石板碑	熊本市北区植木町小畑　天神社	永禄 3 年	1560	－	原口長之・古財誠也 1981
110	本村観音堂自然石板碑	熊本市北区植木町内村本村	永正 13 年	1516	安山岩	
111	大塚享禄 4 年銘自然石板碑	熊本市北区植木町大塚	享禄 4 年	1531	－	原口長之・古財誠也 1981
112	大塚天正 3 年銘自然石板碑	熊本市北区植木町大塚	天正 3 年	1575	－	原口長之・古財誠也 1981
113	山城自然石板碑	熊本市北区植木町山城	永正 14 年	1517	－	原口長之・古財誠也 1981
114	伊知坊自然石板碑	熊本市北区植木町伊知坊	永禄 6 年	1563	－	原口長之・古財誠也 1981
115	辻自然石板碑	熊本市北区植木町余内辻	永禄 12 年	1569	安山岩	原口長之・古財誠也 1981
116	豊田自然石板碑	熊本市北区植木町豊田	永正 13 年	1516	－	原口長之・古財誠也 1981
117	後田自然石板碑	熊本市北区植木町豊田後田	永正 11 年	1514	安山岩	原口長之・古財誠也 1981
118	古閑自然石板碑	熊本市北区植木町古閑	天文 3 年	1534	－	原口長之・古財誠也 1981
119	西山自然石板碑	熊本市北区植木町富応西山	天正 2 年	1574	－	原口長之・古財誠也 1981
120	石仏自然石板碑	熊本市北区植木町舞尾	文明 9 年	1477	凝灰岩	原口長之・古財誠也 1981
121	舞尾自然石板碑	熊本市北区植木町舞尾	大永 3 年	1523	凝灰岩	原口長之・古財誠也 1981
122	あきまる自然石板碑	熊本市北区植木町舞尾	大永 2 年	1522	凝灰岩	原口長之・古財誠也 1981
123	楡の木自然石板碑	熊本市北区植木町内目	大永 2 年	1522	凝灰岩	原口長之・古財誠也 1981
124	東屋敷阿弥陀堂自然石板碑	熊本市北区植木町滴水東屋敷	享禄 3 年 天文 2 年	1530 1533	安山岩	
125	西屋敷自然石板碑	熊本市北区植木町滴水	元亀 4 年	1573	－	原口長之・古財誠也 1981
126	上古閑自然石板碑	熊本市北区植木町上古閑	天正 6 年	1578	－	原口長之・古財誠也 1981
127	木留本村自然石板碑	熊本市北区植木町木留本村	永禄 10 年	1567	凝灰岩	原口長之・古財誠也 1981
128	萩尾自然石板碑	熊本市北区植木町萩尾	大永 4 年	1524	－	原口長之・古財誠也 1981
129	鐙田薬師堂弘治 3 年銘自然石板碑	熊本市北区植木町鐙田	弘治 3 年	1557	－	原口長之・古財誠也 1981
130	鐙田薬師堂弘治 4 年銘自然石板碑	熊本市北区植木町鐙田	弘治 4 年	1558	－	原口長之・古財誠也 1981
131	鐙田薬師堂永禄 9 年銘自然石板碑	熊本市北区植木町鐙田	永禄 9 年	1566	－	原口長之・古財誠也 1981
132	鐙田薬師堂永禄 12 年銘自然石板碑	熊本市北区植木町鐙田	永禄 12 年	1569	－	原口長之・古財誠也 1981
133	北の前自然石板碑	熊本市北区植木町鐙田北の前	大永 5 年	1525	－	原口長之・古財誠也 1981

表 35　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧⑥

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
134	石川天文 7 年銘自然石板碑	熊本市北区植木町石川	天文 7 年	1538	安山岩	原口長之・古財誠也 1981
135	石川天文 11 年銘自然石板碑	熊本市北区植木町石川	天文 11 年	1542	石灰岩	原口長之・古財誠也 1981
136	石川天文 18 年銘自然石板碑	熊本市北区植木町石川	天文 18 年	1549	安山岩	原口長之・古財誠也 1981
137	上屋敷観音堂永正 14 年銘自然石板碑	熊本市北区立福寺町	永正 14 年	1517	安山岩	北部町 1979
138	上屋敷観音堂天文 2 年銘自然石板碑	熊本市北区立福寺町	天文 2 年	1533	安山岩	北部町 1979
139	上屋敷観音堂弘治 2 年銘自然石板碑	熊本市北区立福寺町	弘治 2 年	1556	安山岩	北部町 1979
140	万楽寺自然石板碑	熊本市北区万楽寺町瀬戸道	天文 7 年	1538	安山岩	北部町 1979
141	川東屋敷自然石板碑	熊本市北区和泉町川東	大永 4 年	1524	安山岩	北部町 1979
142	三宝塚自然石板碑	熊本市北区和泉町川東	大永 3 年	1523	安山岩	北部町 1979
143	中尾薬師堂自然石板碑	熊本市北区和泉町桑鶴	天文 4 年	1535	安山岩	北部町 1979
144	古閑公民館自然石板碑	熊本市北区貢町古閑	天文 4 年	1535	安山岩	北部町 1979
145	五丁中原阿弥陀堂大永 8 年銘自然石板碑	熊本市北区貢町五丁中原	大永 8 年	1528	安山岩	北部町 1979
146	五丁中原阿弥陀堂享禄 4 年銘自然石板碑	熊本市北区貢町五丁中原	享禄 4 年	1531	安山岩	北部町 1979
147	五丁中原阿弥陀堂天文 4 年銘自然石板碑	熊本市北区貢町五丁中原	天文 4 年	1535	安山岩	北部町 1979
148	高笠観音堂自然石板碑	熊本市北区清水町大窪高笠 946	享禄 4 年	1531	安山岩	熊本市教育委員会 1971
149	山室地蔵堂自然石板碑	熊本市北区清水町山室西屋敷	大永 3 年	1523	安山岩	熊本市教育委員会 1971
150	須屋園観音堂自然石板碑	熊本市北区清水町須屋園屋敷	享禄 4 年	1531	安山岩	熊本市 1993
151	野口阿弥陀堂自然石板碑	熊本市北区釜尾町野口	享禄 2 年	1529	安山岩	北部町 1979
152	ネコン塔自然石板碑	熊本市北区釜尾町立岩平	大永 2 年	1522	安山岩	熊本市教育委員会 1969
153	半田天神大永 5 年銘自然石板碑	熊本市北区四方寄町宮ノ跡	大永 5 年	1525	安山岩	北部町 1979
154	半田天神大永 6 年銘自然石板碑	熊本市北区四方寄町宮ノ跡	大永 6 年	1526	安山岩	北部町 1979
155	正福寺跡自然石板碑	熊本市北区上沖	天文 6 年	1537	安山岩	熊本市 1993
156	亀井薬師堂自然石板碑	熊本市北区清水亀井町	天文 2 年	1533	安山岩	熊本市 1993
157	鶴羽田町阿弥陀堂自然石板碑	熊本市北区鶴羽田町	大永 6 年	1526	安山岩	北部町 1979
158	須屋園観音堂自然石板碑	熊本市北区八景水谷 1 丁目	享禄 4 年	1531	安山岩	熊本市教育委員会 1971
159	国分寺永正 14 年銘自然石板碑	熊本市中央区出水 1 丁目今 571	永正 14 年	1517	安山岩	熊本市教育委員会 1975
160	国分寺天文 6 年銘自然石板碑	熊本市中央区出水 1 丁目今 571	天文 6 年	1537	安山岩	熊本市教育委員会 1975

表 36　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧⑦

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
161	国分寺天文 22 年銘自然石板碑	熊本市中央区出水 1 丁目今 571	天文 22 年	1553	安山岩	熊本市教育委員会 1975
162	静安寺長禄 4 年銘自然石板碑	熊本市中央区本荘 5 丁目 9-19	長禄 4 年	1460	安山岩	熊本市教育委員会 1980
163	静安寺享禄 2 年銘自然石板碑	熊本市中央区本荘 5 丁目 9-19	享禄 2 年	1529	安山岩	熊本市教育委員会 1980
164	静安寺天文 16 年銘自然石板碑	熊本市中央区本荘 5 丁目 9-19	天文 16 年	1547	安山岩	熊本市教育委員会 1980
165	正福寺自然石板碑	熊本市中央区坪井 2 丁目 1-12	大永 7 年	1527	安山岩	熊本市教育委員会 1980
166	長安寺跡自然石板碑	熊本市中央区水道町 2 手取神社	永正 16 年	1519	安山岩	熊本市教育委員会 1980
167	西福寺明応 8 年銘自然石板碑	熊本市中央区小沢町 152	明応 8 年	1499	安山岩	熊本市教育委員会 1980
168	西福寺享禄 2 年銘自然石板碑	熊本市中央区小沢町 152	享禄 2 年	1529	安山岩	熊本市教育委員会 1980
169	阿弥陀寺享禄元年銘自然石板碑	熊本市中央区細工町 3 丁目 34	享禄元年	1528	安山岩	熊本市教育委員会 1980
170	阿弥陀寺享禄 4 年銘自然石板碑	熊本市中央区細工町 3 丁目 34	享禄 4 年	1531	安山岩	熊本市教育委員会 1980
171	熊本城午砲台大永 4 年銘自然石板碑	熊本市中央区熊本城	大永 4 年	1524	凝灰岩	熊本市教育委員会 1971
172	熊本城本丸天文 5 年銘自然石板碑	熊本市中央区熊本城	天文 5 年	1536	凝灰岩	熊本市教育委員会 1971
173	熊本城地蔵門大永 2 年銘自然石板碑	熊本市中央区熊本城	大永 2 年	1522	安山岩	熊本市教育委員会 1971
174	熊本城地蔵門天文 8 年銘自然石板碑	熊本市中央区熊本城	天文 8 年	1539	安山岩	熊本市教育委員会 1971
175	熊本城地蔵門天文 15 年銘 1 号自然石板碑	熊本市中央区熊本城	天文 15 年	1546	安山岩	熊本市教育委員会 1971
176	熊本城地蔵門天文 15 年銘 2 号自然石板碑	熊本市中央区熊本城	天文 15 年	1546	安山岩	熊本市教育委員会 1971
177	熊本城地蔵門弘治 2 年銘自然石板碑	熊本市中央区熊本城	弘治 2 年	1556	安山岩	熊本市教育委員会 1971
178	熊本城地蔵門天正 9 年銘自然石板碑	熊本市中央区熊本城	天正 9 年	1581	安山岩	熊本市教育委員会 1971
179	白山神社自然石板碑	熊本市中央区国府 4 丁目	大永 4 年	1524	安山岩	熊本市 1993
180	専念寺自然石板碑	熊本市中央区京町 1 丁目	享禄 4 年	1531	安山岩	熊本市 1993
181	上南部自然石板碑	熊本市東区上南部町乙姫神社前	元亀 2 年	1571	凝灰岩	熊本市教育委員会 1973
182	二岡中学校自然石板碑	熊本市東区戸島町北向	天正 8 年	1580	安山岩	熊本市教育委員会 1973
183	梅谷寺自然石板碑	熊本市東区小山町	弘治 4 年	1558	安山岩	熊本市 1993
184	健軍町仁王堂自然石板碑	熊本市東区健軍本町	大永 2 年	1522	安山岩	熊本市 1993
185	大多尾自然石板碑	熊本市西区河内町大多尾 2051-1	永正 6 年	1509	安山岩	前川清一 1991
186	内田家墓地天文 15 年銘自然石板碑	熊本市西区河内町大多尾	天文 15 年	1546	安山岩	河内町 1991
187	内田家墓地天文 18 年銘自然石板碑	熊本市西区河内町大多尾	天文 18 年	1549	安山岩	河内町 1991

表 37　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧⑧

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
188	岳麓寺跡大永 5 年銘自然石板碑	熊本市西区河内町岳	大永 5 年	1525	安山岩	前川清一 1991
189	岳麓寺跡永禄 9 年銘自然石板碑	熊本市西区河内町岳	永禄 9 年	1566	安山岩	
190	亀ノ甲永禄 9 年銘自然石板碑	熊本市西区河内町岳亀ノ甲	永禄 9 年	1566	安山岩	前川清一 1991
191	亀ノ甲天正 2 年銘自然石板碑	熊本市西区河内町岳亀ノ甲	天正 2 年	1574	安山岩	前川清一 1991
192	亀ノ甲永禄 11 年銘自然石板碑	熊本市西区河内町岳亀ノ甲	永禄 11 年	1568	安山岩	前川清一 1991
193	野出西上自然石板碑	熊本市西区河内町野出西上	永禄 2 年	1559	安山岩	前川清一 1991
194	出羽墓地阿弥陀堂裏自然石板碑	熊本市西区河内町出羽	永禄 4 年	1561	安山岩	前川清一 1991
195	増福寺跡天文 16 年銘自然石板碑	熊本市西区河内町東門寺西	天文 16 年	1547	安山岩	前川清一 1991
196	増福寺跡天正 3 年銘自然石板碑	熊本市西区河内町東門寺西	天正 3 年	1575	安山岩	前川清一 1991
197	増福寺跡慶長 7 年銘自然石板碑	熊本市西区河内町東門寺西	慶長 7 年	1602	安山岩	前川清一 1991
198	轟水自然石板碑	熊本市西区河内町轟水	元亀 2 年	1571	安山岩	河内町 1991
199	上代自然石板碑	熊本市西区城山上代町 968	大永 4 年	1524	安山岩	熊本市教育委員会 1969
200	摂取院跡自然石板碑	熊本市西区城山大塘町 1163	天文 9 年	1540	安山岩	熊本市教育委員会 1969
201	奥村方永正 14 年銘自然石板碑	熊本市西区城山薬師町 713	永正 14 年	1517	安山岩	熊本市教育委員会 1982
202	奥村方大永 2 年銘自然石板碑	熊本市西区城山薬師町 713	大永 2 年	1522	安山岩	熊本市教育委員会 1982
203	奥村方天文 2 年銘自然石板碑	熊本市西区城山薬師町 713	天文 2 年	1533	安山岩	熊本市教育委員会 1982
204	奥村方天文 15 年銘自然石板碑	熊本市西区城山薬師町 713	天文 15 年	1546	安山岩	熊本市教育委員会 1982
205	奥村方天文 17 年銘自然石板碑	熊本市西区城山薬師町 713	天文 17 年	1548	安山岩	熊本市教育委員会 1982
206	奥村方元亀 2 年銘自然石板碑	熊本市西区城山薬師町 713	元亀 2 年	1571	安山岩	熊本市教育委員会 1982
207	小島上町上野方天文 4 年年銘自然石板碑	熊本市西区小島上町小路 1619	天文 4 年	1535	安山岩	熊本市教育委員会 1978
208	小島上町上野方永禄 10 年年銘自然石板碑	熊本市西区小島上町小路 1619	永禄 10 年	1567	安山岩	熊本市教育委員会 1978
209	薬師堂自然石板碑	熊本市西区小島上町	大永 5 年	1525	安山岩	熊本市 1993
210	本妙寺自然石板碑	熊本市西区花園 4 丁目	天正 11 年	1583	安山岩	青木勝士ほか 1996
211	成道寺文正元年銘自然石板碑	熊本市西区花園 7 丁目柿原	文正元年	1466	安山岩	熊本市教育委員会 1969
212	成道寺大永 6 年銘自然石板碑	熊本市西区花園 7 丁目柿原	大永 6 年	1526	安山岩	熊本市教育委員会 1969
213	成道寺享禄 3 年銘自然石板碑	熊本市西区花園 7 丁目柿原	享禄 3 年	1530	安山岩	熊本市教育委員会 1969
214	成道寺天文 7 年銘自然石板碑	熊本市西区花園 7 丁目柿原	天文 7 年	1538	安山岩	熊本市教育委員会 1969

表 38　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧⑨

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
215	成道寺元亀元年銘自然石板碑	熊本市西区花園 7 丁目柿原	元亀元年	1570	安山岩	熊本市教育委員会 1969
216	成道寺天正 17 年銘自然石板碑	熊本市西区花園 7 丁目柿原	天正 17 年	1589	安山岩	熊本市教育委員会 1969
217	シブラ墓地天文 19 年銘自然石板碑	熊本市西区花園 7 丁目柿原	天文 19 年	1550	安山岩	熊本市教育委員会 1969
218	シブラ墓地大永 4 年銘自然石板碑	熊本市西区花園 7 丁目柿原	大永 4 年	1524	安山岩	熊本市教育委員会 1969
219	柿原自然石板碑	熊本市西区花園 7 丁目柿原	享禄 3 年	1530	安山岩	熊本市教育委員会 1969
220	池亀神社大永 6 年銘自然石板碑	熊本市西区池亀町	大永 6 年	1526	安山岩	熊本市教育委員会 1969
221	池亀神社天文 9 年銘自然石板碑	熊本市西区池亀町	天文 9 年	1540	安山岩	熊本市教育委員会 1969
222	仁王堂自然石板碑	熊本市西区池上町仁王堂 1428	永正 11 年	1514	安山岩	熊本市教育委員会 1969
223	金光寺跡自然石板碑	熊本市西区池上町綿打 1903	永禄 10 年	1567	安山岩	熊本市教育委員会 1969
224	穴薬師自然石板碑	熊本市西区高橋町高野辺洞仏	享禄 3 年	1530	安山岩	熊本市教育委員会 1969
225	荒尾地蔵堂自然石板碑	熊本市西区島崎 7 丁目荒尾	大永 4 年	1524	安山岩	熊本市 1993
226	中郡自然石板碑	熊本市南区城南町坂本中郡	弘治 3 年	1557	砂岩	松本雅明編 1965
227	東山畑自然石板碑	熊本市南区城南町坂本東山畑	永禄 6 年	1563	凝灰岩	松本雅明編 1965
228	西天神原墓地自然石板碑	熊本市南区城南町平野	享禄 2 年	1529	砂岩	松本雅明編 1965
229	赤見観音堂自然石板碑	熊本市南区城南町赤見	大永 5 年	1525	砂岩	松本雅明編 1965
230	山の上自然石板碑	熊本市南区城南町宮地山の上	天文 18 年	1549	砂岩	松本雅明編 1965
231	下宮地自然石板碑	熊本市南区城南町下宮地	永正元年	1504	砂岩	松本雅明編 1965
232	雲晴寺墓地自然石板碑	熊本市南区城南町隈庄	大永 7 年	1527	砂岩	松本雅明編 1965
233	東阿高自然石板碑	熊本市南区城南町東阿高	大永 8 年	1528	砂岩	松本雅明編 1965
234	古閑自然石板碑	熊本市南区城南町藤山古閑	天文 2 年	1533	砂岩	松本雅明編 1965
235	陳内自然石板碑	熊本市南区城南町陳内	弘治 3 年	1557	砂岩	松本雅明編 1965
236	舞ノ原自然石板碑	熊本市南区城南町陳内舞ノ原	大永 5 年	1525	砂岩	松本雅明編 1965
237	湯上自然石板碑	熊本市南区城南町鰐瀬湯上	永禄 6 年	1563	砂岩	松本雅明編 1965
238	西亀島自然石板碑	熊本市南区城南町鰐瀬西亀島	天文 16 年	1547	砂岩	松本雅明編 1965
239	土鹿野永禄 11 年銘自然石板碑	熊本市南区城南町土鹿野	永禄 11 年	1568	砂岩	松本雅明編 1965
240	土鹿野永正 7 年銘自然石板碑	熊本市南区城南町土鹿野	永正 7 年	1510	砂岩	松本雅明編 1965
241	古閑天文 19 年銘自然石板碑	熊本市南区富合町古閑	天文 19 年	1550	安山岩	—

表 39　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧⑩

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
242	古閑天文 20 年銘自然石板碑	熊本市南区富合町古閑	天文 20 年	1551	安山岩	—
243	光明寺墓地自然石板碑	熊本市南区富合町志々水	天文 23 年	1554	安山岩	佐藤誠 1989
244	志々水光明寺永禄 2 年銘自然石板碑	熊本市南区富合町志々水	永禄 2 年	1559	安山岩	—
245	志々水光明寺永禄 5 年銘自然石板碑	熊本市南区富合町志々水	永禄 5 年	1562	安山岩	—
246	木部地蔵堂自然石板碑	熊本市南区御幸木部町	天文 2 年	1533	安山岩	熊本市教育委員会 1975
247	上屋敷自然石板碑	熊本市南区護藤町上屋敷	天正 5 年	1577	安山岩	熊本市 1993
248	下護藤自然石板碑	熊本市南区護藤町下護藤	天正 6 年	1578	安山岩	熊本市 1993
249	中内田観音堂自然石板碑	熊本市南区内田町中内田観音堂	大永 5 年	1525	安山岩	熊本市 1993
250	妙行寺自然石板碑	熊本市南区内田町 1848	享禄 4 年	1532	安山岩	熊本市 1993
251	双つ堂自然石板碑	熊本市南区内田町上内田	永正 14 年	1517	安山岩	熊本市 1993
252	善福寺跡永正 15 年銘自然石板碑	熊本市南区銭塘町本田善福寺跡	永正 15 年	1518	安山岩	熊本市 1993
253	善福寺跡大永 4 年銘自然石板碑	熊本市南区銭塘町本田善福寺跡	大永 4 年	1524	安山岩	熊本市 1993
254	善福寺跡大永 8 年銘自然石板碑	熊本市南区銭塘町本田善福寺跡	大永 8 年	1528	安山岩	熊本市 1993
255	奥古閑自然石板碑	熊本市南区奥古閑町上掛	大永 4 年	1524	安山岩	熊本市 1993
256	南高江阿弥陀堂自然石板碑	熊本市南区南高江町 535	天文 2 年	1533	安山岩	熊本市 1993
257	光明寺跡自然石板碑	熊本市南区田迎町出仲間神社	天文 15 年	1546	安山岩	熊本市 1993
258	御材木方地蔵堂自然石板碑	熊本市南区川尻町御材木方	享禄 5 年	1532	安山岩	熊本市 1993
259	高徳庵跡地蔵堂自然石板碑	熊本市南区高江町	天文 19 年	1550	安山岩	熊本市 1993
260	門出自然石板碑	熊本県西原村河原門出	永正 6 年	1509	凝灰岩	小谷桂太郎 2010
261	門出公民館自然石板碑	熊本県西原村河原門出	天文 13 年	1544	凝灰岩	小谷桂太郎 2010
262	東光寺跡自然石板碑	熊本県山都町高辻　東光寺跡	大永 7 年	1527	凝灰岩	前川清一 1996 c
263	滝下観音自然石板碑	熊本県山都町今滝下　滝下観音	永正 6 年	1509	凝灰岩	前川清一 1996 c
264	今村自然石板碑	熊本県山都町今	永正 3 年	1506	凝灰岩	前川清一 1996 c
265	竿渡自然石板碑	熊本県山都町滝上竿渡	天文 14 年	1545	凝灰岩	前川清一 1996 c
266	極楽寺跡自然石板碑	熊本県山都町栃原	天文 2 年	1533	凝灰岩	前川清一 2009
267	栃原自然石板碑	熊本県山都町栃原	永禄 11 年	1568	凝灰岩	前川清一 2009
268	交鶴自然石板碑	熊本県山都町交鶴	天文 19 年	1550	凝灰岩	前川清一 2009

表 40　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧⑪

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
269	仮屋自然石板碑	熊本県山都町仮屋	天正 13 年	1585	凝灰岩	前川清一 2009
270	小中竹薬師堂自然石板碑	熊本県山都町小中竹	天文 11 年	1542	凝灰岩	前川清一 2009
271	早楢自然石板碑	熊本県山都町高辻早楢	大永 7 年	1527	凝灰岩	佐藤誠 1989
272	横野延文 3 年銘自然石板碑	熊本県御船町滝尾横野	延文 3 年	1358	凝灰岩	多田隈豊秋 1975
273	横野延文 4 年銘自然石板碑	熊本県御船町滝尾横野	延文 4 年	1359	－	
274	不動明王堂自然石板碑	熊本県御船町滝尾横野	天文 8 年	1539	－	中村一紀 2007
275	浄光寺天文 18 年銘自然石板碑	熊本県御船町木倉	天文 18 年	1549	－	中村一紀 2007
276	浄光寺永正 4 年銘自然石板碑	熊本県御船町木倉	永正 4 年	1507	－	中村一紀 2007
277	浄光寺永禄 11 年銘自然石板碑	熊本県御船町木倉	永禄 11 年	1568	－	中村一紀 2007
278	浄光寺享禄 3 年銘自然石板碑	熊本県御船町木倉	享禄 3 年	1530	－	中村一紀 2007
279	上高野菅原神社自然石板碑	熊本県御船町高木	大永 5 年	1525	－	中村一紀 2007
280	辺田見享禄 3 年銘自然石板碑	熊本県御船町辺田見	享禄 3 年	1530	－	中村一紀 2007
281	辺田見永禄 11 年銘自然石板碑	熊本県御船町辺田見	永禄 11 年	1568	－	中村一紀 2007
282	辺田見天正 4 年銘自然石板碑	熊本県御船町辺田見	天正 4 年	1576	－	中村一紀 2007
283	本木寺跡自然石板碑	熊本県嘉島町鯰	大永 2 年	1522	－	川上義郎 1989
284	平原自然石板碑	熊本県宇土市網津町平原	享禄 5 年	1532	－	菅房行 2001
285	馬立自然石板碑	熊本県宇土市網津町馬立	天文 17 年	1548	－	
286	馬立疣地蔵堂自然石板碑	熊本県宇土市網引町馬立疣	天文 7 年	1538	－	菅房行 2001
287	阿保峠自然石板碑	熊本県宇土市網引町阿保	大永 5 年	1525	安山岩	前川清一 2002
288	猪白自然石板碑	熊本県宇土市網引町猪白	天文 16 年	1547	－	菅房行 2001
289	西原天文 10 年銘自然石板碑	熊本県熊本県宇土市上網田町	天文 10 年	1541	安山岩	前川清一 2002
290	西原天文 15 年銘自然石板碑	熊本県宇土市上網田町西原	天文 15 年 天文 17 年	1546 1548	安山岩	前川清一 2002
291	海蔵寺跡天文 8 年銘自然石板碑	熊本県宇土市城塚町本村観音堂	天文 8 年	1539	－	菅房行 2001
292	海蔵寺跡天文 24 年銘自然石板碑	熊本県宇土市城塚町本村観音堂	天文 24 年	1555	安山岩	前川清一 2002
293	城塚町自然石板碑	熊本県宇土市城塚町	大永 8 年	1528	－	菅房行 2001
294	伊津野永正 18 年銘自然石板碑	熊本県宇土市野鶴町伊津野	永正 18 年	1521	－	菅房行 2001

表 41　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧⑫

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
295	伊津野天文 8 年銘自然石板碑	熊本県宇土市野鶴町伊津野	天文 8 年	1539	－	菅房行 2001
296	西光院跡天文 6 年銘自然石板碑	熊本県宇土市野鶴町伊津野	天文 6 年	1537	安山岩	前川清一 2002
297	西光院跡天文 7 年銘自然石板碑	熊本県宇土市野鶴町伊津野	天文 7 年	1538	安山岩	前川清一 2002
298	西光院跡天文 9 年銘自然石板碑	熊本県宇土市野鶴町伊津野	天文 9 年	1540	安山岩	前川清一 2002
299	西光院跡天文 19 年銘自然石板碑	熊本県宇土市野鶴町伊津野	天文 19 年	1550	安山岩	前川清一 2002
300	西光院跡天正 11 年銘自然石板碑	熊本県宇土市野鶴町伊津野	天正 11 年	1583	安山岩	前川清一 2002
301	西光院跡天正 12 年銘自然石板碑	熊本県宇土市野鶴町伊津野	天正 12 年	1584	安山岩	前川清一 2002
302	西光院跡天正 14 年銘自然石板碑	熊本県宇土市野鶴町伊津野	天正 14 年	1586	安山岩	前川清一 2002
303	鶴見塚自然石板碑	熊本県宇土市野鶴町鶴見塚	大永 3 年	1523	－	菅房行 2001
304	神本家自然石板碑	熊本県宇土市神馬町城 217	享禄 3 年	1530	凝灰岩	前川清一 2002
305	西安禅寺自然石板碑	熊本県宇土市松原町	大永 7 年	1527	－	菅房行 2001
306	北野天神横自然石板碑	熊本県宇土市三拾町	天正 3 年	1575	－	菅房行 2001
307	中野自然石板碑	熊本県宇土市三拾町中野	天正 12 年	1584	－	菅房行 2001
308	寿量寺自然石板碑	熊本県宇土市新町 1 丁目	大永 7 年	1527	－	菅房行 2001
309	新町自然石板碑	熊本県宇土市新町 1 丁目 74	享禄 2 年	1529	安山岩	前川清一 2002
310	西光院自然石板碑	熊本県宇土市新町 2 丁目 35	享禄 2 年	1529	安山岩	前川清一 2002
311	円応寺自然石板碑	熊本県宇土市本町 6 丁目	大永 7 年	1527	－	菅房行 2001
312	馬之瀬自然石板碑	熊本県宇土市馬之瀬町馬之瀬	永禄 9 年	1566	－	菅房行 2001
313	正法寺跡永禄 7 年自然石板碑	熊本県宇土市馬之瀬町馬之瀬	永禄 7 年	1564	安山岩	前川清一 2002
314	正法寺跡永禄 11 年自然石板碑	熊本県宇土市馬之瀬町馬之瀬	永禄 11 年	1568	凝灰岩	前川清一 2002
315	堀川家自然石板碑	熊本県宇土市神馬町城 115	大永 5 年	1525	安山岩	前川清一 2002
316	宇土高校大永 8 年銘自然石板碑	熊本県宇土市古城町 63	大永 8 年	1528	凝灰岩	前川清一 2002
317	宇土高校天文 2 年銘自然石板碑	熊本県宇土市古城町 63	天文 2 年	1533	安山岩	前川清一 2002
318	三宝院慶長 14 年銘自然石板碑	熊本県宇土市石橋町	慶長 14 年	1609	－	菅房行 2001
319	三宝院寛永 11 年銘自然石板碑	熊本県宇土市石橋町	寛永 11 年	1634	安山岩	前川清一 2002
320	轟水源自然石板碑	熊本県宇土市宮庄町轟水源	享禄 5 年	1532	－	菅房行 2001
321	三蔵永禄 11 年銘自然石板碑	熊本県宇土市宮庄町三蔵	永禄 11 年	1568	－	菅房行 2001

表 42　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧⑬

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
322	三蔵元亀 2 年銘自然石板碑	熊本県宇土市宮庄町三蔵	元亀 2 年	1571	－	菅房行 2001
323	三蔵天正 2 年銘自然石板碑	熊本県宇土市宮庄町三蔵	天正 2 年	1574	－	菅房行 2001
324	三蔵天正 3 年銘自然石板碑	熊本県宇土市宮庄町三蔵	天正 3 年	1575	－	菅房行 2001
325	龍泉寺跡自然石板碑	熊本県宇土市恵塚町宇土	享禄 3 年	1530	凝灰岩	前川清一 2002
326	光圓寺自然石板碑	熊本県宇土市神合町神山	永禄 2 年	1559	－	菅房行 2001
327	向峯自然石板碑	熊本県宇土市神合町向峯	慶安 3 年	1650	－	菅房行 2001
328	弁財天堂自然石板碑	熊本県宇土市松山町	大永 6 年	1526	－	菅房行 2001
329	上松山自然石板碑	熊本県宇土市松山町	享禄 2 年	1529	－	菅房行 2001
330	岩熊自然石板碑	熊本県宇土市岩古曽町岩熊	天文 17 年	1548	－	菅房行 2001
331	森の木自然石板碑	熊本県宇城市豊野町上糸石	永禄 4 年	1561	－	
332	下巣林大永 5 年銘自然石板碑	熊本県宇城市豊野町下巣林	大永 5 年	1525	安山岩	
333	下巣林永禄 6 年銘自然石板碑	熊本県宇城市豊野町下巣林	永禄 6 年	1563	砂岩	
334	下巣林永禄 12 年銘自然石板碑	熊本県宇城市豊野町下巣林	永禄 12 年	1569	凝灰岩	
335	北山崎自然石板碑	熊本県宇城市豊野町北山崎	天文 10 年	1541	凝灰岩	
336	観音堂自然石板碑	熊本県宇城市豊野町山崎	天文 11 年	1542	凝灰岩	花岡興輝 1991
337	道善寺享禄 4 年銘自然石板碑	熊本県宇城市豊野町中間	享禄 4 年	1531	－	花岡興輝 1991
338	道善寺永禄 8 年銘自然石板碑	熊本県宇城市豊野町中間	永禄 8 年	1565	－	花岡興輝 1991
339	大野薬師堂自然石板碑	熊本県宇城市松橋町大野	正平 19 年	1364	－	
340	立浦自然石板碑	熊本県天草市楠浦町立浦	天文 8 年	1539	砂岩	楠浦町誌編纂委員会 2013
341	寺山自然石板碑	熊本県天草市楠浦町立浦寺山	天文 8 年	1539	砂岩	佐藤誠 1989
342	船之尾尾越自然石板碑	熊本県天草市船之尾町尾越	享禄 4 年	1531	砂岩	本渡市史編纂委員会 1984
343	天神社自然石板碑	熊本県氷川町今	建徳 3 年	1372	砂岩	
344	萱原自然石板碑	熊本県八代市千丁町吉王丸萱原	天授 4 年	1378	－	
345	吉王丸自然石板碑	熊本県八代市千丁町吉王丸	弘和 2 年	1382	安山岩	熊本県教育委員会 1992
346	中村自然石板碑	熊本県八代市千丁町太牟田中村	天正 9 年	1581	安山岩	
347	原女木自然石板碑	熊本県八代市坂本町西部	元亀 4 年	1573	－	坂本村史編さん委員会 1990
348	明言院北墓地 1 号自然石板碑	熊本県八代市興善寺町	天文 15 年	1546	－	竜峰村史跡研究会 1961

表 43　肥後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧⑭

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
349	明言院北墓地 2 号自然石板碑	熊本県八代市興善寺町	天正 15 年	1587	－	竜峰村史跡研究会 1961
350	青蓮寺裏山自然石板碑	熊本県多良木町黒肥地	寛永 14 年	1637	凝灰岩	宮本尚編 1980
351	永昌寺自然石板碑	熊本県多良木町寺村	天正 9 年	1581	砂岩	宮本尚編 1980
352	吉祥院 1 号自然石板碑	熊本県多良木町久米	天正 10 年	1582	砂岩	宮本尚編 1980
353	吉祥院 2 号自然石板碑	熊本県多良木町久米	天正 10 年	1582	砂岩	宮本尚編 1980
354	寺屋敷阿弥陀堂自然石板碑	熊本県水俣市南袋時堂	長禄 3 年	1459	安山岩	水俣市史編さん委員会 1991

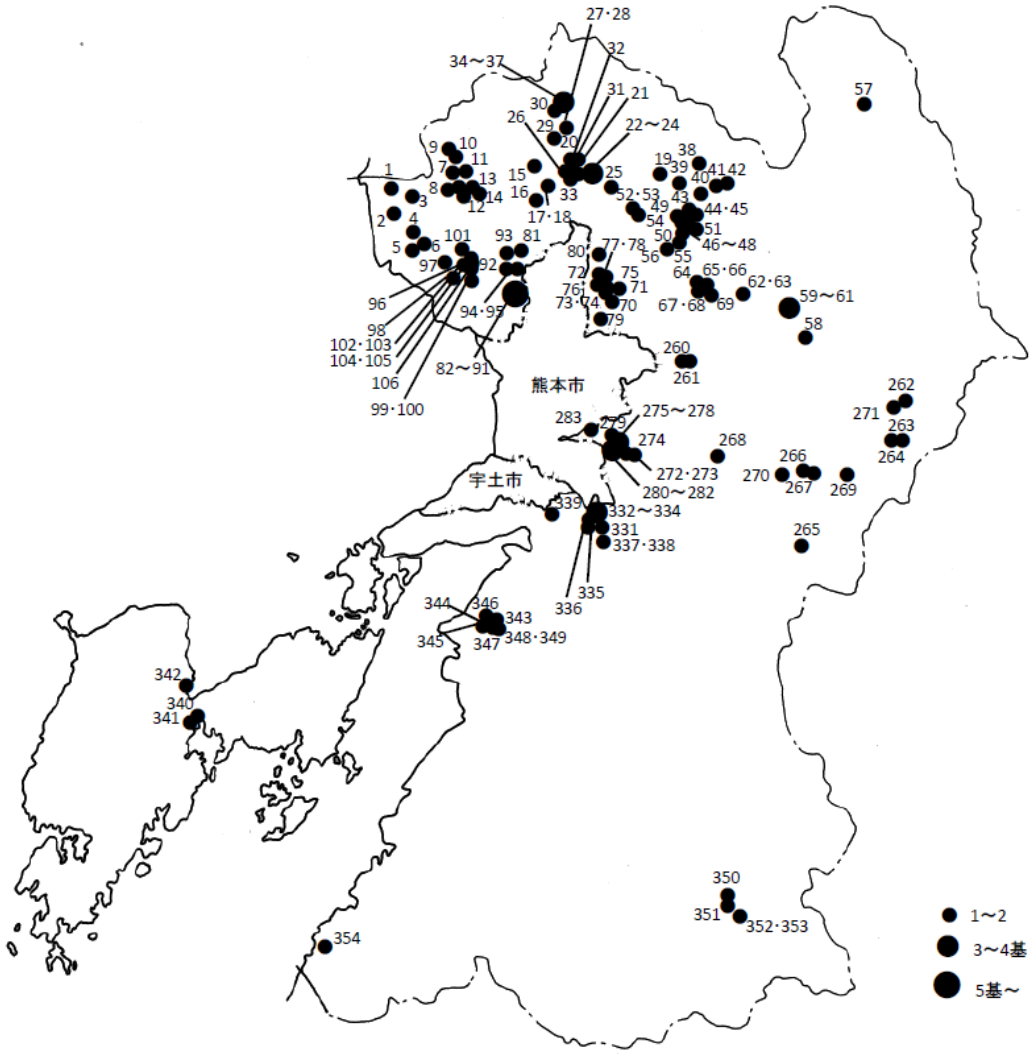


図 110　肥後（熊本市・宇土市を除く）における自然石板碑の分布

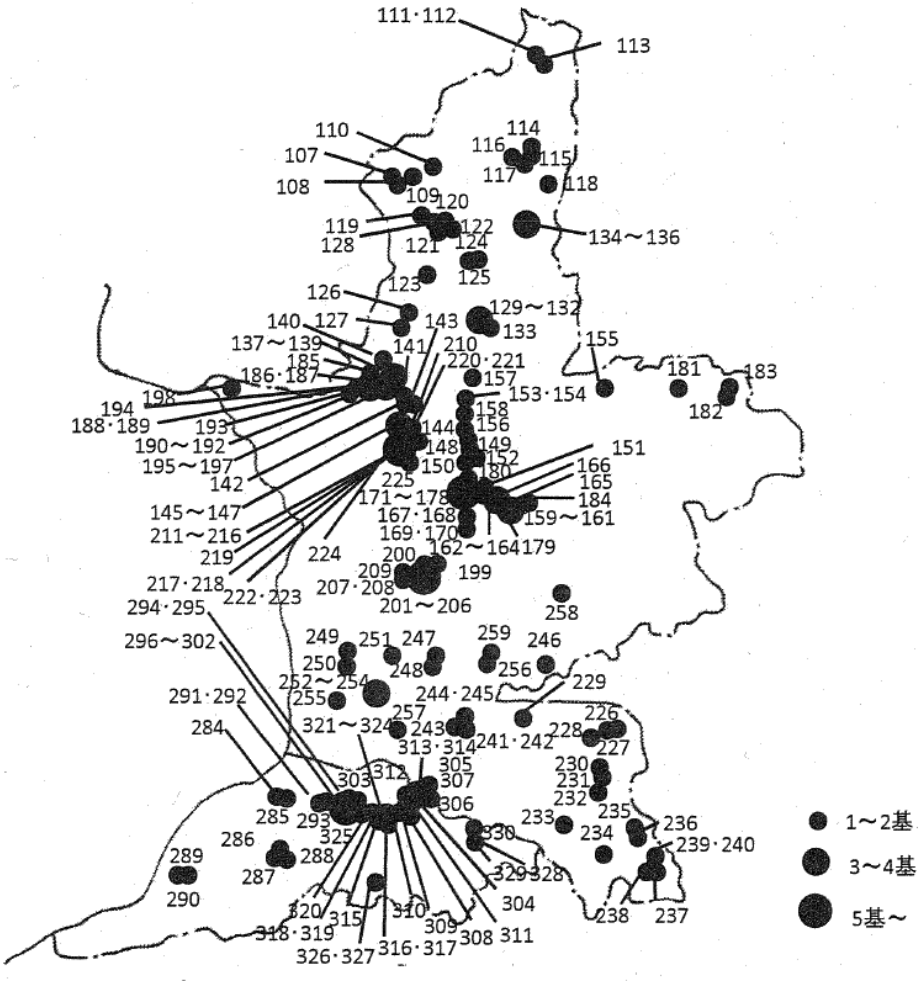


図 111　熊本市・宇土市における自然石板碑の分布

表 44　豊前における紀年銘をもつ自然石板碑一覧

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
1	貴布祢神社自然石板碑	福岡県北九州市小倉南区西水町	康永 2 年	1343	石灰岩	
2	峰ノ上自然石板碑	福岡県上毛町土佐井	文明 15 年	1483	安山岩	多田隈豊秋 1975
3	松山城跡自然石板碑	大分県宇佐市下高	天文 5 年	1536	安山岩	入学正敏 1988
4	光明寺跡自然石板碑	大分県宇佐市闇	天正 7 年	1579	安山岩	入学正敏 1994
5	安栖寺跡天正 5 年銘自然石板碑	大分県宇佐市樋田	天正 5 年	1577	安山岩	入学正敏 1988
6	安栖寺跡天正 12 年銘自然石板碑	大分県宇佐市樋田	天正 12 年	1584	安山岩	入学正敏 1988
7	積善寺自然石板碑	大分県宇佐市大塚	天正 3 年	1575	安山岩	
8	長福寺墓地自然石板碑	大分県宇佐市別府	寛永 20 年	1643	安山岩	
9	北宇佐自然石板碑	大分県宇佐市北宇佐	寛永 6 年	1629	安山岩	
10	松崎神社自然石板碑	大分県宇佐市松崎	天文 10 年	1541	安山岩	入学正敏 1988
11	円通寺裏自然石板碑	大分県宇佐市南宇佐	天正 9 年	1581	安山岩	
12	真上家墓地自然石板碑	大分県宇佐市南宇佐	天正 4 年	1576	安山岩	入学正敏 1988
13	白山神社天文元年銘自然石板碑	大分県宇佐市正覚寺	天文元年	1532	安山岩	入学正敏 1988
14	白山神社天正 5 年銘自然石板碑	大分県宇佐市正覚寺	天正 5 年	1577	安山岩	入学正敏 1988
15	御許山永正 16 年銘自然石板碑	大分県宇佐市大元山	永正 16 年	1519	安山岩	入学正敏 1988
16	御許山天文 23 年銘自然石板碑	大分県宇佐市大元山	天文 23 年	1554	安山岩	入学正敏 1988
17	御許山天正 3 年銘自然石板碑	大分県宇佐市大元山	天正 3 年	1575	安山岩	入学正敏 1988
18	御許山慶長 18 年銘自然石板碑	大分県宇佐市大元山	慶長 18 年	1613	安山岩	入学正敏 1988
19	御許山元和元年銘 1 号自然石板碑	大分県宇佐市大元山	元和元年	1615	安山岩	入学正敏 1988
20	御許山元和元年銘 2 号自然石板碑	大分県宇佐市大元山	元和元年	1615	安山岩	入学正敏 1988
21	御許山元和 2 年銘自然石板碑	大分県宇佐市大元山	元和 2 年	1616	安山岩	入学正敏 1988
22	御許山元和 5 年銘自然石板碑	大分県宇佐市大元山	元和 5 年	1619	安山岩	入学正敏 1988
23	京石自然石板碑	大分県宇佐市安心院町熊	文亀 2 年	1502	安山岩	
24	六郎丸自然石板碑	大分県宇佐市安心院町六郎丸	明暦元年	1655	凝灰岩	
25	宝蓮寺自然石板碑	大分県宇佐市院内町下余	天文 19 年	1550	安山岩	

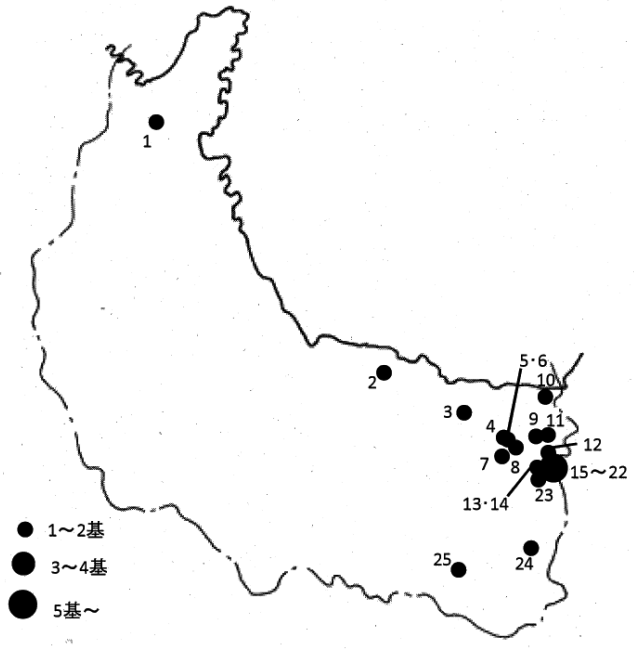


図 112　豊前における自然石板碑の分布

表 45　豊後における紀年銘をもつ自然石板碑一覧

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
1	小竹自然石板碑	大分県日田市上津江村川原小竹	大永 4 年	1524	安山岩	上津江村教育委員会 1997
2	松木自然石板碑	大分県九重町松木本村	享禄 2 年	1529	安山岩	内恵克彦・甲斐素純 1979
3	国清寺自然石板碑	大分県九重町野上寺田	元亀 2 年	1571	安山岩	内恵克彦・甲斐素純 1979
4	飛脚淵自然石板碑	大分県杵築市山香町立石町下	弘治 3 年	1557	安山岩	山香町教育委員会 2005
5	坂水自然石板碑	大分県杵築市山香町下坂水	天文 12 年	1543	安山岩	山香町教育委員会 2005
6	大昌寺跡自然石板碑	大分県杵築市本庄上本庄	元亀 3 年	1572	安山岩	
7	地蔵寺墓地自然石板碑	大分県大分市佐賀関	寛永 14 年	1637	緑泥片岩	
8	尾原自然石板碑	大分県臼杵市野津町西畑尾原	天正 14 年	1586	凝灰岩	
9	芝尾自然石板碑	大分県臼杵市野津町老松芝尾	康永 2 年	1343	凝灰岩	

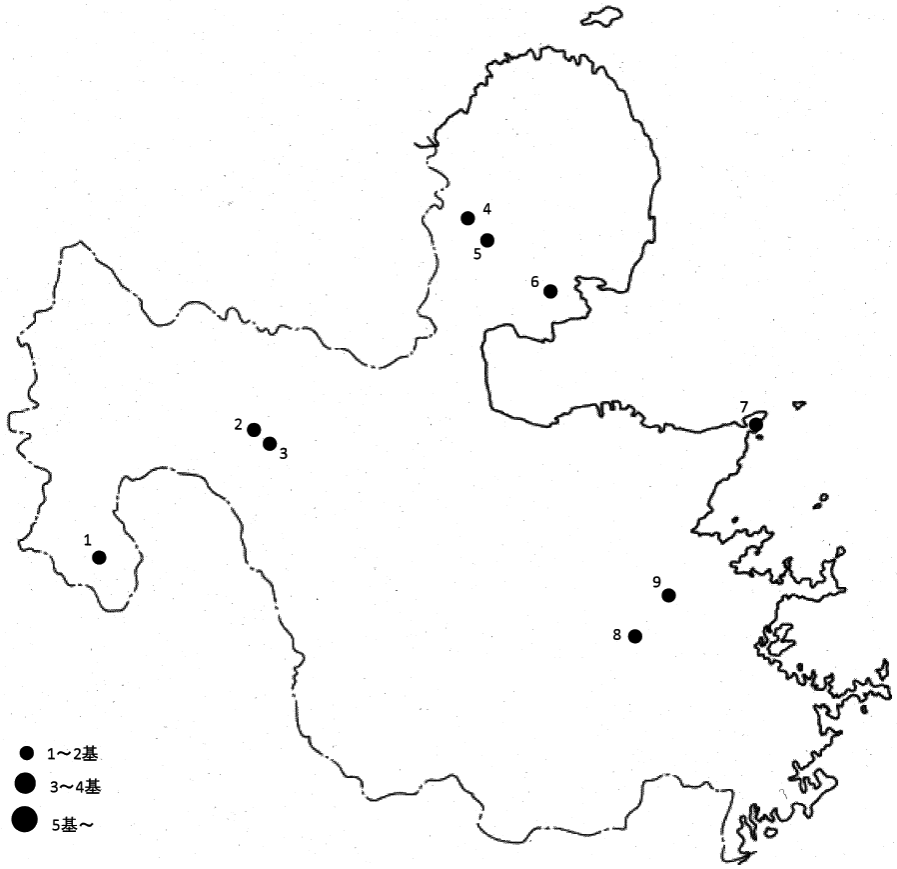


図 113　豊後における自然石板碑の分布

表 46　日向における紀年銘をもつ自然石板碑一覧

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
1	河内観音堂自然石塔婆	宮崎県高千穂町大字河内 34	文禄 3 年	1594	凝灰岩	宮崎県 1942
2	田尻家自然石板碑	宮崎県高千穂町三井田	永禄 13 年	1570	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
3	立壁茶屋乃森明神自然石塔婆	宮崎県五ヶ瀬町三ヶ所　立壁	天正 8 年	1580	凝灰岩	
4	大人地蔵堂自然石板碑	宮崎県日の影町岩井川大人西中	文禄 4 年	1595	凝灰岩	
5	後曽木薬師堂自然石塔婆	宮崎県延岡市北方町後曽木　子	天正 3 年	1575	凝灰岩	
6	山陰成願寺自然石板碑	宮崎県東郷町山陰　鶴の内	天正 8 年	1580	砂岩	
7	岩瀬橋自然石板碑	宮崎県小林市堤水流迫	永仁元年	1293	安山岩	甲斐常興・伊豆道明 1978
8	島津貴久供養自然石板碑	宮崎県えびの市麓　宋江院墓地	元亀 2 年	1571	安山岩	
9	元巣塚自然石板碑	宮崎県えびの市池島	慶長 18 年	1613	安山岩	
10	本市天正 5 年銘自然石板碑	宮崎県えびの市本市　飯野支所	天正 5 年	1577	安山岩	
11	本市天正 10 年銘自然石板碑	宮崎県えびの市本市　飯野支所	天正 10 年	1582	安山岩	
12	本市慶長 6 年銘自然石板碑	宮崎県えびの市本市　飯野支所	慶長 6 年	1601	安山岩	
13	朝稲家自然石板碑	宮崎県えびの市本市	天正 10 年	1582	安山岩	
14	堙土自然石板碑	宮崎県えびの市堙土	寛永 16 年	1639	安山岩	
15	早水神社自然石板碑	宮崎県都城市早水町　早水神社	明暦 3 年	1657	砂岩	池田宗男 1993c
16	鳥居原自然石板碑	宮崎県都城市高城町石山	元亀 2 年	1571	砂岩	池田宗男 1993a
17	有水備前自然石板碑	宮崎県都城市高城町有水	天正 18 年	1590	砂岩	
18	八代長門守自然石板碑	宮崎県都城市高城町有水	天正 19 年	1591	砂岩	
19	石坂自然石板碑	宮崎県都城市高城町有水	慶安 3 年	1650	砂岩	
20	穂満坊自然石板碑	宮崎県都城市高城町穂満坊	慶長 4 年	1599	砂岩	
21	竹山自然石板碑	宮崎県都城市美川町　千足神社	天正 17 年	1589	砂岩	池田宗男 1993b

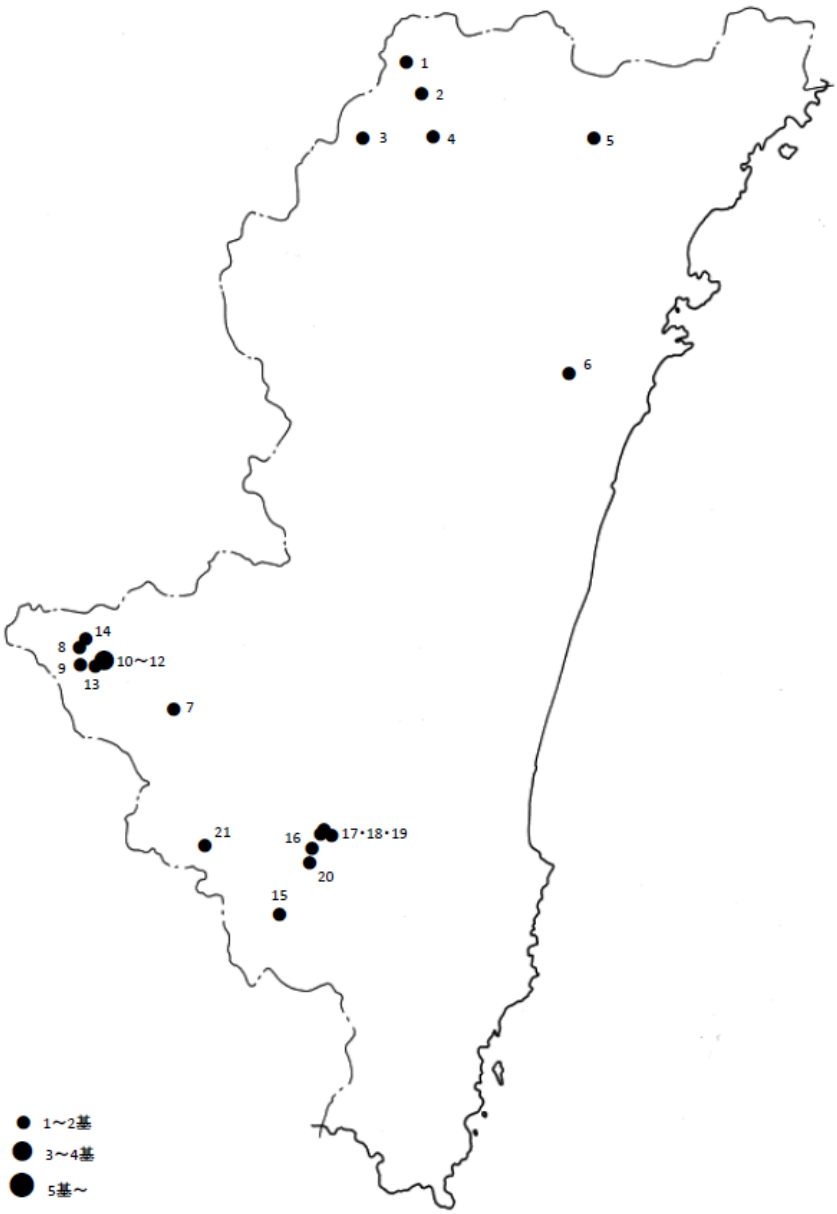


図 114　日向における自然石板碑の分布

表 47　薩摩・大隅における紀年銘をもつ自然石板碑一覧

番号	名称	所在地	紀年銘	西暦	石材	参考文献
1	春日小路自然石板碑	鹿児島県薩摩川内市宮崎町春日小路	寛永 14 年	1637	凝灰岩	川内郷土史編さん委員会 1974
2	稲葉崎建武 2 年銘 1 号自然石板碑	鹿児島県湧水町稲葉崎　オゴンツ	建武 2 年	1335	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
3	稲葉崎建武 3 年銘 1 号自然石板碑	鹿児島県湧水町稲葉崎　オゴンツ	建武 3 年	1336	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
4	稲葉崎建武 3 年銘 2 号自然石板碑	鹿児島県湧水町稲葉崎　オゴンツ	建武 3 年	1336	凝灰岩	多田隈豊秋 1978
5	沢家墓地嘉禎 3 年銘自然石板碑	鹿児島県霧島市隼人町神宮	嘉禎 3 年	1237	凝灰岩	

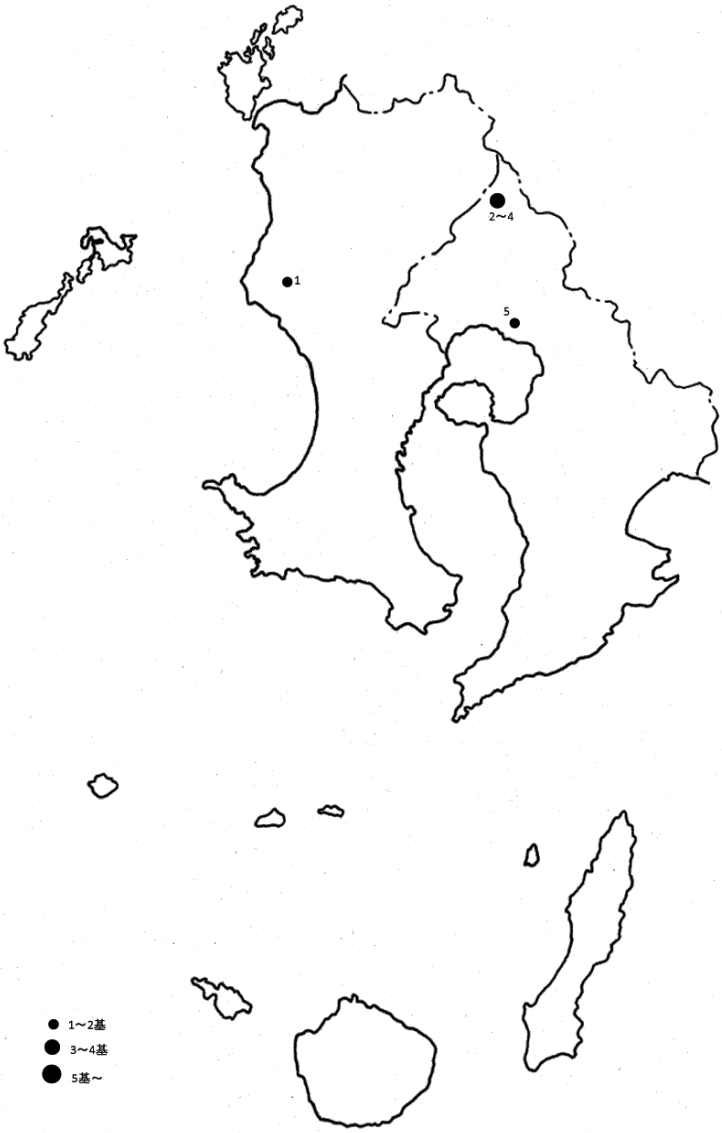


図 115　薩摩・大隅における自然石板碑の分布

第Ⅴ章　九州における整形板碑造立の画期

第Ⅲ章において、整形板碑について各部位の型式に対し類型化を行うことにより検討してきたが、ほとんどの属性において、板碑極少期である 15 世紀前半に大きな画期が存在する。ここで、整形板碑に加えて自然石板碑それぞれの造立傾向をみるために図 116 に年代別造立数を表した。これをみると、鎌倉期中葉に出現する整形板碑は、徐々にその数を増やし、鎌倉期末～南北朝期初頭をピークに減少しはじめ、14 世紀末～15 世紀中葉の激減期を経て、戦国期に再び流行しはじめることがわかる。整形板碑の造立傾向と近似し、自然石板碑も同様な傾向をもつことがわかる。この整形板碑の造立数は型式変化と連動し、13 世紀の整形板碑出現以来、鎌倉期末～南北朝期を通じ、安山岩・凝灰岩を石材とする板碑すべてにおいて、定型化した型式をほとんど逸脱することなく製作され続けているが、その画期をはさみ、1470 年代以降にほとんどの属性において多様な変化が生じることが確認できる。

それでは、この画期とはどのような様相をもつものであろうか。銘文からの願意をみると、鎌倉～南北朝期には死者の冥福を祈るため仏事を行う追善供養の板碑が多く確認できる。豊後地域における最古の紀年銘資料に位置付けられている大分県国東市護聖寺 1 号板碑（1291 年銘）や日向における最古の紀年銘資料に位置付けられている宮崎県日南市折生田板碑（1293 年銘）においても、銘文中には、親の霊を祀る子の意味をもつ「孝子」とあり、これについても追善供養の願意をもつものと解釈できよう。

中には、35 日忌(宮崎県歓楽寺跡正慶 2 年銘板碑・宮崎県定善寺慶長 8 年銘板碑)・100 日忌(鹿児島県南瀬観音永仁 7 年銘 1 号板碑・鹿児島県稲葉崎暦応 2 年銘 3 号板碑・鹿児島県波之上神社元弘 2 年銘板碑)・1 周忌(大分県川原 2 号板碑・大分県鳴 2 号板碑・鹿児島県稲葉崎二連板碑・鹿児島県波之上神社嘉暦 3 年銘板碑・鹿児島県波之上神社正慶 2 年銘 1 号板碑)・3 回忌(大分県川原 1 号板碑・鹿児島県稲葉崎二連板碑・鹿児島県波之上神社正慶 2 年銘 1 号板碑・鹿児島県宮原板碑)・7 回忌(大分県富貴寺板碑)・13 回忌(大分県善光寺板碑・大分県岡板碑・鹿児島県稲葉崎暦応 2 年銘 1 号板碑・鹿児島県稲葉崎暦応 2 年銘 2 号板碑・鹿児島県田尾原正平 14 年銘 1 号板碑・鹿児島県田尾原正平 14 年銘 2 号板碑・鹿児島県肆部合 1 号板碑･鹿児島県肆部合 2 号板碑･鹿児島県波之上神社元弘 3 年銘板碑)･17 回忌（宮崎県城ケ崎嘉暦 3 年銘板碑）・23 回忌(宮崎県大迫寺跡正平 25 年銘板碑)・27 回忌(鹿児島県南瀬観音永仁 7 年銘 2 号板碑)・33 回忌(宮崎県彦山寺跡 1 号板碑・宮崎県彦山寺跡 2 号板碑)等の忌日・年忌が確認できるものもみられる。これらの忌日・年忌のう

ち、13 回忌が 9 例、1 周忌が 5 例、3 回忌が 4 例、100 日忌が 3 例というように、忌日・年忌の重要性とともに石塔造立の契機とする意識が資料数に反映されているかのようにみえる。

これに対し、1470 年代の画期以後はどのような様相を呈するのであろうか。当該期には、以前からの形態を受け継ぎながら、ほとんどの属性において多様な変化が生じる特徴がみられる。それぞれの属性間の対応関係も複雑になり、形態的には混沌とした様相が確認できる。そこには前述した追善供養を明記する整形板碑の激減化とともに、特に、墓碑的機能の爆発的流行という特徴が銘文から確認できる。墓碑的機能をもつ板碑を考えれば、近世に受け継がれる墓碑では、民俗例から 7 回忌や 13 回忌などの年忌を契機として造立される場合が多く、その前身となる 1470 年代以降の板碑についても、同様であることが推測できる。しかし、近世の墓碑と同様に 1470 年代以降の墓碑的機能をもつ板碑には、刻銘に忌日が記されているものは、宮崎県定善寺慶長 8 年銘板碑（図 47-24、図 53-24）に「為道覚卅五日追善」とみられる以外には確認できない。前述したように、1390 年代以前の板碑に追善供養を行った年忌の刻銘がみられることは興味深い。

ところで、1470 年代以降の型式変化で板碑碑身部の中に地蔵像や位牌形が確認できることは興味深い。九州地方において、石塔に地蔵菩薩が刻まれる類例は石幢の導入に始まるが、応永 17 年(1410)銘をもつ大分県豊後大野市朝地町館石幢以来、豊後南部が先行しながら、九州各地において流行し、近世に至っても一部の地域においては継続して製作され続けている。これらの石幢の龕部には六地蔵や十王の内の 2 体を彫るものが多いが、地蔵は冥府の十王中、閻魔王の本地仏であり、生前、善行を積んだ衆生を救済し極楽浄土へ導く菩薩とされており、幢身に刻まれた銘文の願意もあわせて、冥界信仰が造立背景にあることがうかがえる(小泊立矢 1987)。一方、地蔵を碑面に刻む板碑は、永正 2 年(1505)銘の大分県臼杵市名塚薬師堂板碑以来、戦国期を通してわずかながらみられる。これらについても、当時の冥界信仰の流行が板碑にも取り入れられたものと捉えるべきであろう。

六地蔵・十王の石造物は、石幢や板碑に限るものでなく、石殿や丸彫りの石仏にもみられる。なかでも石仏は永和 4 年（1378）・5 年（1379）銘をもつ大分県国東市文殊仙寺石像十王像や明徳 4 年（1393）の紀年銘をもつ石造地蔵を含む石造十王からなる大分県国東市重藤十王堂石造仏像群など 14 世紀後葉にはじまり、大分県国東半島一帯に広く流行し、近世まで受け継がれている。

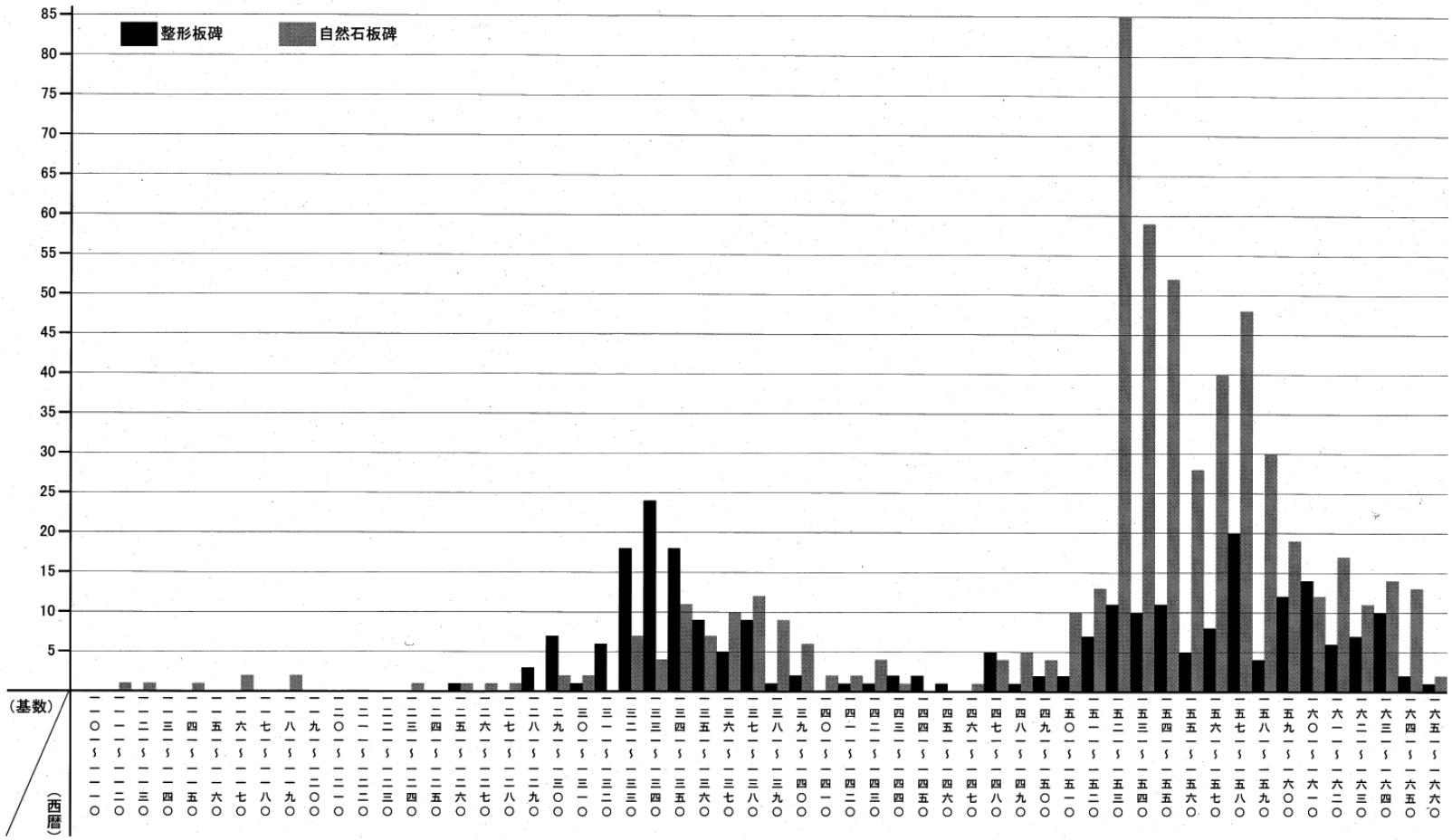


図 116　九州における板碑の年代別個体数

一方、全国的にみて、丸彫型にしろ光背型にしろ、地蔵が石造物に彫り込まれる類例が近世墓碑に多くみられるが、これらの墓碑は男性や子供の墓に多く刻まれている(小花波平六 1985)。坪井良平による山城木津惣墓の墓碑研究では、1710～1820 年に夭折児童の墓碑として利用されており(坪井良平 1939)、豊前・豊後に限定しても、大分市女狐近世墓の場合、1740～1840 年に夭折児童の墓碑として利用されている(田中裕介 1990・1996)。これをみても、近世には戒名・墓碑等から確実に児童・幼児が埋葬の対象とされていたことがわかるが、この習俗はいかなる段階までさかのぼりえようか。

文献史学的に、中世前半には貴族社会においてすら、子供の死に対し、特別な仏事を行わず、山野に遺棄するのが通常の慣わしであったとされるが(圭室諦成 1963)、考古学的にも中世前半に埋葬された例はほとんど知られておらず、文献史学的成果と合致する。これに対し、15 世紀以降には児童の位牌も見られ、幼児に対しても人格を有する霊魂として追善すべきだとする観念が一般化したとされている(圭室諦成 1963)。考古学的成果においても、中世後半には児童埋葬例が認められ、これについても文献史学的成果と一致している。この児童埋葬には地蔵菩薩の民俗信仰化が大きく関係し、地蔵菩薩が子供の守護神とする信仰を代表する賽の河原思想が、15 世紀に現れ始めるとされている。室町期にはじまりをみる賽の河原思想は、近世に至り、賽の河原和讃として 18 世紀に大きな流行をみるが(真鍋廣済 1960、速水侑 1975)、近世墓碑への地蔵菩薩導入の下地にはこのような地蔵信仰の流布が、大きく関与していたことは想像するに難くない。

そこで、墓碑に地蔵を刻む板碑の類例を見た場合、今回とりあげた資料の中でも永正 2 年(1505)銘をもつ大分県臼杵市名塚薬師堂板碑（図 27-76、図 38-76）以来、いずれも 16 世紀の板碑に観察できる。また、児童の戒名も同じく「時宮童男　松童女」とある名塚薬師堂板碑にはじまり、これについても文献史学的成果と一致し、墓碑に対する地蔵信仰がこの時点ですでに導入されていることがわかる。

このように板碑激少期に伴い、石塔に受容された地蔵信仰は流行の兆しを見せはじめ、墓碑化して以降、ある一定の定着をみせ、近世墓碑まで受け継がれていくが、板碑造立の画期に伴い成立し流行する新たな要素の一つに数えられる。

ところで、九州における整形板碑にみられる結衆塔婆は、元亨元年（1324）銘をもつ大分県国東市岩尾板碑にはじまり、板碑・宝塔・宝篋印塔・五輪塔等、様々な塔形のもと、14 世紀中葉をピークに南北朝期に盛行する特徴をもつ(註 7)。流行期に差があるものの、同様の現象は、関東に流行する緑泥片岩の武蔵型板碑でもみてとれ（中尾　堯 1983)、全

国的に共通する現象であるが、畿内ではその成立が 13 世紀後半の文永・弘安を過ぎた頃にさかのぼるとする指摘もみられる（木下密運 1967）。このような結衆塔婆は当初の歴史環境をとどめる類例をみると、小庵小堂や村落共同墓地に総供養塔として建てられている場合が非常に多いことがわかる。畿内では、13 世紀まで惣領制のもと武士団の族的結合のもと、共祭共墓の形態をとっており、14 世紀にはいると惣領制の崩壊により、その族的結束も薄らいでゆき、氏族墓も変形を余儀なくされていく。一方、考古学的成果に基づけば、名主層の生活空間とされる散村形態の屋敷地に「屋敷墓」として付設される一般的傾向があり、階級・階層により、二相の墓形態が存在することがわかる。畿内では、惣村の形態をとり、やや時期を早くするが、全国的に集村化が村落社会の変化と相俟って様々な歴史資料にその痕跡を残しはじめる。結衆塔婆の成立もこのような集村化に伴う社会変化が根底にあることがうかがえ、14 世紀後半に兆しをみせはじめ、戦国期以降ピークに達し、戦国期に原型がつくりあげられた集落形態は近世集落へと受け継がれていく。この動きは、墓制とも連動し、遺構として集団墓が各地でみられるようになる。それとともに石塔も社会的な変化に伴い、墓碑化するが、板碑に限らず、五輪塔・宝篋印塔・宝塔をはじめ様々な塔形において、この現象が確認できる。そして 15 世紀前半期の激減期以降、墓碑化する板碑は近世墓碑にも受け継がれる。

板碑にみられる銘文のなかにはこのような社会的変化が反映されているものが存在する。整形板碑にみられる結衆塔婆は、元亨元年（1324）銘をもつ大分県国東市岩尾板碑（図 22-54、図 36-54）を嚆矢とし、応安 6 年（1373）銘をもつ「一結衆」と刻まれた大分県由布市畑田板碑（図 25-67、図 38-64）まで、交名を記さない銘文をもつものが確認できる。正慶元年（1332）銘をもつ大分県宇佐市佐田社 1 号板碑（図 8-20、図 10-20）には「時衆八十人各敬白」、建武元年（1334）銘をもつ大分県豊後高田市其ノ田 1 号板碑（図 14-16、図 34-16）には「地蔵堂講衆」、康永 4 年（1345）銘をもつ大分県杵築市普門坊跡板碑（図 13-8、図 33-8）には「別時講衆敬白」、応安 6 年（1373）銘をもつ大分県宇佐市庄部観音堂 1 号板碑（図 7-8、図 9-8）には「一結衆敬白」とそれぞれ刻まれており、この傾向は南北朝期中葉に流行する宝篋印塔や、宝篋印塔の流行に押されて衰退していく宝塔においても同様のことが確認できる。

しかし、板碑空白期を挟んで以降の板碑について、銘文からみて結衆塔婆は、大きく様変わりしてしまう。応安 6 年（1373）以降に姿を消す結衆塔婆は、明応 2 年（1493）銘をもつ大分県豊後大野市五郎丸板碑（図 25-69、図 38-69）においてふたたび登場する。当該

資料には 32 名の交名が確認でき、以後、「結衆」・「一結衆」・「講衆」・「時衆」のみの表現はほとんどみられない。唯一、天正 19 年（1591）銘をもつ宮崎県高原町合窪橋板碑（図 49-43、図 54-43）に「結衆百人」とみられるのみで、基本的に結衆塔婆の場合、交名を刻む板碑に変化している。中には、天文 10 年（1541）銘をもつ大分県豊後大野市百枝板碑（図 23-82、図 37-82）に「□講衆」の銘文と 10 名の交名が、また、天文 17 年（1548）銘をもつ宮崎県えびの市彦山寺跡 3 号板碑（図 49-42、図 54-42）に「結衆」の銘文と 35 名の交名が刻まれているものが確認できるが、この両者にも交名が刻まれている。

他の塔形の結衆塔婆に目をやると、豊後に流行する石大工「玄正」の手による宝篋印塔には、正平 18 年（1363）銘をもつ豊後大野市福正寺宝篋印塔以来、交名が記される結衆塔婆が流行し、その始まりは板碑に先行する。これは結衆の塔婆を石塔に求める場合、当時、もっとも流行の先端にあった宝篋印塔を選択したことに起因するものであろう。このような結衆の塔婆としての宝篋印塔は、村のお堂としての小堂の前にひときわ大きく存在感を示すものとして造立されており、集村化に伴い村人が集う信仰の場である小堂前において、村人の紐帯を強める目的のもとに製作されたものと考えられる。このような結衆の塔婆は室町期から戦国期に至り、宝篋印塔から石幢（六地蔵塔）にその主役の座を譲り、小庵・小堂前や墓地、さらには何らかの結界の地に造立されている。

その意味では、結衆の塔婆としては板碑の数は少ない。しかし、その変化が板碑激減期を経て確認できることは、板碑の型式変化と造立趣旨の変化が全く無関係であったとはいえないもののように思える。

これにもまして板碑激減期を経ての板碑の変化は、やはり、板碑の墓碑化に起因するものが大きい。加えて、15 世紀後半以降の板碑の墓碑化は近世墓へと受け継がれており、その中の一つの要素として、墓碑化した板碑の中に位牌の意匠が取り込まれていることは注目に値しよう。多くの地域で中世の板碑形式を受け継ぐ近世墓碑には、位牌の形式をもつものも確認でき、板碑の消滅期から近世墓碑の確立期にかけて、墓碑と位牌には密接な関係がみられることは、位牌研究の立場からも指摘されている（跡部直治 1936）。大分県豊後高田市香々地町上平入会墓地においても、近世墓碑の初期形態が極めて良好に確認できる興味深い資料がみられる（原田昭一 1999b）。当墓地中最古に位置付けられる正保 2 年（1645）銘の 146 号墓碑は上部に雲形を彫り出し、明らかに「雲首型位牌」の型式を継承し、また、寛文 13 年（1673）銘をもつ 64 号墓碑をはじめとした資料には碑面に唐破風を陽刻し、これについては「廟所型位牌」の形式を継承しているものと考えられる。このように、近世墓

碑の初期形態である墓碑の中に当時の位牌にみられる属性の一部が読みとれる資料は、近世墓地景観を非常によく残す豊後地方においては数多く確認できる(註８)。一方、大分県南部の凝灰岩を石材とする地域においては、大分県豊後大野市大辻山 2 号板碑(図 27-79)・回春庵 1 号板碑（図 28-83）など板碑消滅期の墓碑化した資料中に、碑面に線刻による位牌形を彫刻し、その中に戒名をはじめ没年月日を刻む資料が多々確認できる。

これらのことからも、当該期の板碑が墓碑機能を有していたことが、銘文だけでなくその形態から読みとれる。このような板碑の墓碑化とともに梵字種子の著しい退化傾向が確認でき、きわめて小さい線刻状の梵字種子をみても、主尊を供養することの意義が失われていったことが考えられる。

これに加えて、銘文中に確認できる主旨として庚申信仰に伴う造立例がある。天正 4 年（1576）銘をもつ大分県佐伯市地蔵ノ本板碑（図 41-110）をはじめ、天正 6 年（1578）銘をもつ大分県豊後大野市平井板碑（図 40-102)、天正 19 年（1591）銘をもつ宮崎県高原町合窪橋板碑(図 54-43)、慶長 6 年(1601)銘をもつ大分県豊後大野市代三五板碑(図 40-98)など、16 世紀後半代に少数例確認できる。庚申信仰に伴う石碑は近世にも受け継がれ流行し、その初期には「庚申」の文字が刻まれる特徴をもつ。これに対し、18 世紀代には、「庚申」の文字が消滅し、青面金剛が陽刻される庚申塔へと変化していくが、17 世紀代の庚申塔は型式的には板碑型墓碑と同じであり、それにもまして自然石を利用したものが多い。板碑を受け継ぐ近世の石塔は墓碑だけでなく庚申塔でも確認できるが、これは、板碑減少期の 15 世紀前半以降に出現した新たな要素として近世に受け継がれるものである。

千々和到は板碑の定義をもとにした時代区分を厳密に規定し、関東地方において板碑造立主旨の変化として「仏教的意味による供養塔から、講による民間信仰的板碑または〈墓標〉へと転化」がみられることを指摘している(千々和到 1988)。九州においても、同様な変化が確認でき、それは板碑に限らず、五輪塔・宝篋印塔・宝塔すべての石造物がこの時期に変革期を迎えることは注目すべき事実である。このように、全国的にみても戦国期、板碑の墓碑化とともに様々な石造物において大きな変革を迎える。戦国期は板碑の墓碑化がひとつの大きな特徴として捉えられようが、これはその背景として、村落内の有力者に限定されはするものの、その資料数からして前代に比較すれば明らかな造立層の拡大化があり、それは集落景観や墓地景観にもあらわれるような社会的変化が背後に存在すると考えられる(原田昭一 1999a)。

第Ⅵ章　九州における整形板碑の石材

整形板碑の石材は、激減化する以前である出現期から南北朝期までとそれ以降では様相が異なり、南北朝期までに限れば、以下のとおりである。

まず、出現期から南北朝期までの石材は、花崗岩製の福岡県須恵町建正寺板碑・福岡市善導寺板碑・福岡県太宰府市水瓶山板碑、緑色片岩製の湯野田太子堂板碑を除けば、安山岩と凝灰岩に限られる。

中でも、花崗岩製板碑に関しては筑前に限られる。筑前および豊前北部には九州でも数少ない花崗岩の岩層が存在し、これらの地域には花崗岩を石材とした石塔はごく普通に確認できるが、整形板碑に関してはきわめて少なく、紀年銘板碑に関してはさらに少ない。

数少ない資料のうち、福岡県須恵町建正寺板碑（図 2-1）は、扁平な正方形に整形され、通常の板碑がもつ頭部を山型に造り、額部に二条線を刻む特徴はみられない。福岡県太宰府市水瓶山板碑（図 2-5）についても、立体的な山型の造り、二条線を刻み額部を突出させる特徴はみられなく、この両者の型式的な系譜にあるものも確認できない。また、福岡市善導寺板碑（図 2-3）は一般的に「蒙古碇石」と呼ばれる元の軍船や宋の商船に使用されていた碇石を石材として転用したものである。これは碇石としての形を変えず、中央上部に舟形を彫りくぼめ、蓮華座上に立つ地蔵立像を半肉彫りしており、その下部に延文 3 年（1358）の紀年銘をはじめとした銘文が刻まれている。板碑として転用するための整形が確認できないことからすれば、これは板碑としては自然の素材をそのまま再利用したものとして自然石板碑の範疇で捉えるべきものかもしれない。

また、緑泥片岩製板碑についても石材産出地である西彼杵半島が所在する肥前に限られる。唯一、確認できる湯野田太子堂板碑（図 2-10・11）についても、緑泥片岩という扁平な石材を利用しているため､武蔵型板碑や阿波型板碑にみられる石材との共通性をもつが、側面に二条切込みは確認できるものの、正面には二条切込みや額部突出はみられない。これについても、型式的な系譜にあるものは確認できないだけでなく、紀年銘がみられない資料も含めて、南北朝期に属する緑泥片岩製板碑は管見にふれるかぎりではみられない。

このように、筑前・肥前のように系譜が受け継がれて製作されている整形板碑はみられず、製作も単発的に終わっている。前述したようにこの地域に自然石板碑が多いのも、安山岩や凝灰岩など良質な石材が存在する九州においては、石材としては質的に劣るものであり、九州北部に産出する花崗岩についても石材として利用されているが、花崗岩地帯で

ある畿内から瀬戸内沿岸にかけて花崗岩製石塔が隆盛するものの、板碑に関してはきわめて乏しいことに通ずるものと考えられる。

一方、それぞれの地元に産出する安山岩と凝灰岩を石材にもつ板碑は豊後・肥後以南に確認できる。豊後の国東半島一帯に流行する安山岩製板碑をはじめ、豊後中南部から肥後以南に一般的な凝灰岩製板碑や、薩摩・大隅南端部において局地的な広がりをもつ黄白色を呈する軟質な凝灰岩である山川石製板碑は、いずれも自然石板碑ではなく整形板碑を主に製作する共通点をもつ。一概に凝灰岩といっても、様々な様相をもつものであることは言うまでもなく、阿蘇山を中心にした肥後・豊後・日向などには、幅広く分布する阿蘇-４溶結凝灰岩を石材としているものが多い。豊後に例をとれば、この阿蘇-４溶結凝灰岩は大分県国東半島の付け根にあたる豊後高田市や杵築市山香町などにも分布しており、これらの地域では国東半島周辺ではごく普通に石材になりうる安山岩の転石も数多く存在するものの、整形板碑をはじめとした石材には凝灰岩のみを選択しており、石材としては凝灰岩が優位にあることがわかる。

その他、九州各地の地域においても、安山岩と凝灰岩が重複して分布する場所においては、凝灰岩を石材として選択している地域が多い。自然石板碑を考察する際に触れたが、凝灰岩と安山岩が混在する地域では、自然石板碑には安山岩を石材とし、形を刻む石塔には凝灰岩が利用されていることが多いことからも、石塔を製作する際の石材としては、凝灰岩を選択していることは九州全域にみられる傾向であろう。

凝灰岩に限っても、九州において最も資料数が多い板碑の石材は阿蘇-４溶結凝灰岩である。阿蘇山は過去に４回、巨大噴火を引き起こしており、そのうち最も大きな噴火は約９万年前に発生した４回目の噴火であると考えられている。この時の噴火は、阿蘇カルデラを形成するもので、火砕流は北は山口県から南は宮崎県南部と鹿児島県を除く九州全域に到達したと考えられている。この時の火砕流が溶結し凝灰岩となったものが阿蘇-４溶結凝灰岩である（小野晃司・渡辺一徳 1983）。

大分県豊後大野市では、この阿蘇-４溶結凝灰岩が 80mを超える岩層で確認できる箇所がみられるが、ここでは厚い堆積層のため、きわめて高温で溶結しており、強溶結の結果、柱状節理の岩層を形成している。この現象は阿蘇カルデラに近いほど顕著であり、豊後・肥後・日向において強溶結のため柱状節理の岩層が確認できる。石塔の場合、強溶結の凝灰岩であれば、石材として固すぎ、比較的軟質な弱溶結の凝灰岩が石材として好まれている。それは残された石塔の資料数に反映され、比較的、阿蘇山に近い地域においては、阿

蘇-4溶結凝灰岩製石塔が少なく、豊後・肥後・日向において遠隔地ほど資料数が多い傾向がある。

しかし阿蘇-4溶結凝灰岩に関しては、目視によりさらに細かい石材産出地の特定は困難であり、地域が限られる凝灰岩の特徴がなければ、石材産出地の特定や流通範囲を語るのは困難である。この視点では、阿蘇-4溶結凝灰岩以外に2種類の凝灰岩が目視で特定できる。一つは鹿児島湾両岸に分布する山川石を石材としたもの、もう一つは鹿児島県三島村硫黄島に分布する船倉火砕流堆積物（熔結凝灰岩）を石材としたものである。

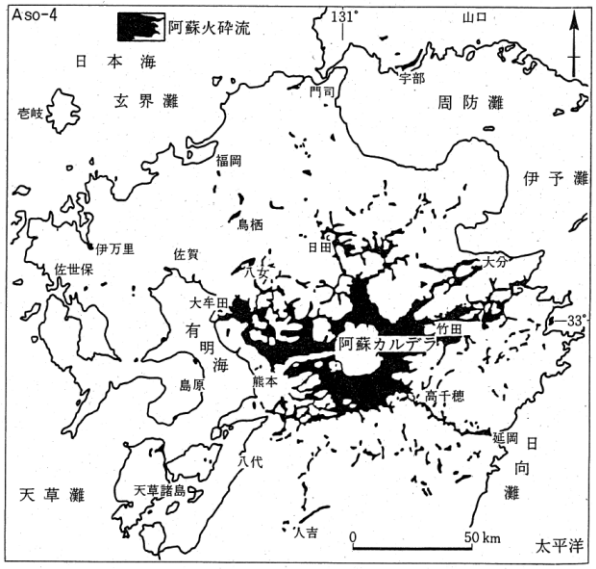


図 117　阿蘇火砕流の分布域（小野・渡辺 1985）

通称「山川石」は薩摩半島南東端の鹿児島県指宿市山川福本地区でしか産出しない新期指宿火山群の火砕流に伴う溶結凝灰岩である。その産出地は中世に薩摩半島の重要港湾の一つとしてたびたび歴史の表舞台に登場する山川港に近接するため、その分布は海を介した範囲に認められる特徴がある。紀年銘資料をみると、石材産出地である薩摩半島側では鹿児島県指宿市山川成川の鰻板碑のみであるが、鹿児島湾を隔て、約20 kmの対岸に位置する鹿屋市高須町波之上神社板碑には5例の紀年銘板碑が確認できる。板碑以外の石塔をとりあげても、薩摩半島南端の指宿市周辺だけではなく、鹿児島湾に接する大隅半島西岸部や鹿児島県島嶼部に広く分布する特徴がある。石材としての質の良さから、近世には、島津氏歴代当主およびその近親者の墓塔の石材として選ばれ、遠く京都まで持ち運ばれているものも存在する（松田朝由 2014）。

また、船倉火砕流堆積物（熔結凝灰岩）は喜界カルデラの噴火に伴う噴出物である。喜界カルデラとは鹿児島県薩摩半島の南約50kmの海底に東西20 km、南北約17 kmの規模をもつ海底カルデラであり、鹿児島県三島村の硫黄島と竹島およびその周辺の岩礁群はこの喜界カルデラの火山噴出物で形成されている。約7300年前に鬼界カルデラは最新の大規模火砕流噴火を起こし、このときの噴出物のひとつが船倉火砕流堆積物である（小野晃司・曽屋龍典・細野武男 1982）。この石材の特徴は通常の凝灰岩とは異なり、赤色の噴出物の粒

子が多量に含まれることが目視で確認できる。船倉火砕流堆積物は、硫黄島の一部にも確認できるが、現在の竹島港周辺に安定した堆積層が存在し、近世には竹島においてのみ石工の活動が確認される（三島村 1990）ことから、竹島で採石された石材を使用して制作されたものと考えて大過ない。この船倉火砕流堆積物を利用した板碑をはじめとした石塔は、竹島・硫黄島だけでなく黒島などの三島村周辺の鹿児島県島嶼部に分布しており、ここにおいても海を介した流通が確認できる。紀年銘板碑は硫黄島に天授 2 年（1376）銘をもつものが確認されているが、この板碑に限らず、中世の石塔は島嶼部でも港に近接する集落に多く確認できる（三島村中世資史料調査団 2013、市村高男 2013）。

一方、凝灰岩に次ぎ主要な石材として利用されたのが安山岩である。紀年銘資料に限れば、南北朝期以前において数多く存在するのは、豊後でも大分県国東半島周辺である。前述したように、凝灰岩との重複地帯では凝灰岩を石材として優先させているが、国東半島の多くの地域では安山岩のみである。この地域ではきわめて大量の安山岩の転石が、国東半島のほぼ全域と言っていいほど山中に存在する。

平安期以降、国東半島一帯は天台宗寺院の集合体である「六郷山」寺院群のエリアとして山中に開発の手が加えられ、その際にこれらの転石が片付けられている。現在ではその景観が失われてしまったが、棚田の景観に巨大な岩が点在し、それぞれの棚田の石垣に自然の安山岩の転石が組まれている光景は国東半島一帯でごく普通に目にするものであった。棚田を開くことがそのまま転石を片付けることにつながり、また、石垣を築くという有効利用にもつながっている。

国東半島一帯に石塔が多いのも、莫大に存在する安山岩の転石が存在することによるものであり、これも同様に有効利用の側面をもつ。国東半島では近世段階から続き豊後高田市香々地町夷地区をはじめとして安山岩を石材とした採石地が存在することが確認されているが（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1983・1984）、中世に遡る採石地は確認できていない。近年、国東半島の山中から採石に伴う未成品が確認されることがある。未成品とは矢穴がみられるものや平滑に仕上げようとした加工痕が残るものである。製作技法に関する研究は今後の課題であろうが、豊富に石材が産出する当地では、造立地が石材産出地に近いか、石材産出地そのものであることをうかがわせる。

大分県国東市国東町東堅来には総高 3.4m を測る九州最大の板碑である鳴 2 号板碑（図 18-42）が存在する。この板碑の側面部には割付け陰刻線が残り、これより背部を削ろうとしたものであろうが、未完成のまま立てられている。この資料に近接する山中に矢穴痕の

残る安山岩の石材が確認でき、石材産出地と造立地を考えるうえで示唆的である。国東半島における採石地が、ある特定の場所であった場合、前述した山川石の山川港や船倉火砕流堆積物の竹島港のように海を介して広範囲に分布することと対照的に、その分布の疎密は距離に比例するものと考えられる。しかしながら国東半島では疎密がみられず、等しく分布していることから採石地および製作地は造立地に近接する場所であり、南北朝期以前の石大工は出仕事で製作・造立を行ったことが想定できる。かつて筆者は南北朝期の豊後における特定石大工の手による凝灰岩製宝篋印塔の分布に関する論考を手掛け、これにおいても造立地に近接する場所で石材採取・加工を行ったとする仮説を立てた（原田昭一 2005)。その背景には、豊後においては、凝灰岩であろうと安山岩であろうと造立地に近接する場所いたるところに石材の露頭・転石が存在するのである。

石塔の様相が大きく異なる板碑激減期以降の戦国期は、造立数も飛躍的に増加するとともに分布域も拡大する。使用石材は前述した南北朝期以前のものを踏襲しているが、需要の拡大に伴い採石地そのものはかなり増加していると考えられる。それは南北朝期以前に確認できなかった新たな石材の存在に確認できる。福岡県福岡市米一丸地蔵堂 15 号板碑にみられる砂岩、筑後から肥前東側、およびに日向中南部みられる安山岩、豊前北部にみられる石英玢岩など、新たな製作に伴う石材が登場する。

石材の研究は製作技術論や製作地の特定をもとにした流通論に踏み込める石塔研究にとって重要な要素である。しかしながら、石材の詳細に論究しうる岩石学の分野に門外漢である筆者には力の及ばない部分が多く、専門領域を超えた学際的な研究が求められる。九州を代表する石塔石材である阿蘇-4 溶結凝灰岩にしても、分布域の中で特定した産地が求められない現状にあり、今後、さらに細かな産地同定ができる時期が来ることを願ってやまない。

第Ⅳ章　九州における整形板碑の始源

九州の板碑は、整形板碑と自然石板碑に分けられる。自然石板碑については、紀年銘をもつものとして、元永2年(1119)銘をもつ福岡県宗像市鎮国寺自然石板碑、天治2年(1125)銘をもつ福岡県福津市宝林寺跡自然石板碑、天養元年（1144）銘をもつ熊本県南小国町千光寺自然石板碑、仁安3年(1168)銘をもつ佐賀県武雄市勇猛寺自然石板碑、養和2年(1182)銘をもつ福岡県飯塚市筒野養和2年銘板碑（多田隈豊秋 1975）、建久元年（1190）銘をもつ長崎県諫早市西郷自然石板碑などが平安期から鎌倉期初期の紀年銘をもつものとして確認できる。自然石板碑の分布は、福岡・佐賀・長崎県および熊本県北部の北西部九州に多く、各県において平安後期から出現していることがわかる。

一方、整形板碑は、正嘉2年(1258)銘をもつ熊本県宇城市塔本家板碑(図 43-7、図 44-7)が紀年銘をもつ最古の資料として確認できる。第Ⅱ章の報告でもふれたが、上面が平らに仕上げられ、別材を嵌め込む枘穴が穿たれており、また、下部は扁平な板石を基部とし、碑身の大きさに合わせた孔に嵌め込まれている。この上下の様相はいかにも不自然であり、上部が欠損し、それを補うために平らに整形して別材を嵌め込む枘穴が後世に穿たれ、また、基礎の台石も折損した碑身を立てるために設えられたもののように思える。大分県由布市本村建長寺跡板碑（図 25-66）には折損した上下の部材に、それぞれ方形の枘穴を穿ち、補修している痕跡がみられるが（原田昭一 2002b）、塔本家板碑も同様なものと捉えるべきであろう。碑身だけみれば、消去法で考えても板碑以外には考えられず、残存部の上下の形態については、知る由もないが、九州における最古の板碑に位置づけられる資料である可能性をもつ。

これに続くものとして、弘安5年(1282)銘の熊本県あさぎり町元永峰観音堂跡板碑(図 43-8、図 44-8）があげられる。これは、上半が欠失し、整形板碑の最も特徴とされる頭部を山型に造り、額部に二条切込みをもつ形態であるかどうかは確認できないが、基部を前に突出させた板碑であることは疑いの余地がない。これに続くものとして、各地域の最古例をあげてみると、弘安9年（1286）銘をもつ佐賀県嬉野市湯野田大子堂板碑（図 2-10・11）、正応4年（1291）銘をもつ大分県国東市護聖寺板碑（図 21-51)、正応6年（1293）銘をもつ宮崎県日南市折生田板碑（図 49-46）、正応6年（1293）銘をもつ鹿児島県根占町岩林寺跡1号板碑（図 62-15）などがあり、いずれも 1280～1290 年代であることがわかる。全国的にみても、弘安年間（1278～1287）を前後する時期に石造物造立の大きな画期があり、この画期以降、各地に工人系譜が定着することが確認されているが、板碑に関し

ても、例外ではないことがわかる。

しかし、その様相は一様ではない。板碑の型式的特徴をもっともよく物語る額部より上部の形態に関して、九州最古の2例である熊本県宇城市塔本家板碑とあさぎり町元永峰観音堂跡板碑に関して、折損のため失われており、その詳細を知ることはできないが、そのほかの資料のうち佐賀県嬉野市湯野田大子堂北板碑以外はいずれも、頭部を山型に造り、山型下に正面から側面に回す断面三角形の二条切込みをもち、額部を前に突出させる特徴は共通する。これらの資料は九州の整形板碑に特徴的な凝灰岩や安山岩を石材としており、その初期から九州型として特徴的な形態を共有していることがわかる。

これに対して、佐賀県嬉野市湯野田大子堂に残る2基の板碑は様相が全く異なる。と言うのも、その形態をみると、山型部直下の二条切込みは両側面にきわめて浅く刻まれているのみで、正面にはみられず、額の突出も確認できない。全体的な整形・調整ともきわめて粗く、梵字種字および刻銘についても彫りが粗い。これに加えて、石材が緑泥片岩であることは、鎌倉～南北朝期における九州の整形板碑では他に類例をみない。この2基の板碑は、長崎県西彼杵半島に産出する緑泥片岩を石材としている唯一の板碑例である。嬉野市は佐賀県内では長崎県に最も近く、俵坂峠を越えれば大村湾を望む東彼杵であり、緑泥片岩製石塔の製作地である西彼杵半島には大村湾を隔てて非常に近い地理的環境にある。単発的であれ、整形板碑の原材を緑泥片岩に求めたことは、板状に採取できる石材が視野に入る地域ならではの現象であろう。

緑泥片岩製板碑については、関東地方や徳島県に分布し、その出現は湯野田大子堂板碑に先行する。関東地方の板碑は、埼玉県地方に初期のものが存在し、嘉禄3年（1227）銘をもつ熊谷市須賀広阿弥陀三尊図像板碑、安貞2年（1228）銘をもつ熊谷市真光寺阿弥陀種子板碑など埼玉県の緑泥片岩製板碑が最も古く、また、徳島県の板碑では文永7年(1270)銘をもつ石井町下浦の阿弥陀三尊種子板碑が最も古く位置付けられている。このような湯野田大子堂板碑に先行する地域の板碑の形態的な特徴をみても、湯野田大子堂板碑との系譜関係があるとはみられず、湯野田大子堂板碑は独自に出現し、また、その製作技術は受け継がれずに消滅した印象を受ける。

全国的にみても、弘安年間（1278～1287）を前後する時期に石造物造立の大きな画期があり、この画期以降、各地に工人系譜が定着することを前述したが、湯野田大子堂板碑はまさにこの時期に該当する。この時期に各地で発生した石造物の中には、ある一つの特徴がみられる。大分県国東市岩戸寺宝塔（1283年銘）・大分県臼杵市深田宝篋印塔（鎌倉時

代中期）・大分県佐伯市上岡十三重塔（鎌倉時代中期）など、当該期の石造物の中には、石塔系譜に位置づけられるものではなく、工芸品や木造建築物など、他部材の塔婆をモデルとした意匠を採り入れているものが存在する（原田昭一 2015a）。これらはそれぞれの地域において石塔の嚆矢として、モデル化するものや系譜が受け継がれずに消滅してしまうものも存在し、湯野田大子堂板碑も全国的にみて他地域からの石塔系譜が確認できないなら、これについても他部材の塔婆をモデルとした可能性を考えるべきであろう。

そこで、他部材の塔婆をみた場合、興味深い遺物がある。中世遺跡の発掘調査において、まれに木製の卒塔婆が出土することがある。佐賀県神埼市城原三本谷南遺跡では 12 世紀後半の木製卒塔婆が大量に出土している（神埼町教育委員会 1994）。これらの卒塔婆には、「南無大日如来」や「南無妙法蓮華経」をはじめとした墨書がみられるが、幅 3～5cm、高さ 15～20 ㎝の薄い板材の正面には額部や二条切込みの表現はなく、山型頭部直下の側面にのみ二条切込みが表現されている。これは薄板を剥ぎ、表面を調整して卒塔婆としているため、表裏面を立体的に造形する意識が当初から無かったことがわかる。

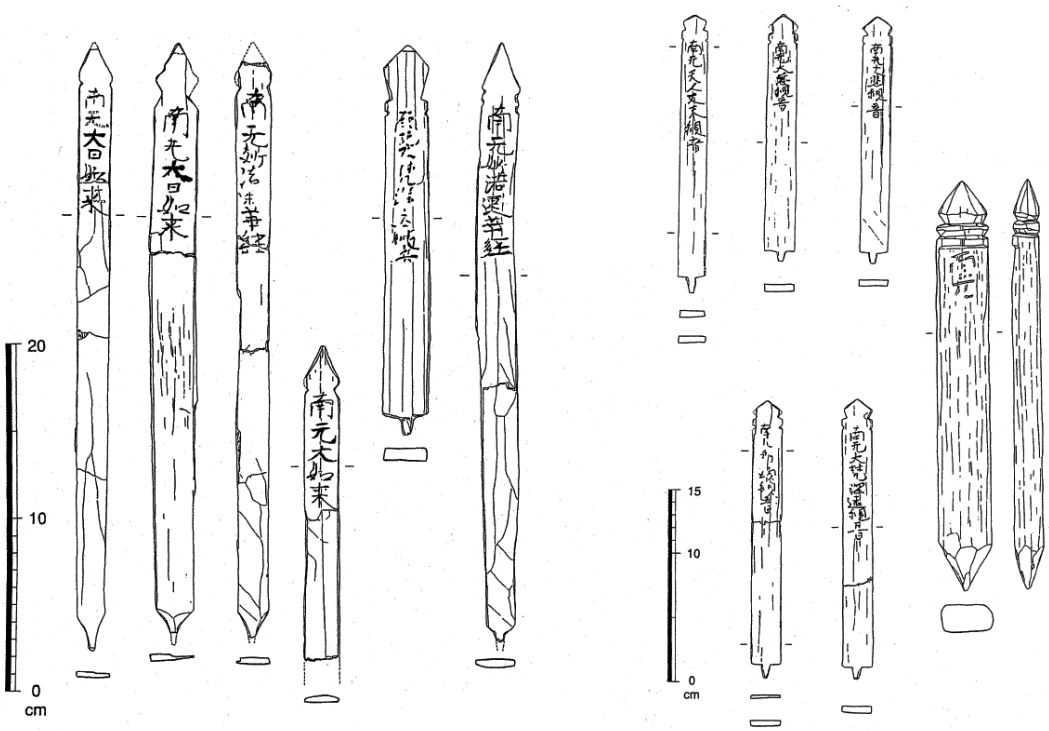


図 118　佐賀県神埼市城原三本谷南遺跡出土木製卒塔婆（神埼町教育委員会 1994）

湯野田大子堂板碑に先行する卒塔婆に、このような木製卒塔婆があり、湯野田大子堂板碑がこのような木製卒塔婆の形態を踏襲したものか、あるいは木製卒塔婆が薄板を剥ぐことにより板材を採り出しているように、湯野田大子堂板碑の製作に際し、原材を割り出すか、あるいは転石を採取するときに、緑泥片岩という石材特有の板状にはがれる特徴のため、木製卒塔婆と近似する薄板状になったかは明らかでない。しかし、石塔およびそれに先行する板碑形式の木製品の形態を踏襲したものではないことは明白である。

それでは、九州における整形板碑の出現にはどのような背景があったのであろうか。全国的に板碑は、埼玉県地方に初期のものが存在することが知られている。嘉禄 3 年（1227）銘をもつ熊谷市須賀広阿弥陀三尊図像板碑、安貞 2 年（1228）銘をもつ熊谷市真光寺阿弥陀種子板碑など埼玉県の緑泥片岩製板碑を石製板碑の嚆矢とし、以後、武蔵型板碑として爆発的流行をみる。武蔵型板碑は緑泥片岩を石材とするため、薄く仕上げる形態的特徴をもち、全国的にみても、緑泥片岩地帯の板碑に共通するものの、その他の石材の板碑とは形態的特徴が大きく異なる。

武蔵型板碑とは異なり、碑身に比較的厚みをもつものは、東北地方に古式のものが確認されている。延応 2 年(1240)銘をもつ福島県会津美里町藤田大光寺跡板碑や正元元年(1259)銘をもつ山形県南陽市梨郷神社如来堂板碑などをはじめとした南東北地方に分布するが、これらのうち山形県置賜地方の凝灰岩(石質石英粗面岩)を石材として板碑群が国東半島地域の板碑型式と近似していることが先学により指摘されている(播磨定男 1989)。これらの板碑群は、川崎浩良により「置賜型」と名付けられた一群であるが(川崎浩良 1954)、その広がりは隣接する福島県にも確認でき、最古の紀年銘をもつ板碑は、福島県に存在する。これら福島･山形県に存在する板碑も独自の型式変化を遂げていくことは言うまでもなく、類似性が指摘される鎌倉期から南北朝期にかけての九州の板碑でも、厳密な類似点が確認できるものは少数である。と言うのも、東北・九州、相互の地域において、同一系譜上にある板碑が存在していたにせよ、それぞれの地域において、独自の型式変化を辿り、それは時代が下がるにしたがい、型式差はより大きなものとなるからである。

九州において古式板碑の系譜が確認できる豊後・肥後・日向・大隅の初期の板碑は、細かな特徴までも酷似することは、同一系譜のもとに、それぞれの板碑が位置付けられる根拠になりえよう。1280～1290 年代の近接した時期に豊後・肥後・日向・大隅ほぼ同時に板碑が成立するが、この時期の南東北地域の板碑をみても、山形県川西町犬川竜蔵神社所在の弘安 2 年(1279)銘板碑や高畠町竹森所在の弘安 6 年(1283)銘板碑など 13 世紀代におさま

る板碑も複数例みられるが、すでに型式変化を遂げ、弘安 2 年銘板碑では山型形態をはじめとした諸特徴において、九州の板碑とは異なる点が現れはじめている。つまり、九州と南東北地域における板碑文化との接点は、九州に板碑が伝播した時期に求めるのが妥当であるものと考えられよう。「置賜型」の伝播について、川崎浩良は国東半島地域の板碑が含まれる「九州型」とともに、鎌倉地域からの導入を考えており(川崎浩良 1954)、そうであるなら両者の接点は鎌倉地域にあることになる。今後、型式論的に南東北と九州のみに限らず、第 3 の地域との検討が進むことにより、さらに踏み込んだ伝播ルートの解明がなされていくものと思える。

ところで近年、石塔について新たな研究動向がみられる。その背景として、発掘調査により木製塔婆の発見が相次いでいることがあり、板碑に関しても、頭部を山型に造り、額部に二条切込みをもつ典型的な板碑の特徴をもつ最も古い木製品が石川県野々江本江寺遺跡から出土し、これについては 11 世紀代に遡る可能性が指摘されている(伊藤雅文 2012)。同様に、長野県社宮司遺跡からは木製六角塔婆の風鐸と考えられる木製品に、頭部を山型に造り、額部に二条切込みをもつ角柱状のものが存在し、この資料の年代について 11 世紀～12 世紀中頃の年代観が与えられている（長野県文化振興事業団 2006）。

板碑形に類似する他の材質のものを概観すると、角柱状土製品が岡山県安養寺経塚から出土しているが、これに共伴する瓦経には、応徳 3 年(1086)の紀年銘が確認できる。これについては多くの先学が板碑との共通点を指摘しているが、加えて、近年、山口博之がこのような石製板碑以外の板碑形製品を整理し、板碑形の原型ともいえる表現形態は 11 世紀代に整えられたことを指摘している（山口博之 2014)。

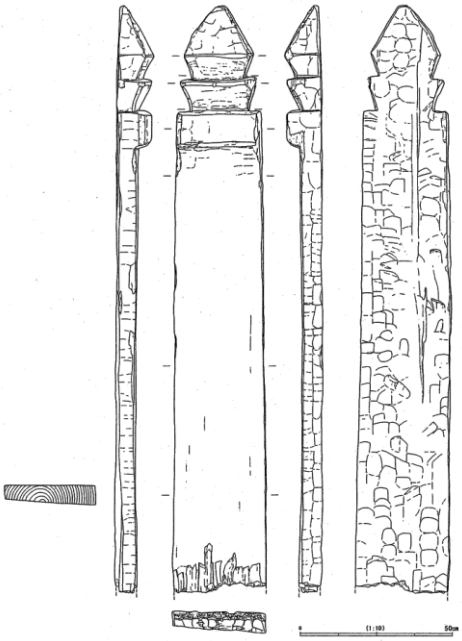


図 119　石川県野々江本江寺遺跡出土木製板碑（伊藤雅文 2012）

一方、磯野治司は、中国唐代の菩薩像幡に板碑の起源を求め、菩薩像幡にみられる板碑形モチーフの下限が 10 世紀半ば以降に崩れていくことから、遅くとも 10 世紀半ばを下限として板碑形のモチーフが日本にもたらされたとしている（磯野治司 2012)。ただ、磯野

自身、「菩薩像幡から木製板碑への展開過程は曖昧であり、現状では限られた情報からこれを類推するにとどまる。」としているように、実物資料を通して論証できないところに、隔靴掻痒の感がある。ただ、磯野が指摘した起源論は、きわめて示唆的であり、考えさせられる説である。

全国的にみても 9 世紀後半～11 世紀前半は、集落の発掘調査例が極限まで激減する時期といっても過言ではない。山口博之が整理した様々な材質の板碑形製品も、全国的に集落遺跡が再出現する 11 世紀からはじまり、比較的安定的に集落が営まれる 12 世紀以降に多く確認できる傾向があり、考古学的動向と一致する。集落遺跡空白期ともいえる 9 世紀後半～11 世紀前半は考古遺物が乏しいだけでなく、石造物もみられない。今後、この時期の類似資料に注意を払う必要があろうし、また、大陸において磯野が指摘する幡以外に板碑の系譜につながる資料が存在しないかどうかについても注意していく必要があろう。

近年、石塔研究は新たな時代に入っている。例えば、宝篋印塔の場合、中国南部の石造宝篋印塔の影響を受け、南都系石工集団の手による花崗岩製宝篋印塔が、我が国における宝篋印塔のはじまりとする近年の研究成果が、山川均(山川均 2008)や岡本智子(岡本智子 2005)により唱えられている。加えて、薩摩塔や宋風石獅子が中国浙江省に産する石材を利用し、寧波あたりで製作され日本にもたらされた可能性が指摘されている。このように、石塔の始源を探る場合、中国にその源が確認される例が増えつつあり、そのヒントは石造物だけではなく、ありとあらゆる材質のものを視野に入れ、注意しておく必要があるものと思える。まだまだ、中国の諸資料は表に出ていない部分が多く、板碑だけではなく、無縫塔・石幢などをはじめ、さまざまな塔形において言えることであろう。

第Ⅷ章　九州における整形板碑の終焉

これまでみてきた整形板碑・自然石板碑とも 17 世紀に入っても何ら減少することなく、また、整形板碑に関しては型式変化を逸脱することもない。いわば中世の板碑を中世からの視点でとらえようとした場合、その終焉を認識するにはきわめて困難であることがわかる。戦国期以降の板碑の主流が墓碑的機能のもと展開していることを述べてきたが、近世を通してその機能を受け継いでいることが、さらにその識別を困難にしている。

そこで中世の板碑と近世の墓碑を考える場合、その地下構造である墓そのものの動態と絡めて考えるのが妥当であろう。近世墓の特徴として、全国各地においてすべての階級・階層にとり入れられ、墓碑をはじめとした上部構造や、墓坑をはじめとした下部構造とも、考古学の対象となる遺跡としてその痕跡を残すため、わが国墓制史上、非常に画期的な位置づけがなされる。その出現はきわめて完成された様相をもち、中世の墓制との間に大きな懸隔が存在するかのようにもみえる。この近世墓のはじまりの特性をみていく中で、中世墓との断絶性・継続性、ひいては中世の板碑と近世の墓碑との画期を見いだせるものと思える。つまり近世墓の出現が中世墓の終焉につながるとする視点から板碑を捉えたい。

近世墓は、地下遺構の存在に加えて、地上表徴としての墓碑が遺物としての情報だけでなく、戒名・没年月日をはじめとして故人の沿革を知るための多くの情報を与えてくれる。しかし、一個人の墓をみても埋葬施設と墓碑とが、上下一致して検出される例のほうが少ない。埋葬施設は、土葬の場合、遺体を収めた棺を埋葬し、少なくとも棺の容積分の廃土を棺上に盛り上げ、土饅頭をつくるが、この上は枕石をはじめとした葬送に関わる複合的な施設を設ける場とされた民俗例が数多く確認されている。墓造営後、数年もすれば、棺が腐食して土饅頭が棺内の空間に流れ込み、元の地形に戻るのであろうが、墓上の空間は本来、葬送に関わる複合施設が設けられた空間と認識され続け、墓碑造立の場としては避けられる傾向にあったようである。墓碑の造立は常識的にみても、7 回忌・13 回忌などの年忌をはじめとして、埋葬後、数年を経た後に行われるため、埋葬地が土饅頭の状態でない時点のものであろうが、墓碑の位置と埋葬地点が、一致しない発掘調査例は多い。これは、民俗学的にみても、埋葬地と墓碑造立地が全く別空間である「両墓制」の場合だけでなく、単墓制においてもこのような実態はごく普通にみられる現象であることが指摘されている（岩田重則 2003)。そうであれば、反対に埋葬主体と墓碑の位置が一致している遺構に関しても対応関係が確実であるとは必ずしも言い切れないことになる。

このように近世墓地の場合、墓碑造立地が埋葬地を特定するものではないため、新たな墓坑が旧来の墓坑を切り、掘削されることも多々起こりえ、それを忌み嫌うものでもなかったようである。

一方、都市部では、江戸などの大都市に流入した単身の労働力販売層は、墓石を立てるものの、布施が絶えて無縁化した墓碑に対しては、石垣や踏石として再加工するために整理されてしまうことが指摘されている。江戸という大都市空間において、墓域確保のためには故人の存在を表徴する墓碑そのものも整理されてしまい、そのため、墓域には墓坑が錯綜状態で営まれ続けるという現象を残したのである（西木浩一 2004)。都市の宿命ともいえるものであろう。

このような墓の下部構造も含め、中世から近世へと転換する墓の画期は、板碑型の形態に代表される墓碑が激増する 17 世紀中葉の寛文期(1661～1673)であることは、全国各地において指摘されている（坪井良平 1939、竹田聴洲 1979、坂詰秀一 1981、谷川章雄 1983、三好義三 1986、朽木量 1996、斎藤忠 1996、時津裕子 1998、原田昭一 2002a、池尻篤 2002、松田朝由 2003)。この全国一律に共通する現象について、当時、幕府が積極的に推進した寺檀制度が背景に存在していたであろうことは、数多くの先学が指摘してきたことである。何よりも墓碑に刻まれる戒名と没年月日は、寺院に保管される過去帳に記載される各家の没故者として登録されるものであり、死後の世界から各家が、ある特定寺院の檀家信徒であることを証明し続ける役割を担わされている側面をもつ。この寺檀制度の陰に潜む強力な宗教統制・人民統制が墓制に反映されており、墓は葬送を行う側の論理により造営された施設であることを証明している。それは、被葬者になるであろう人物の逆修供養によるものであっても例外ではない。

寺檀制度の原形は、もうすでに戦国期に現れていることは先学により指摘されていることである（圭室諦成 1962)。戦国期、土地に依存した寺院経済が崩壊し、新たな経済活動の基盤を葬祭や墓地経営に求めた当時の時代相がよく墓制に反映されており、戒名と没年月日が刻まれる墓塔の流行はすでに戦国期から流行し始める。しかし、近世墓ほど画一的ではなく、さまざまな塔形がみられ、板碑もこれら石塔の一例にすぎない。これにもまして特徴的なのは、近世の墓碑が、単葬墓の場合、墓地移転などをはじめとした特殊例を除き、埋葬地及びその周辺に建てられる性格をもつのに対し、戦国期には必ずしも埋葬地に伴うものではなく、供養塔としての性格を維持し続けていることに大きな差がある。そもそも、墓塔とは五輪塔や宝塔など、そのものが大日如来の三昧耶形であるものをはじめ、

墓塔に刻んだ梵字種子があらわす仏菩薩を供養することにより、その功徳をさまざまな願意に振り向けるものであり、墓塔に求められる追善供養や逆修供養はその一種である。戦国期、小型化した石塔に小さいながら梵字種字が刻まれているのは、まだ、仏菩薩を供養する主旨が生き続けているためであろう。ここに、故人の存在を示す機能を第一義とする近世の墓碑との大きな違いがあり、供養塔であれば、必ず埋葬地に立てなければならないという必然性はないことになる。

それでは墓の下部構造はどうであろうか。近世墓の場合、土葬が主体でありながら、火葬による骨蔵器の存在が補完する。土葬には階級・階層差の反映や、各地域の供給事情により、箱棺や陶器甕なども存在するが、早桶の存在が主体を占める。戦国期には仰臥・側臥屈葬を主体に、座葬が加わるが、近世墓は座葬主体の様相をもち、そのため、戦国期に長軸１ｍ内外の楕円形土坑を呈していたのが、円形や方形で深く掘られた土坑へと変化していく様相をもつ。墓標の画一的な出現と歩を同じくして、埋葬形態は遺体容器に地域事情を抱えるため、旧来の屈葬を継承する地域も含まれながら、座葬を主体に展開していく。

これに対して、戦国期には埋葬主体に多様性をもつ。前述した近世墓に継承される土葬墓や骨蔵器のほかに、地下式坑や火葬土坑墓がみられる。地下式坑とは地下に横穴の室を設け、生きながらにその中に入り死んでいく土中入定や改葬前に遺体を安置する施設と考えられているものである。また、火葬土坑墓は土坑を掘り、その土坑中で火葬しそのまま埋葬するものであり、中には一部拾骨するものも存在する。しかしこれらは少数例であり、その執行には特殊な葬送のあり方が存在していたことがうかがえよう。地下式坑に関しては、関東地方をはじめその周縁地域に多く確認でき、その他の地域においては、局地的に流行する様相をもち、地域的偏りをもちながら存在する（東国中世考古学研究会・房総中近世考古学研究会 2007）。これらは戦国期に流行し、一様に 17 世紀前半に消滅する。しかし裏返せば、近世に至り、これらの特殊な信仰形態を払拭してしまった現象のひとつであり、そこにも、幕藩体制下に画一的な宗教政策が推し進められたことがあらわれているのではないだろうか。

戦国期の土葬墓は 12～13 世紀の土葬墓に比較すれば、遺物の質量とも極めて乏しい。12～13 世紀、一般集落においても輸入陶磁器を多く出土する西日本の地域では、青磁や白磁の碗皿類や合子、土師質・瓦質碗皿類をはじめ、刀剣類、和鋏、鏡などの供献品をもつものも珍しくはない。これに対し、戦国期の土葬墓は屈葬状態の主体部から１～数枚程度の土師質土器皿を主体に土師質・瓦質碗、あるいは漆器椀が出土するにすぎない。これらは

被葬者の生前の愛用品もあろうが、最も多くの例が確認できる土師質土器皿は、その上に何らかの供献物を載せる容器であったことが想定できる。しかし、これらの碗皿類もその出土頻度は必ずしも高くはなく、同時代の土葬墓出土遺物を代表する存在は銭貨であろう。銭貨が戦国期を遡る墓から出土するのは少なく、戦国期を特徴付ける墓の副葬品といって差し支えないものである。墓に銭貨を納める習俗は戦国期に限らず、近世に至っても継承されており、同様に、土師質土器皿を主体に土師質・瓦質碗、あるいは漆器椀を副葬する習俗も近世に受け継がれている。前述したように、寛文期に墓碑が出現することにより、近世墓へと移行するが、それ以前の戦国期の石塔も多様な塔形をもちながら、没年月日と戒名が刻まれており、死者を送る儀礼が存在していたことは推測できる。むしろ地上に標す墓標が非常に政治色のつよいものであることに対し、地下に隠される主体部は何ら政治色を帯びる必要性はないため、葬送儀礼については中世から近世への変化なき移行の様相を呈したものと思える。

前述したように、寺檀制度の芽生えは、戦国期にみられるが、近世に至り、家父長制複合家族に内包されていた封建的小農民自立の動きをもとに、新たな経済基盤である単婚家族の「家」として把握するため、ひとつの手段として一家一寺制の寺檀関係を推し進めたとされている（大桑斉1968）。その現象は、17世紀後半に現れはじめ、「家」の確立が独立性をもつ葬祭の執行単位とされることが前提となる位牌堂や、各家の仏壇に置かれている位牌・過去帳・回向帳類の法名記載などが、元禄期(1688～1704)以降に顕著になることから、この時期が寺檀制の最終基盤確立期であると考えられている（竹田聴洲1957）。

前述したように、寛文期の板碑型墓碑の出現とともに始まる近世墓は、18世紀前葉に新たな局面を迎える。当該期は全国的に板碑型墓碑に代わり、より小型の位牌型(櫛型)墓碑が爆発的に流行しはじめ、また、一般在家信徒の戒名脚字も戦国期によくみられる「禅定門」・「禅定尼」から「信士」・「信女」に変化する時期であり、近世墓の中に残存する中世的な遺制を完全に払拭しきれた時期として評価できよう。谷川章雄は江戸の墓制変化を論じる中で、17世紀後葉と18世紀前葉に近世墓成立の画期が認められるとし、村落の場合、「家を単位とした先祖供養の一般化」を近世的なものと捉え、後者の画期をより重要視している（谷川章雄1996）。

寛文期頃、寺檀制度の成立に起因する板碑型墓碑成立をはじめとする近世墓の成立は、それ以前の墓制に比較すれば隔世の感がある。檀那寺に保管される過去帳に記載される戒名と没年月日の墓碑への顕在化は、死後の世界から各家が特定寺院の檀家信徒であること

を証明し続ける役割を担わされており、きわめて政治色の強い遺物であることがわかる。中世墓の多様な様相からさまざまな属性が取捨選択され、墓碑が板碑形に収斂し、埋葬主体も土葬墓・火葬墓・火葬土坑墓・地下式坑などから、火葬墓の特殊例を含みながら、ほぼ、土葬墓に限定されてしまう。しかし、墓碑が政治色を強く帯びる性格をもつことに対して、葬送儀礼に伴う副葬品の品々は、直接には後世の人々の目に触れるものではなく、強力に統一する必要性はない。

幕府の寺院統制の大きな柱である本末制度は、本寺・末寺の関係を各宗派に強制するものであり、中央集権的な寺院組織のネットワークが築かれ、人的交流をはじめとして、本寺の意向が、各地の末寺にスムーズに伝えられる組織が17世紀中葉に出来上がった。そして、さまざまな情報が上からの強制だけでなく、全国的に共有される環境が整い、このような近世墓への変化を生みだした。

これまで近世墓碑の出現をはじめとした中世から近世にかけての墓制の変革に終始した。本稿では近世墓の一属性である近世墓碑の出現をもって、中世板碑の終焉と捉えたい。自然石板碑に関しては、17 世前半に通常にみられるものが、寛文期以降でも確実に継承されていることは全国各地においてみられる。ここには考古学上の画期はみられない。しかし、整形板碑に関しては大きな画期が存在する。板碑に限らず、中世石塔は戦国期から 17 世紀前半の慶長・元和・寛永期などに至っても何ら減少することはなく、形態的な型式組列も確認できる。板碑よりもはるかに数が多い五輪塔が爆発的に流行する現象は九州だけでなく、全国的に確認できるものであろう。しかし、寛文期を契機として、五輪塔・宝篋印塔・宝塔等、板碑以外の墓塔の機能をもつ石塔群は、ごく一部の例外を除き、一斉に消えてしまう。整形板碑が生き残り、その型式を継承したにせよ、寛文期以降の板碑型墓碑とは型式的な隔たりが大きいものがほとんどである。つまり、同じ板碑の形態であっても新たに生まれ変わったものであることがわかる。寛文期に近世墓が成立するにあたり、各地域特有の型式が成立し、ここに近世の新たな板碑型墓碑の型式が始まる。加えて、中世の板碑とは比較にならないほどに資料が増加する。前述したように板碑だけではなく、五輪塔・宝篋印塔・宝塔等さまざまな塔形が板碑型墓碑に集約されてしまったのである。この背景にある近世の寺壇制度が宗教史・政治史の画期であるなら、中世の整形板碑はそれにより駆逐されてしまった一属性であるといえよう。

結論

本稿では九州における紀年銘をもつ整形板碑の実測図作成をもとにした資料化を前提とし、筑前 5 例・筑後 1 例・肥前 6 例・豊前 24 例・豊後 118 例・肥後 8 例・日向 57 例・薩摩 11 例・大隅 18 例の板碑を紹介した。過去に様々な研究書等で存在が指摘されているものについても、現在は確認できないものも少なくなく、管見に触れる限り資料化してきた。言うまでもなく遺漏があろうが、紀年銘資料をもたない板碑を視野に入れても、これらの紀年銘資料を論じ、板碑の全貌を語るにおいて、問題はない最低限の把握はできているものと判断したい。

この資料数により九州各地における板碑の分布傾向がつかめる。資料数が 10 例に満たない筑前・筑後・肥前・肥後では、整形板碑が乏しいといわざるをえなく、反対に、豊前・豊後・日向・薩摩・大隅では整形板碑が隆盛をきわめたことがうかがえるが、中でも 118 例を数える豊後が際立っていることがわかる。この分布傾向は紀年銘をもたない資料に照らし合わせても同様な傾向を示すものと思える。

この隆盛地の違いには、石材の存在が大きく起因しているものと考えられる。豊前・豊後・日向では良質な安山岩が、また、豊後・日向・薩摩・大隅では良質な凝灰岩が、それぞれ産出し、工人系譜のもと板碑製作が根付いていることがうかがえる。これに対し、筑前・筑後・肥前には凝灰岩・安山岩のような良質な石材が乏しく、板碑製作に適さない花崗岩や緑泥片岩が多くみられ、また、肥後においては凝灰岩が豊富であるものの、自然石板碑の隆盛が整形板碑の流行の妨げになっている印象を受ける。

整形板碑の型式に目を向けると、ほとんどの属性において、板碑極少期である 15 世紀前半に大きな画期が存在する。13 世紀の整形板碑出現以来、鎌倉期末～南北朝期を通じ、安山岩・凝灰岩を石材とする板碑すべてにおいて、定型化した型式をほとんど逸脱することなく製作され続けており、山型を三角形に上部に突出させ、山型下に断面三角形の二条切込みが近接して刻まれ、二条切込み下には突出した額部をもち、その下には梵字種子や像様等で仏菩薩をあらわし、それとともに銘文等を刻んだり墨書したりした碑身がある特徴をもつ。この時期の細かな型式変化は、石大工単位と思われる細かな差異が、きわめて小範囲でしか観察できなく、それがこの時期の特徴でもあることがわかる。銘文から読み取れるこの時期の整形板碑の願意をみると、死者の冥福を祈るため仏事を行う追善供養の板碑が多く確認できる。

これに対し、板碑極少期である 15 世紀前半の画期をはさみ、1470 年代以降にほとんどの属性において変化が生じ、形態が多様化および小型化するともに資料数が激増することが確認できる。山型は三角形の頂部が前方に移行し、中には三角形が失われ、方形をはじめとしたその他の形態も出現する。また、山型直下の二条切込みは細くなり二条の陰刻線状に変化する傾向とともに間隔をあけて刻まれるようになり、この二条線が失われる資料すら出現する。額部の突出は低くなり、額部の突出すら表現されていない板碑もみられ、碑身部にみられる梵字種子も薬研彫りから小さく線刻状になる傾向があり、はては梵字種子すら刻まれなくなり、梵字種子にかわり円相や卍をはじめ多様な様相をもちはじめる。もちろん鎌倉・南北朝期に流行する型式をもつものもそのまま存在するが、かなり様相が異なり、復古調を意識したものかのようにも受け取れるものへと変化している。

この時期には、板碑碑身部の中に地蔵像や位牌形が確認できるようになり、当時の冥界信仰の流行や、銘文に戒名や没年月日が刻まれていることからしても、板碑が墓碑的機能をもつようになったことがわかる。地蔵像を刻むことは近世墓碑まで受け継がれていくが、板碑造立の画期に伴い成立し流行する新たな要素の一つに数えられるし、墓碑的機能の出現はまさに近世墓碑の下地となるものであった。

また、板碑激減期以前にあたる南北朝期後葉に流行する結衆の塔婆は、交名をもつ特徴がみられ、現代も村のお堂など地域の信仰の対象となっている空間に造立されている特徴がある。結衆の塔婆としては、板碑よりはむしろ宝篋印塔や宝塔などを利用することが多く、南北朝期後葉に始まった集村化に伴い、村人の紐帯を強める目的のもとに製作されたものと考えられる。このような結衆の塔婆は室町期から戦国期に至り、宝篋印塔・宝塔から石幢（六地蔵塔）にその主役の座を譲り、板碑自体が結衆の塔婆とされるのは比較的少ない。

これに加えて、庚申信仰に伴う造立例が 16 世紀後半代以降に出現する。以後、17 世紀後半に至っても、「庚申」の文字が刻まれるものから、18 世紀代には、「庚申」の文字が消滅し、青面金剛が陽刻される庚申塔へと変化していくが、これについても、板碑減少期の 15 世紀前半以降に出現した新たな要素として近世に受け継がれている。

このような変化は、板碑に限らず、五輪塔・宝篋印塔・宝塔すべての石造物がこの時期に変革期を迎えている。戦国期は石塔の墓碑化がひとつの大きな特徴として捉えられようが、これはその背景として、村落内の有力者に限定されはするものの、その資料数からし

て前代に比較すれば明らかな造立層の拡大化があり、それは集落景観や墓地景観にもあらわれるような社会的変化が背後に存在することに起因するものである。

また、このような整形板碑のはじまりについては、紀年銘をもつ最古の資料として、正嘉 2 年（1258）銘をもつ熊本県宇城市塔本家板碑が最も古いが、弘安期（1278～1287）・正応期（1288～1292）に九州各地においてはじまりのピークを迎えることが確認できる。それは、地域や板碑の石材などを問わず、共通する。これは板碑に限らず、五輪塔をはじめとしたさまざまな石塔において、この時期に画期を迎え、また、工人系譜が先進的な各地に根付いていく時期である。しかも、そのはじまりはきわめて完成された様相をもち、鎌倉後期から南北朝期にひとつの隆盛期を迎える。

この時期は全国的にみても、関東の武蔵型板碑に遅れるが、比較的、古式の板碑が確認できる南東北の動向に近い。この南東北の板碑も安山岩や凝灰岩を石材としており、初期の板碑の型式的な特徴を比較してもきわめて似ている。

なお、近年の板碑研究において木製の塔婆との関連性が指摘されているが、11 世紀後半以降の木製塔婆の中には明らかに板碑形をしているものがあり、今後の動向が注目されよう。豊後に例をとれば、軟質の凝灰岩を石材として石造物を製作することは平安時代後期にはじまり、大分県臼杵市臼杵石仏に代表される磨崖仏については、背中近くまで彫成する丸彫りの特徴をもち、木彫仏にひじょうに近い様式をもつことから、木彫の仏師が木彫仏とほぼ同じ工具により製作されたことが指摘されている。同様に、豊後では前述したように石塔開始のピークである弘安期に石塔とは異なる木製あるいは金属製の塔婆をモデルにしたと考えられる石塔が複数基存在し、石塔のみで解釈できない要素もある。九州の石塔が比較的彫成しやすい軟質な凝灰岩や安山岩を石材としていることからも木製の塔婆からの移行はスムーズに行われたであろうことが推測できる。

一方、板碑の終焉については、中世側からの視点では捉えにくい。板碑に限らず、中世石塔は戦国期から 17 世紀前半の慶長・元和・寛永期などに至っても何ら減少することはなく、形態も戦国期からの型式変化を受け継ぐ。中でも、板碑よりもはるかに数が多い五輪塔が爆発的に流行する現象は九州だけでなく、全国的に確認できる。しかし、寛文期を契機として、五輪塔・宝篋印塔・宝塔等、板碑以外の墓塔の機能をもつ石塔群は一斉に消えてしまう。整形板碑が生き残ったにしても、寛文期以降の板碑型墓碑とは型式的に異なるものがほとんどである。それとともに近世的な墓地景観に変化し、このような変化の背景には、当時、幕藩体制下で強力に推し進められた寺壇制度が強く影響したことが考えられ

る。これにより、中世的な石塔が否定され、整形板碑もその渦中に飲み込まれてしまったものと考えたい。

九州の板碑は整形板碑だけでなく、自然石板碑も数多くみられる特徴がある。本稿で集成を試みた板碑の資料数は筑前・筑後が 95 例、肥前が 69 例、肥後が 354 例、豊前が 25 例、豊後が 9 例、日向が 21 例、薩摩・大隅が 5 例といったように筑前・筑後・肥前・肥後に圧倒的に多いことがわかる。これらの地域には、整形板碑が少なく、自然石板碑と整形板碑が補完しあい分布する関係であることがうかがえ、整形板碑が隆盛する地域に自然石板碑が少なく、反対に自然石板碑が隆盛する地域には整形板碑が少ないことがわかる。各時代の造立についても、ほぼ、整形板碑と似た傾向を示す。ただ大きく異なるのは、整形板碑が鎌倉期中葉～後葉にはじまることに対し、自然石板碑は平安時代後期には出現していることである。以後、小数ながら造立され続け、整形板碑が流行しはじめる鎌倉期後葉に至り、自然石板碑も数を増やす傾向がある。このことから整形板碑出現以前から、仏菩薩を安置し、刻銘を施した石の塔婆の存在が求められたことが自然石板碑を通じて理解できる。また、その終焉についても整形板碑のように形態に現れにくい特徴をもつため、寛文期以降でも庚申塔などの民間信仰碑や墓碑等でごく普通にみられる。しかし近世の自然石板碑は墓碑として造立される場合、特に豊前から豊後にかけての山稜部をはじめ、修験の地や、在家信徒の墓地においても行者の墓と判断できるものに多い傾向があり、近世墓碑の中でも特殊な位置づけがなされていることは興味深い。

本稿において、さまざまな角度から整形板碑を考察し、また、それを補う形で自然石板碑をみてきた。板碑形に関しては、本稿で集成した連碑や両面板碑をはじめ、今回触れなかった四面板碑（角塔婆）など、関連資料も多い。連碑は 2～3 基並立の板碑に通じ、これを 1 石で表現したものであり、凝灰岩・安山岩の整形板碑地帯各地で確認できる。また、両面板碑については、豊前から豊後にかけての山稜部において分布する傾向がみられ、地域的な偏在が確認できる。さらに四面板碑（角塔婆）については、凝灰岩・安山岩の整形板碑地帯各地で確認できるものの、特に、薩摩地域で多くみられる印象をもつ。山川石も含めて良質な凝灰岩産出地でありながら板碑がさほど多くみられないのも、この四面板碑（角塔婆）と補完関係にあることが起因しているものであろう。加えて、九州には四面を超える多角面体の塔婆が存在する。これには板碑形を彫出するものもあれば、そうでないものもみられる。その分布はきわめて単発的であり、分布域・系譜関係など捉えにくい要

素をもつ。今後このような板碑の亜流ともいえる資料も視野に入れ、考察を加えていくべきであろう。

冒頭の研究史の項でもふれたが、板碑の資料化及び集成に偏り、各論に踏み込んだ議論がほとんどなされていないのが九州における板碑研究の実情である。しかし、学問の基礎として資料化及び集成の作業はすべての前提となるものであり、本稿においてもこの視点を最優先し、取り組んだ。今回、集成した資料に対し様々な角度から考察を加えたが、まだまだ十分に資料化されているとはいいがたい。さらに踏み込んだ議論を深めるためにも、紀年銘資料だけでなく、より多くの資料化に取り組むべきであろうし、それを踏まえて、さらに細かく各論に対して議論を深めていく必要があろう。本稿がその敲き台となることを願ってやまない。

【註】

（１）　松岡史は『肥前の板碑　佐賀県』の中で、笠塔婆や一石笠塔婆と考える資料についても、「有蓋類型板碑」や「一石有蓋類型板碑」として、板碑の範疇としてとらえている。筆者はこれらを笠塔婆と捉え、集成の対象としていない。

（２）　紀年銘の残る整形板碑の実数は、豊前・豊後でも圧倒的に大分県域において多く確認されている。これは、局地的に卓越した石造文化財地域が存在する大分県では、板碑をはじめとし、質量とも全国を代表する資料が存在すると言われてきたため、自ずと石造物に対する調査研究意識が他地域と比較して高くなる結果を生み、今回とりあげる豊前地域でも大分県域と福岡県域では石造物に関する関心の温度差が存在することも一因であると思われる。特に、今回の対象地とした地域でも宇佐市域は入学正敏によりほとんど漏れのない悉皆調査が行われており（入学正敏1988）、宇佐市域所在の資料が総数の半数以上を占めることになった大きな要因となっている。それゆえ、今後、福岡県域において新たな資料が発見される可能性はきわめて高いものと思われる。

（３）　福岡県豊前市求菩提山周辺においては、かねてより如法寺に永徳年間（1381～1384）の墨書銘がある整形板碑が存在すると指摘されていた（多田隈豊秋1969）。しかし、その型式的特徴をはじめ、梵字種子および月輪線刻の弱さなどほとんどの要素が戦国期後半に下る要素をもつものと考えられる。1885年段階ではすでに墨書銘も確認できないことも指摘されており（松岡史1983）、当該資料に関して検討課題が多く、本稿においては保留する。

（４）　大分県大野郡緒方町上自在所在三反畑板碑の梵字種子の解釈については、諸先学により諸説あり、必ずしも一定しない。服部清道は碑身の巨大な主尊種子をシロキエン（一字文殊）とし、下方の脇侍と考えられる二尊種子は、ウーン（降三世明王）・マン（不動明王）であり、額部主尊種子であるバン（金剛界大日）とともに三尊形式をとり、金胎不二の理を説いたものとしている（服部清道 1972）。また、石村喜英は碑身の巨大な主尊種子についてシャ・シャ・カを結合した三字合成のものとし、それにア一点と空点を付けたものであり、釈迦を音写したシャーンカであると解釈した。また、その下部の小さい梵字をウーン（普賢菩薩）・マン（文殊菩薩）とし、釈迦三尊形式をあらわした梵字種子であると解釈した（石村喜英 1993）。梵字種子に関しては、深淵な仏教理念のもと解釈の分かれるものであり、門外漢である筆者の力には到底及ぶものではなく、是非について論議する力のないことは認めざるを得ない。小稿では、仮に石村喜英の論考により、釈迦三尊形式をあらわした梵字種子としておき、識者の指導を仰ぎたいと考える。

（５）　額部の突出度は、単に実寸のみでは表せない。と言うのも、資料が総高 50cm の類例と総高３ｍの類例の場合とでは、仮に１cm の額部突出厚でも突出度が大きく異なる。そこで、額部突出厚÷額部横幅の数値が、0.05 以上を本類型で扱い、0.05 未満を b 類型におさめるものとする。

（６）　基部形態は板碑を検討する場合、最も注意を要しなければならない部位である。というのも、折損している場合、その基部形態には言及できないし、碑面の銘文が埋没部分に隠れている場合は、明らかに基部も埋没しているものであり、その様相をうかがい知ることはできない。考古資料が発掘調査により完全に資料化されているものを多く対象としていることに比較して、石造物は現地に遺存するものを対象とするため、地上に露出している部位には問題はないが、地下に埋もれているであろう部位に関しては、不確定要素が多く、ここで類型化した要素についても、後世、発掘調査などにより新たな実態が捉えられる可能性も否定できない。また、板碑が原位置から移転させせられ、その際に本来の基部形態を失ったものや、数百年におよぶ屹立状態を保つのに最も負荷のかかる部位であるため、剥離磨耗が著しく認められるなど様々な可能性が考えられる。現在、本稿でとりあげた紀年銘板碑について、発掘調査が行われ、その基部構造が確認できた例は、豊前・豊後においても其ノ田 1・2 号板碑以外には、類例を知らない。其ノ田 1・2 号板碑の場合、中世前半の集石遺構・土坑墓との関連で捉えられる原位置での状態での発掘調査成果が得られた(大分県教育委員会 2000)。しかし、このような良好な調査成果はきわめて稀であり、其ノ田 1・2 号板碑に至っても河川改修のため、現在では近接地に移転させられている。

（７）　正応 6 年（1293）銘をもつ宮崎県折生田板碑（図 49-46・図 55-46）には、5 名の交名がみられるが、銘文が読みとれる交名には、いずれも「僧□□」とあり、南北朝に流行する信仰集団としての結衆とは異なる性格をもつものと考えられる。

（８）　位牌型式は、久保常晴の分類による(久保常晴 1984）。

【参考文献】

青木勝士・北川賢次郎・前川清一・矢野裕介 1996「金石遺物」『新熊本市史』史料編第 1 巻考古資料

安岐町教育委員会 1992『はるかなる安岐郷ふるさとの文化遺産』

朝地町史刊行会 1967『朝地町史』

朝地町教育委員会 1988『朝地地区遺跡群発掘調査概報』

安心院町誌編集委員会1970『安心院町誌』

跡部直治 1933「板碑の源流および本質について」『史蹟名勝天然紀念物』八ノ二　史蹟名勝天然紀念物保存協会

跡部直治 1936「位牌」『仏教考古学講座』第 6 巻　雄山閣

池上年 1917「福岡附近に於ける板碑と五輪塔との関係」『考古学雑誌』第 7 巻第 11 号　日本考古学協会

池尻篤2002「近世墓標の形式と階層性-武蔵国比企郡小川村の墓標を事例として-」『駒澤考古』28号　駒澤大学考古学研究室

池田宗男 1993a「南九州の古石塔（その八）－元亀・元禄のモニュメント－」『季刊　南九州文化』第 50 号　南九州研究会

池田宗男 1993b「南九州の古石塔（その九）－天文・安政のモニュメント－」『季刊　南九州文化』第 51 号　南九州研究会

池田宗男 1993c「南九州の古石塔－天正・寛文・万延のモニュメント－」『季刊　南九州文化』第 52 号　南九州研究会

池田宗男 1993d「南九州の古石塔－逆修塔と僑墳－」『季刊　南九州文化』第 55 号　南九州研究会

池田宗男 1993e「南九州の古石塔－天正時代の石造文化－」『季刊　南九州文化』第 56 号　南九州研究会

諫早市役所 1958『諫早市史　3』

石田茂作 1969『日本仏塔の研究』講談社

石村喜英1993「板碑に見える特殊用語と異体字」『仏教考古学研究』雄山閣出版株式会社

磯野治司 2012「板碑の研究史と起源」『記念講演釈迦の故郷を掘る　セッション 1　板碑研究の最前線』一般社団法人　日本考古学協会第 78 回総会実行委員会　立正大学考古学研究室

市村高男 2013「中世日本の西の境界領域と黒潮トライアングル研究－鹿児島県三島村硫黄島の調査を踏まえて－」『黒潮圏科学』6 巻 2 号　高知大学大学院黒潮圏海洋科学研究科

伊藤雅文2012「珠洲市野々江本江寺遺跡出土木製塔婆類について」『石川県埋蔵文化財情報』第27号　石川県埋蔵文化財センター

稲村坦元 1923「武蔵国分寺地址の調査－第三遺物　乙青石塔婆」『東京府史蹟勝地調査報告書 1』東京府

稲村坦元 1959『武蔵野の青石塔婆』埼玉県郷土文化会

入江英親1985「八面山周辺の石造美術」『八面山の文化』大分県教育庁文化課

入来町誌編纂委員会1978『入来町誌』

岩男順 1982「石造美術」『大分県史中世篇 1』大分県

岩田重則2003『墓の民俗学』吉川弘文館

岩本教之ほか1996『英彦山大河辺山伏墓地』添田町教育委員会

院内町誌刊行会1983『院内町誌』

内恵克彦・甲斐素純 1979『九重町石造物資料』九重町教育委員会

内恵克彦 1982「石造美術」『玖珠郡史談』5 玖珠郡史談会

大分県大野町史刊行会 1980『大分県大野町史』

大分県教育委員会 2000『其ノ田板碑』

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1983『国東半島の石工１』

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1984『国東半島の石工２』

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1986『豊後國田染荘の調査　1』

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1993『豊後國都甲荘の調査　本編』

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1992『豊後國都甲荘の調査　資料編』

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1996『石造文化財の保存対策のための概要調査』

大分県立歴史博物館 1999『豊後國香々地荘の調査』本編

大木町誌編さん委員会 1993『大木町誌』大木町

大桑斉1968「寺壇制度の成立過程」『日本歴史』242・243　日本歴史学会

大島恒彦 2005「湯野田太子堂の板碑について－佐賀県嬉野町湯野田の石像の原石について－」『嬉野町石塔調査報告』嬉野町教育委員会編

大田村教育委員会 1994『豊後国田原別符の調査Ⅱ』

大村市史編纂室 2014『新編大村市史　第２巻（中世編）』

緒方町教育委員会 1998『緒方町の文化財』

緒方博文 1999「県北部の題目板碑について―本山定善寺の石塔群を中心に―」『宮崎県地方史研究紀要』第 25 輯　宮崎県立図書館

岡本智子 2005「日本における石造宝筐印塔の成立過程とその意義」『日引』6 石造物研究会

越智春一 1982「神社・寺院・その他」『長洲町史』長洲町

小野晃司・曽屋龍典・細野武男 1982「薩摩硫黄島地域の地質」『地域地質研究報告（5 万分の 1 図幅）』地質調査所

小野晃司・渡辺一徳 1983「 阿蘇カルデラ」『地球』第 5 巻 2

甲斐常興・伊豆道明 1978『日向の石塔-鎌倉・南北朝紀年在銘塔－』

甲斐常興 1979「宮崎県最古の板碑－折生田板碑について－」『史迹と美術』第 49 輯ノ 2(第 492 号)
史迹美術同攷会

鹿児島県教育委員会 1958『鹿児島県文化財調査報告書』第 5 集

鹿児島県教育委員会 1964『鹿児島県文化財調査報告書』第 11 集

鹿児島県教育委員会 1966『鹿児島県文化財調査報告書』第 13 集

鹿児島県教育委員会 1971『鹿児島県文化財調査報告書』第 18 集

上津江村教育委員会 1997『上津江の文化財（四)』

川勝政太郎 1967『石造美術入門』社会思想社

川勝政太郎 1982「石造塔婆としての板碑」『板碑研究入門』ニュー・サイエンス社

川上義郎 1989「墳墓」『嘉島町誌』嘉島町

川崎浩良 1954『山形県の板碑文化』出羽文化同好会

河内町 1991『河内町史』通史編上

河野清実 1913「豊後に於ける板碑様の古碑」『歴史地理』第 21 巻第 5 号日本歴史地理学会

河野清実 1914「豊後に於ける板碑系統の碑」『歴史地理』第 23 巻第 3 号日本歴史地理学会

河野清実 1932『国東半島史　下巻』大分県東国東郡教育会

河野治雄 1983「板碑の地域層－鹿児島県－」『板碑の総合研究 2 地域編』坂詰秀一編　柏書房

川原巧 2005「文化財編」『岱明町史』岱明町

神埼町教育委員会 1994『城原三本谷北遺跡　城原三本谷南遺跡』

木下密運 1967「中世の念仏講衆」『元興寺仏教民俗資料研究所年報　1967』

九州歴史資料館 1986『筑前糟屋-若杉山の仏教遺跡-』

旭志村史編纂委員会 1993『旭志村史』旭志村

楠浦町誌編纂委員会 2013『楠浦町誌』楠浦地区振興会・楠浦町公民館

朽木量1996「近世墓標とその地域的・社会的背景について」『史学』66　慶雁義塾大学文学部内三
田史学会

国東町教育委員会 1982『国東町の文化財』

久保常晴 1977「宮崎県の題目板碑」『続仏教考古学研究』ニューサイエンス社

久保常晴 1984「位牌」『新版仏教考古学講座』第 3 巻雄山閣

熊本県教育委員会 1992『熊本県未指定文化遺産調査　1 』

熊本市 1993『新熊本市史　史料編第 2 巻　古代・中世編』

熊本市教育委員会 1969『熊本市西山地区文化財調査報告書』

熊本市教育委員会 1971『熊本市北部地区文化財調査報告書』

熊本市教育委員会 1973『熊本市東部地区文化財調査報告書』

熊本市教育委員会 1975『熊本市南部地区文化財調査報告書』

熊本市教育委員会 1978『熊本市中央南地区文化財調査報告書』

熊本市教育委員会 1980『熊本市中央北地区文化財調査報告書』

熊本市教育委員会 1982『「奥村方板碑群」調査報告書』

国土交通省関東地方整備局・長野県埋蔵文化財センター2006『一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書 1』

小谷桂太郎 2010「神社仏閣・文化財等」『西原村誌』西原村

小泊立矢 1987「石造品からみた中世の地蔵信仰」『大分県地方史』124 大分県地方史研究会

小花波平六 1985「石仏研究の事例と課題形態の研究と課題」『石仏研究ハンドブック』雄山閣

五味克夫 1966「栗野町稲葉崎・田尾原供養塔群」『鹿児島県文化財調査報告書』鹿児島県教育委員会

五来重 1964『元興寺極楽坊中世庶民信仰資料の研究』法藏館

斎藤忠1996「撰要寺墓塔の研究」『斎藤忠著作選集』第4巻　雄山閣出版

佐伯市史編纂委員会 1974『佐伯市史』

佐伯市教育委員会 1989『佐伯氏一族の興亡』

埼玉県立歴史資料館 1981『埼玉県板石塔婆調査報告書』埼玉県教育委員会

財団法人元興寺文化財研究所1977『英彦山・求菩提山仏教民俗資料緊急調査報告書』

酒井富蔵 1972『国東半島の石造美術』国東半島文化研究所

坂詰秀一1981「石造塔婆と墓標」『中山法華経寺誌』日蓮宗大本山法華経寺・中山法華経寺誌編纂委員会編

坂詰秀一 1982「板碑研究の課題」『板碑研究入門』ニュー・サイエンス社

坂詰秀一 1983「板碑の名称とその概念」『板碑の総合研究 1 総論編』柏書房

坂本村史編さん委員会 1990『坂本村史』坂本村

佐藤誠 1983「熊本県」『板碑の総合研究２　地域編』柏書房

佐藤誠 1989『九州の石塔　調査資料集』芸文堂

重永宰 1979『薩摩国揖宿郡・頴娃郡石造塔婆考』

重藤輝行 2008『原遺跡 18 次』福岡県教育委員会

重松敏美 1969『豊州求菩提山山伏修験文化孜』豊前市教育委員会

志佐惲彦 1975「肥前の石造物」『肥前の仏教美術』佐賀県立博物館編

渋谷忠章 1983「板碑の地域層-大分県・宮崎県-」『板碑の総合研究 2 地域編』坂詰秀一編　柏書房株式会社

渋谷忠章 1999「石造塔婆入門－特に板碑・笠塔婆・各塔婆について－」『二豊の石造美術』19　大分県石造美術研究会

庄内町誌編集委員会 1990『庄内町誌』

菅房行 2001『宇土市の金石文』宇土市教育委員会

瀬之口伝九郎 1917「大隅に於ける九州系統の板碑」『考古学雑誌』第 7 巻第 11 号　日本考古学会

瀬之口伝九郎 1942「日向ノ金石文」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第 12 集　宮崎県

川内郷土史編さん委員会 1974『川内市史石塔編』鹿児島県川内市

竹田市史刊行会 1983『竹田市史』上巻

竹田聴洲1957『祖先崇拝』平楽寺書店

竹田聴洲1979「両墓制景観の変遷-京都府北桑田郡山国村大字比賀江-」『葬送墓制研究集成』第5巻　名著出版

多田隈豊秋 1968『有明地方石文集』福岡県文化会館

多田隈豊秋1969「求菩提山と周辺の美術(三)石造」『求菩提山修験文化攷』重松敏美編　豊前市教育委員会

多田隈豊秋 1975『九州の石塔　上巻』西日本文化協会

多田隈豊秋 1978『九州の石塔　下巻』西日本文化協会

立花町史編さん委員会 1996『立花町史　下巻』立花町

田中裕介 1990「大分県の近世墓碑」『大分県地方史』大分県地方史研究会

田中裕介 1996「女狐近世墓地」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5)』大分県教育委員会

田辺哲夫 1967『西安寺の調査　(玉東町文化財調査報告)』玉東町教育委員会

谷川章雄1983「近世墓塔の形態分類と編年について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊10集　哲学・史学編　早稲田大学大学院文学研究科

谷川章雄1996「江戸および周辺村落における墓制の変遷」『「中世」から「近世」へ－考古学と中世史研究－』名著出版

玉名市文化財保護委員会 1971『玉名市高瀬談義所町　宝成就寺跡古塔碑群・石仏群』

圭室諦成 1962「葬式と仏教」『明治大学人文科学研究所紀要』1　明治大学人文科学研究所

圭室諦成 1963『葬式仏教』大法輪閣

築上郡誌編纂委員会1966『築上郡誌』下巻

筑穂町誌編集委員会 2003『筑穂町誌　下巻』筑穂町

千々和到 1988『板碑とその時代』平凡社

千々和實 1987『板碑源流考』吉川弘文館

千歳村誌刊行会 1975『千歳村誌』

津久見市教育委員会 1993『津久見市の文化財』

坪井良平1939「山城木津惣墓墓標の研究」『考古学』10-6　東京考古学会

東国中世考古学研究会・房総中近世考古学研究会2007『全国地下式坑集成資料集』

時校務 1983「修験道の板碑」『板碑の総合研究 1　総論編』坂詰秀一編　柏書房

時津裕子1998「近世以降の墳墓の型式学的研究」『人類史研究』10　人類史研究会

時元省二 1994「南日向の板碑(1)-北郷町所在の折生田板碑について-」『宮崎考古』第 13 号

直入町誌刊行会 1984『直入町誌』

直川村教育委員会 1982『直川の文化財』

長井魅一郎 1985「山鹿市の石造物」『山鹿市史　別巻』山鹿市

中尾堯 1983「結衆板碑と講集団」『板碑の総合研究 I 総論編』柏書房

中尾康幸 1982「市内に残る中世の古寺跡と仏塔」『菊池市史』上巻　菊池市

中島利一郎 1930「板碑」『考古学講座　第 29 巻』雄山閣

長野県文化振興事業団 2006『一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書 1 』長野県文化財センター

中村一紀 2007「中世」『御船町史』御船町

西木浩一2004「都市下層民衆の墓制をめぐって」『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館

入学正敏1988「宇佐市内石造物一覧」『二豊の石造美術』8　大分県石造美術研究会

入学正敏1994『宇佐の石造文化財探訪』宇佐文化会館三和文庫運営協議会

野津町 1965『野津町誌』

野津町 1985『野津町の文化財』

服部清道 1972『板碑概説』鳳鳴書院

花岡興輝 1991「中世」『豊野村史』豊野村

速水侑 1975『地蔵信仰』塙新書

原口長之・古財誠也 1981「植木町の石造物」『植木町史』植木町

原田昭一 1999a「大分県における中世墓制変遷略史」『考古学に学ぶ－遺構と遺物－』同志社大学考古学シリーズ刊行会

原田昭一 1999b「香々地地域の墓制－長小野集落の近世墓地の検討を通して－」『豊後国香々地荘の調査　本編』大分県立歴史博物館

原田昭一ほか 2000『千塚西遺跡』大分県教育委員会

原田昭一 2002a「墓にみる中世から近世－豊前・豊後における近世墓のはじまり－」『大分県地方史』第 184 号　大分県地方史研究会

原田昭一 2002b「板碑集成(その 1、豊後南部)－豊前・豊後における紀年銘を有する整形板碑について－」『古文化談叢』48 九州古文化研究会

原田昭一 2003a「板碑集成(その 2、豊前)－豊前・豊後における紀年銘を有する整形板碑について－」『古文化談叢』49 九州古文化研究会

原田昭一 2003b「板碑集成(その 3、豊後北部、附補遺)－豊前・豊後における紀年銘を有する整形板碑について－」『古文化談叢』50 九州古文化研究会

原田昭一 2004「板碑変遷史-豊前・豊後における紀年銘板碑を通して-」『古文化談叢』第 51 集　九州古文化研究会

原田昭一 2005「中世における石造物流通の一様相－「玄正（玄聖)」銘宝篋印塔の流通を通して－」『日引』7　石造物研究会

原田昭一 2009a「角塔婆変遷史－豊前・豊後における紀年銘資料を通して－」『石造文化研究』第 27 号　おおいた石造文化研究会

原田昭一 2009b「近世墓の成り立ちと六道銭」『六道銭の考古学』谷川章雄・櫻木晋一・小林義孝編　高志書院

原田昭一 2015a「豊後国「日吉塔」再考」『森浩一先生に学ぶ　森浩一先生追悼論集』同志社大学考古学シリーズⅪ　同志社大学考古学シリーズ刊行会

原田昭一 2015b「九州・山口の磨崖梵字について」『石造文化研究』第 31 号　おおいた石造文化研究会

播磨定男 1989『中世の板碑文化』東京美術

日名子太郎 1928～1936「大分金石年表」『史蹟名勝天然紀念物調査報告』第 6～13 輯　大分県史蹟名勝天然紀念物調査会

日名子太郎 1940『大分県金石年表』

日野一郎 1983「石幢と板碑」『板碑の総合研究 1 総論編』柏書房

平木菁 2003「石造物」『荒尾の文化遺産』荒尾市

福岡市教育委員会 1992『福岡市の板碑』

福間町史編集委員会 1998『福間町史　資料編 2』福間町

藤澤典彦 2010「鹿児島県姶良郡（現：霧島市）稲葉崎板碑群をめぐって」『坪井清足先生卒寿記念論文集』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会

藤原良志1970「展開初期青石塔婆の頭部形態について」『史迹と美術』401　史迹美術同攷会

北部町 1979『北部町史』

星野村史編さん委員会 1997『星野村史　民俗編』星野村

本渡市史編纂委員会 1984『本渡市誌』本渡市

前川清一 1988「大津町の中世石造物」『大津町史』大津町

前川清一 1991「河内町の石造美術」『河内町史　資料編第 1 』河内町

前川清一 1994「金石文」『西合志町史』資料編　西合志町

前川清一 1996 a 「石造物にみる菊鹿町の中世」『菊鹿町史　本編』菊鹿町

前川清一 1996 b 「石造物（中世・近世）」『玉東町史　資料編』玉東町

前川清一 1996 c 「金石文」『蘇陽町誌』蘇陽町

前川清一 1997「石造物」『南関町史　別冊』南関町

前川清一1998「賀庭寺趾の板碑」『舫船』27

前川清一 2002「金石文」『新宇土市史　資料編第 2 巻』宇土市史編纂委員会

前川清一 2004「金石文」『長陽村史』長陽村

前川清一 2006「石造物」『菊水町史　資料編』菊水町

前川清一 2009「金石文編」『清和村史』山都町

松岡史 1983「福岡県・佐賀県・長崎県」『板碑の総合研究2地域編』柏書房

松岡史 1984『肥前の板碑　佐賀県』松浦党研究連合会編　芸文堂

松田朝由 2003「香川県における近世墓標の成立と造立意図の展開」『続文化財論集』文化財学論集刊行会

松田朝由 2014「京都府今熊野観音寺に所在する山川石製石造物群について」『鹿児島考古』44 号鹿児島県考古学会

松永守道 1972『三島村秘史』三島村役場

松本雅明編 1965『城南町史』城南町史編纂会

真鍋廣済 1960『地蔵菩薩の研究』三密堂書店

三重町 1966『三重町誌』

三重町 1981『みえまちの文化財』

三重町 1987『三重町誌　総集編』

三島村 1990『三島村誌』

三島村中世資史料調査団 2013「鹿児島県三島村の 石造物等調査概報−中世鬼界島（貴海島・貴賀島）の内側を探る−」『石造文化研究』第 31 巻　おおいた石造文化研究会

三潴町史編さん委員会 1985『三潴町史』三潴町

水俣市史編さん委員会 1991『新水俣市史　下巻』水俣市

宮崎県 1942『宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告 第 12 輯』

宮崎県教育委員会 1984『山内石塔群』

宮崎県埋蔵文化財センター2002『迫内遺跡』

宮本尚編 1980「多良木町史　資料編」『多良木町史』多良木町

三好義三1986「近世墓標の形態と民衆の精神の変化について」『立正大学大学院年報』3　立正大学大学院

三輪善之助 1928「板碑の原始形について」『武蔵野』11-4　武蔵野文化協会

望月友善1975『大分の石造美術』木耳社

耶馬渓町文化財調査委員会1989「耶馬渓の文化財』

山内亮平・西野元勝・桃崎祐輔 2008「福岡県糸島郡二丈町一貴山・前原市東地区の中世石造物」『福岡大学考古資料集成』2　福岡大学人文学部考古学研究室

山香町教育委員会 2005『山香町の文化財』

山香町誌刊行会 1982『山香町誌』

山川均 2008『中世石造物の研究一石工・民衆・聖一』日本史史料研究会

山口博之 2014「板碑と木製塔婆―山形県と大分県の板碑の類似から―」『中世人の軌跡を歩く』高志書院

山口良吾 1952「仁安三年の倶利伽羅不動碑」『佐賀県文化財報告書　1』佐賀県教育委員会

山田拓伸 1986「近世の墓地と墓碑」『豊後国田染荘の調査』1 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

大和町史編纂実務委員会 2001『大和町史通史編　下巻』大和町

弥生町教育委員会 1982『弥生町の文化財』

弥生町 1996『弥生町誌』

吉田正一 2001「文化財」『泗水町史　下巻』泗水町教育委員会

竜峰村史跡研究会 1961『竜峰村史』

渡辺信幸1987「宇佐神宮の奥宮御許山(その1)」『二豊の石造美術』7　大分県石造美術研究会

渡辺文雄1985「国東半沸西南部の南北朝期凝灰岩系石造品をめぐる諸問題」『二豊の石造美術』5　大分県石造美術研究会

渡辺文雄 1996「大分の磨崖仏」『石造文化財保存対策のための概要調査』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館